

高槻市

梶原南遺跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年 3月

公益財団法人 大阪府文化財センター



微高地域7 井戸5 (南から)



微高地域5 溝16 (北東から)

序 文

大阪府の北東部に位置する高槻市は、北の北摂山地と南の淀川にはさまれた台地や沖積地を中心に古来から発展してきました。大阪と京都のほぼ中間地点に位置することから、高度経済成長期以降、ベッドタウンとして人口が急激に増加し、今日では人口35万人を有する中核市となっています。市内には、古代の山陽道・近世の西国街道が東西を横断し、街道沿いに発展をとげ、淀川は三十石船などによる水運の要所となっていました。そして現在では、名神高速道路、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急電鉄京都線、国道171号がその役割を担っています。

大阪府文化財センターでは、関係各位の協力のもと、平成22年度から新名神高速道路建設に伴う埋蔵文化財調査を実施しており、現在は八幡京田辺JCT－高槻JCT間の発掘調査と整理作業に取り組んでいます。開通後には、高槻市域は既存の名神高速道路と新名神高速道路が交わるため、新たなネットワークの形成によってさらなる発展が期待されるところです。

今回報告する梶原南遺跡は、1980年代の府営住宅建て替えに伴う事前調査によりよく知られるようになった集落遺跡で、奈良時代のまとまった集落遺跡の調査として注目されました。その後の開発事業に伴う調査では、奈良時代の規格性をもつ大型建物の検出などもあり、古代山陽道に伴う「駅家(うまや)」ではないかと考えられている遺跡です。今回の調査では、これまでの遺跡の評価を補強するように、奈良時代の大型の総柱掘立柱建物や井戸を検出し、墨書土器や齋串といった当時の公的な施設に特徴的な遺物も出土しました。特に役人の位を示した「腰帯」の部品である鉸具金具の出土は、律令官人の存在を彷彿とさせるもので、この遺跡が奈良時代の公的施設である可能性を高めるものとなりました。さらに弥生時代中期の方形周溝墓や中世の集落も確認し、鎌倉時代の溝からは数百点にのぼる食器類が出土したことも特筆されます。これらの調査成果は、単にこの地域に古くから人の活動があったことを示すだけでなく、現在もそうであるように、交通の要衝としての上牧・梶原地域の歴史的な役割を示しているものと評価することができます。こうした埋蔵文化財の調査成果が有効に活用され、地域の歴史像や各時代の社会像をあきらかにするための一助となることを、切に願います。

最後になりましたが、今回の事業の実施にあたってご理解・ご協力を賜りました、西日本高速道路株式会社関西支社、関西電力株式会社、大阪府教育庁文化財保護課、高槻市街にぎわい部文化財課、地元関係各位に厚く御礼申し上げます。今後とも大阪府文化財センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂井 秀弥

例 言

1. 本書は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴い実施した大阪府高槻市梶原3・4丁目、梶原中村町地先における梶原南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所から委託を受け、公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。現地調査は令和元年6月から令和2年12月まで行った。引き続き中部調査事務所において令和3年1月から令和3年12月まで整理作業を行い、令和4年3月31日に本書の刊行をもって完了した。
3. 発掘調査および遺物整理作業に関する受託事業名と事業実施期間は下記の通りである。

[調査名] 梶原南遺跡 19-1

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その5

[事業契約期間] 令和元年6月3日 ～ 令和2年4月24日

[調査名] 梶原南遺跡 20-1

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その7

[事業契約期間] 令和2年4月1日 ～ 令和3年1月25日

[整理作業]

【事業名称】 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）その2

[事業契約期間] 令和3年1月4日 ～ 令和4年3月31日
4. 発掘調査および遺物整理は下記の体制で実施した。

[令和元年度] 事務局次長兼調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、主査 森本 徹（調査担当）

[令和2年度] 事務局次長兼調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、主査 森本 徹（調査・整理担当）

[令和3年度] 事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡
調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、主査 森本 徹（整理担当）
5. 本書に掲載した写真の撮影は、遺構は森本が、遺物は中部調査事務所写真室が行った。
6. 出土遺物の保存処理について、以下の機関に委託した。

木製品（5点） 株式会社 古環境研究所



委託名称：令和3年度 梶原南遺跡発掘調査出土木製品保存処理（糖アルコール含浸法）業務

委託期間：令和3年4月2日から令和3年11月30日まで
7. 出土墨書土器の釈読については、大阪府立近つ飛鳥博物館館長 館野和己氏のご教示を得た。
8. 本書の執筆および編集は森本が行った。
9. 発掘調査ならびに報告書の作成過程において、下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略、所属は調査・整理当時のもの）

岡本敏行・中西裕見子・小泉翔太（大阪府教育庁文化財保護課）、宮崎康雄・鐘ヶ江一郎・早川 圭・三好祐太郎（高槻市街にぎわい部文化財課）、森田克行・内田真雄・今西康宏（高槻市立今城塚古代歴史館）

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P. +は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第VI系に基づき表示している。単位はすべてmであり、mは省略した。
3. 全体図および遺構実測図の方位は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。なお、真北は東に $0^{\circ} 16' 24''$ 、磁北は真北に対し西に $7^{\circ} 17'$ 傾く。
4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。土層の記載方法は、記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
6. 遺構番号は、調査段階にはトレンチごとに遺構種類に関わらず1から順に付し、遺構番号―遺構名として表現した。本書掲載遺構については、遺構種別ごとに番号を付けなおし、遺構種類―遺構番号として表記した。なお、一部図表には調査時に付した名称のまま記載した遺構もあり、この場合は遺構番号―遺構名とし、斜体文字で表記している。なお調査時遺構番号と本書掲載遺構番号の対照表を巻末に掲載した。
7. 全体平面図に記載した遺構番号のうち、ピットについては遺構種類を省略し、遺構番号のみとした。
8. 遺構実測図における断面位置は、図面上に「 」によって示した。掲載縮尺は統一していない。
9. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、石器、金属器等で小型のものは2分の1で掲載するなど、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面にはスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物はスケールを統一していない。
10. 掲載遺物は、通し番号を付し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。なお、一覧表にのみ記載した遺物もある。掲載遺物番号は1～1018である。
11. 出土遺物の年代観や器種・器形分類の大枠については、特に断りのない場合は下記の文献に依拠した。

弥生土器：森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

古墳時代土師器：辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学考古学研究室

中野 咲 2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論攷』第33冊 奈良県立橿原考古学研究所

古墳時代須恵器：田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店

田中清美 2021「古墳時代中期の土器研究と暦年代」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ』中国四国前方後円墳研究会

古代の土器：神野 恵 2015「土器の年代と木簡の年紀」『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』クバプロ

古代の木製品：奈良国立文化財研究所編 1985『木器集成図録―近畿古代篇―』奈良国立文化財研究所史料第27冊

平安時代・中世の土器：橋本久和 1991「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
12. 引用文献および参考文献は本文末にまとめた。

目 次

巻頭原色図版

序 文 ・ 例 言 ・ 凡 例 ・ 目 次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査成果	4
第3章 調査の方法	8
第4章 調査成果	10
第1節 基本層序と微地形	10
第2節 微高地部分の遺構と遺物	15
第1項 微高地域の概要	15
第2項 微高地域（1）	15
第3項 微高地域（2）	30
第4項 微高地域（3）	37
第5項 微高地域（4）	45
第6項 微高地域（5）	55
第7項 微高地域（6）	89
第8項 微高地域（7）	95
第9項 微高地域（8）	108
第3節 低地部分の遺構と遺物	127
第1項 東低地域の概要	127
第2項 低地域（1）	127
第3項 低地域（2）	138
第4項 低地域（3）	143
第5項 低地域（4）	148
第6項 低地域（5）	151
第7項 西低地域	155
第5章 総括	157
写真図版 ・ 抄 録 ・ 奥 付	

挿 図 目 次

図1	新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点…	1	図44	方形周溝墓1 溝15 平・断面図 ……	52
図2	淀川北岸東部地域遺跡分布図…	5	図45	遺構 出土遺物 ……	53
図3	梶原南遺跡 既往調査成果合成図…	7	図46	包含層 出土遺物 ……	54
図4	調査区地区割図…	9	図47	微高地域5 全体平面図 ……	56
図5	基本層序模式図(1) ……	11	図48	建物3 平・断面図 ……	57
図6	基本層序模式図(2) ……	13	図49	建物4 平・断面図 ……	58
図7	地形区分図…	14	図50	建物5 平・断面図 ……	59
図8	微高地域 全体平面図…	16	図51	建物6 平・断面図 ……	60
図9	微高地域1 全体平面図…	17	図52	建物4・6 出土遺物 ……	61
図10	井戸1 平・断面図 出土遺物 ……	18	図53	井戸4 平・断面図 ……	62
図11	井戸2 平・断面図 ……	19	図54	井戸4 出土遺物(1) ……	63
図12	井戸2 出土遺物 ……	20	図55	井戸4 出土遺物(2) ……	64
図13	土坑1・2 平・断面図 ……	21	図56	井戸8 平・断面図・出土遺物 ……	65
図14	土坑1・2 出土遺物 ……	22	図57	水溜1 断面図 ……	66
図15	土坑3 平・断面図・出土遺物 ……	23	図58	水溜1 出土遺物(1) ……	67
図16	溝1 平・断面図 ……	24	図59	水溜1 出土遺物(2) ……	68
図17	溝2・3 ピット2～7 平・断面図 ……	25	図60	水溜1 出土遺物(3) ……	69
図18	土坑4・5 ピット1 平・断面図 ……	26	図61	溝16 平・断面図 ……	70
図19	溝 ピット 出土遺物 ……	26	図62	溝16 出土遺物(1) ……	71
図20	ピット8～11 平・断面図 ……	27	図63	溝16 出土遺物(2) ……	72
図21	土坑6・7 ピット12・13 平・断面図 ……	28	図64	溝16 出土遺物(3) ……	73
図22	包含層 出土遺物 ……	29	図65	溝16 出土遺物(4) ……	74
図23	微高地域2 全体平・断面図 ……	31	図66	溝16 出土遺物(5) ……	75
図24	井戸3 平・断面図 ……	32	図67	溝17・18 平・断面図 ……	77
図25	井戸3 出土遺物 ……	33	図68	溝17・18 出土遺物 ……	78
図26	土坑9～11 溝9・10 平・断面図・出土遺物…	34	図69	溝19 平・断面図 ……	79
図27	溝8～10 平・断面図 ……	35	図70	土坑27 ピット27～29 平・断面図 ……	80
図28	ピット15～18 平・断面図…	36	図71	遺構 出土遺物 ……	81
図29	土坑12 包含層 出土遺物 ……	36	図72	方形周溝墓2 平・断面図 ……	82
図30	微高地域3 全体平・断面図 ……	38	図73	方形周溝墓3 平・断面図 ……	83
図31	溝11・12 断面図 ……	39	図74	方形周溝墓4 平・断面図 ……	84
図32	土坑13・14 平・断面図 ……	40	図75	方形周溝墓5 平・断面図 ……	85
図33	土坑15～17 平・断面図…	41	図76	方形周溝墓 出土遺物 ……	86
図34	土坑18・19 平・断面図 ……	42	図77	包含層 出土遺物 ……	87
図35	土坑20 ピット19～22 平・断面図 ……	43	図78	微高地域6 全体平・断面図 ……	88
図36	遺構 出土遺物 ……	44	図79	建物8・9 平面図 ……	89
図37	包含層 出土遺物 ……	44	図80	土坑31 平・断面図 ……	90
図38	微高地域4 全体平・断面図 ……	46	図81	溝20 平・断面図 ……	91
図39	井戸7 平・断面図・出土遺物 ……	47	図82	溝21 平・断面図 ……	92
図40	建物1 平・断面図 ……	48	図83	溝22 平・断面図 ……	93
図41	建物2 平・断面図 ……	49	図84	遺構 出土遺物 ……	94
図42	土坑23 ピット23～26 平・断面図 ……	50	図85	包含層 出土遺物 ……	95
図43	土坑24・25 溝13 平・断面図 ……	51	図86	微高地域7 全体平・断面図 ……	96

図87 井戸5 平・立・断面図	97	図119 井戸11 平・断面図	130
図88 井戸5 出土遺物(1)	98	図120 井戸11 出土遺物	131
図89 井戸5 出土遺物(2)	99	図121 溝36 土坑34・35・37 平・断面図	132
図90 井戸5 出土遺物(3)	100	図122 溝36 出土遺物	133
図91 井戸5 出土遺物(4)	101	図123 溝37 平・断面図	134
図92 井戸5 出土遺物(5)	102	図124 溝37 出土遺物	135
図93 井戸5 出土遺物(6)	103	図125 建物10 平・断面図	136
図94 建物7 平面図	104	図126 土器集中1 出土遺物	137
図95 建物7 断面図	105	図127 土坑36 平・断面図	137
図96 建物7および周辺遺構 出土遺物	106	図128 包含層 出土遺物	138
図97 方形周溝墓6 平面図	107	図129 低地域2 全体平面図	139
図98 包含層 出土遺物	108	図130 土坑38・43 平・断面図	140
図99 微高地域8 全体平面図	109	図131 土坑39～42 平・断面図	141
図100 井戸6 平・断面図	110	図132 遺構 出土遺物	142
図101 井戸6 出土遺物	111	図133 包含層 出土遺物	143
図102 井戸9 平・立・断面図	112	図134 低地域3 全体平面図	144
図103 井戸9 出土遺物(1)	113	図135 土坑47 平・断面図	145
図104 井戸9 出土遺物(2)	114	図136 溝39 断面図	146
図105 井戸10 平・断面図	115	図137 遺構 出土遺物	147
図106 井戸10 出土遺物	116	図138 包含層 出土遺物	148
図107 方形土坑 平・断面図	117	図139 低地域4 全体平面図	149
図108 方形土坑 出土遺物	118	図140 土坑48～50 平・断面図	150
図109 溝33 出土遺物	118	図141 土坑48・50 包含層 出土遺物	151
図110 溝27 平・断面図	120	図142 低地域5 全体平・断面図	152
図111 溝28 平・断面図	121	図143 土坑51 平・断面図	153
図112 溝29 平・断面図	122	図144 包含層 出土遺物	154
図113 溝31 平・断面図	123	図145 20-1-7トレンチ 土層断面図	156
図114 溝 出土遺物	124	図146 弥生時代	160
図115 遺構 出土遺物	125	図147 古墳時代	161
図116 包含層 出土遺物	126	図148 奈良時代	162
図117 東低地域 全体平面図	128	図149 平安～鎌倉時代	163
図118 低地域1 全体平・断面図	129		

表 目 次

表1 遺構一覧表	166	表3 金属製品一覧表	190
表2 遺物一覧表	168		

写真図版目次

- 図版1 調査地の景観
調査地より天王山方向を望む(南から)
調査地より生駒山地方向を望む(北西から)
- 図版2 基本層序
微高地部分の基本層序(19-1調査 8トレンチ南壁)
低地部分の基本層序(20-1調査 6トレンチ南壁)
- 図版3 微高地域1
20-1調査 2トレンチ 全景(南から)
20-1調査 2トレンチ 全景(北から)
- 図版4 微高地域1
井戸1(南から)
井戸2(南から)
- 図版5 微高地域1
土坑2(南東から)
土坑3(南東から)
- 図版6 微高地域1
土坑4(南西から)
ピット6(南東から)
ピット4(南東から)
ピット3(南東から)
ピット8(西から)
- 図版7 微高地域2
19-1調査 8トレンチ 全景(北西から)
19-1調査 8トレンチ 全景(東から)
- 図版8 微高地域2
井戸3(南西から)
土坑9(北西から)
土坑9(北西から)
ピット16(西から)
ピット18(南西から)
- 図版9 微高地域3
19-1調査 6トレンチ 全景(西から)
19-1調査 6トレンチ 全景(南西から)
- 図版10 微高地域3
土坑19(南西から)
土坑14(南から)
土坑20(西から)
土坑15(南から)
土坑13(南東から)
- 図版11 微高地域4
19-1調査 6トレンチ 全景(南から)
19-1調査 6トレンチ 全景(西から)
- 図版12 微高地域4
建物1(南西から)
建物2(南東から)
- 図版13 微高地域4
井戸7(北西から)
方形周溝墓1(南西から)
- 図版14 微高地域5
20-1調査 3トレンチ北半 全景(東から)
20-1調査 3トレンチ南半 全景(南西から)
- 図版15 微高地域5
建物3・建物4(北から)
建物6(北から)
- 図版16 微高地域5
井戸4(南から)
井戸4(南から)
- 図版17 微高地域5
井戸4(南から)
井戸4(南から)
- 図版18 微高地域5
水溜1(南から)
水溜1(南から)
- 図版19 微高地域5
溝16(北東から)
溝16(東から)
- 図版20 微高地域5
溝17・溝18(北西から)
方形周溝墓2(東から)
- 図版21 微高地域5
方形周溝墓3(北西から)
方形周溝墓5(北西から)
- 図版22 微高地域6
19-1調査 7トレンチ 全景(北から)
19-1調査 7トレンチ 全景(北東から)
- 図版23 微高地域7
19-1調査 7トレンチ 全景(北から)
19-1調査 7トレンチ 全景(北東から)
- 図版24 微高地域7
建物7(西から)
建物7(北東から)
- 図版25 微高地域7
建物7 柱穴3 礎板(北西から)
建物7 柱穴2(北西から)
建物7 柱穴6(北西から)
建物7 柱穴7(北西から)
建物7 柱穴10(北西から)
- 図版26 微高地域7
井戸5(南から)
井戸5(南から)
- 図版27 微高地域8
19-1調査 7トレンチ 全景(西から)
19-1調査 7トレンチ 全景(北西から)
- 図版28 微高地域8

- 井戸 6 (南西から)
井戸 6 (西から)
- 図版29 微高地域 8
井戸 9 (南から)
井戸 9 (南から)
- 図版30 微高地域 8
井戸 10 (東から)
方形土坑 (南から)
- 図版31 微高地域 8
20-1 調査 5トレンチ 全景 (東から)
溝 28 (東から)
- 図版32 微高地域 8
溝 27 (北から)
土器 1 (南から)
土器 2 (西から)
溝 31 (北から)
溝 29 (西から)
- 図版33 低地域 1
19-1 調査 5トレンチ 全景 (西から)
19-1 調査 5トレンチ 全景 (南東から)
- 図版34 低地域 1
20-1 調査 4トレンチ北半 全景 (東から)
建物 10 (南から)
- 図版35 低地域 1
井戸 11 (北西から)
溝 37 (南から)
- 図版36 低地域 2
20-1 調査 4トレンチ南半 全景 (北から)
土坑 38 (南から)
土坑 40 (南から)
土坑 41 (南から)
土坑 43 (南から)
- 図版37 低地域 3
19-1 調査 4トレンチ 全景 (南東から)
溝 39・土坑 47 (東から)
- 図版38 低地域 4
20-1 調査 6トレンチ 全景 (北東から)
20-1 調査 6トレンチ 全景 (北西から)
- 図版39 低地域 4・5
土坑 48 (東から)
19-1 調査 1トレンチ 土層断面 (南から)
- 図版40 低地域 5
19-1 調査 2トレンチ 全景 (東から)
19-1 調査 2トレンチ 高まり (南から)
- 図版41 低地域 5・北西低地域
19-1 調査 3トレンチ 全景 (南から)
20-1 調査 7トレンチ 土層断面 (北東から)
- 図版42 微高地域 1
図版43 微高地域 1
図版44 微高地域 1
図版45 微高地域 1
- 図版46 微高地域 1・2
図版47 微高地域 2・3
図版48 微高地域 3・4
図版49 微高地域 4
図版50 微高地域 5
図版51 微高地域 5
図版52 微高地域 5
図版53 微高地域 5
図版54 微高地域 5
図版55 微高地域 5
図版56 微高地域 5
図版57 微高地域 5
図版58 微高地域 5
図版59 微高地域 5
図版60 微高地域 5
図版61 微高地域 5
図版62 微高地域 5
図版63 微高地域 5
図版64 微高地域 5
図版65 微高地域 5
図版66 微高地域 5
図版67 微高地域 6
図版68 微高地域 6
図版69 微高地域 7
図版70 微高地域 7
図版71 微高地域 7
図版72 微高地域 8
図版73 微高地域 8
図版74 微高地域 8
図版75 微高地域 8
図版76 微高地域 8
図版77 微高地域 8
図版78 微高地域 8
図版79 微高地域 8
図版80 低地域 1
図版81 低地域 1
図版82 低地域 1・2
図版83 低地域 2
図版84 低地域 3
図版85 低地域 3
図版86 低地域 4・5
図版87 保存処理木製品
図版88 金属製品
図版89 金属製品
図版90 写真図版のみ土器
図版91 石器類
図版92 石材・動物遺体・植物遺体
図版93 井戸粹
図版94 井戸粹
図版95 井戸粹
図版96 井戸粹

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

昭和44年(1969)に全線開通をみた東名・名神高速道路は、関西圏・中京圏・首都圏を結ぶ基幹的な高速道路として重要な役割を担っているが、自家用車の普及や自動車輸送の活発化により渋滞・交通混雑が慢性化してきた。また自然災害による被害や設備の老朽化への対応など、バイパス的な役割をもつ道路の必要性は一層増している。国ならびに西日本高速道路株式会社はその対策の一部として、大阪府内においては新名神高速道路の新設などの事業を計画、推進している。その路線計画地は大阪府北部の、枚方市、高槻市、茨木市、箕面市にわたるもので、計画路線内には周知の埋蔵文化財包蔵地が多数含まれている。その取り扱いについては事業者である西日本高速道路株式会社と、工事の届出を受けた大阪府教育庁文化財保護課の間で協議が進められ、建設工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査実施が指示されることとなった。これに従い、平成22年度(2010)の箕面市止々呂美地区をはじめとする確認調査以降、公益財団法人大阪府文化財センターが順次、発掘調査を実施している。

本書報告範囲を含む梶原南遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、これまで梶原遺跡調査会、高槻市教育委員会により発掘調査が行われている。また南東に位置する上牧遺跡においても高槻市教育委員会による調査ののち、新名神高速道路建設に伴う発掘調査が平成29年度から令和元年度にかけて実施されている。このため周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、梶原南遺跡、上牧遺跡間の隣接範囲においても試掘調査による遺構・遺物の広がりの確認が行われ、その結果を踏まえて発掘調査が実施されることとなった。本書において報告する梶原南遺跡19-1・20-1調査については、平成28年度ならびに平成31年度に実施された試掘調査の結果を受けて拡大された範囲を含めた包蔵地を対象に、西日本高速道路株式会社を事業者とし、令和元年度に19-1調査を、令和2年度に20-1調査を実施することとなった。

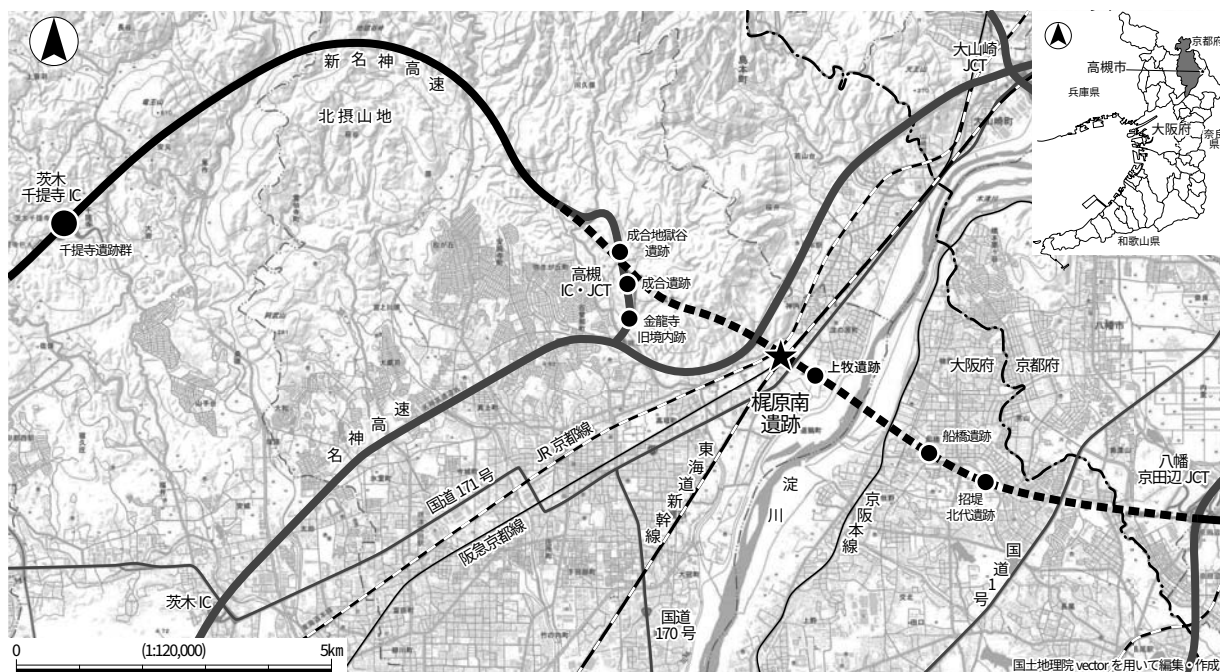


図1 新名神高速道路計画路線図と埋蔵文化財調査地点

第2節 調査の経過

現地での発掘調査は、令和元年(2019)6月3日から令和2年4月24日、令和2年4月1日から令和3年1月25日にわたる2件の受託契約において実施した。また、令和3年1月4日から令和4年3月31日にわたる受託契約において、遺物整理事業と印刷・製本を含む報告書作成事業を実施した。令和4年3月、本書の刊行をもって、梶原南遺跡19-1・20-1調査に関わる一連の業務を完了した。

各年度の経過を簡単に記載しておきたい。

19-1調査は計画路線内の橋脚部分2か所(2トレンチ、4トレンチ)、側道部分6か所(1トレンチ、3トレンチ、5～8トレンチ)、合計8か所の調査区を設定し、順次調査を進めることとした。

1トレンチは令和元年6月4日、機械掘削に着手し、7月17日、調査を終了した。2トレンチは令和元年7月5日、機械掘削に着手し、9月11日、調査を終了した。3トレンチは令和元年10月28日、機械掘削に着手し、11月27日、調査を終了した。4トレンチは令和元年9月10日、機械掘削に着手し、10月23日、調査を終了した。5トレンチは令和2年1月21日、機械掘削に着手し、2月19日、調査を終了した。6トレンチは令和元年12月9日、機械掘削に着手し、令和2年2月17日、調査を終了した。7トレンチは令和2年2月7日、機械掘削に着手し、3月31日、一部を残し調査を終了した。8トレンチは令和2年2月6日、機械掘削に着手し、3月31日、一部を残し調査を終了した。7トレンチ・8トレンチにおいて一部を検出した古代ならびに中世の井戸について、府文化財保護課より調査範囲を拡大し、全体を確認するよう指示があったことから、当初契約工期内では調査を完了することができず、20-1調査期間の当初に並行して調査を継続した。7トレンチについては4月9日に、8トレンチについては4月2日にそれぞれ調査を完了した。

20-1調査は計画路線内の橋脚部分3か所(2トレンチ、3トレンチ、4トレンチ)、側道部分2か所(5トレンチ、6トレンチの一部)、関西電力高圧線鉄塔移設地2か所(1トレンチ、6トレンチの一部)合計6か所の調査区を設定し、順次調査を進めることとした。調査開始後、1トレンチには遺構・遺物が広がらないことが判明し、調査対象から除外するとともに、関西電力高圧線鉄塔移設に関わる保護鉄塔設置予定個所の調査を加えることとなった(7トレンチ)。

1トレンチは令和2年4月2日、機械掘削に着手したが、遺構、遺物の認められないことが判明し、4月7日、府文化財保護課の立会を受け、調査対象から除外するとともに調査を終了した。なお、新型コロナウイルス感染拡大に伴う大阪府緊急事態措置を受け、令和2年4月20日より5月19日までの期間、現地調査は中断のうえ常勤職員は在宅勤務とし、図面整理業務の一部を実施した。2トレンチは令和2年7月1日、機械掘削に着手し、8月31日、調査を終了した。3トレンチは令和2年8月28日、機械掘削に着手し、10月15日、調査を終了した。4トレンチは令和2年10月16日、機械掘削に着手し、12月18日、調査を終了した。5トレンチは令和2年11月6日、機械掘削に着手し、11月19日、調査を終了した。6トレンチは令和2年5月21日、機械掘削に着手し、6月24日、調査を終了した。7トレンチは令和2年8月3日、機械掘削に着手し、8月26日、調査を終了した。調査期間中に調査成果を地元住民に周知するために現地公開の実施を検討したものの、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から実施は見送ることとなった。

現地調査終了後、令和3年1月から遺物整理作業と報告書作成作業を中部調査事務所において実施した。令和3年12月末日をもって作成作業、資料収納作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大阪府埋蔵文化財分布図に記された梶原南遺跡の範囲は、南北約500m、東西約300mにわたるもので、現状では新名神高速道路の建設に伴う試掘調査により拡大された部分が、南東部分に張り出す形となる。大阪府北部の高槻市に所在し、北に島本町、東および南に淀川をはさんで枚方市と接する、市域でも東端付近に位置する。現住所としては、高槻市梶原および梶原中村町が該当する。

今回の調査地周辺に関わる地形環境については既刊の報告書において詳述されているので(笹栗編2021)、一部を引用しつつ、今回の調査地の地形環境を概観しておきたい。

大阪平野の北縁にあたる淀川北岸地域は、断層帯である有馬—高槻構造線を境に北側の北摂山系と南側の平野部に大きく二分される。北摂山系は標高500m前後の低山地からなり、山地の南端には大阪層群からなる低丘陵が取り付く。断層帯より南側の平野部は、丘陵に取り付くようにして延びる低位段丘帯と沖積低地からなる。沖積低地は北東から南西方向に流れる淀川と、北摂山地から南流する安威川・芥川・檜尾川などの中小河川によって形成された平地である。遺跡が増加する縄文時代後期以降は、主に丘陵南端から沖積低地を中心に展開する遺跡が多く、主要な人間活動の範囲となっていたようである。

梶原南遺跡は、この淀川北岸平野部の東端付近に位置する。檜尾川以東は北摂山系の一角をなす標高679mのポンポン山から連なる山地が南側の平野部に直接的に張り出しており、山地斜面がやや急峻で、山裾に小規模な扇状地が東西方向に帯状に形成されている。調査地の東に隣接する内ヶ池は、淀川の三日月湖(河跡湖)と目されており、本遺跡周辺の沖積低地は淀川本流の影響が強いエリアと認識することができる。調査地周辺は北摂山地の張り出しが目立つところで、山裾と淀川との間隔が1km程度と狭く、淀川旧河道の存在なども考慮すると、京都と大阪を結ぶ各種の交通機関が集中して設けられていることは現代に限ったものではなく、河川交通も含め古代以来の景観であったと考えられる。

調査地周辺は高度経済成長期以降の開発により、工場、店舗や宅地建設に伴う、主に盛土を主体とした造成の痕跡も多くみられるが、その下部には近世以来の耕地がよく残されている。条里型水田を採用しない農地が広がり、島状の集落域が点在する景観であったようである。ちなみに調査地付近の耕地の標高は国道171号より山側でT.P.+7.5m程度である。

第2節 歴史的環境

梶原南遺跡が位置する高槻市およびその東端付近に位置する梶原地区の歴史的環境についても既刊の報告書に詳しい(笹栗編2021)ので、逐一繰り返すことは避け、今回の調査成果の理解にかかわりの深い部分のみ触れておきたい。

周辺地域での縄文時代の活動痕跡は希薄であったが、近年の大規模公共事業にともなう事前調査などにより、資料数は増加傾向にある。梶原寺跡の調査では磨製石斧や縄文時代後期後半の宮滝式に属する土器が出土しており、集落の存在が推測されるとともに、低地域への活動領域の広がりが想定される。

弥生時代では梶原地区においては耕作地の存在を示す調査成果は得られてはいないものの、調査事例は拡大傾向にある。弥生時代中期段階の方形周溝墓が周辺で確認されているとともに、淀川低地域にお

ける縄文時代以来の狩猟活動も想定される。方形周溝墓については梶原西遺跡で8基、神内遺跡で20基、上牧遺跡で14基が確認されており、梶原南遺跡でもすでに2基が確認されている。ただしこれらに伴う居住域は明瞭ではなく、大規模な環濠集落として知られている安満遺跡とは2.5kmの距離となる。

古墳時代に関しては梶原地域では集落遺跡の様相が不明瞭ではあったが、近年、井尻遺跡や上牧遺跡で古墳時代前期の大規模集落の存在があきらかとなりつつある。おおむね庄内式土器段階から続くものであり、各種手工業生産の痕跡や他地域産土器の出土などからみて、古墳時代開始前後の社会的な変化により出現した流通拠点的な居住域群と考えられる。また平野部での墳墓資料は知られていないが、北摂山地の南斜面にあたる丘陵域には前期以降の古墳が分布している。古墳時代初頭前後の安満宮山古墳や前期の萩之庄1号墳などの独立墳をはじめ、梶原地区に隣接するものとしては後期の群集墳である梶原古墳群、神内古墳群などがあげられる。

飛鳥時代には近接地に梶原寺が建立され、梶原瓦窯が付設される。梶原寺の創建は7世紀中頃と考えられているが、奈良時代には東大寺の建立に際して瓦の生産を分担したことが知られており、瓦窯の製品の搬出が梶原地区を経由して行われたことが推測される。一方、後述するように梶原南遺跡のこれまでの調査では奈良時代の遺構がまとまって確認されており、古代山陽道に設けられた「大原駅」の候補地と目されている。

古代以降、中世に至るまでの調査成果は希薄であり、多くの遺構、遺物がみられるようになるのは11世紀以降となる。井尻遺跡では区画溝に囲まれた居住域の形成とともに、黒色土器、瓦器碗など多量の土器が廃棄された溝などが確認されている。上牧遺跡、梶原南遺跡では13世紀代の集落とともに多量の土器類が出土している。また淀川の対岸にあたる枚方市域では樟葉地域で瓦器の生産が隆盛を迎え、製品が各地へ搬出されたことがよく知られている。中世集落の終焉と耕地開発の関係には不明なところが多いが、13世紀以降、調査地周辺は耕地化が進んだようであり、現代に続く景観が形成されたようである

第3節 既往の調査成果

梶原南遺跡は昭和58年度(1983)・60年度(1985)に梶原遺跡調査会により実施された府営五領(上牧)住宅の建て替えに伴う事前調査に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地であった梶原遺跡から分割され、周知されるようになった遺跡である。この府営住宅建て替えに伴う発掘調査は昭和62年度(1987)にかけて実施され、その成果は調査会より報告書が刊行されている。これ以降、民間開発に伴う発掘調査が行われたものについては高槻市教育委員会より調査概要が報告されている。ここでは既往の調査成果のうち、それら報告された成果について整理しておきたい。

府営住宅建て替えに伴う発掘調査では集合住宅建設予定地等に合計9か所の調査区が設けられ、北から南に緩やかな勾配をもつ遺構面に、おもに弥生時代、奈良時代、中世(平安時代～鎌倉時代)という3時期の遺構が確認された(宮崎1988)。このうち弥生時代については後期のものとされる竪穴建物1棟のほか、土坑や溝が確認されている。溝は北から南へほぼ直線状に流下するもので、下流方向への灌漑水路と目されている。奈良時代については掘立柱建物18棟、井戸5基、柵、土壇墓などが確認され、出土遺物、切り合い関係から、おおむね8世紀前半から中頃にかけてと8世紀中頃から後半にかけての2段階の変遷をもつものと捉えられた。掘立柱建物群は2～3棟からなる9つ程度の単位を抽出することができ、総柱建物を含み、L字の配置をみせるものもあって、計画的に配置された居住域群と考えら

れた。また建物群に付随する井戸からは、「冨」字を記す墨書土器、転用硯、帯金具(鉸具)、「新屋首乙賣」と記された木簡など、当時の公的施設とのかかわりを想起させる遺物が出土したことから、奈良時代の官人層の居住地ではないかと考えられた。中世段階の遺構には方形の土坑があり、瓦器椀や土師皿がまとめて出土している。またその廃絶後は耕地化した様子が見えてきた。

民間開発に伴う平成2年度(1990)の発掘調査では、上記調査地の北側に調査区が設けられ、弥生時代後期の竪穴建物1棟、奈良時代の掘立柱建物11棟、井戸1基、溝、中世段階の区画溝などが確認された(宮崎1992)。奈良時代の建物群は大きく奈良時代初頭、奈良時代前半、奈良時代後半の3時期に分けることができ、8世紀前半段階には井戸を設けた広場を中心とする規則的な建物配置が行われていたことが推測された。この時期に帰属する建物の中には大型の掘方をもつ総柱建物2棟が軸を揃えて配置され、うち1棟は布掘りかつ溝で連結される掘方をもつ特殊な建物であった。

平成4年度(1992)に実施された発掘調査では、この調査区の北東に隣接する敷地に6か所の調査区が設けられ、弥生時代中期の方形周溝墓2基、古墳時代後期の竪穴建物1基のほか、奈良時代の掘立柱建物3棟、井戸2基などが確認された(川村・宮崎1997)。奈良時代の建物はこれまでの調査成果と同じく、8世紀前半と後半の2時期に分離され、このうち8世紀前半段階には東西棟の梁行2間、桁行6間の大型建物があり、これまでに調査された建物と併せ、「コ」字形の配置をもつ建物群である可能性が指摘されることとなった。

以上の成果を総合すると、梶原南遺跡では大きくは南北方向に軸をもつ微高地上に弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安末～鎌倉時代の各時期の遺構が分布することがあきらかとなっている。このうち、弥生時代は中期の方形周溝墓、後期の竪穴建物があるが、今のところ集落としてまとまった構成を示すものではない。古墳時代も同様で、わずかに6世紀代(MT15型式段階)と考えられる竪穴建物が1棟確認されたものの、同時期のほかの遺構はみられない。一転、8世紀には遺跡範囲の北寄りの部分を中心に、まとまりをもつ遺構が多くみられるようになる。これまでに掘立柱建物30棟、井戸8基、柵列(塀)、溝などが確認され、大規模な集落が形成されたことがわかる。これらの遺構はおおむね奈良時代全般にわたるものであるが、細かくみると8世紀前半から中頃(平城Ⅰ～Ⅲ期)、8世紀中頃から後半(平城Ⅲ～Ⅴ期)の2段階に区分できるとされ、奈良時代末には廃絶するようである。掘立柱建物の配置には特徴があり、とりわけ北寄りの範囲では主軸を同じく、もしくは直交させて配置されるものや、柱筋を揃えて配置されるものが目立ち、計画的な建物配置が認められる。一方、集落域の南寄りでは2～3棟の建物がグループをつくり、溝や柵といった明瞭な区画をもたないところも多いものの、およそ20～30mの区画が複数並んでいる様子が見えてくる。両者の間には道路側溝とも想定される溝群を介している可能性もあり、北側が公的な施設群、南側がそれに付随する居住域群とする想定が行われている。集落全体として律令期の公的施設に関わるものという理解となるが、出土遺物もこの想定を支持している。井戸出土の木簡や付け札、帯金具、硯、墨書土器、斎串などは都城や官衙遺跡に多くみられる遺物であり、製塩土器や鍛冶関連遺物は、この集落が一定の塩の生産や鉄製品の加工に携わっていたことを示している。具体的な施設の性格については、和銅4年(711)に河内国交野郡樟葉駅、摂津国嶋下群殖村駅などととも摂津国嶋上郡に設けられた「大原駅(おおはらのうまや)」の有力候補とされている(宮崎1997、森田2015)。

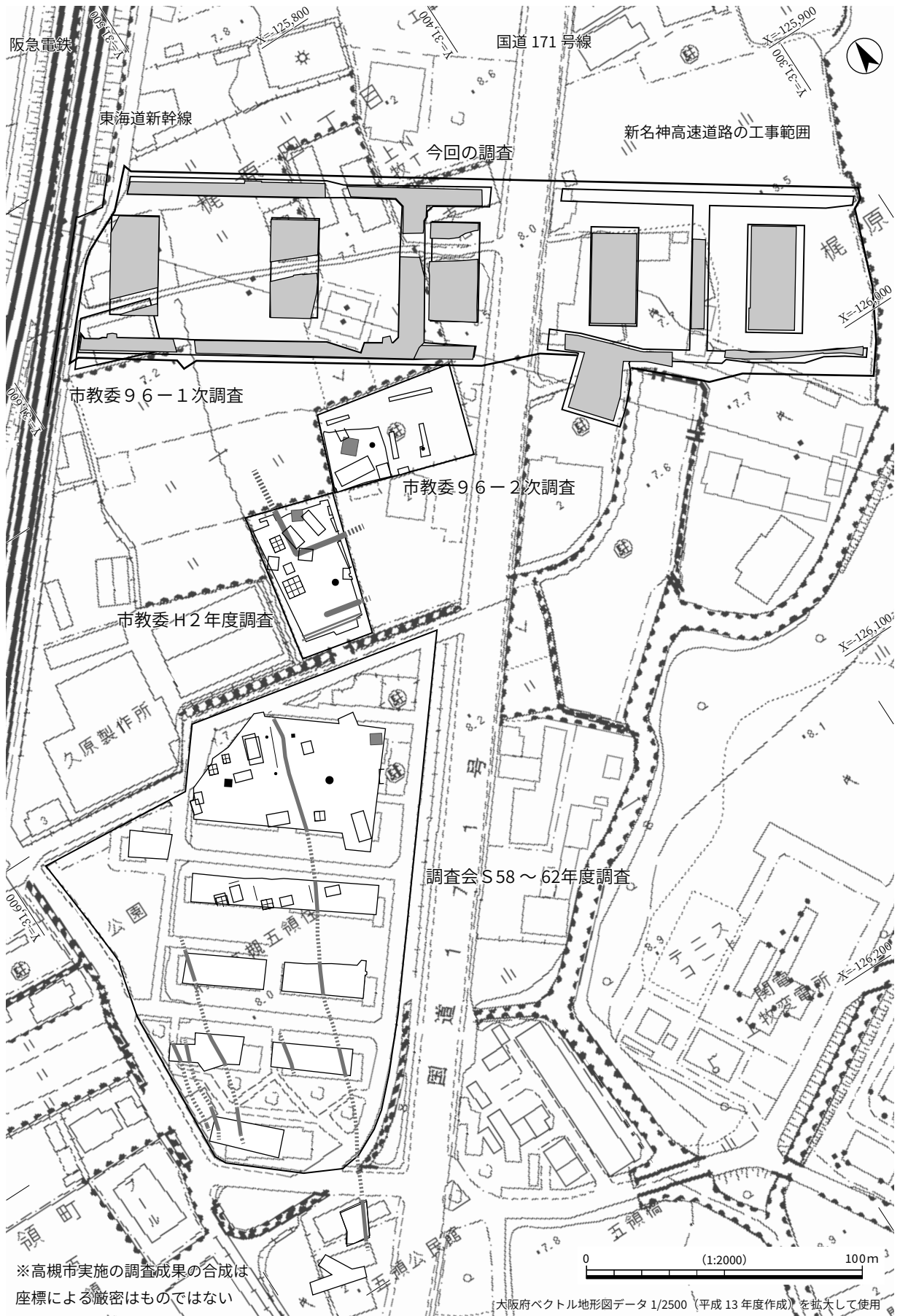


図3 梶原南遺跡 既往調査成果合成図

第3章 調査の方法

今回の調査および整理作業・報告書作成は、公益財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』および、その後の追加修正指示に則って実施した。

調査単位 事業契約ごとに調査名を付すこととなっており、令和元年度実施部分を「梶原南遺跡19-1」、令和2年度実施部分を「梶原南遺跡20-1」として調査にあたった。個々の調査区には調査ごとにトレンチ名を付し、19-1調査では1～8トレンチ、20-1調査では1～7トレンチを設定した。

地区割 全体の調査範囲を世界測地系(第VI系国土座標)に基づく10m×10mの区画に分割し、原則的にこれを単位として地区設定を行い、出土遺物の取り上げなどに用いた。ただし、今回の調査では各トレンチの形状により、この地区割に従った遺物の取り上げを実施したトレンチは一部にとどめ、トレンチごとに出土遺物の取り上げ単位を任意に設定した。区画の設定方法については図4に示した。

遺構名・遺構番号 調査において検出した遺構のうち、遺物の出土をみたもの、個別の記録を作成したものなど、現地で遺構個々の特定が必要となるものについて遺構番号を付した。遺構番号はトレンチ別の通し番号とした。本書での報告に際しては、掲載遺構種別ごとに遺構番号を付け直した。報告書での遺構名称・番号と調査時のものとの対応は、本書巻末に掲載する遺構一覧表において示すこととした。

掘削 機械掘削については、現代の盛土・作土(第1層)以下、中世以降の作土と想定される層(第2層)までを対象とし、重機を用いて慎重に掘削を行った。掘削深度は遺物の出土状況などからその都度判断し、トレンチごとに異なっている。人力掘削深度については中世以降の作土層以下を対象とし、トレンチごとに大阪府教育庁文化財保護課の立会い指導を受け、その指示に従った。

測量・図面記録 調査成果の記録のうち、調査範囲全体の実測図の作成についてはクレーンを用いた空中写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。また個別の遺構図面などについては適宜、10分の1、20分の1縮尺などで測量を実施した。土層断面図については、20分の1縮尺でトレンチごとに適宜作成することとし、調査範囲全体の旧地形や層序関係が把握できるよう努めた。

写真記録 調査成果の記録のうち、写真記録については、中判カメラ(6×7)を用いた黑白ならびにカラーリバーサル銀塩写真によるものとともに、デジタルカメラを用いた記録も行った。

自然科学分析・出土遺物の保存処理 今回の調査においては自然科学分析を行わず、調査成果の評価に際しては隣接する調査による分析成果を参考とすることとした。また、出土遺物のうち奈良時代の井戸出土木製品4点、中世段階の溝出土の漆器片1点について、保存処理が必要な旨、大阪府教育庁文化財保護課と協議のうえ決定し、保存処理業務を委託事業として実施した。

出土遺物の管理 出土遺物は取り上げの単位ごとに調査名ごとの通し番号で登録番号を付し、出土遺物登録台帳を作成した。登録番号は19-1調査が1～576、20-1調査が1～565となった。このうち本報告書に掲載の遺物については、報告書を単位とする実測番号、報告書掲載番号を個別に付し、実測・掲載遺物台帳を作成した。実測遺物番号は1～873となった。ほか写真のみ、一覧表のみ掲載の遺物を併せ、1018点となった。報告書刊行後の管理には、報告書掲載遺物、不掲載遺物ともコンテナ等に収納し、掲載遺物、不掲載遺物ごとにコンテナ番号を付したうえで、上記台帳で管理するほか、収納コンテナリストを別に作成した。掲載遺物コンテナが1～47、不掲載遺物コンテナが1～90となった。なお、井戸枠など大型の木製品36点については別途収納することとし、上記コンテナ数には含んでいない。

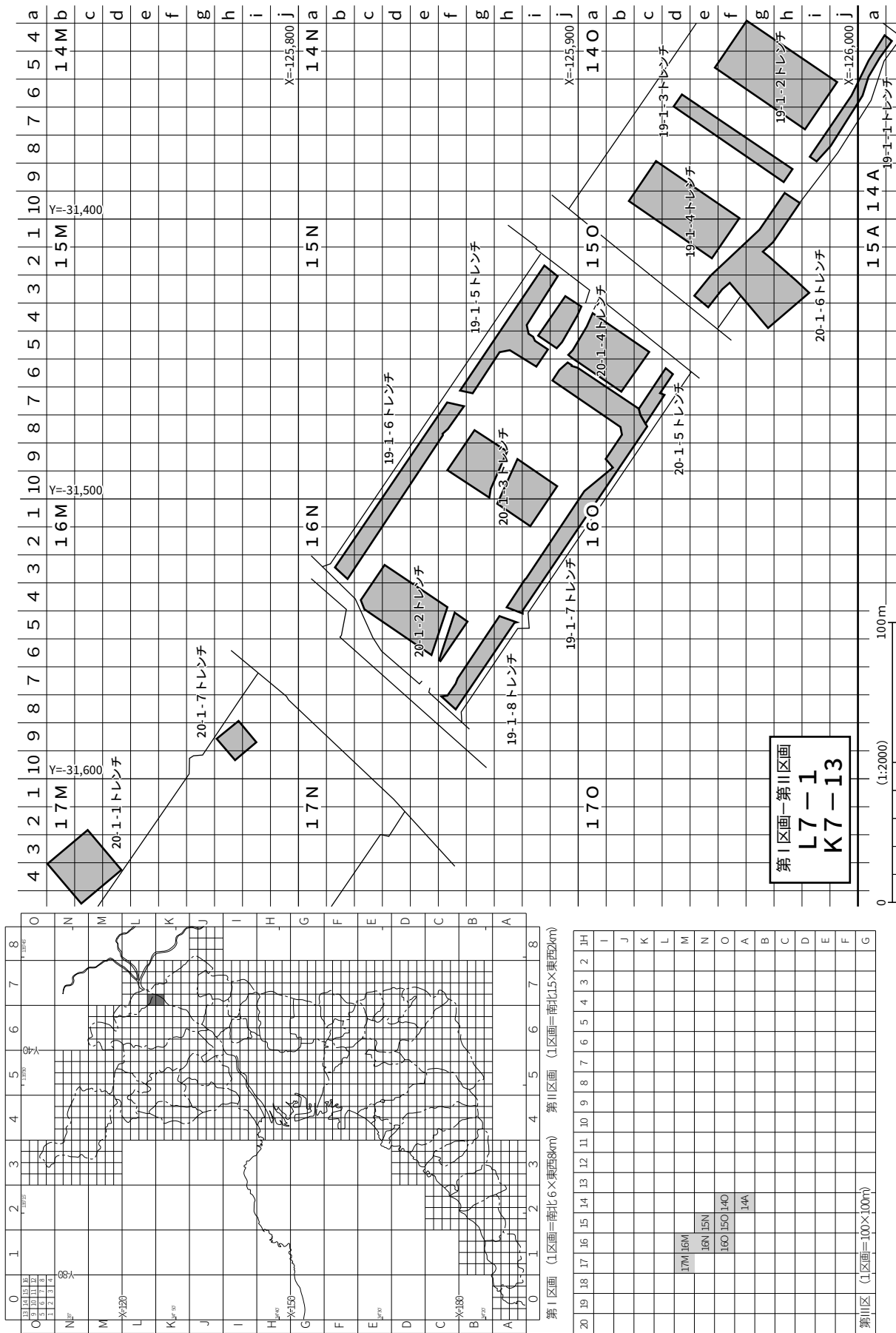


図4 調査区地区割図

第4章 調査成果

第1節 基本層序と微地形

今回の調査対象地点は、東端は淀川の流れ路の名残と目される内ヶ池から、国道171号を挟み、西端はJR京都線の路線敷き付近まで、東西に約400mの長い範囲におよんでいる。この間、地層の堆積状況や埋没微地形の状況は一様ではないが、掘削の対象とした地層は、おおよそ時期ごとに第1層から第3層に大別でき、これを基本層序としたい。第2層からは中世以降の、第3層からは弥生時代から中世にかけての遺物がそれぞれ出土している。第3層の下部については、遺物を含まない基盤層となる。基本層序を構成する各層の概要については以下の通りである（図5・写真図版2）。

盛土層：旧店舗、倉庫などの敷地で旧水田面上に盛られた盛土層（現代）。

第1層：旧水田作土層（近世から現代）。おおむね調査範囲全域に遺存し、層厚20cm～30cmを測る。上部の盛土による圧密を受けているところも多い。上面の標高は調査地西半で7.4m～7.6m、東半の国道に近いところで7.2m、内ヶ池付近で7.0mと、調査以前には西に高く、東に低い地形を呈していた。

第2層：中世以降の作土層の重なり（中世から近世）。おおむね調査範囲全域に遺存するが、地点により層厚は大きく異なる。西半西端付近では約30cm、国道付近で約20cm、東半国道付近で50cm～60cm、内ヶ池付近で20cm～50cmを測るほか、上層の攪拌により薄いところでは5cm程度しか遺存していないところもみられた。調査範囲全域で比較的良く似た層相を示すもので、色調は灰白～黄灰色を呈し、粗粒砂を多く含むシルト質細粒砂である。鉄とマンガンの沈着が複数認められることからみて、その境界は明瞭ではないものの、長期間にわたる複数の作土の重複と考えられる。土器や瓦の細片を比較的多く含むが、摩滅の著しい細片が主体であった。第2層中、もしくは層下面に耕作に関わる小溝が伴う場合が多く、第2層の下部が第3層の上部を削平しているところも多いと考えられる。なお、国道171号の西側の調査区（19-1-4 トレンチ、20-1-6 トレンチ）では、第2層の上位に整地層と考えられる礫や瓦を含むしまった層（厚さ10cm～20cm）が部分的にみられた。近世段階の耕地整備に伴う整地層の可能性はある。

第3層：基盤層上部の土壤層を第3a層とし、いわゆる遺物包含層に相当する（弥生時代から中世）。黄灰～褐灰色の砂を多く含むシルト質極細粒砂層が主体で、炭化物や第3b層のブロックを含むところも認められた。ところにより土器片を主体とした遺物を多く含む。比較的厚い層厚を残す地点がある一方、第2層の攪拌により削平されたところも多い。後述する微高地上では第3a層を除くことで第3b層としたベース層上面（黄橙～黄色シルト）を検出し、弥生時代から中世にかけての遺構を確認していることから、第3a層はおおむね弥生時代から中世にかけての遺構面に伴う土壤層と考えられる。従って当時の地表面は第3a層上面と想定されるが、第2層による攪拌で本来の地表面は遺存していない。ただし、19-1-5 トレンチや7 トレンチでは第3a層上面に近いところで建物の礎石を検出していることから、それほど大きく削平を受けていないところもある。なお基盤層の上面は、調査地西半では標高6.8m～7.2mを測るが、国道際の部分では急激に落ちこみ、標高6.0m以下にまで低くなり東半へと続く。この基盤層の低いところでは第3a層は遺物をほとんど含まない黒色シルト質の均質な細粒砂層に変化し、第3a-2層として区別した。水域における土壤層の形成を示唆する（図6）。

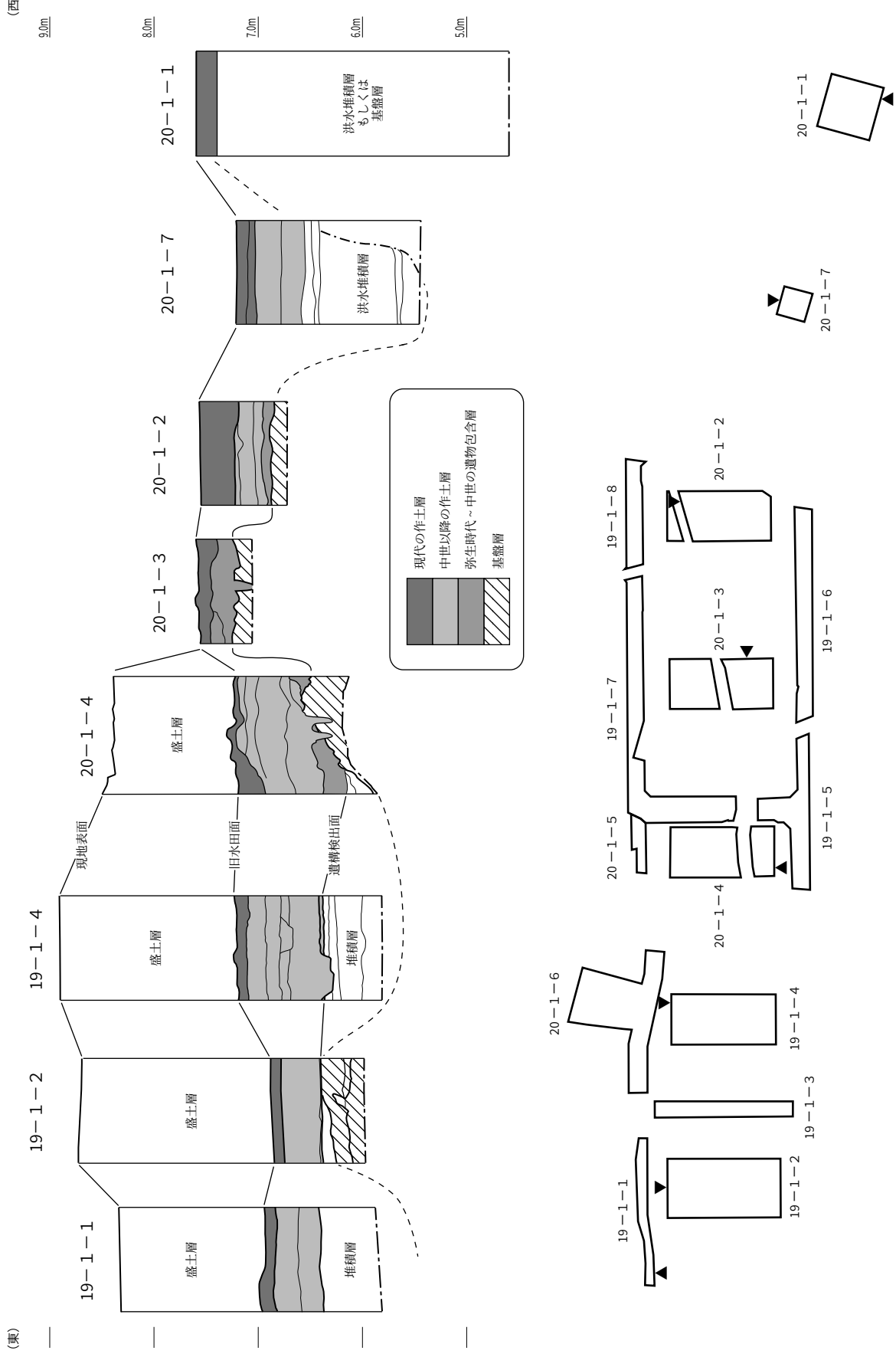


図5 基本層序模式図(1)

基盤（ベース）層：第3a層の母体にあたる第3b層はシルト～極細粒砂を主体する泥質の氾濫堆積物を基本とし、さらに下部には砂礫層の堆積が認められる。遺物を含まない。第2層による攪拌・削平が深いところでは第3a層ともども基盤層上部が失われているところがあり、下部の砂礫層が露出している。また、調査地東半の内ヶ池に近いところでは、第2層以下に砂やシルトからなり、ラミナをよく残す堆積層を介在させるところがあり、基盤層とその上部の堆積層を明瞭に分離することが難しい。19-1-1トレンチや2トレンチで下層の確認を行った際も、基盤層上位の黄橙色シルトがみられず、第2層の下にみられたシルト～砂から基盤層下部の砂礫層まで堆積層が連続して重なる状況であった。

なお、東海道新幹線・阪急京都線とJR東海道線との間に設けた20-1-1トレンチ、ならびに7トレンチでは地形環境が大きく異なる様相が認められた。現時点では全体的な把握には至っていないことから、調査過程と併せて、現時点までの認識を示しておきたい。1トレンチは現状が直近まで耕作が行われていた水田であり、機械掘削で第1層にあたる現代の作土層（厚さ約20cm）を除去したところ、粗い砂層が現れた。一瞥して洪水堆積層と認識されたためさらに掘削を続けたところ、現地表面下約3mにおよんでも同様の砂層の堆積が連続していた。トレンチ内の複数の場所で同様の掘削を行ったが、いずれも同じ様相であって、1トレンチ全域に厚い砂が堆積していると考えられる。遺物の出土はなく、砂の堆積年代も不明である。現地表面が標高7.6m程度であったので、掘削深度の最も深いところで標高4.6m程度となり、その下部はさらに深い。一方、その後調査に着手した7トレンチはやはり現状は直近まで耕作が行われていた水田であり、現代の作土から掘削を始めたところ、その下部に第2層に似た土壌を挟んで、シルトや砂からなる複雑な堆積層が現れた。さらに掘り下げたところ、およそ標高5.4m以下にまで厚い堆積層がおよぶことが明らかとなった。遺物には瓦器や土師器、須恵器細片などをわずかに含んでいたが、堆積時期は不明である。その後、7トレンチの隣接地で実施された梶原南遺跡21-1調査では、7トレンチで確認した堆積層には切り合いがあり、北西寄りの粗い砂層が基盤層下部の砂層、南東寄りの下位に粗粒砂～細粒砂、それから漸位的に変化するシルトを上位にもつ堆積層が流路を充填するもので、古代以前の遺物を含むものであることがあきらかとなった。

微地形：以上のような調査範囲における層序の認識と、確認した遺構面の高さからみて、調査地全体の埋没微地形は大きく微高地部分と低地部分に分けることができる（図7）。基盤層上面（≒遺構検出面）の高さで示すと、微高地部分がおおむね標高7.2m～6.6m程度、低地部分が6.5m～5.8m以下となる。微高地部分と低地部分の境界は、東側は国道171号付近にあり、20-1-4トレンチや5トレンチでは緩やかな崖状の段差を示す。これより東は基盤層が勾配をもって下がり、内ヶ池に至って急激に落ち込むようである。一方、微高地最高所は微高地東端に南北に延び、ここから西側には緩やかに下る平坦面が続く、新幹線・阪急京都線の路線敷き付近に至る。1・7トレンチで確認した厚い砂層が基盤層の下部であれば、これ以西は基盤層が急激に高まるものと考えられる。遺構分布、遺物の出土量とも微高地と低地では大きく異なり、低地域では極端に少なくなる。また、既往の調査で奈良時代を中心とした主要遺構が確認されている範囲も、この微高地最高所付近から南に続く安定した地形であることがわかる。

なお、国道171号より東の低地域では、基盤層の上面を確認した19-1-2トレンチの一部を除き、第2層を除いた面を遺構面とした（図6）。これは微高地部分で遺構面とした第3b層上面（基盤層上面）が、低地域では深く下がり、側溝などの確認においても遺構がほとんどみられず、遺物も希薄であったことから、安定した遺構面は確認できないと判断したことによる。結果的に東半の低地域では基盤層とした第3b層の上面ではなく、第2層下面の遺構というべき、中世段階の遺構を主に調査したこととなる。

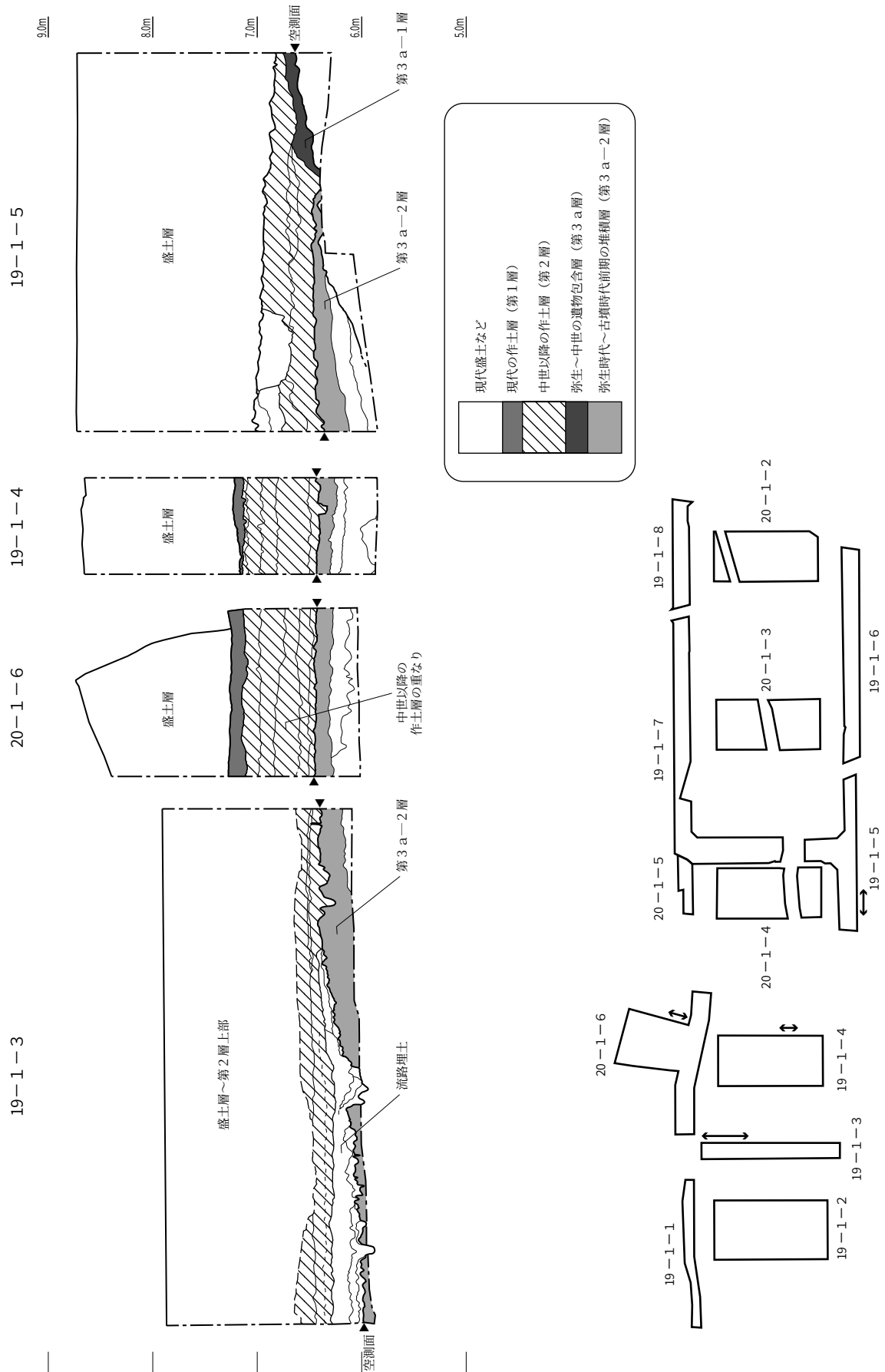


図6 基本層序模式図(2)

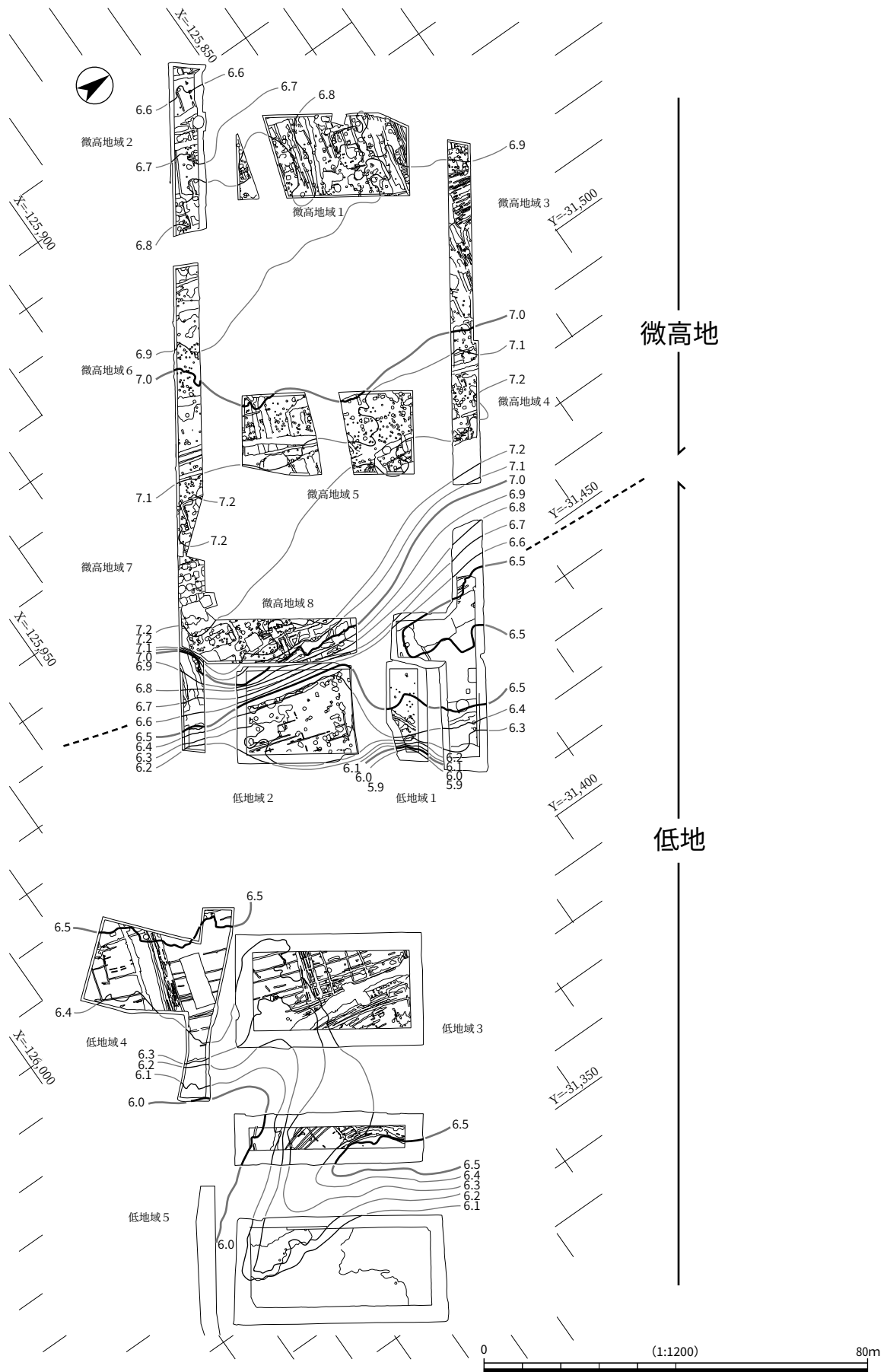


图7 地形区分图

第2節 微高地部分の遺構と遺物

第1項 微高地域の概要(図8)

前節の微地形の項で示したように、今回の調査範囲全体は地形的に中央部分から西寄りの微高地部分と、内ヶ池に向かって下る低地部分、さらには微高地から西側の部分に区分することができる。本節ではこのうち、微高地部分の遺構、遺物について、まず、微高地全体の概要を記載し、以下、微高地域1～8に細分し、順に報告していきたい。

微高地域1は微高地の西寄りに位置し、20-1-2トレンチが相当する。微高地域2は微高地域1の南にあたり、19-1-8トレンチに相当する。微高地域3は微高地域1の北にあり、19-1-6トレンチの西半分に相当する。微高地域4は微高地域3の東側で、19-1-6トレンチの東半分に相当する。微高地域5は微高地域1の東側、微高地域4の南側にあり、20-1-3トレンチに相当する。微高地域6は微高地域5の南側にあり、19-1-7トレンチの西寄りに相当する。微高地域7は微高地域6の東側にあり、19-1-7トレンチの中央部分に相当する。微高地域8は微高地域5の西側にあり、19-1-7トレンチの東寄り、20-1-4トレンチ・5トレンチの一部が相当する。なおこの細分には地形的な要因はなく、基本的に調査トレンチを単位とするまとまりである。

微高地部分はおおむね国道171号の西側にあたり、検出遺構面の標高が7.2m～6.6mの範囲にあたる。このうち地形的に最も高い部分は微高地域4・5・7・8に相当し、遺構が最も集中して検出され、出土遺物量も多い。南北方向に延びる微高地で、既往の調査成果においてもこの微高地上の南側で主要遺構が調査されていることから、梶原南遺跡の中核域にあたると思われる。これより西側へは緩やかに下る地形となり、微高地域1・2・3・6が相当する。遺構密度はやや低くなり、遺物の出土量も減少する。微高地全体の規模としては、おおむね幅150m程度と考えられ、そのうち遺構が密集する範囲は東寄りの幅約30mとなる。

微高地部分では弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の土坑、奈良時代の建物や井戸、土坑、鎌倉時代の建物、井戸、溝、土坑などが確認された。

第2項 微高地域(1)

概要(図9、図版3) 微高地域1は事業地内西寄りの橋脚部分の調査区にあたり、20-1-2トレンチに相当する。北に微高地域3が、南に微高地域2が位置する。遺構面の標高は6.8m～6.9m程度で平坦な地形である。確認した遺構の総数は270基程度で、全域に遺構の分布がみられる。東西方向の小溝、南北方向の大溝に錯綜するかたちでピットや井戸、土坑が分布する。あきらかに柱穴と認められるピットも多くみられるものの、調査範囲内で完結する掘立柱建物は明瞭ではない。溝の方向と、東西方向に並ぶ可能性のあるピットの方向はやや異なっており、時期差をもつ可能性がある。中央付近の大型の浅い土坑(土坑1・2)は埋土に炭化物を多く含み、煮沸具を多く含む奈良時代土器片が多く出土した。井戸は素掘り井戸1基(井戸1)、方形縦板組のもの1基(井戸2)があったが、土器類の埋納などはみられなかった。また、北寄りの浅い溝(礫群1)には多くの礫とともに、白鳳期ないしは奈良時代の瓦片が投棄されている。出土遺物には中世の瓦器や瓦質土器、土器器といった土器の細片もみられるものの、量としては奈良時代のものが最も多い。以下、個別の遺構、遺物について報告する。なお、微高地域1内を貫通する現道(市道梶原404号線)にあたる部分は、現代の攪乱が著しいと予想されたことから調査対

象から除外された。

井戸1 (図10、図版4) 微高地域1の中央北寄りに位置し、南に井戸2、土坑1・2がある。溝を伴う素掘りの井戸で、検出面での平面形は一辺約2m程度のやや不整形な隅丸方形で、深さは1.5mを測る。断面形状は上位3分の1程度が挿鉢状で、それ以下は垂直に下がるが、壁面が基盤層下部の砂層にあたる下位3分の1程度は壁が掘削時に崩落したと思われ、ブロック土を多く含む砂で埋没している。埋土の中位までは機能時に埋没し、最上位は人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

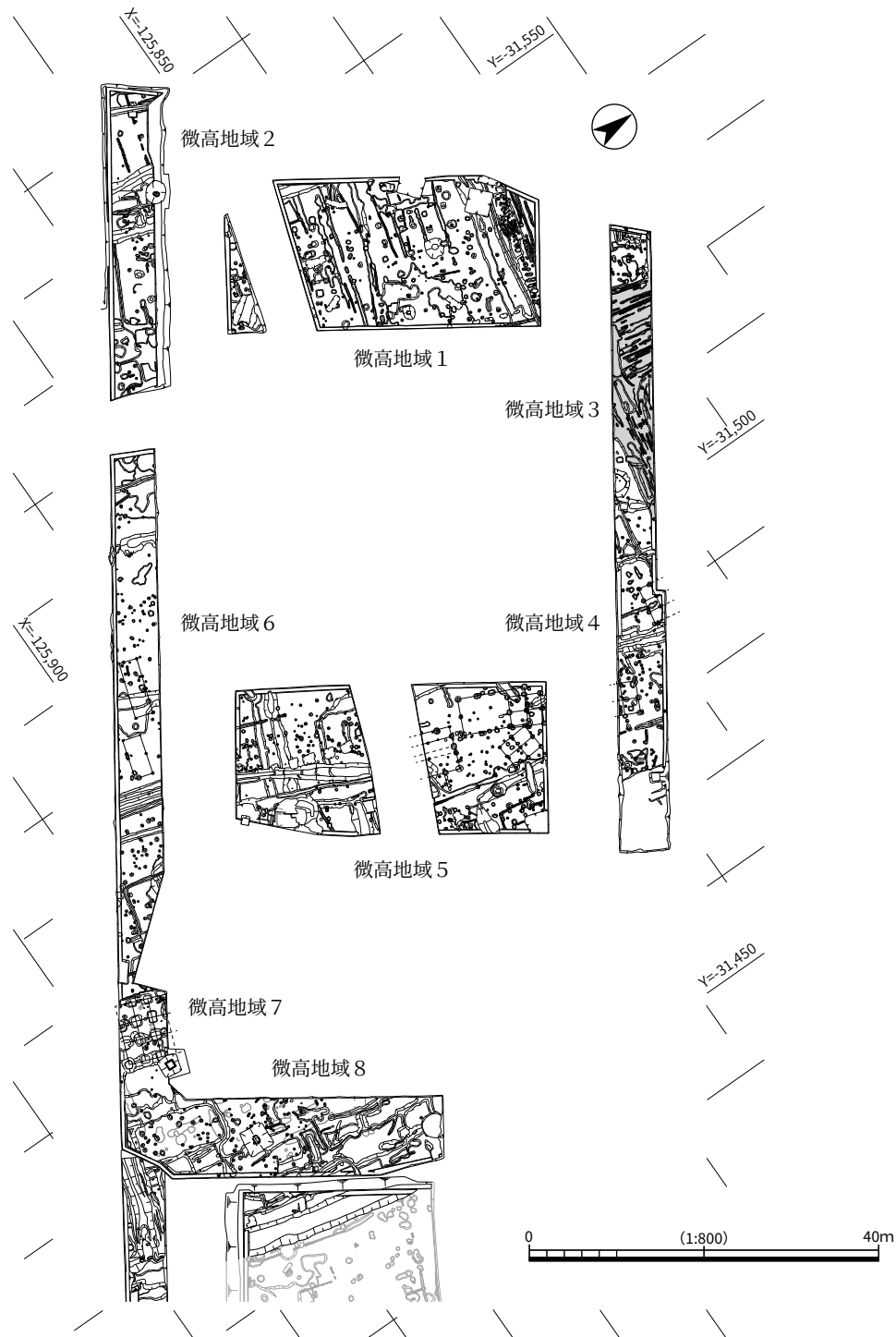


図8 微高地域 全体平面図

出土遺物には奈良時代の須恵器(1～3)、古墳時代の土師器(4・7・8)、古墳時代の須恵器(5・6)があるが、いずれも破片の流入もしくは混入と考えられ、機能時や廃絶時の埋納などはみられない。1は坏A、2は坏Bの高台部分で、奈良時代中葉のものか。5の須恵器有蓋高坏蓋はTK208型式段階、5世紀中葉のものか。7・8の土師器高坏は坏部のみ残存するもので、8は脚接合部内面に径6mmの刺

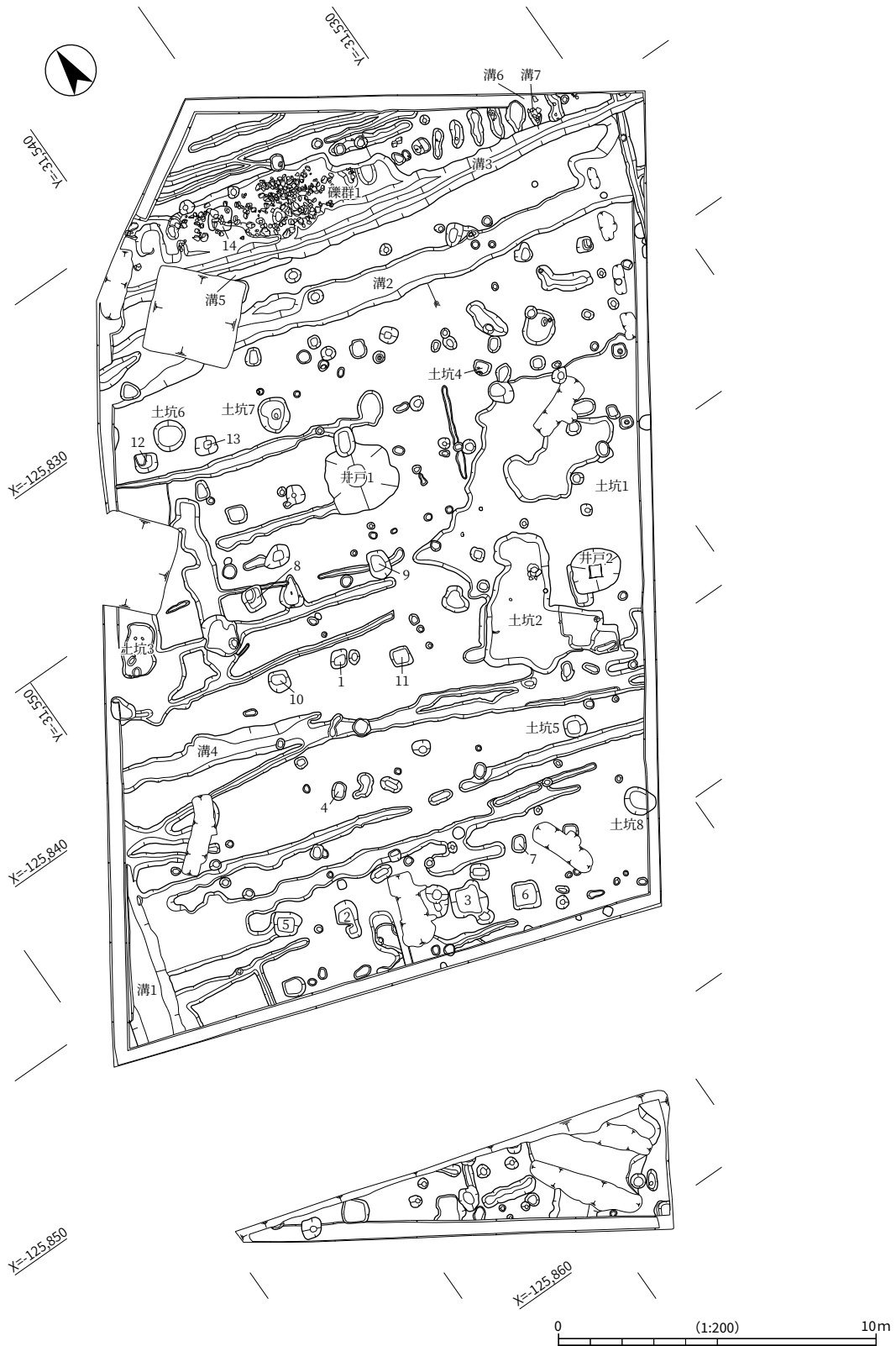
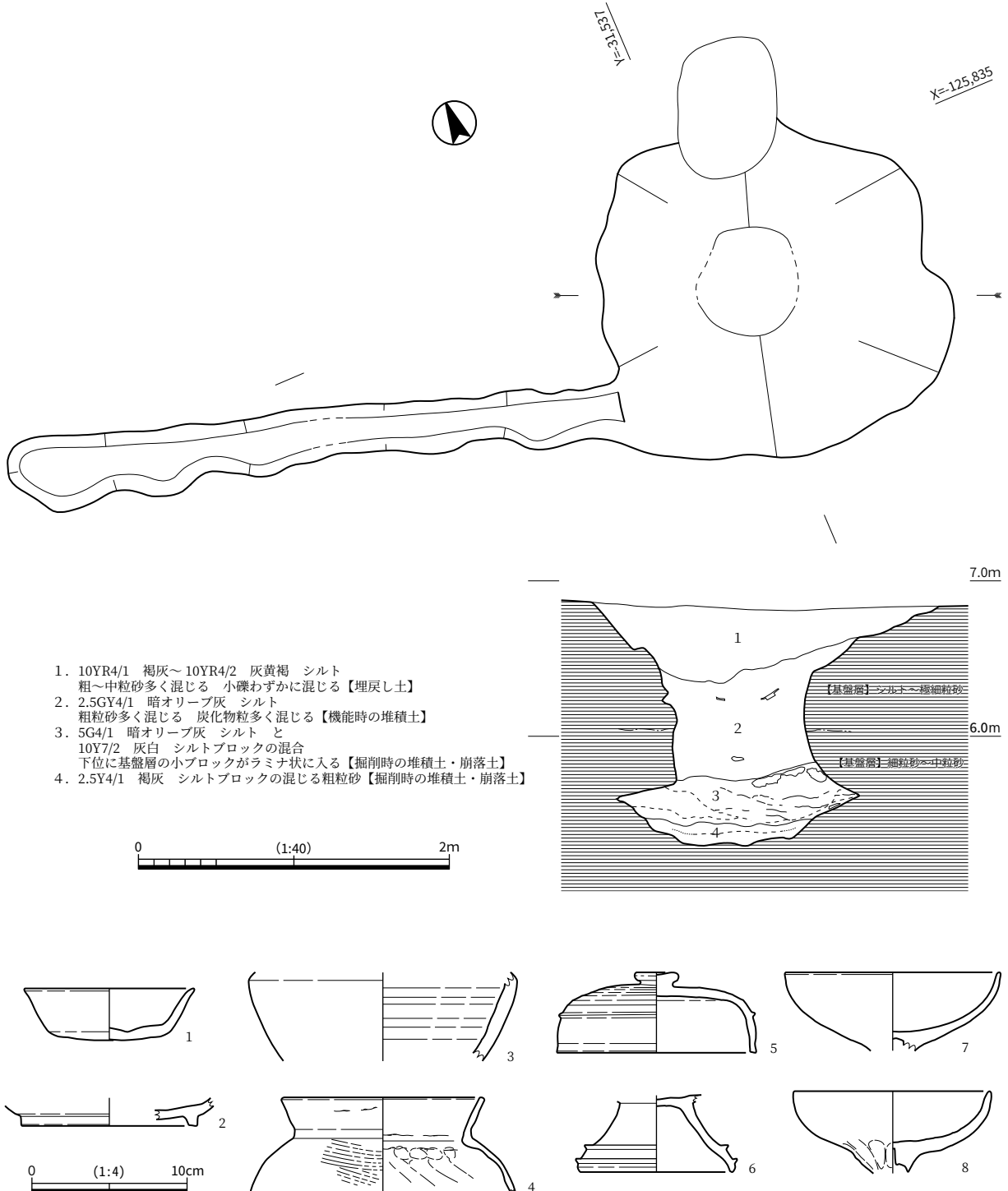


図9 微高地域1 全体平面図

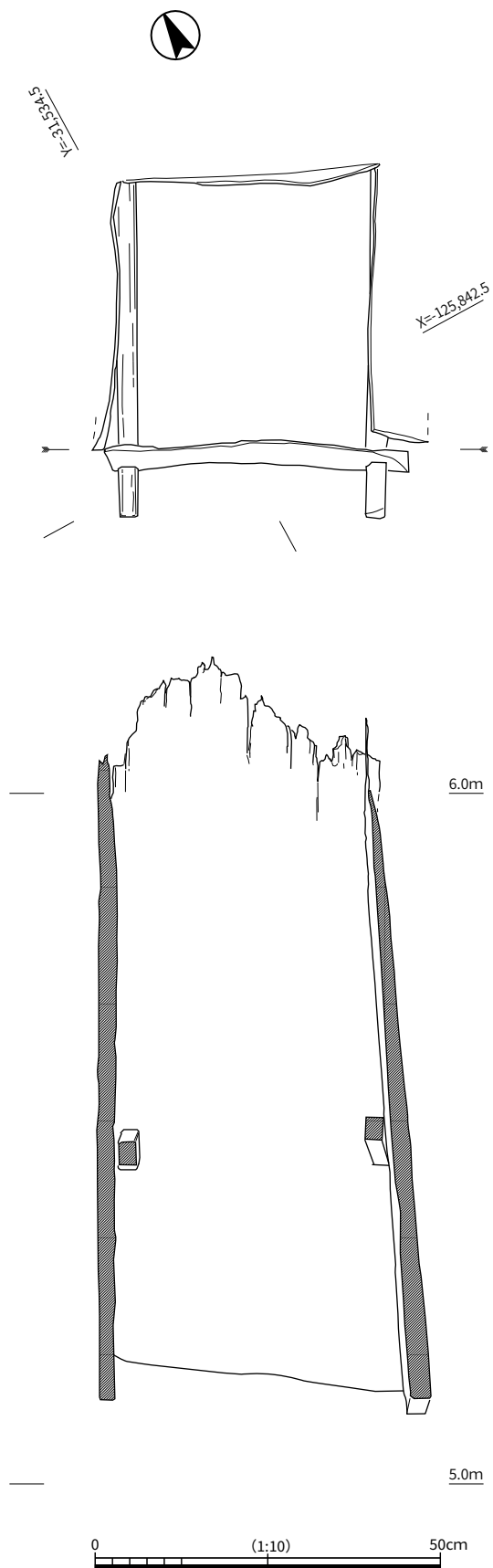
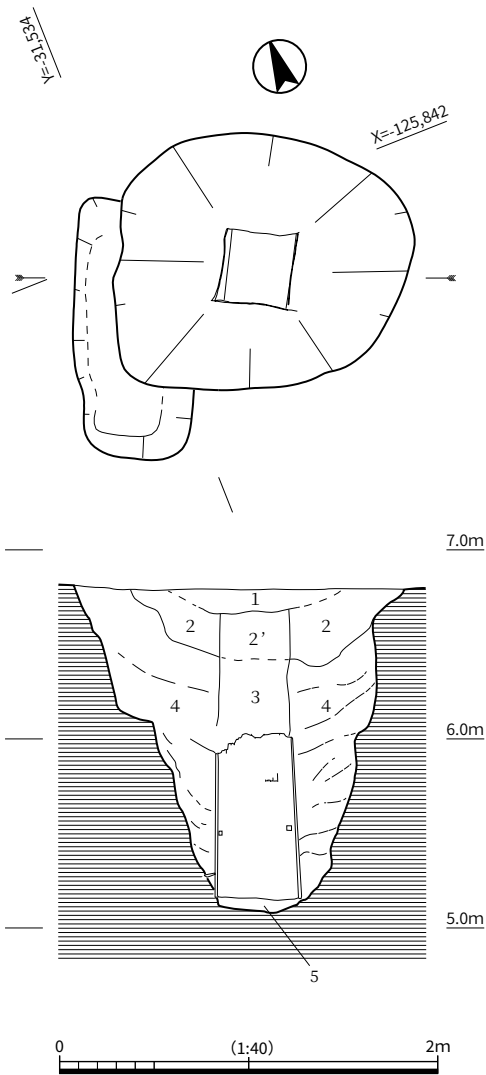
突痕が認められる。遺物からは確たる根拠は得られないものの、奈良時代に帰属する井戸と思われる。

井戸2 (図11・12、図版4) 井戸1から約6m南に離れて位置する木製の井戸枠を有する井戸で、土坑1の内部にあたり、土坑2に隣接する。検出面での掘方平面形は直径約1.4m程度のやや不整形な円形に短い溝がとりつくもので、深さは1.7mを測る。井戸枠は4枚の板材を一辺40cm程度の方形に立て、一对の横棧を渡すものである。また別に横棧材1点が井戸枠内部に落ち込んでいた。板材の上部は腐食が著しいものの、埋土の観察ではさらに上位にまで井戸枠が存在していたようである。井戸枠内の埋土には機能時の堆積がみられ、最上位は人為的に埋め戻されたようである。



1. 10YR4/1 褐灰～10YR4/2 灰黄褐 シルト
粗～中粒砂多く混じる 小礫わずかに混じる【埋戻し土】
2. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト
粗粒砂多く混じる 炭化物粒多く混じる【機能時の堆積土】
3. 5G4/1 暗オリーブ灰 シルト と
10Y7/2 灰白 シルトブロックの混合
下位に基盤層の小ブロックがラミナ状に入る【掘削時の堆積土・崩落土】
4. 2.5Y4/1 褐灰 シルトブロックの混じる粗粒砂【掘削時の堆積土・崩落土】

図10 井戸1 平・断面図 出土遺物



1. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く混じる【埋戻し土】
2. 5PB4/1 暗青灰 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く混じる【埋戻し土】
- 2'. N5/1 灰 シルト～極細粒砂【機能時の堆積土と埋戻し土の混濁】
3. N4/0 灰 シルト 粗粒砂、炭化物粒多く混じる【機能時の堆積土】
4. N4/0 灰 シルトブロック（径3～5cm大）と 7.5GY6/1 緑灰 シルト（基盤層）ブロックの混合【掘方埋戻し土】
5. N4/0 灰 シルト～粘土と基盤層砂の混合【掘削時の堆積土・崩落土】

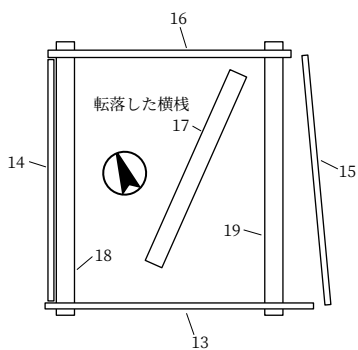


図11 井戸2 平・断面図

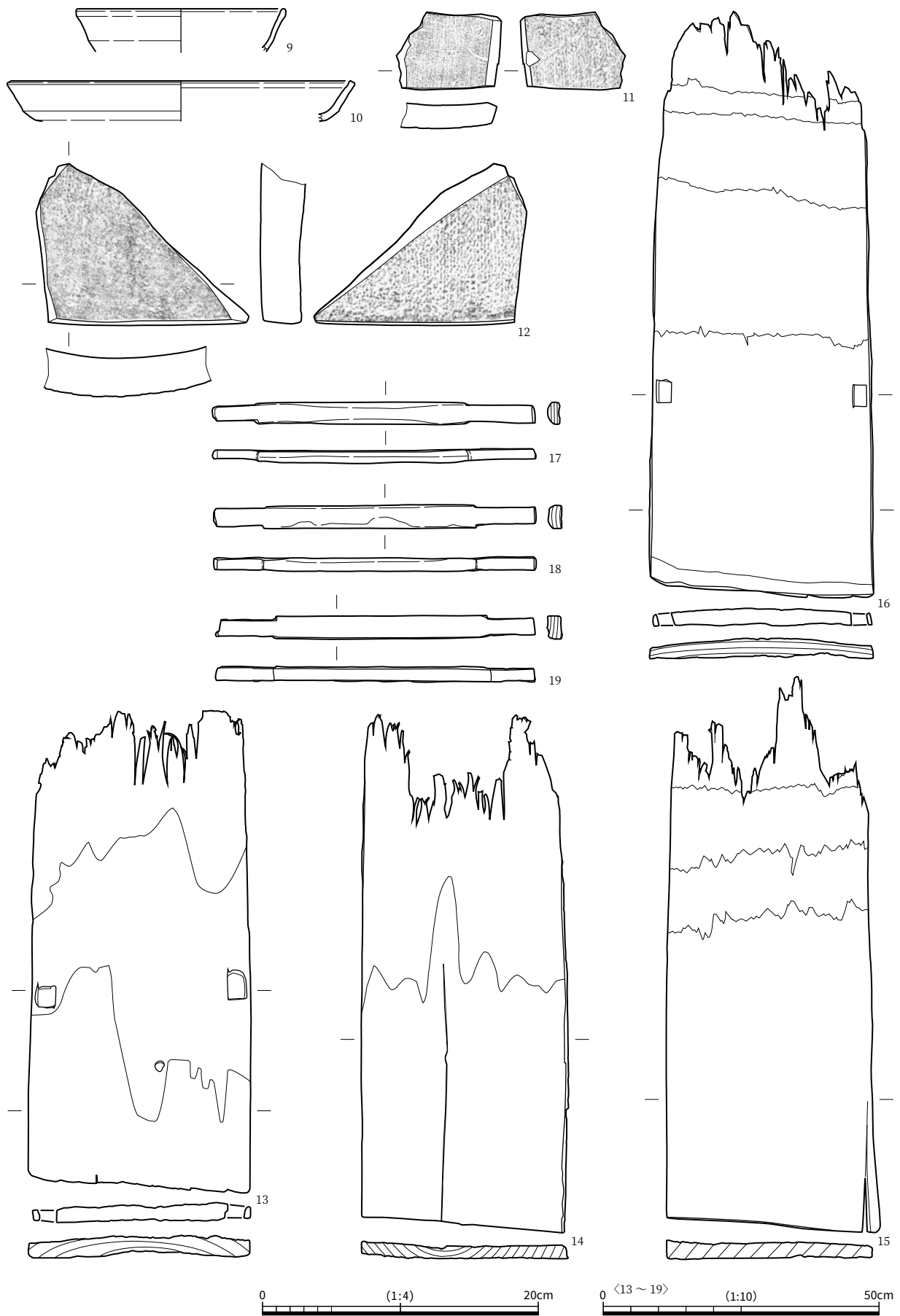


图 12 井戸 2 出土遺物

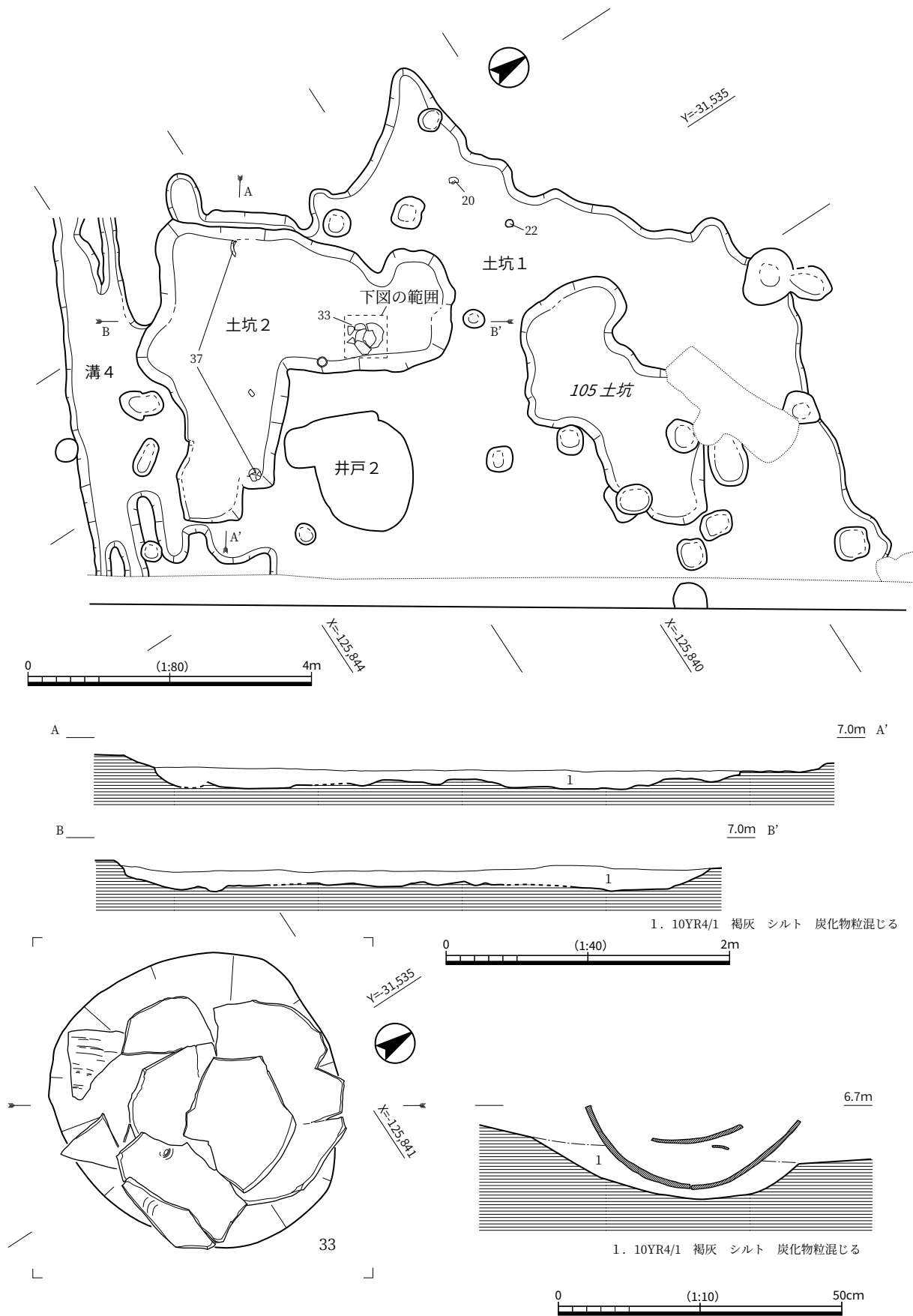


図13 土坑1・2 平・断面図

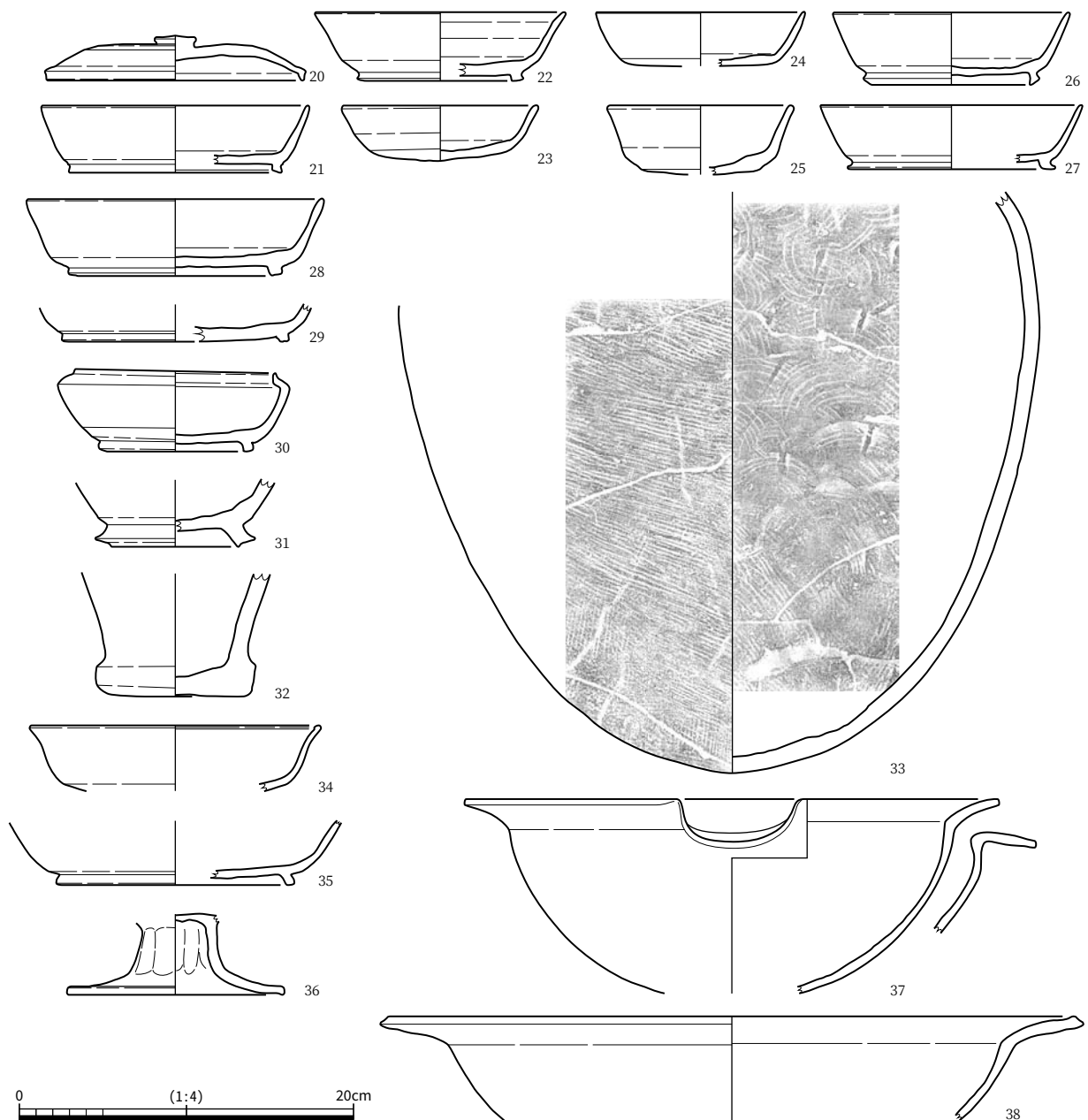


図14 土坑1・2 出土遺物

出土遺物には奈良時代の土師器(9・10)、平瓦(11・12)があるが、いずれも破片の流入もしくは混入と考えられ、機能時や廃絶時の埋納などはみられない。9の土師器坏Aには暗文の施された痕跡が残るが、10の土師器皿には暗文はみられない。奈良時代中葉に帰属する井戸と思われる。

土坑1・2 (図13・14、図版5) 土坑1は土坑とするものの、広く浅い落ち込みで、調査区外へ広がることから全体は不明であるが、南北方向で約9m、東西方向で5m以上の規模を測る。全体的な深さは20cm程度であるが、部分的に深まったところがあり、そのうちのひとつを土坑2とした。土坑2はL字形の平面形をもつ浅い土坑で、深さは20cm~30cmを測る。土坑1・2とも褐灰色の炭化物を多く含むシルトを埋土としている。比較的完形に近い状態の土器がまとまって出土しており、土坑2には浅い穴に須恵器の甕(33)下部が据えられた状態で残されていた。

出土遺物には奈良時代の須恵器(20~33)、土師器(34~38)がある。破片を含め須恵器の坏類が多いなか、30の須恵器壺Dはほぼ完形で遺存している。土師器の坏は摩滅が著しく、暗文の有無は不明で

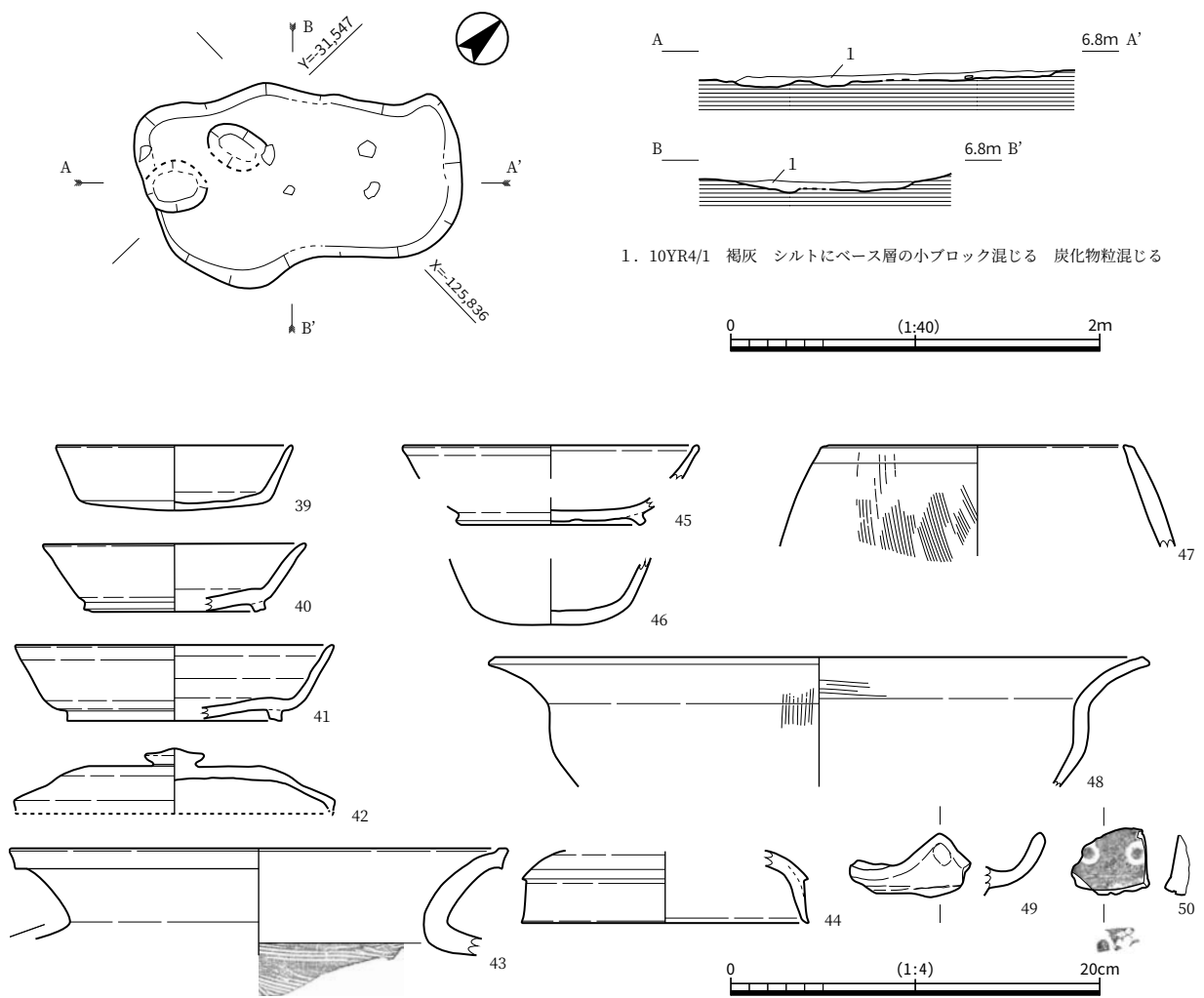


図15 土坑3 平・断面図・出土遺物

ある。また、32須恵器捏鉢や37土師器片口鉢などの調理具を含む。33の内面に残る当て具痕は同心円文の1か所が欠ける特徴的なものである。井戸が隣接する点や調理具を含みつつ、須恵器坏類が多く出土した点からみて、飲食物の調理に関わる施設の可能性が想定されるが、竈などの調理施設はみられない。遺物の様相からみて、奈良時代中葉の遺構と考えられる。

土坑3 (図15、図版5) 土坑1から北に約10m離れた位置にある浅い土坑で、長辺1.8m、短辺1.1mのいびつな方形を呈する。深さは10cmにも満たず、炭化物粒を含む褐灰色シルトを埋土とする。土器片を多く含んでおり、うち、奈良時代の須恵器(39~43)、土師器(45~49)、古墳時代の須恵器(44)、奈良時代の軒平瓦片(50)を図示した。46は土師器の壺もしくは鉢の底部と考えられるが、全容は不明である。47は土師器の甑か。49も土師器の鍋や甑に伴う舌状の把手である。これら奈良時代の土器は土坑1・2に類似した組成を示す。また、50の軒平瓦片は細片ではあるが、瓦当面と凹面端部に竹管文が施される。細片のため類例との比較も難しいが、梶原寺の創建瓦とされる平瓦の中に、瓦当面に竹管文を施す例が知られている。

溝1 (図16) 調査区角に一部がかかった状態で検出された南北方向の溝で、確認できた範囲では幅1.8m、深さ40cmを測る。出土遺物は細片に限られるものの、奈良時代の須恵器片少量と土師器片が出土している。仮に奈良時代の遺構とすると、集落域の西片を画する溝となる可能性があるが、中世段階

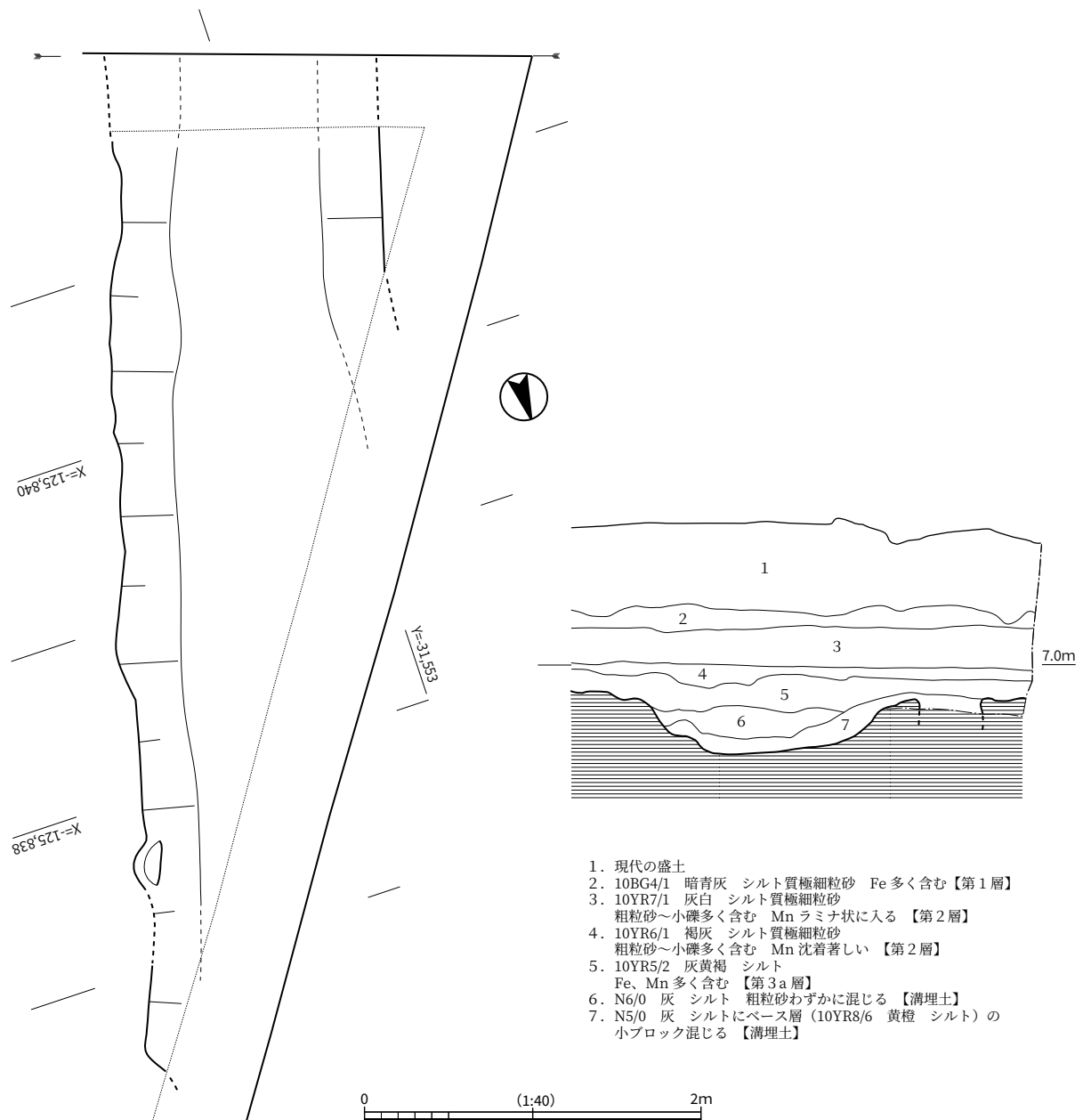
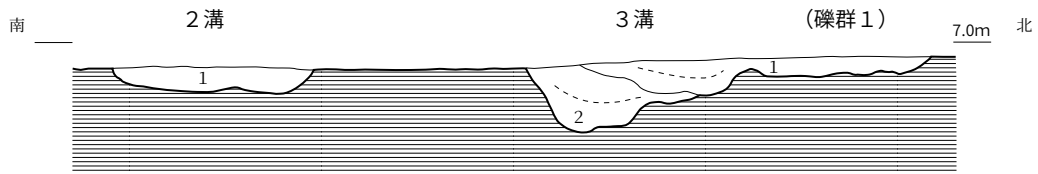


図16 溝1 平・断面図

の水路の可能性も残る。

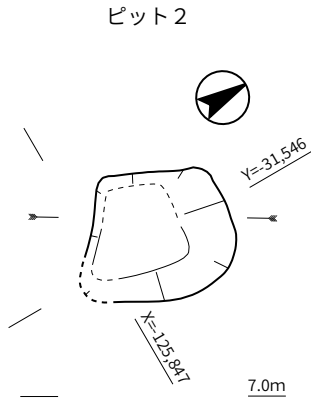
溝2・3 (図17) 東西方向に並行する2条の溝で、南のものを溝2、北のものを溝3とする。溝2は幅1.0m、深さ14cmを測り、溝3は幅0.8m、深さ40cmを測る。埋土は両者とも同じで、第2層に類似する土壤である。溝2・3からは古代から中世にかけての土器細片や瓦片が多数出土している。このうち土師器皿(52)、鉄釘(58)を図示した。52は摩滅が著しく、奈良時代の椀か11世紀代の皿かの判断に迷うが、このような古代のものと考えうる遺物を含むものの、出土遺物の総体からみて中世段階の溝の可能性が高い。なお、溝3は一部が幅2mほど北に浅く広がり、多量の礫とともに瓦片が多く含まれていた(礫群1)。文字通り瓦礫の廃棄遺構と考えられ、中世の耕地化に伴うものと推測する。

土坑4 (図18、図版6) 土坑1の北側に接する位置にある小規模な土坑で、長径0.6m、短径0.5mの不整な円形を呈する。深さは15cm程度で、土師器甕の口縁部(53)のほか、須恵器細片が出土している。完形の土器ではないが、意図的な埋納と考える。

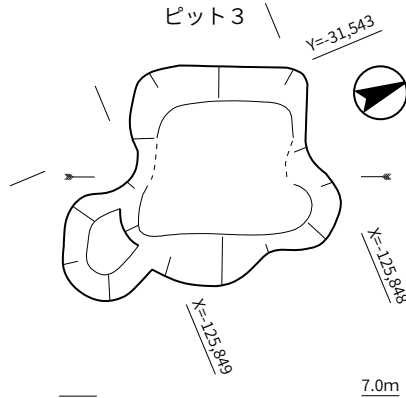


1. 2.5Y7/1 灰白 シルト質極細粒砂
Fe 多く混じる

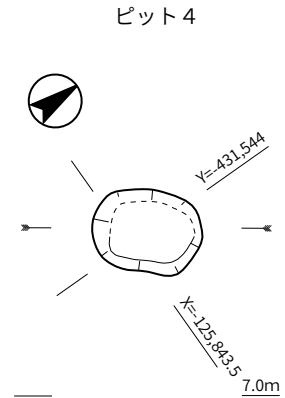
1. 2.5Y7/1 灰白 シルト質極細粒砂 Fe 多く混じる
2. 5Y5/1 灰 シルト～シルト質極細粒砂



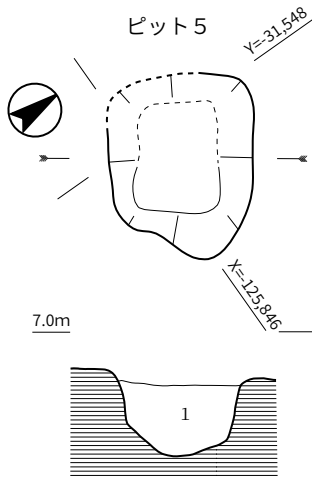
1. 10YR4/1 褐灰 シルト
2. (1) とベース層 (10YR8/6 黄橙 シルト) ブロックの混合



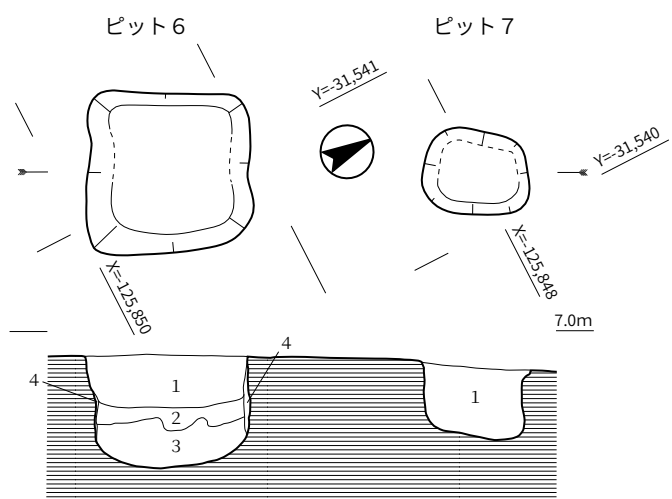
1. 10YR4/1 褐灰 シルト 【掘方埋戻土】
2. (1) とベース層 (10YR8/6 黄橙 シルト) 小ブロックの混合 【柱痕?】
3. (1) とベース層 (10YR8/6 黄橙 シルト) 小ブロックの混合 【掘方埋戻土】



1. 10YR4/1 褐灰 シルトとベース層 (10YR8/6 黄橙 シルト) ブロックの混合



1. 5Y6/1 灰 シルトのブロックとベース層 (10YR8/6 黄橙 シルト) ブロックの混合



1. 10YR5/2 灰黄褐 シルトブロックとベース層 (2.5Y7/6 明黄褐 極細粒砂) ブロックの混合
2. 10YR3/2 黒褐 シルト
3. 10YR3/2 黒褐 シルトブロックとベース層 (2.5Y7/6 明黄褐 極細粒砂) ブロックの混合
4. 10YR7/1 灰白 極細粒砂

1. 10YR4/1 褐灰 シルト

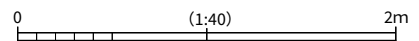


図17 溝2・3 ピット2～7 平・断面図

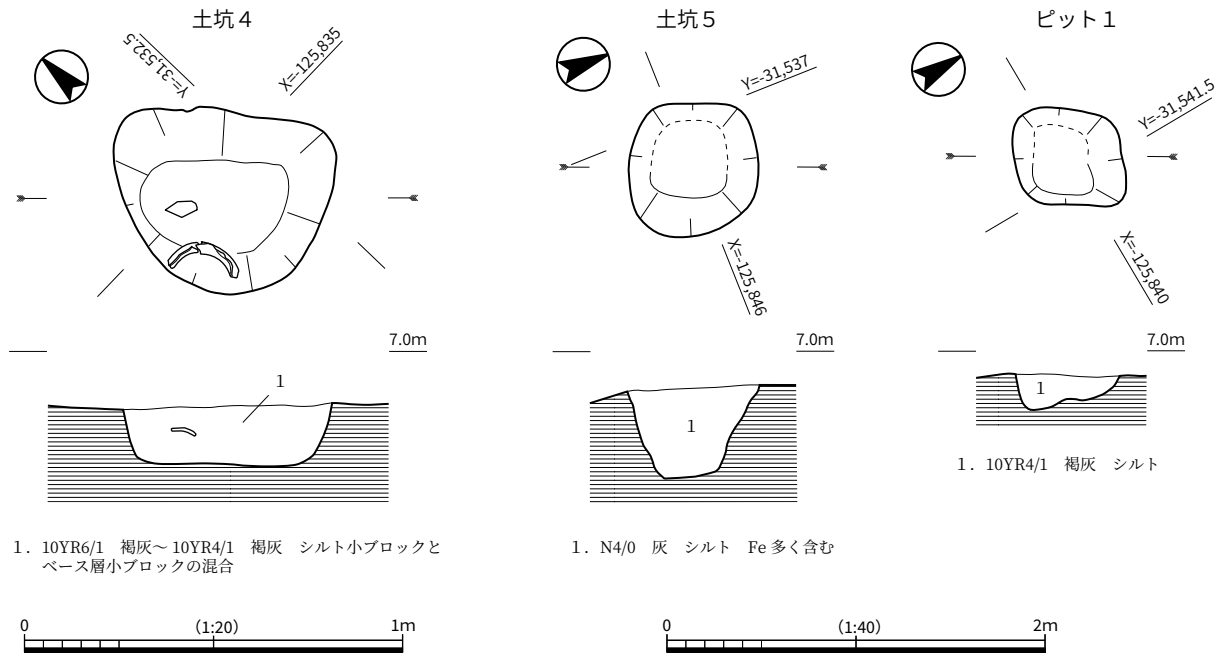


図18 土坑4・5 ピット1 平・断面図

土坑5 (図18) 土坑1の南に位置する小規模な土坑で、直径0.7m程度の不整な円形を呈する。深さは50cm程度で、灰色シルトを埋土にもつ。奈良時代のものと思われる須恵器、土師器の細片がわずかに出土している。

ピット1 (図18) 土坑1の西に位置するピットで、柱穴と考えるが建物は構成できなかった。長軸0.6m、短軸0.5m程度の不整な方形で、深さは20cm程度である。土師器細片がわずかに出土している。

ピット2～7 (図17、図版6) トレンチの南寄りに分布する比較的規模の大きな柱穴群で、ピット5・2・3・6は東西方向に並ぶものの、建物は構成できなかった。最も規模の大きいピット3は一辺1.0m程度の隅丸方形で、土層断面の観察では柱痕跡の可能性のある埋土が確認された。ピット4を除き、弥生土器、古墳時代の須恵器、古代の須恵器・土師器などの細片が出土しているが、図示できるものはない。時期を明確にはできないが、古代の遺構と推測する。

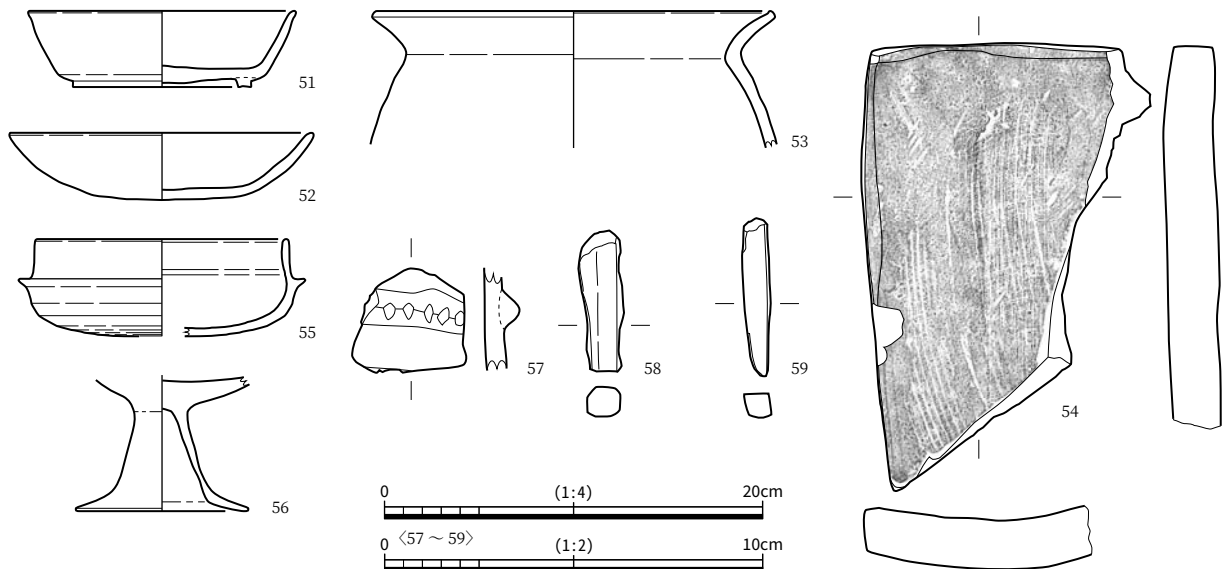


図19 溝 ピット 出土遺物

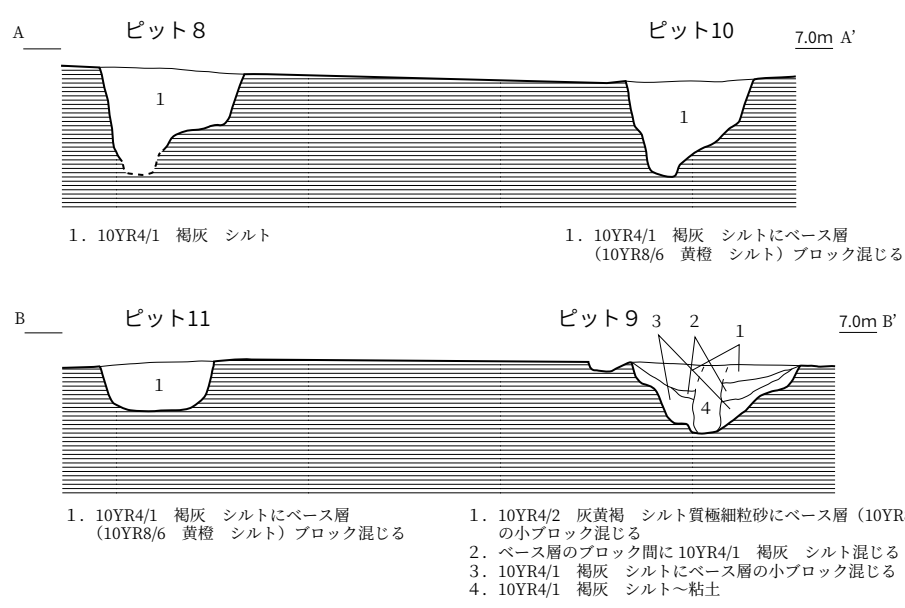
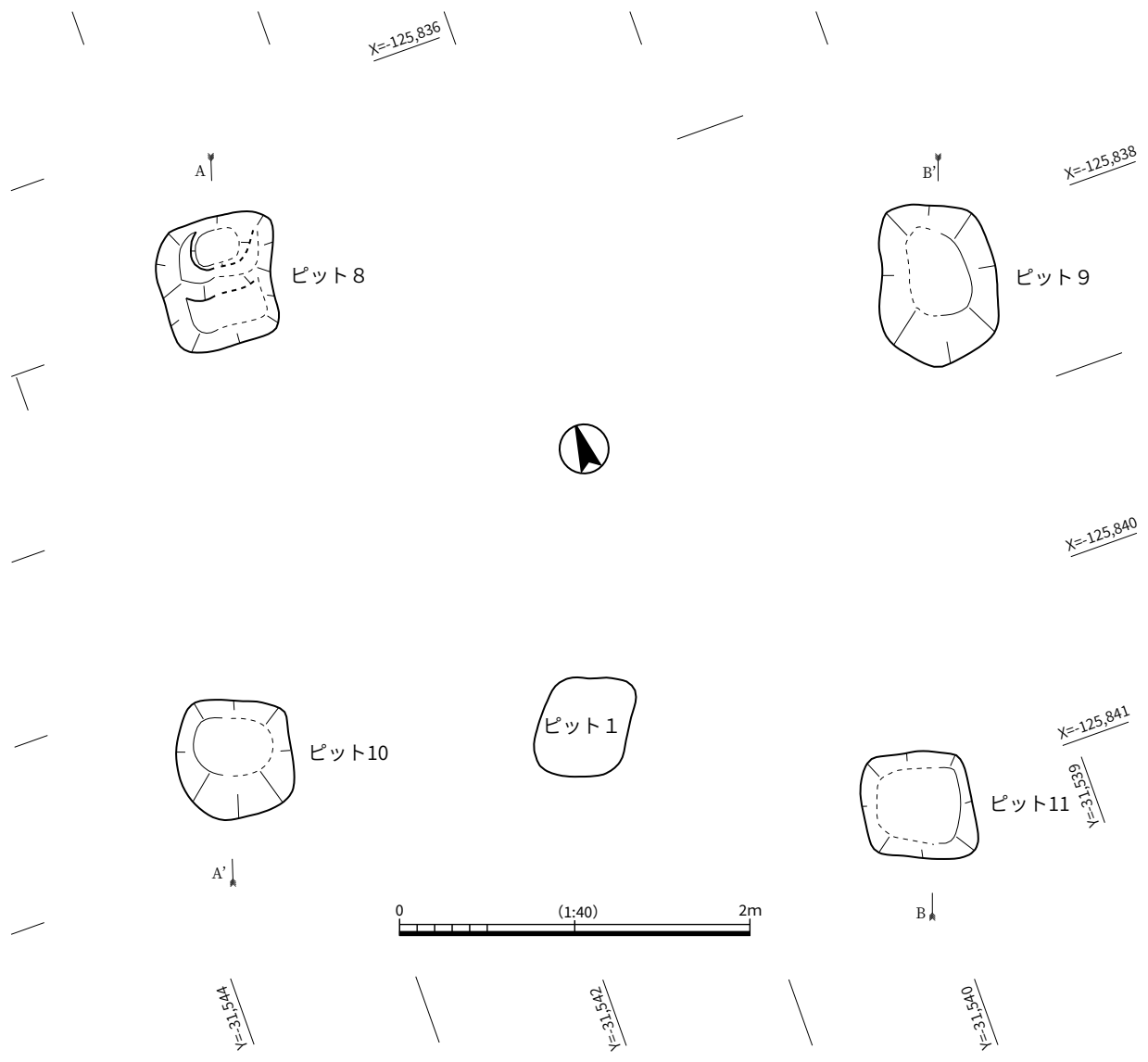


図 20 ピット 8～11 平・断面図

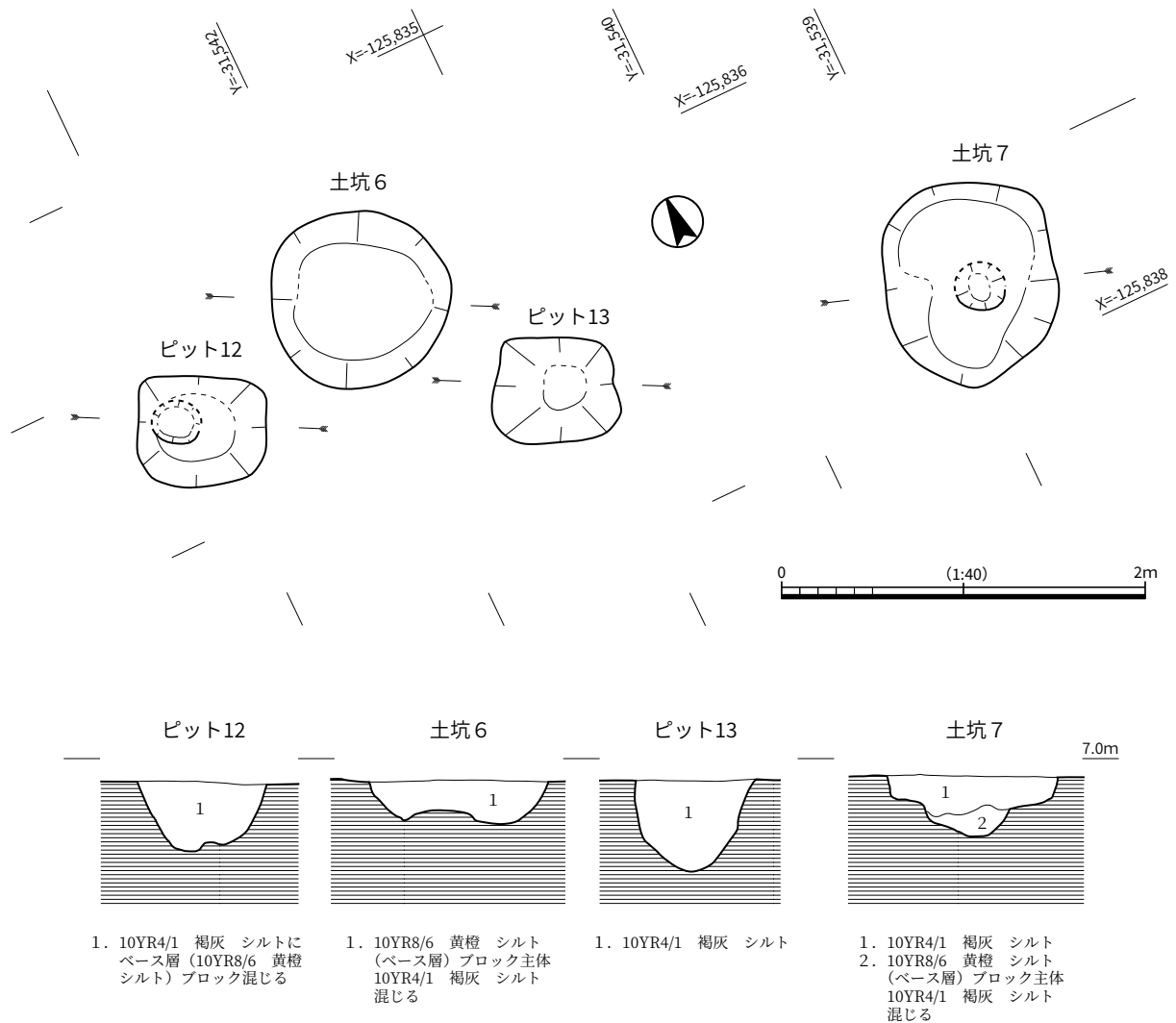


図21 土坑6・7 ピット12・13 平・断面図

ピット8～11 (図20、図版6) 土坑1と土坑3の間に位置する柱穴群で、4基で建物を構成する可能性がある。一辺0.6m～0.8m程度の方形を呈するもので、深さは25cm～60cm程度とばらつきがある。規模の大きいピット9では土層断面の観察で柱痕跡の可能性のある埋土が確認された。ピット11を除き古代のものと思われる須恵器、土師器の細片が出土したにとどまる。時期を明確にはできないが、古代の遺構と推測する。

土坑6・7、ピット12・13 (図21) 溝2の南に分布する土坑・柱穴群で、土坑6・7、ピット12・13がそれぞれ対になる可能性を考慮した。また礫群1の下面で検出したピット14とその西に位置する柱穴を含めて掘立柱建物となる可能性を考慮したが、断定するには至らない。土坑6は直径1.0m程度の円形、土坑7は長径1.1m、短径1.0m程度の楕円形を呈し、深さは20cm～30cmを測る。ピット12、13はいずれも長軸0.7m、短軸0.6m程度の方形を呈し、深さは40cm～50cm程度である。それぞれ須恵器や土師器の細片が出土するにとどまり、時期を明確にはしがたいものの、古代の遺構と推測する。

その他の遺構と出土遺物 (図19) 溝2・3の北側には並行する小溝群と直交する短い溝が並ぶ。おおむね第2層と同じ土壌を埋土とするもので、第2層の耕作に関連するものと考えられる。このうち溝6からは鋤滓(図版89-893)が、溝7からは鉄釘(59)、平瓦(54)が出土している。礫群1の下面で検出

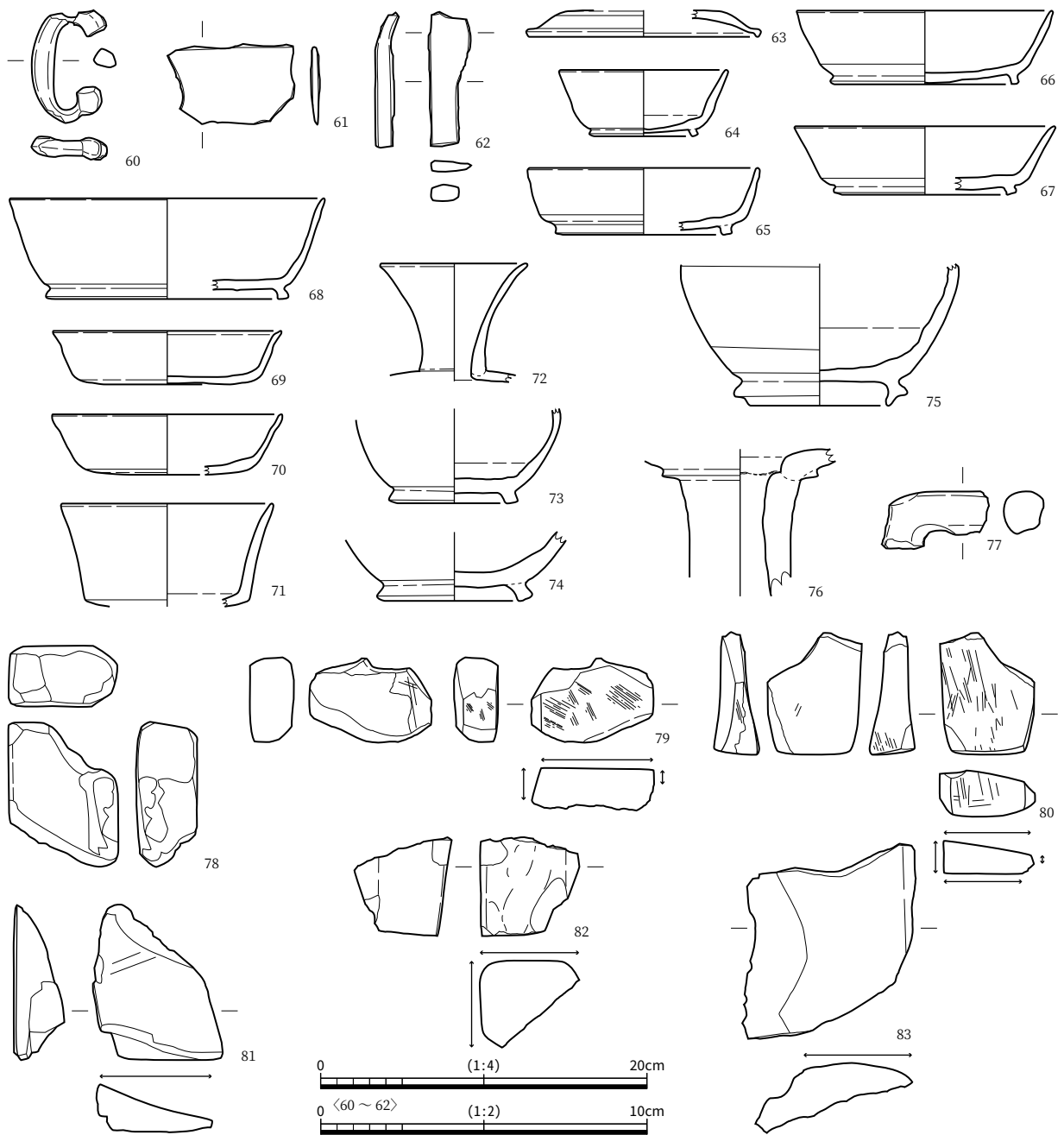


図22 包含層 出土遺物

したピット14は上述のように柱穴の可能性のあるもので、古代の土師器・須恵器片が出土しているほか、縄文晩期の深鉢細片(57)が1点含まれていた。溝3に切られる関係でわずかに残存していた溝5は遺構の詳細は不明ながら、古墳時代の土師器細片のほか、須恵器坏身片が出土している。MT15型式段階(6世紀前葉)の遺構か。土坑3の南から土坑1・2の南まで延びる溝4はピット10・11などと同じ方位をもつ可能性のある溝で、幅0.9m、深さ15cm程度を測る。奈良時代の須恵器・土師器・平瓦の細片が出土しており、うち須恵器坏(51)を図示した。土坑5の南に位置する土坑8は長径1.0m、短径0.8m程度、深さ20cmを測る。古墳時代のものと目される須恵器、土師器の細片が出土しており、うち土師器高坏の脚部(56)を図示した。市道を挟んだ南側の調査区でも溝、土坑、ピットが検出され、なかにはピット5・6などと類似する規模のものも含まれ、掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、調査範囲が狭く全容は不明である。

層出土遺物(図22) 遺物包含層に相当する第2層～第3a層からは土器を中心とした遺物が多く出土している。古代から中世にかけての土器類が主体を占め、砥石などの石製品や金属製品がわずかに含まれる。うち特徴的なものを図22に示した。金属製品の中でも注目すべき資料は青銅製鉸具金具(60)で、一部が腐食により失われているが、長さ3.3cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測るC字形の外枠部分である。錆により軸孔の有無は確認できず、鉸具板金具は残されてないが、軸受け部の外幅が3.0cmであるのに対し、外型内枠の径が2.6cmで、推測される鉸具板金具幅≒帯幅より狭い。仮に帯幅を2.6cm程度と見積もると、平城宮での分類ではAⅢ型式に属し(佐藤1976)、帯幅9分(2.7cm)が示す従八位下の官位に相当する(松村2002)。梶原南遺跡では過去の調査で同様の鉸具金具が出土しており、2例目となる。砥石は形状・石材からみていくつかの類型に分けられ、79・80は流紋岩質、81～83は頁岩、安山岩、砂岩など硬質の石材である。76に示した須恵器は古墳時代の器台の可能性を想定するが、古代の壺頸部の可能性も残る。土製品では瓦質の埴とした78があるが管見では類例を知らない。

小結 微高地域1は今回の調査範囲のうち、遺構、遺物がまとまって出土した範囲の西端付近にあたる。古墳時代から中世にかけての遺構、遺物を検出したが、中でも奈良時代でも中葉に属する遺構、遺物の割合が高い。個々の遺構の位置づけには不明なところが多いが、掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴や、それらを画する可能性のある溝、井戸を伴い、須恵器甕を据える浅い土坑などから、居住域の一角を占めるものと考えられる。とりわけ土器においては食器類に加えて調理具も含まれていることから、井戸も含め炊事に関わる施設を含むものと考えられる。既往の調査ならびに今回の調査においても当遺跡が奈良時代の公的施設を含む可能性は高いことから、微高地域1の範囲もその施設の一部、ないしは関連する居住域であるとみておきたい。また中世作土層からの出土とはいえ、鉸具金具の出土は、この可能性を支持するものとする。

第3項 微高地域(2)

概要(図23、図版7) 微高地域2は事業地内西寄りの側道部分の調査区にあたり、19-1-8トレンチに相当する。北に微高地域1が、東に微高地域6が位置する。遺構面の標高は6.6m～6.8m程度で、東から西に緩やかに下がる地形である。微高地域1・3と併せて、微高地の西縁辺付近にあたると思われる。確認した遺構には溝と井戸、土坑、ピットなどがあり、全体では75基程度を数え、やや散漫な分布をみせる。性格の明瞭な遺構は少ないものの、大型の柱穴や完形の須恵器杯を埋納した古墳時代の土坑もある。あきらかに柱穴と認められるピットを含むものの、調査範囲内で完結する掘立柱建物は認められない。なお、井戸3は当初の調査範囲では一部分の検出にとどまったことから、空中写真測量終了後、調査区を一部拡張し、全体を確認した。

調査区全体では多くの土器片が出土したが、古墳時代から中世のものが混在する中で、やや奈良時代の須恵器が目立つ傾向がある。

井戸3(図24・25、図版8) 微高地域2の中央西寄り、調査区北壁にかかる位置で検出した井戸枠を伴う井戸である。ほかの遺構と重複するが、切り合い関係は明確にできなかった。検出面での掘方の規模は長径2.65m、短径2.25mを測る楕円形で、深さは1.7mを測る、最下部に素掘り部分を残すが、その上部に井戸枠として、痕跡を含めて5段の曲物が確認された。土層断面の観察からはさらに上部に井戸枠が設けられていたと考えられ、抜き取られた可能性が高い。埋土最上部は廃絶時に埋め戻されたようである。井戸枠として遺存していた曲物は、下2段が径30cm程度の円形で、上位3段が長軸

55cm～75cm、短軸40cm～55cm 程度の楕円形のものである。

埋め戻し土を中心に遺物が出土しており、図化し得たものを図25に示した。84～87は奈良時代の須恵器で、84・85は坏B、86は皿D、87は鉢Eに分類される。いずれも残存率は低い。88～91は奈良時代の土師器で、88は椀A、89は椀Dに分類される。90・91は甕口縁の細片である。92・93は丸瓦片で、

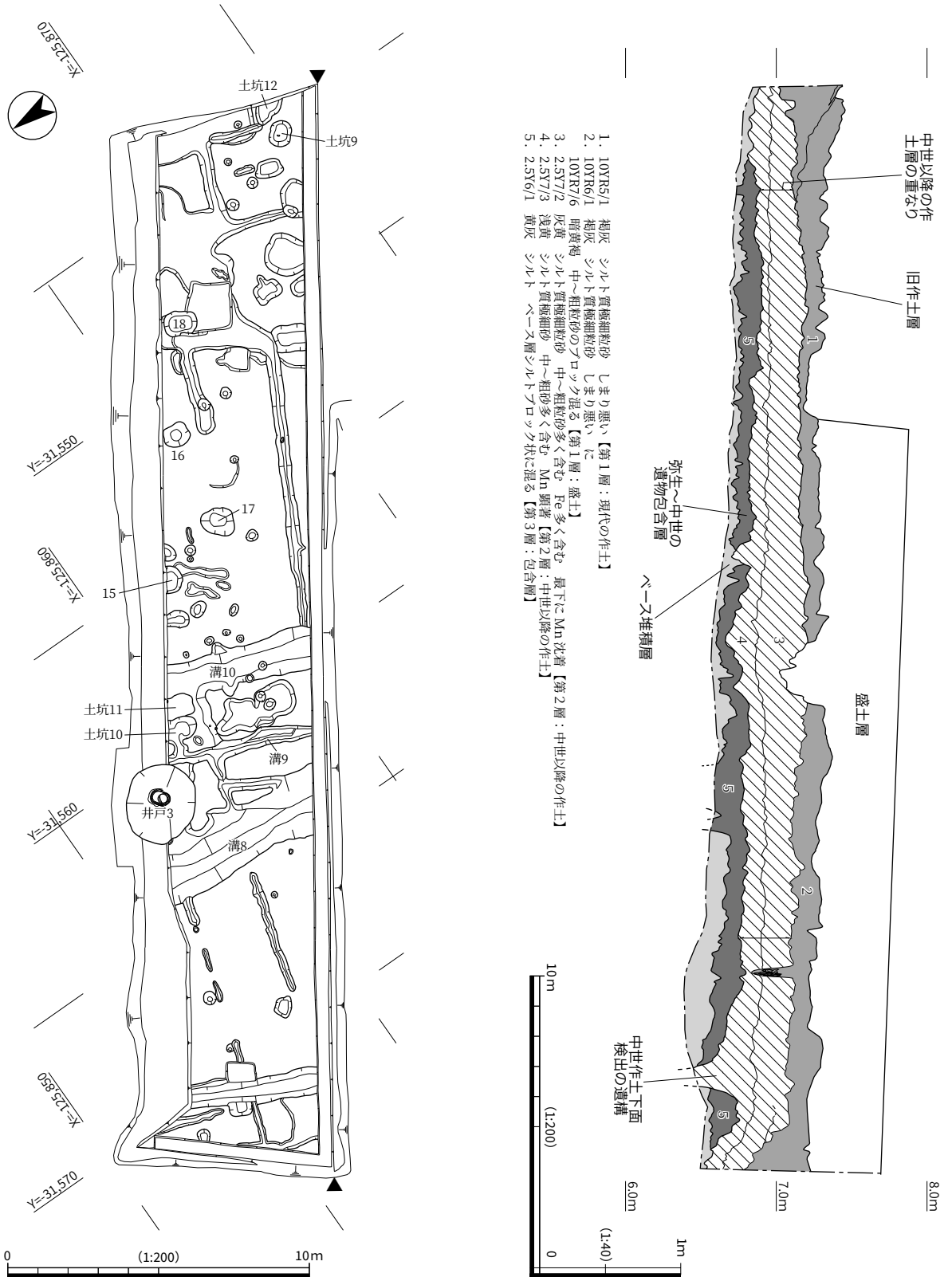


図23 微高地域2 全体平・断面図

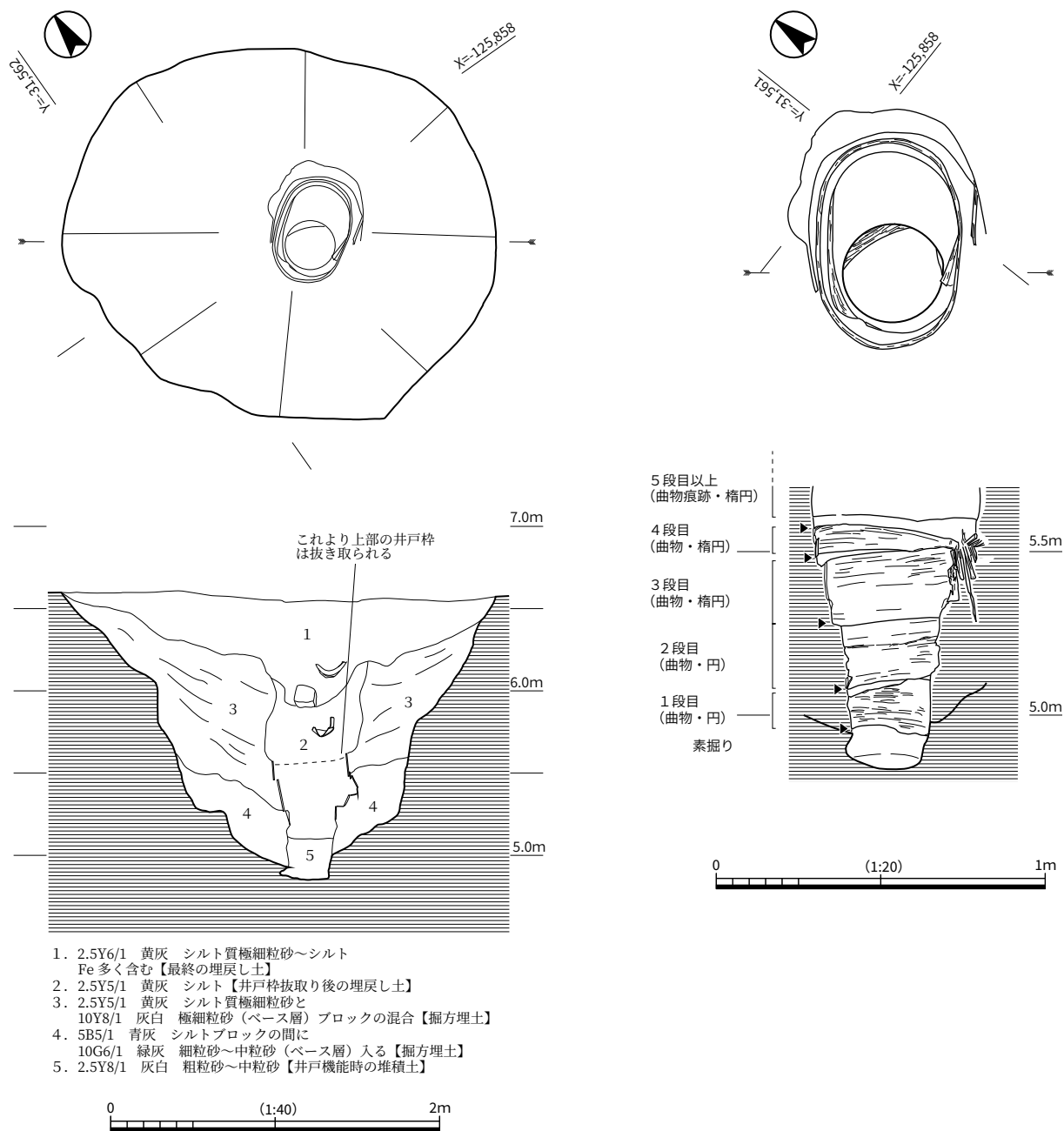


図 24 井戸 3 平・断面図

92は玉縁が残る。いずれも凸面に縄目タタキの痕を残すもので、時期はあきらかではない。94の土師器甕口縁片は古墳時代前期にさかのぼる吉備系の土器と考えられ、埋め戻し時などに混入したものと考えられる。これらの出土遺物はいずれも埋納や投棄といった機能時のものではない可能性が高いが、おおむね奈良時代中葉～後半の特徴を示すものが主体を占めており、井戸 3 の時期も奈良時代中葉から後半と考えられる。

土坑 9 (図 26) 微高地域 2 の東端付近で確認した土坑で、古墳時代須恵器の埋納がみられた。長径 0.85m、短径 0.7m の楕円形を呈し、深さは検出面より 30cm を測る。底付近に須恵器坏蓋 (95) を逆位に置き、ベース層のブロックを含む土で埋め戻されている。土壌洗浄は実施していないので微細遺物の有無は不明である。95 の須恵器坏蓋は TK208 型式段階、5 世紀中葉頃のものと考えられる。天井部外面に重ね焼きの痕跡があり、これを境にした天井部片側に自然釉が付着する。

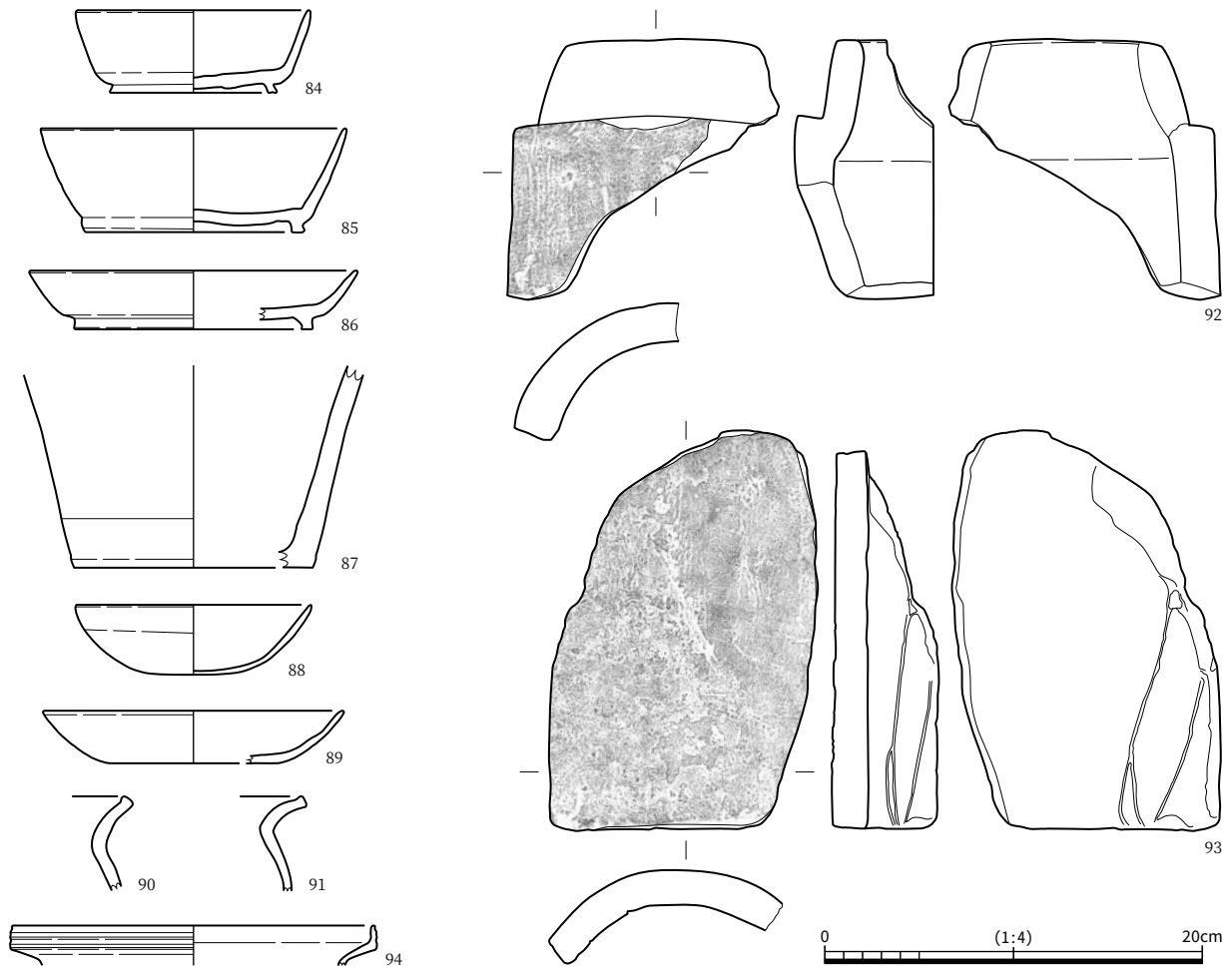


図25 井戸3 出土遺物

土坑10・11(図26) 井戸3の東側にあり、調査区北壁にかかる状態で確認した土坑である。溝9・10とも切り合う関係にあるが、調査区北壁の検討では、土坑11が最も先行し、埋没後、土坑10、溝10がこれを切るかたちで掘削された関係になる。土坑10と溝9の切り合い関係は不明で、一連の溝である可能性もある。

土坑10は検出範囲では長さ1m以上、幅0.7m、深さ20cm程度のもので、下位にベース層のブロックを含み、比較的均質な土壌で埋没する。土坑11は上部を土坑10、溝10で切られており本来の形状、規模は不明であるが、残存部分では幅0.7m、深さ20cm程度を測る。比較的土器片を多く含む埋土をもち、底からやや浮いたところに完形の須恵器有蓋高坏蓋(96)を納めるほか、須恵器甕の体部片や土師器甕体部片などが出土している。96はつくりの整った個体で、TK47型式段階、5世紀後葉頃のものと考えられる。

溝8～10(図27) 微高地域2の中央西寄りに並ぶ溝群で、細かな方向は異なるものの、大きくは南北方向をとる。西寄りの溝8が最も規模が大きく、広いところで幅1.6m、深さ60cm程度を測る。東寄りの溝10は幅1.5m前後、深さ20cm程度を測る。溝9は中央にあり、幅0.5m程度、深さ15cm程度と比較的小規模である。それぞれ分岐するなど複雑な形状を示すところもあり、現状では確認できていないものの、切り合い関係をもつ可能性もある。

出土遺物は古墳時代から古代にかけての土器細片ばかりであり、図示したものはない。年代を特定することも難しいが、おおむね古代に属するものとする。

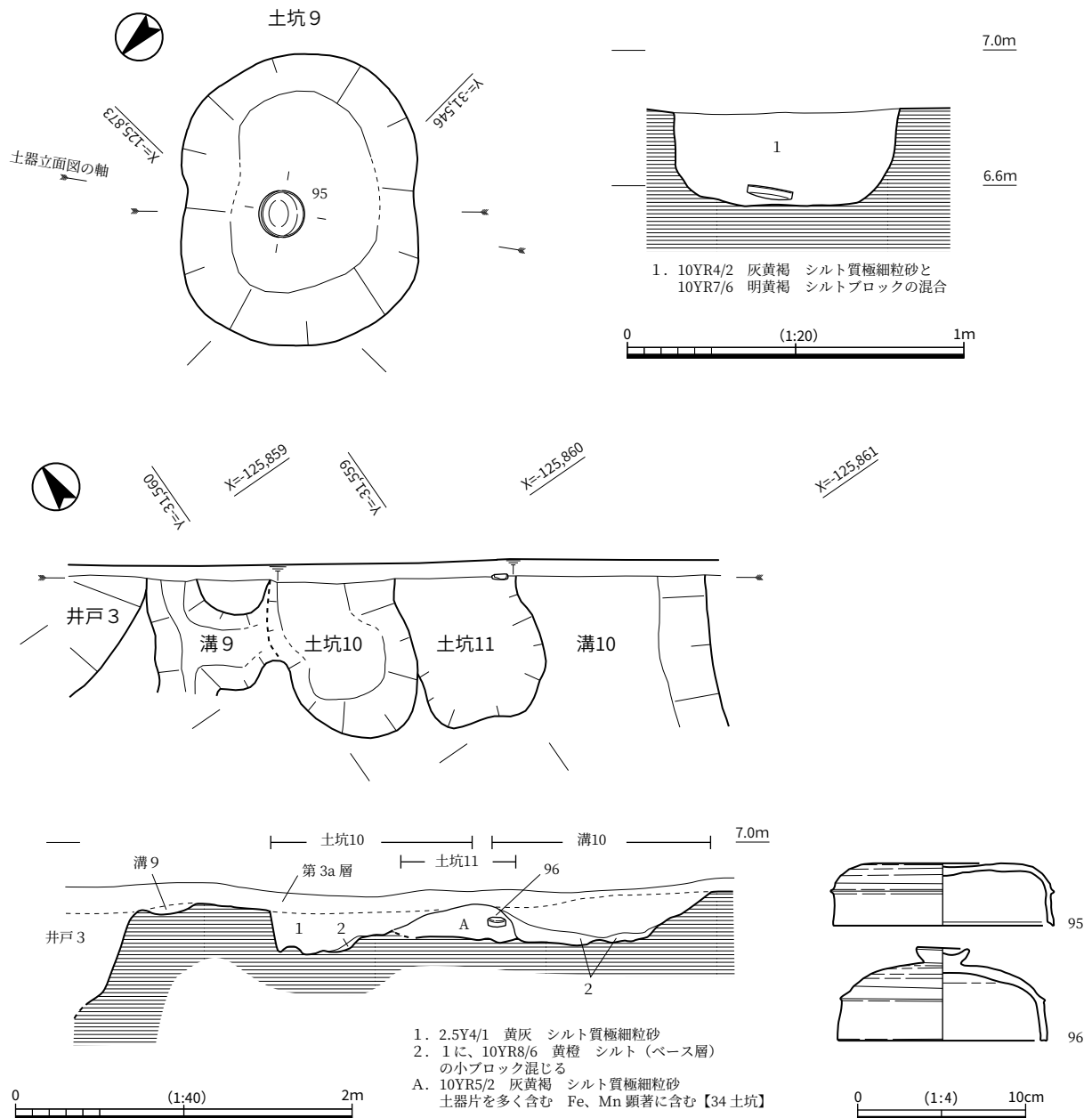
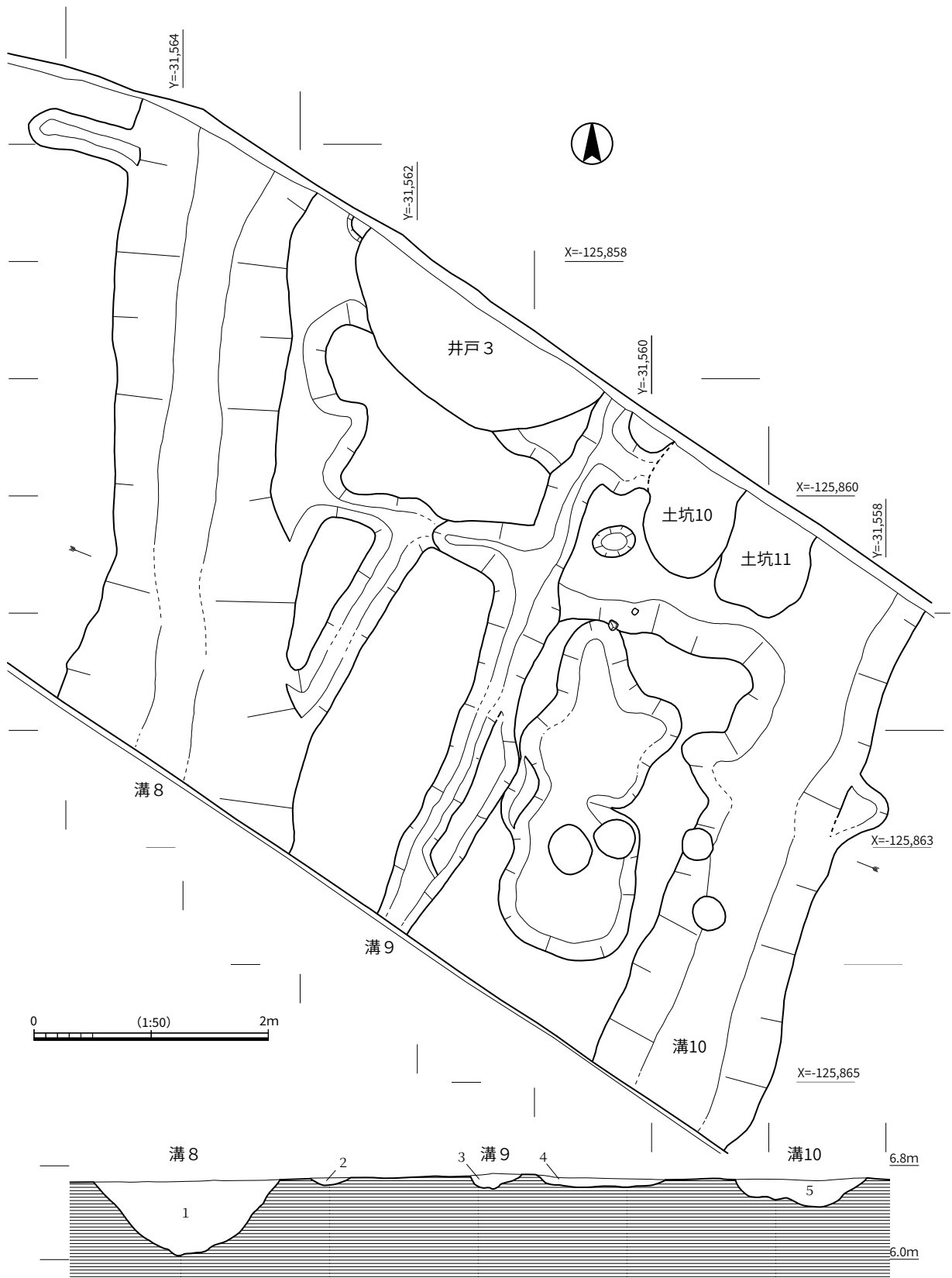


図26 土坑9～11 溝9・10 平・断面図・出土遺物

ピット15～18(図28、図版8) 微高地域2の西寄りに分布する、比較的大型の柱穴である。深さの近い16・17ピットの間隔が芯々で3.2m程度であり、この2基を結ぶラインが溝8に直交する方向をとるなど、掘立柱建物を構成する可能性はあるものの、調査範囲外となる北側への広がり是不明である。

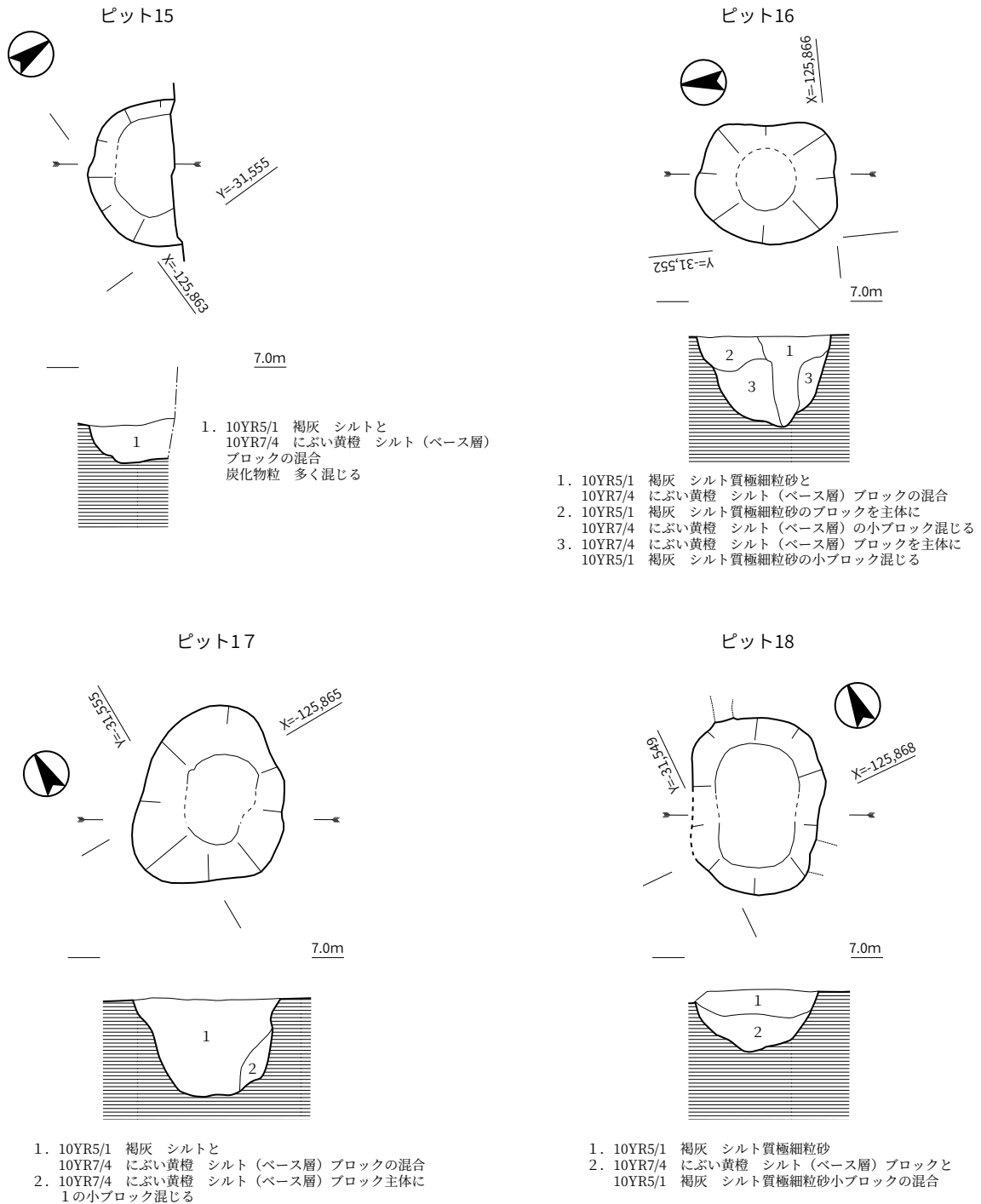
ピット15は一部が調査範囲外となるが、径約1m程度のものと考えられ、深さ25cm程度となる。ベース層のブロック、炭化物を含む埋土をもち、古代のものと思われる須恵器、土師器の細片が出土した。ピット16は長辺0.8m、短辺0.75m程度の隅丸方形で、深さは55cm程度である。土層断面の観察では柱痕跡が確認された。古代のものと思われる須恵器、土師器の細片が出土した。ピット17は長さ1.1m、幅0.85m程度の不整形で、深さ63cmを測る。ベース層のブロックを多く含む埋土をもち、土師器細片がわずかに出土した。ピット18は長軸1.1m、短軸0.8mの隅丸方形で、深さ30cmを測る。土師器細片が出土したのみである。いずれのピットも遺物は土器細片が出土したのみで、時期を決める根拠を欠くが、古代の遺構と想定しておく。



- | | |
|--|--|
| <p>1. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細粒砂に
ベース層 (10YR7/4 にぶい黄橙
シルト) のブロック混じる【9溝】</p> | <p>2. 10YR7/2 にぶい黄橙 シルト
3. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質極細粒砂【10溝】
4. 10YR5/1 褐灰 シルトにベース層
(10YR7/4 にぶい黄橙 シルト) のブロック混じる
5. 2.5Y4/1 黄灰 シルト 炭化物粒含む【11溝】</p> |
|--|--|

図 27 溝 8～10 平・断面図

そのほか、溝、土坑、柱穴などを確認し、うち、土坑12からは古墳時代の土師器甕(図29-97)が出土した。布留式土器の特徴を示す。ほかには土器や瓦の細片が出土したにとどまる。



0 (1:40) 2m

図28 ピット15～18 平・断面図

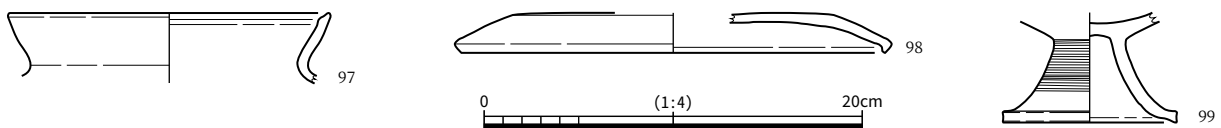


図29 土坑12 包含層 出土遺物

包含層出土遺物 (図 29) 遺物包含層に相当する第 2 層～第 3 a 層からは土器や瓦を中心とした遺物が出土しているが、ほぼ細片である。図示しうるものは須恵器蓋(98)、須恵器高坏脚(99)の 2 点にとどまる。98は奈良時代、99は古墳時代中期のものであろう。

小結 微高地域 2 は微高地の西端付近にあたり、さらに西側では地形が下がると考えられる。微高地のなかでは遺構分布は比較的希薄であったが、奈良時代の井戸や古墳時代の土器埋納遺構、古代のものと思われる溝やピットなどがある。建物の復原には至らなかったが、北側に位置する微高地域 1 の状況と考え合わせると、奈良時代の居住域の縁辺にあたることが想定される。また古墳時代の遺構には土器埋納遺構があったものの、断片的であり、土地利用の実態は不明である。

第 4 項 微高地域 (3)

概要 (図 30、図版 9) 微高地域 3 は事業地内西寄りの側道部分の調査区にあたり、微高地域 1 の北側に位置する。調査時は 19-1-7 トレンチとして、微高地域 4 とする範囲まで一度に調査したが、後述する溝 11・12 の範囲までを限り、微高地域 3 として報告する。この範囲では中世以降の作土層である第 2 層が厚く、下層を攪乱したと考えられ、第 3 a 層が遺存していない部分がほとんどである。遺構面の標高は 6.9m 程度で、おおむね平坦な地形ではあるが、上記のように第 2 層により削られた状況を反映している可能性が高い。確認した遺構には溝、土坑、ピットなどがあり、全体では 62 基を数える。第 2 層の攪拌を免れた部分では比較的密集して分布するものの、全体的に性格の明瞭な遺構は少ない。

調査区全体では古墳時代から中世にかけての土器片が出土したが、第 2 層出土のものが主体で、摩滅の著しい細片が多い。

溝 11・12 (図 30・31) 面積的に微高地域 3 の大部分を占める遺構で、調査範囲内で確認し得た部分では南北方向の溝(溝 11)に東西方向の溝(溝 12)が連結し、L 字状の平面形を示すものと考えられる。溝 11 が幅約 12m、溝 12 が幅約 5m を測り、深さはそれぞれ 30cm 程度である。埋土は第 2 層と一連のもので、床面に溝と方向を同じくする小溝が多数確認されたことから、溝と呼称するものの、中世段階以降の水田耕作域の一部であったと判断される。床面にはほかに大型の土坑やピットを確認したが、いずれも浅く、溝 11・12 によって上部が削平された遺構の痕跡と考えられる。出土遺物には古墳時代から中世にかけての土器片多数や瓦片などがあるが、そのほとんどは第 2 層出土遺物同様、摩滅が著しい細片である。うち図 36 に示し得たものは土師器皿(100・101)の 2 点で、ともに体部外面のナデは 1 段で、口縁端部は比較的丸く納めている。おおむね 13 世紀後葉から 14 世紀前葉にかけてのものと考えられる。なお、100 は底面 3 か所に径 2mm～3mm 程度の穿孔を施したものである。

第 2 層は調査地全体が耕地化されたのちの作土層と考えられ、これに連続する埋土をもつ溝 11・12 も耕作に関連するものと考えられる。上述のように底面に鋤溝と考えられる小溝が多数みられ、これらが溝の方向に並ぶことからみて、溝内部において溝の方向に沿って耕作が行われたものと考えられる。周囲に想定される水田と段差をもつ理由は明確ではなく、溝部分だけを限定的に水田とした時期があったと推測されるにとどまる。出土土器の示す年代は、調査地全体が耕作域と化した 13 世紀中葉に後続する時期であり、耕地化の比較的初期の段階の痕跡と考えられる。

土坑 13～17 (図 32・33、図版 10) いずれも溝 1・2 の下面で検出した土坑で、先述のように上部が溝 1・2 による削平を受けていると思われることから、先行する遺構と判断されるが、その位置や方向からみて溝 1・2 と関連する遺構である可能性は高い。

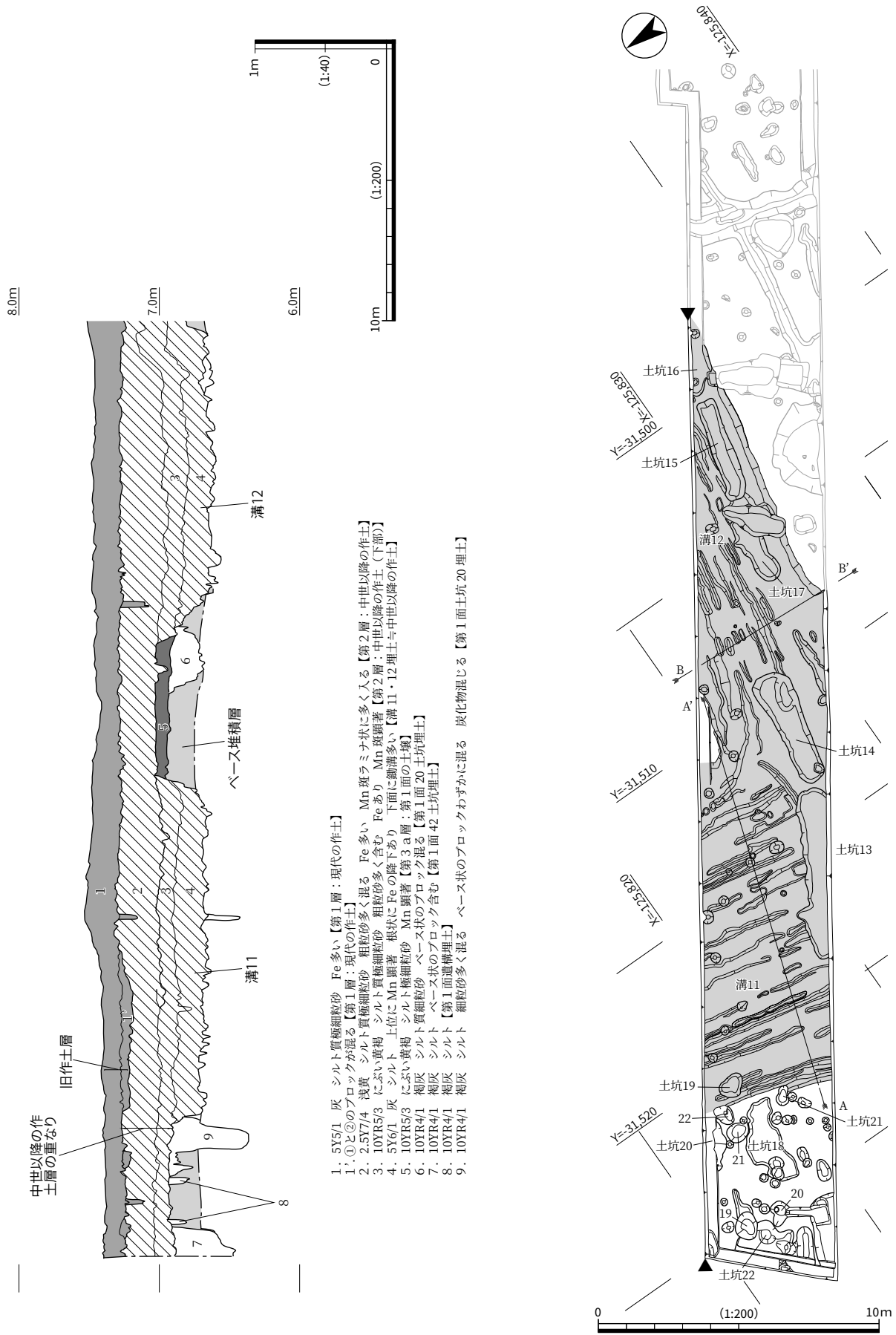


図30 微高地域3 全体平・断面図

土坑13は長さ6.1m、幅は調査区外へ広がるので不明であるが、1 m程度と想定され、大型の土坑といえる。深さは17cm程度が残存していた。褐灰色シルトを埋土にもち、遺物は須恵器や土師器の細片が少量出土したにとどまる。土坑14は土坑13の東に並ぶもので、長さ4.2m、幅は広いところで1.4m程度を測る隅丸形状を呈する。残存する深さは10cm程度であり、底は凹凸が著しい。ベース層のブロックを多く含む土で埋没しており、須恵器、土師器の細片が少量出土したにとどまる。土坑15は溝12底部の南壁に接して検出したもので、長さ3.7m、幅0.8m程度の隅丸方形で、深さ17cm程度を測る。ベース層の小ブロックを埋土に多く含み、弥生土器、須恵器、瓦器、土師器(土師皿)などの細片が出土した。土坑16は土坑15の東に並ぶ土坑で、土坑17を含み3基の土坑は一連のものであろう。溝12ならびに調査時に掘削した排水側溝により、その多くが失われたとともに、調査区外へも続くことから全容は不明である。残存部分の深さは24cm程度を測る。土師器と弥生土器の細片が出土している。土坑17は土坑15に接し、その東に位置する。東寄りの部分を新しい時期の攪乱により破壊されているもの、長さ2.5m、幅0.9m程度を測る。残存部分の深さは10cm程度で、底の凹凸は著しい。土師皿細片が1点出土したのみである。これら一連のものと考えられる土坑からはいずれも時期を明確に示す遺物の出土はなく、溝11・12に先行しつつも比較的近い時期のものとして想定されるにとどまる。溝11・12を耕地の部分的な利用痕跡であるとする、これらの土坑も耕作に関わる土坑と想定されるが、具体的な性格は不明である。

土坑 18・19 (図 34、図版 10) 土坑18は溝11の西側の肩付近くに位置する土坑で、長さ3.0m、幅1.3 m程度の不整形な形状を示す。床面の凹凸は著しく、深さは10cm程度と浅い。炭化物粒を多く含むシルトを埋土とし、奈良時代の須恵器坏片や製塩土器片、土師器片などが出土した。図36-105は須恵器の坏Aで、内外面の摩滅が著しい。奈良時代に帰属する遺構の可能性はある。19土坑は溝11の底部、西側の壁付近で確認したもので、長軸1.0m、短軸0.7m程度の不整な円形を呈する。深さは16cm程度であるが、溝11により上部は削られているものとする。炭化物粒、ベース層シルトのブロックを含む埋土をもち、出土状況を図34に示したように土器片を多く含んでいた。奈良時代の須恵器、土師器片が主体で、うち須恵器坏、土師器甕などを図36-102～104に示した。102は須恵器の坏で、ややとがり気味の底をもち、口径は11cm程度の小型のものである。103・104は土師器の甕で、103は直線的に上外方へ延び、104は外へ大きく広がるといように口縁の形状は異なるが、いずれも口縁端部内面をわずかに肥厚させる点は共通する。ともに残存部分は口縁部分に限られており、全体像は不明である。土坑 19は微高地域 3 の遺構の中では比較的まとまった遺物の出土をみた遺構ではあるが、土器などの廃棄土坑の可能性が高い。

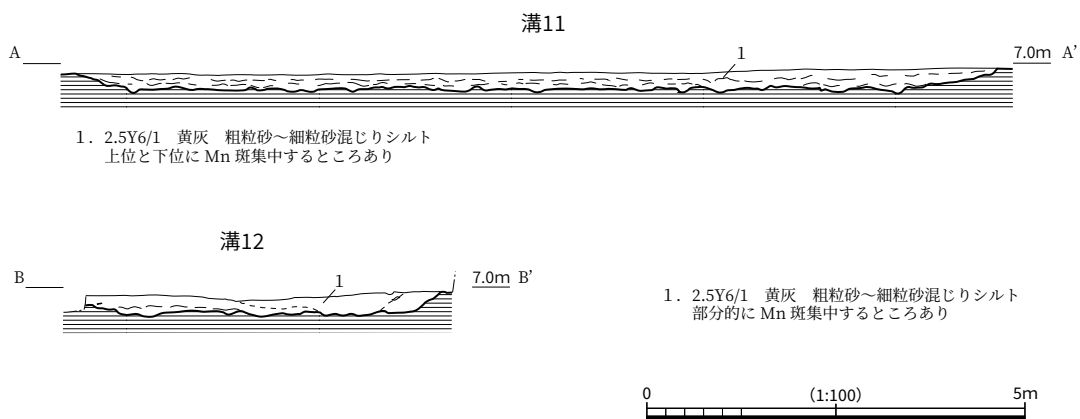


図 31 溝 11・12 断面図

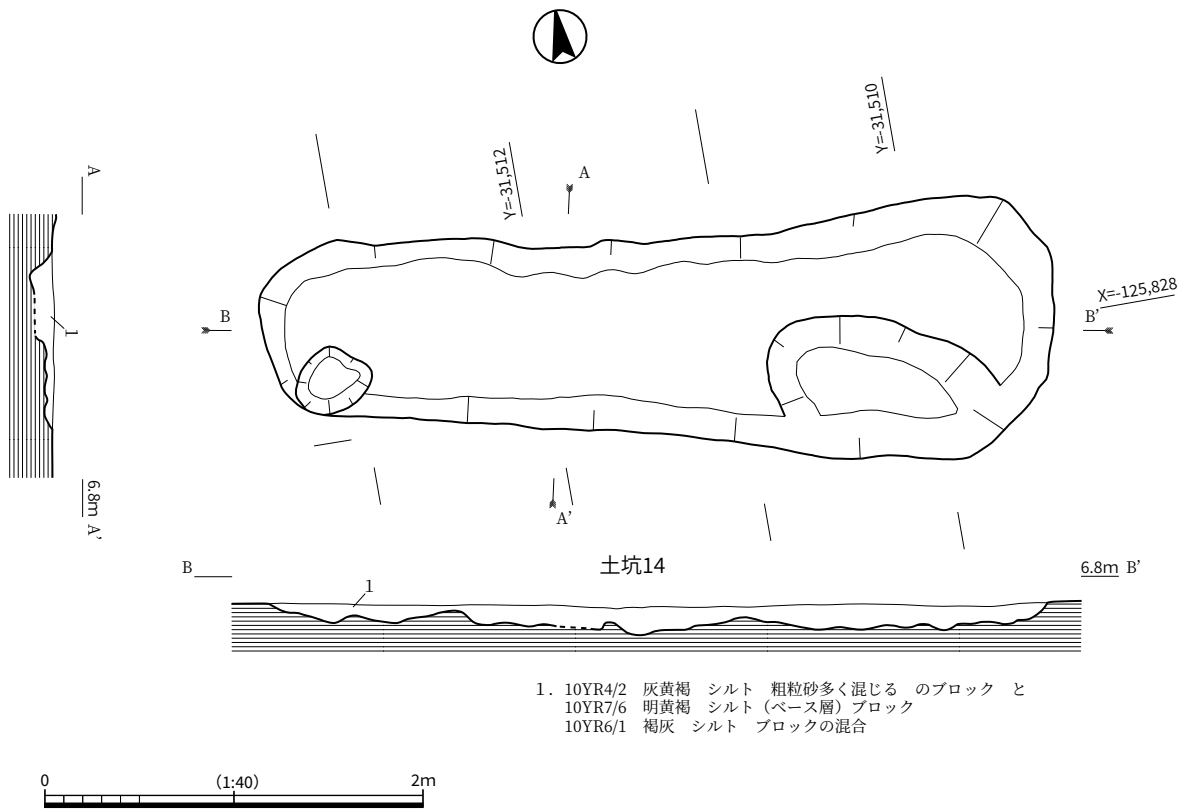
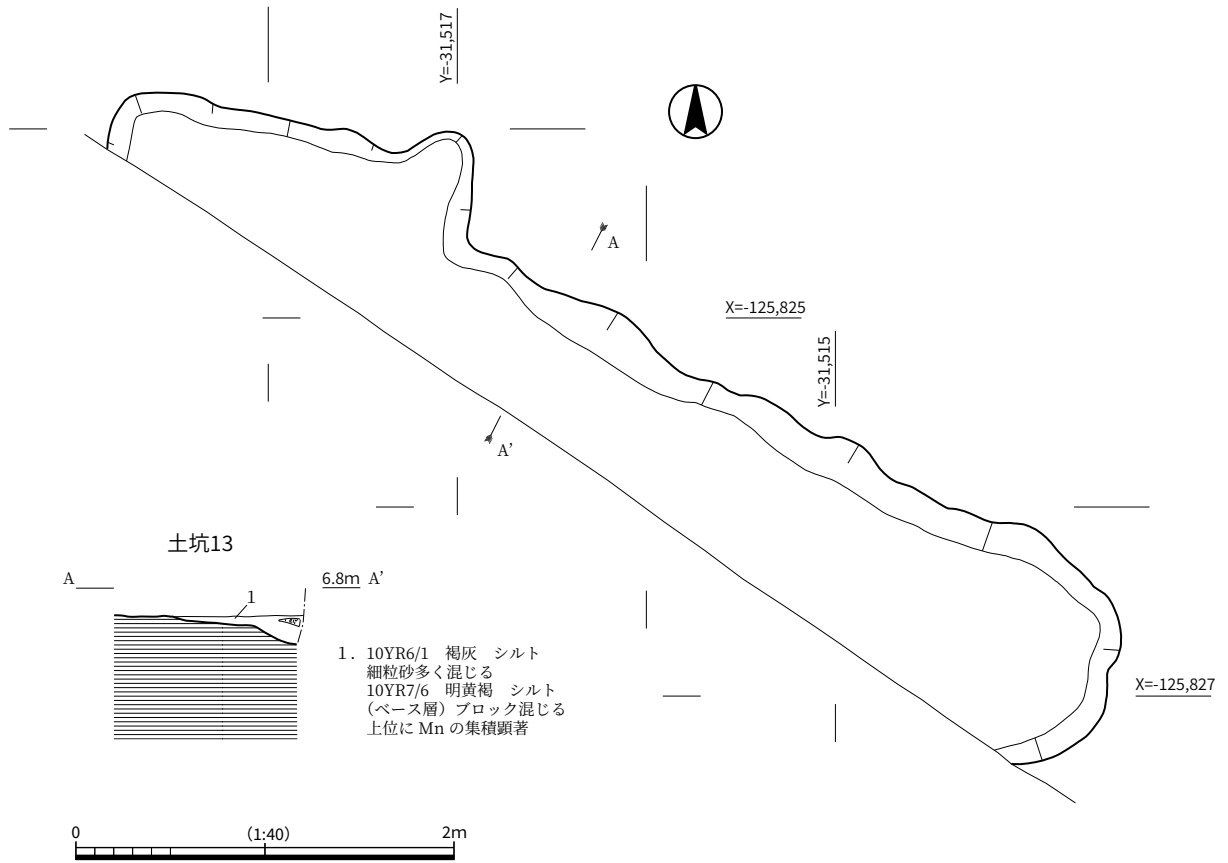


図 32 土坑 13・14 平・断面図

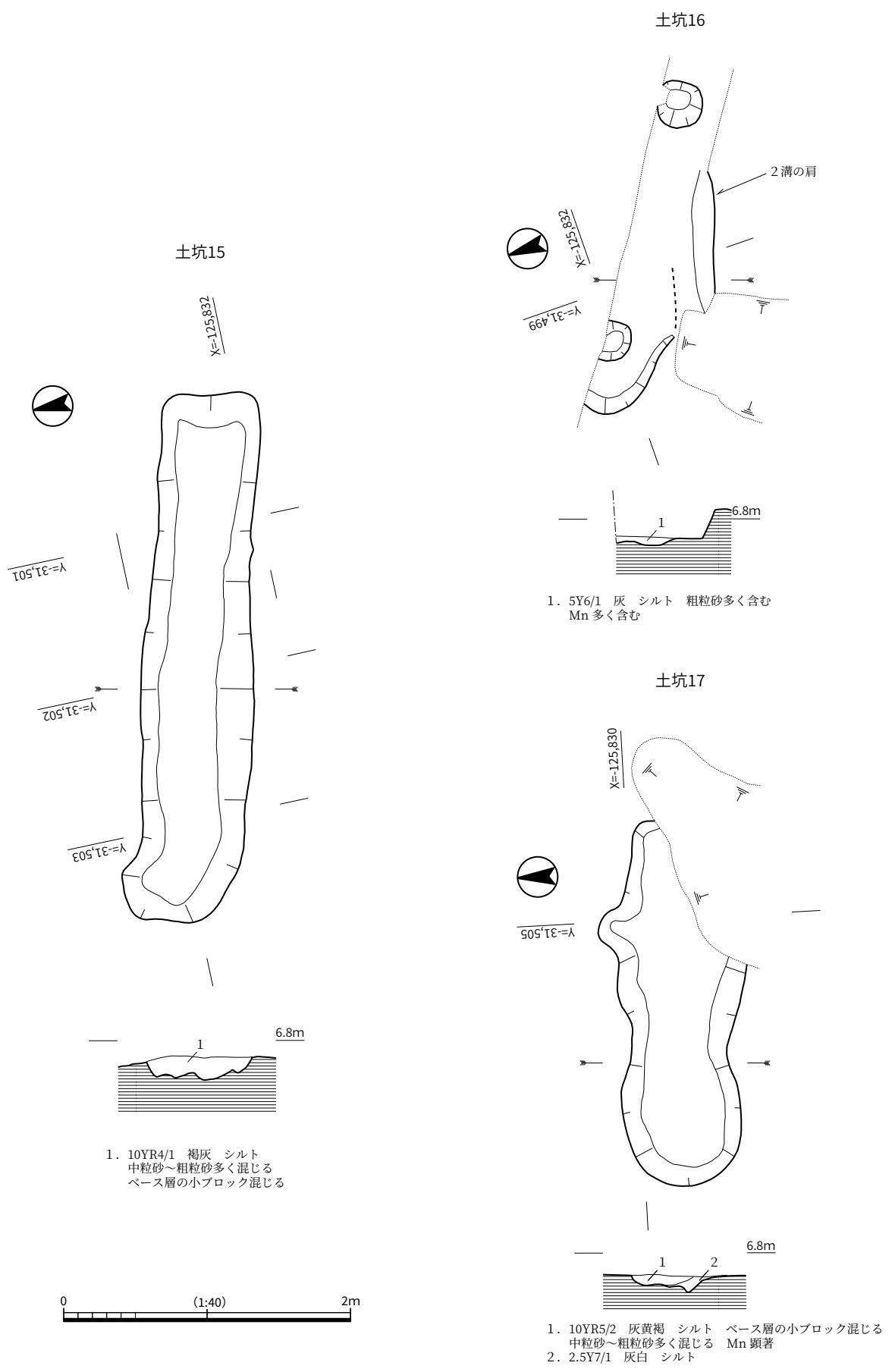


図 33 土坑 15～17 平・断面図

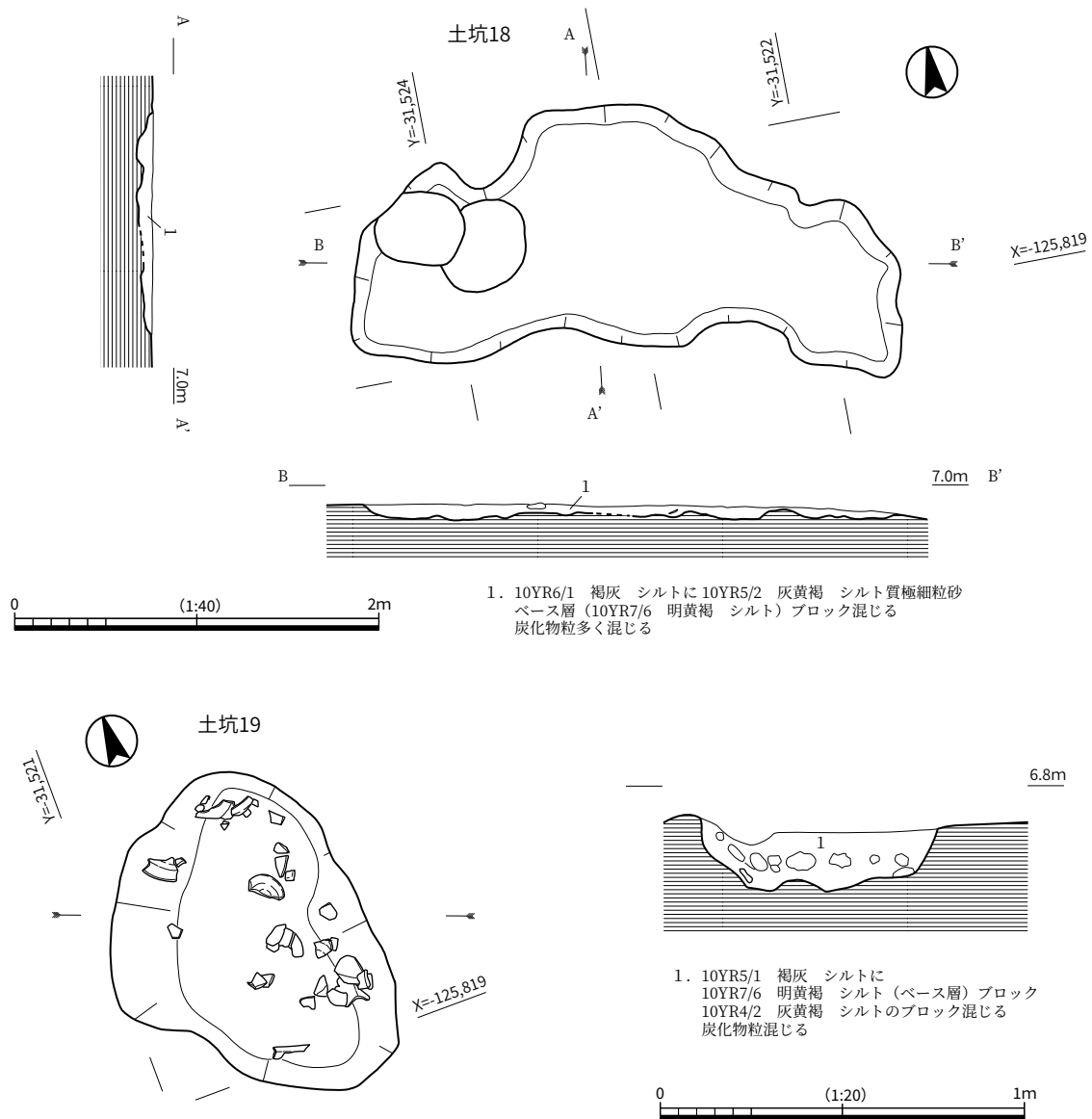
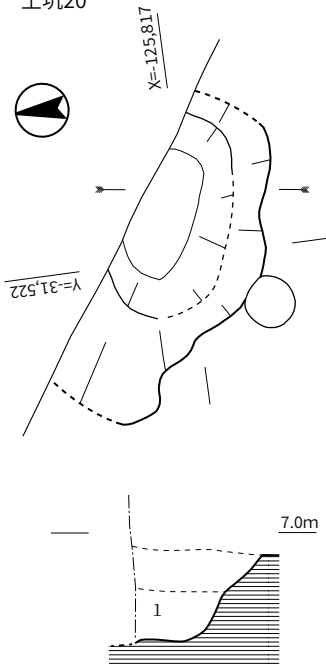


図 34 土坑 18・19 平・断面図

土坑 20 (図 35、図版 10) 溝11西側の肩付近で検出した土坑で、側溝掘削の為、南肩の一部と底部付近を確認したにとどまる。およそ長径1.8m、短径0.8m程度の不整な楕円形と想定され、検出部分での深さは60cm程度となる。ベース層のブロックをまじえつつ、褐色系の土壌を埋土にもつ。内部から須恵器や土師器の細片が出土しており、奈良時代の遺構かと推測する。

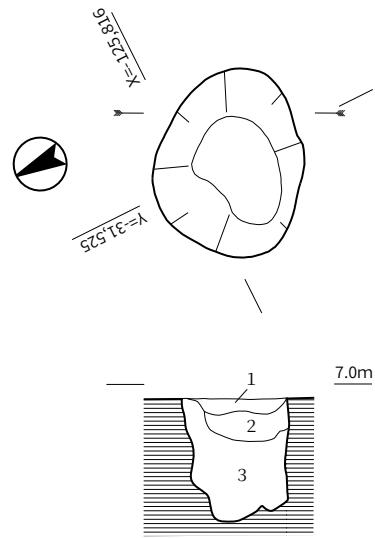
ピット 19～22 (図 35) 溝11の西側の平坦部に分布する遺構は基盤層が地震による変形を受けている可能性があり、輪郭の不明瞭なものが多いが、そのうち、柱穴となる可能性のあるものを抽出し、ピット19～22として報告する。しかしいずれも建物を構成するかどうかは不明である。ピット19は微高地域3の西端付近に位置し、不定形な土坑などと切り合うもので、長径1.0m、短径0.8mの不整な楕円形を呈し、深さ70cm程度を測る。炭化物粒とベース層の小ブロックを含む埋土をもち、106に示した須恵器坏もしくは皿のほか、おおむね古代のものと考えられる須恵器、土師器の細片が出土した。ピット20はピット19の南1.3mに位置し、長軸1.0m、短軸0.7m程度の不整円形を呈する。深さは約40cmで、炭化物粒とベース層の小ブロックを含む埋土をもち、須恵器、土師器の細片がごく少量出土したにとどまる。ピット21はピット20の東3.2mに位置し、長径0.8m、短径0.65mの楕円形を呈する。深さは

土坑20

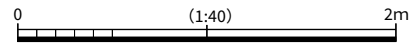


1. 10YR4/1 褐灰 シルト 細粒砂多く混じる
Mn 含む
10YR7/6 明黄褐 シルト (ベース層)
ブロックわずかに混じる 炭化物粒混じる

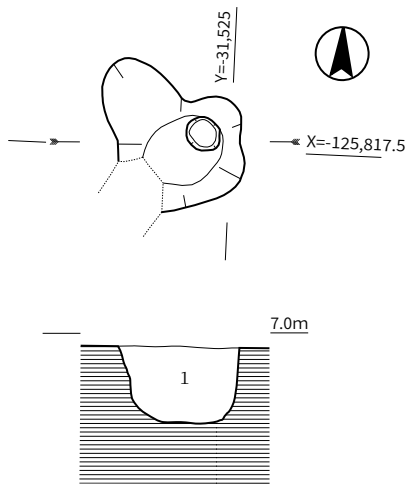
ピット19



1. 10YR6/1 褐灰 シルト 中粒砂多く混じる
ベース層の小ブロック混じる Mn 斑顕著
2. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト (ベース層) の小ブロックと
10YR4/2 灰黄褐 シルトブロックの混合
3. 10YR4/1 褐灰 シルト 中～粗粒砂多く混じる
ベース層の小ブロック含む 炭化物粒含む

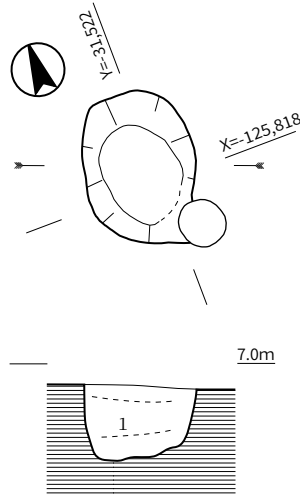


ピット20



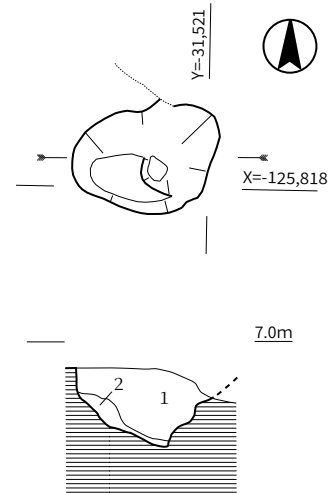
1. 10YR6/1 褐灰 シルト に
10YR4/2 灰黄褐 粗粒砂混じりシルト、
10YR7/6 明黄褐 シルト (ベース層) の
小ブロック多く混じる
炭化物粒多く混じる 上層からの Fe の降下が著しい

ピット21



1. 10YR5/1 褐灰 シルトに
10YR7/6 明黄褐 シルト (ベース層) ブロック
10YR4/2 灰黄褐 シルトのブロック混じる
炭化物粒混じる

ピット22



1. ベース層シルトブロックを主体に
10YR4/2 灰黄褐 シルト 細粒砂多く含む
Mn 含む、のブロック混じる
2. 10YR6/1 褐灰 シルトに1が混じる

図 35 土坑 20 ピット 19～22 平・断面図

40cm程度で、ピット19・20と似た埋土をもつ。須恵器、土師器の細片がごく少量出土したにとどまる。ピット22はピット21の東に接するもので、東側上部を溝11に削られている。長径0.8m、短径0.6mの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。ベース層の小ブロックを多く含む埋土で、須恵器、土師器の細片がごく少量出土した。

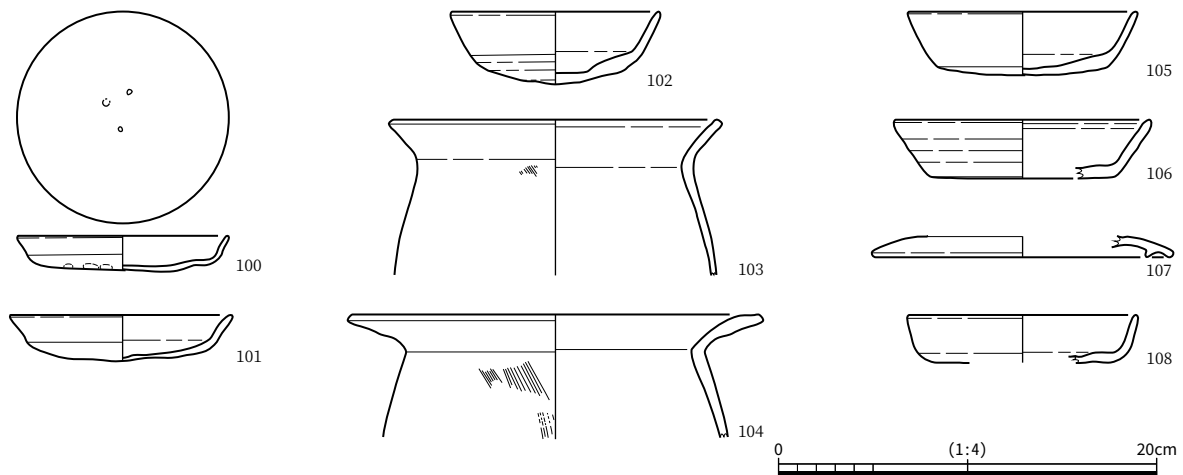


図36 遺構 出土遺物

そのほか、個別には図示しないものの、溝11西側の範囲で、土坑、ピットなどを検出した。うち、土坑21からは108の須恵器杯、土坑22からは107の須恵器蓋が出土している。いずれも奈良時代のものと考えられる。

包含層出土遺物 (図37) 微高地域3の遺物包含層に相当する第2層～第3a層からは古墳時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが出土しているが、ほぼ細片である。図示し得るものは須恵器円面硯(109)などの古代に属する土器のほか、中世の土師皿(111)、砥石(113)、サヌカイト剥片(114)を図示した。109は極細片であり最大径12cmとなる復元もいささかあいまいなものではあるが、方形の透かしをもつものと考えられ、今回の調査では形の把握できるものでは唯一のものとなる。113は砂岩製と考えられる砥石の破片で、遺存する2面に使用痕が認められる。層全体では弥生時代から中世の遺物を含むものの、主体は奈良時代と中世段階のものとなる。中でも極細片ながら円面硯がみられることは、微高地域1で出土した鉸具金具とともに、奈良時代の公的施設の存在に関わる資料として評価されるものであろう。

小結 微高地域3は微高地の西端付近にあたり、中世以降の耕作で地形の改変が大きい地域とすることができ、中世以前のものと考えられる土坑、ピットなどを確認した。調査区が狭く、遺構の残存範囲も限られており、建物などの復元には至らなかったが、奈良時代の居住域の縁辺にあたるものと想定される。一方、中世段階の明確な遺構は不明ではあるものの、比較的大型の溝状を呈する耕作痕跡は、調査範囲が全面的に耕地化した比較的初期のものと考えられ、耕地化の具体的な段階と方法を考えるうえでの有益な資料になるものと考えられる。

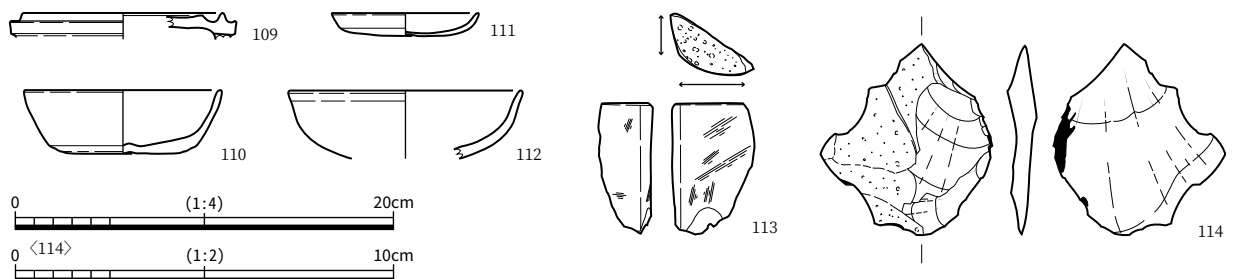


図37 包含層 出土遺物

第5項 微高地域（4）

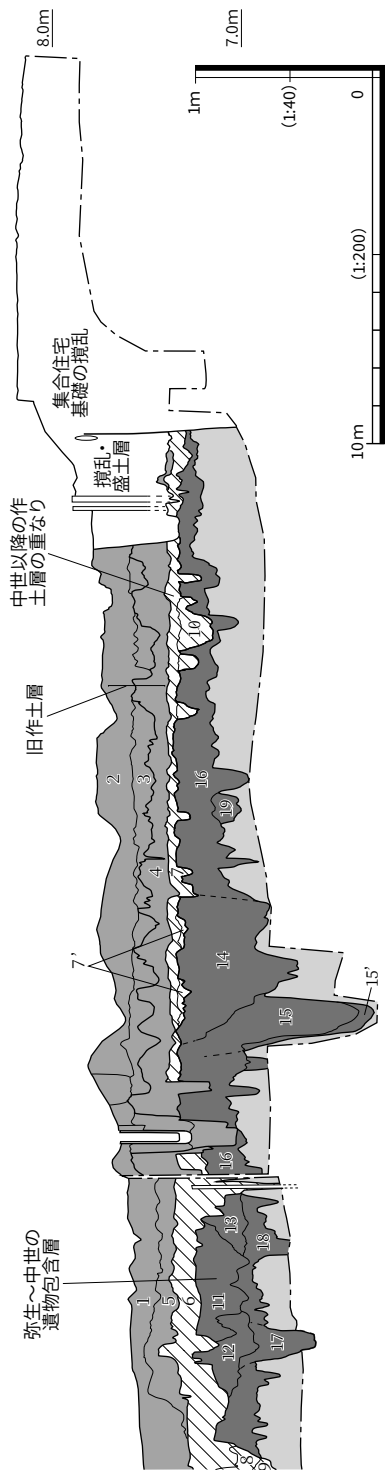
概要（図38、図版11） 微高地域4は事業地内西寄りの側道部分の調査区にあたり、微高地域5の北側に位置する。調査時は19-1-7トレンチとして、微高地域3の範囲と併せて調査したが、微高地域3の溝12より東側の範囲を微高地域4として報告する。この範囲では基盤層が東に向け相対的に高くなり、遺構面の標高は溝12付近で6.9mほどであるのに対して、東端付近では7.2mにまで達し、調査範囲全体でも最も高い地形となる。遺構面に伴う土壌である第3a層もこれに応じて東寄りで高くなるが、さらにその上部を攪拌する第2層は段差を有しつつ土地の平坦化を進めたようで、結果的に微高地域4の中央から西側では第3a層が比較的厚く残されたところもみられた。逆に東寄りの範囲では現代の作土による削平により第2層の上部が大きく削られたようで、第2層が相対的に薄い。なお、微高地域4の西端10m幅程度は集合住宅基礎による攪乱が深く、調査の対象からは除外した。微高地域4で確認した遺構には井戸、掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどがあり、全体では94基を数え、今回の調査全体でも遺構の密集度は高い。

各遺構出土遺物に加え、第2層ならびに第3a層からも遺物が多く出土した。各層とも年代的には弥生時代から中世にかけてのものが混在する状況ながら、第2層のものにより摩滅の著しい細片が多い。下位の土壌を攪拌しながら上位の層が形成されていった過程をよく示している。

井戸7（図39、図版13） 溝12に接する部分に位置する素掘りの井戸で、およそ北側の半分程度が調査範囲内で検出された。溝13と重なる関係になるが、切り合い関係を明確にはできなかった。空中写真測量の段階では掘削深度に伴う安全面を考慮し、底までの掘り下げは行わず、下部については全体の調査終了後、断ち割りをし井戸底、ならびに土層断面を確認した。復元的にみて、およそ直径3m程度の円形の平面形をもつと考えられる。断面形状はやや急なすり鉢状を呈し、底に一部平坦面をもつようである。埋土の最下部にはベース層のブロック土が多く含まれており、掘削時の発生土が比較的多く残されていたようである。大きな壁面の崩落は認められない。上位は水成層と思われるシルトで埋没しており、機能時には帯水状況であったと考えられる。さらに上位には礫が多く含まれており、埋め戻しが行われた可能性が高い。なお、壁面に現れた基盤層は最上位が黄橙色のシルトであるが、その下部はグライ化した砂層に変化していく。取水層はこの基盤層下部の砂層と考えられる。

出土遺物は図39に示したもののほか、5世紀代の須恵器、奈良時代の須恵器、瓦、中世の瓦質土器などの細片が出土した。115は須恵器捏鉢の口縁部、116は瓦質三足釜の足で、いずれも中世段階のものと考えられる。117は須恵器小型甕の口縁部で、端部外面に突帯状の段を有する。古墳時代のものであろうか。井戸7の年代については古い時期の遺物を混入するものの、中世段階と考えられる。素掘りの井戸は微高地域5の井戸8があるが、井戸枠をもつものに比べ少数である。

建物1（図40、図版12） 微高地域4中央北寄りに位置する掘立柱建物である。調査区外北側に続くと考えられ、部分的な検出にとどまる。遺構の集中地域でありながらほかの遺構との重複はないが、東側に2mの距離を置いて奈良時代の南北溝である溝14が位置する。柱穴6・7の一部を側溝の掘削により削ったが、調査範囲内では東西方向に3間、南北方向に1間分の総柱の柱配置を確認した。柱間寸法は東西方向、南北方向とも1.5m前後でほぼ同じである。建物規模は芯々距離で、東西4.3mを測り、方位は座標北より10.4°東に振れているものの、ほぼ東西南北方向をとる。柱穴はおおむね一辺50cm程度の隅丸方形を呈するものであり、検出面からの深さは20cm～50cm程度を測る。柱穴はおおむねベース層シルトのブロックを含む土で埋め戻されていたようで、一部に柱痕の残るものがみられた。また柱



6.0m

1. 5Y5/1 灰 シルト質極細粒砂 Fe 多い【第1層：現代の作土】
2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質中～細粒砂【第1層：現代の細作土】
3. 10YR7/4 にぶい黄褐 中～粗粒砂【第1層：現代の盛土】
4. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 Fe 多い【第1層：現代の作土】
5. 5Y6/1 灰 シルト質極細粒砂 Fe あり【第2層：中世以降の作土】
6. 2.5Y7/4 浅黄 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く混る Fe 多い Mn 顕著
7. 2.5Y7/1 灰白 シルト質極細粒砂 Mn 多い【第2層：中世以降の作土】
- 7' 2.5Y7/2 灰黄 シルト質極細粒砂【第2層：中世以降の作土】
8. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く混る Fe あり Mn 顕著【第2層：中世以降の作土】
9. 5Y6/1 灰 シルト 上位に Mn 斑顕著 根状に Fe の降下あり 下面に御溝【第1面：溝12 埋土】
10. 2.5Y7/3 浅黄 シルト質極細粒砂 Fe・Mn あり【第2層下面の耕作溝】
11. 10YR6/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂 上位に Mn 顕著【第3 a層】
12. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 Mn 顕著【第3 a層】
13. 10YR6/4 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 Mn 顕著【第3 a層】
14. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細粒砂 Mn 多い【溝14 埋土～第3 a層】
15. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細粒砂 Mn 多い【方形周溝墓1 埋土～第3 a層】
- 15'. ベース層シロツク と 10YR6/1 褐灰 シロツクの混合【方形周溝墓1 埋土 弥生土器出土層位】
16. 10YR6/3 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 Mn 多い【第3 a層】
17. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂 Mn 顕著【方形周溝墓1 埋土～第3 a層】
18. 10YR6/4 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 Mn 顕著【溝13 埋土～第3 a層】
19. 10YR6/3 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂 と ベース層シロツクの混合

ラミナ状に入る【第2層：中世以降の作土】

Mn 顕著【第2層：中世以降の作土】

粗粒砂多く混る Fe あり Mn 斑顕著【第1面：溝12 埋土】

根状に Fe の降下あり 下面に御溝【第1面：溝12 埋土】

上位に Mn 斑顕著 根状に Fe の降下あり 下面に御溝【第1面：溝12 埋土】

粗粒砂多く混る Fe あり Mn 斑顕著【第2層下面の耕作溝】

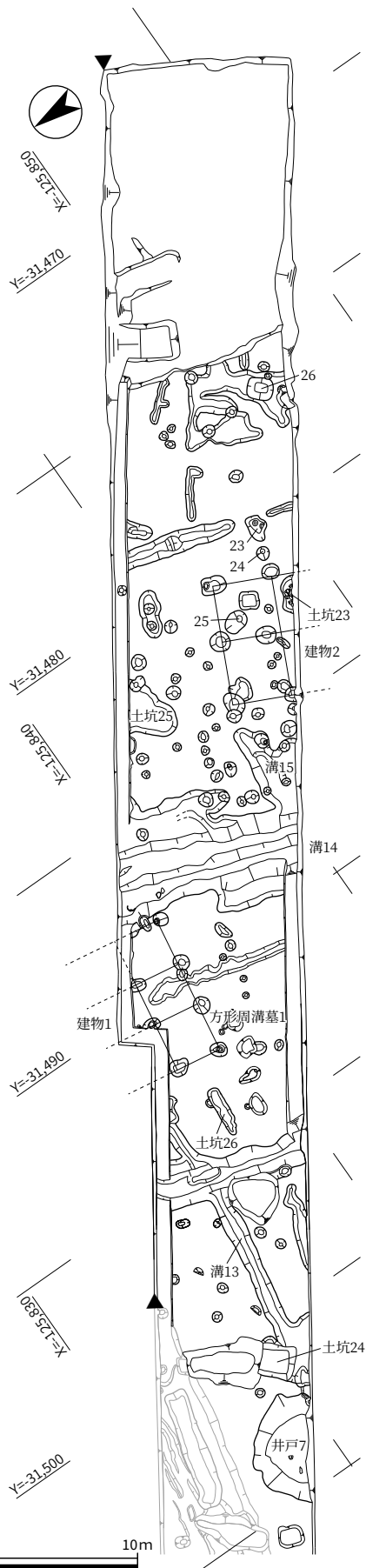
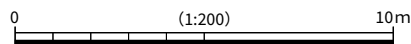


図 38 微高地域 4 全体平・断面図

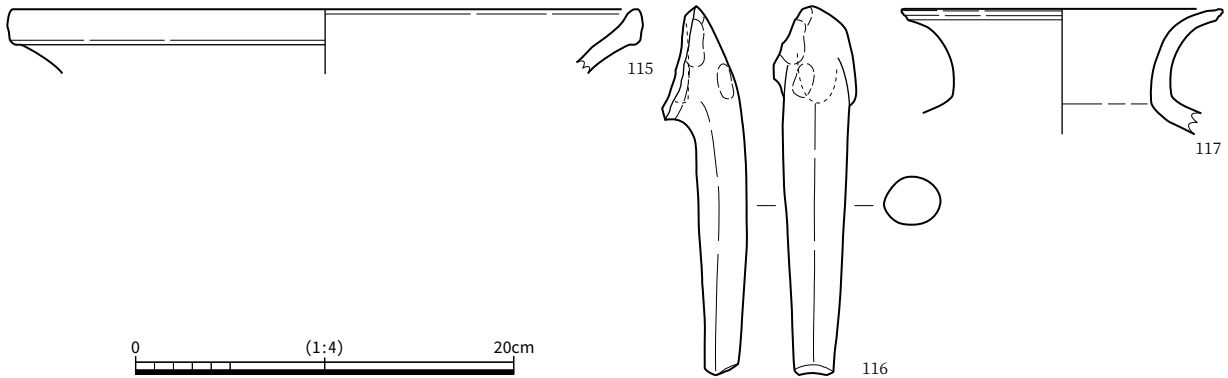
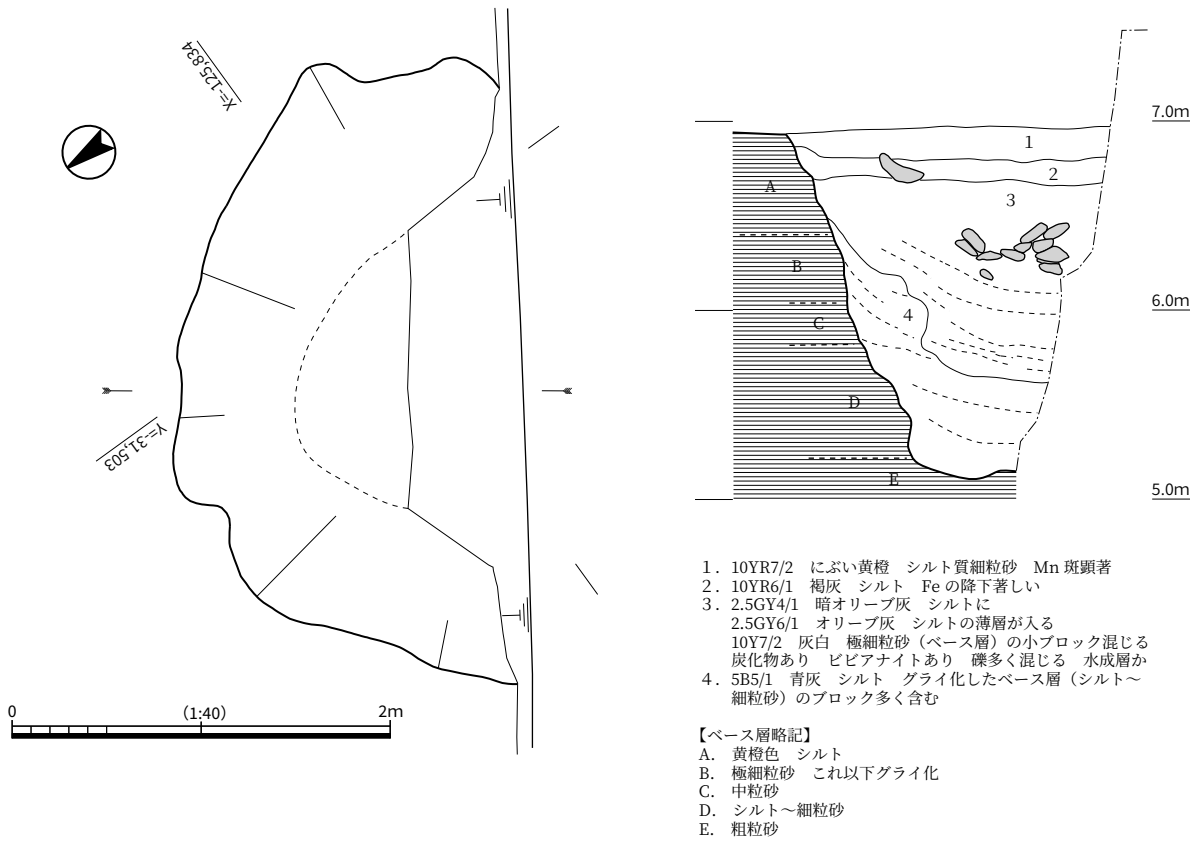


図 39 井戸 7 平・断面図・出土遺物

の抜き取りは認められず、建て替えなど行われなかったものと考えられる。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなる。図示し得るものはないが、古墳時代の須恵器や土師器が10点ほどあり、奈良時代以降の土器を含まないようである。建物方位はほぼ東西南北に乗るものの、後述する弥生時代の方形周溝墓とも方位を近くしていることから、おおむね地形に即した建物主軸をとるものと判断できる。年代を明確にすることは難しいものの、出土遺物の内容から判断する限りでは、古墳時代にさかのぼる可能性がある。

建物 2 (図 41) 微高地域 4 中央南寄りに位置する掘立柱建物である。調査区外南側に続くと考えられ、部分的な検出にとどまる。遺構の集中地域にあり、ほかの遺構と切り合い関係をもつとともに、土坑 23 やピット 25 とも重複する位置にある。調査範囲内では東西方向に 2 間、南北方向に 1 間分の柱配置を確認し、柱通りからはややずれるが、柱穴 5 を含めて建物配置を想定した。柱間寸法は東西方向、

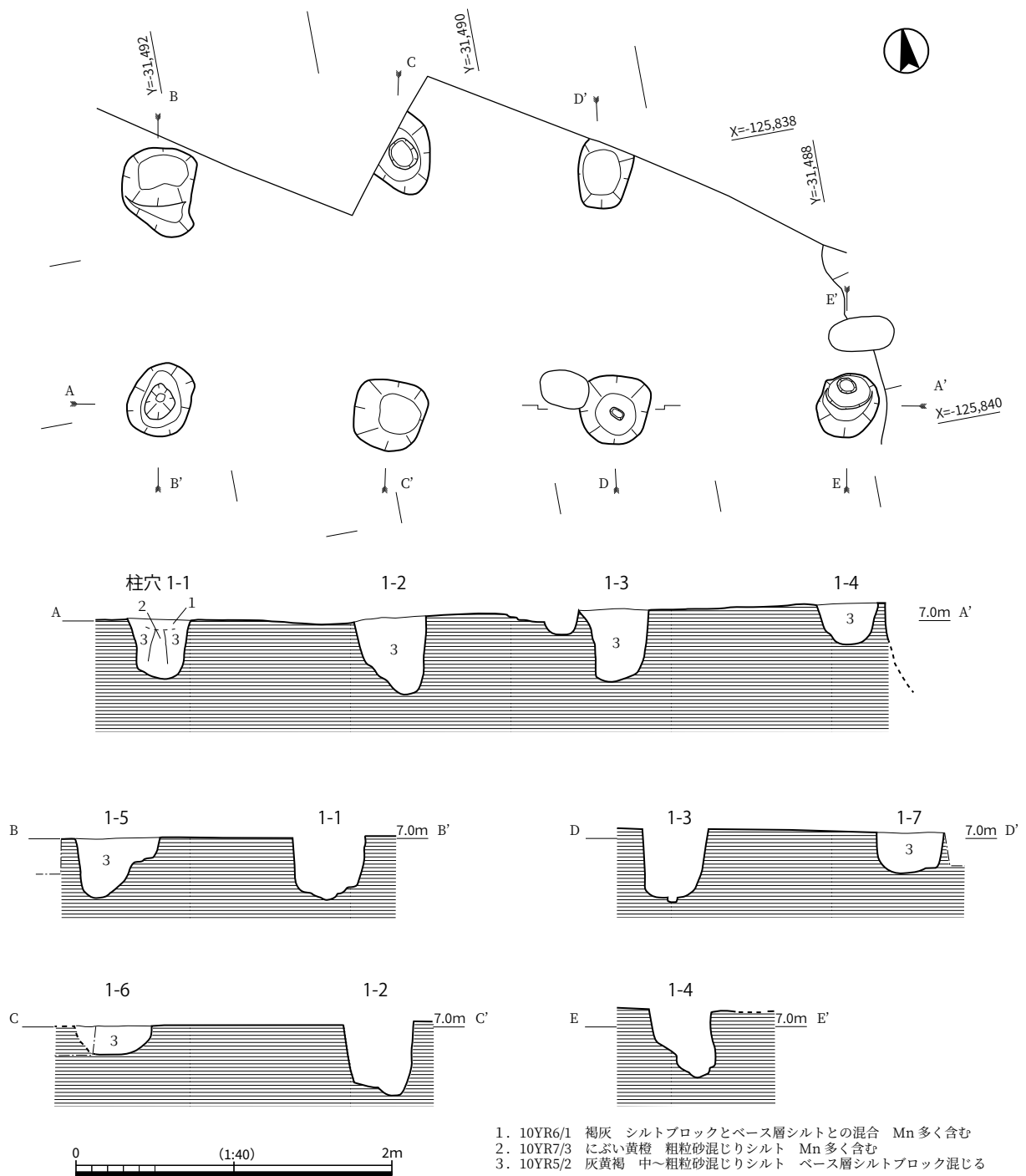


図40 建物1 平・断面図

南北方向とも1.9m前後でほぼ同じである。建物規模は芯々距離で、東西3.7mを測り、方位は座標北より22.6°東に振れている。柱穴はおおむね直径0.5 m程度の円形ないしは隅丸方形を呈するものであり、検出面からの深さは25cm~30cm程度を測る。柱穴はおおむねベース層シルトのブロックを含む土で埋め戻されていたようで、柱穴6では埋土の断面で柱痕の可能性のある土が認められた。また柱の抜き取りは認められず、建て替えなどは行われなかったものと考えられる。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなる。図示したものは図45-118に示した土師器甕のみで、ほかに須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器の細片がある。古墳時代から中世にかけてのものが混在しており、建物の時期を明確にはしづらいものの中世段階

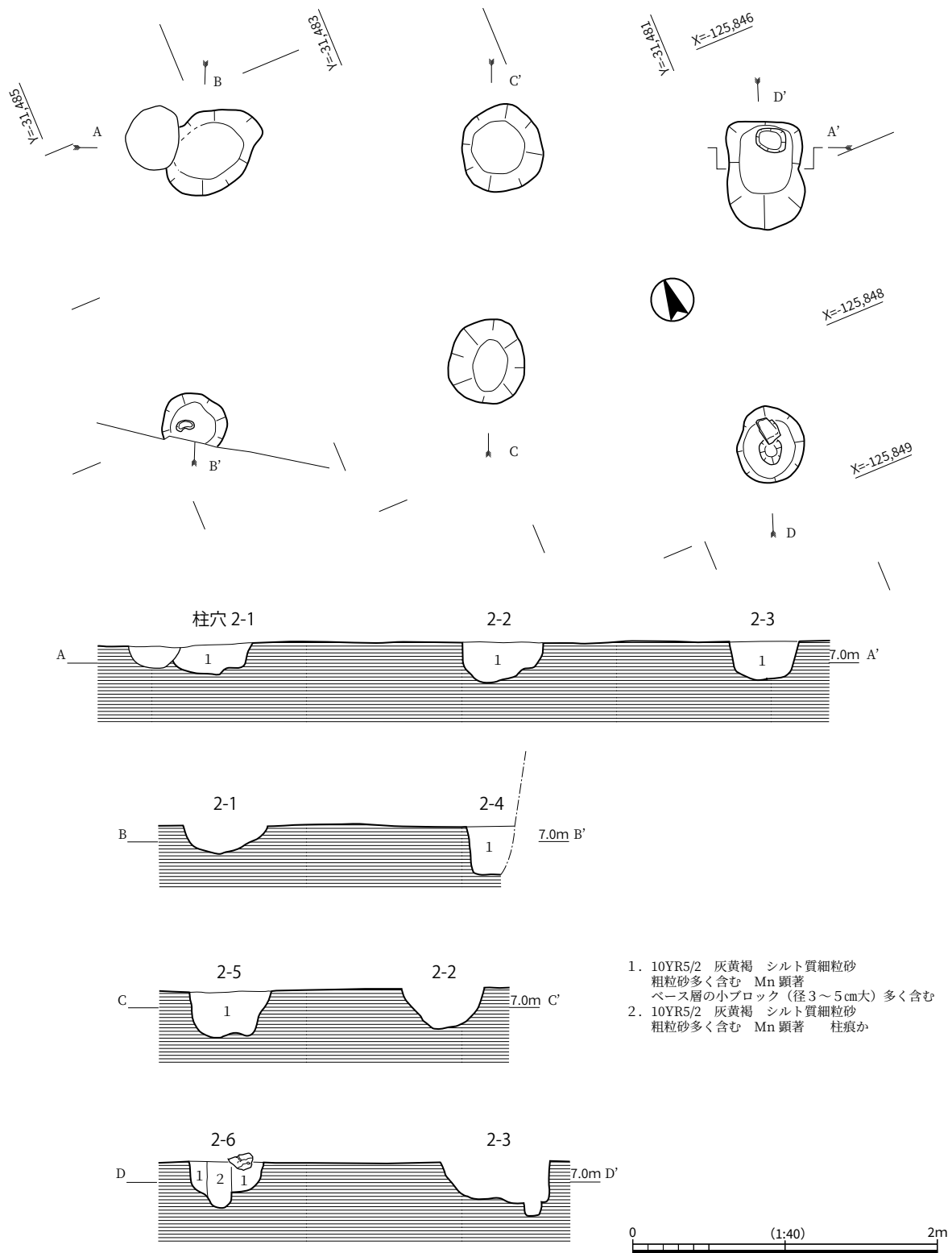


図 41 建物 2 平・断面図

の建物と考えておきたい。

土坑 23 (図 42) 建物 2 と重複する位置で一部を検出した浅い土坑で、調査範囲の南側に続く。検出した部分は長さ1.15m、幅0.4m程度で、最も深いところで深さは15cm程度を測る。埋土に礫を多く含んでおり、その間隙から土器片が出土している。須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器の細片で、遺構の性格は不明ながら、年代は中世段階と思われる。

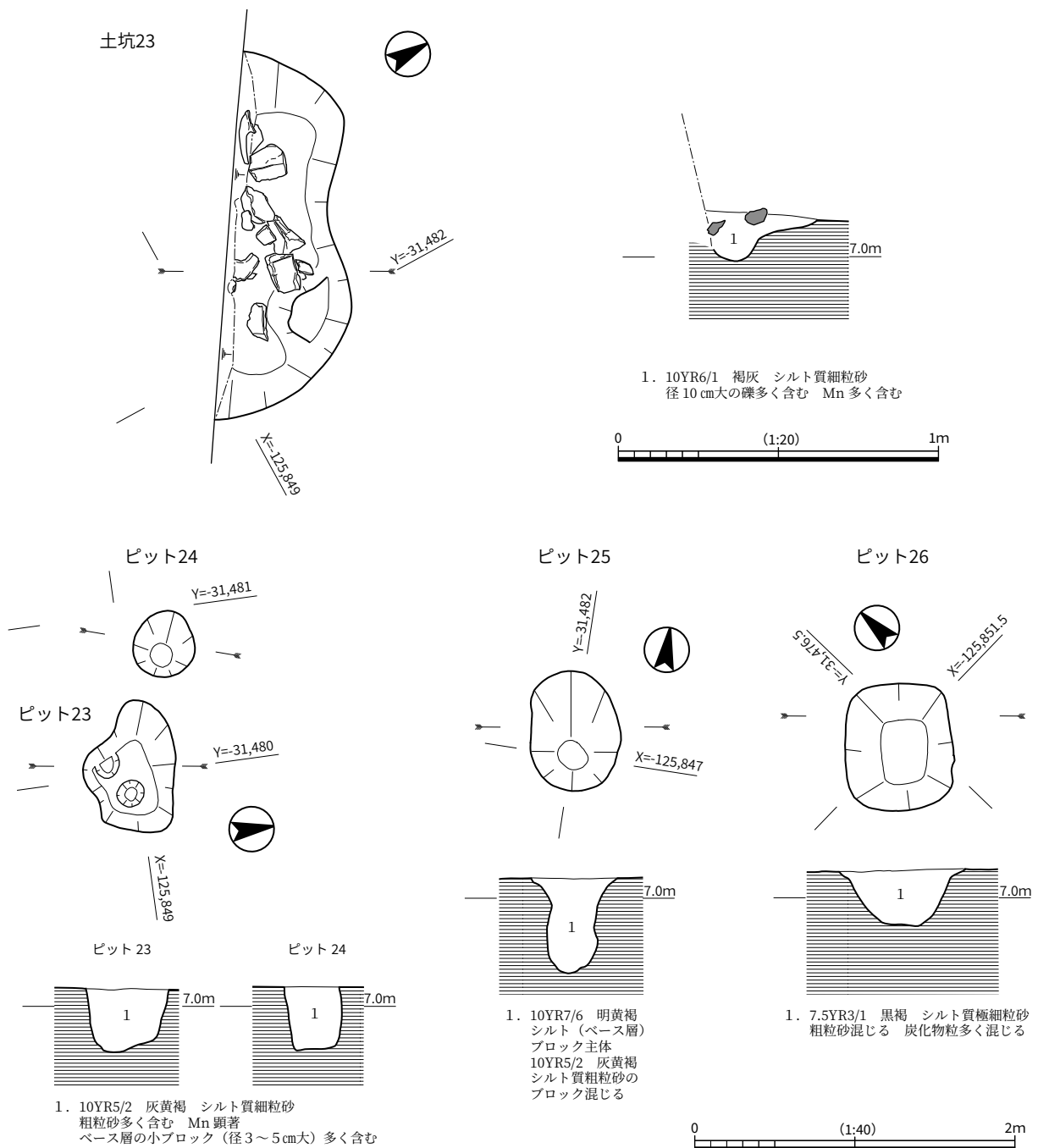
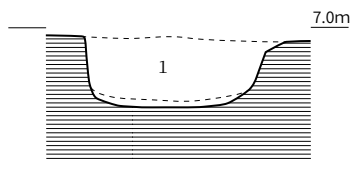
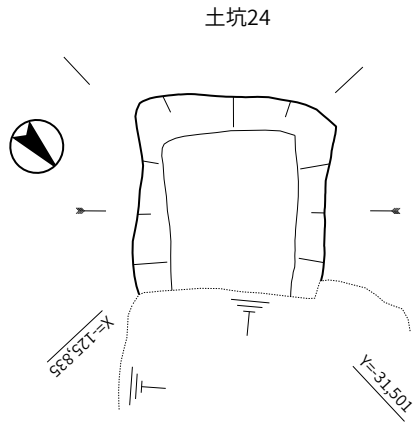
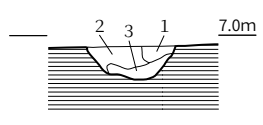
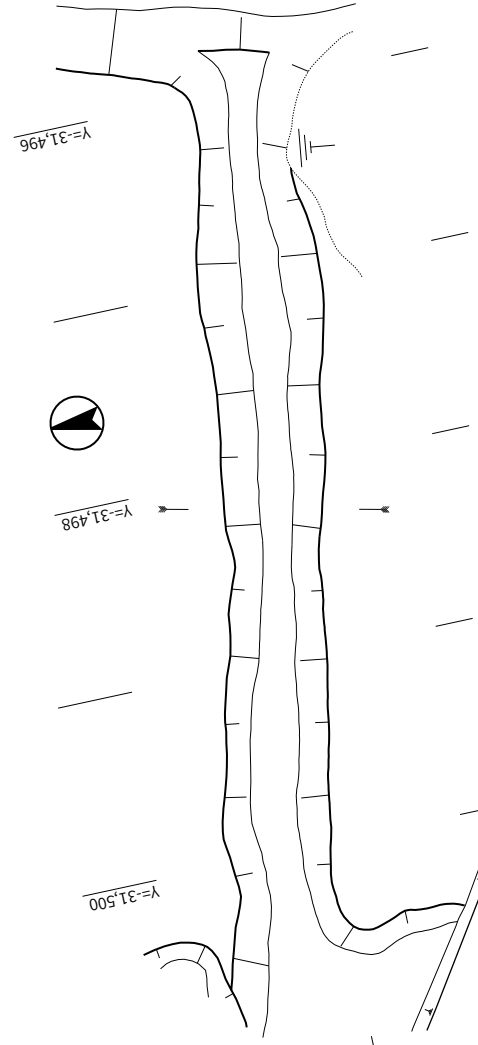
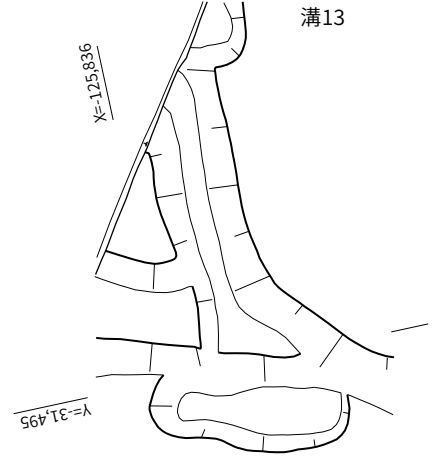


図 42 土坑 23 ピット 23～26 平・断面図

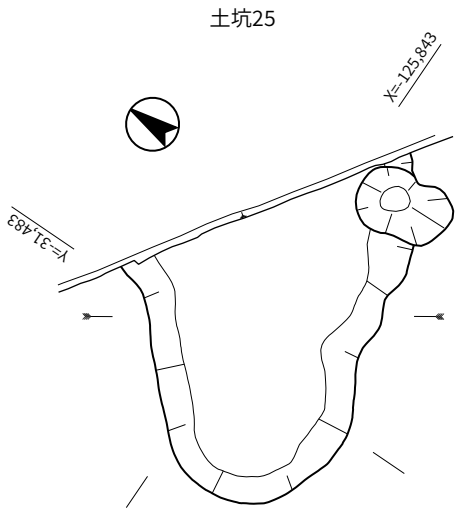
ピット 23～26 (図 42) 建物 2 の周辺に錯綜する大小のピットの内、比較的深さをもつものを取り上げる。ピット 23、24 は建物 2 の東側に並ぶもので、ピット 23 が長径 0.8m、短径 0.5m 程度の不整形、ピット 24 が直径 0.4m 程度の円形で、深さはともに 40cm 程度である。ベース層シルトの小ブロックを多く含む埋土をもつ。ピット 23 からは土師器の細片がわずかに出土したが、ピット 24 からは遺物の出土はない。ピット 25 は建物 2 に重複するもので、長径 0.75m、短径 0.55m の楕円形で、深さは 60cm を測る。ベース層シルトのブロックを主体とする埋土をもち、土師器細片がわずかに出土した。製塩土器の可能性のある薄片もみられた。ピット 26 は建物 2 から東 5m 程度に位置するもので、長軸 0.8m、短軸 0.7m ほどの隅丸方形を呈する、ややすり鉢状の断面形状をもち、深さは 30cm 程度である。炭化物粒を多く含む黒褐色土で充填されており、古墳時代(5世紀代)のものと思われる須恵器細片や製塩土器片とともに



1. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質細粒砂
Mn 多く含む 最下位に炭化物粒多く含む



1. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細粒砂
2. 2.5Y6/1 黄灰 シルト
3. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細粒砂主体
2とベース層のブロック混じる



1. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質細粒砂
ベース層のブロック混じる

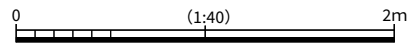


図 43 土坑 24・25 溝 13 平・断面図

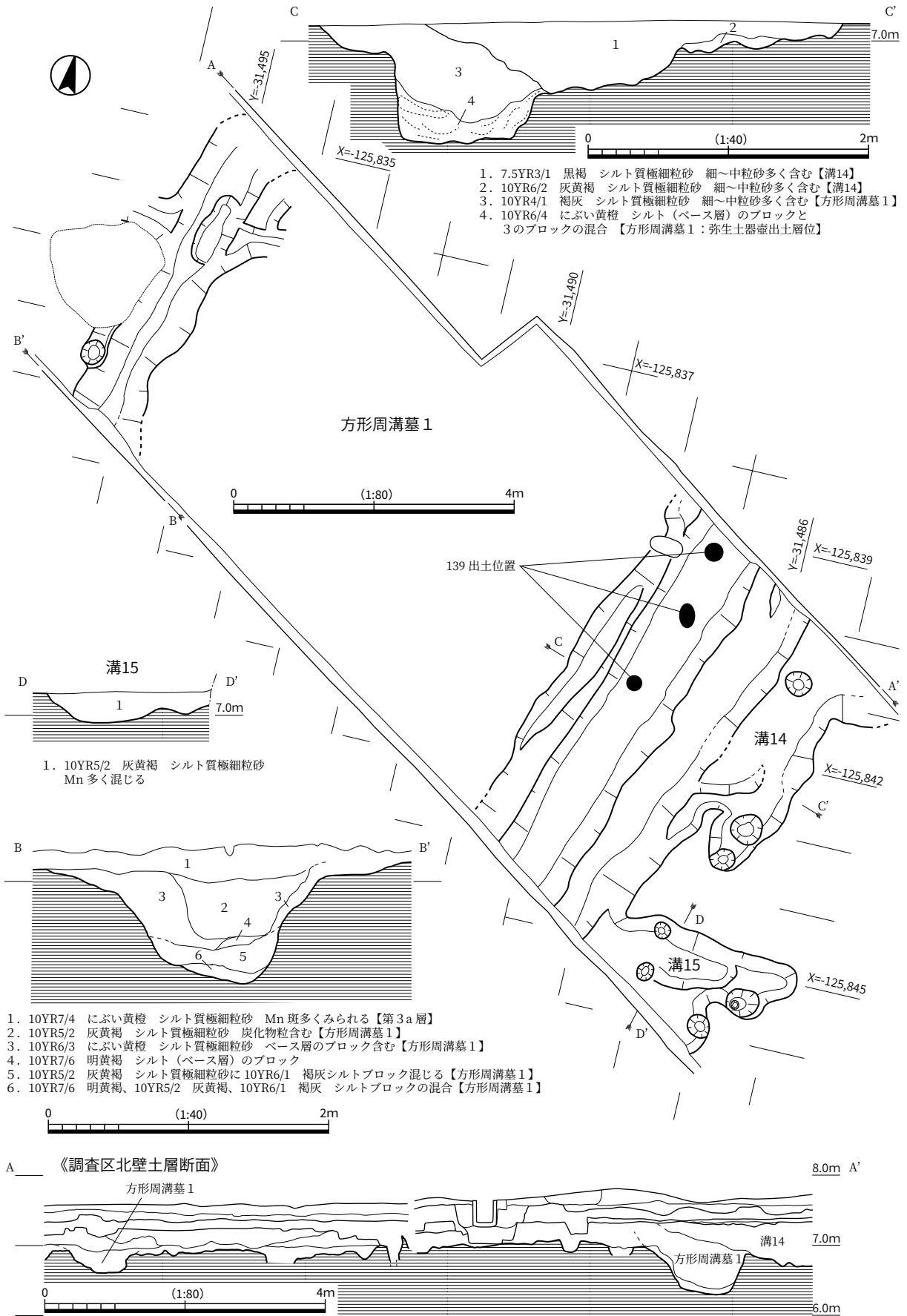


図 44 方形周溝墓 1 溝 15 平・断面図

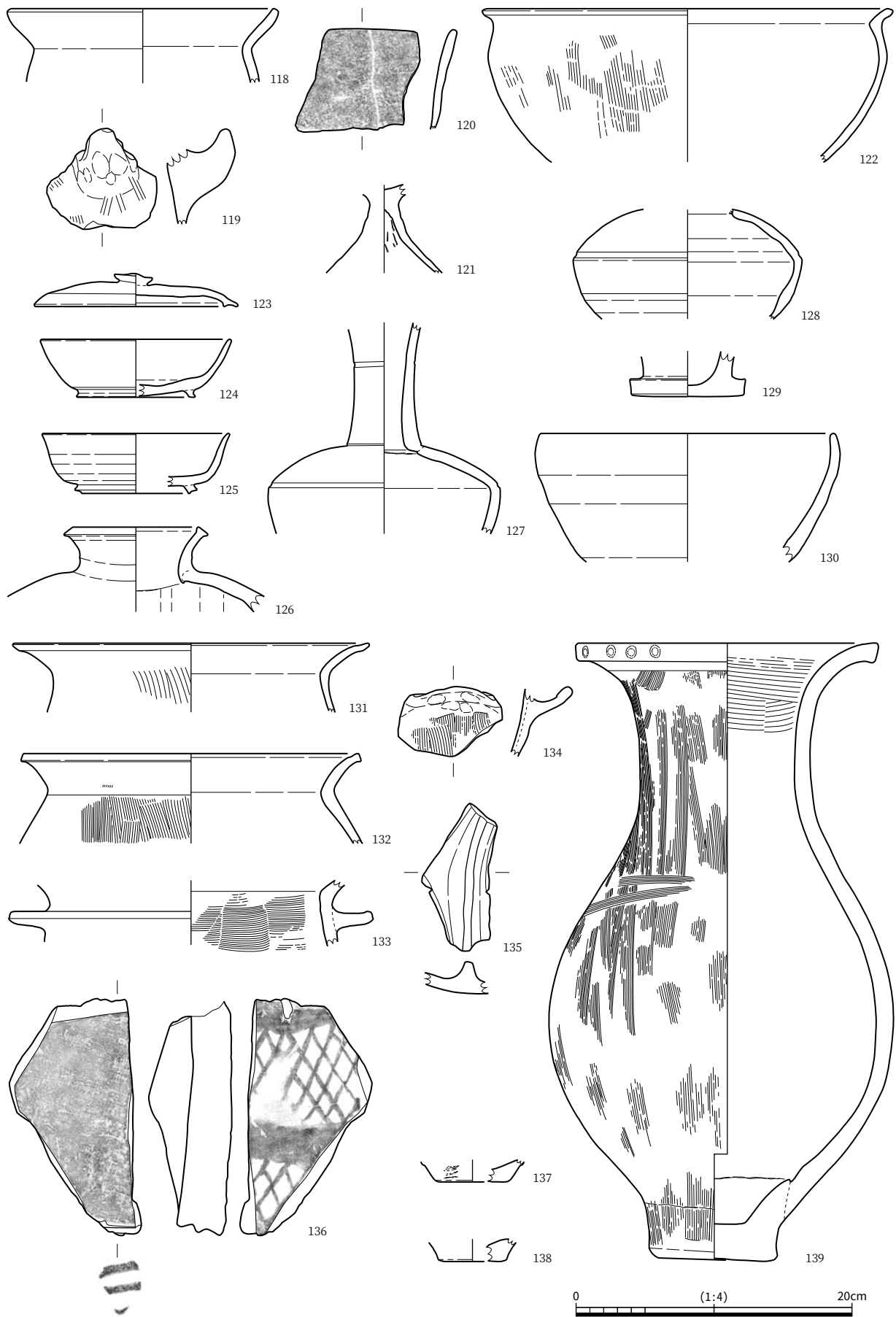


图 45 遺構 出土遺物

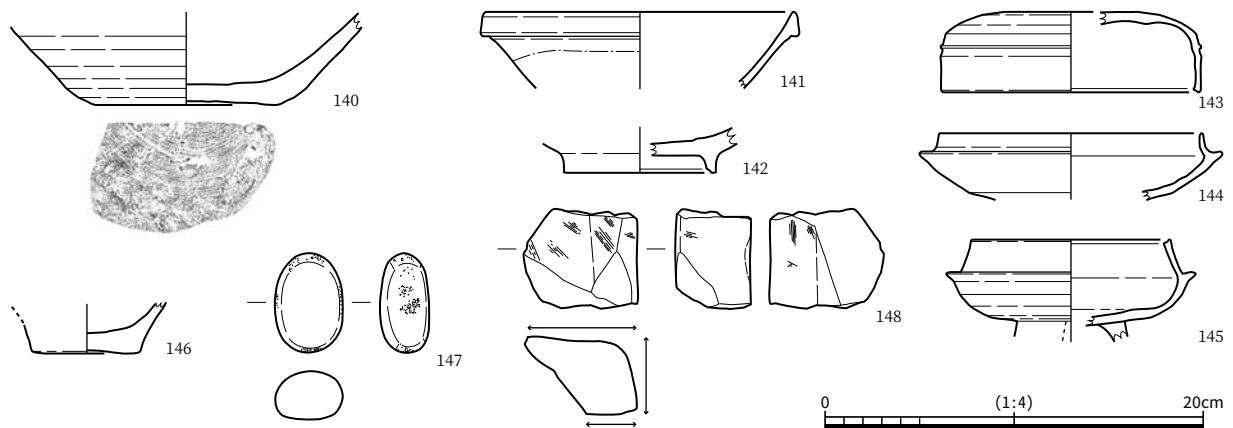


図46 包含層 出土遺物

に、図45-119に示した牛角状の土師器把手が出土した。古墳時代中期以降のものと考えられる。瓦器細片をわずかに含むものの、古墳時代後半期の遺構となる可能性が高い。

土坑 24 (図 43) 微高地域4の西寄り、井戸7の東に接する位置で確認した土坑である。北側を現代の攪乱により失われているが、残存部分は長さ、幅とも1.0m程度を測る方形を呈し、本来は長方形の土坑であったと考えられる。深さは35cm程度で、最下位に炭化物粒を多く含む薄層がみられた。遺物には図45-120の縄文土器の深鉢片、121の土師器高坏脚部、122の土師器鍋片のほか、弥生土器や古墳時代須恵器の細片などを含む。120はいわゆる粗製土器で、縄文時代後期前葉のものか。遺物には瓦器碗の細片もあり年代の判断が難しいものの、奈良時代の遺構と考えておきたい。

土坑 25 (図 43) 微高地域4の東寄り、建物2の北に位置する浅い土坑で、調査範囲の北側に続く。検出した範囲では長さ2.0m、幅1.5mを測り、深さは10cm程度である。ベース層シルトのブロックを含む埋土をもつ。土師器の細片がわずかに出土したのみで、時期は不明である。

溝 13 (図 43) 微高地域4の西寄り、井戸7付近から建物1付近へと延びる溝で、方形周溝墓1の西辺の溝と切り合う関係にある。およそ8.0m程度を検出したが、調査範囲外に延びる可能性が高い。幅は0.4m～0.7m程度で、深さは約20cmを測る。比較的泥質な埋土で、須恵器、土師器、縄文土器、弥生土器、平瓦、瓦器などの細片を含む。年代については明確にはしがたいが、微高地域3の溝12の南縁に平行し、微高地域1の溝3の延長線上にあたる可能性が高い。これが一連の溝とすると、中世段階ないしはそれ以降の遺構となる。

溝 14 (図 44) 微高地域4の中央付近を横断する溝で、調査範囲の南北に延びる。同じ方向をもつ方形周溝墓1の東辺の溝と重複しており、掘削時には切り合い関係不明なまま調査を進めたが、出土遺物の様相と土層断面の確認により方形周溝墓1の東辺溝の東寄りを溝14が切っていることを確認した。平面の輪郭を十分確認することはできなかったが、幅およそ3m、深さ50cm～60cmの比較的大規模な溝と考えられる。泥質な土壌で埋没しており、比較的多くの遺物が出土した。古墳時代以降の土器片を含むが、奈良時代の土器が最も多く、遺存状況も相対的によい。図示し得たものを図45-123～136に示した。126は須恵器の横瓶の口縁部、127・128は須恵器壺Kに属する。129は須恵器の捏鉢(鉢F)、130は鉢Aに分類される。133は土師器の羽釜で、中世以前のは珍しい。135は土師器移動式竈の焚口部の破片と考えられ、胎土は精製胎土である。136は軒平瓦の破片で、凹面に布目圧痕、凸面に格子タタキがみとめられ、わずかに残る瓦当面には重弧文がみられる。梶原寺もしくは梶原瓦窯に関連する遺物であろう。

溝 15 (図 44) 溝14から分岐し東へ少し延びる部分を溝15とした。おおむね長さ 3 m前後、検出した部分では深さ20cm程度と浅い。遺物は出土していない。

方形周溝墓 1 (図 44、図版 13) 微高地域 4 の中央西寄り、建物 1 と重複する位置で確認した遺構である。方形周溝墓の東西辺各溝を検出したもので、先述のように西辺の溝は中世段階の溝13に切られ、東辺の溝は奈良時代の溝14に切られている。ベース層を掘り下げた部分のみ遺存しており、盛土やその上部に設けられたと考えられる埋葬施設は残っていない。西片の溝は幅1.0m程度、深さは最も深いところで80cm程度、調査区北側溝にかかる場所では30cm程度と浅い。微高地域 5 で報告するほかの方形周溝墓でも、コーナー部分が極端に浅くなるものが多く、おそらくこの付近で東側に曲がるものと考えられる。東辺の溝は最も深いところで90cm程度を測り、底付近にはベース層シルトのブロックが多く含まれていた。溝掘削時の残土と考えられる。またこの層から同一個体の弥生土器広口壺(図45-139)が3か所に分散する形で出土した。ほぼ溝の底に接するように置かれており、意図的な配置と考えられる。139は口径21.6cm、器高44.7cmを測り、口縁端部に竹管文が施される。口縁部の広がり小さく、弥生時代中期でもⅡ様式に属すると考えられる。体部の一部を欠いており、当初より欠失していた可能性がある。またこのほかに弥生時代後期のものと考えられる甕底部(図45-137・138)が出土しており、最終的な周溝の埋没は後期に下るのかもしれない。方形周溝墓 1 の規模は、東西の幅は約 9 m、南北の長さは調査範囲外へ延びるので不明であるが、およそ11m程度と推測する。

包含層出土遺物 (図 46) 遺物包含層に相当する第 2 層～第 3 a層からは古墳時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが多く出土しており、一部を図46に示した。須恵器の捏鉢(140)、白磁碗(141)、緑釉椀の高台(142)、古墳時代中・後期の須恵器(143～145)、弥生土器(146)、投弾の可能性のある円礫(147)、砥石(148)で、破片資料がほとんどである。142の緑釉は黄色胎土に濃緑の釉が丁寧にかかるもので、9世紀前半頃か。また、第 2 層作土中より「紹聖元寶」(874) が 1 点出土している。

小結 微高地域 4 は微高地の最高所付近にあたり、遺構の密集度が最も高い。弥生時代から中世にかけての遺構が錯綜する状況は、安定した微高地中央の地形的な性格をよく示している。調査範囲が狭くいずれの遺構も全容を知るには至らないが、弥生時代は墓域、古墳時代以降は居住域として利用されたものと考えられる。掘立柱建物については断片的な情報からの判断になるが、一部は古墳時代に属する可能性があるが、居住域を構成するほかの遺構や、生活雑器たる土器の出土はほとんどみられない。

第 6 項 微高地域 (5)

概要 (図 47、図版 14) 微高地域 5 は事業地内西寄りの橋脚部分の調査区にあたり、北に微高地域 4、南に微高地域 6・7 が位置する。20-1-3 トレンチとして調査した範囲に相当する。微高地域 4 の東寄りと同様に、調査地内では遺構検出面の標高が最も高く、7.0m～7.2mを測る。調査着手前の残土移動の影響により第 3 a層以上の層位について不明なところが多いが、おおむね第 3 a層を除去することで遺構面を検出した。微高地域 4 同様、遺構が密集して分布しており、確認した遺構数は316基にのぼる。掘立柱建物、井戸、水溜、溝、土坑、ピット、方形周溝墓などがあり、中でも奈良時代の井戸からは墨書土器を含む土器類がまとまって出土し、中世段階の水溜 1 ならびに溝16からは食器類を中心とする土器が多量に出土した。また各遺構出土のものほかに、包含層からも多くの遺物が出土している。

なお、微高地域 1 同様、調査区内を貫通する現道(市道梶原404号線)にあたる部分は、現代の攪乱が著しいと予想されたことから調査対象から除外された。

建物3 (図48) 微高地域5北寄りに位置する掘立柱建物である。建物4、5と重複し、柱穴の切り合いでは建物4に切られる関係になる。調査区外北側に続く可能性もあるが、ひとまず検出範囲で完結するとみると、東西方向に2間、南北方向に2間分の総柱の柱配置となる。建物規模は芯々距離で、東西3.6m、南北3.9mを測り、方位は座標北より26.7°東に振れている。柱間寸法は東西方向で1.8m前後、

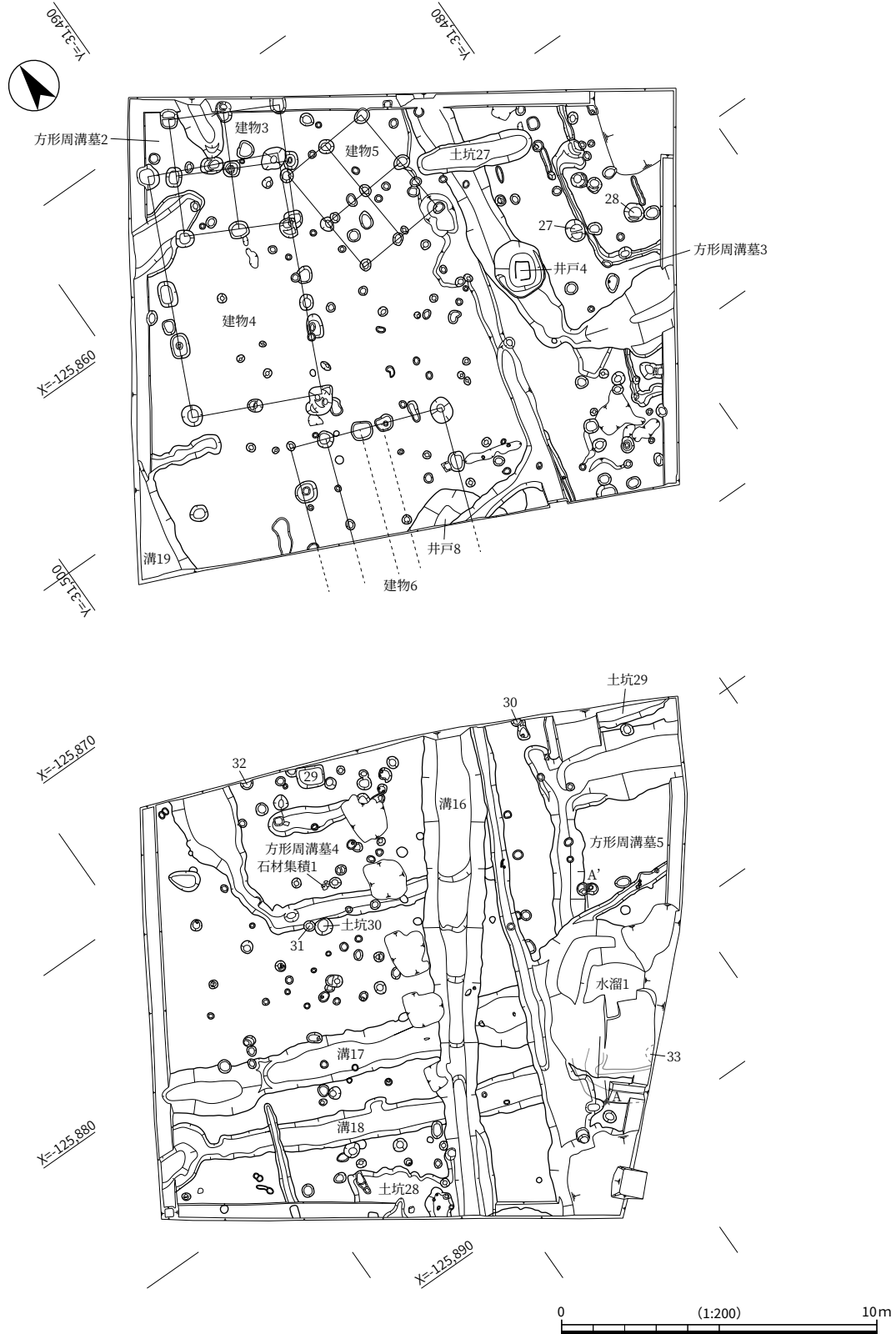
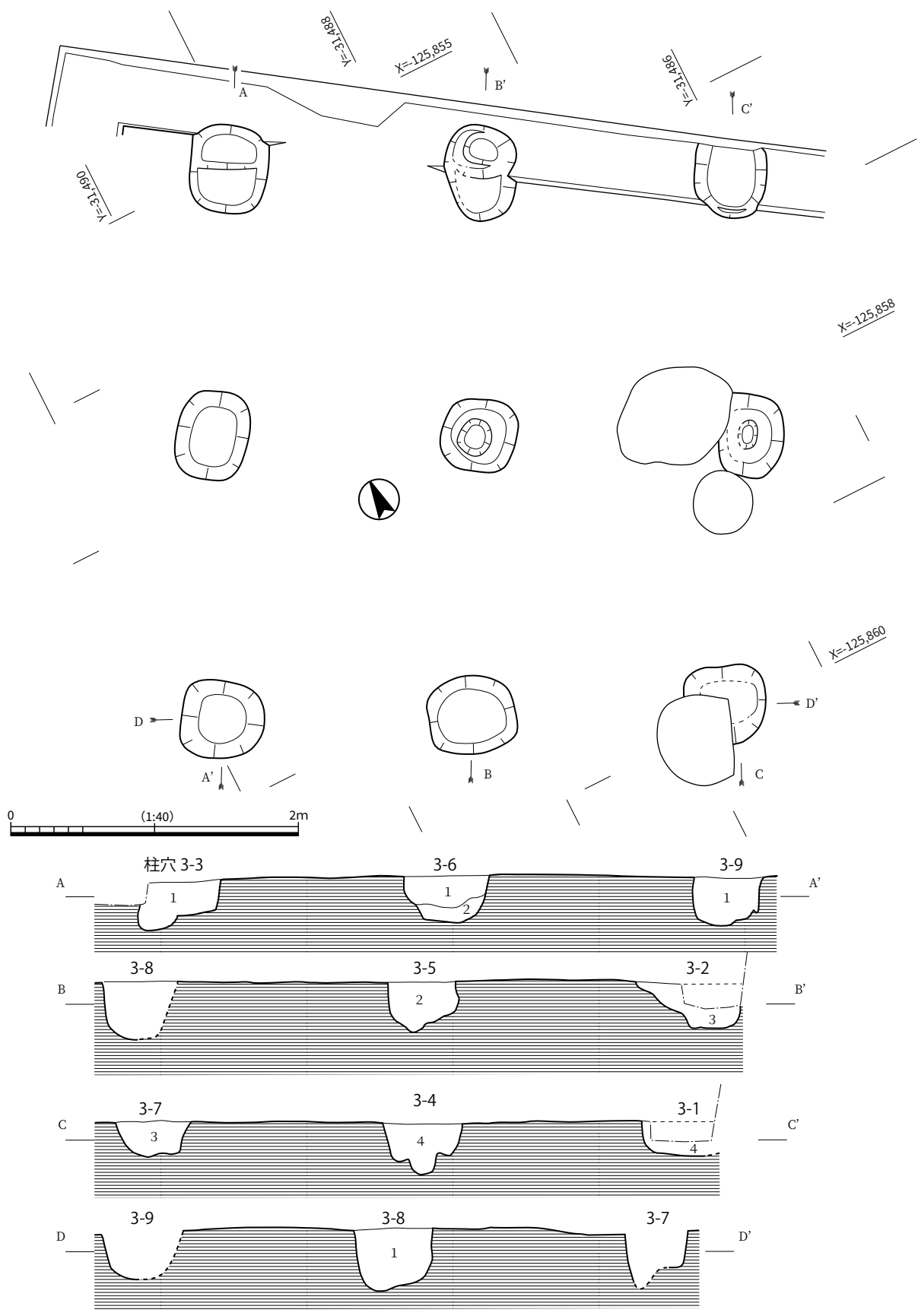


図47 微高地域5 全体平面図



- 1. 7.5YR4/2 灰褐 シルト質極細粒砂 Mn 多く含む
- 2. ベース層シルトブロック主体に、7.5YR4/2 灰褐 シルトの小ブロック含む
- 3. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質極細粒砂 Mn 多く含む
- 4. 1主体に、ベース層シルトブロック混じる

図 48 建物 3 平・断面図

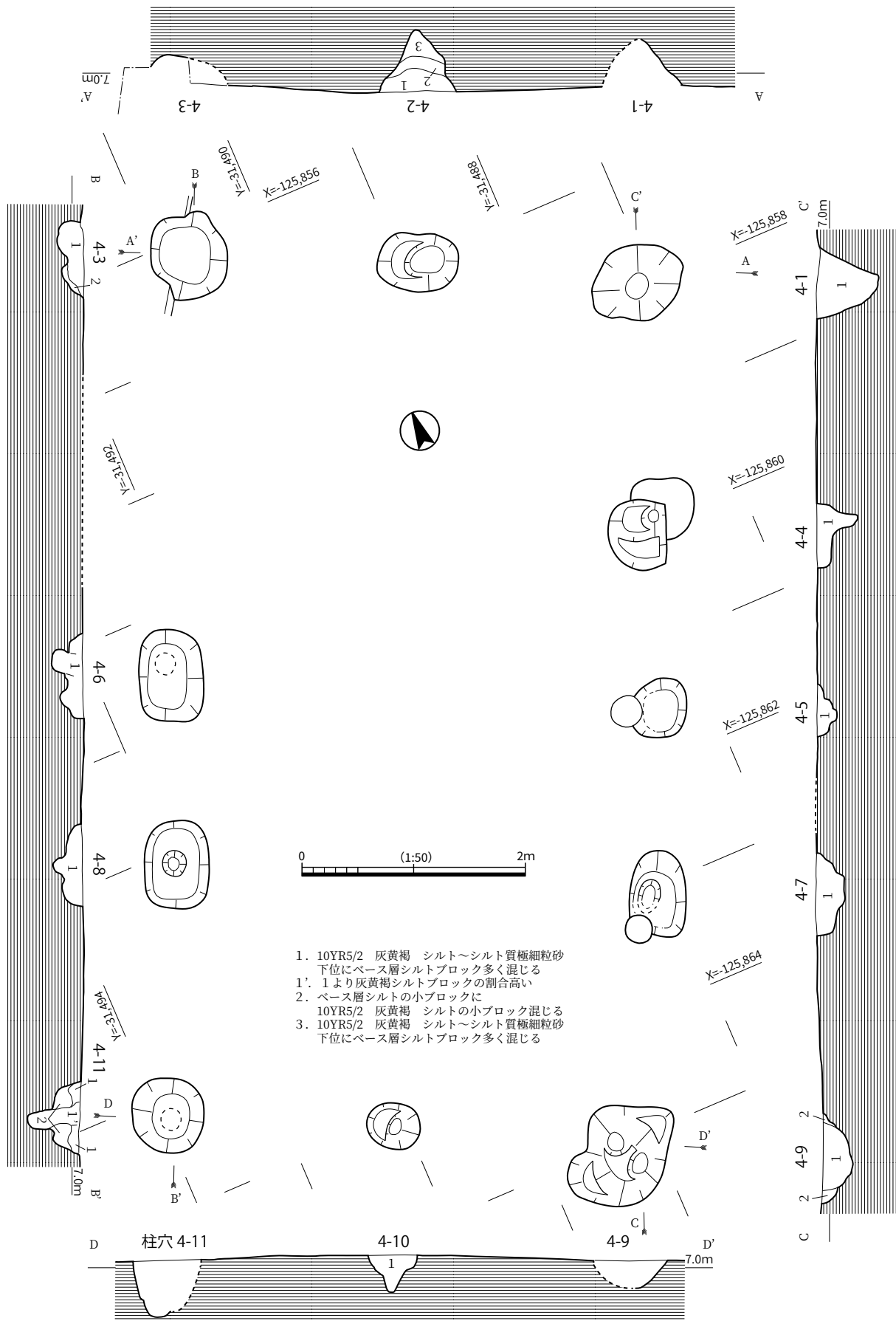


図 49 建物 4 平・断面図

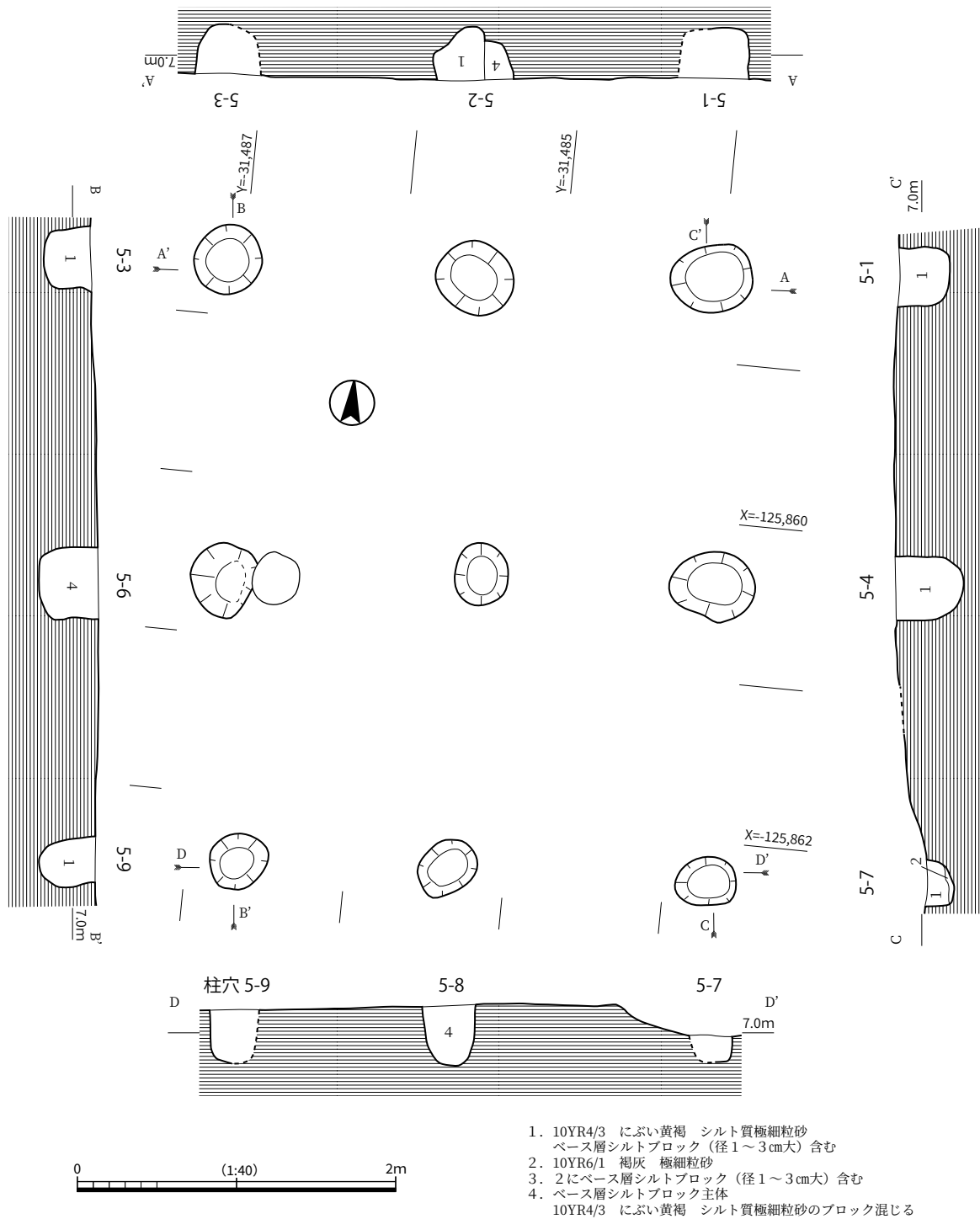
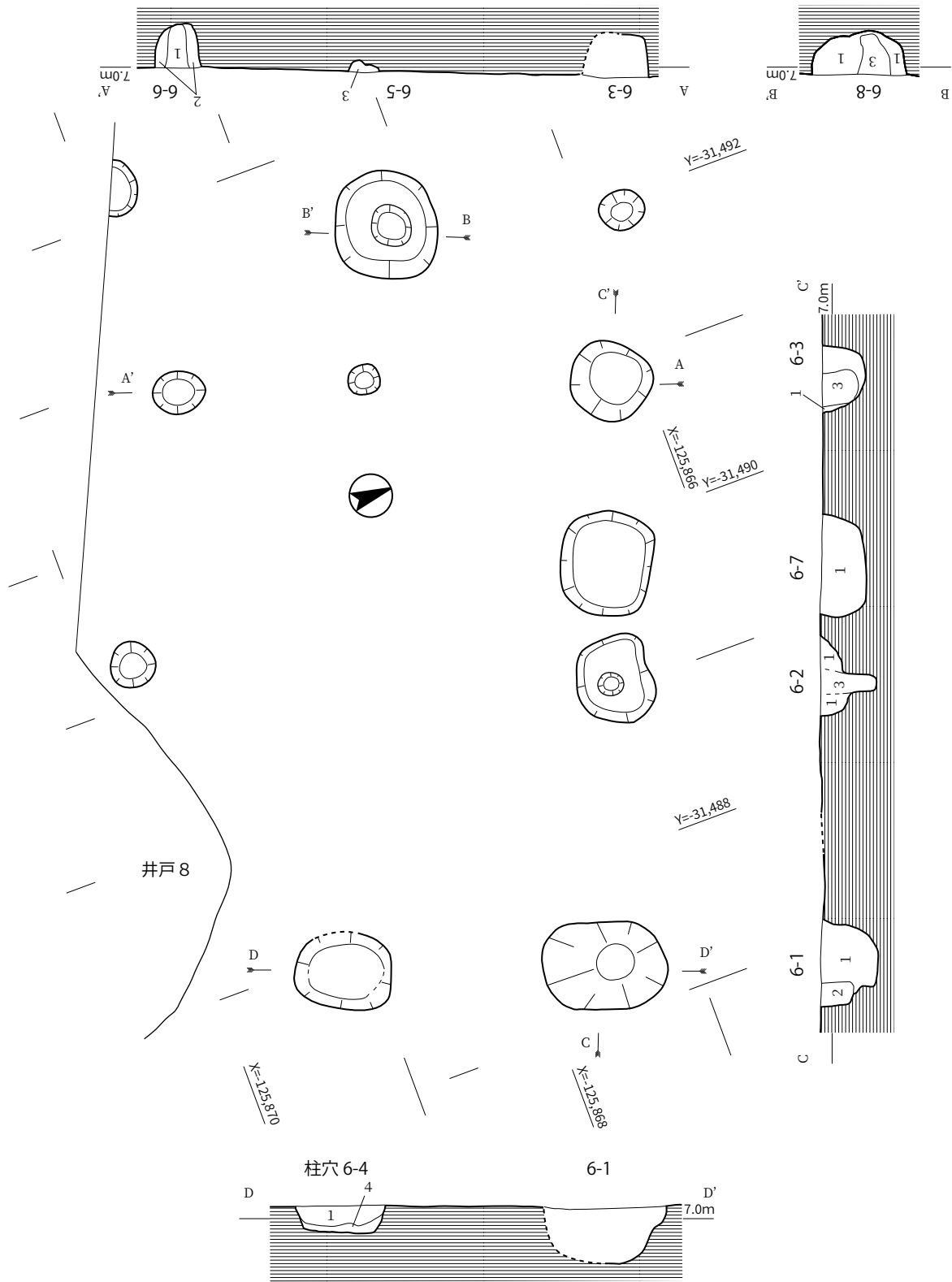


図50 建物5 平・断面図

南北方向で1.9m前後となり、やや南北方向に長いもののほぼ正方形の建物となる。柱穴はおおむね長辺60cm程度、短辺50cm前後の隅丸方形を呈するものであり、検出面からの深さは20cm~40cm程度を測る。柱穴の埋土はおおむね褐灰色の粘質土で、一部にベース層シルトのブロックを含み、柱痕跡を残すものはみられなかった。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器のみとなる。須恵器、土師器の細片がほとんどであった。なお、柱穴9からサヌカイトの剥片(935、一覧表にのみ記載)が出土している。出土遺物に古墳時代にさかのぼる須恵器を含むものの、遺構の年代は不明である。



1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂にベース層 (10YR7/6 明黄褐 シルト) の小ブロック (径1~5cm大) 含む
2. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細粒砂【柱痕】
3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂
4. ベース層シルトブロック主体
10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂混じる

図 51 建物 6 平・断面図

建物4 (図49・52、図版15) 建物3に重なり、柱穴の切り合いでは建物3を切る関係になる。桁行4間、梁行2間の掘立柱建物で、柱穴1基が方形周溝墓2の溝と重複しており確認できなかった。建物規模は芯々距離で、桁行7.8m、梁行4.2mを測る南北棟で、方位は座標北より23.3°東に振れている。柱間寸法は梁行で2.1m前後であるが、桁行ではばらつきがあり、北から2.1m、1.8m、1.6m、2.3m前後となる。柱穴は長辺50cm～60cm程度、短辺40cm～60cm前後の隅丸方形や楕円形を呈するものが主で、隅丸方形のものは柱列方向に長いものが多い。検出面からの深さは20cm～50cm程度とばらつきが大きく、梁行の柱穴が深い傾向がある。柱穴の埋土はおおむね灰黄褐色の粘質土単一のものが多いが、柱穴11では柱痕跡が認められた。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなる。柱穴3から図示した149、150の須恵器が出土しているほかは須恵器、土師器の細片ばかりであった。ただ、あきらかに古代に下るものは確認しておらず、古墳時代のものが主になるといえる。微細な土器片からの判断にはなるが、出土遺物からみた遺構の年代としては古墳時代(5世紀)が候補となる。

建物5 (図50) 建物3・4の東にあり、柱穴に直接の切り合いはないものの、建物としては重複する関係になる。桁行2間、梁行2間の掘立柱建物で、束柱をもつ。建物規模は芯々距離で、桁行3.8m、梁行3.1mを測る南北棟で、方位は座標北より5.6°西に振れている。柱間寸法は梁行で1.5m前後であるが、桁行ではばらつきがあり、北から2.0m、1.8m前後となる。柱穴は長径40cm～50cm程度、短径30cm～40cm前後の楕円形を呈するものが主で、検出面からの深さは30cm～40cm程度となる。柱穴の埋土はベース層シルトの小ブロックを含むものが主で、明瞭に柱痕跡を残すものはない。出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなる。図示し得るものはなく、須恵器、土師器の細片のみで、古墳時代の製塩土器片や須恵器高坏脚片などを含む。建物4同様、あきらかに古代に下るものは確認しておらず、古墳時代のものが主になるといえる。微細な土器片からの判断にはなるが、出土遺物からみた遺構の年代としては古墳時代(5世紀)が候補となる。

建物6 (図51・52、図版15) 建物4の南に分布する柱穴群のうち、掘立柱建物を構成する可能性が想起されたものを建物6として取り上げる。当初、柱配置は不規則ながら、柱穴1～6からなる桁行2間以上、梁行2間の建物を想定したが、ほかに柱穴の軸方向がそろった柱穴7、8があり、これらも併せて記載する。掘立柱建物であれば調査区外南側へ続く。想定される建物規模は桁行3.3m以上、梁行3.8mで、方位は座標北より20.3°東に振れている。柱間寸法は梁行で1.9m前後、桁行で1.8m前後となる。

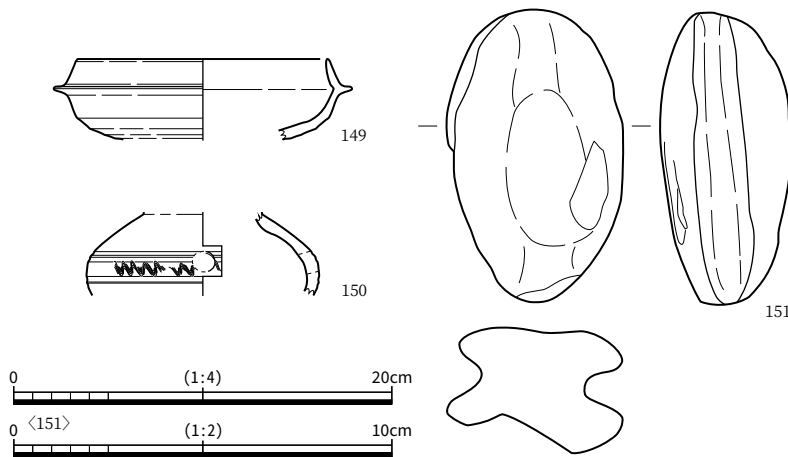


図52 建物4・6 出土遺物

柱穴には大小があり、柱穴1は80cm×70cm程度の隅丸方形で、柱穴5は直径20cm程度の円形となる。検出面からの深さも30cm～40cm程度のものが多いが、柱穴5は10cm程度である。柱穴の埋土はベース層シルトの小ブロックを含むものが主で、柱穴1、2、6では柱痕跡が認められる。このほか、柱穴7・8は一辺70cm～80cm程

度の隅丸方形を呈し、深さは30cmを測る。柱穴8では土層断面に柱痕跡が認められた。出土遺物としては柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなる。151は柱穴3出土の土師質大型土錘で、一部を欠くものの重量は79.5gを測る。中世のものであろう。ほかに須恵器、土師器の細片があり、古墳時代の須恵器高坏脚片などを含むものの、中世の土師皿も含む。もとより建物として認めるかの判断に迷うところではあるが、年代を示すとすれば中世段階のものと考えられる。

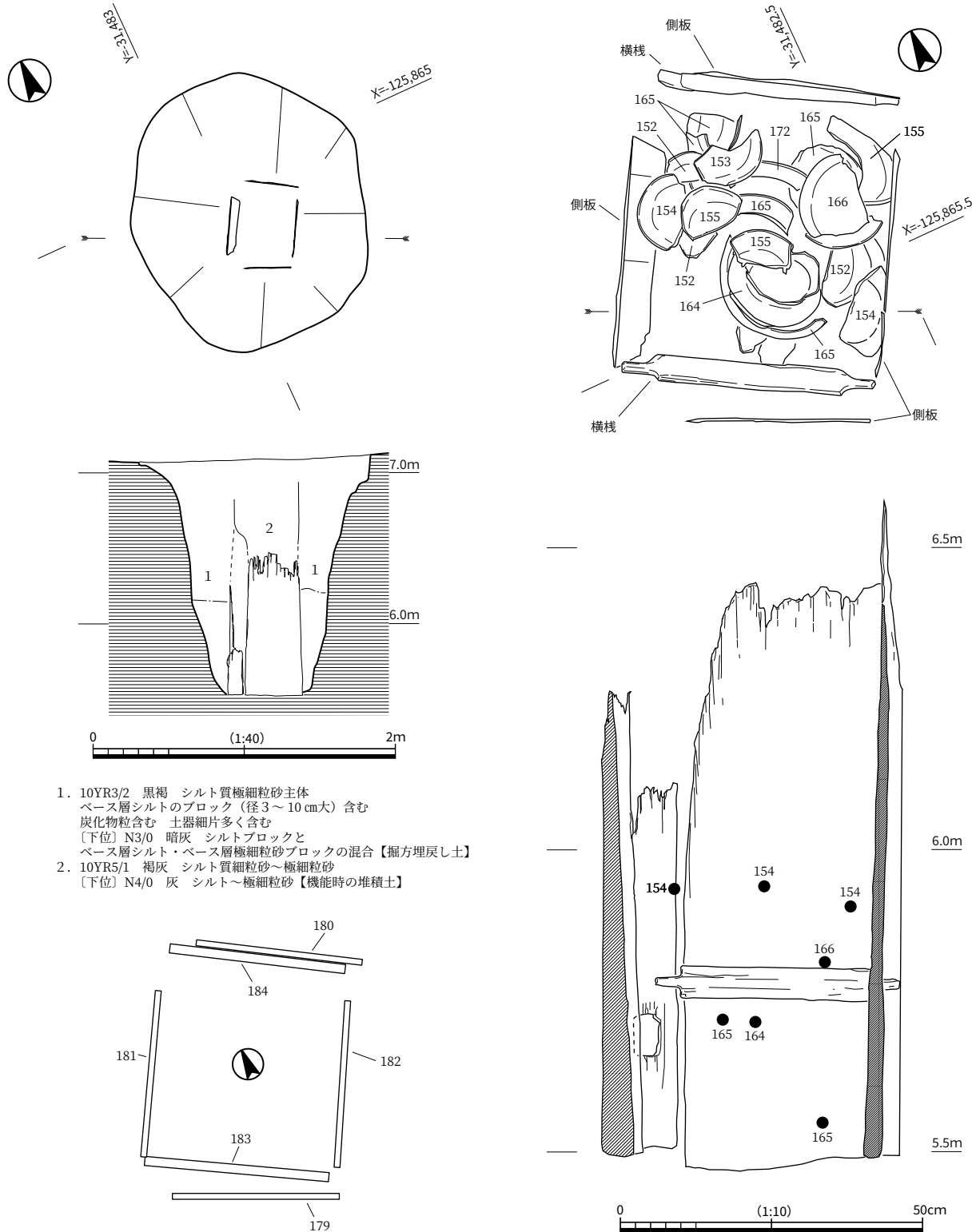


図53 井戸4 平・断面図

井戸4 (図53～55、図版16・17) 微高地域5の北寄りに位置する方形縦板組の井戸で、弥生時代の方形周溝墓3の周溝埋土を掘り込んでいる。検出面での掘方平面形は長径1.85m、短径1.5m程度のやや不整形な楕円形で、深さは1.6mを測る。井戸枠は基本的に4枚の板材を一辺40cm×50cm程度の方形に立て、一对の横棧を渡すものであるが、縦板に隙間が生じる部分には別材で充填している。なお、縦板には横棧が組み合うべきほぞ穴がみられず、検出時にも横棧材が側板に達していない状況であった。材の収縮とともに、そもそも横棧が本質的な機能を果たしていなかった可能性もあろう。板材の上部は腐食が著しいものの、埋土の観察ではさらに上位にまで井戸枠が存在していたようである。井戸枠内の埋土には機能時の堆積がみられ、最上位は人為的に埋め戻された可能性があるが、明瞭ではない。井戸枠内部には土器が多く投棄されていた。土器の出土位置(高さ)は大きく2分割でき、上位には須恵器坏(152～155)、土師器皿(156)などがあり、おおむね供膳具主体となる。下位には須恵器壺(164)、土師器壺(165)などがあり、

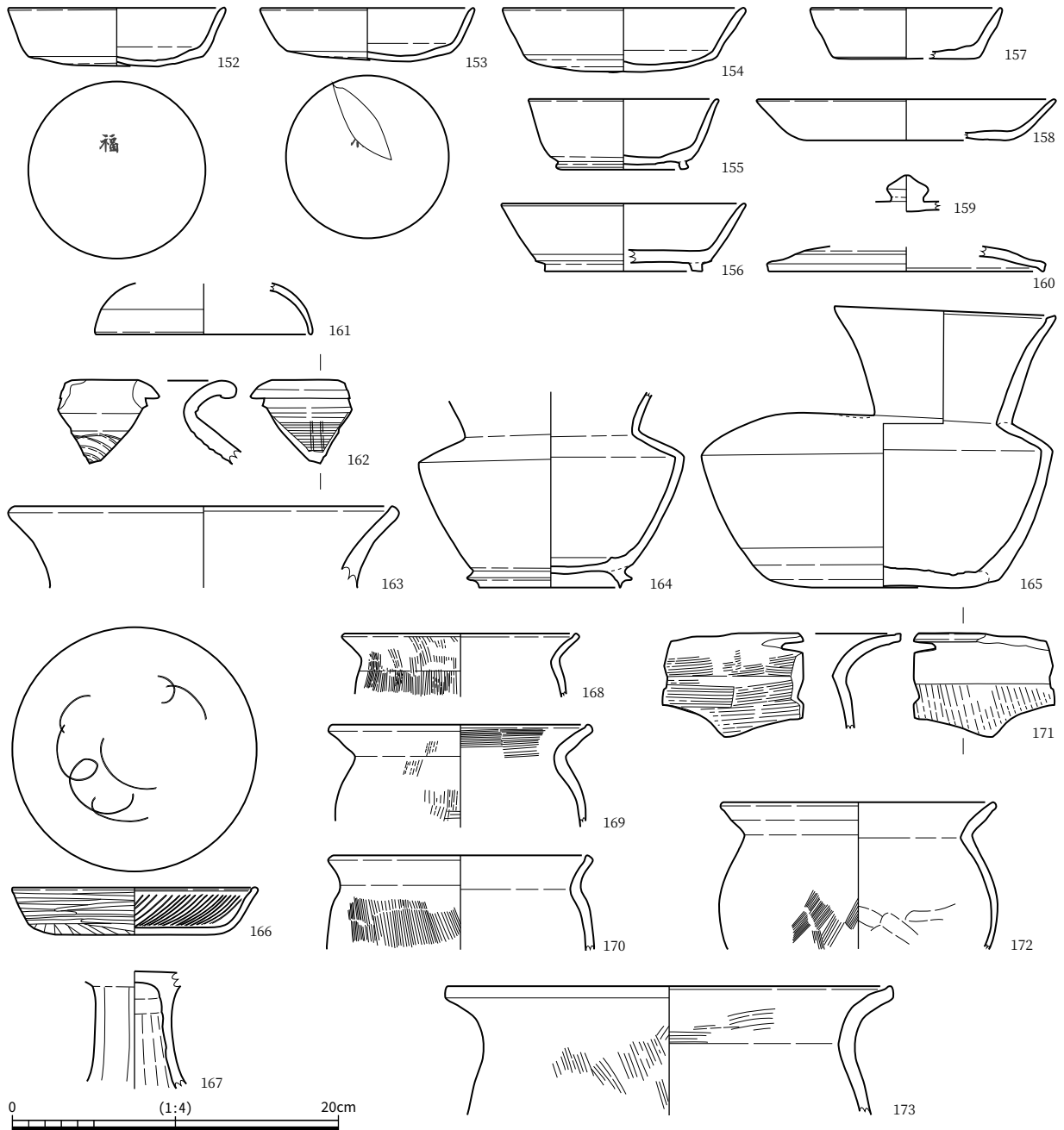


図54 井戸4 出土遺物(1)

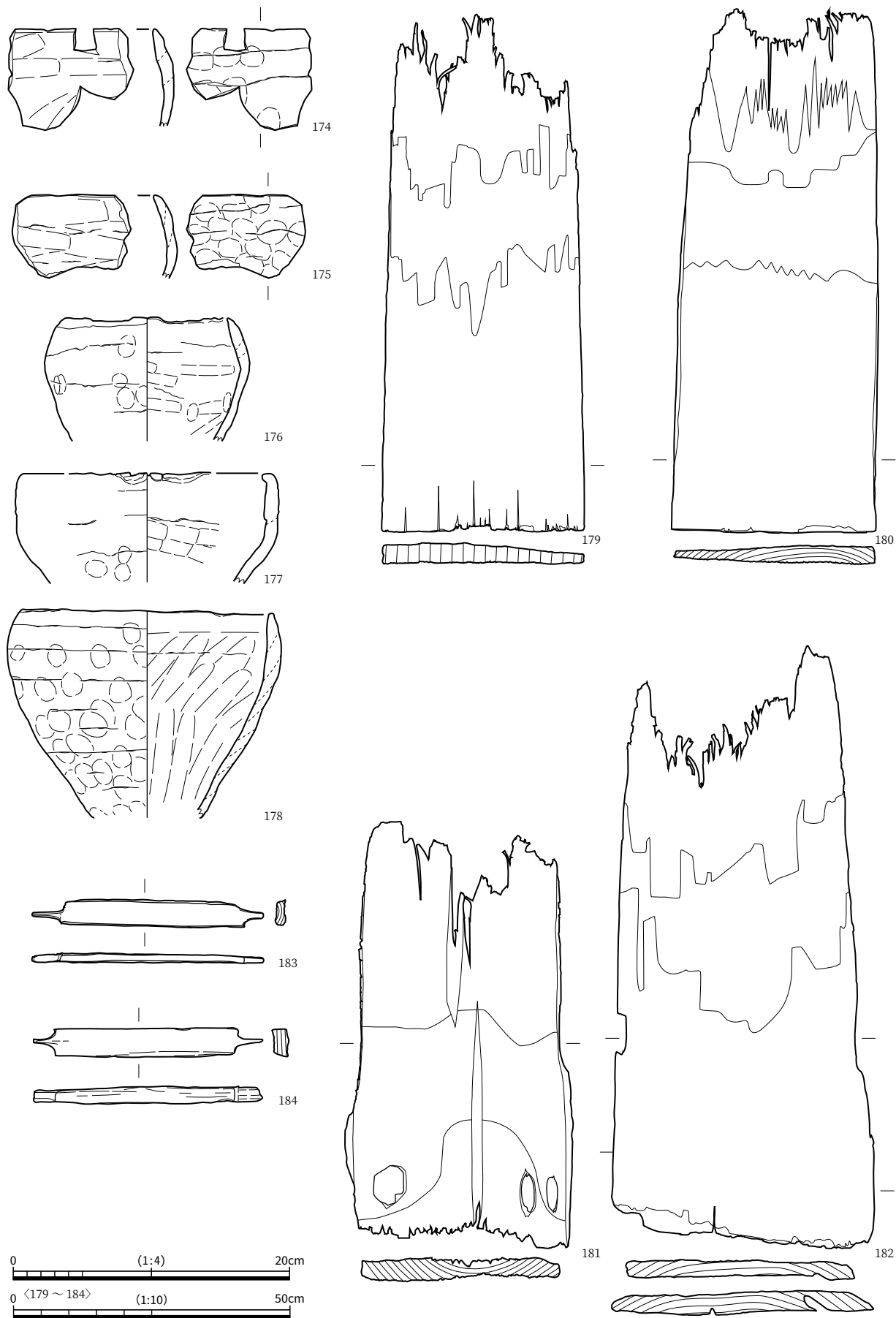


图 55 井戸 4 出土遺物 (2)

須恵器平瓶(165)、土師器甕(172)などがあり、貯蔵具を含む。接合し完形になる個体が多いものの、出土状況としては同一個体の破片が分散して出土していることから、すでに打ち割られたものが井戸に投棄されたものと考えられる。152・153は墨書土器であった。

上記の土器類に加え井戸枠内からは多くの土器が出土している。図示し得たものを152～178に示した。152～165は須恵器、166～173は土師器、174～178は製塩土器である。152の底外面には墨書で「福」字が記される。小ぶりで整った字体であり、底の一部を欠く153でも同一の墨書が施されていた可能性が高い。吉祥句と思われる。164の須恵器壺Qは頸部以上を打ち欠いているようである。166の土師器皿Aは内面に放射状暗文が1段施される。製塩土器は焼き塩用とされる厚手の砲弾形を呈するもので、図化可能なものを示したが、ほかに細片も多く出土している。また桃核が4点出土している。これら遺物の様相から、奈良時代でも中葉に属する井戸と思われる。

井戸 8 (図 56) 微高地域 5 の中央付近に位置する素掘りの井戸で、一部分を検出したにとどまる。全容は不明であるが、直径2.5m～3m程度の円形もしくは隅丸方形の可能性が高い。深さも不明では

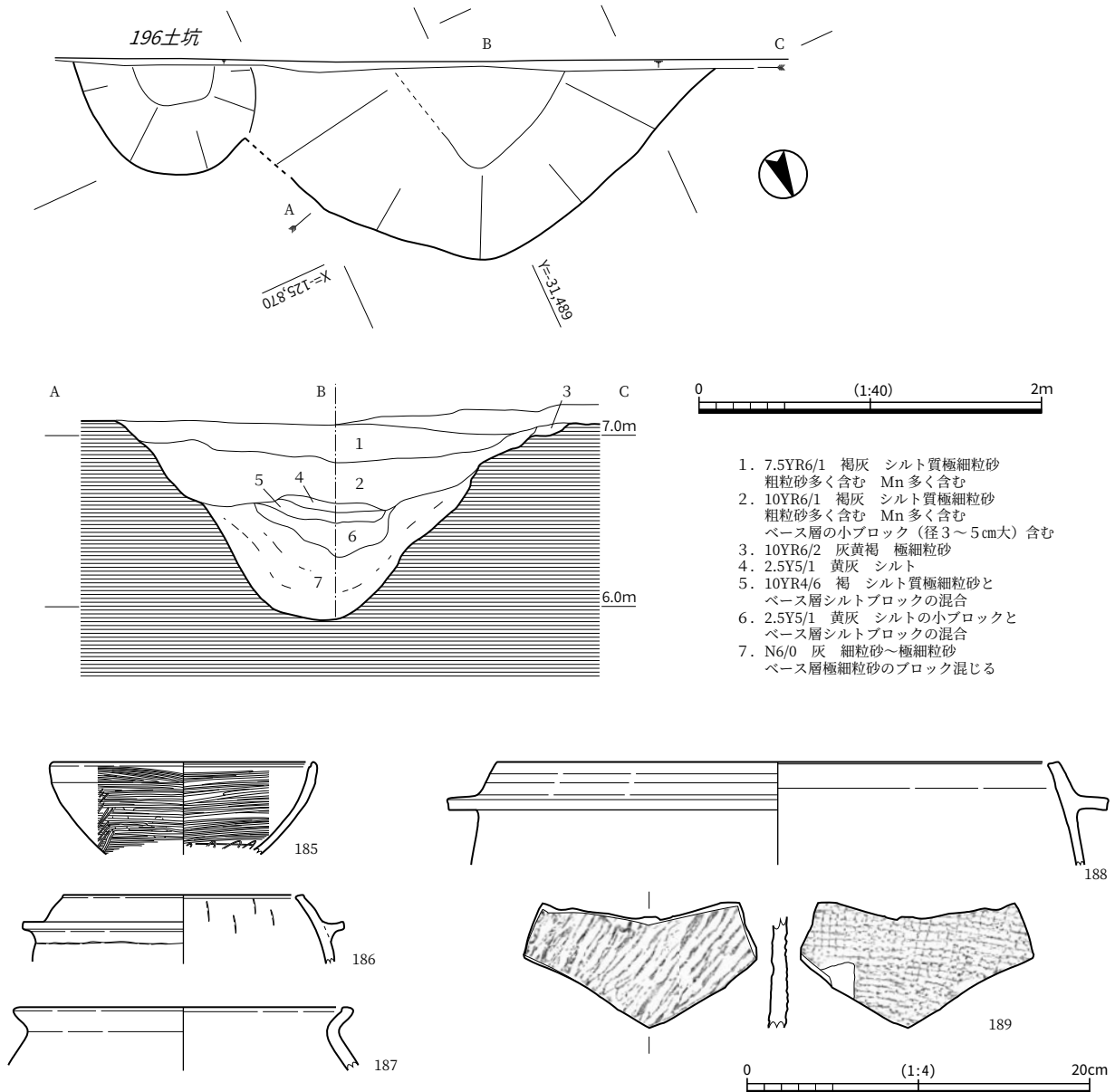


図 56 井戸 8 平・断面図・出土遺物

あるが、調査範囲では遺構検出面から1.1mまでを確認した。埋土は下位にベース層シルトのブロックを含む砂層があり、上位は第3a層に近い土壌で埋没する。比較的多くの土器片が出土しており、図化し得たものを185～189に示した。187が古代の甕と考えられるほかは中世土器が多数を占め、中世段階の遺構と考えられる。

水溜1 (図47・57～60、図版18) 微高地域5の南東寄りに位置する大型の土坑で、溜井的な性格を想定し水溜1と呼称する。東側に高圧線鉄塔基礎があり、関連して周辺に攪乱も多く、部分的な調査にとどまった。溝が接続する可能性があり、後述する弥生時代の方形周溝墓5を切る関係になる。平面形はおよそ一辺が5m程度を測る隅丸方形で、断面形状はところどころに小さな平坦面をもつすり鉢状を呈し、検出面からの深さは1.5mを測る。埋土の観察からは下位はベース層細粒砂のブロックを含む部分も多く、水成堆積で埋没したようである。埋土の上下の境に薄い細粒砂層を挟み、これより上位は人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

埋土中からは土器を中心とした遺物が多く出土した。破片資料も多いものの完形を保ったままの個体も多く、意図的に投棄されたものが多かったと考えられる。水溜1の出土遺物は収納用コンテナでおよそ3箱程度にのぼり、うち図示したものは190～265の76点、写真図版にのみ掲載したものが896・904～909の7点となる。190～227は土師器の皿で、法量から小型(190～209)、大型(210～227)に分類できる。小型皿のうち208、209はいわゆる「コースター形」とされる、平坦な底部に口縁部を内側に折り曲げる形状が特徴的な個体である。228は大型皿との区別が難しいが、ひとまず椀としておく。229～232は土師器台付皿の高台部分で、皿部分の形状には複数種あるようである。なお、195・213・217・219・225は灯明皿に用いられた可能性がある。233～244は瓦器椀で樟葉型に分類できる。体部は緩やかに内湾し、外面上位3分の1ほどにヨコナデを施し、ミガキは省略されているものが多い。内面のミガキもややまばらで、見込みの暗文は連続長楕円のものやジグザク状のものが多い。高台の断面形も小さい三角形で、貼り付けも雑である。233・236・241・242の口縁端部には打ち欠いたような痕跡が認められるが、欠失する部分も多く、意図して打ち欠いたものかどうかはわからない。

245～252は瓦質または須恵器の煮沸具で、245は小型の三足釜である。246～248は羽釜・鍋で、250～252は大型の盤にあたる。これらの器種には図化できない細片も多い。

253～256は須恵器の甕で、古墳時代のものと思われる256を除き、東播系の須恵器となる。257は須

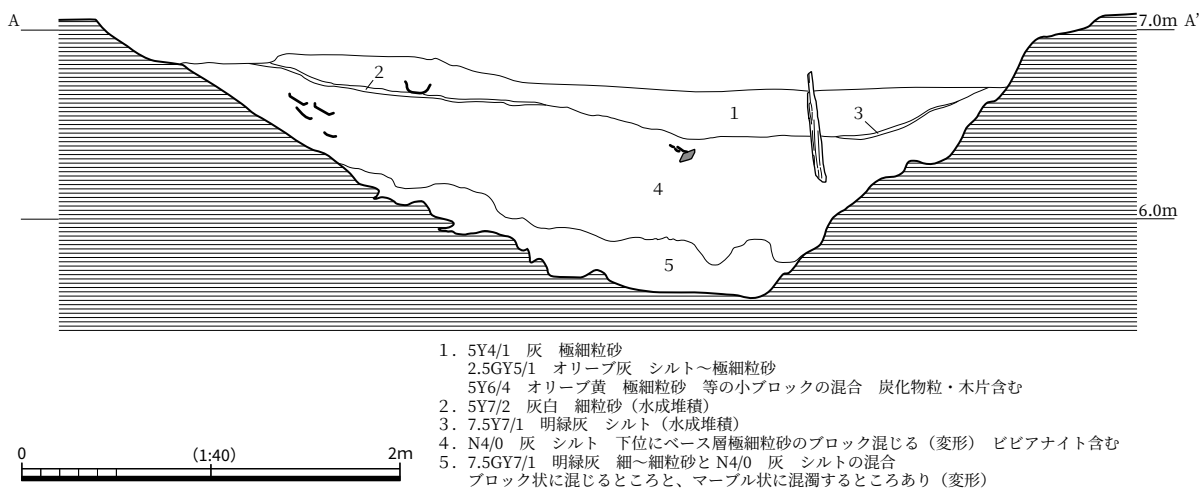


図57 水溜1 断面図

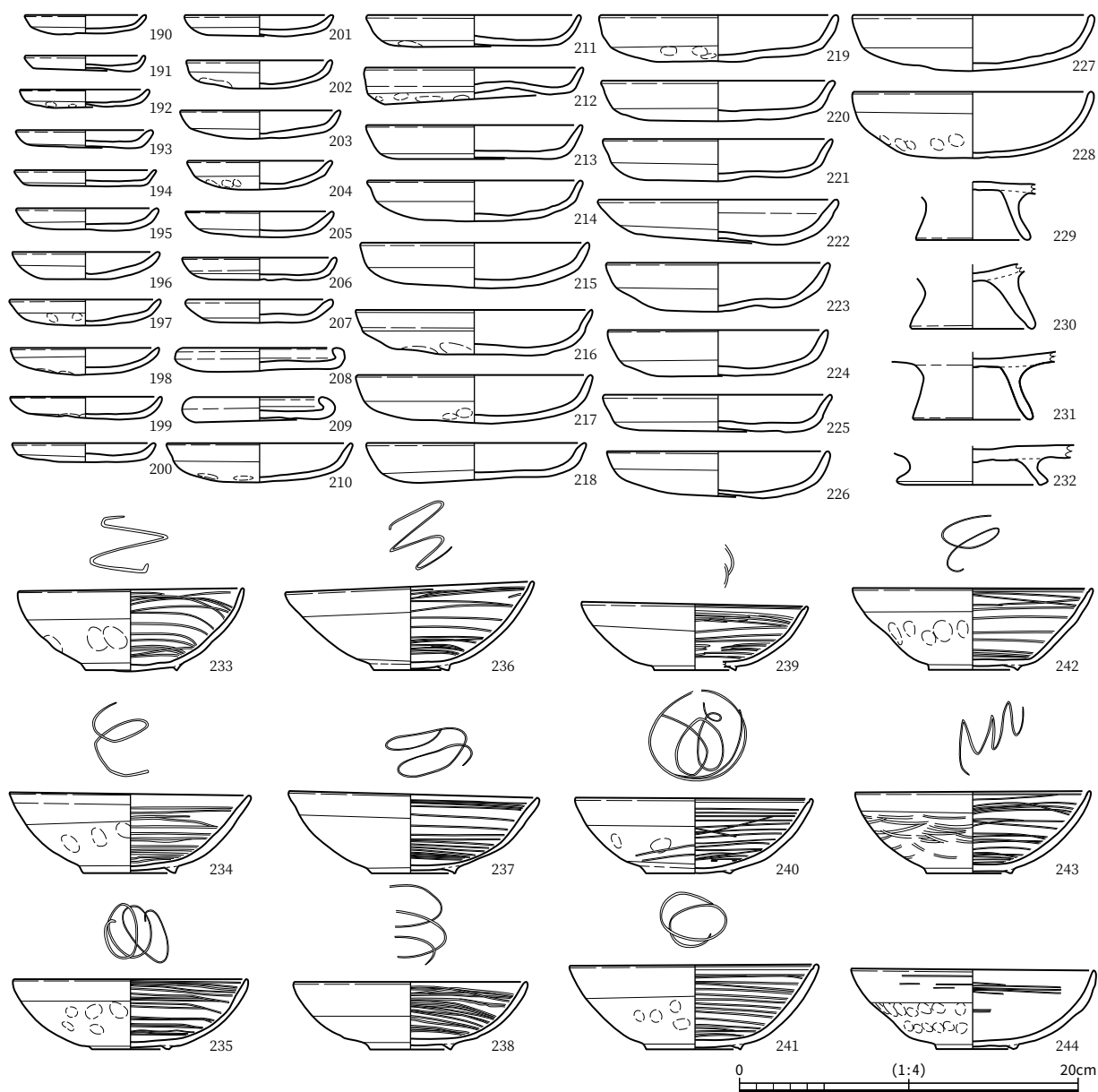


図 58 水溜 1 出土遺物 (1)

恵器小型壺の底部で、糸切痕跡を残す。258は須恵器の把手で奈良時代のものか。259・260・906～909は白磁の碗、261・262・904は青磁の碗、905は備前焼の細片である。263は土師質の大型土錘で中央に孔が貫通する。2分の1程度の残存ではあるが、重量は138.7gを測る。264は軒平瓦で、文様は中央飾りから左右に延びる退化した唐草文の上下に珠文を配し、圏線により画される外側には文様をもたない。凹面は布目、凸面には線刻タタキが残り、顎は不明瞭ながら、瓦当面より10cm程度の部分で屈曲し、タタキの方向も変わる。全体に雑なつくりであり、年代については不明瞭な部分もあるものの、12世紀代に位置づけられる可能性がある(市本2006)。土器類の年代よりはさかのぼる遺物となる。265は小型の丸瓦かと考えられる。

図示しなかった個体はほぼ破片資料にあたるが、全体的にどれだけの土器を含んでいるのか、簡単な計算を行った。瓦器碗、土師皿の大小の3種類の完形資料をそれぞれ7～9点抽出し、平均重量を算出すると、瓦器碗が148g、土師皿大が143g、土師皿小が44gとなった。図化したものを除く瓦器碗の破片資料の総重量は2,365gであったので、単純に割ると15.98となり、重量換算だけでいうとおよそ16

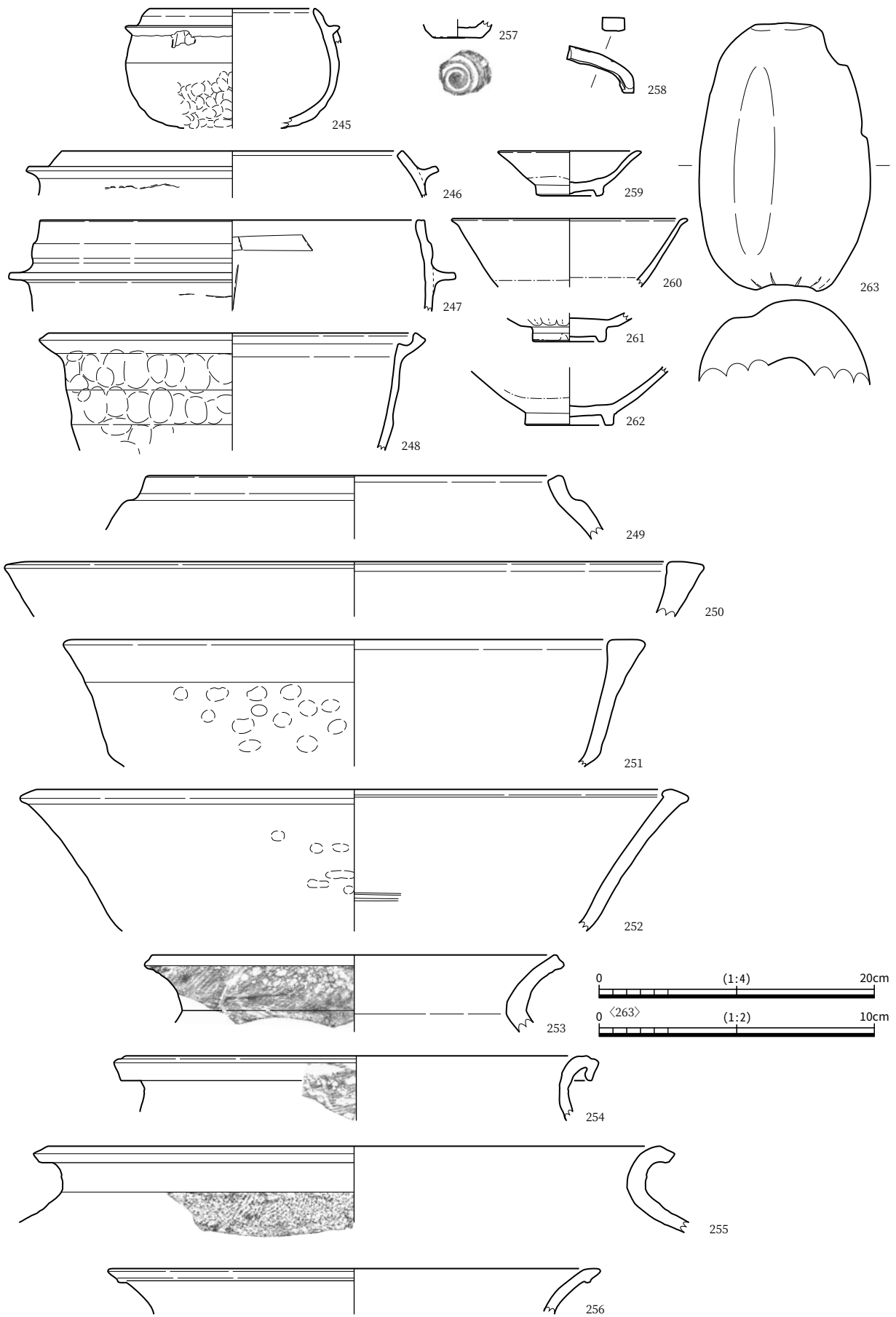


图 59 水溜 1 出土遺物 (2)

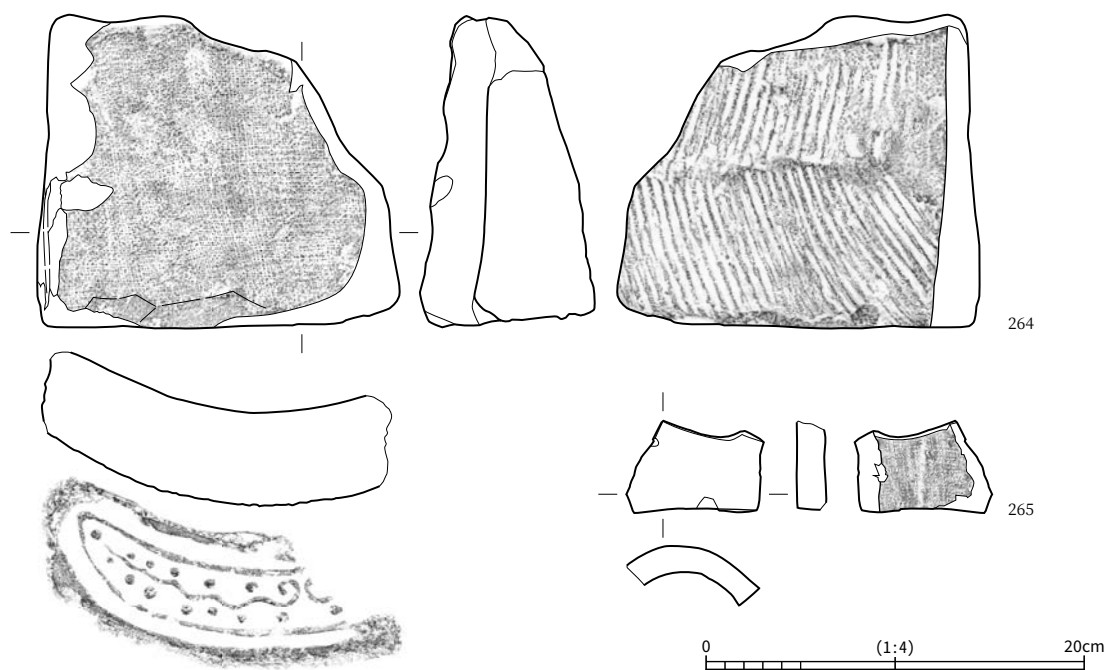
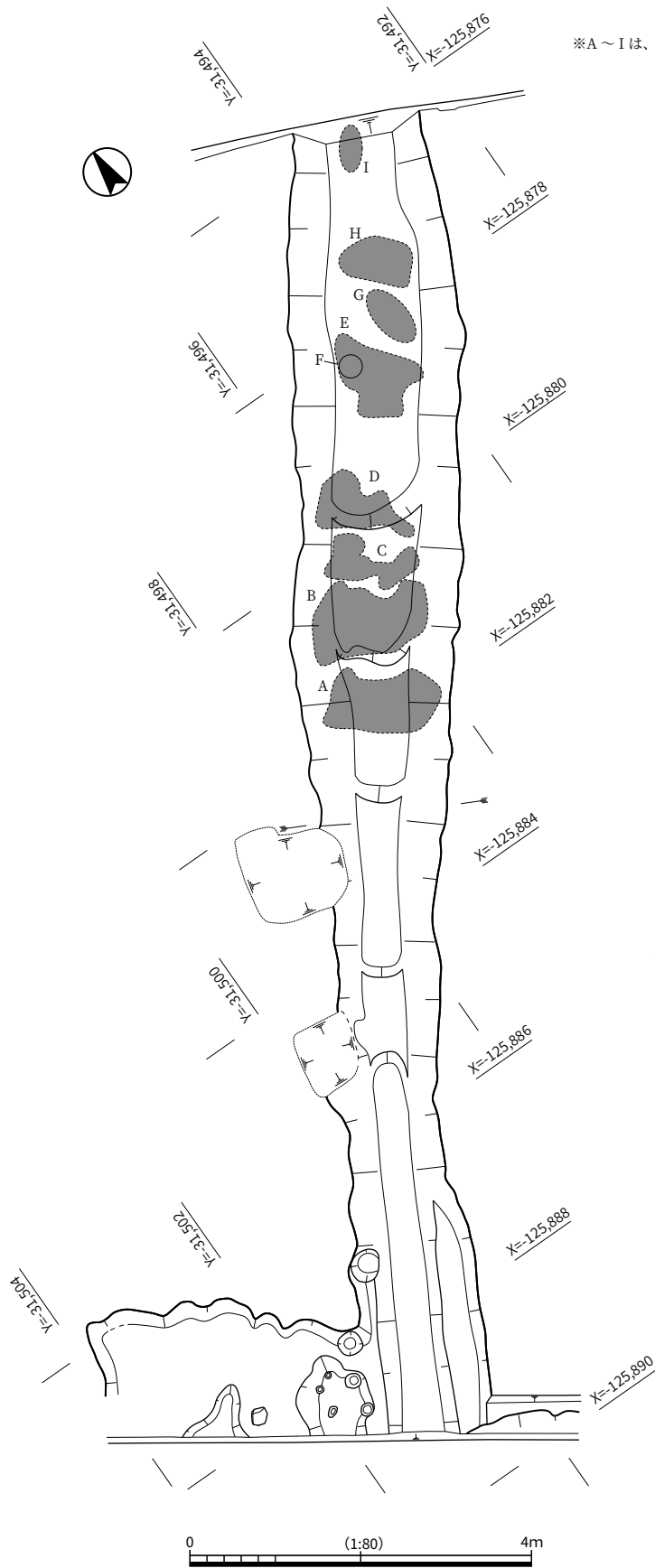


図60 水溜1 出土遺物(3)

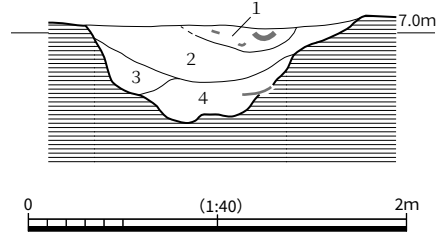
個体程度の破片資料が出土したこととなる。もちろん、水溜1に投棄された破片資料はもともと完形資料ではない可能性が高いので、投棄された個数は16個体以上というあいまいな表現をせざるを得ないが、図示した12個体を加え、28個体以上の瓦器碗が水溜1に投棄されたという理解となる。土師皿の場合は土師皿大と判断された破片資料が2,153g、土師皿小と判断された破片資料が2,593g、細片から大小の分別をすることが難しい破片資料が896.5gであった。これも単純な計算に供すると、土師皿大はおよそ15個体分、土師皿小はおよそ58個体分の重量となる(大小比1:3.9)。分類不可の破片資料の重量を、分類した重量比(45.4対54.6)で割ると土師皿大が406.2g、土師皿小が489.3gとなる。これをそれぞれ加算し、同様の計算を施すと、土師皿大が18個体分、土師皿小が70個体分となる。図示した点数は土師皿大が18点、土師皿小が20点であったので、総量としては土師皿大が36点以上、土師皿小が90点以上となる(大小比1:2.5)。これらはいずれも机上の計算ではあるが、瓦器碗で28個体以上、土師皿大が36個体以上、土師皿小が90個体以上という点数が水溜1に投棄されたと理解しておきたい。土師皿の大、小では重量比にそれほど大きな差はないものの、個体数の計算では土師皿小は土師皿大の2.5~3.9倍となる。瓦器碗と土師皿大、土師皿小の個体数の比では、土師皿大は瓦器碗のおよそ1.3倍、土師皿小はおよそ3.2倍となる。

水溜1の年代については、およそ12世紀後半~13世紀前半頃の遺物を含んでいるものと考えられ、13世紀中葉までには埋没していたものと考えられる。

溝16(図61~66、図版19) 微高地域5南半の中央付近を南北に貫流する溝で、溝17、溝18、方形周溝墓4などを切る関係になる。上述の水溜1とは約2m離れている。調査範囲内で検出した長さは15m余りで、北寄り幅2.0m、深さ65cm程度、南端で幅1.5m、深さ55cm程度を測る。底面の標高は南端で6.55m、北寄りで6.4mとなり、途中4か所ほど6cm~8cm程度の段差を設けながら北に下がる。底には鋤の痕跡が溝の方向に並んでおり、掘削の痕跡と考えられる。調査範囲外とした市道を超えた北側にはのびず、南側では微高地域6の溝23~25へ続く可能性がある。溝24の底の標高は6.6m程度である。埋土は最下位にベース層シルトのブロックを含む層があり、上位までシルト質の土壌が続く。

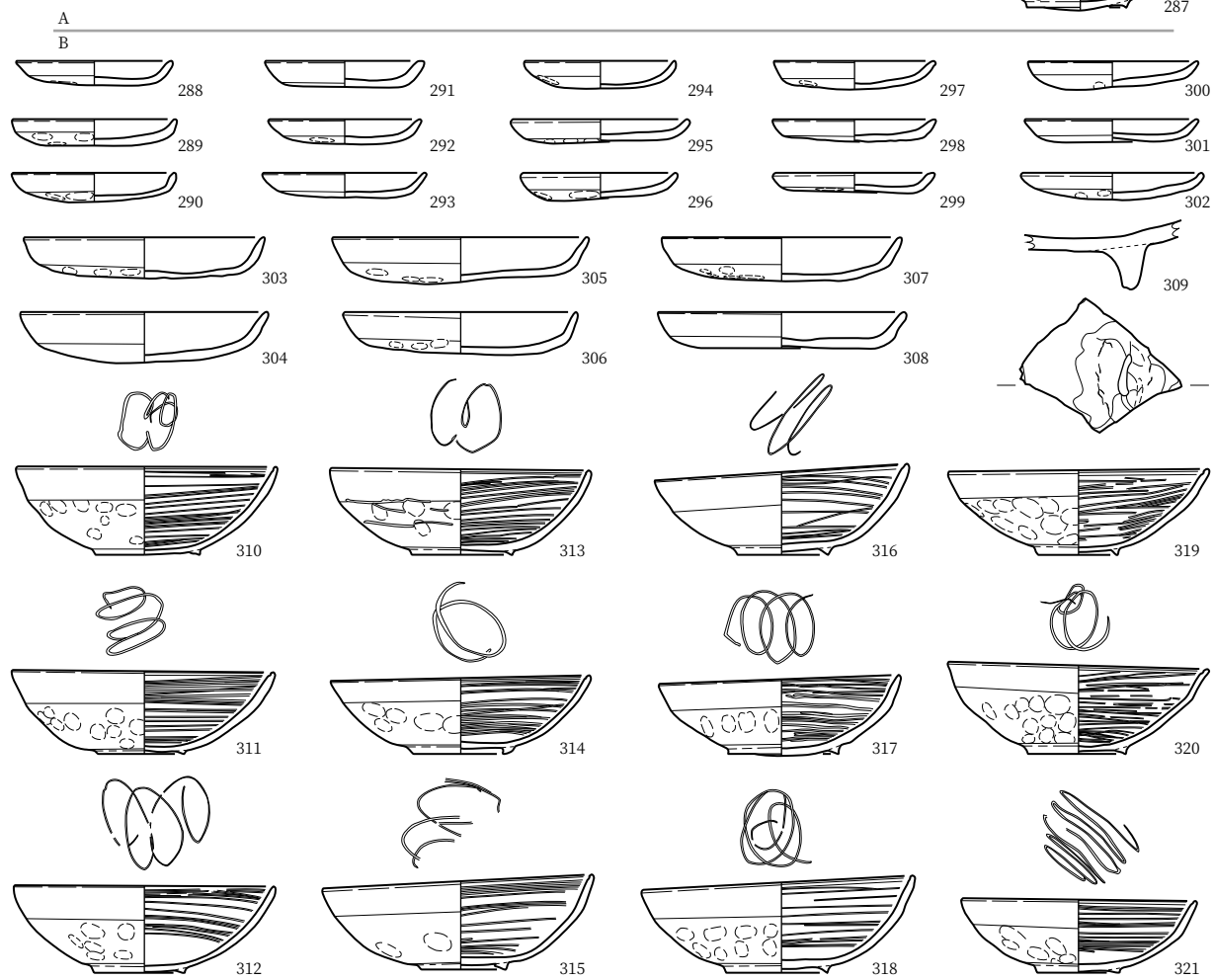
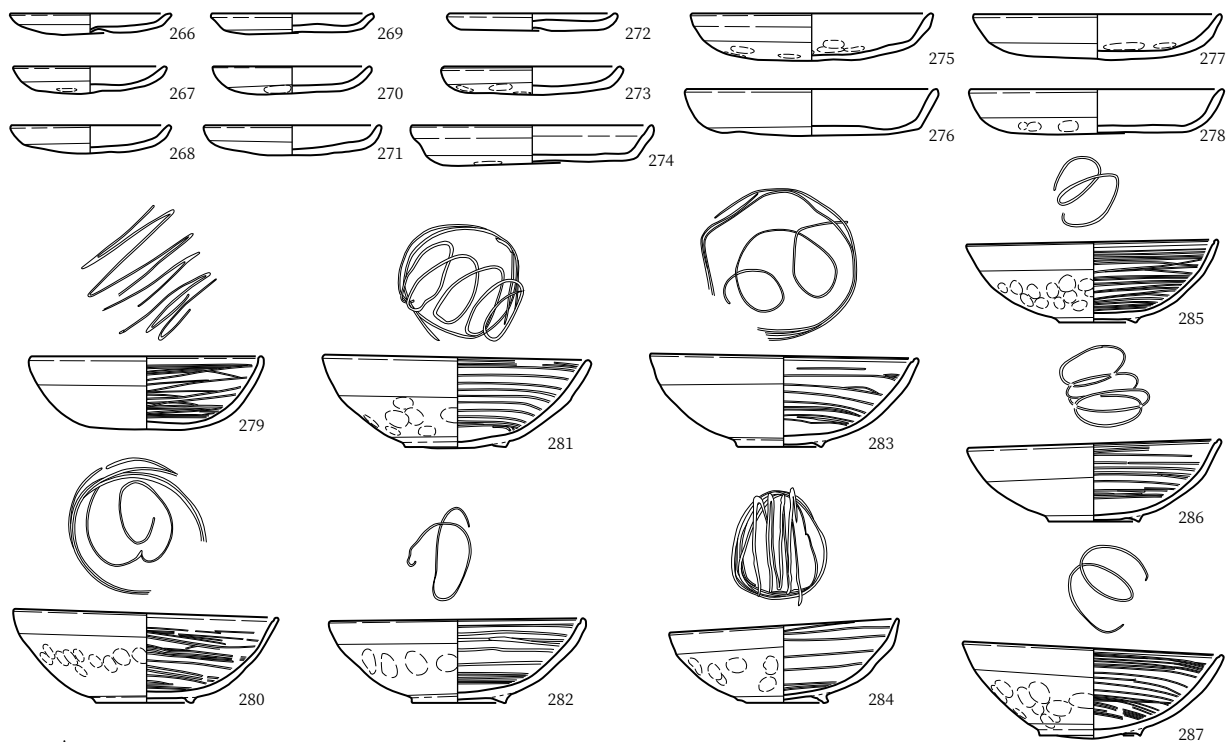


※A～Iは、出土土器（一部）の取上単位



1. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細粒砂～極細粒砂
中～粗粒砂多く混じる 炭化物多く混じる
2. 2.5Y5/2 暗黄灰 シルト質細粒砂
ベース層シルトの小ブロック混じる
3. 2.5Y5/2 暗黄灰 シルト質細粒砂
ベース層シルトの小ブロック混じる
4. 2.5Y6/1 黄灰 シルトの小ブロックと
2ならびにベース層シルトの小ブロックの混合【滞水堆積】

図 61 溝 16 平・断面図



0 (1:4) 20cm

图 62 沟 16 出土遗物 (1)

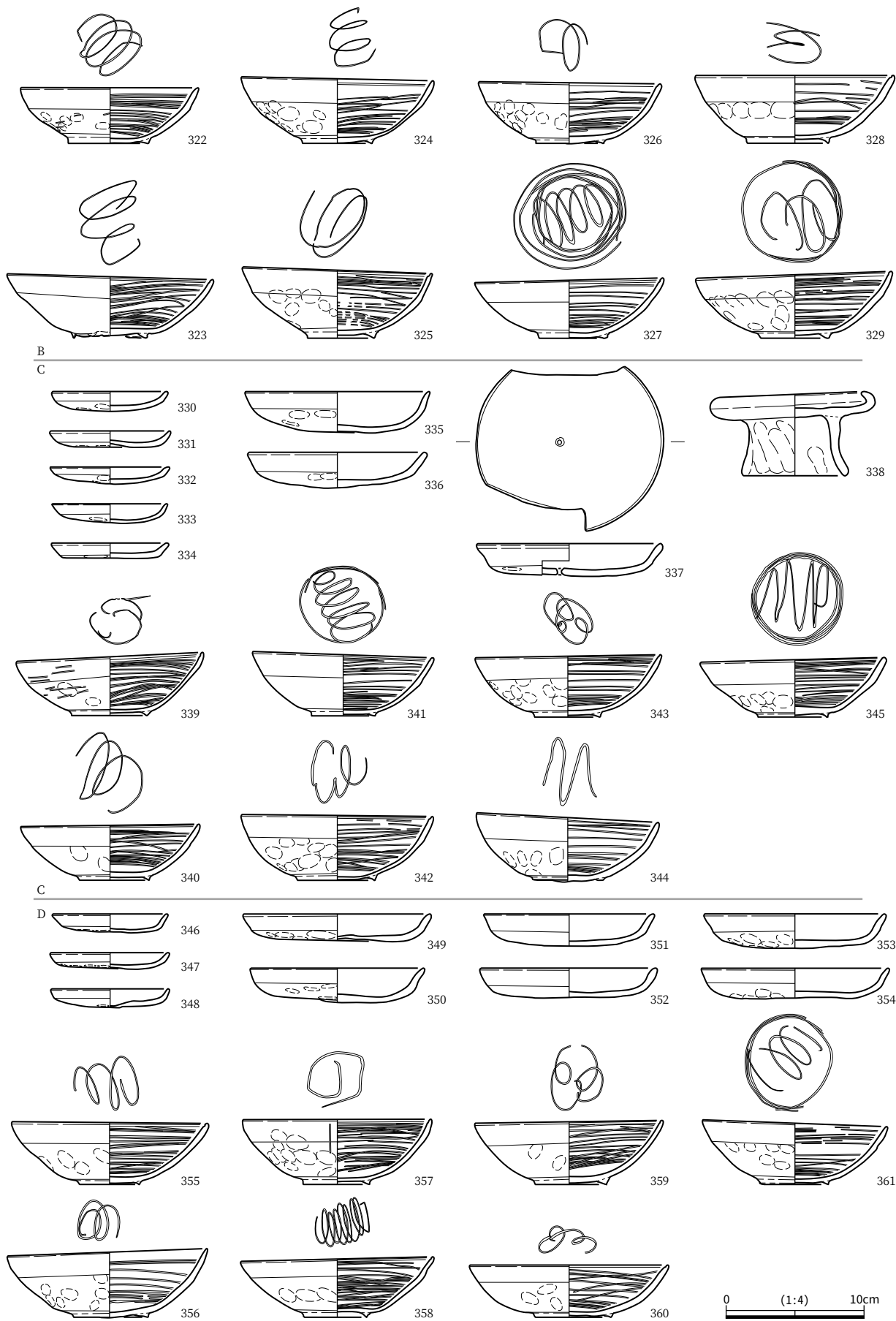


图 63 溝 16 出土遺物 (2)

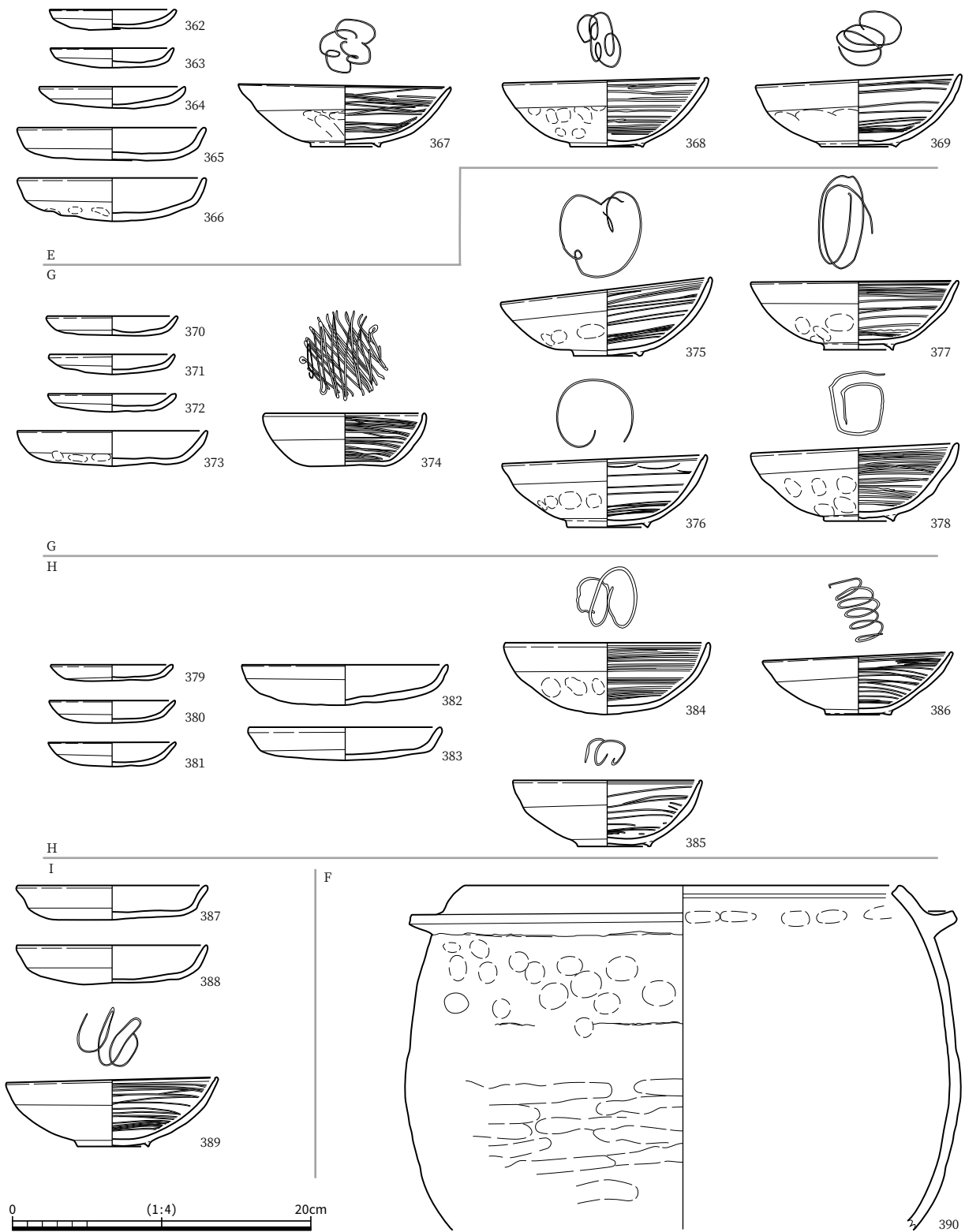


図64 溝16 出土遺物(3)

全体的によどんだ滞水環境であったようである。下位から上位まで多くの遺物を含んでおり、溝16から出土した遺物は土器片を中心に収納用コンテナ12箱におよぶ。

遺物の出土状況としては、全体的に多くの遺物を含んでいる中で、中央より北半分により集中的に土器の出土をみた。また最上層には微細な土器片が目立ち中位以下には完形の土器が目立つ。図61に土器の出土範囲を示したものは、比較的下位に近いところで検出した土器群で、完形もしくはそれに近い

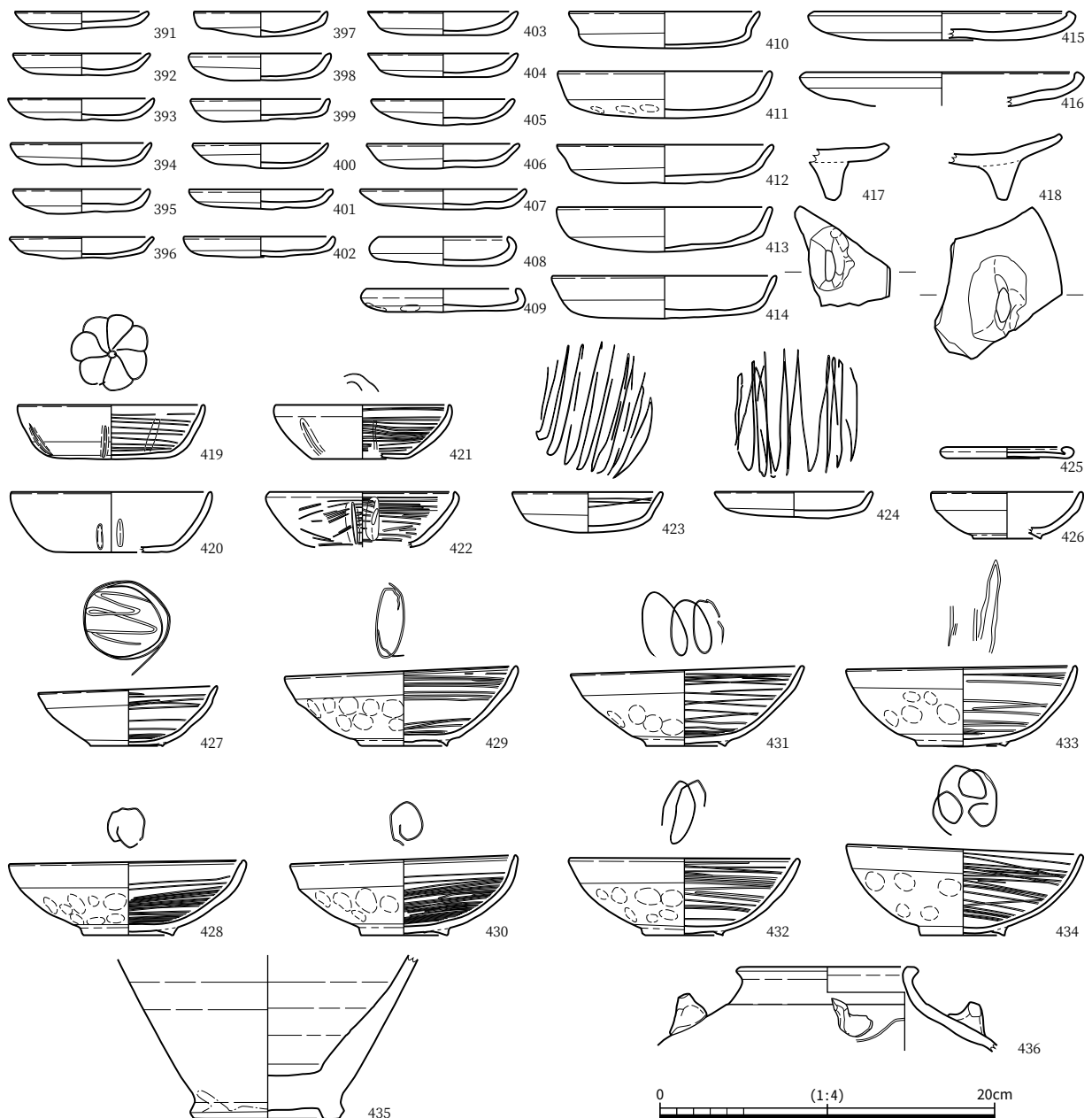


図65 溝16 出土遺物(4)

個体を中心におよそ溝底の横断形状に沿った傾きを示して出土した。A～Iのまとまり自体は遺物を取り上げた際の恣意的な区分に近く、有意な差を見出したものではないが、全体としては意図的に投棄されたものと考えられる。

出土遺物のうち図示したものは全体では266～453の188点に上り、図61のAの範囲出土のものが266～287、Bの範囲出土のものが288～329、Cの範囲出土のものが330～345、Dの範囲出土のものが346～361、Eの範囲出土のものが362～369、Gの範囲出土のものが370～378、Hの範囲出土のものが379～386、Iの範囲出土のものが387～389となり、FはEの範囲に重なって出土した390のみとなる。どの区分においても土師皿の大小、瓦器碗を基本的な組み合わせとし、これ以外にはB出土の309土師器脚付皿、C出土の338土師器台付皿、G出土の374瓦器碗(無高台)、F出土の390瓦質土器羽釜がある。391～453は出土位置の記録はないもので、器種、器形とも多様である。415、416の土師器皿はほかの土師皿とは形態が異なり、胎土の色調も褐色を呈している。417、418の脚付皿は309とも同一個体の可

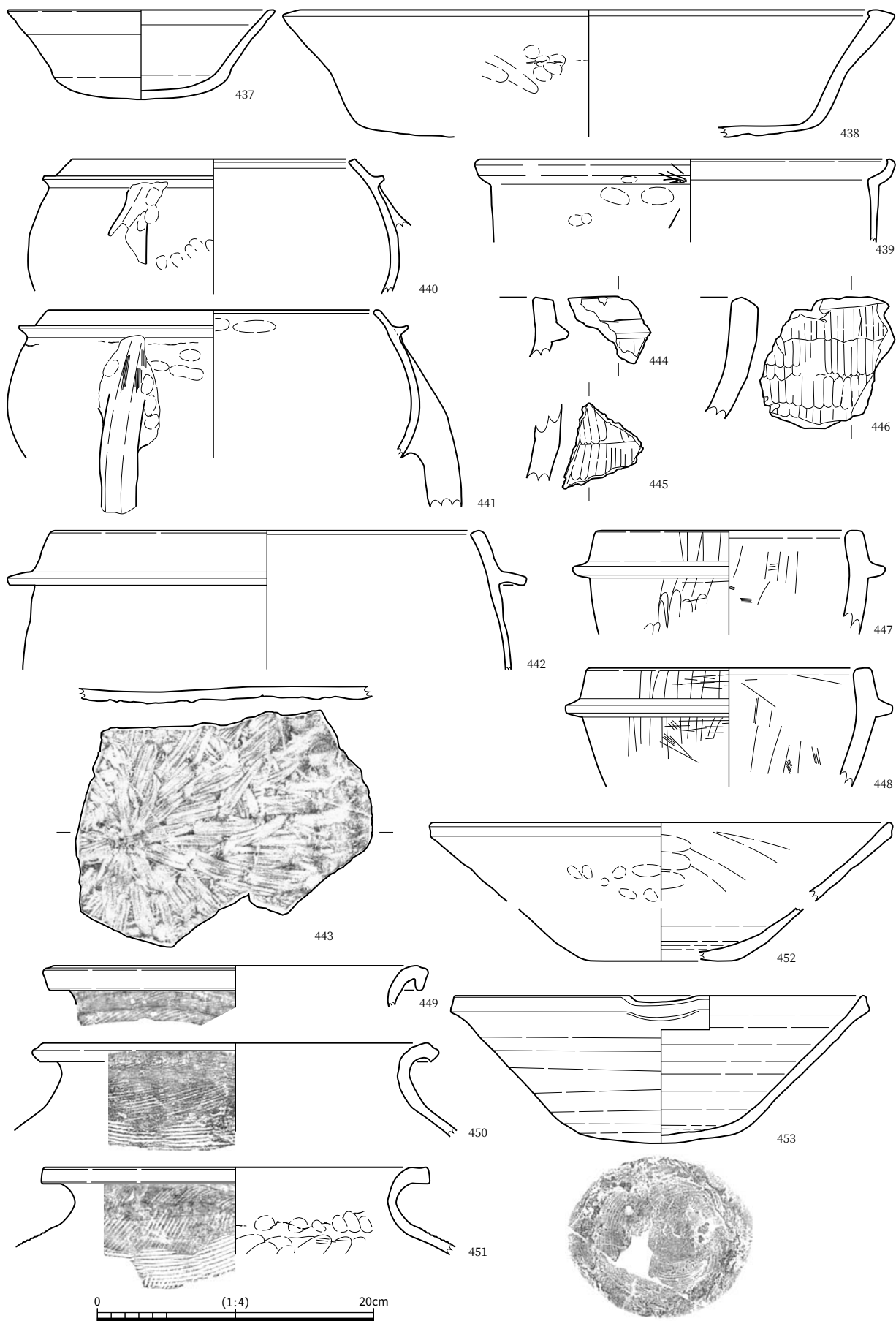
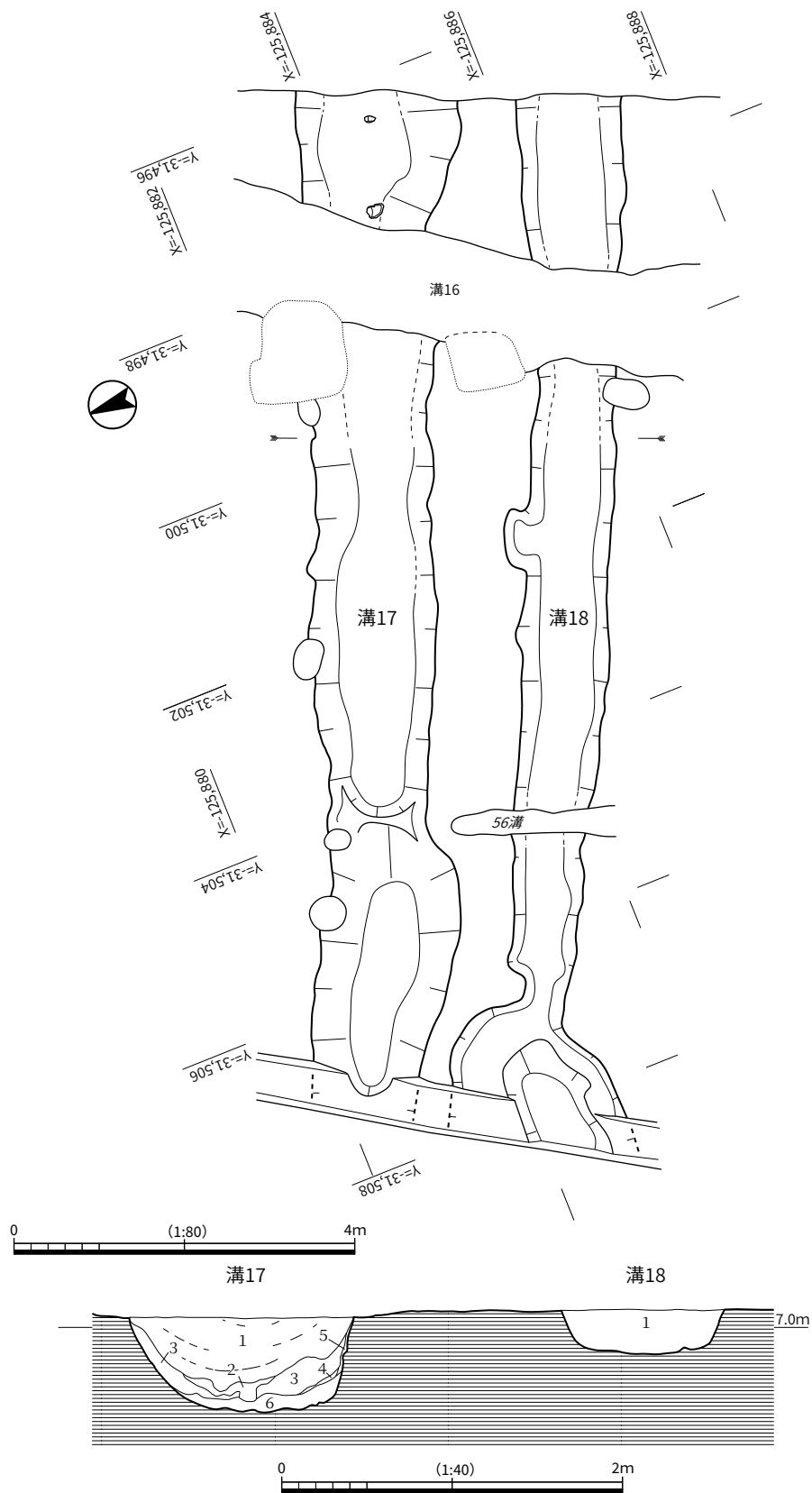


图66 沟16 出土遗物(5)

能性のある個体で、三脚の土師皿と推定する。419～422はいわゆる「輪花椀」で、復原口径11cm程度、器高3.3cm程度の近い値をとる一群で、平坦な底部から直立、あるいは内湾ぎみに体部が立ち上がる。体部には縦筋が施され、比較的残りの良い419・421では5条に復原できる。緻密なミガキが施され、419は見込みに花卉状の暗文を施している。それぞれ細片であり完形に近い個体は含まない。また図示していない細片もある。なお、無高台の椀とした374は縦筋がないことを除けば、形態は輪花椀に類似する。423～425は瓦器の皿で、425はいわゆる「コースター形」で、瓦器では珍しい。426は小型の瓦器椀で破片資料ではあるが作りは丁寧である。435は白磁の、436は陶器の四耳壺と考えられるもので、浙江省系の輸入陶器であろう。なお、青磁、白磁については細片が多数出土している。437～441は瓦質土器で、437・439は鍋、438は盤、440・441は三足釜。442の羽釜は土師器で、443は瓦質土器盤の底である。粃殻の圧痕が残る。444～448は滑石製の石鍋で、口縁、鋳、体部片があるが、穿孔など破片の再利用の痕跡はない。449～451は須恵器の甕で、頸部から体部にかけてタタキ痕跡を残す。452・453は須恵器捏鉢で、453は底部外面に糸切根を残す。図、写真とも掲載していないが、土師器小皿の細片にいわゆる「ての字」状口縁の退化したものがわずかに含まれる。また、鉄釘が2点出土しており、写真のみの掲載となるが、883・884に示した。水溜1と同様に灯明皿もある程度含まれている。列記すると、268・273・274・276・278・288・297・299・300・305・346・362・370・372・402・404・412が該当する。口縁を打ち欠いた可能性のある土師器皿、瓦器椀も列記すると、310・313～315・321・322・325～327・329・344・356・357・359・367・376・378・385・389・395・406・408・410～413・423・424となる。

水溜1同様、溝16においても図示していない破片資料が多数にのぼることから、全体量をイメージするため簡単な計測と計算を行った。瓦器椀、土師皿の大小の3種類の完形資料をそれぞれ10点抽出し、平均重量を算出すると、瓦器椀が143g、土師皿大が127g、土師皿小が40gとなった。図化したもの、個別点数を計測したものを除く瓦器椀の破片資料の総重量は20,640gであったので、単純に割ると144.3となり、重量換算だけでいうとおよそ144個体程度に相当する重量の破片資料が出土したこととなる。個別に計上できた42個体、図示した43個体を加え、229個体以上の瓦器椀が溝16に投棄されたという理解となる。土師皿の場合は土師皿大と判断された破片資料が12,863g、土師皿小と判断された破片資料が26,090g、細片から大小の分別をすることが難しい破片資料が9,284gであった。これも単純な計算に供すると、土師皿大はおよそ101個体分、土師皿小はおよそ652個体分の重量となる(大小比1:6.7)。分類不可の破片資料の重量を、分類した重量比(33対67)で割ると土師皿大が3,066g、土師皿小が6,218gとなる。これをそれぞれ加算し、同様の計算を施すと、土師皿大が125個体分、土師皿小が808個体分となる。土師皿大については図示した32個体、個別に個体数を計上できた22個体を加えると、総数は179個体分となる。一方土師皿小については図示した57個体、個別に個体数を計上できた24個体を加えると、総数は888個体分となる(大小比1:4.9)。水溜1同様、これらはいずれも机上の計算ではあるが、瓦器椀で229個体以上、土師皿大が179個体以上、土師皿小が888個体以上という点数が溝16に投棄されたという理解しておきたい。さらに機械的に計算を進めるとすると、土師皿の大、小では個体数の計算では土師皿小は土師皿大の5倍程度となり、瓦器椀と土師皿大、土師皿小の個体数の比では、土師皿大は瓦器椀のおよそ0.8倍、土師皿小はおよそ3.9倍となる。瓦器椀と土師皿小の比は水溜1と溝16で近いものとなるようであるが、瓦器椀と土師皿大の多少は逆転する。溝16では土師皿大が相対的に少ないということが指摘できるのかもしれない。



- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質細粒砂～極細粒砂にベース層シルトの小ブロック含む 2. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルトブロックの間に10YR6/1 褐灰 シルト入る 3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質細粒砂 4. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルトブロックの間に10YR6/1 褐灰 シルト入る 5. 10YR6/1 褐灰 シルト 6. 10YR5/1 褐灰 シルト～極細粒砂 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質細粒砂～極細粒砂
ベース層シルトの小ブロック含む |
|--|---|

図 67 溝 17・18 平・断面図

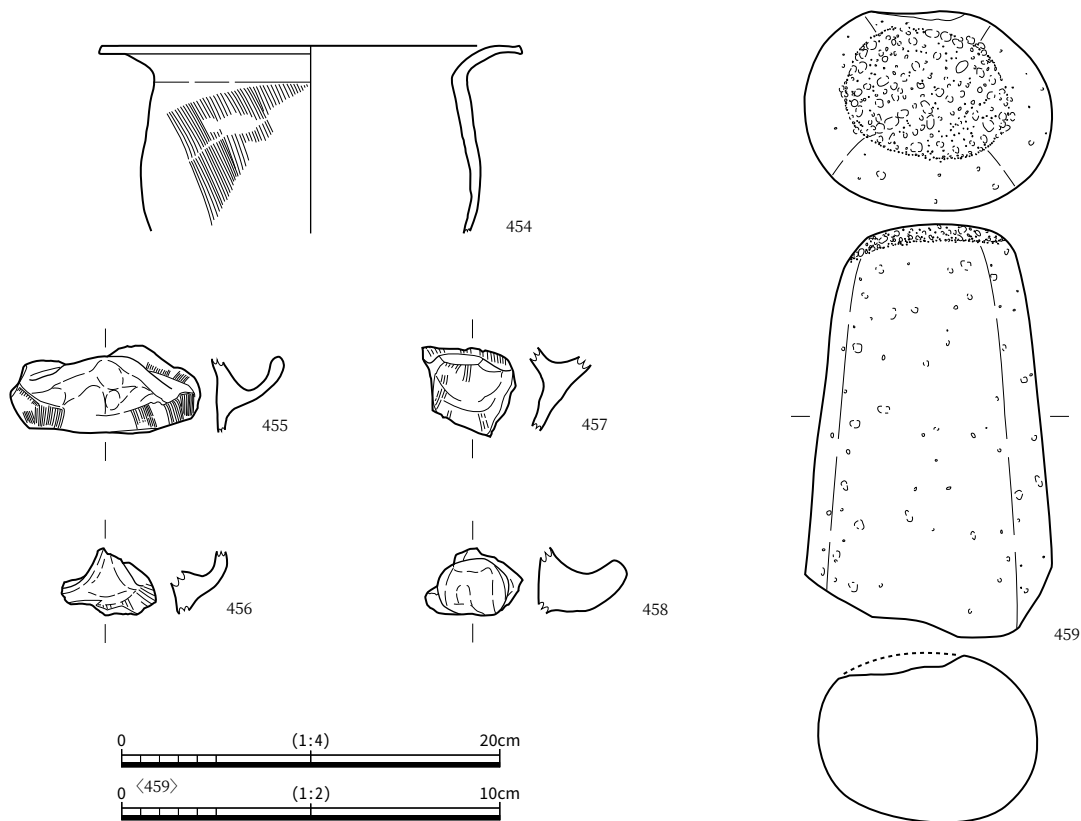


図 68 溝 17・18 出土遺物

溝16に投棄された土器の年代はやや新しいものを含む可能性があるものの、水溜1とほぼ同じ頃と考えられる。しかし土器の総量も大きく異なることに加え、瓦器の輪花椀やミニチュア椀、三脚皿、瓦器のコースター形小皿など、水溜1にはみられない器種・器形も認められる。この違いが意味するところは不明ではあるが、溝16の廃棄段階には器種・器形に選択の余地なく投棄された状況は想定できるかもしれない。ともあれ溝16は比較的規模の大きな溝で、その性格としては区画溝や灌漑水路の可能性が想定される。微高地域5の北側へは続かないことから、調査範囲外となる市道部分で終了するものと考えられるが、この部分では道路下に周辺の水田へ配水するための用水路が設けられている。この灌漑水路が中世段階にまでさかのぼるのであれば、それにとりつく可能性もあろう。さらに溝16にはほぼ重なる位置に現代でもU字溝を用いた水路が設けられていたようで、区画を兼ねた水路であった可能性が高い。ただ上記のように多量の土器が投棄された状況を考えると、耕作域で恒常的に利用されるような灌漑水路の可能性は低く、居住域を区画するような溝であったと考えられる。

溝 17 (図 67・68) 微高地域5の南寄りに東西に流走する溝で、さらに南に並行して溝18が位置する。ともに溝16や、水溜1に切られる関係になる。調査範囲内で確認した長さは12m程度で、幅は東寄りの広いところで約2m、深さは中央東寄りで56cmを測る。底のレベルはやや起伏があり、高いところで6.8m程度、低いところで6.5m程度となり、一方向への傾斜をもつものではない。埋土は最下位に比較的均質なシルト～極細粒砂、中位に泥質の土壌、上位にベース層シルトの小ブロックを含む層があり、滞水状態ののち、最終的には埋め戻されたと考えられる。埋土中からは土器細片を中心に遺物が出土している。古墳時代～古代にかけての須恵器、土師器片があり、うち455～458には土師器の把手を図示した。ほかに写真のみの掲載となるが、鉄滓(895)や片岩系の石材(927)なども出土している。遺構の時期を明確にする出土状況とはいえないものの、奈良時代の遺構である可能性が高い。

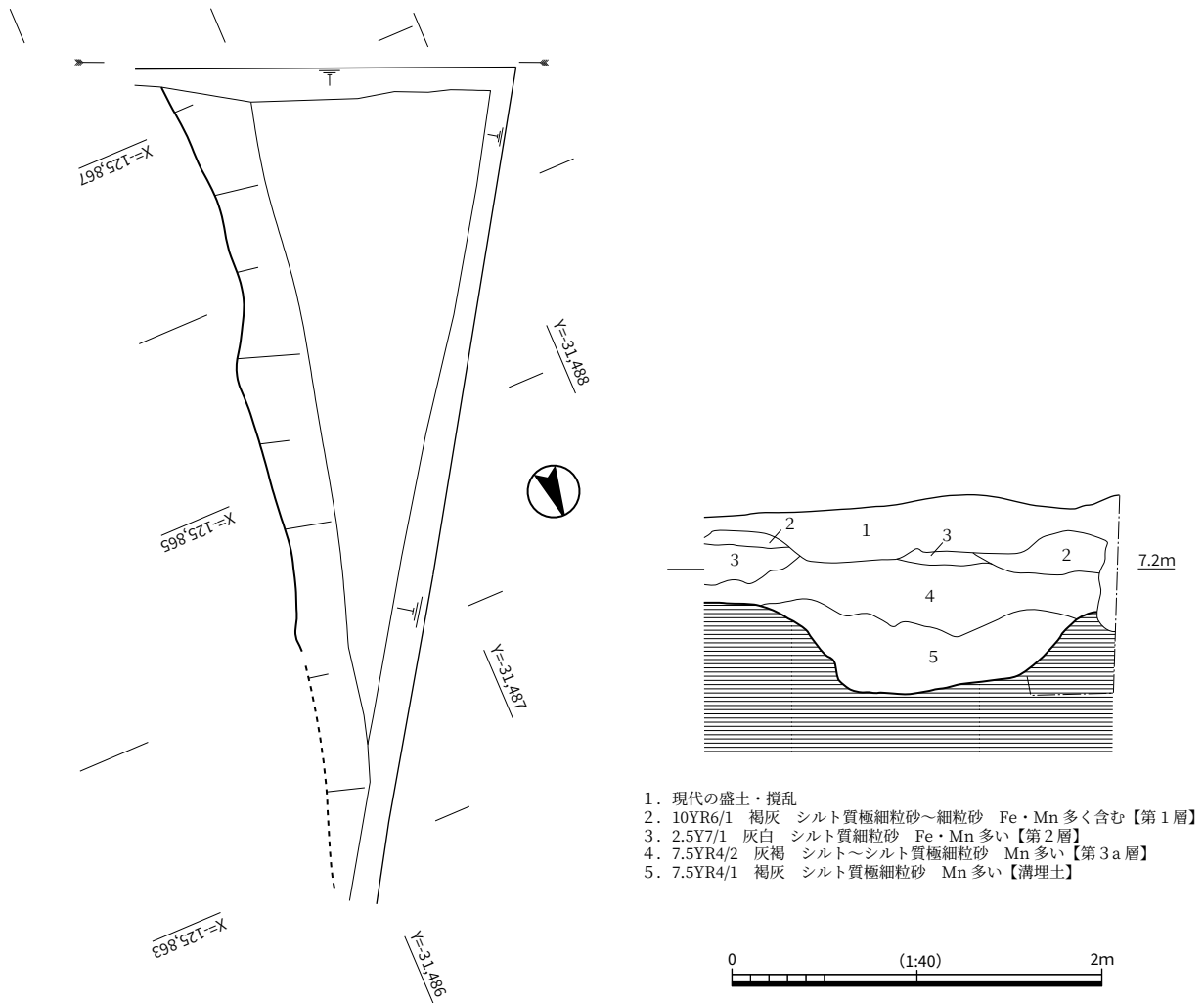


図 69 溝 19 平・断面図

溝 18 (図 67・68、図版 20) 溝17の南に並行する溝で、溝16や水溜 1 に切られている。検出した長さは12m程度で、調査範囲の東西へと延びる。溝17よりわずかに小規模で、中央東寄りの部分で幅約 1m、深さ25cm程度を測る。底面のレベルは凹凸があるものの、おおむね6.8m程度で、ベース層シルトの小ブロックを含む土壌で埋没している。溝18と比べると遺物の出土量は少なく、土器細片を中心とした遺物が出土している。454は土師器甕で、奈良時代のものであろう。459は磨製石斧もしくは石杵で、砂岩製と思われるが、年代は不明である。ほかに、古墳時代から古代にかけての須恵器、土師器片が出土しており、古代のものが主体を占める。出土遺物からは奈良時代の遺構である可能性が高い。

溝17・18はともに奈良時代に営まれた可能性の高い平行する二条の溝であり、その方位は後述する微高地域 7 で確認した奈良時代の大型総柱掘立柱建物(建物 7)に近い。東西方向の広がり不明であり全容を知るには至らないものの、奈良時代の居住域にともなう何らかの区画溝の可能性が高い。微高地域 6 や微高地域 8 にまで延びる大きな区画ではないようで、居住域の内部を区切る小規模な区画であろうか。仮に建物 7 など画する溝であれば、外側の溝がより深いものとなる。

溝 19 (図 69) 溝19は微高地域 5 北側の調査区の南西隅にかかる溝で、調査範囲ではごく一部を検出したにとどまる。平面的に検出できたものではないが、調査区南壁の土層断面で確認したところ、幅 1.5m程度、深さ60cm程度の溝と考えられる。粘土質の土壌で埋没しており、遺物は出土していない。おそらくは市道部分に存在した基幹水路に接続する中世以降の灌漑水路と考えられる。

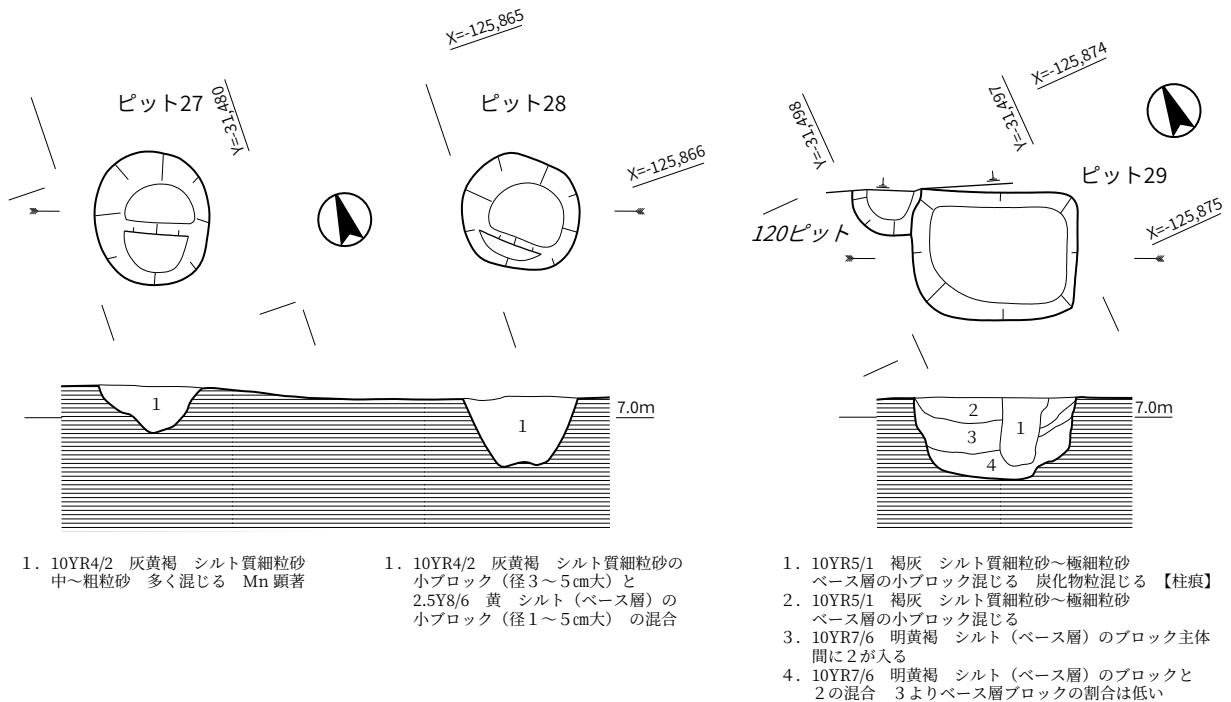
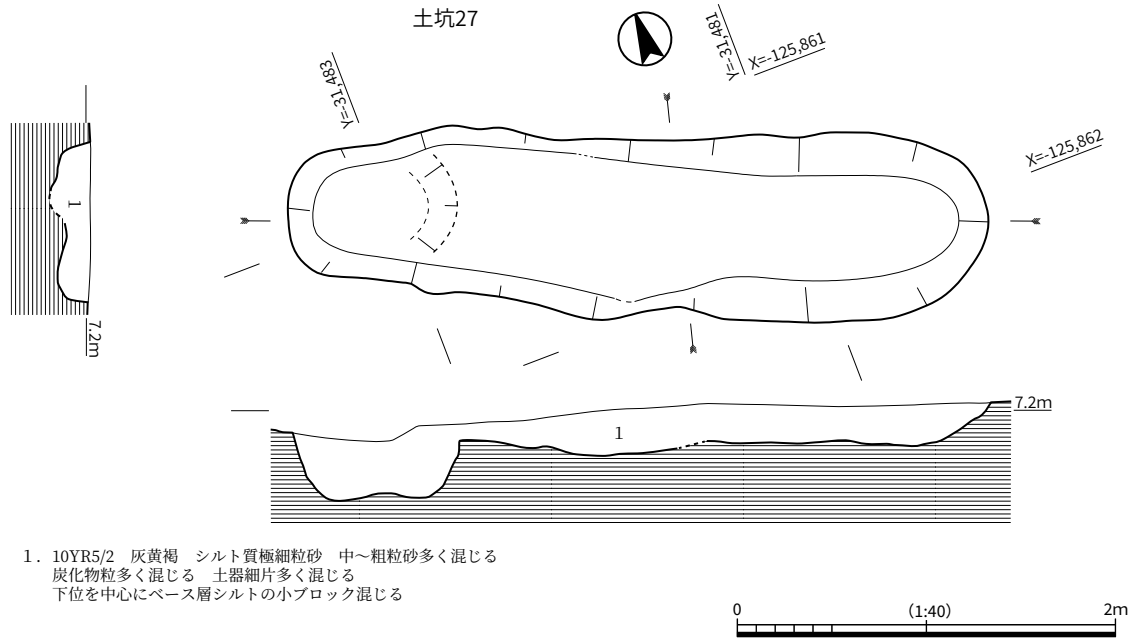


図70 土坑27 ピット27～29 平・断面図

土坑27 (図70) 微高地域5の北端付近に位置する土坑で、弥生時代の方形周溝墓2の周溝埋土上から切り込んでいる。土坑埋土と周溝埋土の区別がつきにくく、一部掘りすぎたところもあったが、長さ3.7m程度、幅0.8m～1m程度の浅い溝状を呈し、西寄り1m程度が一段深くなることを土層断面で確認した。埋土は下位を中心にベース層シルトの小ブロックを含む土壌があり、上位には炭化物粒を多く含む。出土遺物はほぼ古代の須恵器、土師器片で占められており、須恵器坏(460)、土師器甕(461)、流紋岩製の砥石(462)を図示した。ほかに須恵器の宝珠つまみや土師器坏の細片があり、これらの遺物からみて、土坑27は奈良時代のもと考えられる。遺構の性格は不明であるが、井戸4と隣接することから、関連する遺構の可能性が高い。

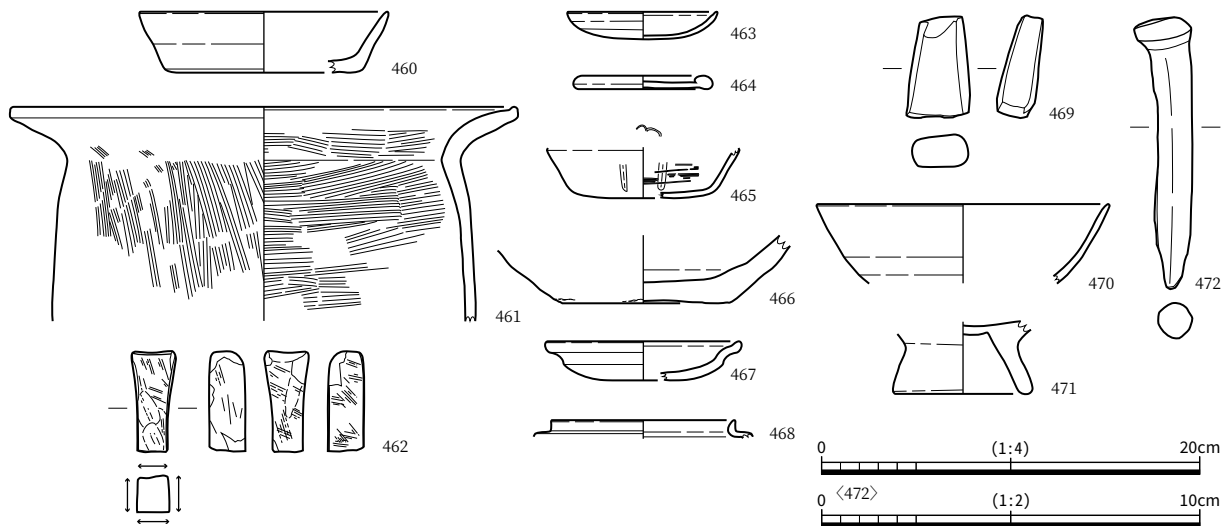


図71 遺構 出土遺物

ピット 27・28 (図70) 微高地域5の北西角付近に位置するピットで、2基のピットが芯々距離で2m離れて分布する。規模の似たピットが並んでいたことから掘立柱建物の柱穴を構成する可能性を想定したが、ほかの柱穴は確認しておらず、建物を構成するかは不明である。ピット27は長径0.7m、短径0.6mの楕円形で、深さは25cm程度である。粘土質の土壌を埋土とする。28ピットは直径60cmの円形で、深さは38cmを測る。第3a層に類似する土壌とベース層シルト、それぞれの小ブロックからなる土壌を、埋土にもつ。遺物はピット27から須恵器細片が1点出土したのみである。遺構の時期を特定するには至らない。

ピット 29 (図70) 微高地域5の中央付近南寄りに位置するピットで、比較的大型の柱穴と想定した遺構である。長辺0.9m、短辺0.7m程度の隅丸方形で、深さ43cmを測る。埋土の断面観察では柱痕と思われる土質を確認したが、周辺に関連する柱穴はなく、建物を構成するかは不明である。須恵器、土師器の細片のほか、鉄釘(472)が出土しているが、遺構の時期を明確にできるものではない。

その他の土坑、ピット (図71) 出土遺物を図示したものに土坑28~30、ピット30~33がある。土坑28は溝16から続く広い土坑で調査区端にあり全容は不明である。比較的多くの遺物が出土しており、土師器皿(463)、いわゆる「コースター形」の瓦器皿(464)、瓦器の輪花椀(465)のほか、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁などの細片がある。土坑29は方形周溝墓5の北にあるやや深い土坑で、一部を検出したにとどまる。須恵器捏鉢の底部(466)が出土しているほか、土師器、瓦器椀の細片が出土している。土坑30は方形周溝墓4の周溝を切る位置にあるもので、土師器の細片のほか、469に示した土師器の支脚と思われる土製品が出土している。ピット30は土坑29の西にある小さな遺構であるが、瓦器椀や土師器の細片などが出土した。467に示した土師器皿はいわゆる「ての字」状口縁をもつ。ピット31は土坑30の西に接する小規模な遺構で、土師器細片とともに須恵器小壺の口縁部(468)が出土している。ピット32は土坑29の西に位置する小規模な遺構で、土師器細片とともに白磁碗の破片(470)が出土している。ピット33は水溜1の法面で検出した小穴で、水溜1の一部である可能性もある。471に示した土師器台付皿の高台が出土している。また写真図版のみの掲載としたが、便宜的に遺構として名称を付した石材集積1からは926の結晶片岩が出土している。長さ25cmほどの材で、重量は1.7kg程度の大型の材である。遺構検出面の直上で検出しており、帰属時期を明確にはしがたいが、中世段階の土師器小皿細片が接して出土している。

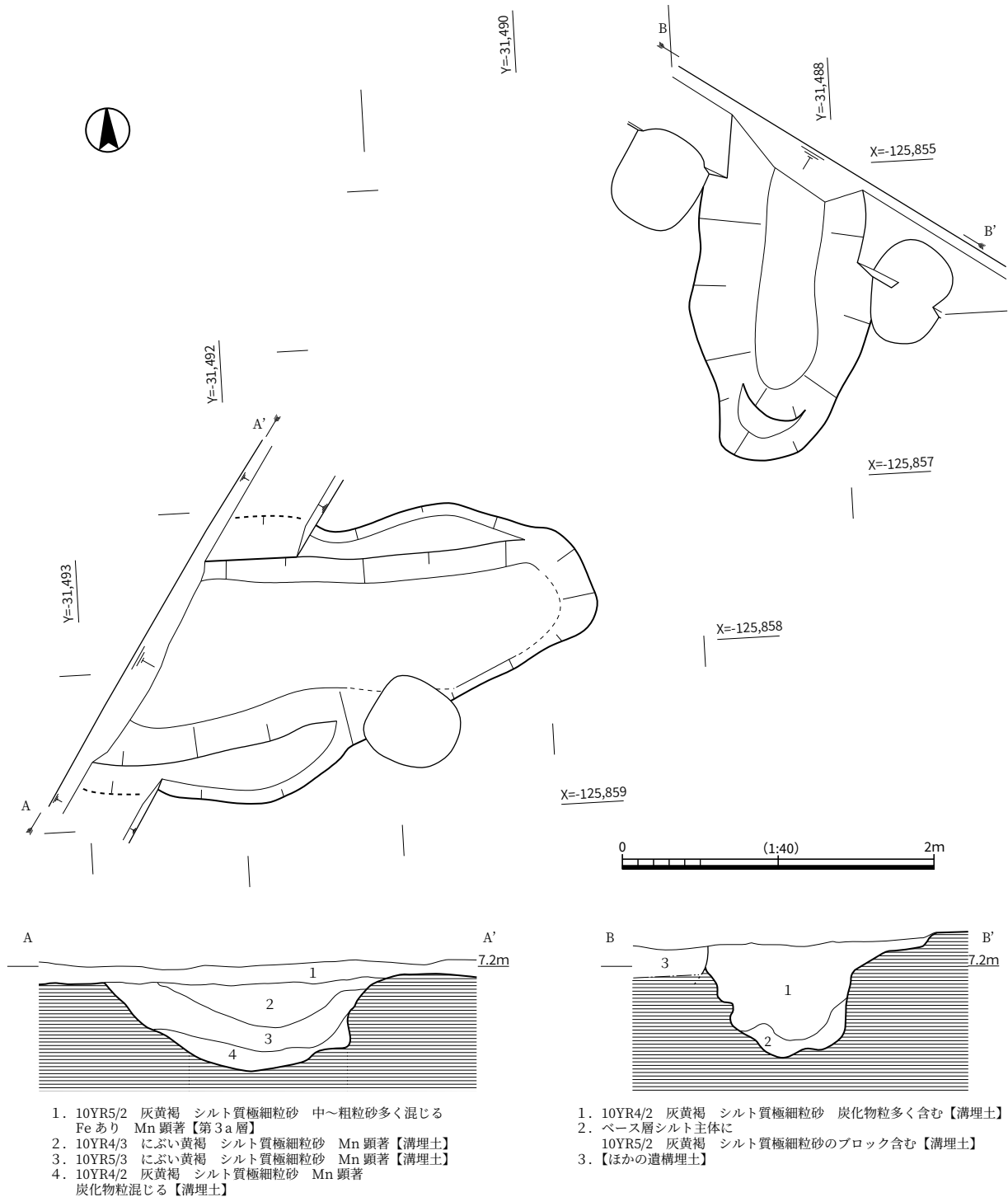


図 72 方形周溝墓 2 平・断面図

方形周溝墓 2 (図 72・76、図版 20) 微高地域 5 の北西角部分に位置するもので、方形周溝墓の周溝を部分的に検出した。建物 3 や 4 の柱穴が周溝埋土を切る。検出した部分は周溝の東辺と南辺の一部で、東辺は長さ約 2 m、南辺は長さ約 3.5 m にわたる。二つの溝が角部分で途切れた状況で検出したが、今回の調査で確認した方形周溝墓の多くは周溝の角部分が極端に浅くなっており、それらと共通するものと考えられる。全体の規模は不明ではあるが、ほかの周溝墓やほかの調査区にかかっていないことからみて、長辺(南北方向)が 10 m 強、短辺(東西方向)が 10 m 弱の長方形になるものとする。埋葬施設は認められず、おそらく削平された墳丘上に営まれていたものと推測する。周溝の深いところでは検出

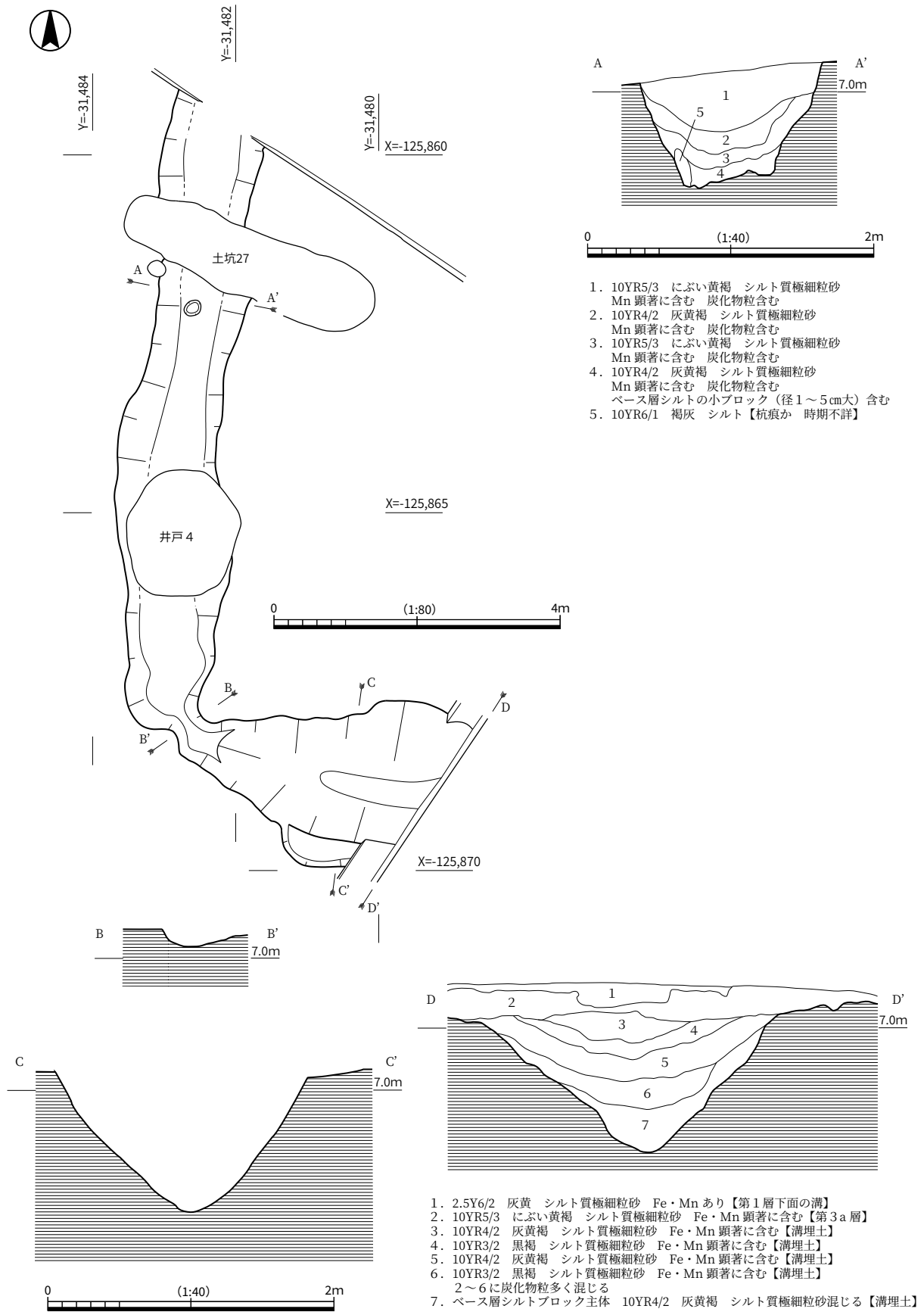


図 73 方形周溝墓 3 平・断面図

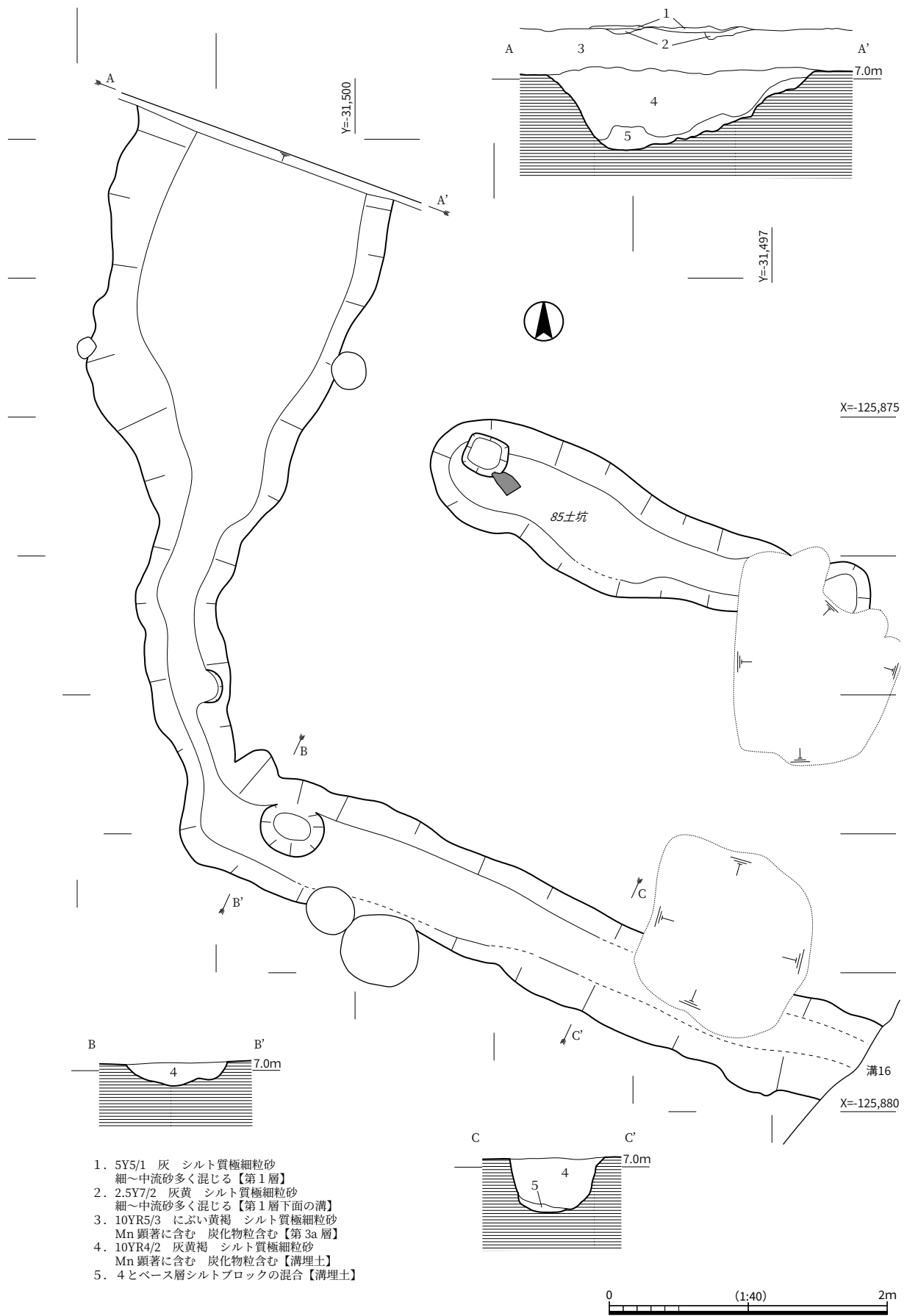


図 74 方形周溝墓 4 平・断面図

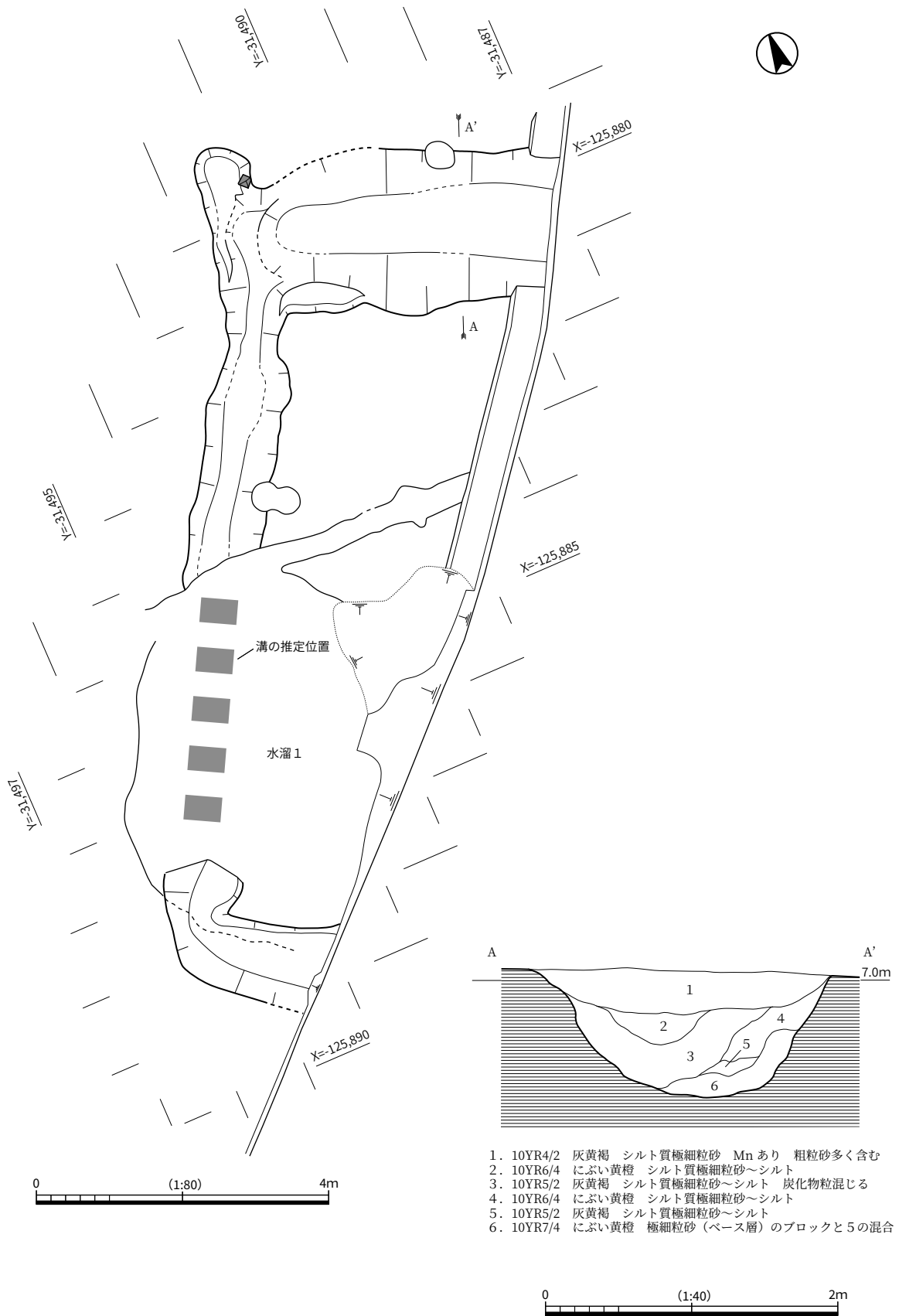


図 75 方形周溝墓 5 平・断面図

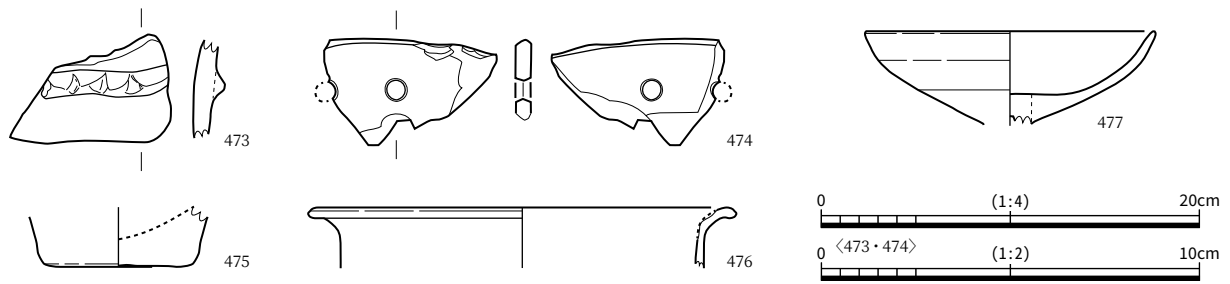


図76 方形周溝墓 出土遺物

面から50cm～70cmの深さに達しており、調査区外ではさらに深くなる可能性もある。溝埋土は最下位にベース層シルトのブロックを含む土壌が部分的にあり、上位は比較的泥質の土壌で埋没している。遺物には土師器細片がわずかに出土したが、遺構に伴うものではない可能性が高い。

方形周溝墓3 (図73・76、図版21) 微高地域5の北東角部分に位置するもので、方形周溝墓の周溝を部分的に検出した。奈良時代の井戸4や土坑27が周溝埋土を切る。検出した部分は周溝の西辺と南辺の一部で、西辺は長さ9m程度、南辺は長さ4m程度を検出した。周溝のコーナー部分が極端に浅くなるのはほかの方形周溝墓と共通する特徴である。埋葬施設はおそらく削平された墳丘上に営まれていたものと考えられ、遺存していない。南辺の深いところでは深さ1mに達し、西辺では深さ80cmに達する。周溝埋土は最下位にベース層シルトのブロックを含む土壌があり、上位は泥質な土壌で埋没している。出土遺物には図示した縄文晩期の深鉢片(473)と石庖丁片(474)のほか、弥生土器の細片などがあるが、直接遺構の時期を示すものであるかは不明である。

方形周溝墓4 (図74) 微高地域5の中央南寄りに位置するもので、調査範囲内では周溝の西辺と南辺を検出した。東側に溝16があり、南東角から東辺は溝16により失われたものと考えられる。西辺、南辺とも長さ約5mにわたり検出し、周溝の深さはコーナー部分で10cm程度、西辺の深いところで50cm程度、南辺の深いところで40cm程度であった。埋葬施設は削平を受けたと考えられ、遺存していない。周溝埋土はほかの周溝墓と類似した様相であり、最下位にベース層シルトのブロックを残す層があり、上位は泥質の土壌で埋没する。出土遺物にはおそらく後世の混入と思われる土器細片がわずかに出土したのみで、遺構に伴うと考えられるものはみられない。

方形周溝墓5 (図75・76、図版21) 微高地域南東部分に位置するもので、水溜1に周溝の一部を切られているものの、北辺、西辺、南辺の一部を検出した。今回の調査では一辺の規模を確認できた唯一の例となる。南北方向の西辺は長さ10mで、北辺は4m、南辺は2m程度を検出した。西辺は全体的に深さ50cm程度、北辺は深さ80cmに達するが、コーナー部分が極端に浅くなることはない。埋葬施設は削平により失われたものと考えられる。周溝埋土はほかの周溝墓とほぼ同じであり、掘削段階の残土と思われるベース層シルトのブロックを下位に残し、上位は泥質の土壌で埋没する。出土遺物には弥生土器の底部(475)、甕口縁部(476)のほか、古墳時代の土師器高坏(477)があり、須恵器細片も含む。方形周溝墓2～5については時期を決める根拠を欠くが、方形周溝墓1の南側に列状に分布することから、弥生時代中期、Ⅱ様式に属するものと考えられる。

包含層出土遺物 (図77) 微高地域5の遺物包含層に相当する第3a層からは弥生時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが多く出土しており、その一部を図77に示した。478～480は奈良時代の須恵器で、481は古墳時代後期の須恵器坏蓋。482は奈良時代の土師器坏。483は土師器の把手であるが、穿孔に近い切込みが施されている。484は把手のつく土師器の鍋。485は中世土師器の皿。486は白磁の

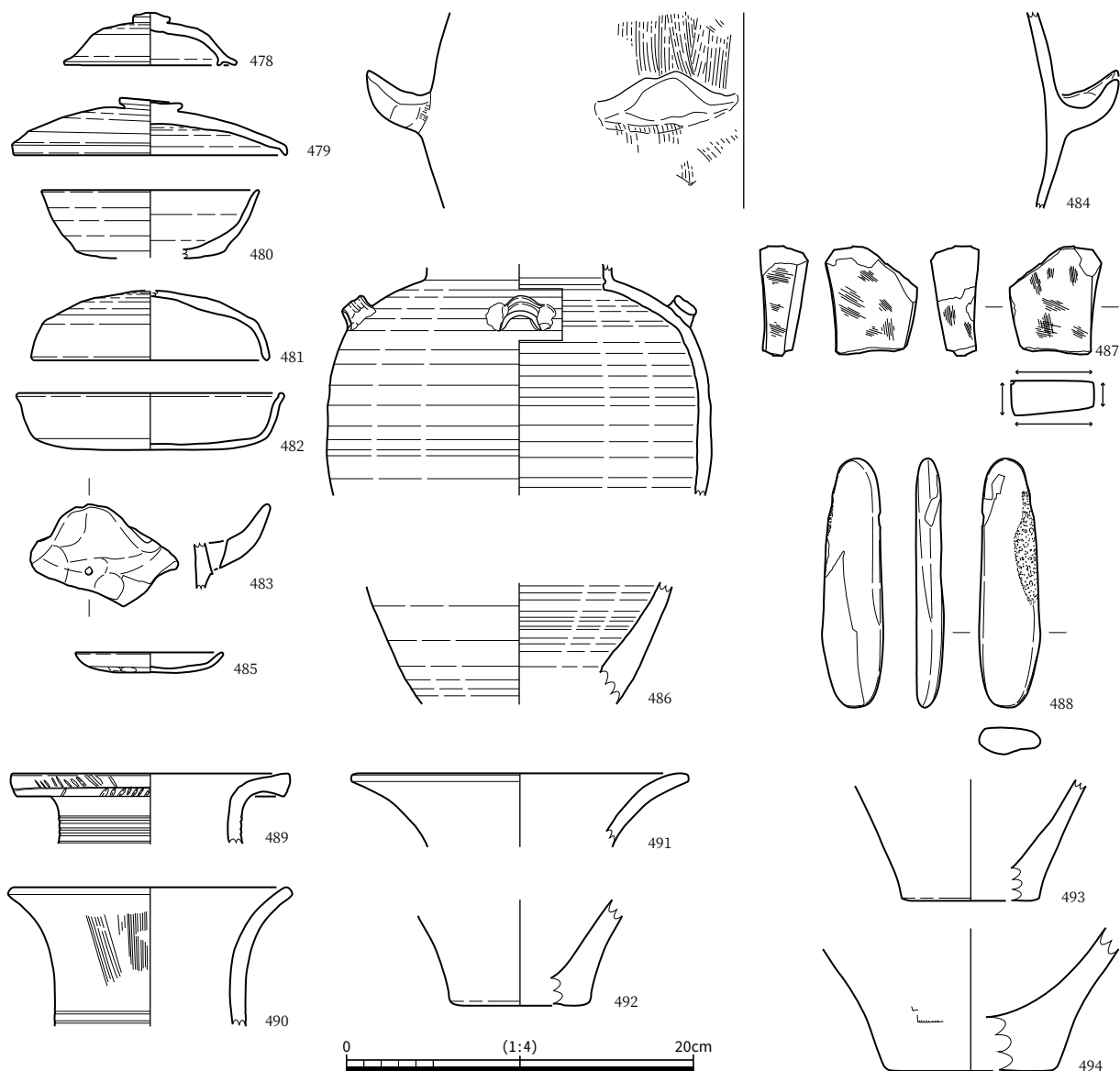


図 77 包含層 出土遺物

四耳壺で、肩から胴部の破片と、胴部下半の破片があり同一個体と思われる。487は砥石で流紋岩系の石材である。488は頁岩製のへら状石製品と仮称するもので、今回の調査では3点出土している。489～494は弥生土器で、壺の口縁部と底部になる。写真のみの掲載としたものには880の鉄釘、887・890の鉄片、911・912の白磁椀細片がある。総じて奈良時代と中世の遺物が目立ち、弥生土器の細片も含む。

小結 微高地域5は微高地域4・7・8とともに微高地の最高所付近にあたり、遺構の密集度が最も高い。弥生時代の方形周溝墓は微高地の軸に沿って2列に並んでいるが、出土遺物は少なく、調査範囲内では住居など居住域は確認していない。奈良時代では井戸が注目され、墨書土器や製塩土器の出土がこの周辺遺構を含めた性格を示している。ただ、複数検出した掘立柱建物に確実に奈良時代のもので判断できるものがなく、居住域の構成としては不明な部分を残す。掘立柱建物については古墳時代に帰属する可能性もある。中世では水溜と溝から多量の土器が出土した。隣接地に居住域の中心部分が存在し、13世紀中葉頃の廃絶に伴い投棄された可能性があるが、溝16で算出した瓦器椀229個体以上、土師器大皿179個体以上、土師器小皿888個体以上という数量が一般的な集落での使用量・廃棄量を示すものであるかどうかは検討を要する。

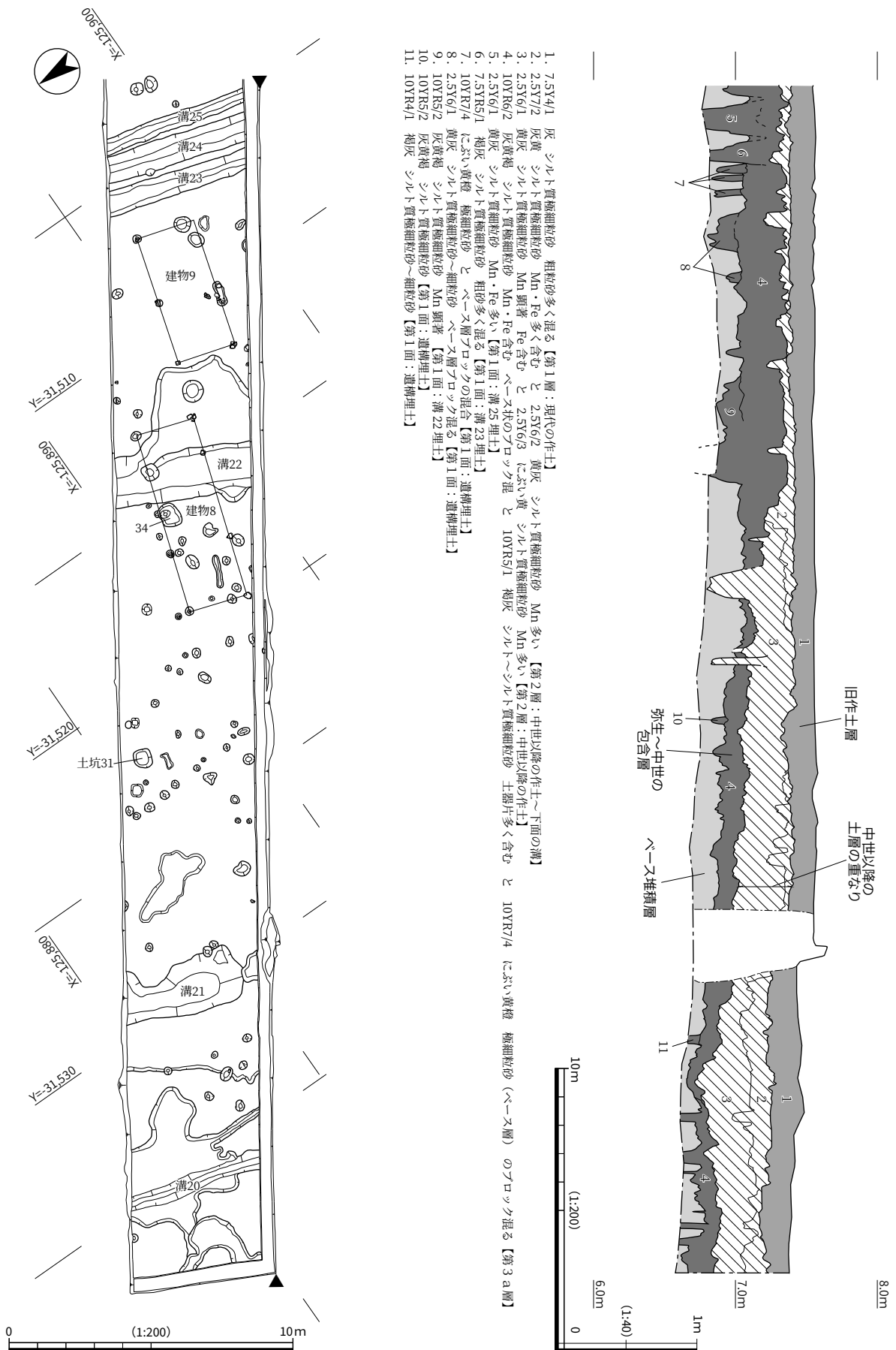


図 78 微高地域 6 全体平・断面図

第7項 微高地域（6）

概要（図78） 微高地域6は事業地内中央西寄りの側道部分の調査区にあたり、北に微高地域5、西に微高地域2、東に微高地域7が位置する。調査時は19-1-7トレンチとして調査した範囲の西半分に相当し、図86に示した溝26、ピット35付近までを含む。微高地の最高所から西へ緩やかに下がる地形

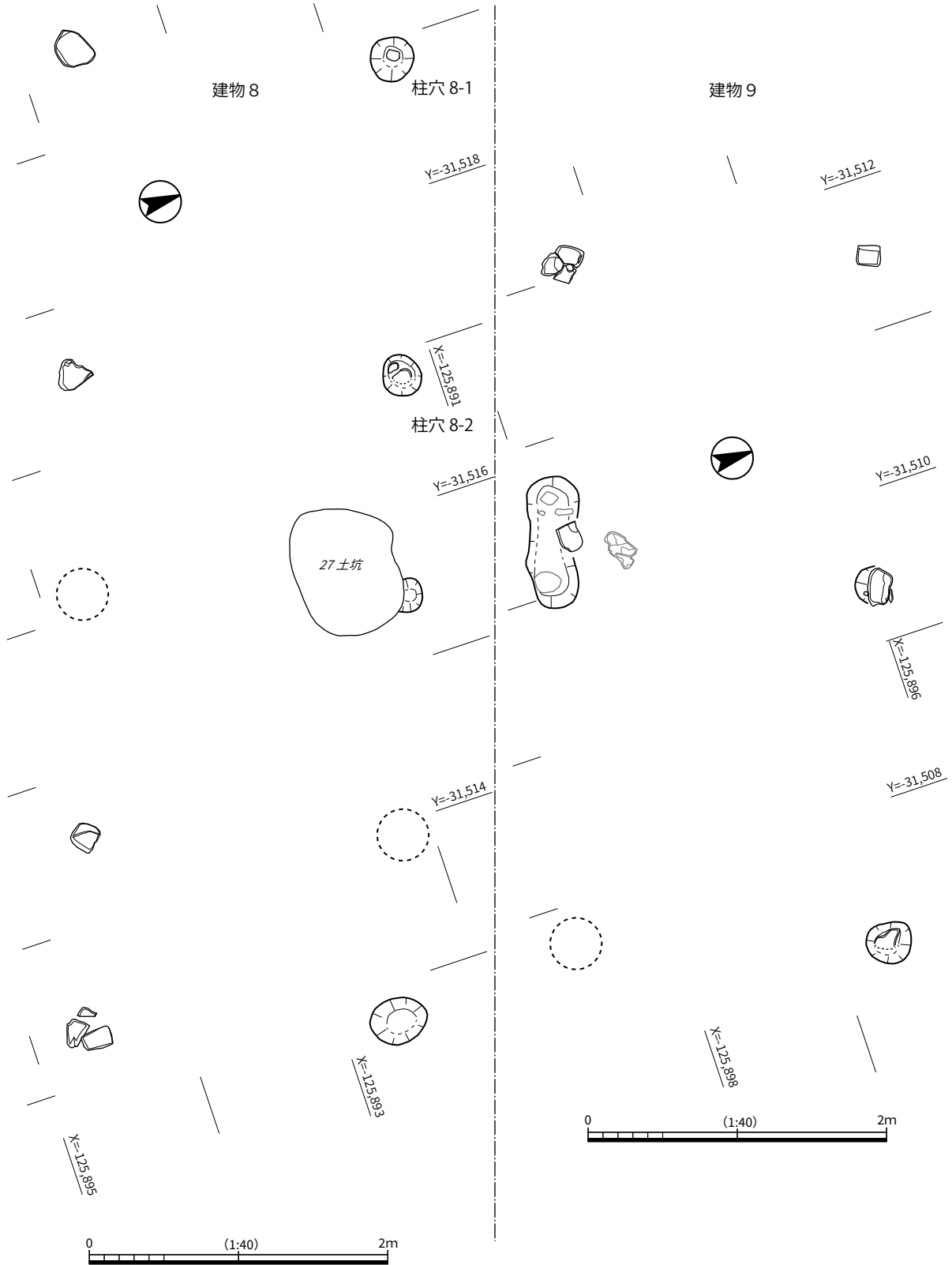


図79 建物8・9 平面図

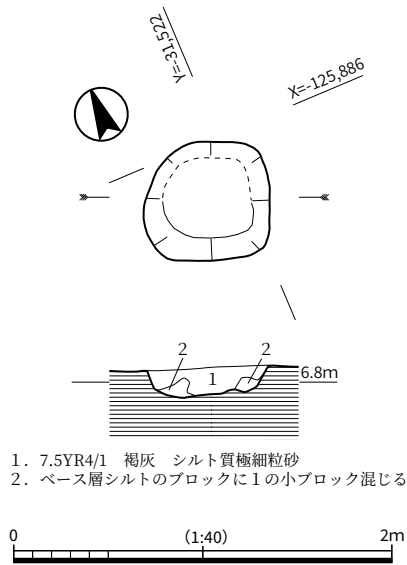


図 80 土坑 31 平・断面図

を呈しており、遺構検出面の標高は6.75m～7.05mを測る。地形の高い範囲では第2層が薄く、地形の低い範囲では厚い。逆に地形の高い範囲では第3a層が厚く、低い範囲では薄いものの、全域で第3a層を除去することで遺構面を検出した。微高地最高所と比べると遺構分布はやや散漫となり、遺構数はおおむね110基を数えた。礎石建ち、もしくは掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどがあり、各遺構出土のものほかに包含層からも多くの遺物が出土している。

建物 8 (図 79) 微高地域 6 の中央東寄りに位置する建物である。調査時に建物としては認識していなかったが、ピット内部に石材を納めるものや、上面を平坦に据える石材が規則的に分布することから建物の可能性を考慮し、報告する。東に柱列方向を同じくする建物 9 があり、溝 22 と重複する関係になるが、溝 22 の埋没後に石材が置かれている。調査範囲内で完結しない可能性もあるものの、検出した部分では桁行 4 間、梁行 1 間の柱配置をもつ東西棟で、うち礎石のみ認められるもの 4 基、柱穴が確認できたもの 4 基で、うち 2 基は柱穴底に石材を配置する。建物規模は芯々距離で、桁行 7.1m、梁行 2.1m を測り、方位は座標北より 18.3° 東に振れている。柱間寸法は桁行で 1.4m、1.8m 前後、2.2m とばらつきがある。柱穴はおおむね直径 30cm 前後の円形を呈するものであり、検出面からの深さは 20cm 程度を測る。南側の柱列は柱穴がなく、20cm～30cm 幅の扁平な石材が置かれている。出土遺物は柱穴の埋土に含まれた土器細片のみとなり、瓦器、須恵器、土師器の細片がある。おおむね中世の遺物であり、建物 8 は中世段階の遺構と考えられる。

建物 9 (図 79) 建物 8 の東側で、方向をほぼ同じくする柱列、石材列から建物遺構の可能性を想定し、建物 9 として報告する。検出した部分は桁行 2 間、梁行 1 間の柱配置をもつ東西棟で、うち礎石のみ認められるもの 3 基、柱穴が確認できたもの 2 基で、柱穴底に石材を配置する。建物規模は芯々距離で、桁行 4.6m、梁行 2.05m を測り、梁行規模は建物 8 とほぼ同じである。方位は座標北より 16.8° 東に振れている。柱間寸法は桁行で 2.3m 程度となるが、南側の柱列ではばらつきがある。柱穴はおおむね直径 30cm 前後の円形を呈するものであり、検出面からの深さは 10cm 程度を測る。出土遺物は全くみられなかったが、建物 8 と類似する様相から中世段階の建物と考えられる。

建物 8、9 とも建物と断定する根拠が整っているものではなく、中世段階の簡易な礎石建ち建物の可能性を指摘するにとどめたい。

土坑 31 (図 80) 微高地域 6 の中央付近で検出した土坑で、周囲には小規模なピットが散漫に分布する。一辺 0.6m 程度の隅丸方形を呈し、深さは検出面から 15cm 程度である。内部から図 84-508 に示した土師器甕の口縁部から肩部分が埋納されていた。古墳時代前期に帰属するものと考えられるが、周囲に同時期の遺構の分布は不明瞭で、土坑の性格も不明である。

溝 20 (図 81) 微高地域 6 の西寄りで、調査区を横断する南北溝のひとつである。土層断面の検討では不整形な浅い落ち込みを切る形で掘削された溝と確認できた。幅 0.4m～0.6m 程度、深さは 30cm 程度である。底のレベルは標高 6.5m 程度で多少の高低差はあるもののおおむね平坦である。灰白色のシルトで埋没しており、須恵器、土師器、平瓦の細片がわずかに出土したのみである。

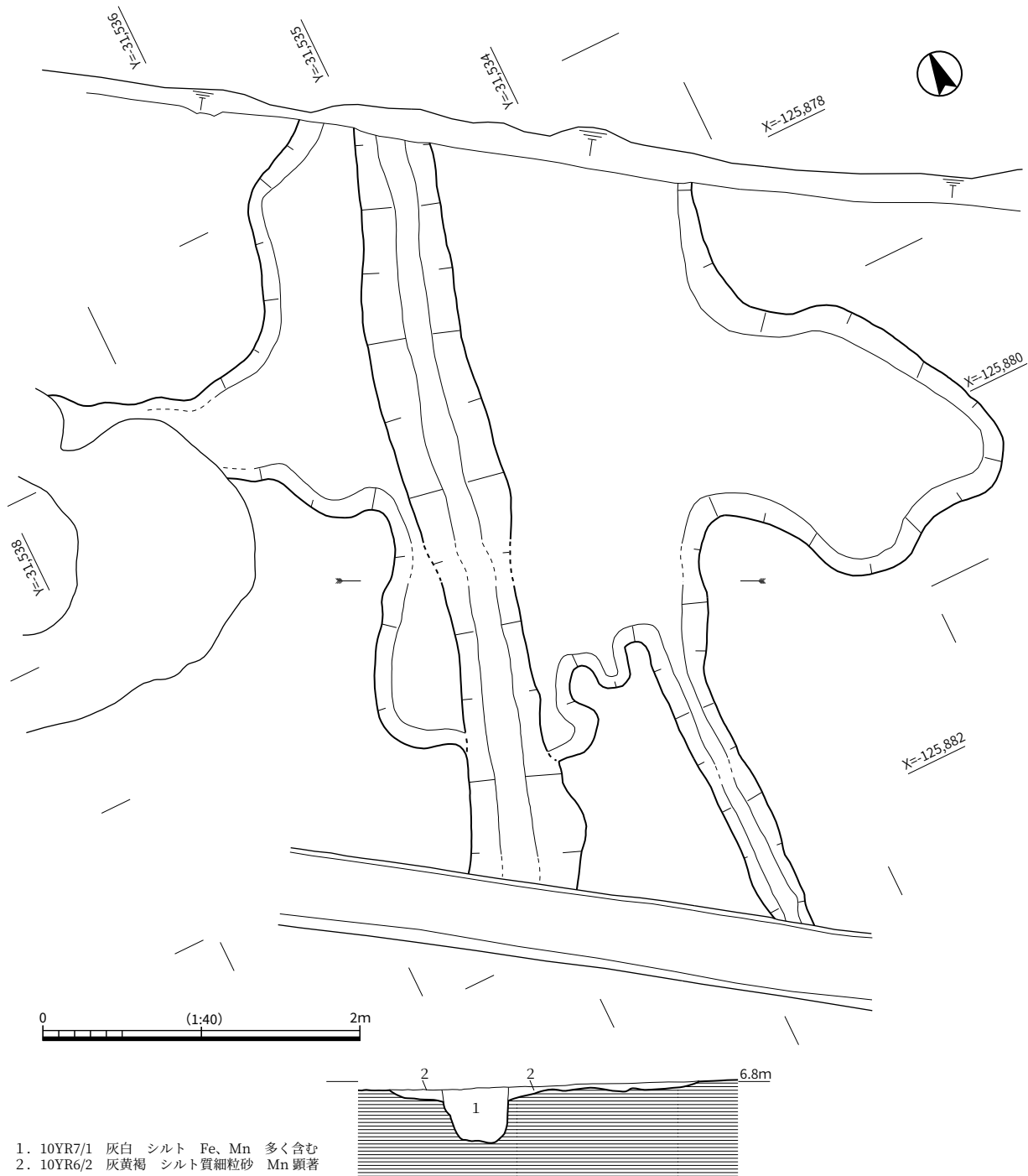


図 81 溝 20 平・断面図

溝 21 (図 82) 溝20の東側に位置する南北方向の溝である。南端が別の遺構に切られており、調査範囲の南へ延びるかは不明である。検出した範囲では幅 2 m程度、深さは70cm程度と比較的規模の大きな溝である。埋土は下半にベース層のブロックを含む層があり、掘削時の残土と考えられる。上位は泥質の土壌で埋没する。出土遺物は古墳時代のものを含む須恵器細片、古代から中世のものを含む土師器細片のみで、時期も明確にしがたいが、中世段階の遺構と推測する。

溝 22 (図 83) 微高地域 6 の東寄り、建物 8 と重複する位置にある溝で、切り合い関係では建物 8 に先行する。浅く広い部分とやや深く南北に延びる部分があり、調査時には確認できなかったが時期の異なる遺構が重複している可能性もある。深い溝状の部分は幅1.8m程度、遺構検出面からの深さは

40cm程度を測る。浅い部分は東西方向に5m程度、南北方向に3.5m程度の台形状で、深さは10cm程度であるが、一部、土坑状に深くなる部分があった。埋土は深い部分の最下位にベース層シルトのブロックを含む層があり、上位は泥質な土壤で埋まる。遺物は比較的多く出土しており、細片が主体を占める中で、図化し得たものを図84-495~499に示した。奈良時代の須恵器、土師器と古墳時代の須恵器がある。495・496は須恵器坏Bで、495は底部外面に一条の火襷が認められる。496は高い高台をもち、外面に

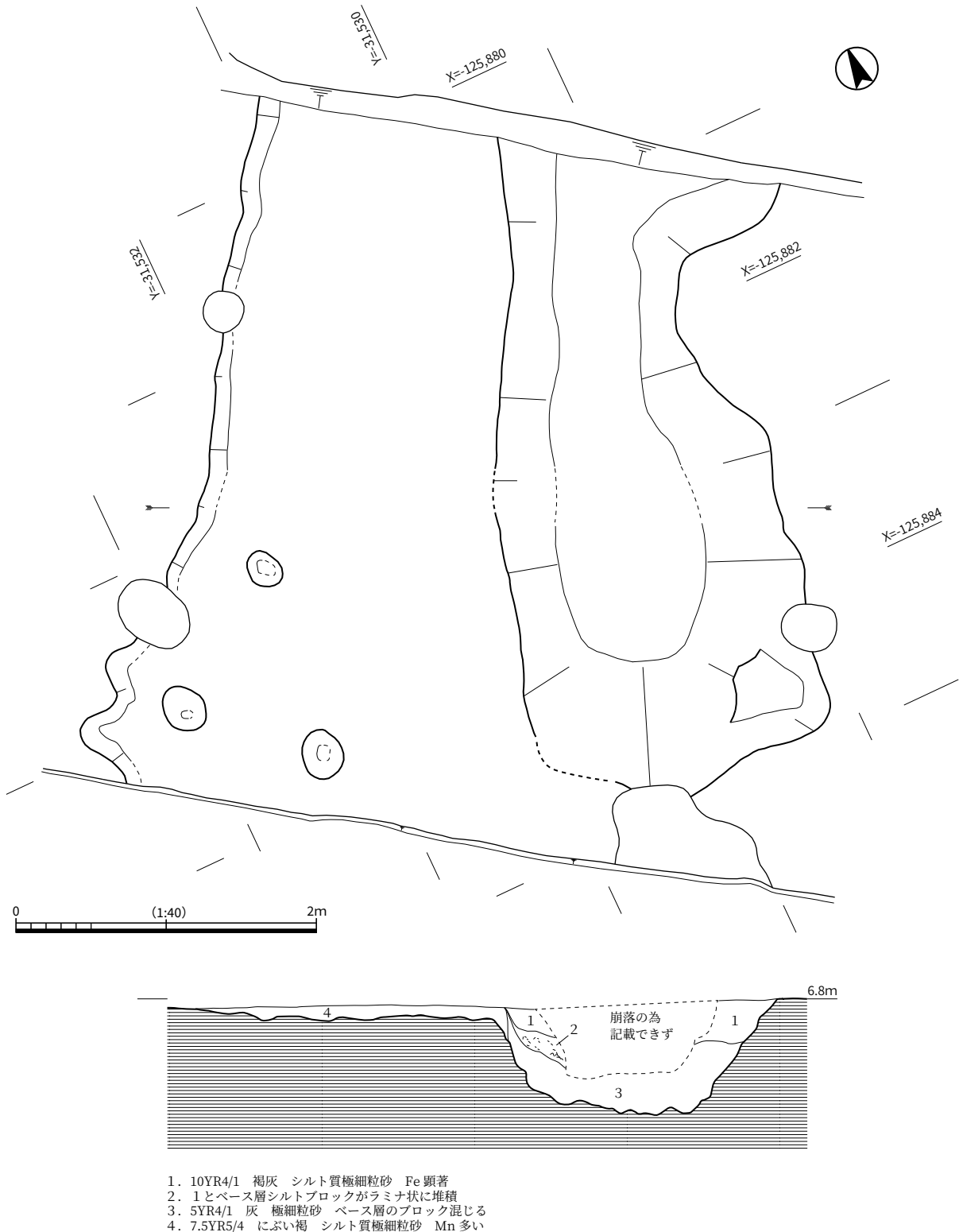
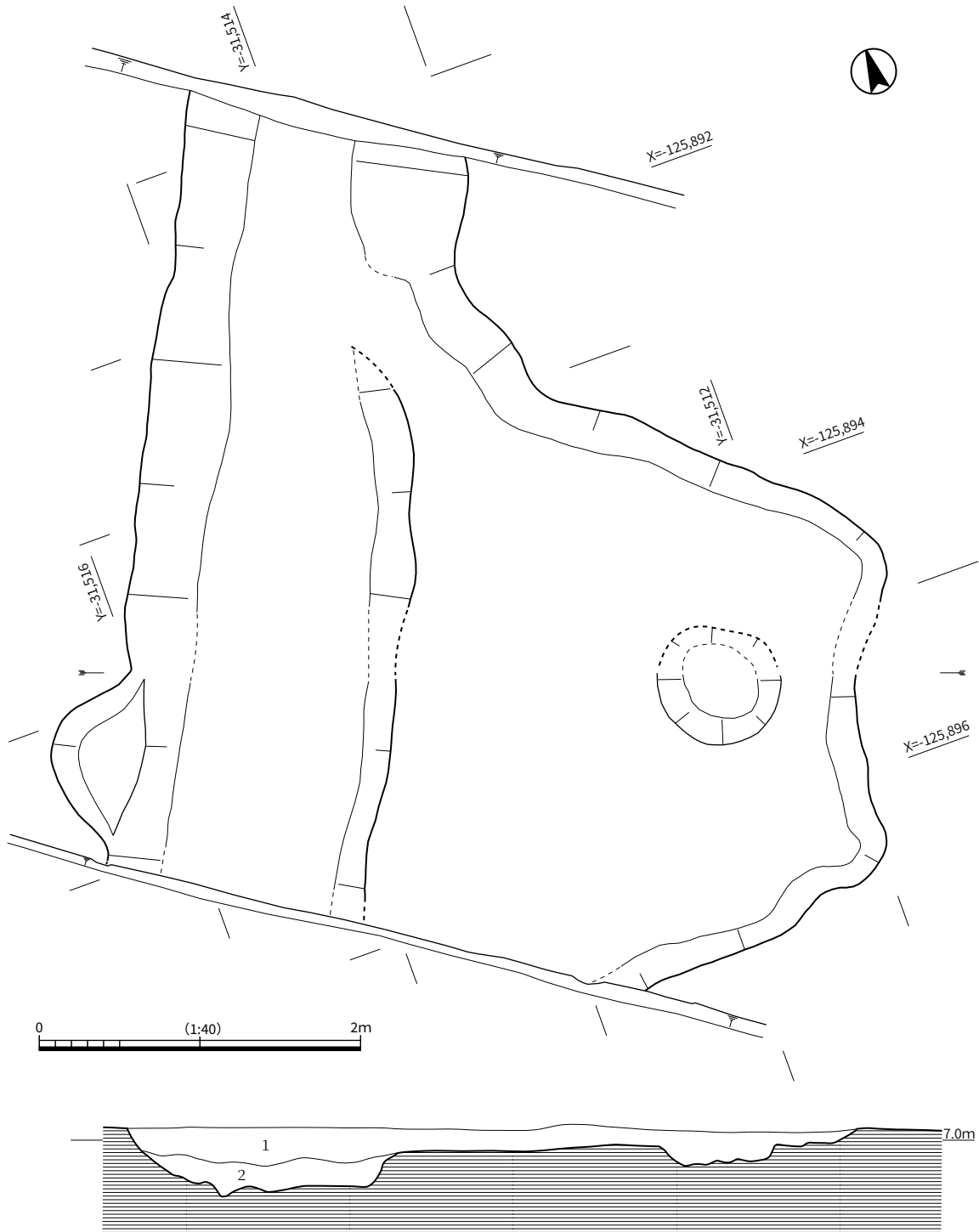


図 82 溝 21 平・断面図

わずかに自然釉がかかる。497の須恵器鉢は鉄鉢風の口縁の一部をへこませ片口にしたもので、底部は回転ヘラケズリの痕跡を明瞭に残す。499は土師器皿で、口縁端部内面をわずかに肥厚させる。また器壁の摩滅が著しく、底部外面のヘラケズリは認められるものの、暗文の有無については不明である。498はMT15型式段階の須恵器坏身で、焼成が甘く、色調は灰白～にぶい橙色を呈し、底部外面に×のヘラ記号を残す。溝22の年代については、古墳時代の遺物を含むものの、最も遺物量の多い奈良時代中葉頃の遺構と考えておきたい。



1. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細粒砂 粗粒砂多く混じる
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質細粒砂 下位にベース層シルトブロック多く混じる

図 83 溝 22 平・断面図

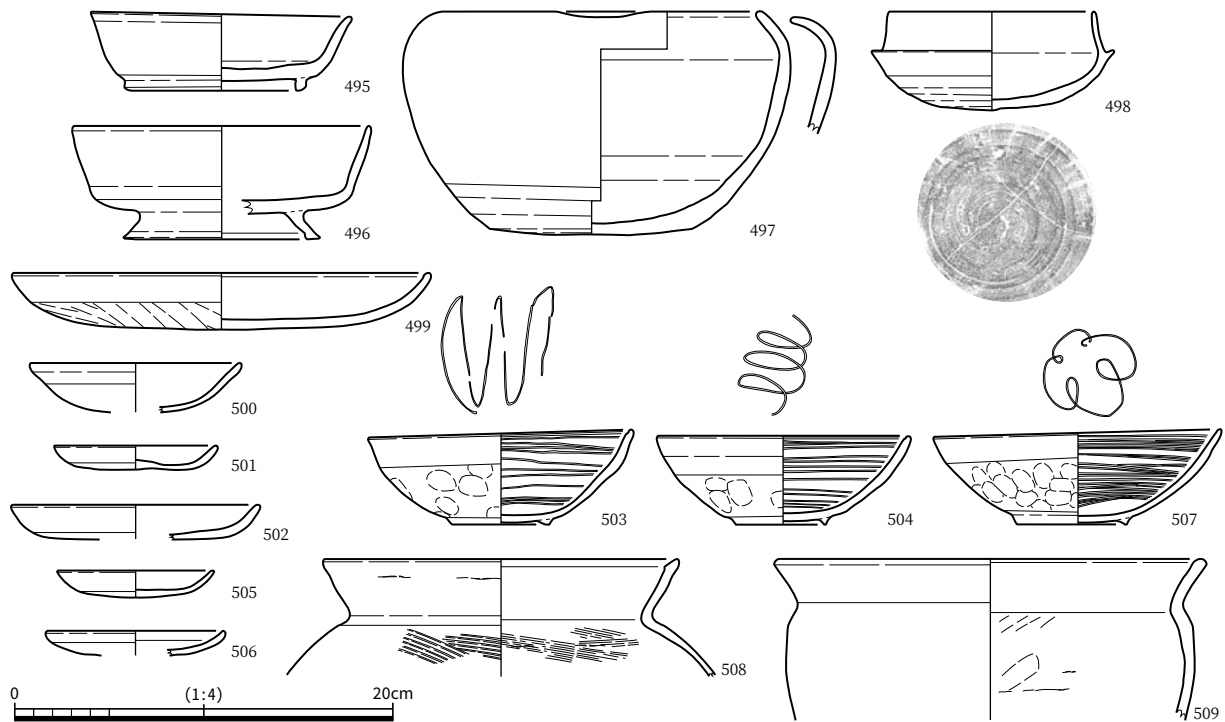


図84 遺構 出土遺物

その他の遺構 (図84) 出土遺物を図示したものに、溝23・24、ピット34・35がある。溝23・24は、隣接する溝25も併せ、ほぼ同じ位置に掘削された溝群である。現代の耕地区画の直下にあることから、現代まで踏襲される耕地境の区画兼水路の可能性が高く、北側では微高地域5の溝16に連続する可能性がある。土師皿、瓦器碗などが出土しており、501～504が溝23出土、505～507が溝24出土である。503および507の瓦器碗は完形に近い遺存状況であり、土器埋納に近い状況が推測される。土師皿、瓦器碗とも13世紀前半を中心とする時期のものと考えられ、水溜1や溝16の時期とほぼ並行する時期と考えられる。ピット34は建物8の柱穴を切る遺構で、500の奈良時代の土師器碗Dが出土している。ピット35は微高地域6の東端付近に位置する遺構で、位置は図86に示す。509に示した奈良時代の土師器甕が出土している。

包含層出土遺物 (図85) 微高地域6の遺物包含層に相当する第2層・第3a層からは古墳時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが多く出土しており、その一部を図85に示した。510～514は土師器皿、515～518は瓦器碗である。510の土師器小皿は底部外面に粘土粒の貼り付けがみられるが、脚のようなものになるかどうかは不明である。519は須恵器甕、520は白磁皿の底部である。521は石鍋の口縁から鏝の破片である。522は古墳時代の丸底の製塩土器で、外面はナデ調整。523～525は古墳時代の須恵器坏蓋、坏身である。おおむね5世紀後半段階のものであろうか。526は敲石もしくは磨石と考えられ、一部を欠くが、残存する端面には叩打痕が残る。写真のみ掲載した遺物に891・899の滓、921の土師器甕片がある。庄内甕の頸部付近と考えられる。掲載しなかった遺物では全体的に中世の土器片が多く、古墳時代、奈良時代の遺物を含む。

小結 微高地域6は微高地域7・8とした微高地の最高所付近から西へ地形がやや低くなる部分にあたり、遺構分布はやや散漫となる。性格の明確な遺構が少なく、居住域の縁辺の様相を呈していると考えられる。溝の一部は現代にまで踏襲される区画と重複することから、中世段階の居住域の廃絶とその後の耕地化に関わる遺構も一部含んでいるようである。

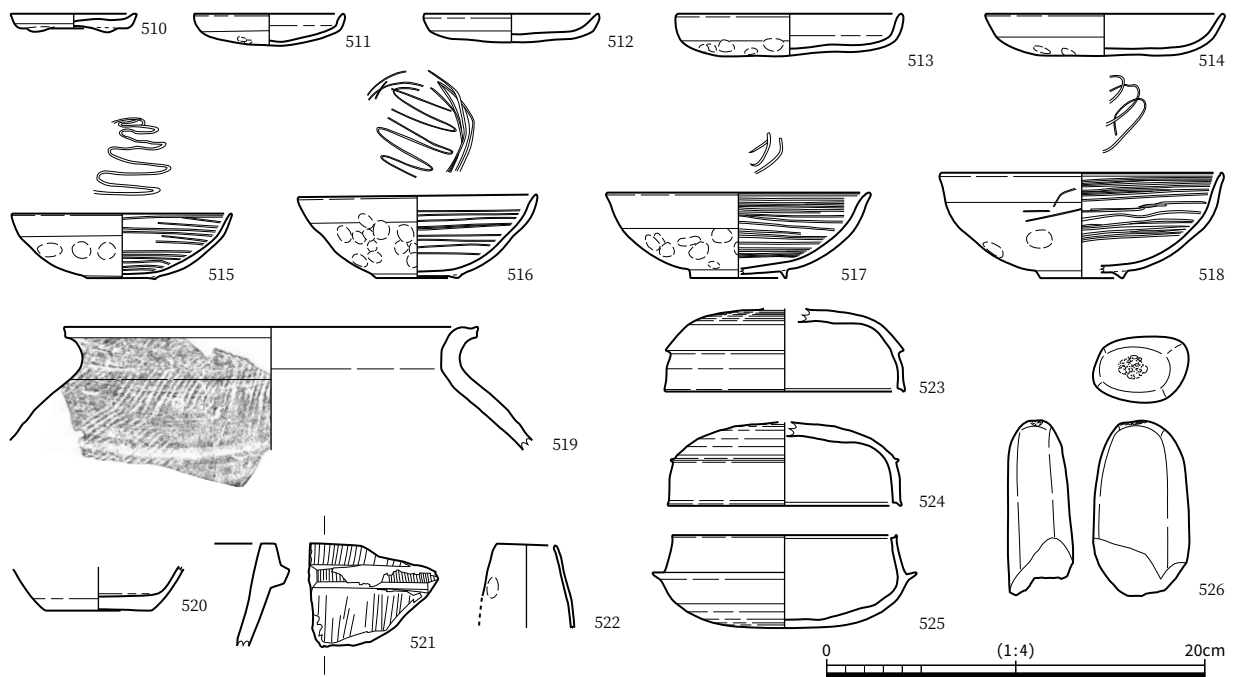


図 85 包含層 出土遺物

第 8 項 微高地域（7）

概要（図 86、図版 23） 微高地域 7 は事業地内中央南寄りの側道部分の調査区にあたり、北に微高地域 5・8、西に微高地域 6、東に低地域 2 が位置する。調査時は 19-1-7 トレンチとして調査した範囲の中央半分に対応し、溝 26 付近から井戸 5、建物 7 までを含む。また南側には高槻市教育委員会により発掘調査が行われた 96-2 調査区があり、大型掘立柱建物が確認されている。井戸 5、建物 7 付近は微高地の最高所にあたり、遺構検出面の標高は 7.25m を測る。全域で第 3a 層を除去することで遺構面を検出したが、建物 7 周辺では第 3a 層を除去した状態では遺構の輪郭が把握できないものも多く、遺構上部を段階的に削りながら遺構検出を重ねた。遺構密度は高く、重複も多くみられた。狭い範囲ではあるが、おおむね 62 基程度の遺構が分布する。掘立柱建物、溝、土坑、ピット、方形周溝墓などがあり、各遺構出土のものほかに包含層からも多くの遺物が出土している。なお、井戸 5 は当初の調査範囲では平面形の半分程度の検出にとどまったことから、空中写真測量終了後、調査区を一部拡張し、全体を確認した。また、既存の高圧線鉄塔の基礎部分については今回の調査範囲からは除いている。

井戸 5（図 87～93、図版 26） 微高地域 7 の東端にあたる方形縦板組の井戸で、建物 7 の柱穴を切る関係にあり、建物に後出する。検出面での掘方平面形は東西約 2.3m、南北約 2.3m 程度のやや不整形な方形で、深さは 2.4m を測る。井戸枠は転用材を用いたもので、井戸枠の内法は 0.85 m × 0.9m で、やや歪である。南辺はやや大きめの材 3 枚（561・562・564）と隙間をふさぐ小型の材 2 枚（567・568）で構成される。東辺は 2 枚の材（554・555）、西辺は 4 枚の材（557～559・565）で構成され、北辺は大型の材 3 枚（556・560・563）と北東角付近に小型の材（566）からなる。それぞれの縦板は上下 2 段に方形に組まれた横棧（569～576）で支えられ、緊結具は用いられていない。縦板の上部はいずれも腐食により失われたようであるが、土層埋土の観察からはさらに上位にまで井戸枠が存在していたと考えられる。掘方と井戸枠の間の埋め戻し土にはベース層シルトのブロックが多く含まれている。井戸枠内の埋土については十分な観察はできなかったが、おおむね泥質の極細粒砂～シルトで埋没しており、廃絶時には埋め戻されたようである。

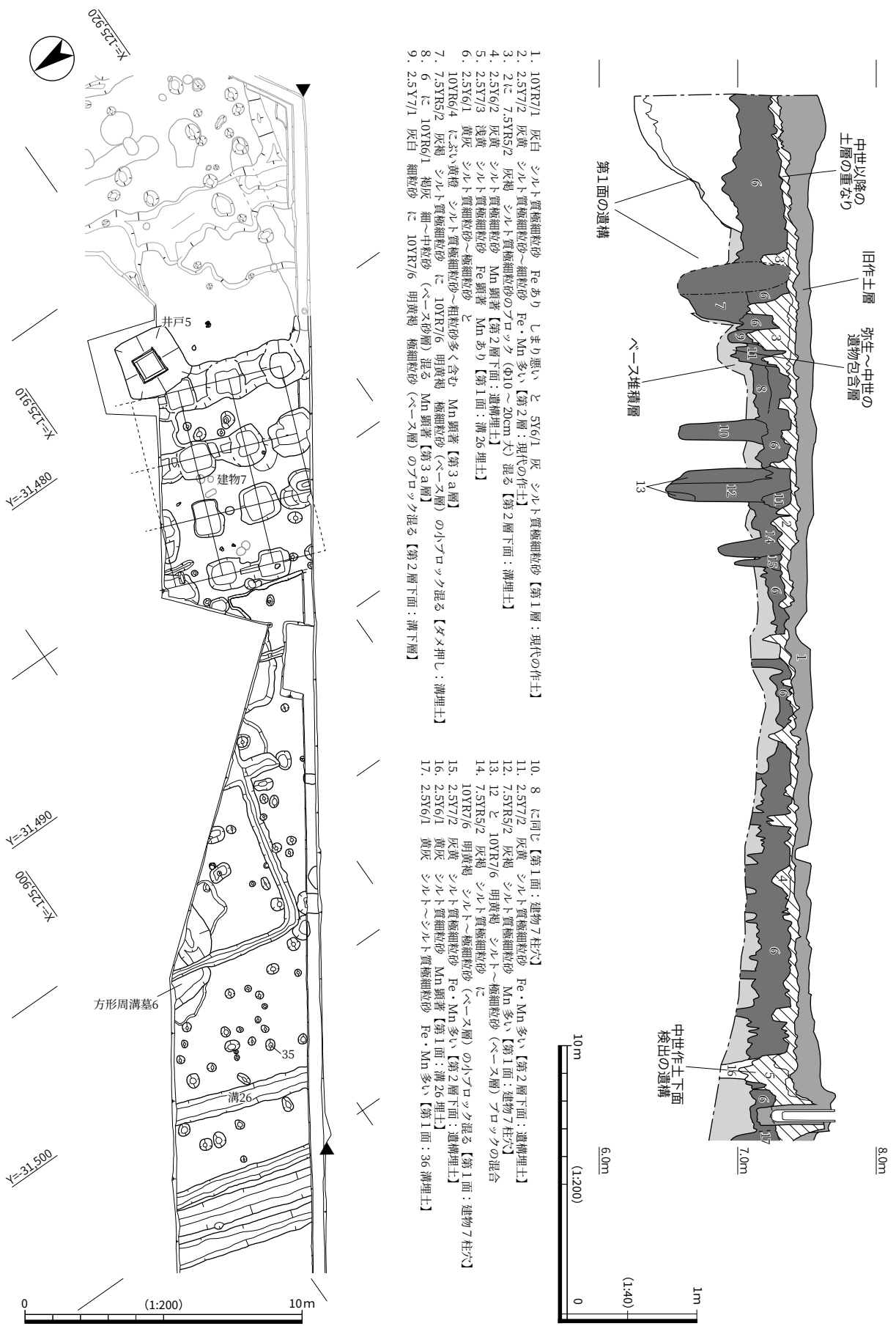
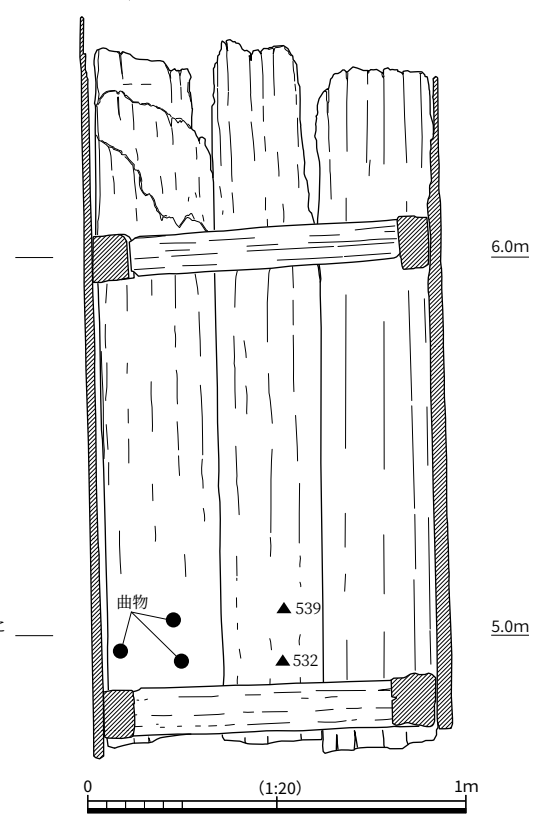
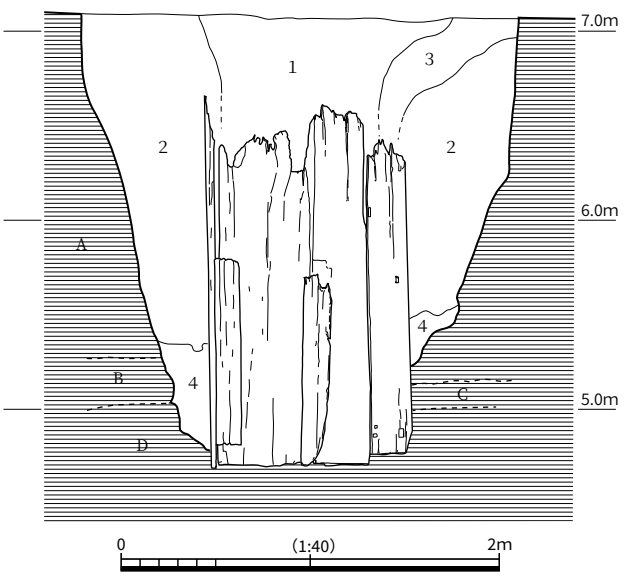
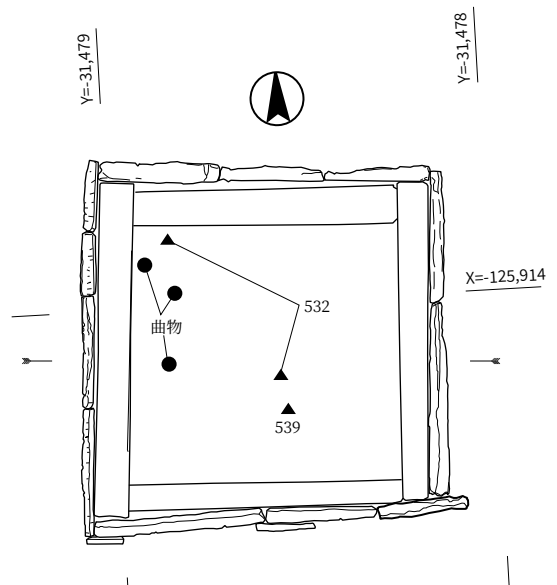
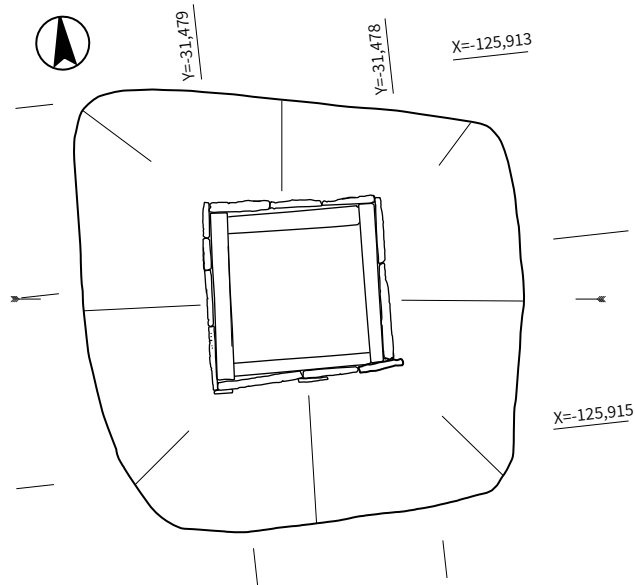


図 86 微高地域 7 全体平・断面図

1. 10YR7/1 灰白 シルト質極細粒砂 Fe あり しまり悪い と 5Y6/1 灰 シルト質極細粒砂 【第1層：現代の作土】
2. 2.5Y7/2 灰黄 シルト質極細粒砂~細粒砂 Fe・Mn 多い 【第2層：現代の作土】
3. 2に 7.5YR5/2 灰褐 シルト質極細粒砂のフロック (Φ10~20cm 大) 混る 【第2層下面：溝埋土】
4. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質極細粒砂 Mn 顕著 【第2層下面：溝埋土】
5. 2.5Y7/3 浅黄 シルト質極細粒砂 Fe 顕著 Mn あり 【第1面：溝26埋土】
6. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂~極細粒砂 と
7. 10YR6/4 に多い黄橙 シルト質極細粒砂~粗粒砂多く含む Mn 顕著 【第3a層】
8. 7.5YR3/2 灰褐 シルト質極細粒砂 に 10YR7/6 明黄褐 極細粒砂 (ベース層) の小フロック混る 【タメ押し：溝埋土】
9. 6 に 10YR6/1 粗灰 細~中粒砂 (ベース層) 混る Mn 顕著 【第3a層】
9. 2.5Y7/1 灰白 細粒砂 に 10YR7/6 明黄褐 極細粒砂 (ベース層) のフロック混る 【第2層下面：溝下層】

10. 8 に同じ 【第1面：建物7柱穴】
11. 2.5Y7/2 灰黄 シルト質極細粒砂 Fe・Mn 多い 【第2層下面：遺構埋土】
12. 7.5YR5/2 灰褐 シルト質極細粒砂 Mn 多い 【第1面：建物7柱穴】
13. 12 と 10YR7/6 明黄褐 シルト~極細粒砂 (ベース層) フロックの混合
14. 7.5YR5/2 灰褐 シルト質極細粒砂 に
- 10YR7/6 明黄褐 シルト~極細粒砂 (ベース層) の小フロック混る 【第1面：建物7柱穴】
15. 2.5Y7/2 灰黄 シルト質極細粒砂 Fe・Mn 多い 【第2層下面：遺構埋土】
16. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 Mn 顕著 【第1面：溝26埋土】
17. 2.5Y6/1 黄灰 シルト~シルト質極細粒砂 Fe・Mn 多い 【第1面：36 溝埋土】



1. 10YR4/1 褐灰～5B5/1 青灰 シルト～シルト質極細粒砂 礫を多く含む【埋戻土】
2. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細粒砂（下位はN4/0 灰 シルト～シルト質極細粒砂）にベース層シルト～極細粒砂のブロック多く混じる
3. 2に同じで、ベース層のブロックが小さい
4. 2に同じで、ほとんどをベース層のブロックが占める

【ベース層略記】
 A. 黄橙色 極細粒砂～シルト
 B. 細粒砂～中粒砂
 C. 泥
 D. 砂礫層

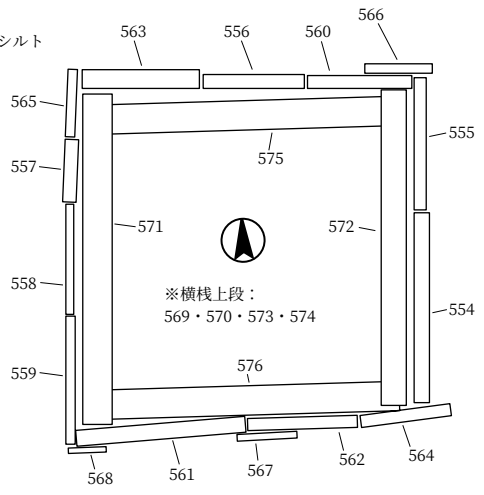


図 87 井戸 5 平・立・断面図

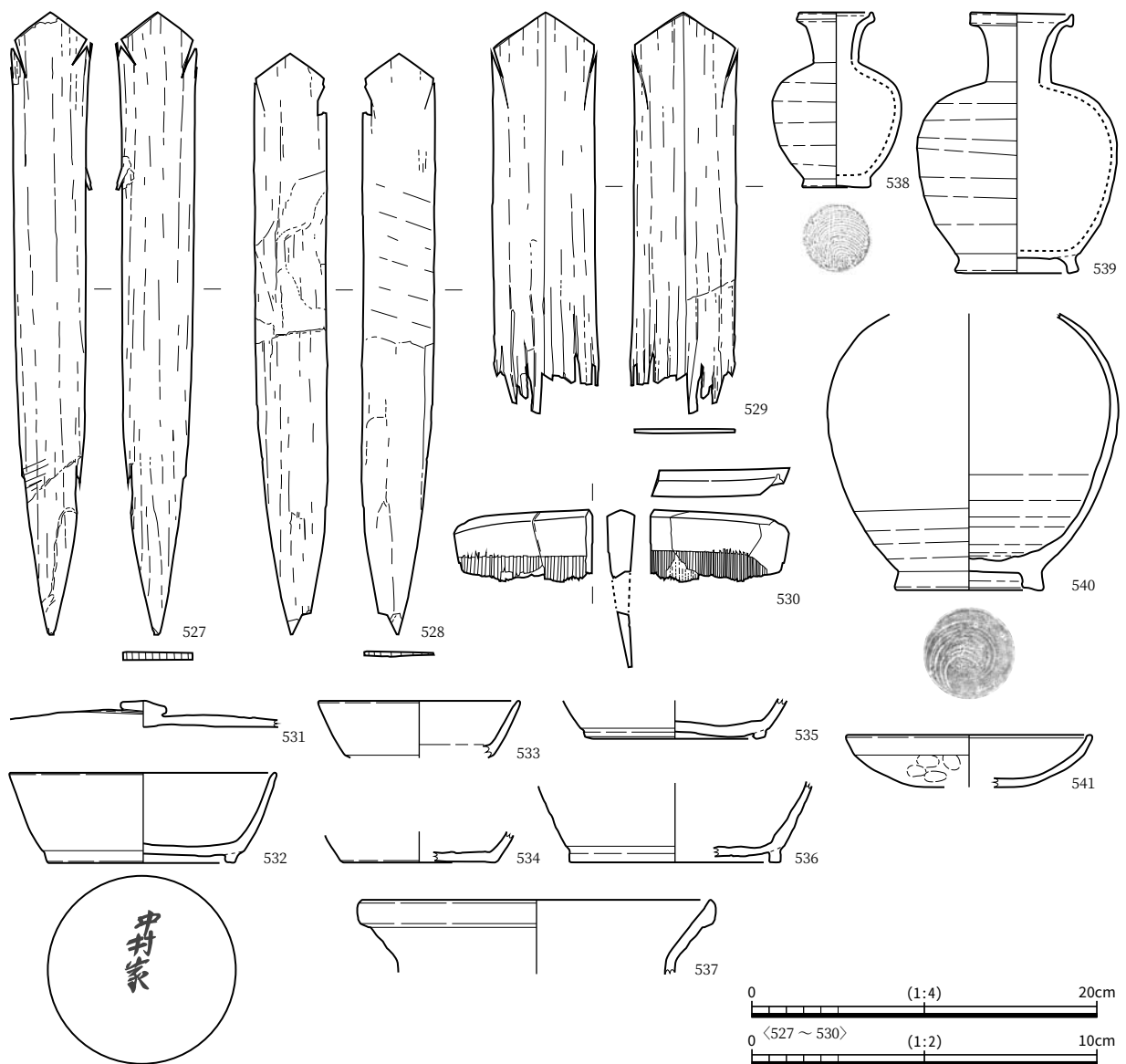


図88 井戸5 出土遺物(1)

井戸枠内外とも、掘り下げ時から多くの土器片、瓦片が多くみられ、井戸掘削時に混入したものから井戸廃絶時の埋め戻し土に含まれていたもの、あるいは廃絶に投棄されたものなどが含まれていると考えられる。一方、井戸枠内部の下層からは比較的完形に近い土器や木製品がまとまって出土しており、これらは井戸の機能時に投棄された遺物と考えられる。取り上げ、保存はできなかったが小型の曲物3点が底付近で重なっていることが確認できた。(写真図版26下段) 1点は直径13.5cm、ほか2点は直径22cm程度のものであった。また、この付近からは須恵器坏(532)、壺(538~540)、木製の齋串(527~529)、木製横櫛(530)なども出土した。532の須恵器坏は墨書土器で、3片に分離して出土したが、井戸枠内部でやや離れたところであって、おそらく井戸枠内に投棄する前に打ち割られていたものと考えられる。最下層の埋土を土壌洗浄したところ、微細遺物の検出はなく、掘削時に損傷した横櫛(530)の破片や歯先を確認したにとどまる。

図88~89に図化し得た出土遺物、図90~93に井戸枠部材を図示した。527~529は齋串で、529が半分ほどの残存かつ2片に割れた状態で出土したが、527・528は一部を欠くものの、比較的遺存状態は良好である。527は長さ18.0cm、幅2.3cmで、厚さは2mm程度である。側辺と圭頭形の頭部との角

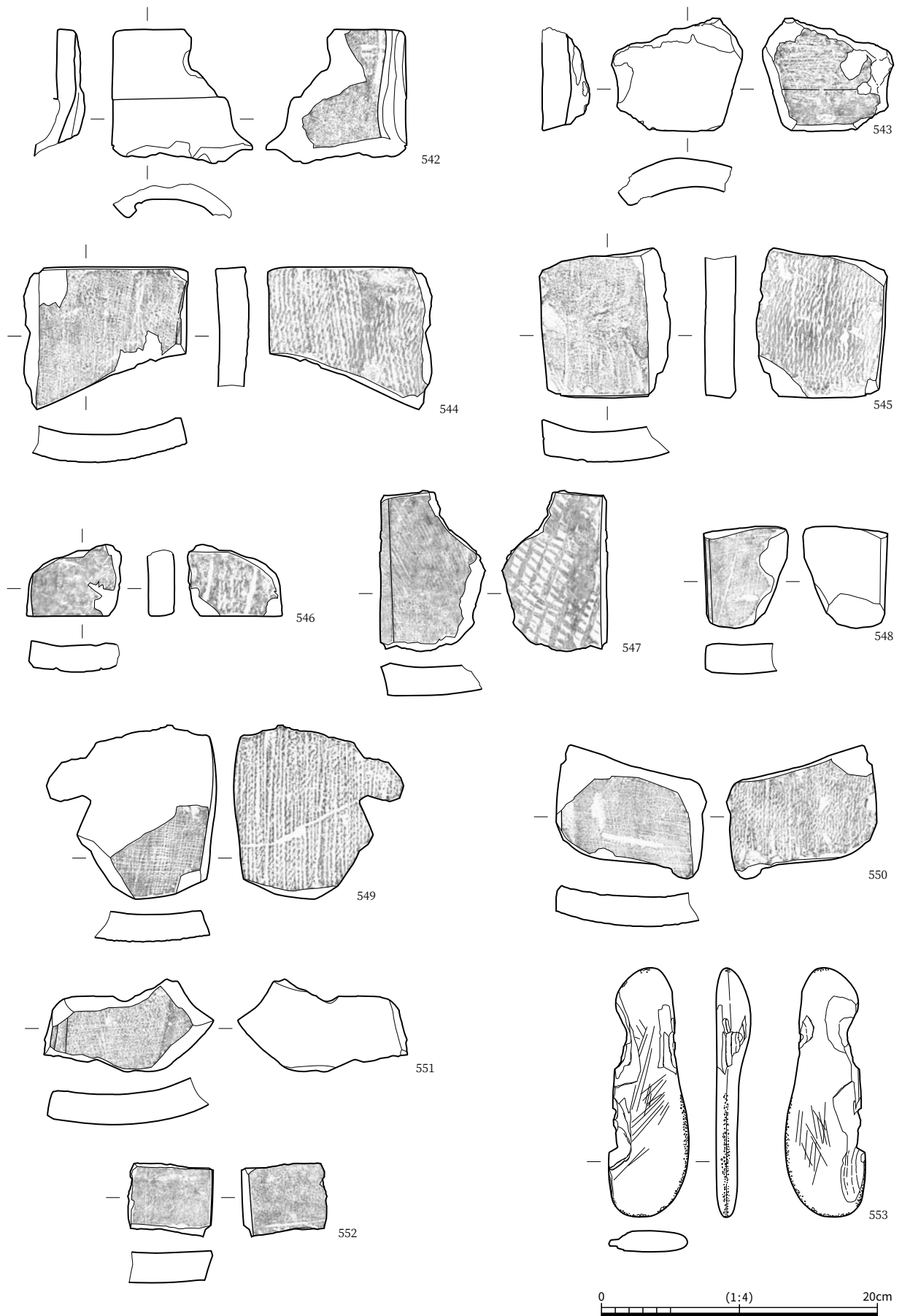


图 89 井戸 5 出土遺物 (2)

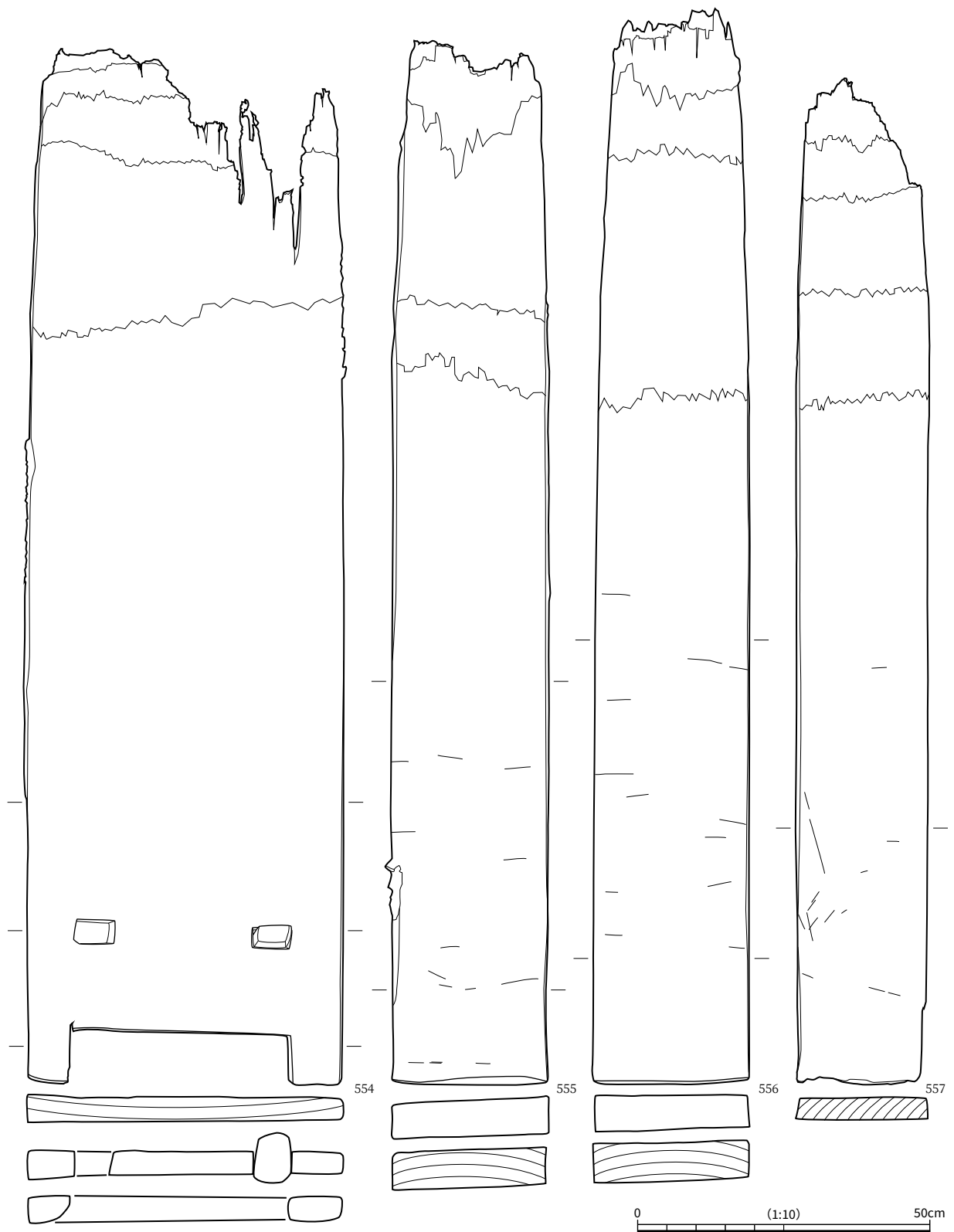


図90 井戸5 出土遺物(3)

付近左右に削り掛けを施す。528はやや小ぶりで、残存長16.8cm、幅2.0cm、厚さは1mmと薄い。片側は破損するが、頭部側辺の境に一对の削り掛けを施す。529はやや大ぶりのもので、残存長11.6cm。幅3.0cmで、厚さは1.5mmである。斎串3点の樹種はいずれもヒノキであった。530は横櫛で丁寧な面取りを施した頭部に、切込みを施した歯部の一部が残存する。井戸枠内の埋土最下層の掘削時に一部

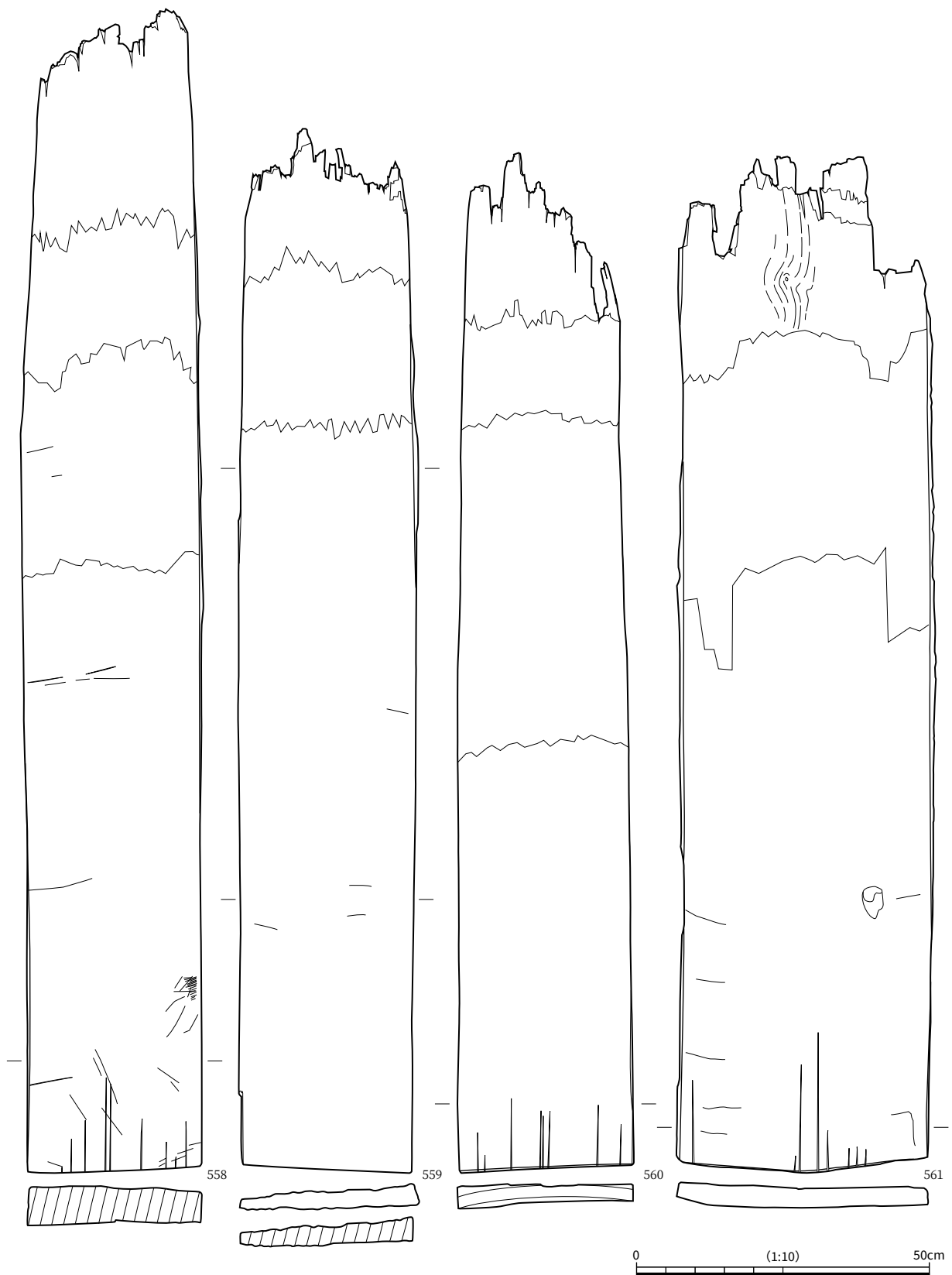


図91 井戸5 出土遺物(4)

の破片を確認し、さらに土壌洗浄で細片を検出した。現状は一部の残存となるが、当初は完形品であった可能性もある。残存幅4.0cm、残存高は1.9cmで、厚さは0.8cm。分離した歯から復元的に高さを想定すると4.6cm程度となり、類例に比例させると復元幅は12cm前後か。樹種はイスノキであった。

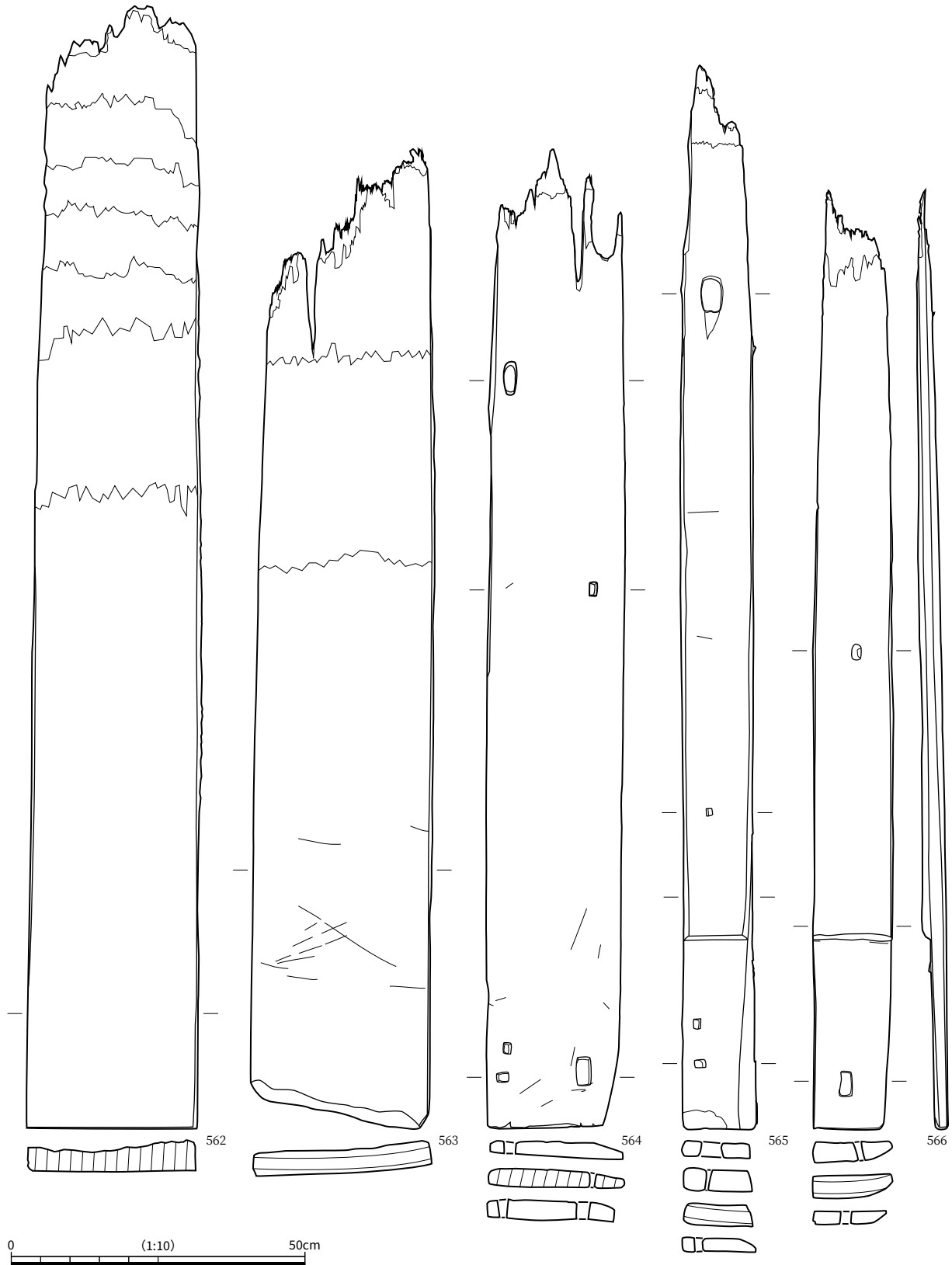


図92 井戸5 出土遺物(5)

532は須恵器の坏で、底外面に墨書がみられた。墨書は薄く判読も難しいが、赤外線画像での確認も加え、「中村家」と読んでおく。538~540は須恵器の壺で、538、540は底に糸切根が残る。540は猿投産の可能性もある。541は土師器皿もしくは椀で、口縁端部内面をわずかに肥厚させる。

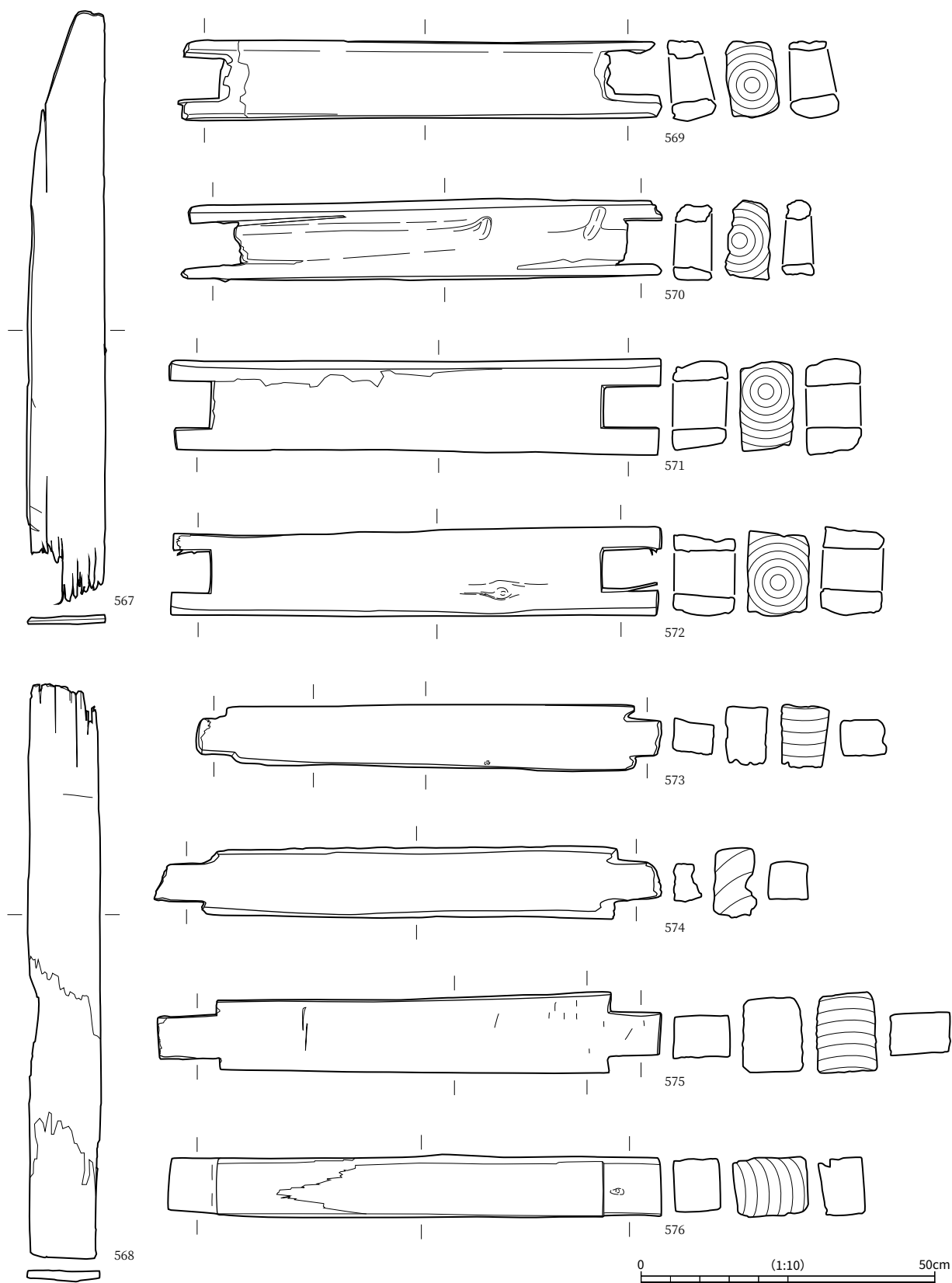


図93 井戸5 出土遺物(6)

542・543は丸瓦片、544～550は平瓦片である。瓦当面が確認できるものはなく、軒丸瓦、軒平瓦が含まれているかどうかは不明である。凹面には布圧痕を残すものも多く、凸面には縄目タタキ、格子タタキが確認できる。553はへら状石製品で用途は不明だが、頁岩製と思われる。類似する資料に488・780

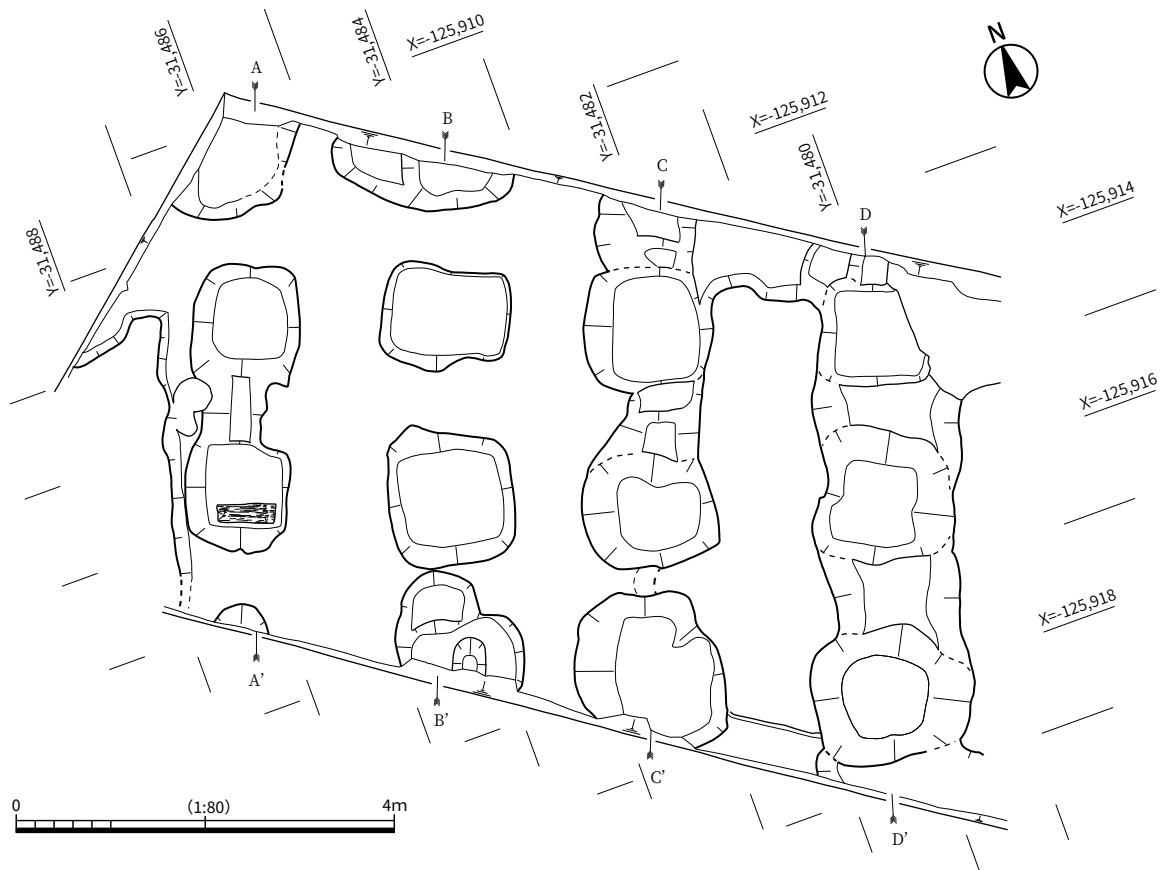
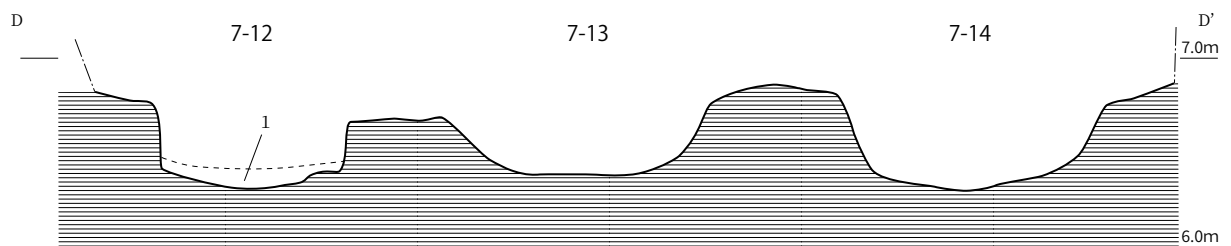
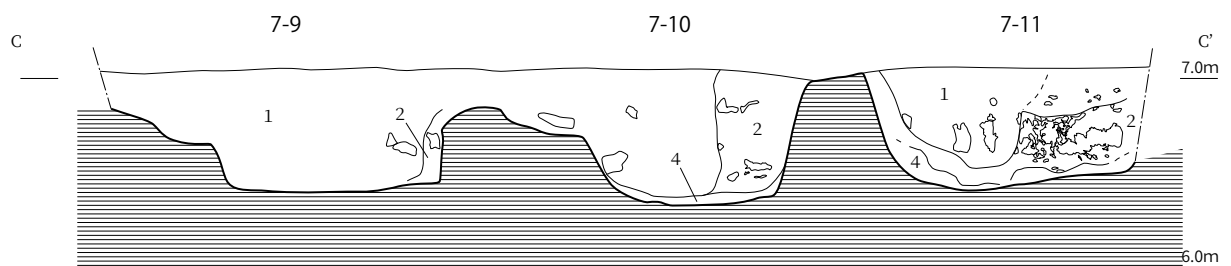
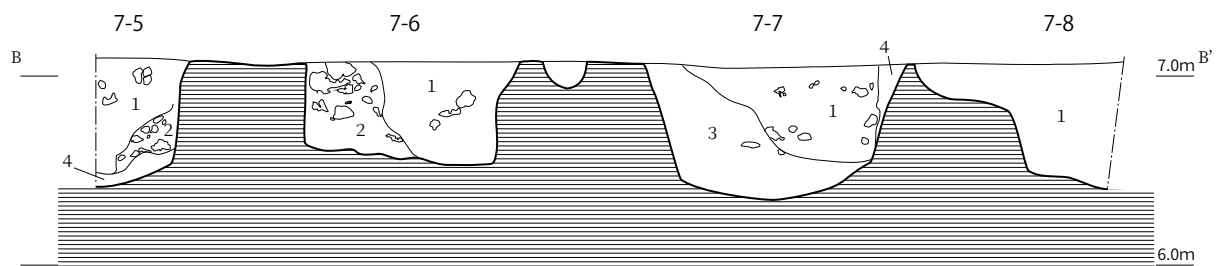
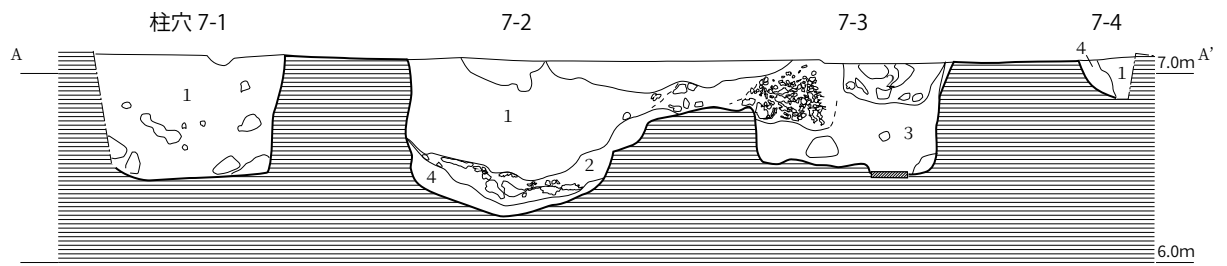


図94 建物7 平面図

がある。554～576は井戸枠に用いられていた材で、横桟以外はいずれも転用材と考えられる。樹種同定を行っていないが、おおむねヒノキなどの針葉樹と考えられ、井戸枠の上部側は劣化がみられるものの、井戸側の基部にあたる部分の遺存状況は良好である。建築部材などの転用と考えられ、554は井籠造の壁材か。565・566はもともと564と類似するほぞ穴配置をもち、端部を欠きとる1枚の材であったものを2枚に分割して転用している。このほか、図示していない資料に934の砥石と932の桃核・植物種子類があり、写真のみ掲載した。

建物7（図94～96、図版24・25） 微高地域7の東寄りにあり、井戸5に切られる関係にある大型の総柱掘立柱建物である。調査範囲外の南北とも広がる可能性もあるが、ひとまず検出範囲で完結するとみると、東西方向3間、南北方向3間、総柱の柱配置となる。建物規模は芯々距離で、東西6.8m、南北5.6mを測り、方位は座標北より21.6°東に振れている。柱間寸法は東西方向で2.3m前後、南北方向で1.9m前後となり、やや東西方向に長い建物となる。

検出時はまず第3a層との区別が難しい東西8.5m程度の幅の浅い落ち込みを確認し、一部の柱穴の輪郭は覗いていたものの、最終的にはその下面で個々の柱穴の輪郭を検出した。柱穴は大型で、長辺1.4m程度、短辺1.1m～1.4m程度の隅丸方形を呈するものが主となり、検出面からの深さは50cm～80cm程度を測る。柱穴の南北方向で上部が溝状に連結するものがあり、柱穴2・3はやや深い部分で溝状に連結する。柱穴の埋土はベース層シルトのブロックを含む土が複雑に混ざり合っており、調査時に確認したものではないが、柱が抜き取られた可能性もある。なお、柱穴3の底には唯一、礎板がみられた。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては柱穴の埋土ならびに、検出段階に掘り下げた落ち込み部分に含まれる土器細片となる。



1. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細粒砂 中～粗粒砂多く混じる
ベース層シルト～細粒砂のブロック含む
2. 1に比べ、ベース層ブロックの割合が高い
3. 1に比べ、ベース層ブロックをほとんど含まない
4. ほゞベース層ブロックの集中

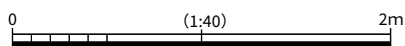


図 95 建物 7 断面図

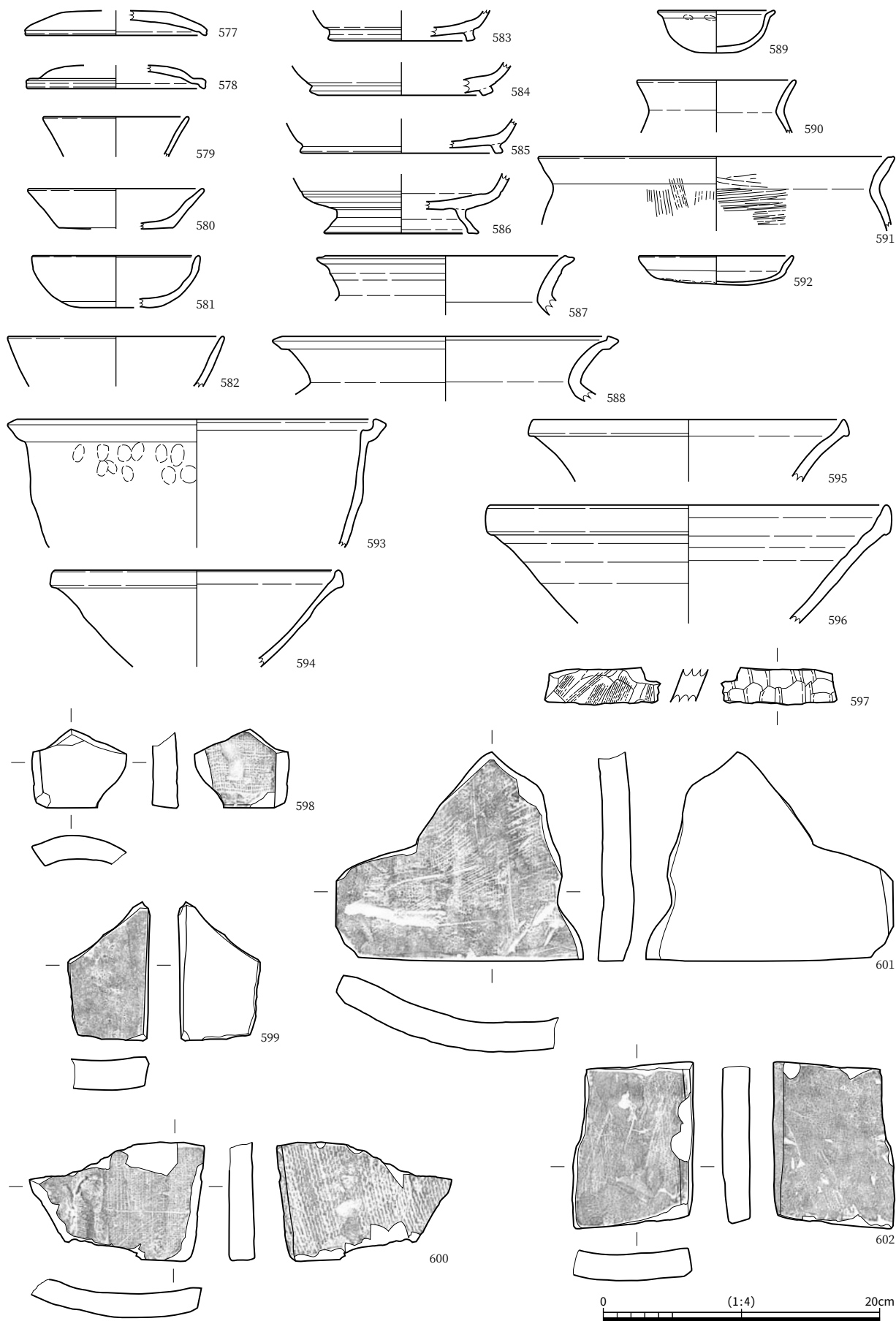


図96 建物7および周辺遺構 出土遺物

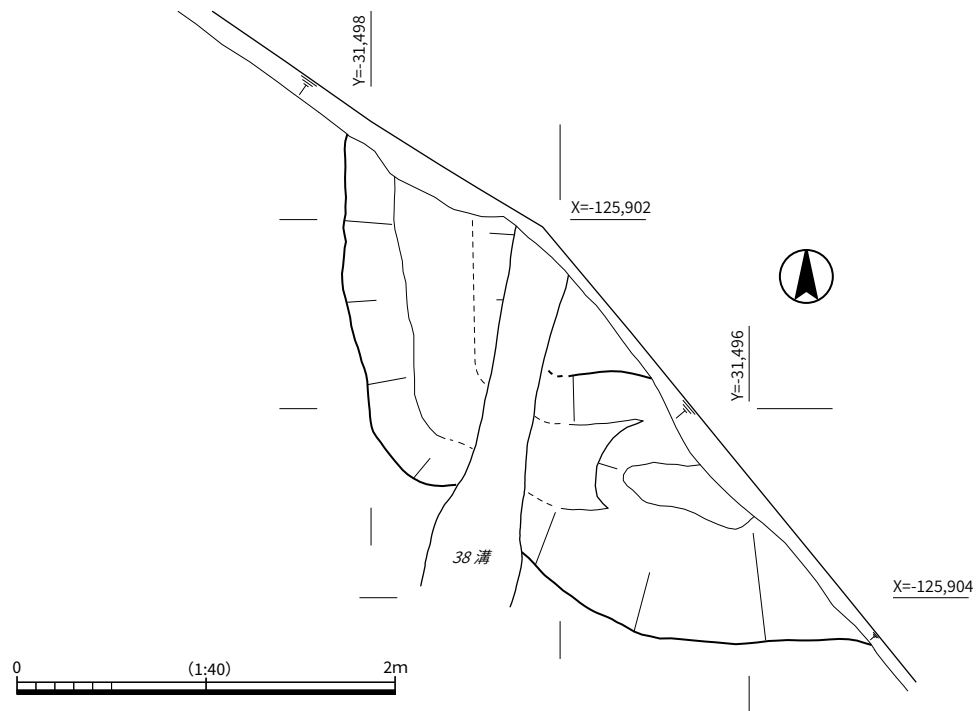


図 97 方形周溝墓6 平面図

577～586は須恵器の食器類、587・588は須恵器の貯蔵具で、589～591は土師器であり、いずれも奈良時代中葉～後葉に帰属する。592～597は中世段階の遺物で、597は石鍋の破片であるが再利用の痕跡はない。598～602は瓦片で、瓦当面の認められるものはない。

建物7柱穴出土の土器片は奈良時代のものが主体で、須恵器、土師器の細片のほか、瓦片がある。瓦質土器や須恵器捏鉢、石鍋片、写真のみ掲載の陶器瓶(900)など中世の遺物も含むが、分離できなかった第3a層に含まれていたものなど、混入資料と考えられる。

建物7は大型・方形の柱穴をもつ総柱建物で、「溝もち」の特徴をもつ奈良時代建物である。ひとまず倉庫と想定しておくが、周囲に同じ規模の建物が並ぶかどうかは不明である。既往の調査では平成2年度の調査において、比較的規模の近いものが同じ微高地上の南西約100m離れたところで確認されており、駅家を構成する施設の一つである「駅楼」とする見解もみられるところである(森田2015)。

方形周溝墓6 (図97) 微高地域7の西寄りで、わずかにコーナー部分を検出した溝で、中世段階の溝に切られている。調査段階には性格不明の溝としていたが、その後、微高地域5において方形周溝墓の列状配置を検出し、その位置と特徴が類似することから方形周溝墓の一部と判断した。全体の規模など不明な部分が多いが、微高地域5にはおよんでいないことから、長さ10mを大きく超えるものではないようである。コーナー部分が最も浅く深さ37cmを測り、東側、北側にむかって深くなる。出土遺物には古墳時代のものと思われる須恵器の細片が1点みられたが、遺構の時期を示すものとは考えていない。ほかの方形周溝墓と同時期、弥生時代中期のものと考えられる。

包含層出土遺物 (図98) 微高地域7の遺物包含層に相当する第2層・第3a層からは弥生時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが多く出土しており、その一部を図98に示した。603は土師器皿で底面に糸切痕を残す「回転台土師器」と考えられる。604は土師器椀で比較的しっかりとした高台をもつ。605は弥生土器の底部付近の破片で、底面は失われている。606はサヌカイトの剥片で、弥生時代のものであろう。またこのほか写真のみの掲載としたが、886に示した鉄片が出土している。

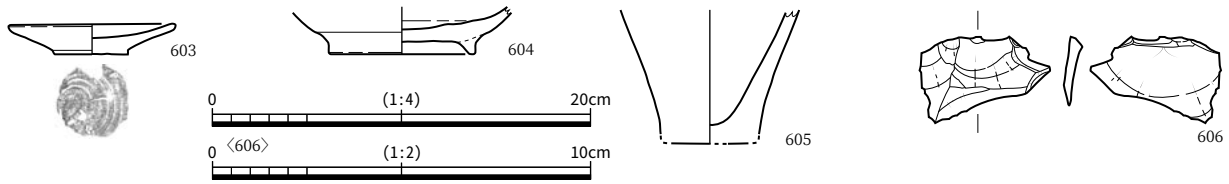


図 98 包含層 出土遺物

小結 微高地域7は微高地域8につながり、微高地域5の南にあたる地形的には最も高い場所であり、建物7と井戸5を中心に、弥生時代から中世段階の遺構が最も密集する部分である。調査範囲の制約もあり検出した遺構の全容は不明なところも多いが、建物7は少なくとも3間×3間、総柱の柱配置をもつ大型建物で、「溝もち」の構造をもつ掘立柱建物である。一般的に「溝もち」の掘立柱建物は柱間を地中梁で連結させる構造と考えられ、重量のある建物構造が想定される。井戸5は建物7の廃絶後、あらたに掘削された大型井戸であり、建築部材の転用が多くみられる点が特徴である。想像をたくましくするならば、建物7に用いられていた部材も再利用されているのかもしれない。井戸5から出土した墨書土器に記された「中村家」は、人名もしくは地名に由来する施設を示すと考えられるが、調査地の現地名である「梶原中村町」が古代にさかのぼるものであるかは不明である。しかし、梶原南遺跡を駅家など公的な施設とする理解を補強するものにはなろう。方形周溝墓6は今回の調査においては列状分布の南限となるが、南に位置する市教委96-2次調査区においても、大小2基が確認されている。

第9項 微高地域（8）

概要（図99、図版27・31） 微高地域8は事業地内中央の側道ならびに側道連結路、橋脚部分の調査区にあたり、西に微高地域5、7、北に低地域1、東に低地域2が位置する。調査時は19-1-7トレンチとして調査した範囲の井戸5、建物7以東と、20-1-4トレンチ、5トレンチの一部に相当する。また南側には高槻市教育委員会により発掘調査が行われた96-2調査区がある。微高地の最高所から東側に下る地形にあたり、遺構検出面の標高は高いところで7.3m、東側の低地域2に接するところでは6.5m程度で、高低差は大きい。全域で第3a層を除去することで遺構面を検出したが、遺構検出面の低いところでは広い範囲を落ち込みとして掘り下げ、さらに遺構検出を重ねたところがある。また、遺構密集部分では遺構検出後もベース面に第3a層の残存と思われる土壌が残るところが多く、弥生時代から中世段階の土壌化が複雑かつ部分的に深いものであると想定された。このため、ひとまず当初の遺構検出により確認した遺構面を全景写真撮影、空中写真測量により記録したのち、残存する土壌層を再度掘り下げる形で2度目の遺構検出を行い、井戸6、井戸10などの遺構を確認した。結果的に2段階に分けて遺構が検出されたことになるが、これはあくまで遺構検出時の確認高低による差であり、帰属する遺構面としては同一のものと認識している。図99では2度目の検出作業により確認した遺構を、色調を変え重ねて表示している。

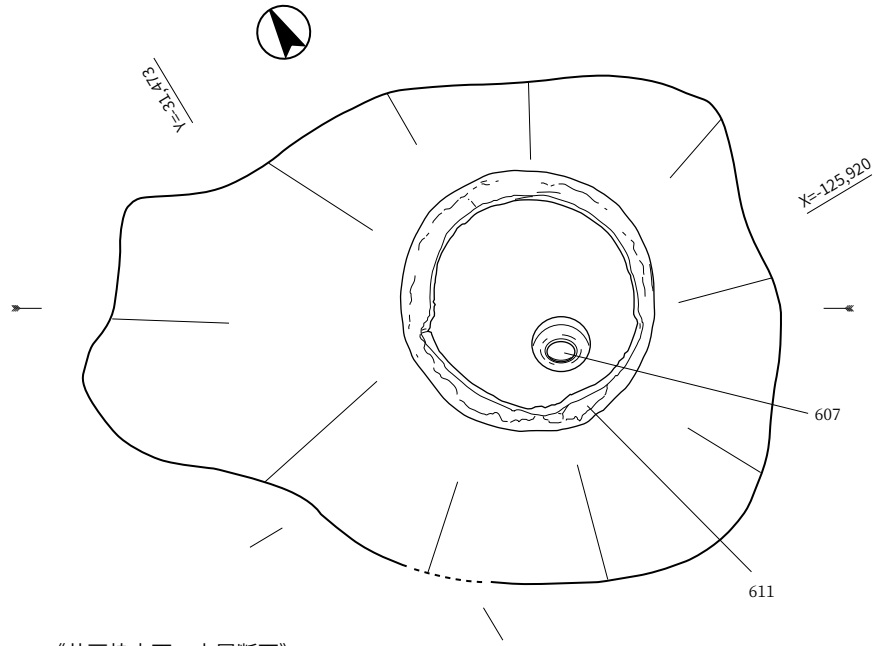
遺構密度は高く、重複も多くみられた。遺構数は微高地域8とした範囲で209基を数える。井戸、大小の溝、大小の土坑、ピットなどがあり、低地域へ下る斜面部分では比較的深さのある複数の溝が錯綜する状況であった。土器を主体に出土遺物量も多く、各遺構出土のものほかに包含層からも多くの遺物が出土している。

井戸6（図100・101、図版28） 微高地域8の南寄りに位置する一木削り抜き井戸枠をもつ井戸で、時期の異なる井戸10が隣接する。2回目の遺構検出で輪郭を確認し、時期不詳のピットに切られる関

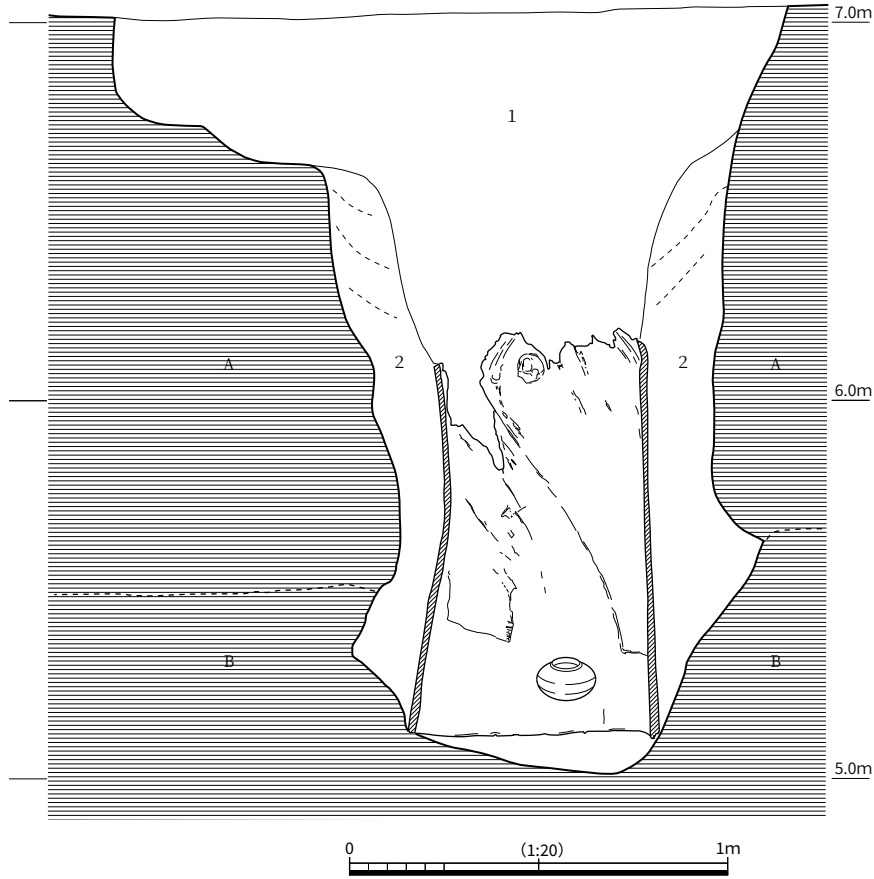
係にある。検出面での掘方平面形は一辺約1.3m程度の隅丸方形を基本とし、北西側に長さ50cmほどの浅い張り出し部分をもつ。深さは2.0mを測り、ほぼ垂直の壁をもつが、基盤層が砂礫層となる部分では掘方掘削時の崩落の痕跡がみられた。井戸側枠は広葉樹と考えられる一木を削り抜いたもので、直径約65cm、残存高110cm程度を測る。土層断面の観察からは、本来は底から1.5m程度まで井戸枠が存



図 99 微高地域 8 全体平面図



《井戸枠内面・土層断面》



1. 10YR4/2 灰黄褐～下位で N4/0 灰 シルト質極細粒砂
粗粒砂～小礫多く混じる Mn 多く含む【廃絶後の埋戻し土】
2. N4/0 灰 シルト質極細粒砂～シルトと
極細粒砂（ベース層）のブロック（径5cm大）の混合【掘方埋土】

【ベース層略記】
A. 黄橙色 極細粒砂～シルト
B. 砂礫層

図 100 井戸 6 平・断面図

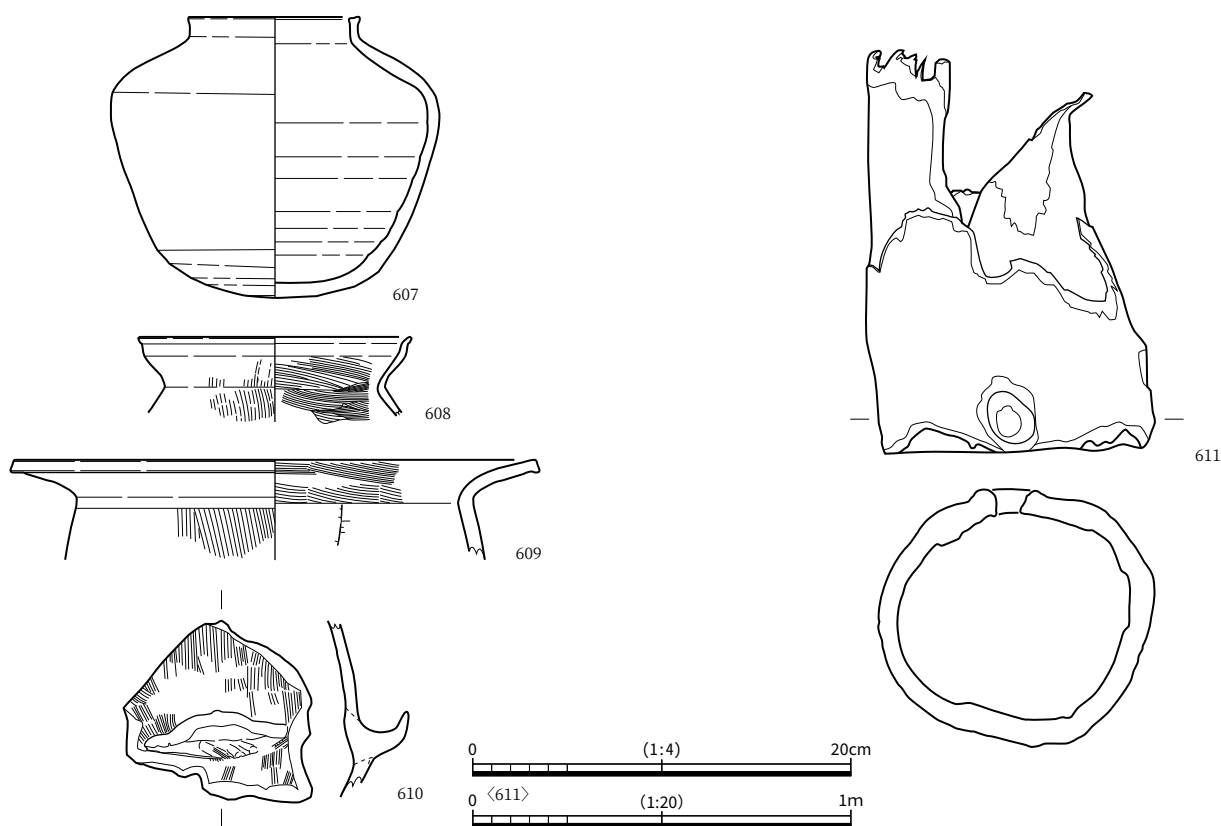
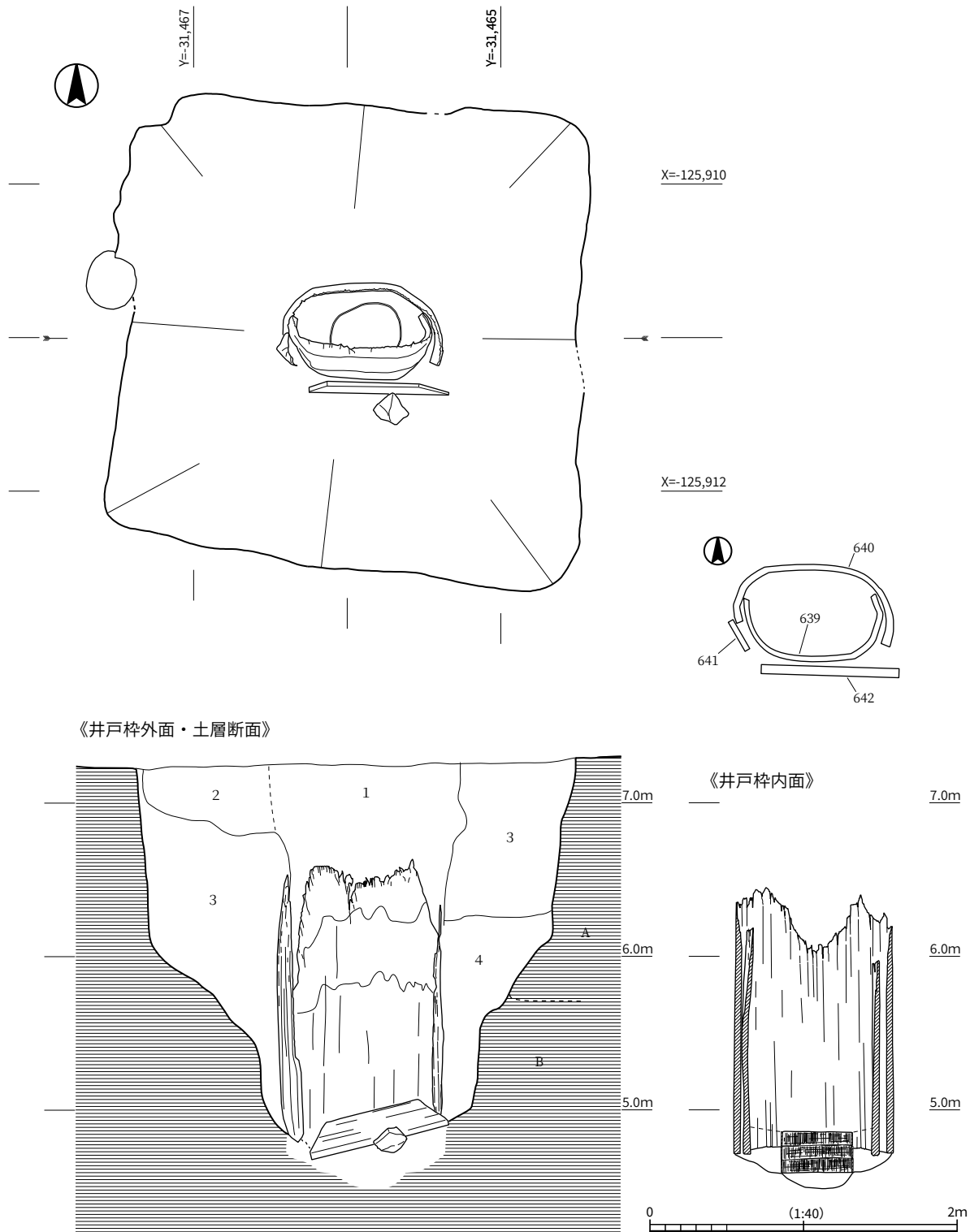


図 101 井戸 6 出土遺物

在していたようである。井戸枠内の埋土については十分な観察はできなかったが、おおむね泥質の極細粒砂～シルトで埋没しているようで、廃絶時には埋め戻されたようである。埋土からの遺物の出土は多くはなく、須恵器、土師器の細片が主体であった。唯一、完形の須恵器壺(607)が井戸枠内部、底より20cmほど浮いた位置から出土しており、土器埋納の可能性はある。

図101に図化し得た出土遺物、井戸枠部材を図示した。607は須恵器短頸壺で、肩が強く張るものの器高は高く、高台はつかない。608～610は土師器で、610は舌状の把手である。611は井戸枠部材で、一木を削り抜いたものである。また、写真のみの掲載としたものに桃核(933)などの植物遺体がある。607の須恵器壺の時期はよくわからないが、肩の張る形状からは8世紀でも後半にはくだらないものと考えられ、今回調査した奈良時代の遺構の中では早い段階のものである可能性がある。

井戸 9 (図 102～104、図版 29) 微高地域 8 の中央付近に位置する大型の井戸で、いくつかの溝と重複するが、切り合い関係は十分に確認できなかった。検出面での掘方平面形は一辺約 3 m 程度の隅丸方形で、深さは 2.2 m を測る。ベース層がシルトから砂礫層へ変化する深さに達しており、これを主な取水源にしたと考えられる。掘方中央に転用材を用いた井戸枠を設け、掘方との間はベース層のブロックを多く含む土で埋め戻している。井戸枠は削り抜きの船底材を転用したと考えられ、断面が U 字形の材を併せて円筒形とし、西側の接合部の隙間をふさぐように別材をあてている。また、南側の底には台形の板材をあて、さらに礫を置き、補強としているようである。船材の幅はおよそ 1 m 程度のものであるが、南側の船材は北側へ大きくもたれかかっており、検出時の井戸枠の上部は 30 cm ほどの幅しかなかった。船材の内側、井戸の底には曲物を設置し、水溜としている。曲物は直径 45 cm 程度、高さ 10 cm 程度のものを 3 段に重ねていた。船材の井戸枠は高いところで 1.7 m 程度残存するが、土層断面の観察では、本来は検出面付近まで井戸枠が達していたようである。井戸枠内の埋土については十分な観



1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質極細粒砂
粗粒砂～小礫多く混じる しまりよい【廃絶後の埋戻し土】
 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂のブロックと
10YR6/4 にぶい黄橙 極細粒砂（ベース層）の小ブロック
（径2～3cm大）の混合【掘方埋土】
 3. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質極細粒砂と
10YR6/4 にぶい黄橙 極細粒砂（ベース層）のブロック
（径5～10cm大）の混合【掘方埋土】
 4. 3に同じで、ベース層のブロックが大きい（径10～20cm大）
【掘方埋土】
- 【ベース層略記】
- A. 黄橙色 極細粒砂～シルト
 - B. 砂礫層

図102 井戸9 平・立・断面図

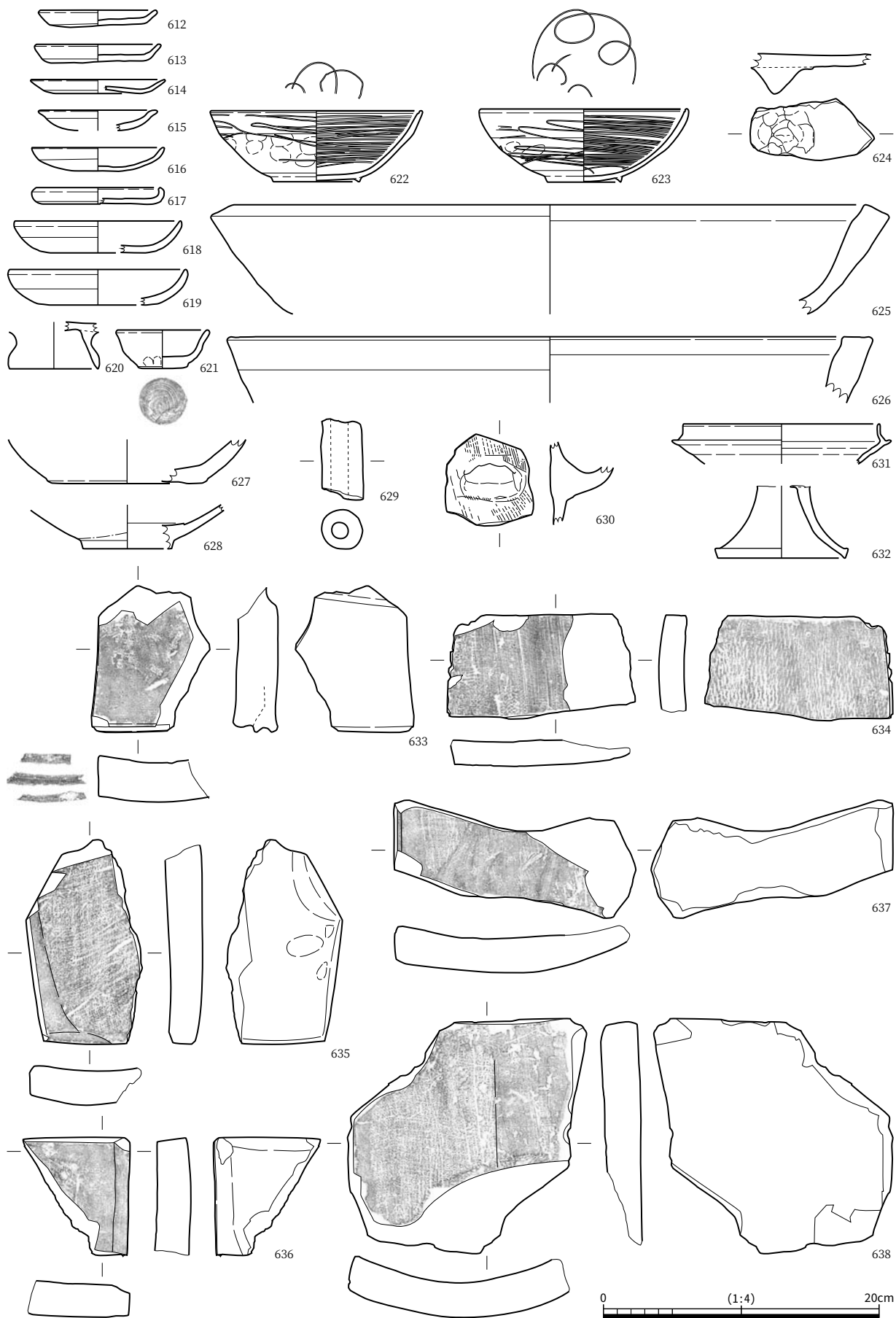


图 103 井戸 9 出土遺物 (1)

察はできなかったが、おおむね泥質の極細粒砂～シルトで埋没しているようで、廃絶時には埋め戻されたようである。埋土からは古墳時代から中世にかけての土器や瓦の細片が多く出土したが、土器埋納のような状況はみられなかった。

図103に図化し得た出土遺物、図104に井戸枠に用いられた部材を示した。612～619は土師器皿で法量には大小があり、灯明皿(613)、コースター形(617)を含む。618・619の外面調整は2段ナデで、13世紀初頭頃のものか。620は台付皿の高台部分。621は小型の須恵器坏で、底部には糸切痕を残す。篠窯産か。622・623は瓦器椀で、内面のミガキは緻密で、高台も比較的しっかりしている。624は瓦質土器盤の脚部分か。625・626は瓦質の盤口縁部で、大型の個体と考えられる。627は須恵器捏鉢の底、

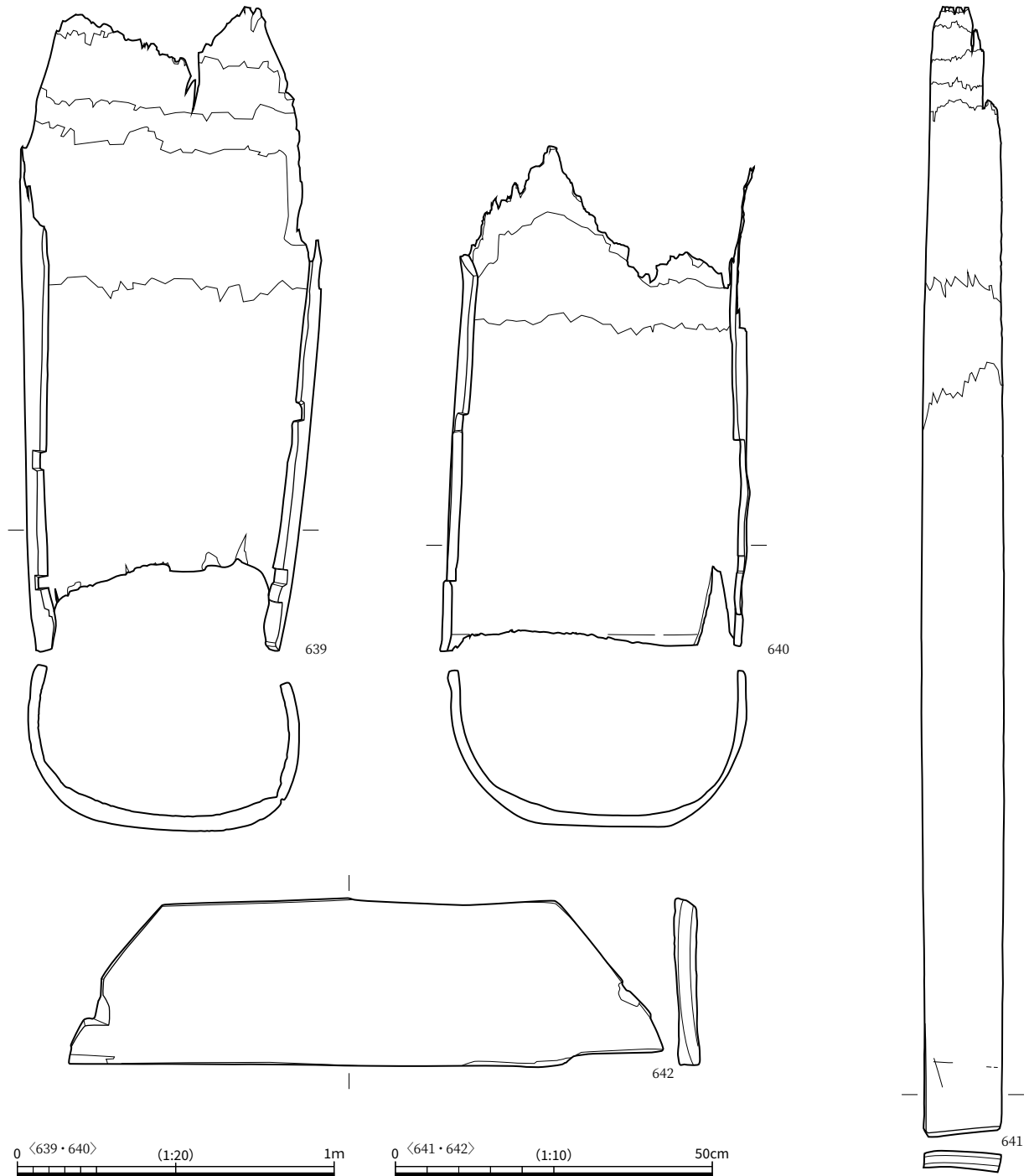
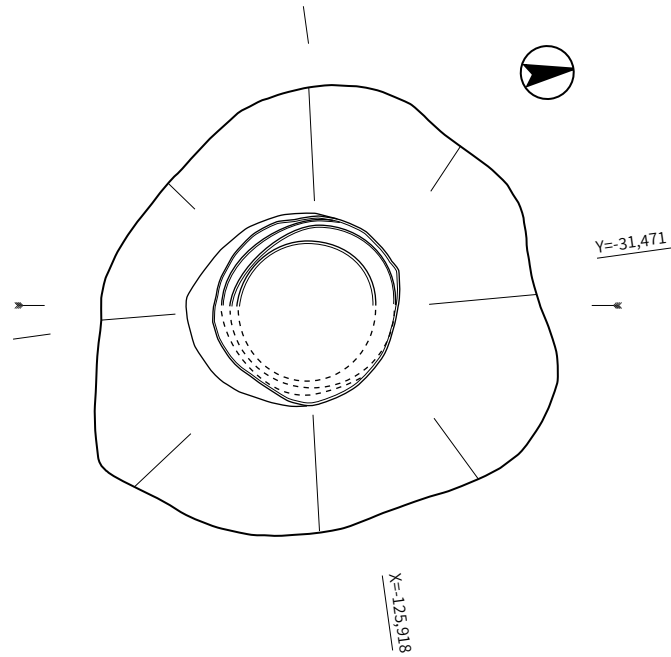
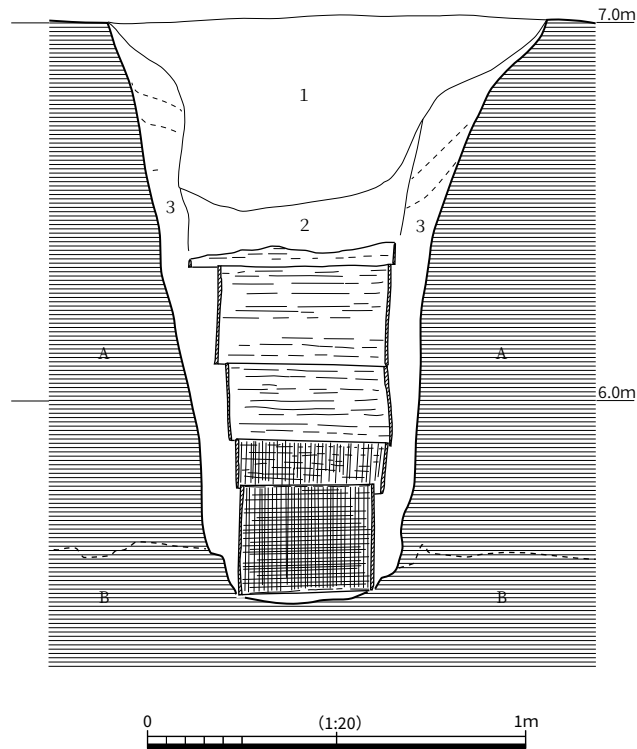


図104 井戸9 出土遺物(2)

628は白磁碗である。629は土師質の管状土錘で、残部分だけでも43.6gを測る大型品である。以上が中世段階の土器類で、井戸の帰属時期を示すと考えられる。630は奈良時代のものであると考える土師器把手、631・632は古墳時代～飛鳥時代の須恵器で、混入資料と考える。633～638は瓦片で、633が重弧文軒



《井戸枠内面・土層断面》



1. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細粒砂
粗粒砂～小礫多く混じる【廃絶後の埋戻し土】
2. 10YR4/1 褐灰 細～極細粒砂【廃絶後の埋戻し土】
- ※井戸側(曲物)内部は灰～青灰 シルト・細粒砂などの互層【機能時埋土】
3. 1とベース層(極細粒砂)ブロックの混合
下位でベース層ブロックの割合が高い【掘方埋土】

【ベース層略記】
A. 黄橙色 極細粒砂～シルト
B. 砂礫層

図 105 井戸 10 平・断面図

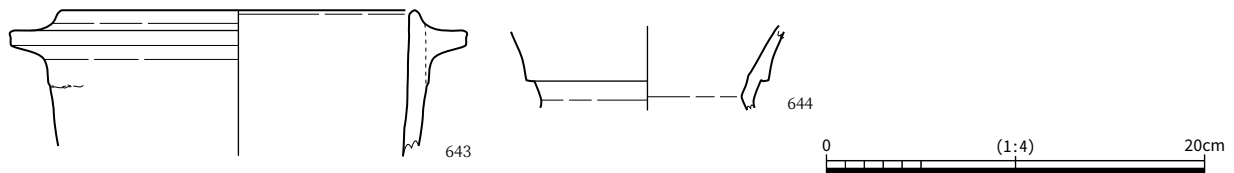


図 106 井戸 10 出土遺物

平瓦であるほかは、瓦当面は認められない。重弧文軒平瓦は梶原寺創建時に用いられた型式であり、白鳳期にさかのぼるものと考えられる。井戸掘削時に混入したものであろう。

639・640の井戸枳材は船底と考えられるもので、639は最大部分の幅が94.5cmであるのに対し、端部は77cm程度にすばまり、船首、もしくは船尾側の材の可能性がある。一方の640は最大幅94.8cmで、幅に大きな変化はない。この2材がもともと同一の船を分割したものであるかどうかは、残存状況が悪く確認できないが、その可能性は残される。いずれも長辺端部に方形の切り込みが2か所ずつ確認される。この時期の類例としては、淀川対岸の北寄りにあたる枚方市樟葉中之芝遺跡第64次調査で確認された、古代末～中世初頭頃とされる大型井戸(SE1523)の事例がある(岡島2013・辻尾2018)

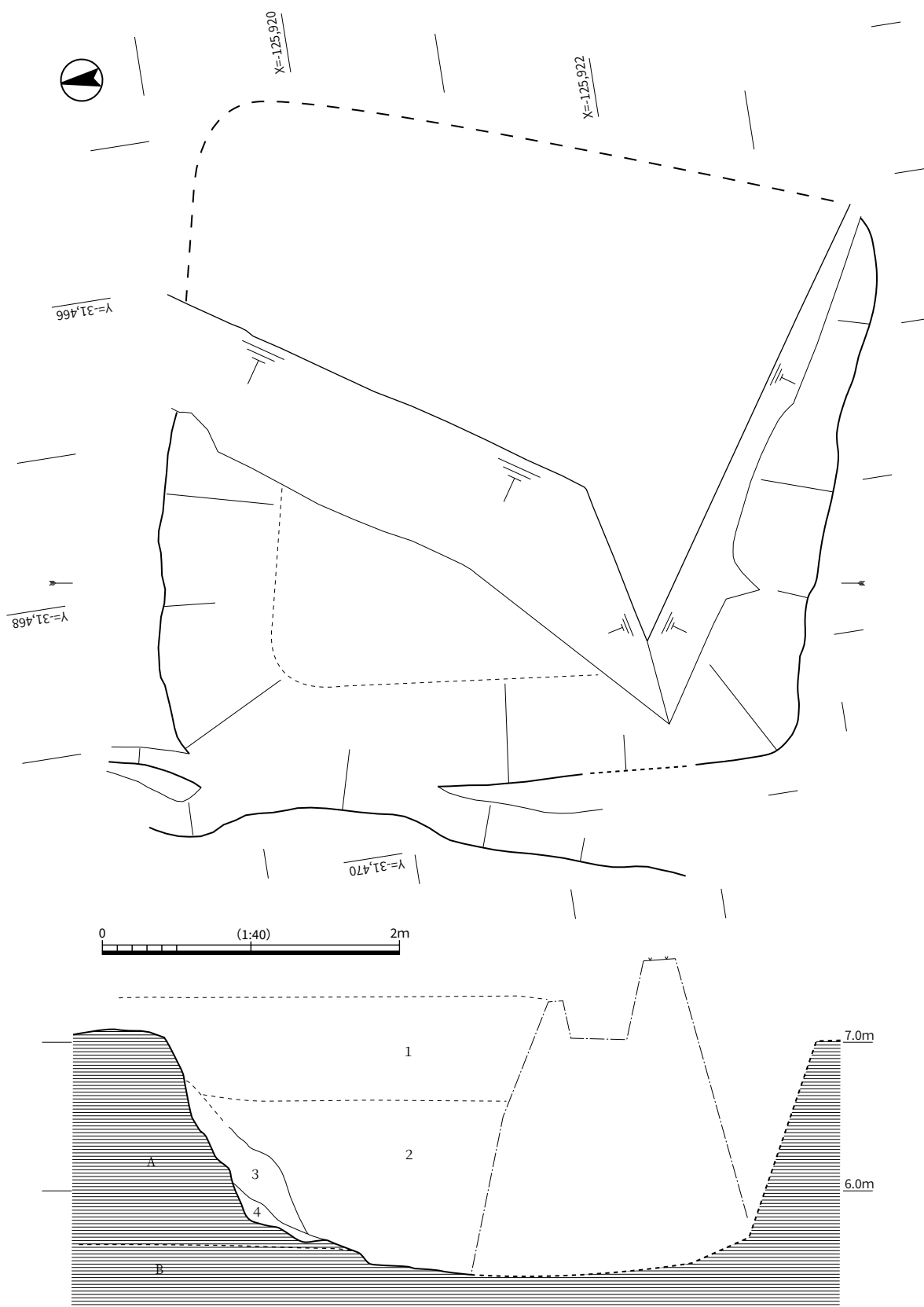
出土遺物の様相からみて、井戸9は12世紀末から13世紀初頭頃のものと考えられる。

井戸 10 (図 105・106、図版 30) 微高地域8の南寄りに位置する井戸で、時期の異なる井戸6が隣接する。井戸の集中は微高地最高所であるとともに、基盤層下部の取水源との関連も想起される。検出面での掘方平面形は直径約1.3m程度の不整な円形で、深さは検出面より1.5mを測る。掘方の底は基盤層がシルトから砂礫層に変化する付近に達しており、砂礫層を主たる水源としたことが考えられる。掘方中央に曲物を重ねた井戸枳を設け、掘方との間を埋め戻している。曲物は最下段が直径35cm、高さ30cm、2段目が直径40cm、高さ13cm、3段目が直径43cm、高さ20cm、4段目が直径45cm、高さ25cm、5段目が直径55cm程度と、径の異なる曲物を積み上げている。5段目の上部は失われているが、さらに上段が存在した可能性も高い。井戸枳内部はおおむね泥質の極細粒砂～シルトで埋められているようで、廃絶時には埋め戻されたようである。埋土からの遺物の出土は少なく、図106に示したものの以外は須恵器、土師器、瓦器の細片が出土したにとどまる。土器埋納のような状況はみられなかった。

643は土師器の羽釜、644は土師器二重口縁壺の頸部と考えられる細片で、古墳時代のものか。細片主体の遺物ではあるが、おおむね中世段階の井戸と考えられる。

方形土坑 (図 107・108) 微高地域8の南寄りにあり、19-1-7トレンチと20-1-5トレンチにわたって検出した。井戸9と方位をほぼ同じくし、南に6m離れて位置する。溝29を切る関係にある。部分的な検出にとどまるが、おおむね北辺4.5m、南辺3.6m、南北長4.5m程度の台形状の平面形をもつと推測される。深さも部分的な確認にとどまるが、検出面から約2mを測る。埋土は壁に沿って掘削直後の埋没土と考えられるブロック土混じりの土や砂礫層の流れ込みがあるほかは、下半は水平に堆積したシルト質の土壌で、上位は埋め戻し土と考えられる礫混じりの土壌となる。埋土に含まれていた遺物はほぼ土器細片に限られ、図化し得たものを図108に示した。

645～651は土師器皿で、652は土師器椀。653は須恵器の壺底部で篠窯産のものであろうか。654は土師器あるいは焼成不良な瓦質土器の盤か。655は須恵器甕頸部で、平行線のヘラ記号が施される。656・657は古墳時代の須恵器坏で、6世紀前半のものと考えられる。古い時期の遺物を混入と考え、井戸9よりやや新しい13世紀前半の遺構と考える。機能としては水溜、ないしは掘削を中断した井戸などが想定される。また、未調査部分に井戸枳が残る余地もある。



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR6/1 褐灰 シルト質極細粒砂 小礫多く混じる Mn 含む【廃絶後の埋戻し土】 2. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粗粒砂混じりシルトとシルトブロックの混合 (しまり悪い水成堆積か) 3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト質極細粒砂に 4. 10YR5/4 にぶい黄褐 粗粒砂～小礫 (ベース砂礫層の流れ込みか?)【掘削直後の埋戻し土】 | <p>【ベース層略記】</p> <p>A. 黄褐色 極細粒砂～シルト</p> <p>B. 砂礫層</p> |
|--|--|

図 107 方形土坑 平・断面図

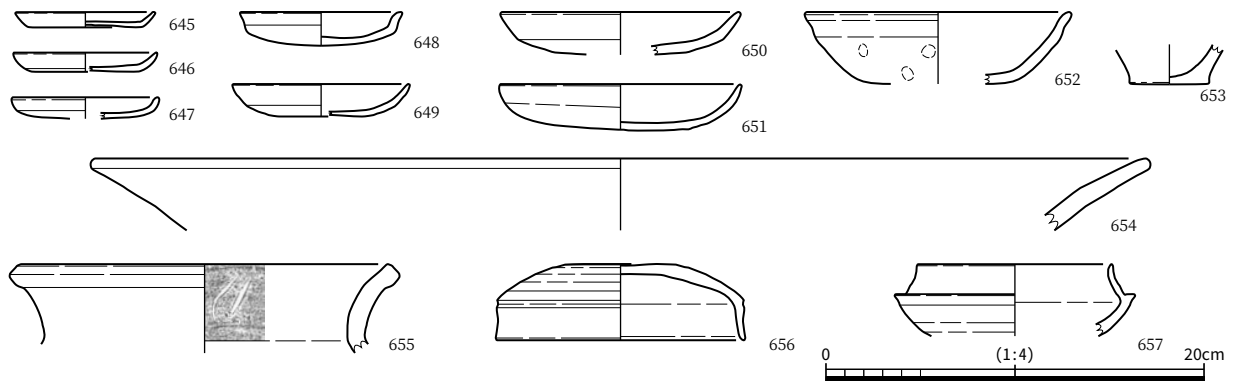


図108 方形土坑 出土遺物

溝33 (図99・109) 微高地域8の北寄りにあり、方向を同じくする複数の溝が並ぶ中の1条である。遺構そのものに特筆すべき特徴はないが、比較的遺存状況の良好な瓦器碗を中心とする土器がまとまって出土した。溝は最大幅0.7m程度、深さ20cm程度の規模で、調査区北側へ続く。出土遺物には古墳時代のものを含む須恵器、土師皿を主とする土師器、瓦質土器、瓦器などがあり、瓦器碗の割合が高い。図109に図化したものを示した。

658～661は土師器皿で小皿と大皿がある。662・663は瓦器の皿、664～676は瓦器碗である。樟葉型

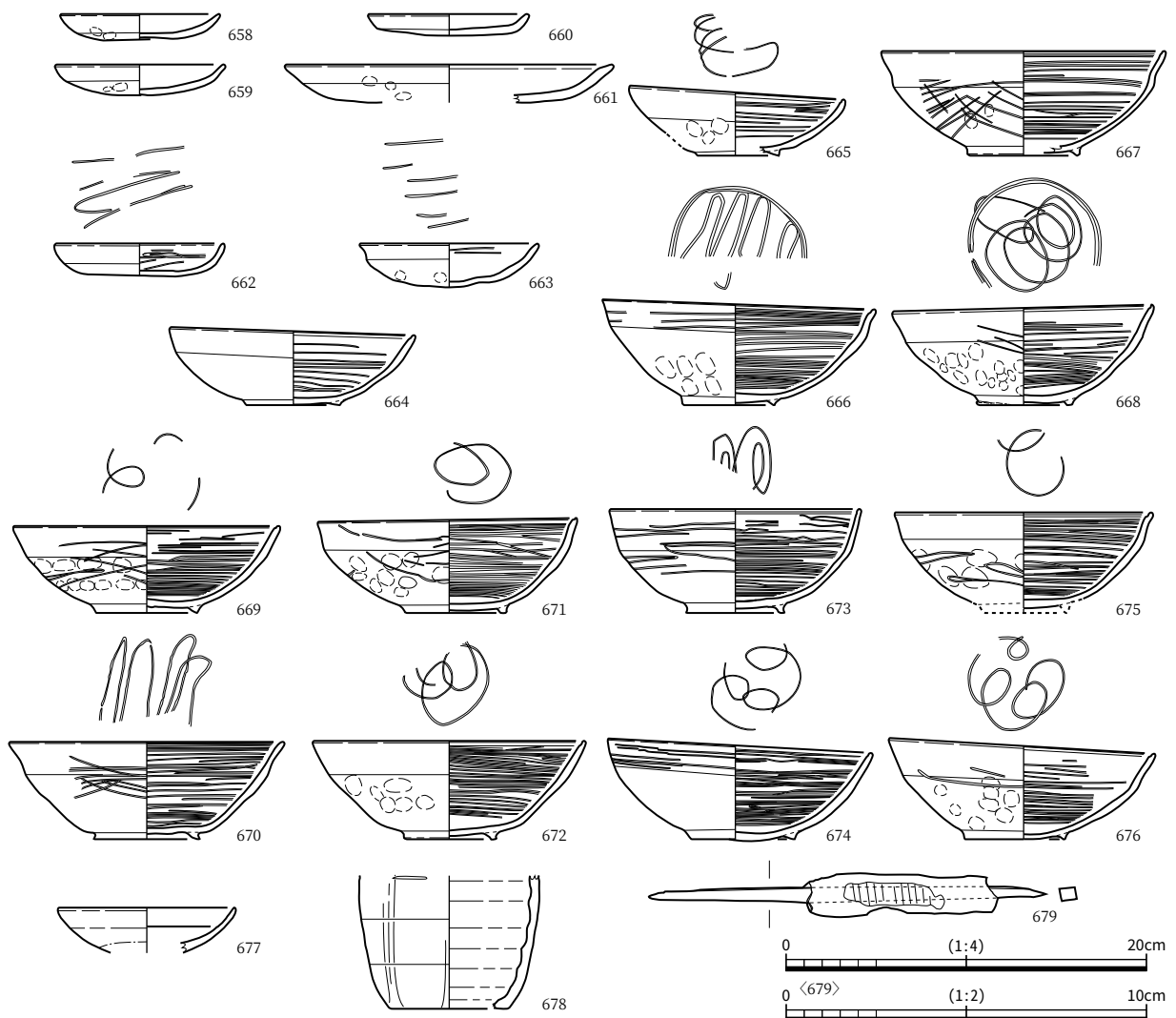


図109 溝33 出土遺物

が主体で、大和型がわずかに混じる。677は白磁皿、678は白磁瓜形水注の体部片で、縦筋が2条と把手の剥離痕が認められる。679は鉄釘か、錆が大きく付着している。土師皿の年代観と一致しない部分もあるが、瓦器碗の特徴からみて、溝33は12世紀中葉～後半の遺構と考えられる。

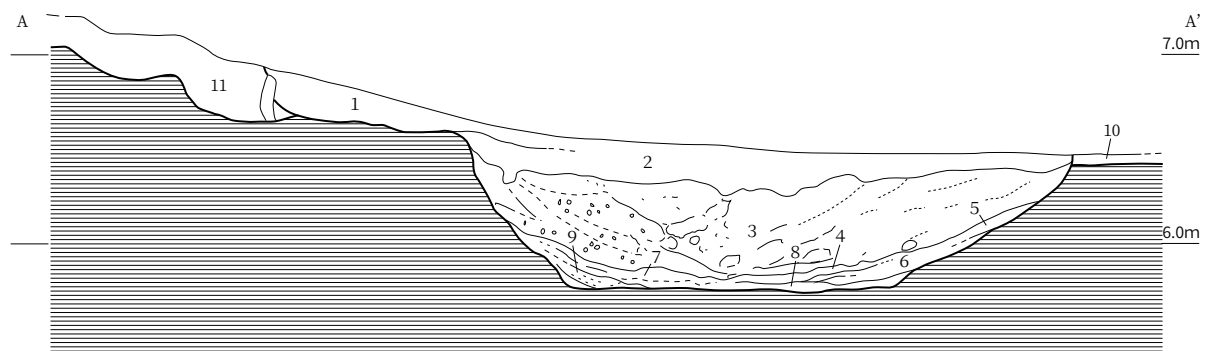
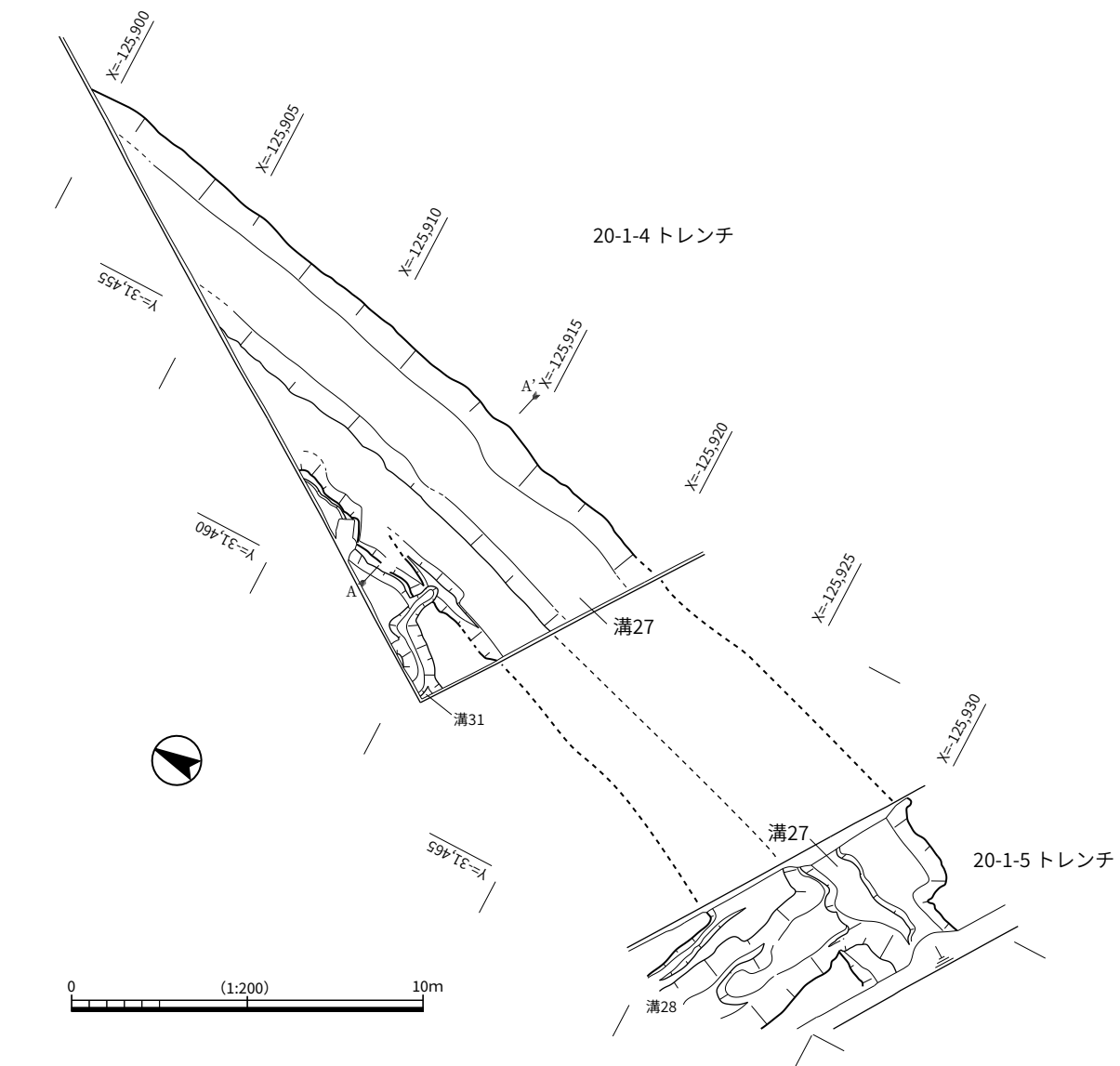
溝 27 (図 110・114、図版 32) 微高地域8の東縁辺は緩やかな崖状の傾斜面を介して低地域へとつながる。溝27はその傾斜面の下位から低地にかかる位置に設けられた大規模な溝である。20-1-4トレンチと5トレンチにわたり検出し、5トレンチでは溝28と接続する。方向はほぼ南北方向をとり、地形に沿って緩やかにカーブしている。調査範囲の南北に続くが、北は市道梶原404号を超えることはないようで、市道下に存在が推測される中世以降の水路に接続する可能性がある。調査前には溝27の直上に土地境界があり、現代の地割にも継承されていると考えられる。20-1-4トレンチと5トレンチの間の調査対象外部分を含め、検出した延長は35mにおよぶ。底部の標高は南端付近で5.85m、北端付近で5.65mと北に緩やかな傾斜をもつ。土層断面図作成部分では上幅4.3m、底部幅1.7mを測り、深さは微高地側からは120cm、低地側からは70cmとなる。微高地側の斜面がやや傾斜はきつく、底は平坦で、ベース層下部の砂礫層が露出している。埋土は下位にラミナのみられるシルトや砂層があり、緩やかな流水の痕跡と考えられる。上位にはブロック土を多く含む土がみられ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土掘削時に土器片を中心に比較的多くの遺物が出土した。古墳時代から中世のものを含み、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁などがある。図化したものを図114-680～684に示した。

680は漆器碗の底付近の細片で、残存部分のごく一部であるが、わずかに高台部分が残る。法量を知ることが難しいものの、精度が低いことを前提として復原すると、高台径10cm程度となる。外面は黒色もしくは茶、内面には黒、赤の漆を施す。絵の意匠は不明であるが、赤漆で孤状の細線が描かれており、植物を描いたものと推測する。樹種はトチノキである。681は土師器皿で、外面には2段のナデが認められる。12世紀後半頃のものか。682は瓦器碗で退化した高台は全周せず、剥離痕跡が3分の1程度に二重にみられる特徴的なもので、見込みの暗文とそれに接する圏線が太いという特徴もある。683は灰釉陶器の碗で、糸切の底部に貼り付け高台をもち、内面には薄く釉がかかる。684は白磁碗の底部分である。また写真のみの掲載とした894は鉄滓である。

溝27は出土遺物には古墳時代以降の遺物を含み、時期を厳密には決めがたいが、土層の観察からは第3a層を切り込んでいるところが認められ、第2層下面の遺構に相当する、比較的後出の遺構と考えられる。中世集落廃絶後の耕地化に伴う水路兼区画溝と考えられる。

溝 28 (図 111・114、図版 31) 微高地域8の南寄りにあり、溝27に直交する形で接続する東西方向の溝である。地形的には微高地を横断する方向に掘削されている。19-1-7トレンチから20-1-5トレンチにかけて、およそ15mにわたり検出した。土層断面図作成部分では上幅3.5m、底部幅0.9mを測り、深さは75cmとなる。底部分の標高は、西寄りではほぼ平坦で6.2m程度、溝27に接続する付近で6.05m程度にまで下がり、溝27の底とは20cmの段差を残す。埋土は最下位にラミナのみられるシルトや細粒砂層があり、機能時の止水堆積と考えられる。上位にはブロック土を多く含む土がみられ、溝27同様、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土から土器片を中心に比較的多くの遺物が出土した。古墳時代から中世のものを含み、須恵器、土師器、瓦器、白磁、青磁、瓦片、砥石などがある。図化したものを図114-685・686に示した。

685は大型の砥石と考えられる破片で、表面、裏面、端面に使用痕跡がある。広く煤が付着しており、廃棄後に焼成を受けた可能性がある。凝灰質砂岩など堆積岩系の石材と考えられる。686は結晶片岩製



1. 2.5Y7/1 灰白 シルト～シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く混じる
根状に Fe の降下著しい【第2層～溝埋土最上層】
2. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 中～粗粒砂多く混じる 根状に Fe の降下あり
下位にベース層細粒砂の小ブロック多く混じる【埋戻し土】
3. 2.5GY7/1 明オリーブ灰 細粒砂のブロック (大きいもので径 10 cm、小さいもので径 3 cm 大) と
N5/0 灰 シルト～極細粒砂ブロックの混合【埋戻し土】
4. N4/0 灰 シルト ラミナあり【水成堆積層：機能時の堆積】
5. 10BG6/1 青灰 シルト ラミナあり 植物遺体含む【水成堆積層：機能時の堆積】
6. 10Y8/1 灰白 中～細粒砂 ラミナあり 植物遺体含む【水成堆積層：機能時の堆積】
7. 2.5GY7/1 明オリーブ灰 中～細粒砂 ラミナあり 植物遺体含む【水成堆積層：機能時の堆積】
8. 7.5GY7/1 明緑灰 シルト ラミナあり 植物遺体含む【水成堆積層：機能時の堆積】
9. 5Y8/1 灰白 細粒砂と 2.5GY5/1 オリーブ灰 細粒砂～極細粒砂 の互層【水成堆積層：機能時の堆積】
10. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細粒砂
中～粗粒砂多く混じる Fe の降下著しい【第3a層】
11. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細粒砂
中～粗粒砂多く混じる Mn 顕著に含む【第3a層】

図 110 溝 27 平・断面図

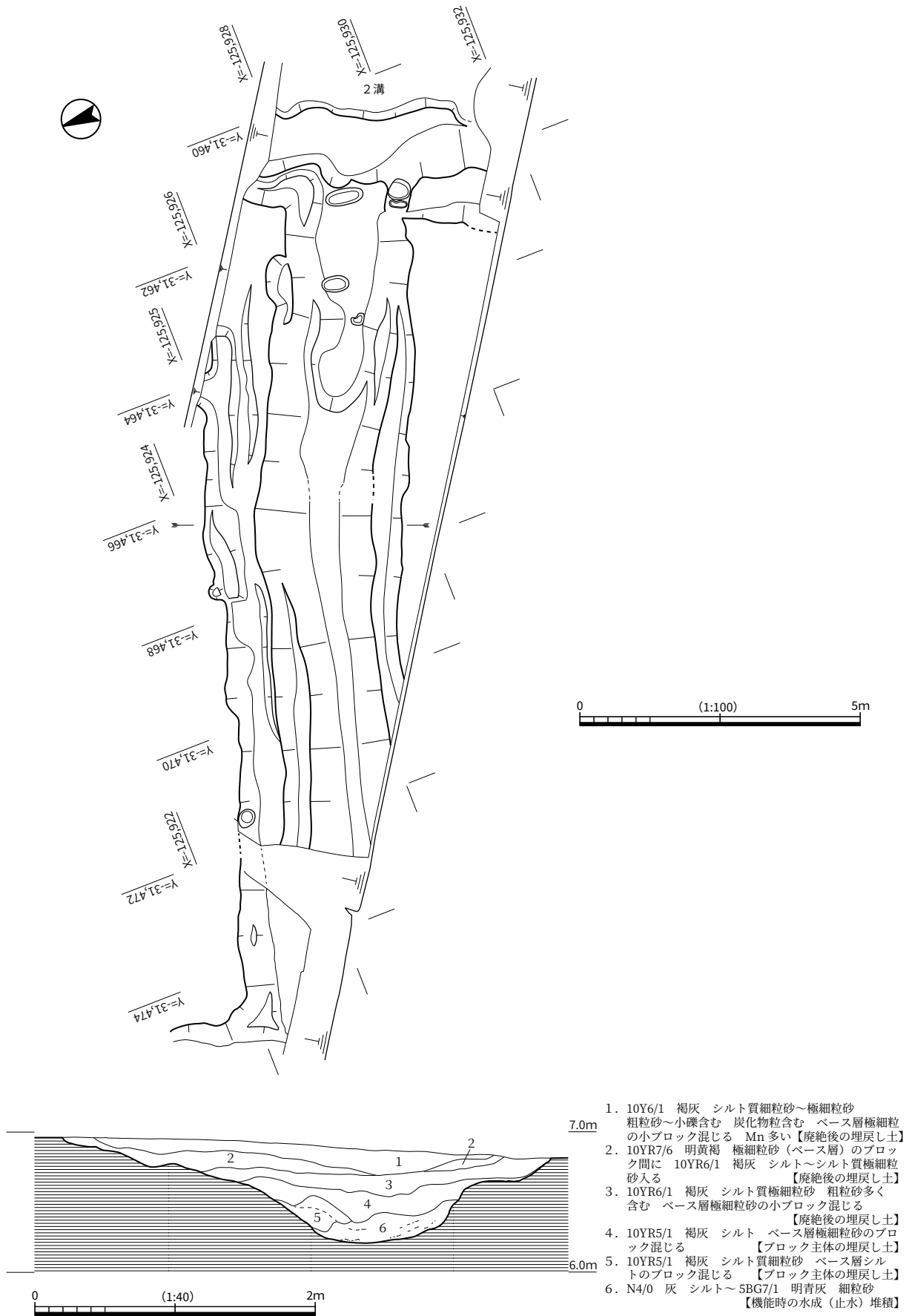


図 111 溝 28 平・断面図

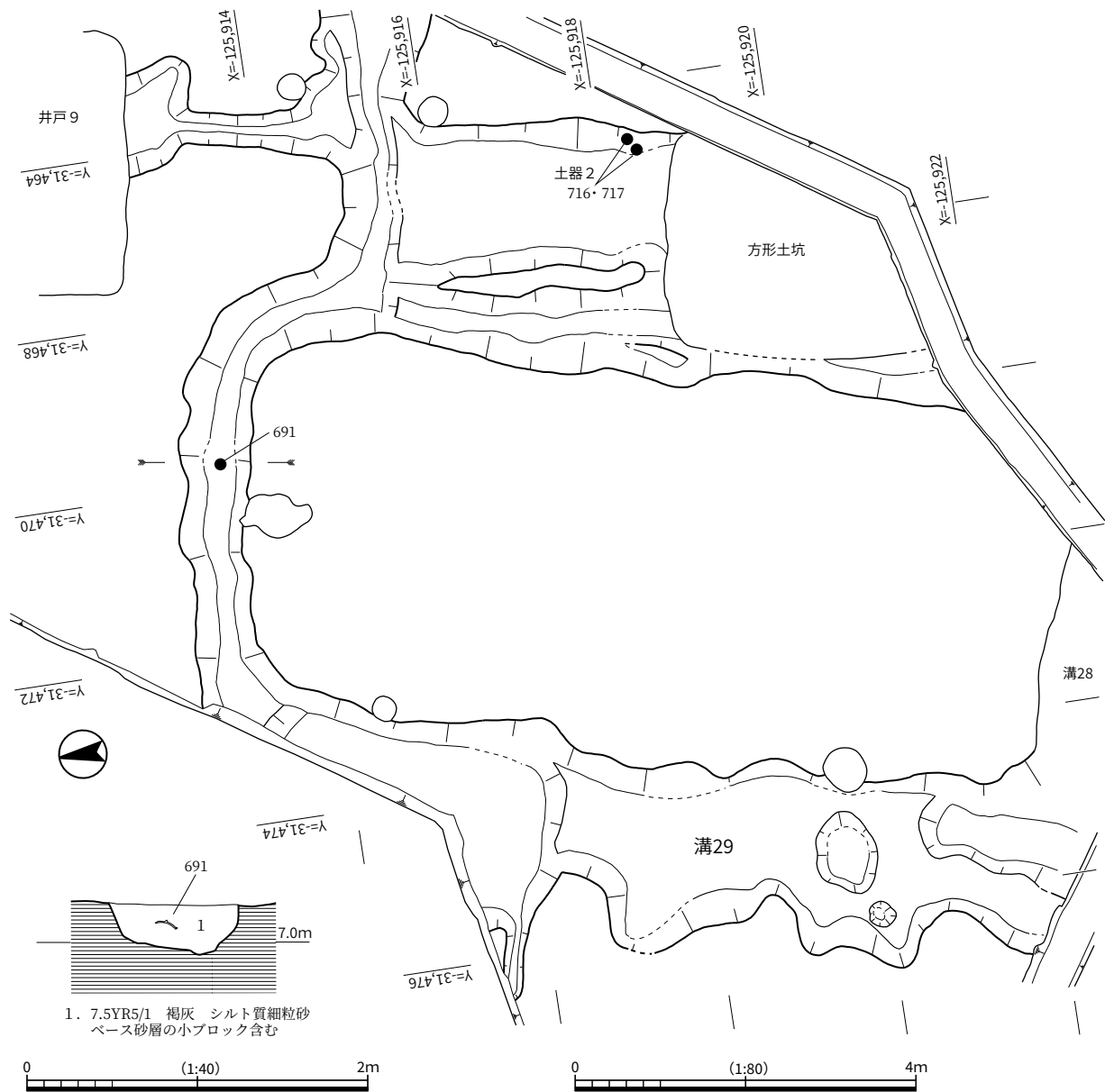


図 112 溝 29 平・断面図

の砥石と考えられ、表面、裏面に使用痕跡である滑面が認められる。

出土遺物から遺構の時期を決めることは難しいものの、溝27と一連の水路兼区画溝と考えられ、中世集落廃絶後の遺構と考えられる。

溝 29 (図 112・114、図版 32) 微高地域 8 の南寄り、矩形に連結する溝群の一部を溝29とする。おおむね微高地の最高所付近にあり、南側で溝28や方形土坑に切られる関係にあり、低地域にかけては溝31に連続する可能性が高い。また北に連結する溝では井戸9に切れ、溝30とも連続する可能性がある。検出した範囲では微高地の軸に沿った南北方向に長い方形の矩形を呈しており、この区画の東西幅はおよそ 7 m、南北幅は溝28の肩までで 10 m 程度の規模となる。この矩形の内部にも井戸やピットが分布するが、区画ないし溝と直接関わるものが含まれているかどうかは不明である。それぞれの溝の規模は場所ごとに大きく異なり、北辺では幅 0.8 m、深さ 30 cm 程度、西辺では幅 2.5 m、深さ 50 cm を超えるところもある。東辺は 2 条に分かれ、それぞれ幅 1.6 m、1.0 m を最大値とする。埋土には目立つ特徴はなく、第 3 a 層に似た褐灰色を呈するシルト質の土壌で、ベース層シルトのブロックを含む部

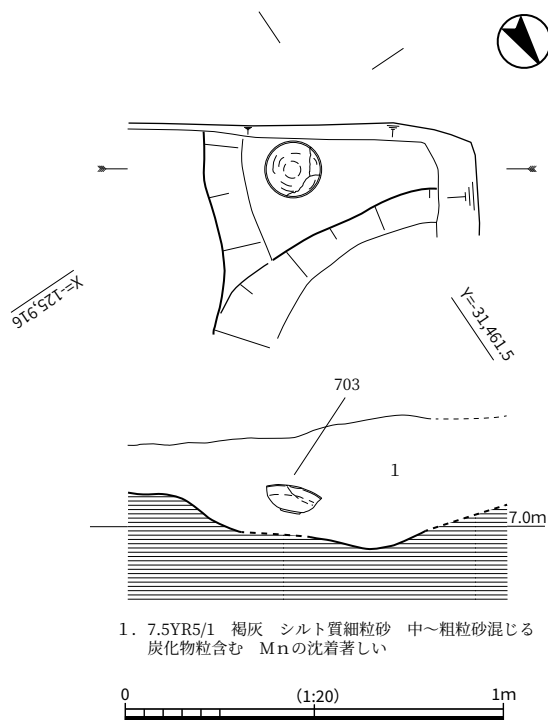


図 113 溝 31 平・断面図

分もある。埋土から土器片を主体とした比較的多くの遺物が出土し、弥生時代のものから中世のものまでが混在した状況である。そのうち図化したものを図114-687～698に示した。

687～690は土師器の皿で、688はいわゆる「ての字」状口縁で11世紀初頭のものか。689・690は外面1段ナデで、13世紀初頭前後と考えられる。691は樟葉型瓦器椀で体部内面のミガキは比較的密なものであるが、外面のミガキはやや間隔のあくものとなる。12世紀中頃のものか。692・693は白磁碗の高台部分で、693は内面に櫛目文が残る。694・695は古墳時代の須恵器坏身で、MT15型式段階の695は完形である。696は須恵器甕の口縁部片、697は弥生時代後期の甕であろう。698はサヌカイトの剥片で、今回の調査で出土したものの中では最大である。また写真のみの掲載とした892は滓である。

695の出土は古い時期の遺構の重複の可能性が高いものの、出土遺物を古代以降に限定してみても、これら遺物には時期幅があり、年代を決しがたい。おおむね中世段階の遺構かと考えるが、溝や溝により構成される矩形の区画の性格についても不明であり、検討課題を残す。

溝 31 (図 113・115、図版 32) 微高地域 8 の西端部、溝 27 への傾斜面部分で検出した溝で、20-1-4 トレンチの南西角で、西から続く溝が北へ方向を変える付近に瓦器椀(703)を埋置している。図上での復元では溝 29 から東へ延びる溝の延長上にあり、一連の溝である可能性が高い。一方北へ屈曲した延長上は 19-1-7 トレンチの範囲まで続く可能性が高い。溝全体では土器片を主体に遺物が多く出土し、弥生土器から中世の土器まで時期幅のある遺物を含む。一部を図 115-699～703・708 に図示した。

699～701は土師器皿で、いずれも外面のナデは1段である。13世紀前葉のものか。702・703は瓦器椀で、703は大和型か。口縁端部内面の沈線はわずかに段状に残るのみで、12世紀後半のものとする。708は弥生土器の甕底部で、時期のさかのぼる土器の混入であろう。土師皿や瓦器椀の年代からみると12世紀後半～13世紀前葉の遺構の可能性が高いが、溝の性格は不明である。

その他の遺構・遺物 (図 99・115) 図 115 に図示した遺物と出土した遺構を簡単に報告する。溝 30 は微高地域 8 の北西寄りにあり、溝 31 に切られる溝で、ほぼ直角に屈曲する。704・706・707の土師器、弥生土器が出土した。遺物の時期幅はあるが、段階的には比較的さかのぼる遺構と考えられる。溝 32 は溝 31 と錯綜する小溝で、709の土師器甕口縁片が出土した。溝 34 は微高地の東斜面に傾斜面に直交する溝で、714・715の土師器高坏片が出土した。古墳時代のものと考えられる。土坑 32 は井戸 9 の北にあるもので、鉄釘が出土しており、写真のみ 878 に示した。土坑 33 は井戸 9 の西にあるもので、やはり鉄釘が 1 点、出土している。写真のみ 881 に示した。ピット 36 は土坑 33 を切る小ピットで、711 に示した須恵器椀の底部が出土している。底部内面に絞り痕を、外面に糸切痕を残す。篠窯産の椀か。ピット 37 は方形土坑の西にあるもので、710 に示した土師器皿が出土している。いわゆる「ての字」状口縁のもの。ピット 38 は溝 29 の肩付近を切る小ピットで、712 に示した瓦器椀が出土している。内面のミガキ

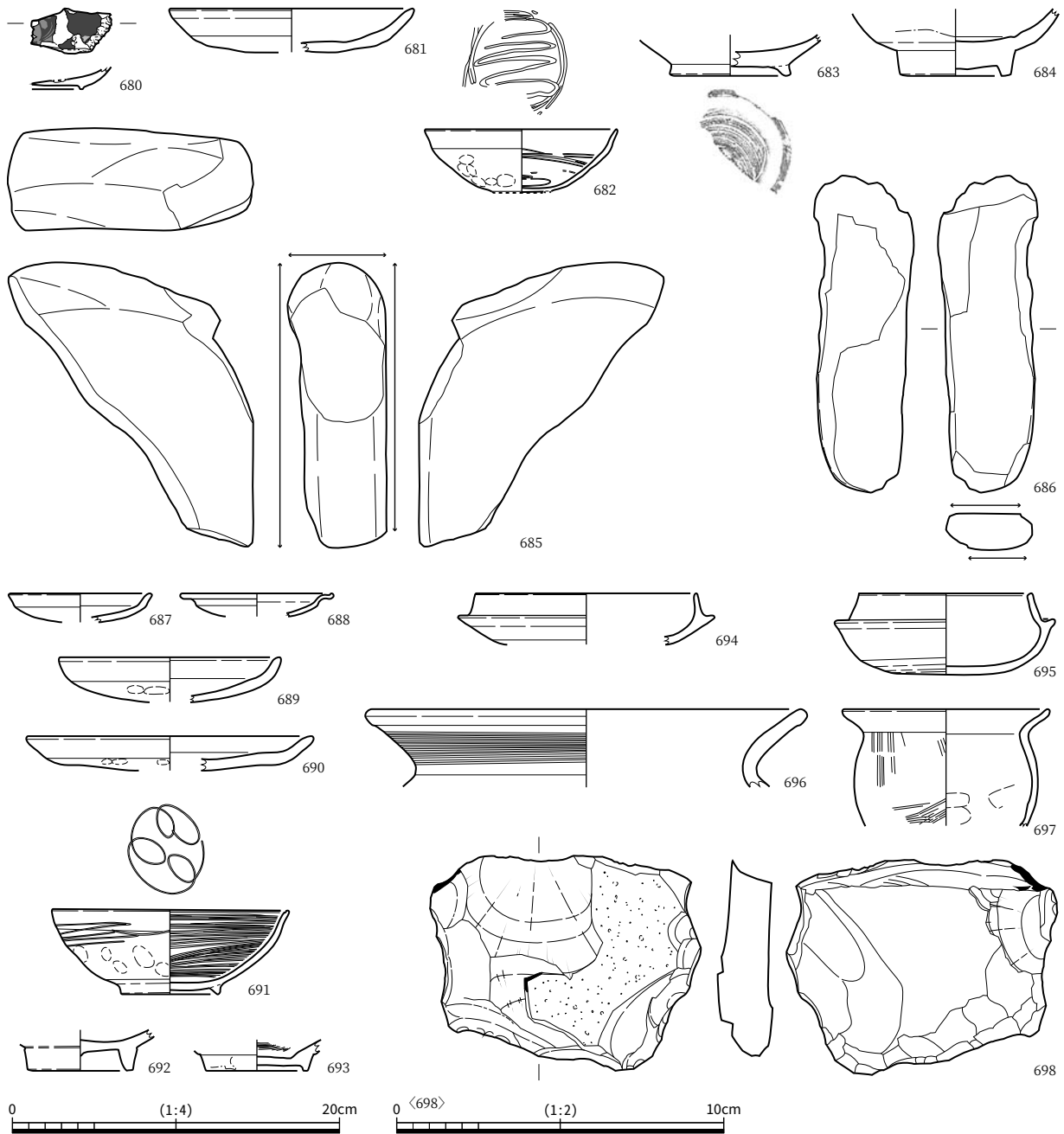


図 114 溝 出土遺物

はまばらで、高台もわずかな痕跡を残すのみである。樟葉型の新しい段階のもので、13世紀後葉～14世紀前葉のものか。集落廃絶後の遺構となる可能性がある。ピット39は井戸9の肩付近にある小ピットで、写真のみ掲載した鉄釘(876)が出土している。ピット40は井戸9の北西方向にあるもので、鉄釘が出土しており、写真のみ882に掲載した。このほか、明確な遺構とはいえないが、土器埋納と思われる出土状況を示すものがある。土器1(718・719)は井戸9の北側、浅い落ち込みの底で確認したもので、須恵器坏身と土師器高坏の坏部を並べて埋置したものである(図版32下段左上)。TK10型式段階のもので、6世紀中葉のものと考えられる。土器2(716・717)は方形土坑の北、溝29にかかる位置で確認したもので、完形の須恵器有蓋高坏蓋と坏身が口縁を上にして並び(図版32下段左下)、TK208型式段階、5世紀中葉のものと考えられる。土器3(713)は井戸9の北側にあり、浅い落ち込みの中で完形の瓦器椀(713)が埋置されていた。外面にわずかにミガキを残す。樟葉型で13世紀後半のものか。

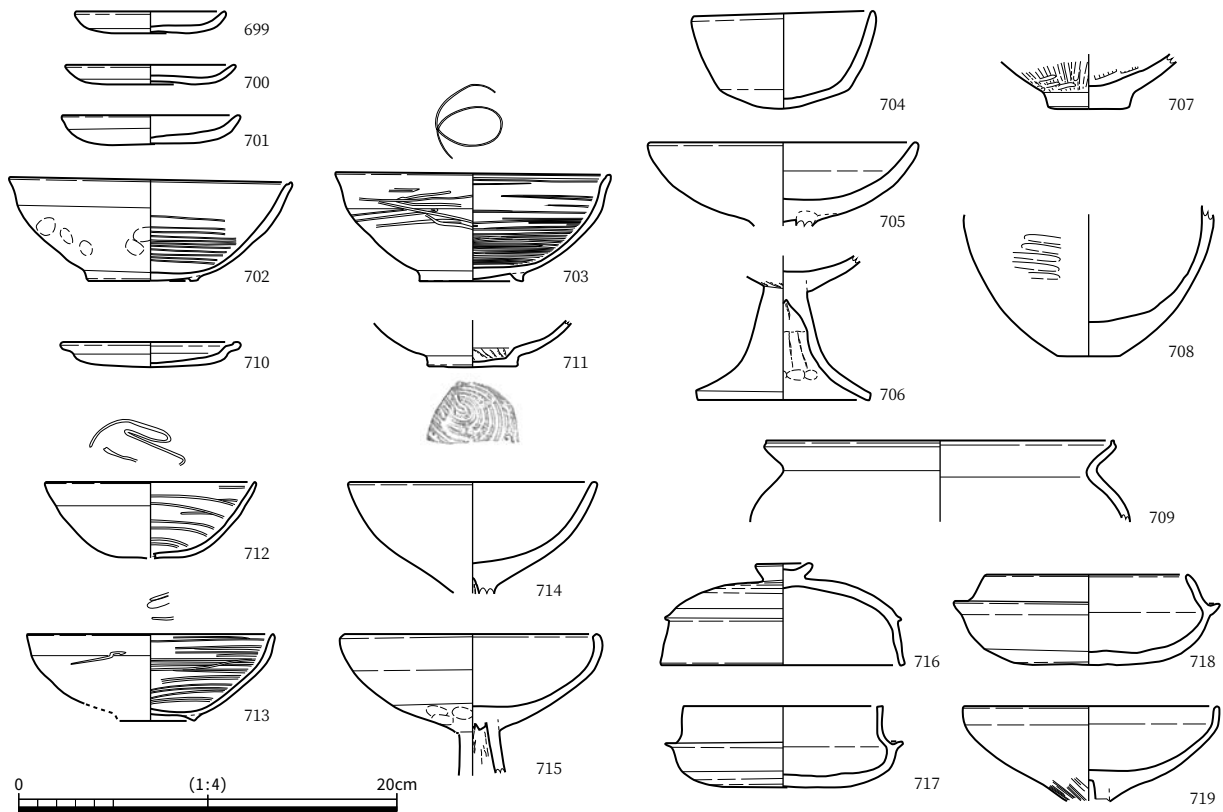


図 115 遺構 出土遺物

層出土遺物 (図 116) 微高地域 8 の遺物包含層に相当する第 2 層・第 3 a 層からは古墳時代から中世にかけての土器片や、瓦片などが多く出土しており、その一部を図 116 に示した。中世の土器では土師皿、瓦器椀、瓦質土器、須恵器甕、石鍋、白磁などがある。727 は瓦器の輪花椀で、見込みに斜格子の暗文を施す。730 の瓦器椀は比較的古いもので、内外面のミガキも緻密で、見込みに連結輪状の暗文を、底部外面に×の線刻を施す。734 は滑石製石鍋の口縁から鏝、735 は白磁四耳壺の口縁と考えられる。738 は灰釉の皿、739 は常滑焼の広口壺もしくは三筋壺と考えられる。7 世紀の遺物では 746 の軒平瓦があり、梶原寺創建瓦である重弧文が認められる。古墳時代の遺物では 5 世紀～6 世紀の須恵器坏類(747～749)、土師器高坏(750～752)がある。把手(740～742)には舌状、牛角状があり、740 は須恵器の把手である。ほかに小型の管状土錘(754・755)があり、754 は 2.7 g、755 は 3.4 g を測る。石製品では 756 の砥石があり、流紋岩質の小型のものである。写真のみの掲載としたものに 871 の開元通寶、897 の鉄片、898 の滓、910 の青磁碗、915 の白磁碗、923 の須恵器樽形甕、929 の結晶片岩がある。

小結 微高地域 8 は微高地域 7 に続く遺構の密集地域であり、ピットは多数確認したものの、建物遺構の存在は明確ではない。井戸は奈良時代のもの 1 基、中世のもの 2 基があり、類似する遺構として中世の方形土坑がある。溝の中には今回の調査では古い段階の瓦器椀を出土するものがあり、微高地最高所として比較的長期にわたり、土地利用が行われていたと考えられる。いずれの遺構も居住域に伴うものとするれば、微高地域 8 は中心というよりはその縁辺の様相を示している可能性が高い。遺構は明確ではないが、古墳時代にさかのぼる遺物の割合が比較的高い点も特徴である。須恵器坏類と土師器高坏の坏部を用いた 5 世紀中葉～6 世紀前半の土器埋納と考えられる遺構もみられた。微高地上面から東斜面にかけては複数の溝が錯綜する状況がみられた。年代は弥生時代、古墳時代、中世の各段階が想定されるが、遺構の性格は不明である。最終的には中世の居住域の廃絶をもって、耕地へと転換したと想定さ

れ、微高地を横断する、もしくは低地域との境部分に大規模な溝を掘削し、水路を兼ねた区画溝として機能したものと考えられる。

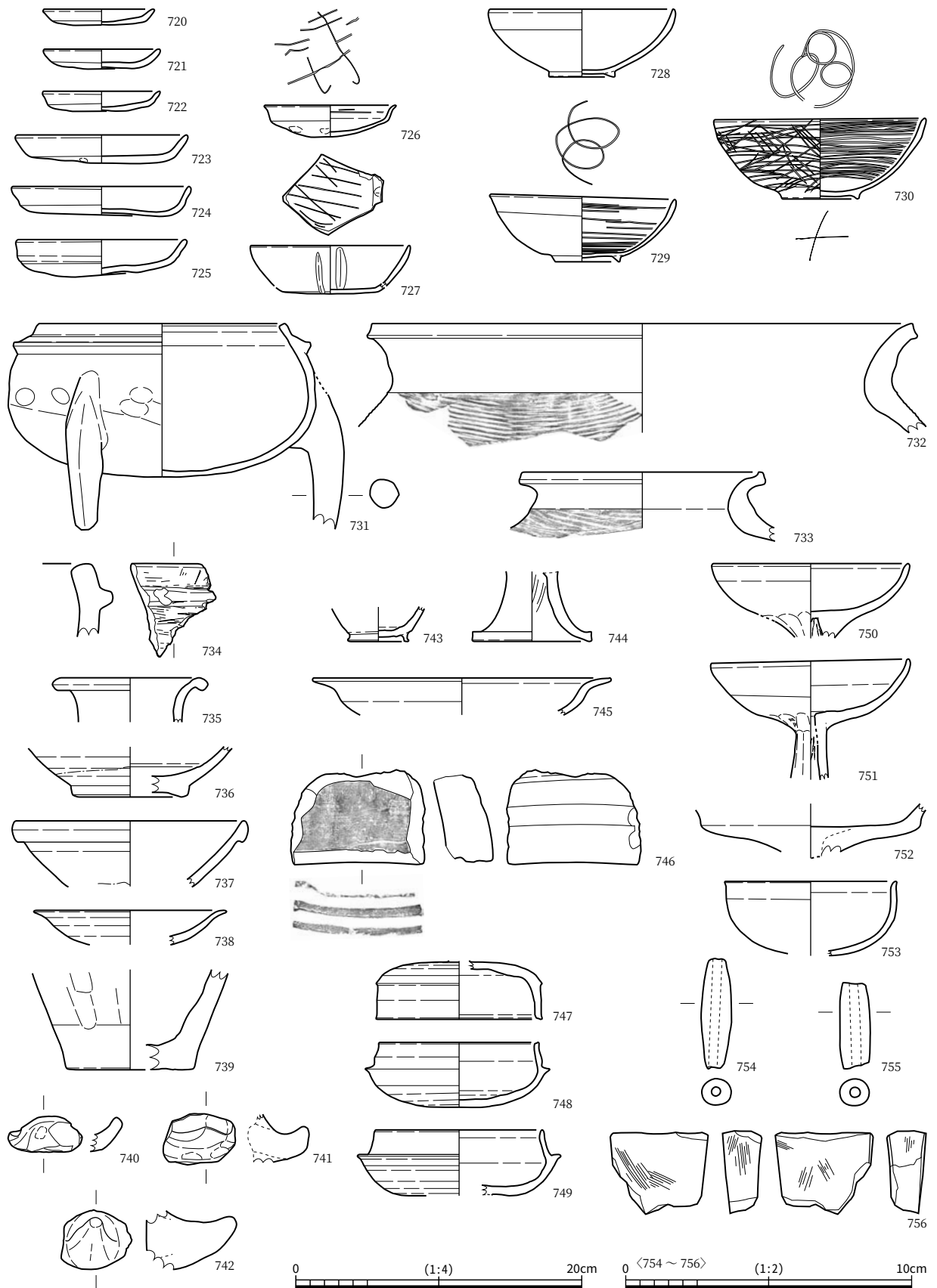


图 116 包含層 出土遺物

第3節 低地部分の遺構と遺物

第1項 東低地域の概要（図117）

第1節、微地形の項で示したように、今回の調査範囲全体は中央部分から西寄りの微高地部分と、内ヶ池に向かって下る低地部分、さらには微高地から西側の部分に区分することができる。本節ではこのうち、低地域で確認した遺構、遺物について、まず、微高地から内ヶ池間の東低地域全体の概要を記載し、以下、東低地域を低地域1～5に細分し、順に報告する。加えて西低地域の調査成果についても報告したい。

低地域1は微高地域3の東に接し、19-1-5トレンチ、20-1-4トレンチの一部が相当する。低地域2は微高地域8の東に接し、20-1-4トレンチの一部、5トレンチの一部に相当する。低地域3は低地域2の東にやや距離を置いて位置し、19-1-4トレンチが相当する。低地域4は低地域3の南に接し20-1-6トレンチが相当する。低地域5は低地域3の東に位置し、19-1-2トレンチ、3トレンチが相当する。なお、微高地域同様、この細分には地形的な要因はなく、基本的に調査トレンチを単位とする任意の区分である。

東低地部分は一部が国道171号の西側にかかるものの、ほとんどの範囲は国道の東側にあたり、検出遺構面の標高は6.6m～5.7mの範囲におさまる。ただし、第1節、基本層序の部分でふれたように、微高地上で遺構検出面となった基盤層上面は、東低地域では深度が深くなり、遺構がほぼみられないことから全面的には検出していない。従って図7に示した遺構面の標高は低地域における基盤層上面の状況を直接には表現していない。基盤層の標高は、内ヶ池付近では5.0m以下にまで下がると推測される。

低地域では微高地に近い部分では建物、井戸、溝、土坑など、比較的まとまった遺構の分布が認められ、居住域の縁辺を占めていると考えられる。しかし微高地から離れるとともに遺構密度は極端に低くなり、おおむね標高6.4m以下の範囲では基盤層上面の遺構はほとんどみられなくなる。この範囲で遺構としたものは、ほぼ第2層下面の耕作関連遺構とすべきものになる。ただ、地形的に最も低くなる低地域5では、縄文土器や弥生土器の細片とともに、石鏃やサヌカイト剥片がややまとまって出土していることから、縄文時代、弥生時代においては水域に接する狩猟活動などのエリアとして利用されていたものと考えられる。

第2項 低地域（1）

概要（図118、図版33・34） 低地域1は事業地中央付近北寄りの側道部分の調査区にあたり、西に微高地域4が位置する。19-1-5トレンチと、20-1-4トレンチの北寄りの部分が相当する。遺構面の標高は6.6m～6.3m程度で、標高7.2m程度である微高地とはおよそ60cm程度の差があるが、その境界部分は既存の集合住宅基礎による攪乱と道路敷にあたり調査では確認できなかった。やや散漫ながら全域に遺構の分布がみられ、確認した遺構総数は42基にのぼる。西寄りに南北方向の溝が複数あり、中央付近に礎石建物、井戸、土坑などが分布する。東寄りでは地形がさらに低くなる傾斜転換点にあたり、遺構、遺物の分布は希薄となる。東端には古代以前の地形の落ち込みを反映するかのよう、近世以降のものと思われる水溜状の落ち込みがみられたが、調査対象とはしていない。また中央には既存店舗の地下浄化槽による大型の攪乱がある。比較的狭い調査範囲ではあるものの、遺物の出土量は多く、遺構出土のものほかに第2層～第3層出土のものも多い。以下、個別の遺構・遺物について報告する。

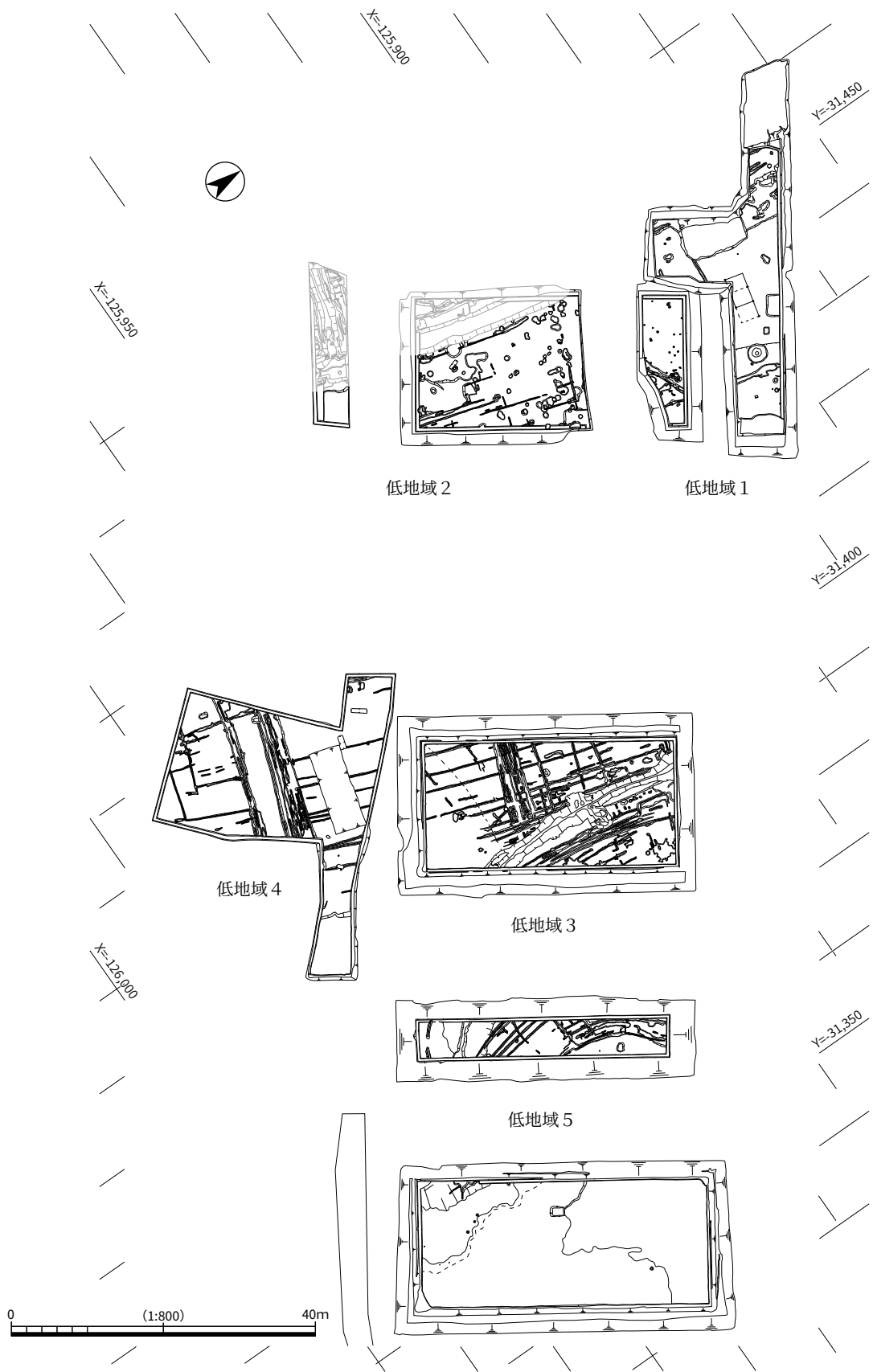


图 117 東低地域 全体平面图

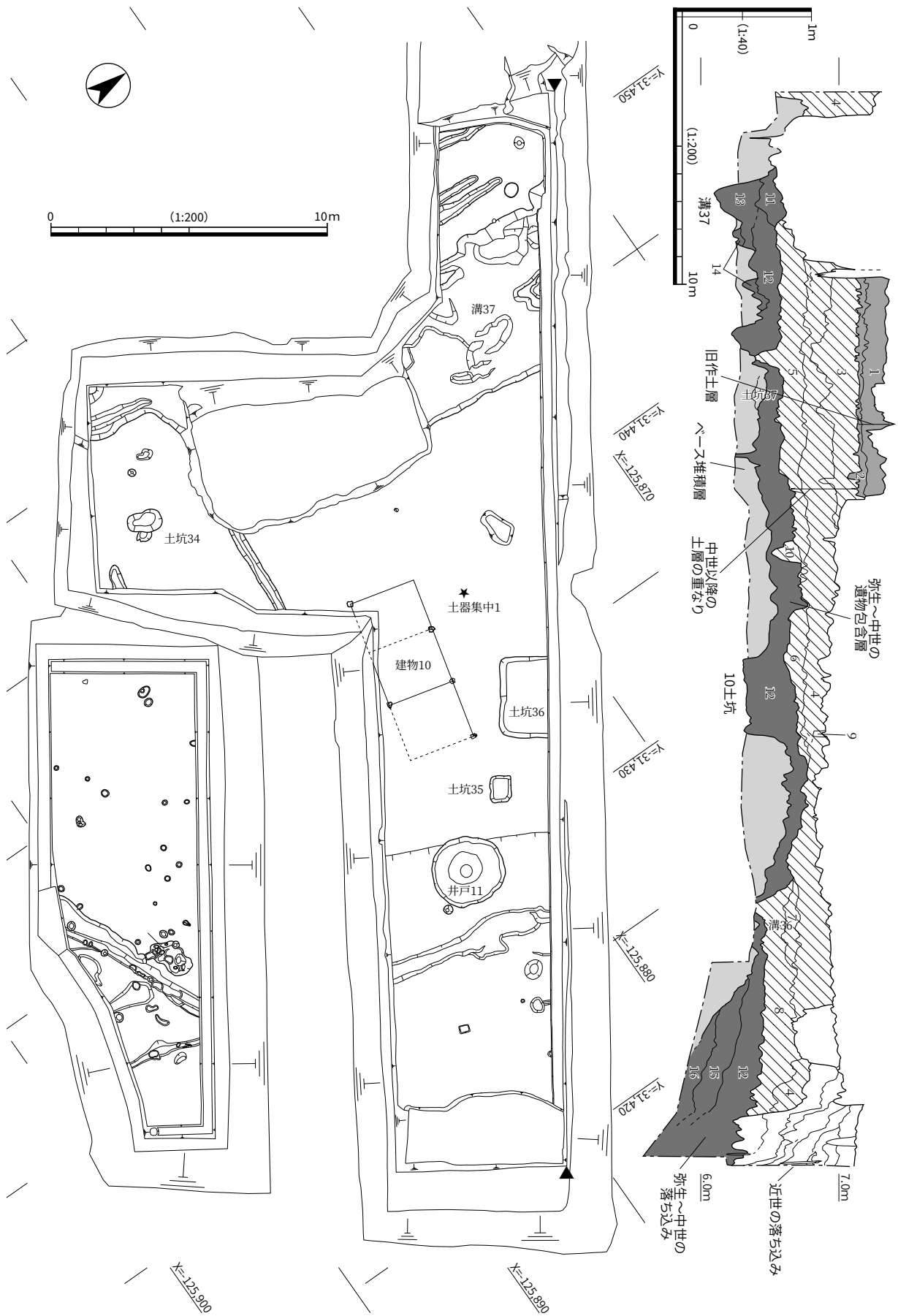


図 118 低地域 1 全体平・断面図

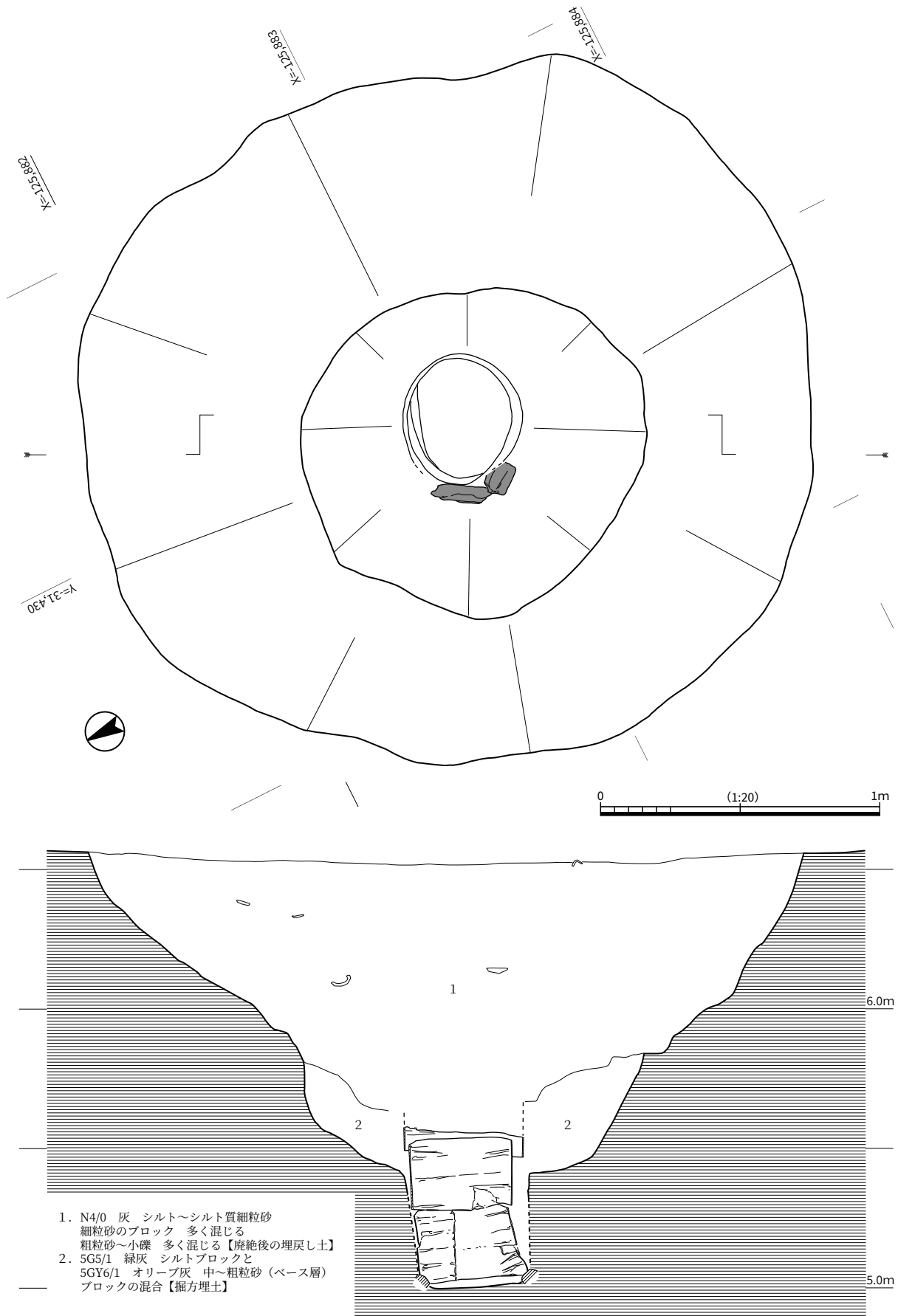


図119 井戸11 平・断面図

【図 118 土層断面図の注記】

1. 5Y5/1 灰 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く混る Fe 多い【第1層：現代の作土】 2. 10YR7/4 にぶい黄橙 極細粒砂 やや攪拌された堆積層【第1層：ベース】 3. 5Y6/1 灰 シルト質極細粒砂 粗砂～小礫多く混る Fe・Mn ラミナ状に入る【第2層：作土】 4. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 粗砂～小礫多く混る 下位に Mn 層【第2層：作土】 5. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質極細粒砂 根状の Fe 顕著【第2層：作土】 6. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細粒砂 粗粒砂多く含む【第2層中の耕作溝か】 7. 2.5Y7/1 灰白 極細粒砂 Mn・Fe 顕著【第1面：2 落込み埋土上層】 8. 2.5Y6/1 黄灰 シルト～極細粒砂 Fe 顕著【第1面：2 落込み埋土】 9. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細粒砂 根状の Fe 顕著【第2層：作土層か】 10. 2.5Y7/2 灰黄 極細粒砂 9の小ブロック混る 根状の Fe 顕著【第2層下面：遺構埋土】 11. 5Y4/1 灰 シルト～極細粒砂 Fe あり 炭酸 Fe あり【第3 a層】、12. 5Y4/1 灰 シルト～極細粒砂 Fe あり【第3 a層～溝37埋土】 13. 5Y5/1 灰 極細粒砂 Fe あり【第3 a層：溝37埋土】 14. 12と2.5Y8/6 黄 シルトブロックの混合【第3 a層】 15. 10YR3/1 黒褐 シルト～極細粒砂【第1面：2 落込み埋土】 16. 2.5Y8/6 黄 シルトの漸移層【ベース層上部の土壤化か】

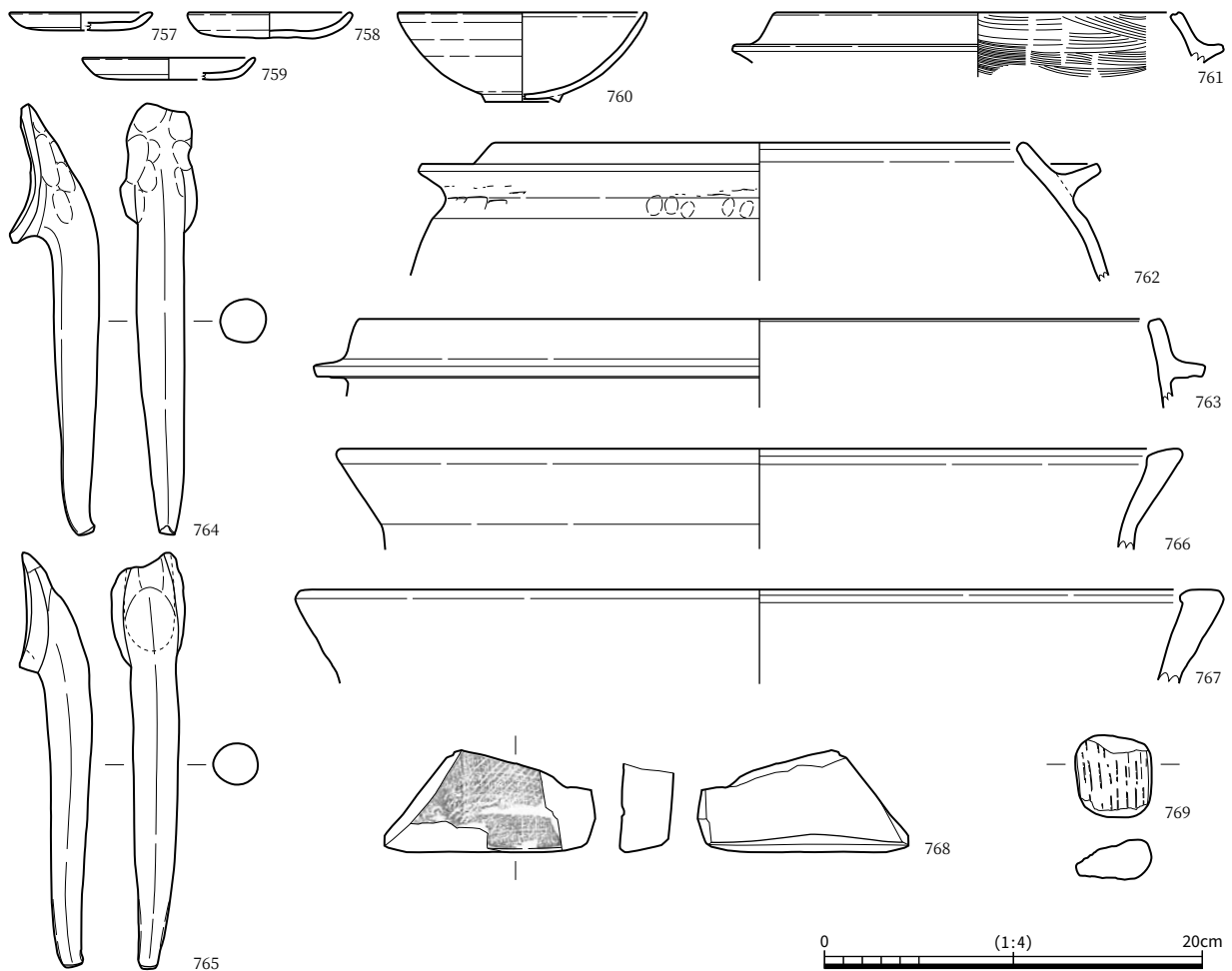


図 120 井戸 11 出土遺物

井戸 11 (図 119・120、図版 35) 低地域 1 の西寄りに位置する井戸で、さらに地形が低くなる部分の傾斜転換点付近にあたる。遺構検出面での掘方は、直径2.5m程度の円形で、深さはおよそ150cmを測る。掘方の断面形状は、上位は小段をもつすり鉢状、下位は垂直で、中央に底板をはずした曲物を積み、井戸枠としている。曲物は3段分を確認し、さらに上部、掘方の小段付近にまで井戸側が設けられていた可能性が高い。最下段と2段目の曲物は直径35cm、高さ25cmのほぼ同じサイズのもので、3段目は直径45cmほどとやや大きい。最下段の曲物は礫を用いて固定されていた。井戸枠内の埋土は詳細に観察できなかったが、おおむね泥質のシルトで埋没し、廃絶後、上部は人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は中世の土器片が主体で、図120にその一部を示した。意図的な遺物の埋納はみ

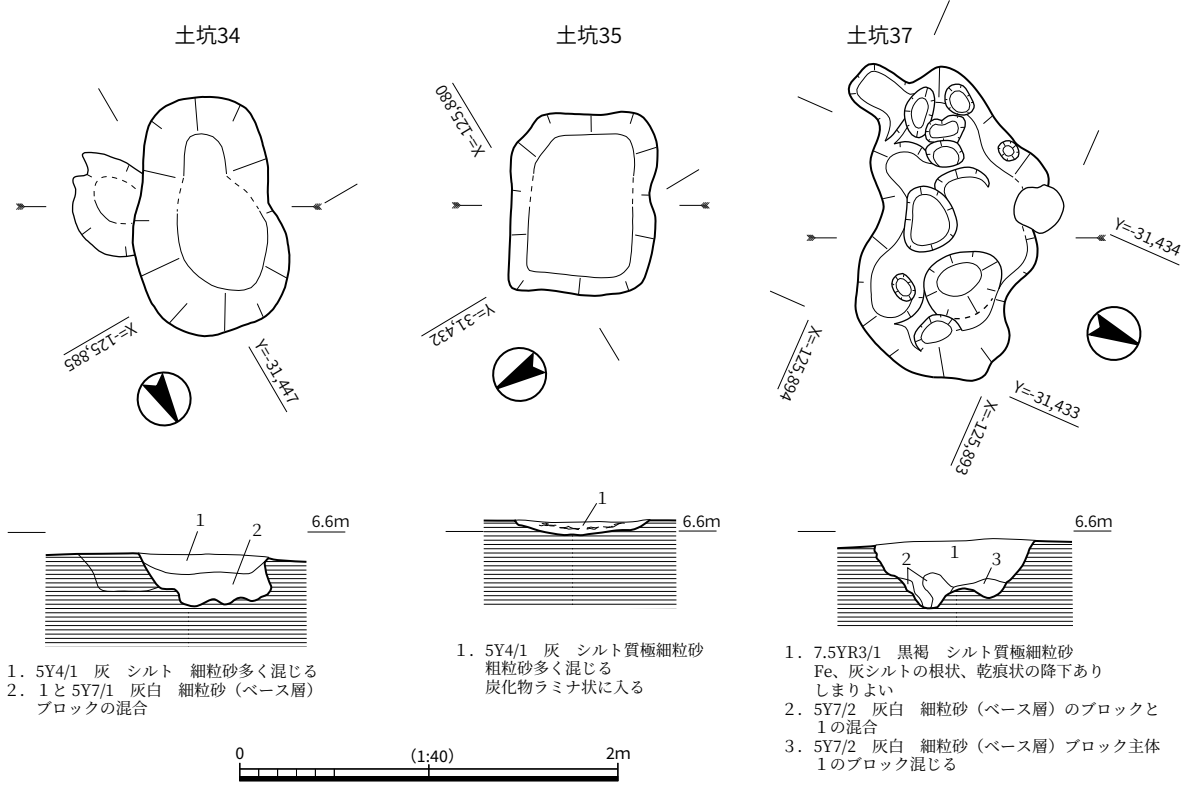
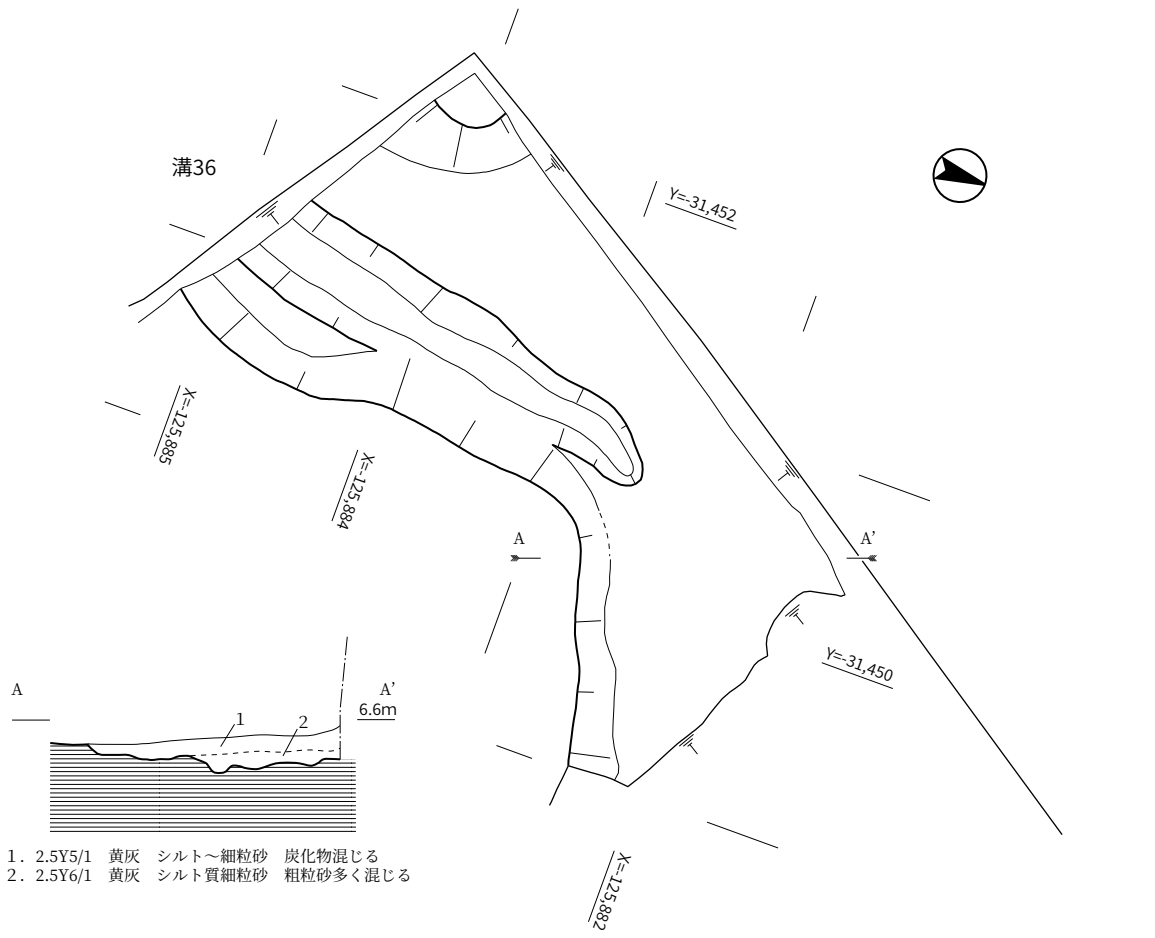


図121 溝36 土坑34・35・37 平・断面図

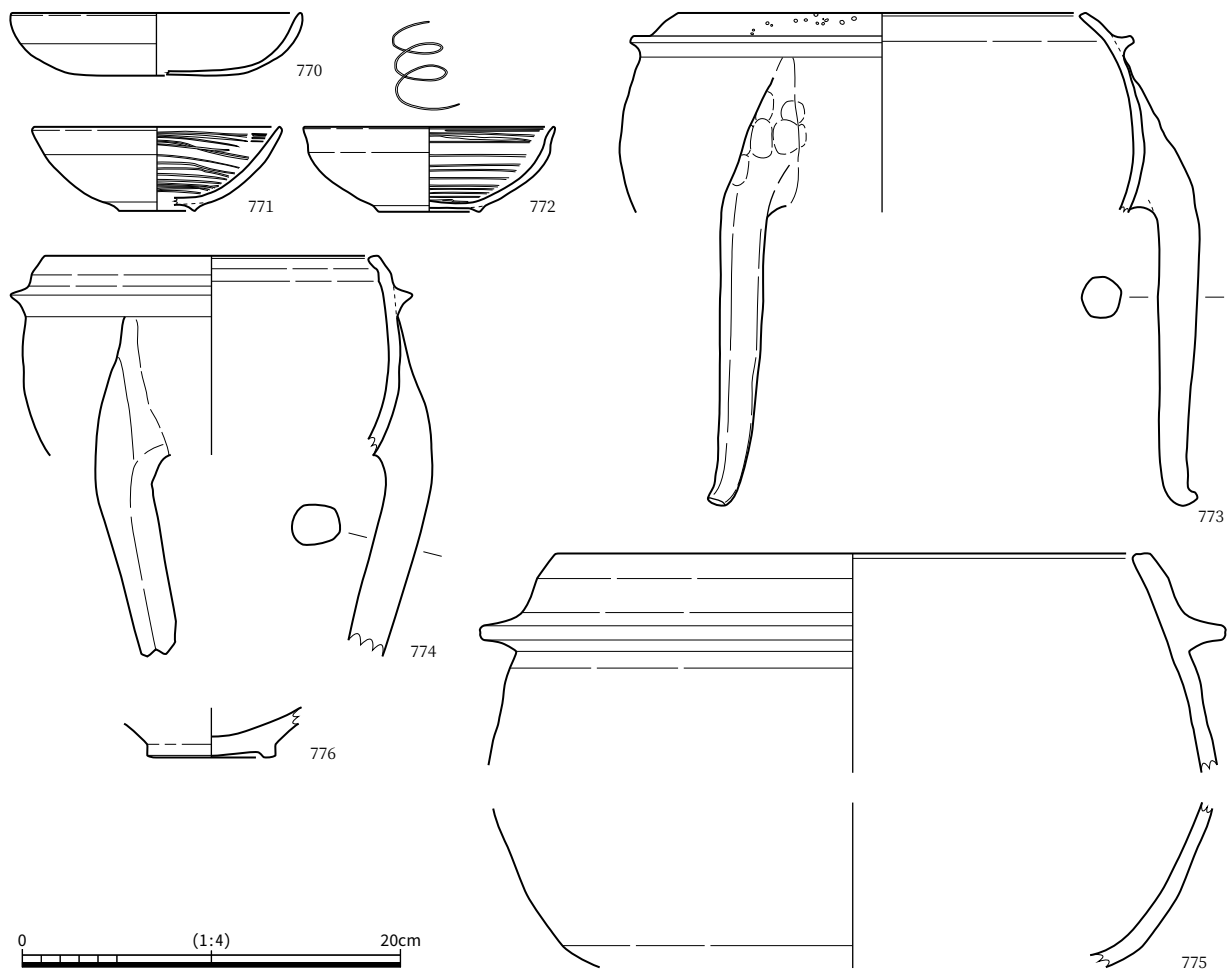


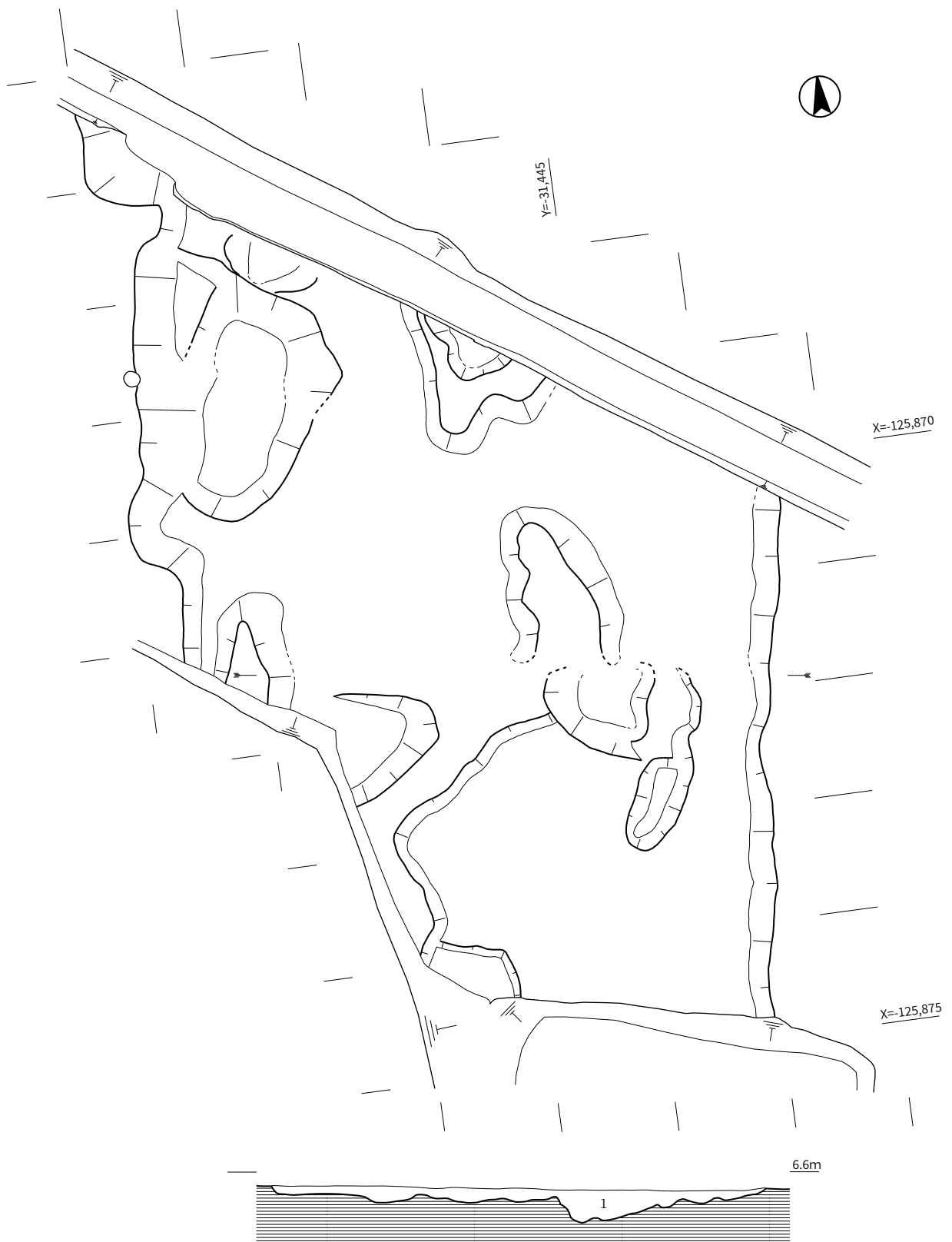
図 122 溝 36 出土遺物

られず、埋め戻し土に含まれる破片資料が主である。

757～759は土師器の小皿で、外面のナデ調整は1段のもの。760は瓦器碗で、内面のミガキは確認できるが摩滅により明瞭ではない。口縁端部内面には沈線の痕跡がわずかに段として残る。761は瓦質、762、763は土師質の羽釜で、764、765は瓦質三足釜の足である。766、767は瓦質の盤の口縁部と考えられ、大型の個体であろう。768は平瓦の破片で、凹面に布目痕を残し、凸面の調整はナデ消すが、わずかに縄目タタキの痕跡が残る。奈良時代の瓦の混入か。769は木質の破片で、性格は不明であるが浮子の可能性のある小片である。土師皿や瓦器碗はおおむね13世紀前半頃のものと考えられ、井戸の廃絶年代もこれに近いと考えられる。

溝 36 (図 121・122) 調査区南西角に一部がかかった状態で検出された南北方向溝で、西に屈曲する可能性があり、東に延びる小規模な溝と連結する可能性がある。攪乱を挟んで溝37と連続するようにみえるが、出土遺物の主たる時期は大きく異なる。確認できた範囲では幅1.6m、深さ15cmを測り、一部深くなる部分もある。埋土はシルト質の土壌で、炭化物が混じる。溝の輪郭を確認するより以前に、上部の第3a層を掘削していた際に土器片がまとまって出土しており、遺構掘削時に出土したものと併せて溝36出土遺物とした。出土遺物は中世の土器片を主体としており、一部を図122に示した。

770は土師器皿で、比較的高さのある個体である。部分的に2段ナデを施したようにみえるが、基本的には1段ナデであろう。771は樟葉型、772は和泉型の瓦器碗で外面のミガキは省略され、内面のミガキはやや疎である。771はひずみの激しい個体である。773・774は瓦質土器の三足釜で、体部と脚が



1. 10YR4/1 褐灰 シルト質細粒砂 粗粒砂多く混じる
 極細粒砂（ベース層）のブロック混じる

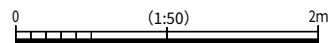


図 123 溝 37 平・断面図

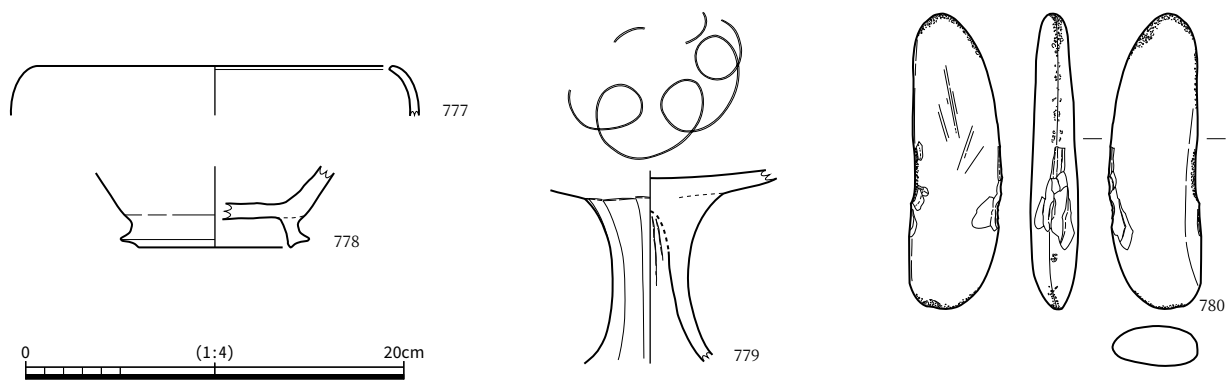


図 124 溝 37 出土遺物

接合する資料は珍しい。775は土師質の羽釜で大型品である。776は白磁碗の高台部分の破片である。これら遺物のうち、土師皿、瓦器椀の年代はおおむね13世紀初頭頃と考えられ、溝36の埋没は井戸11よりやや先行する時期かと考えられる。

溝 37 (図 123・124、図版 35) 調査区を横断する形でみられた南北方向の溝で、南は攪乱により失われ、北は調査区外へ延びる。確認できた範囲では最大幅5.5m、深さ10~35cm程度で、全体的に広く浅い溝といえるが、底面の凹凸が激しく、溝というよりは落ち込みに近いものかもしれない。埋土は比較的均質なシルト質の土壤で、出土遺物は細片に限られるものの、奈良時代の須恵器片、土師器片と石製品などが出土している。777は須恵器の鉢でいわゆる鉄鉢形のもの。778は壺底部で長めの高台が貼りつく。779は土師器の高坏で、脚は面取りを施し、坏部の見込みにはらせん状暗文が認められる。780はへら状石製品で、頁岩製。ほかに同心円の一部を切り欠いた当て具で、扇形の痕跡を重ねるといった特徴的な当て具痕跡を残す須恵器大甕の体部片や製塩土器の細片も出土している。遺物の様相から奈良時代の遺構とみられ、微高地との境界を画する溝の可能性はある。

土坑 34 (図 121) 低地域1の南寄りに位置する小規模な土坑で、小規模なピットを切る。長軸1.25m、短軸0.7mのやや不整形な隅丸方形を呈し、深さは30cmを測る。底面の凹凸は著しい。埋土は下位にベース層シルトのブロックを含む土壤、上位が灰色のシルトで、出土遺物は埋土掘削時に出土した土師器細片が2片のみであった。帰属時期は不明であるが、埋土は第2層下面の遺構と類似することから、中世以降のものとする。土坑の性格は不明である。

土坑 35 (図 121) 井戸11の北西に位置する土坑で、平面形は整った長方形を呈し、長辺0.95m、短辺0.8mを測る。底は皿状で浅く、深さは10cmに満たない。埋土は灰色のシルト質土壤で、炭化物がラミナ状に入る。出土遺物は全くみられず、性格、時期を考える根拠を欠くが、近接する遺構がほぼ中世段階のものであることから、土坑35も同時期の可能性はある。

土坑 37 (図 121) 低地域1の南東寄りにあり、さらに地形が低くなる部分の傾斜転換点付近にあたる。長さ1.6m、幅0.9m程度の不整な平面形を呈し、複数の小規模な土坑が重複するような形状をみせる。深さは40cm程度であるが、底面も凹凸が著しい。埋土は下位にベース層細粒砂のブロックを多く含み、上位は黒褐色の土壤で埋まる。埋土からは土師器細片が3片出土したのみで、時期については不明であるが、中世段階の遺構と推測する。土坑の性格は不明である。

建物 10 (図 125、図版 34) 井戸11の西に接する礎石建物と考える遺構である。第3a層掘削時に上面が比較的平坦な礫が複数確認されたことから、礫を残し周囲の土壤を掘り下げた結果、建物の可能性の高い配置となり、礎石建物と判断した。各礎石は第3a層の最上位で検出しており、第3a層上面が

ほぼ当時の地表面であったと考えられる。調査範囲内で検出した部分では1間×3間の柱配置の東西棟となり、そのうち5基の礎石が残るが、さらに南に展開する可能性がある。検出範囲での規模は芯々距離で6.1m×2.4mを測り、柱間寸法は東西方向が2.0m程度、南北方向が2.4m程度となる。建物方位は

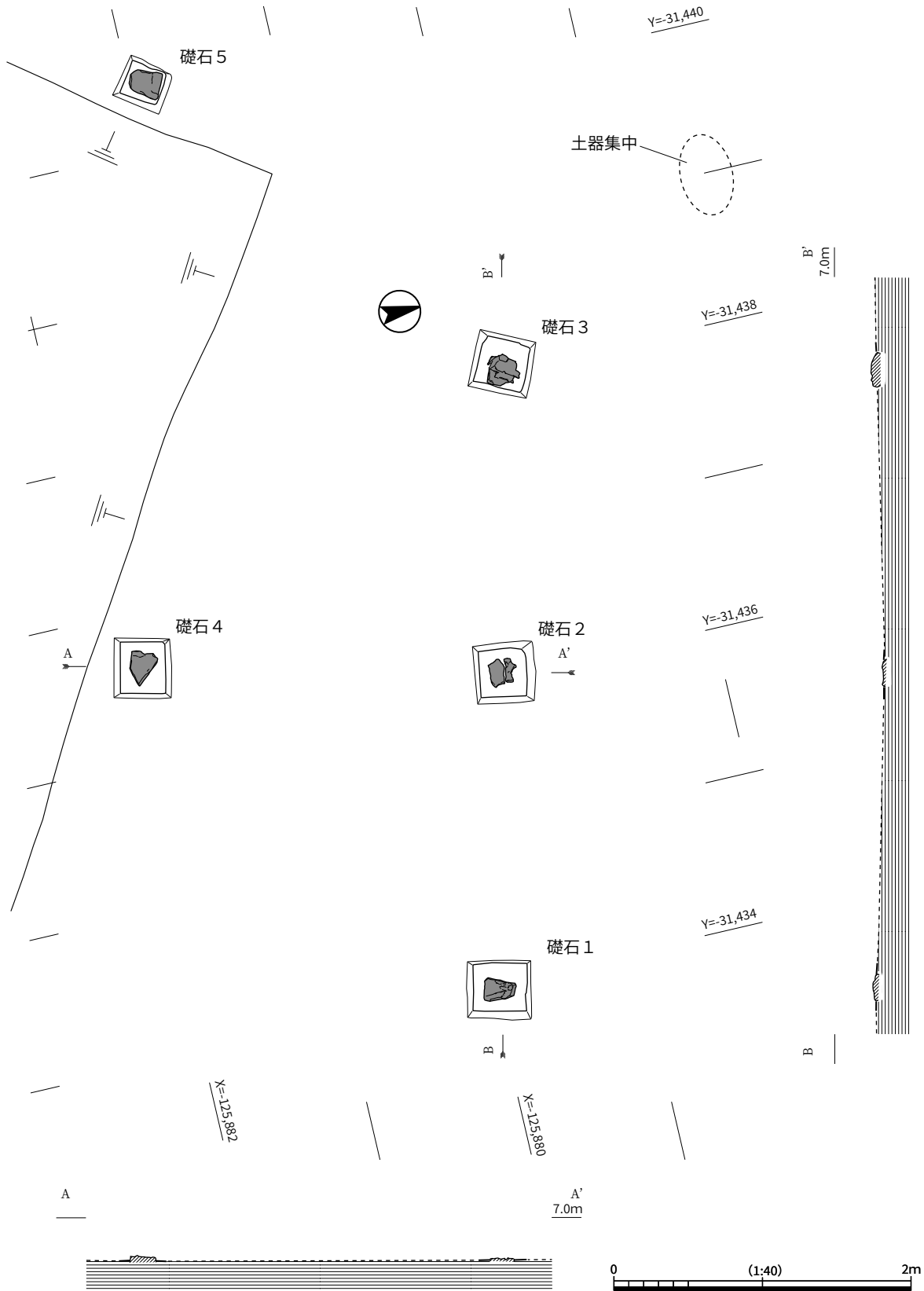


図 125 建物 10 平・断面図

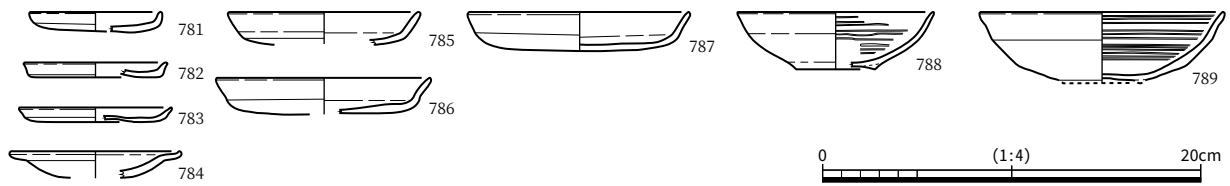
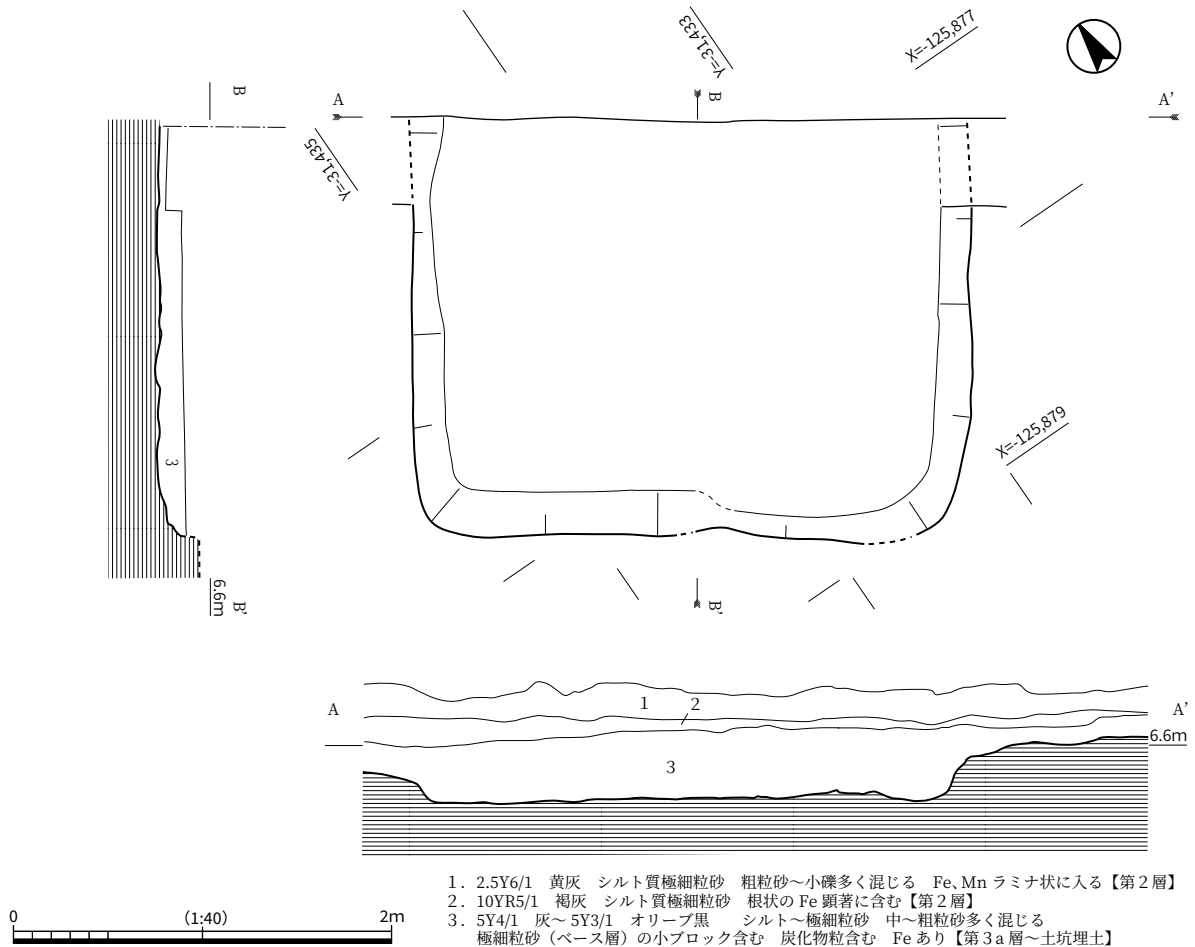


図 126 土器集中1 出土遺物

13.6°東に振れる。礎石は長さ20cm程度の比較的扁平なチャートや頁岩で、1石のもののほか、2石を合わせて礎石としたものもある。直接建物に伴う遺物は確認できていないが、近接して第3a層掘削中に瓦器椀や土師器皿が集中して出土した箇所(土器集中1)があり、関連する可能性がある。礎石建物は微高地域6で報告した2棟(建物8・9)があり、これらも年代を確定する根拠とともに建物である確実性を欠くが、周囲の状況から中世段階の建物となる可能性を想定した。建物10も想定する柱配置に伴う礎石が完存するものではないが、周囲に中世の居住域を構成する遺構が分布することから、中世段階の建物と考えておきたい。なお、中世段階の瓦の出土はほとんどなく、瓦葺きの可能性は低い。

土器集中1 出土遺物 (図 126) 先述のように建物10の北に隣接して、第3a層掘削中に土器が集中して出土する範囲があり、遺構の輪郭は把握できなかったものの、土器集中1として出土遺物の一部を図126に示す。781~787は土師器皿で、法量は大小に分けられる。外面調整が2段ナデのものと1段ナデのものがあり、小皿には特に歪の大きいものを含む。783は灯明皿の痕跡を残す。784はいわゆる「ての字」状口縁の皿で、極小さな破片であり、混入の可能性がある。788・789は瓦器椀で、いずれも口



1. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 粗粒砂~小礫多く混じる Fe, Mn ラミナ状に入る【第2層】
2. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細粒砂 根状のFe顕著に含む【第2層】
3. 5Y4/1 灰~5Y3/1 オリーブ黒 シルト~極細粒砂 中~粗粒砂多く混じる 極細粒砂(ベース層)の小ブロック含む 炭化物粒含む Feあり【第3a層~土坑埋土】

図 127 土坑 36 平・断面図

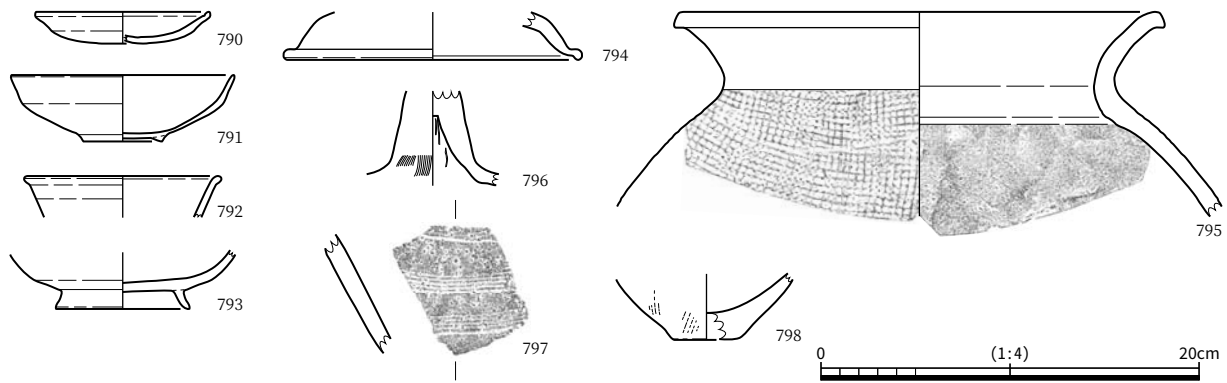


図 128 包含層 出土遺物

縁部外面に強いナデが認められ、和泉型かと考える。ほかに土師器小皿片が5個体分程度あるようで、瓦質土器釜の足も含む。調査時の状況として一括性が担保される出土状況ではなく、時期幅をもつ構成を示してはいるものの、土師皿、瓦器碗とも13世紀前半から中頃のものが主体となるようである。おおむね井戸11や溝36の年代にも近く、建物10を含め、ほぼこの頃の居住域を構成するものと考えられる。

土坑 36 (図 127) 低地域1の中央北寄りに位置する土坑で、当初、調査区北側溝の土層断面で確認していたものの、平面的には把握できなかつたため、空中写真測量終了後、再度土壌を掘り下げ、輪郭を把握した土坑である。調査区の北へ続くと考えられるが、検出範囲では比較的整った方形を呈し、幅3.0m、長さ2.0m以上となる。遺構検出面からの深さは20cm程度で、底はほぼ平坦である。埋土には炭化物粒を含むものの、第3a層との区別が難しい土壌である。内部からは土師器の細片が十数点出土し、古式土師器の甕、碗の体部片かと考えられる。さらに低地位に分布する第3a-2層に含まれる土器片と類似しており、古墳時代前期にさかのぼる遺構の可能性はある。竪穴建物の可能性も考慮されるが、柱穴などはみられず土器の出土も細片に限られることから、ひとまず土坑としておく。

包含層出土遺物 (図 128) 低地域1の遺物包含層に相当する第2層～第3a層からは古墳時代から中世にかけての土器片が比較的多く出土しており、その一部を図128に示した。790は土師器皿で口縁端部内面をわずかに肥厚させる。791は和泉型の瓦器碗で、内面調整は摩滅、焼成不良により不明瞭である。13世紀前半のものか。792、793は灰釉陶器と考えられる。残存率が極めて低く、口径、傾きとも図示には不安なものであるが、おおむね9世紀頃の碗と考えられる。794・795は奈良時代の須恵器、796は古墳時代の土師器高坏脚部、797・798は弥生土器である。797の壺外面には櫛描き文が認められる。

小結 低地域1では微高地上ほどではないものの一定の遺構分布があり、古墳時代、奈良時代、中世段階の遺構が認められた。なかでも中世段階では礎石建物と井戸、溝がセットになり居住域を構成していた可能性がある。調査範囲が狭く確定することは難しいが、溝によって区画された小規模な居住域を想定することができる。微高地域4から東へ一段降りた部分にあり、微高地の縁辺部における土地利用の状況をよく示している。これより東へはさらに地形が下がり、低い部分に第3a-2層が堆積する低湿な様相へと続く。

第3項 低地域(2)

概要 (図 129、図版 36) 低地域2は事業地中央付近の橋脚、側道部分の調査区にあたり、西に微高地域8が位置する。20-1-4トレンチと5トレンチの一部が相当する。微高地域8で報告した溝27の東側が範囲となり、遺構面の標高は6.4m～6.2m程度で、緩やかに東に下がるほぼ平坦な地形である。や

や散漫ながら全域に遺構の分布がみられ、第2層下面の耕作溝のほか、地形に沿った方向の溝や一部に土器埋納を伴う土坑が分布する。遺構総数は75基を数える。低地域2の東寄りには地形がさらに低くなる傾斜転換点にあたり、遺構、遺物の分布はやや希薄となり、第3a-2層が分布する。遺物の出土量は遺構出土のもの、層出土のものともそれほど多くはない。以下、個別の遺構・遺物について報告する。

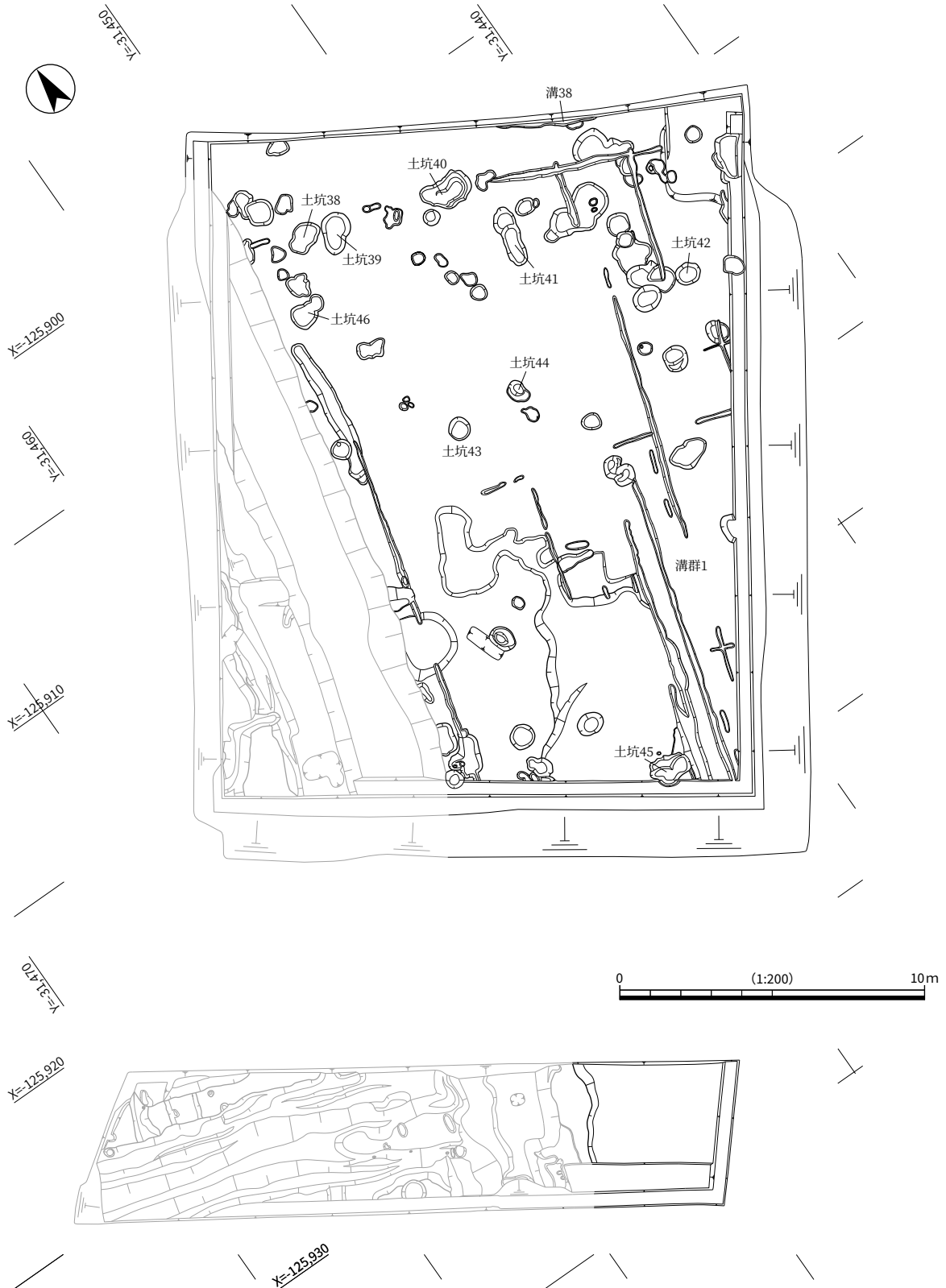


図 129 低地域2 全体平面図

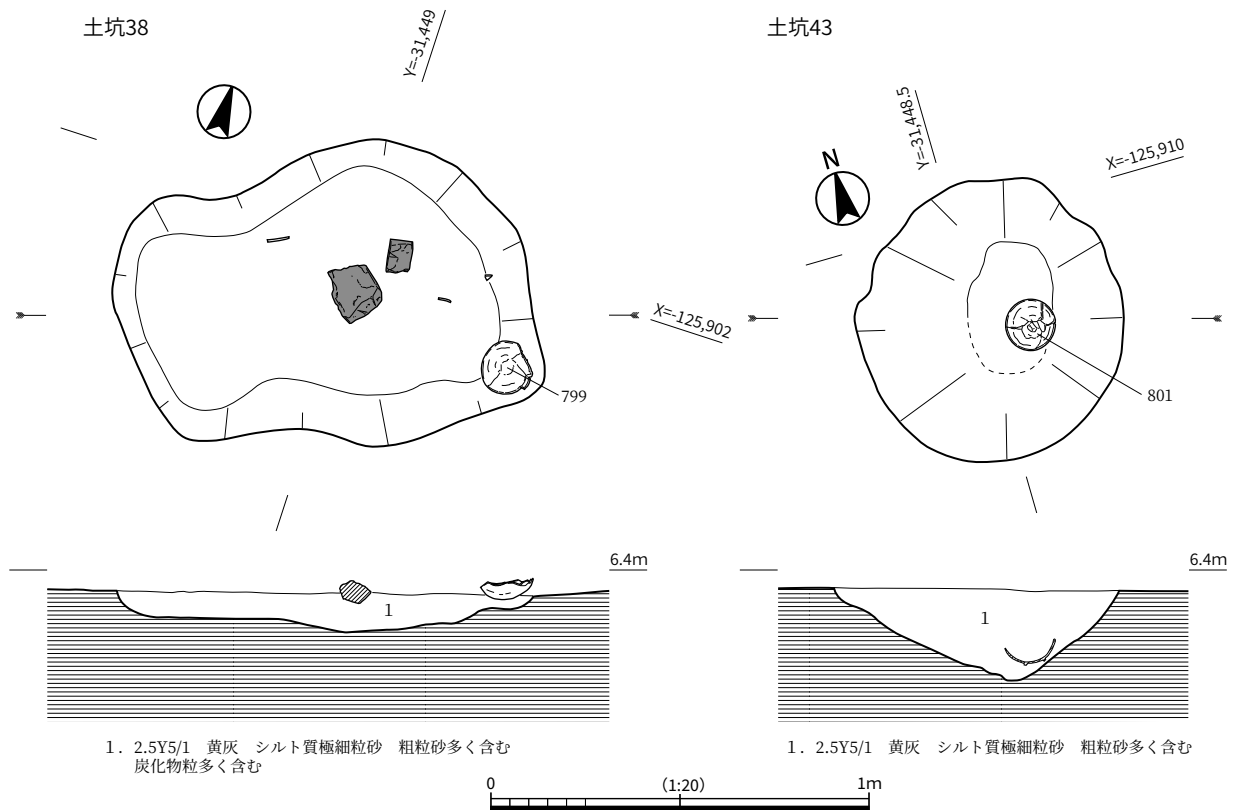


図130 土坑38・43 平・断面図

土坑38 (図130・132、図版36) 低地域2の北西寄りに位置する土坑で、溝27の東に接する。長さ長辺1.1m、短辺0.8m程度のやや不整形な隅丸方形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は黄灰色のシルト質の土壤で、炭化物粒を多く含み、中央付近には角礫が数点みられた。土坑の東角部分、底からやや浮いた位置で完形に近い瓦器椀(799)が正位置で出土し、土器埋納と考えられる。出土遺物には上記瓦器椀のほか、土師器小皿を含む土師器細片多数や、須恵器細片、瓦質羽釜の鏝や足の付け根部分などの細片、瓦器椀細片多数がある。799は口縁部外面を強いナデを施す和泉型の瓦器椀で、内外面の調整は摩滅が著しく不明ながら、形態からみて13世紀初頭前後のものと考えられる。低地域1で確認した集落の廃絶時期とほぼ同じ頃と考えられる。土坑の性格について積極的に判断できる材料はなく、土坑隅部分への土器の埋置から土壙墓の可能性も考慮されるが、埋土からほかに土器片が多数出土していることは、墓とみるには否定的な材料になる。集落の廃絶時の遺構とすれば、その後の耕地開発に先行する祭祀行為の痕跡の可能性もある。

土坑43 (図130・132、図版36) 土坑38のほぼ南、約8m離れて位置する土坑で、同じく溝27の西側に位置する。長径0.75m、短径0.7mの楕円形を呈し、すり鉢状の断面形状をもつ。深さは25cm程度である。埋土は土坑38とほぼ同じで、シルト質の土壤である。土坑の中央やや南東寄りにほぼ完形の瓦器椀(801)がほぼ正位置に置かれており、土器埋納と考えられる。ほかには土師器、瓦器椀の細片が少量出土したにとどまる。801は樟葉型の瓦器椀で、口縁端部内面に沈線がめぐる。外面の分割ミガキはややまばらながら、内面は比較的密に施され、高台断面も台形を呈している。12世紀前半～中葉のものと考えられ、今回の調査で出土した瓦器椀の中では比較的古い段階に位置づけられる。土坑の形状と土器の出土位置から墓の可能性は低く、居住域形成等、中世段階の土地利用に先立つ祭祀遺構の可能性を考慮しておきたい。

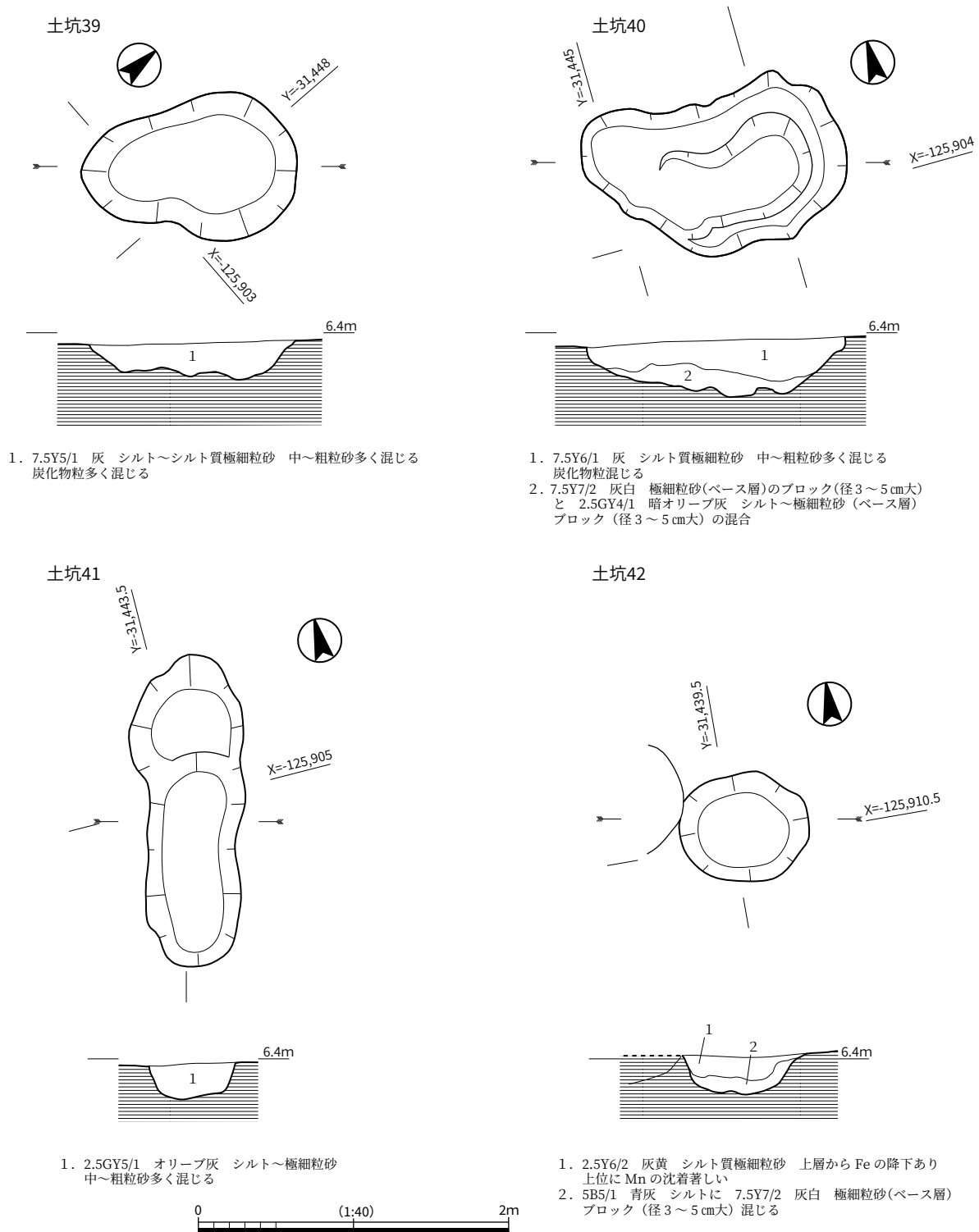


図 131 土坑 39～42 平・断面図

土坑 39～42 (図 131・132、図版 36) 低地域 2 で検出した土坑のうち、比較的規模が整っていたものをいくつか抽出し、報告する。土坑 39 は土坑 38 の東に接する土坑で、長さ 1.3m、最大幅 0.9m 程度の瓢箪形の平面形を呈する。底部は凹凸があり、深さは 25cm 程度を測る。埋土は炭化物粒を多く含むシルト質土壤で、須恵器片 3 片、土師器片多数、瓦器碗の細片多数が出土した。およそ第 2 層出土土器に近い様相であり、中世以降のものと考えられる。

土坑 40 は土坑 39 の東約 3m に位置するもので、平面形は長さ 1.7m、幅 1.0m 程度の不整形な楕円形を

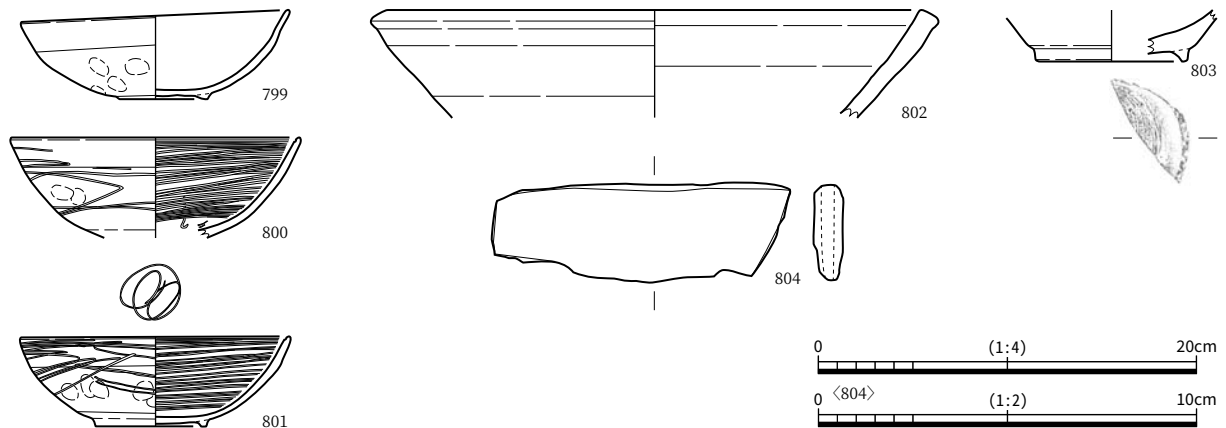


図 132 遺構 出土遺物

呈する。やや凹凸のあるすり鉢状の断面形状で、埋土は下位にベース層シルト～細粒砂のブロックを含む土、上位にシルト質の土壌があり、瓦器碗の細片多数、須恵器細片、わずかに奈良時代のものを含む中世主体の土師器細片多数が出土した。うち瓦器碗片 1 点を図132-800に示した。樟葉型の瓦器碗で、外面のミガキはまばらながら、内面のミガキは比較的に密に施される。12世紀代のものと考えられ、今回調査の瓦器碗の中では比較的古い段階の資料となる。

土坑41は土坑40の南約1.5mに位置するもので、平面形は幅0.6m～0.7m、長さ2.0mの溝状を呈し、深さは25cm程度を測る。埋土は砂混じりのシルト～極細粒砂で、土師器や瓦器碗の細片がやや多く出土したが、図示できるものはない。

土坑42は土坑41の南東約5m離れた位置にあるもので、複雑に重複する土坑群に接している。長径0.8m、短径0.7m程度のほぼ円形を呈し、深さは25cm程度である。埋土は上下に分層でき、下位はベース層極細粒砂のブロックを含む土、上位はシルト質土壌で埋没する。土師器と瓦器碗の細片がわずかに出土しているのみで、図示できる資料はない。

その他の遺構出土遺物 (図 132) 以上の遺構出土遺物に加え、図132に示した遺物と出土遺構を簡単に報告する。802は須恵器の捏鉢で、土坑44とした小規模な土坑からの出土である。803は陶器の碗で、底部は糸切である。施釉されている可能性が高く、灰釉陶器と考える。溝38とした、調査範囲の北端にわずかにかかる遺構出土である。804は鉄鎌の可能性のある鉄片で、錆が厚く付着する。土坑46とした瓢箪形の土坑出土である。ほか、写真のみの掲載とした遺物に土坑45から出土した瓦器の小皿片(901)、溝群1とする低地域2西寄りに分布する耕作溝群掘削時に出土した土師器の把手(924)がある。901はいわゆるコースター形の皿で、瓦器のものは珍しい。924は把手の大部分を欠失するが、切込みの痕跡が認められ、韓式系土器の可能性はある。

層出土遺物 (図 133) 低地域2の遺物包含層に相当する第2層～第3a層、また、より低地に堆積した第3a-2層からは古墳時代から中世にかけての土器片が出土しており、その一部を図133に示した。805はコースター形の土師器皿、806は土師器皿で灯明皿として用いられた痕跡を残す。807は瓦質土器の三足釜で、残存部位は限られているものの、三足が揃い、体部上半も復元的に図示した。808は須恵器坏身で、TK209型式段階、7世紀のものと考えられるが、この時期の遺構・遺物はほとんどみられない。809は須恵器短頸の甕で、口縁端部をつまみ上げ、頸部外面にもタタキ痕跡を残す。神出窯に類例がある。810・811は第3a-2層出土の土師器高坏で、古墳時代前期のものと考えられる。812～814は弥生土器で、812は櫛描文の広口壺、813は甕ないし壺の底部、814はミニチュア壺の体部～底部である。

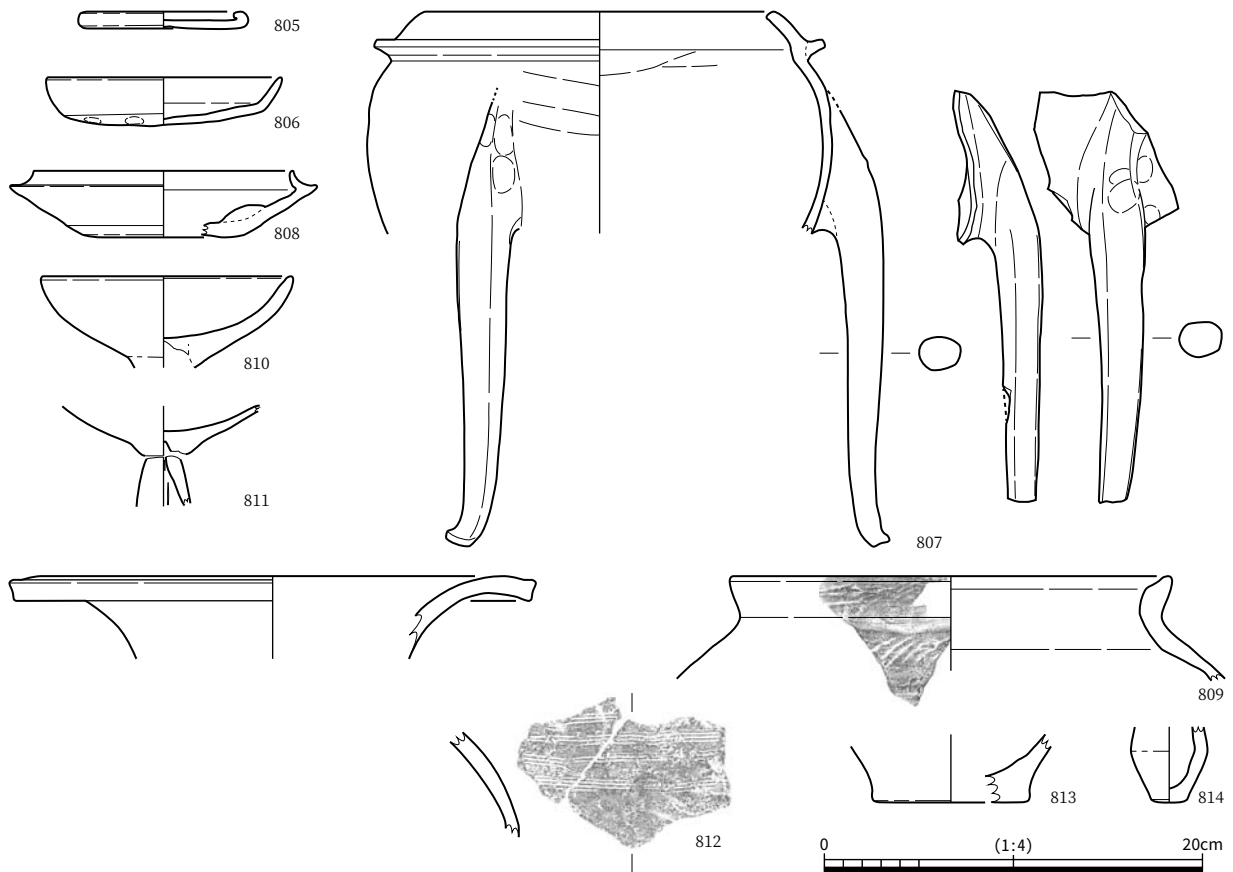


図 133 包含層 出土遺物

小結 低地域2においても微高地上ほどではないものの一定の遺構分布がみられるが、溝や土坑に限られ、居住域としての利用痕跡はみられない。土坑には瓦器碗を埋納した可能性の高いものがあり、墓よりは祭祀的痕跡の可能性を想定した。その場合でも瓦器碗の年代に差があり、一時期のものではないので、複数の段階を想定しなければならない。一つの試案として、12世紀前半のものは居住域形成などの土地利用、ないしは部分的な耕地化の開始にともなう段階、13世紀前半のものは居住域廃絶、全体的な耕地化に先立つものとする理解を示しておきたいが、現時点ではいずれも根拠は薄弱である。

第4項 低地域（3）

概要（図 134、図版 37） 低地域3は事業地中央東寄り付近の橋脚部分の調査区にあたり、国道171号を挟んだ西に低地域2が、南に低地域4が、東に低地域5が位置する。19-1-4トレンチに相当する。遺構面の標高は6.4m～6.25m程度で、低地域2とほぼ同じ数値となるが、第4章第1節に記したように、低地域3～5についてはほとんどの範囲で遺構検出面として基盤層上面までは掘り下げておらず、第2層を除去した段階の状況を示すことになる。側溝の土層断面において確認した範囲では、ここでの遺構検出面よりおよそ40cm下に基盤層上面があり、その上部に第3a-2層の堆積を認めることができた。

低地域3ではほぼ全面で遺構が検出されたが、そのほとんどは第2層の耕作に伴う小溝が錯綜するもので、それら以外には大規模な溝と土坑を検出したにとどまる。遺構の総数は6基を数える。遺構出土の遺物のほかに第2層からも遺物の出土はみられるが、それらのほとんどは攪拌を受け、摩滅の著しい細片であり、第2層の性格をよく示している。微高地域と比べると遺物量も少ない。以下、個別の遺構・遺物について報告する。

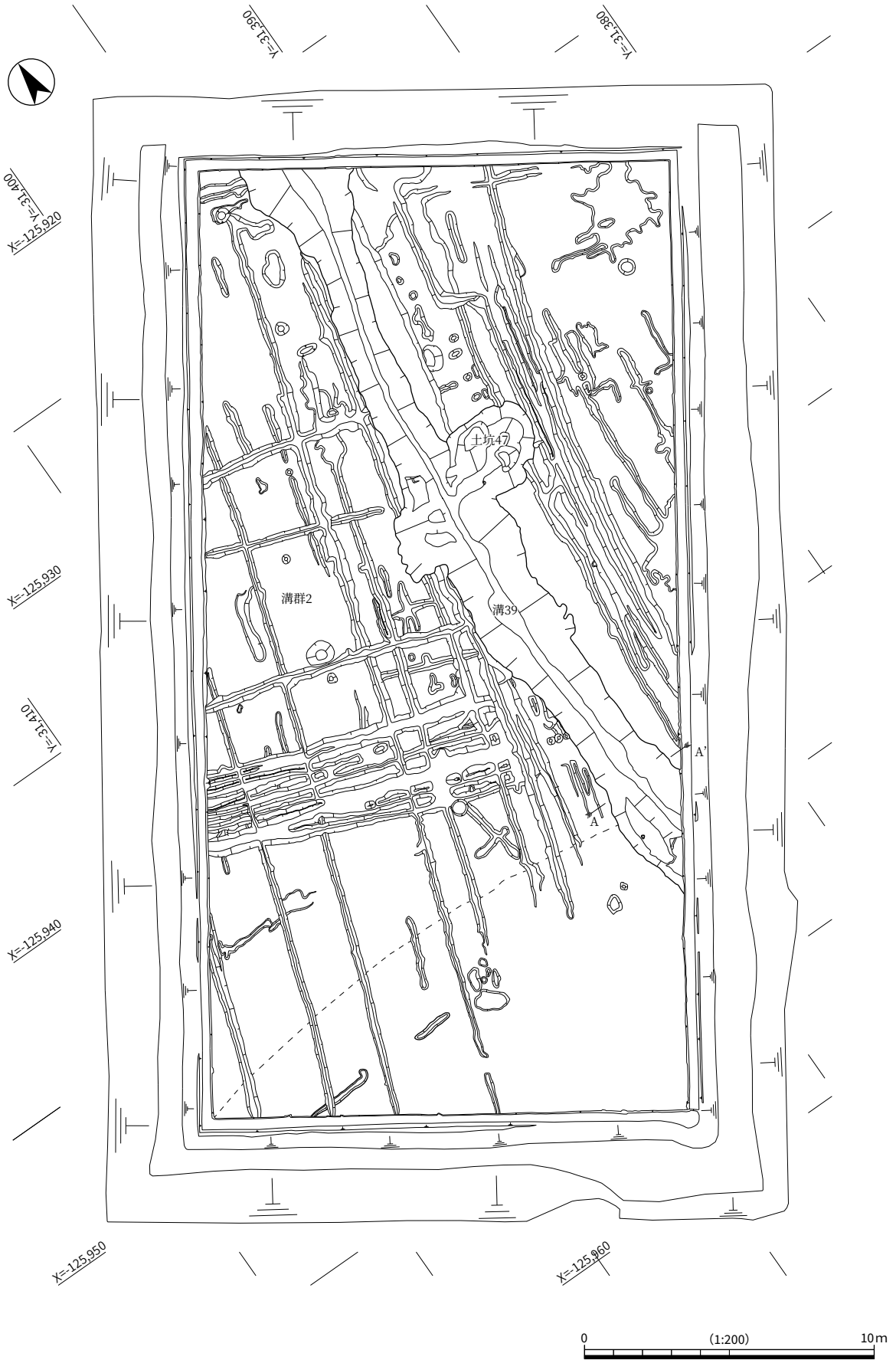


图 134 低地域3 全体平面图

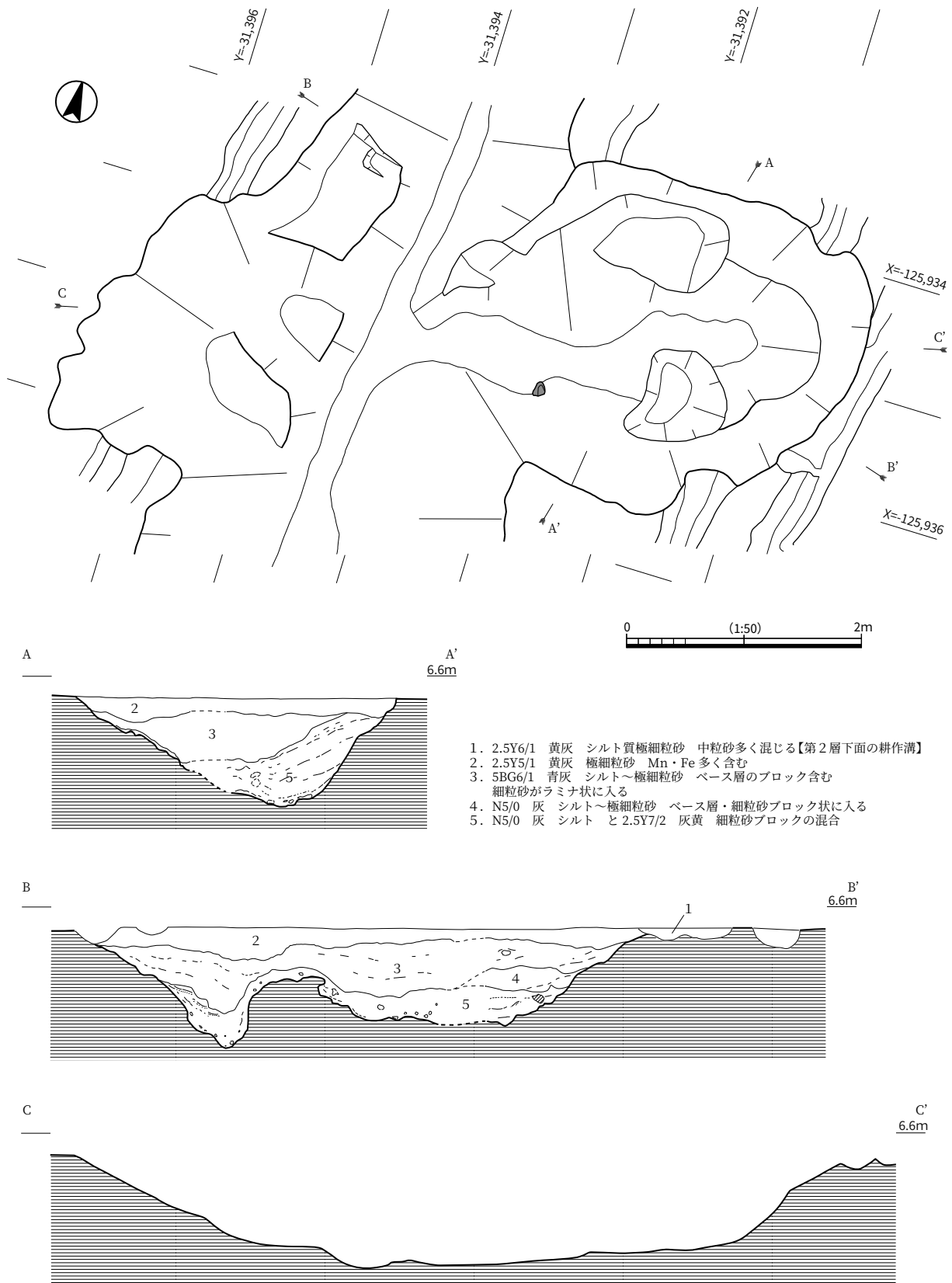


図 135 土坑 47 平・断面図

土坑 47 (図 135・137、図版 37) 低地域 3 の中央北寄りに位置する大型の土坑で、溝 39 と一連のものと考えられる。ほかの小溝には切られる関係にあり、土坑 47、溝 39 の埋没後に第 2 層の攪拌を伴う全面的な耕地化が行われたと考えられる。土坑 47 は凹凸の著しい複雑な形状ではあるが、おおよそ

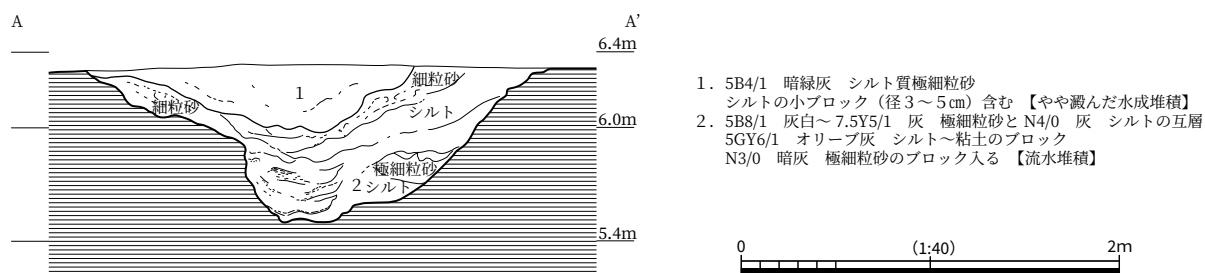


図 136 溝 39 断面図

長さ 7m、幅 3m 程度の長楕円形を呈するものと把握できる。全体的にはすり鉢状の断面形状を示すものの、床面には凹凸が多く、斜面にも小段状の平坦面がいくつかみられる。検出面からの深さは 80cm～90cm 程度で、溝 39 にあたる部分では深さ 100cm とやや深くなる。埋土は下位にベース層細粒砂のブロックを多く含む土があり、上位は比較的細かな砂で埋没する。ほぼ水成堆積と考えられ、溝 39 とともに埋没したものと考えられる。埋土中から土器を中心とした遺物が比較的多く出土しており、その一部を図 137-815～820 に示した。

815 は樟葉型瓦器碗で、残存部分が少ないものの、内外面に密なミガキが確認できる。12 世紀前半のものか。816 は土師質の羽釜で鏝の端部が受口状となる。817 は土師質の甕口縁部で、9 世紀のものか。818 は土師器の舌状把手で古代のもの。819 は須恵器長頸壺の口縁から頸部で、やはり古代のものと考えられる。820 は大型土錘で、重量は 181.6g を量り、断面形状は分銅形を呈する。ほかに土師器の細片は多数出土しており、12 世紀前半頃のものと考えられる、いわゆる「ての字」状口縁の土師器皿の細片を含む。また、写真のみの掲載としたが、馬歯(930)が出土している。これら遺物の状況からは 11 世紀末から 12 世紀前半頃の遺構の可能性が想起されるが、いずれも残存状況の悪い個体ばかりであり、埋没段階に混入したものが主体であったと想定される。土坑の性格としては後述の溝 39 と一連の遺構であり、溝 39 に灌漑水路の可能性が想定されることから、溜井的な役割を想定しておきたい。

溝 39 (図 134・136・137、図版 37) 低地域 3 の北から南へ貫流する大型の溝で、北寄りではほぼ重複する位置に現代の土地区画を兼ねる水路が存在する。溝の規模としては幅 2～3m、深さは 80cm～100cm を測り、断面形状は V 字形を呈する。底面の標高は中央付近が高く 5.5m 前後、北端、南端がやや低くなり 5.3m～5.4m を測るがほぼ平坦である。埋土は下位にベース層極細粒砂のブロックを含む流水堆積、上位がシルト質の土壤による澱んだ堆積で、いずれも滞水環境での埋積と考えられる。出土遺物は埋土中より土器片を中心に多く出土しており、その一部を図 137-821～836 に示した。

821～827 は土師器皿で、822～826 は「ての字」状口縁の末期のものであろう。827 は大ぶりの皿で古相を呈するか。822 は灯明皿、828 は台付の灯明皿である。829 は土師質の鍋。830～832 は瓦器碗の細片で、見込みの暗文、体部内外面のミガキとも比較的密に施されている。831・832 は樟葉型と思われるが、ほかに大和型の細片もみられる。833 は白磁碗の細片で、内面に篋描文を施す。834 は須恵器捏鉢、835 は甕の底部で、836 は外面に沈線と波状文を施す大甕の頸部であろう。写真のみの掲載とした遺物には緑釉陶器碗の細片(902)、白磁の瓶と考えられる細片(903)、馬歯(931)があり、ほかに土師器の羽釜片や平瓦の破片などがある。出土遺物は 828 を除き、いずれも細片であって、埋没時に混入した土器片が多数を占めると考えられる。溝 39 は土地区画を兼ねた灌漑水路と考えることが妥当であって、828 の台付灯明皿と馬歯は水路における犠牲獣祭祀の痕跡を示す可能性がある。なお、遺物の時期は土坑 47 と同様、12 世紀前半頃までのものと考えられ、遺構もこれに近い時期が想定される。

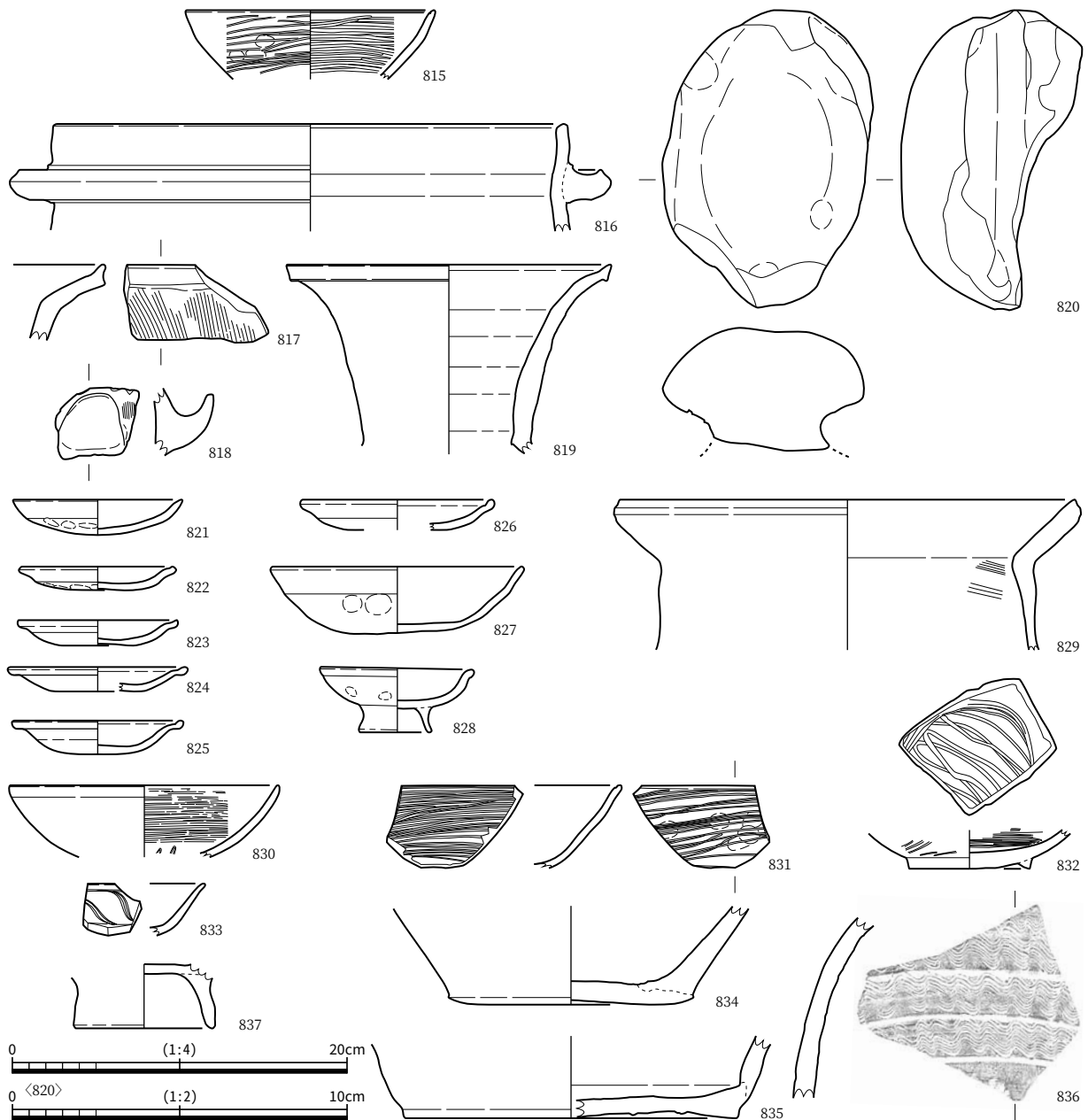


図 137 遺構 出土遺物

その他の遺構出土遺物 (図 137) 837は土師器の台付皿の高台部分で、溝群 2 としての耕作溝からの出土である。溝群 2 は第 2 層作土と一連の土壌を埋土とする小溝群の総称で、溝 39 以西に広く分布する。溝 39 以東の小溝群が溝に合わせた弧を描くことと対照的に、直線基調の溝群となっており、切り合い関係では溝 39 埋没後に掘削されたことと調和的である。溝 39 埋没後の後続水路、土地区画が溝群 2 と同じ方向性をもつこととも対応する。

包含層出土遺物 (図 138) 低地域 2 の遺物包含層に相当する第 2 層からは古墳時代から中世にかけての土器片が出土しており、その一部を図 138 に示した。838 は瓦器の小壺であるが、残存部位が少なく図の口径、傾きにはやや不安を残す。839 は青磁の碗で、見込みに毛彫り草花文を描く。840 は瀬戸の皿か。841～843 は白磁碗。844 は古瀬戸の天目碗で、鉄釉がかかる。14 世紀初頭頃のものか。845 は土師器の甕。846 は須恵器坏で、奈良時代のもの。847 は古墳時代の須恵器坏身で、底部外面に直線一条のヘラ記号がみられる。848 は弥生土器の底部である。849～852 は土錘で、太短のものと細長のもの

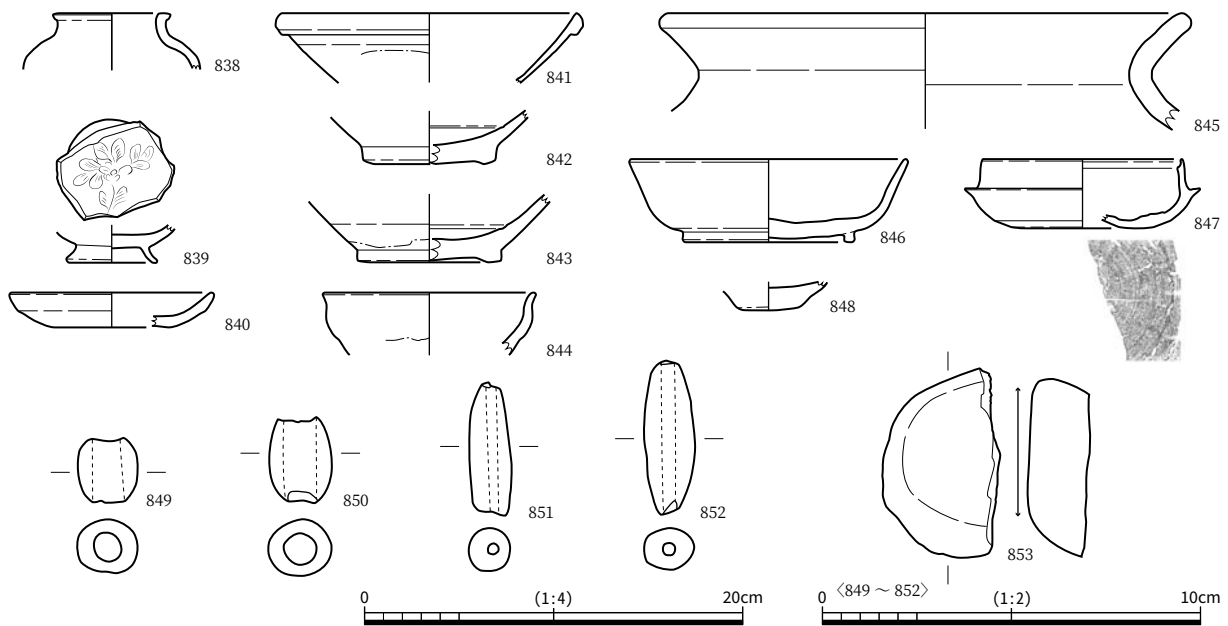


図 138 包含層 出土遺物

に分けられる。重量は 849 が 2.2 g、850 が 4.7 g、851 が 3.2 g、852 が 5.0 g である。853 は砂岩製の砥石断片である。写真のみ掲載したものに青磁碗(913)、瀬戸の卸皿(914)の細片がある。13 世紀のものか。

小結 低地域 3 では微高地上と連続する基盤層上面には遺構はみられず、第 2 層下面のものというべき耕作関連遺構を検出した。比較的規模の大きい水路兼区画溝と、それに伴う溜井状の土坑であり、周辺の耕地化に伴うものと考えられるが、小溝群の方向からみると、その範囲は溝 39 より東の低地域であった可能性がある。溝 39 は 12 世紀前半の遺物を含みつつ埋没し、その後新たに耕地として再開されたようである。微高地上、あるいはその縁辺の中世集落の廃絶は 13 世紀中葉以降と考えられるので、集落が営まれた段階において低地域の一部では耕地化が進められており、集落廃絶後、微高地上を含む全域が耕地として再開されるといった、耕地化の諸段階を示している可能性が高い。

第 5 項 低地域 (4)

概要 (図 139、図版 38) 低地域 4 は事業地中央東寄り付近の側道部分ならびに高圧線鉄塔移設部分の調査区にあたり、北に低地域 3 が位置する。20-1-6 トレンチに相当する。遺構面の標高は 6.55m~6.0m 程度で、西に高く東に低い地形となる。側道部分の西端を除き、低地域 3 と同様、遺構検出面として基盤層上面までは掘り下げておらず、ほとんどの範囲で第 2 層を除去した段階の状況を示すことになる。

低地域 3 ではほぼ全面で遺構を確認することができたが、そのほとんどは第 2 層の耕作に伴う小溝であり、耕地の小区画を示すものと考えられる。そのうち現代の道路敷きの直下にあたる部分では比較的幅の広い溝がみられ、現代にまで踏襲される土地区画が中世段階にまでさかのぼることを示している。これら溝群以外には土坑を数基、検出し、遺構総数は 17 基を数えた。遺構出土の遺物のほかに第 2 層からも遺物の出土はみられるが、それらのほとんどは攪拌を受け、摩滅の著しい細片であり、微高地域と比べると遺物量も少ない。以下、個別の遺構・遺物について記載する。

土坑 48 (図 140、図版 39) 低地域 4 の西端に位置する土坑で、基盤層上面で検出した。側溝の掘削により一部を失ったものの、残存部分では幅 0.8m~0.9m、長さ 0.7m 以上を測り、復原しても長さ 1m 程度の土坑と考えられる。深さは 25cm 程度で、やや凹凸のある底面の形状である。埋土は褐灰色

のシルト質土壤で、炭化物や劣化した土器粒を含み、比較的残存部位の多い土器が複数出土した。図141-854~857に示したものの以外では、焼成不良で褐色を呈する須恵器片や土師器の極細片が含まれる。

854・855は須恵器坏身で、854は半分ほどの残存、855は9割以上の残存率である。855は受部に蓋の溶着痕があるほか、体部に焼け膨れが多い。856は短脚の有蓋高坏で、坏部の造作が丁寧であるのに対して脚部は造作、坏部との接合とも粗く、透かしはみられない。857も有蓋高坏で、坏部と脚部に接点はないが、同一個体と考えられる。脚にはカキ目と方形の三方透かしが施されるが、透かしの配置は不均等なものとなっている。これら須恵器はおおむねTK47型式段階からMT15型式段階のものと考えられ、6世紀初頭前後のものであろう。土坑の性格としては祭祀に関連する土器埋納遺構の可能性もあるが、意識的に須恵器を埋置したような出土状況でもなく、小規模な廃棄土坑の可能性もある。

土坑49 (図140) 低地域4の南寄りに位置する土坑で、周辺には耕作痕である小溝が分布し、方向を同じくする。長さ1.2m、幅0.7m程度の隅丸方形~楕円形を呈し、深さは12cmと浅い。埋土はほぼ第2層と同じ土壤で、ブロック土を含まない。第2層作土の機能段階、すなわち耕作に伴って掘削された土坑と考えられる。出土遺物は須恵器細片が1点のみで、第2層に攪拌されたものと考えられる。

土坑50 (図140) 低地域4の南寄りに位置する土坑で、土地区画を構成する溝を切る関係にある。長さ1.1m、幅1.0m程度の隅丸方形を呈し、深さは34cmを測る。埋土は上下に分層することができ、下位はベース層シルトのブロックを含む土、上位は褐灰色のシルト質土壤である。

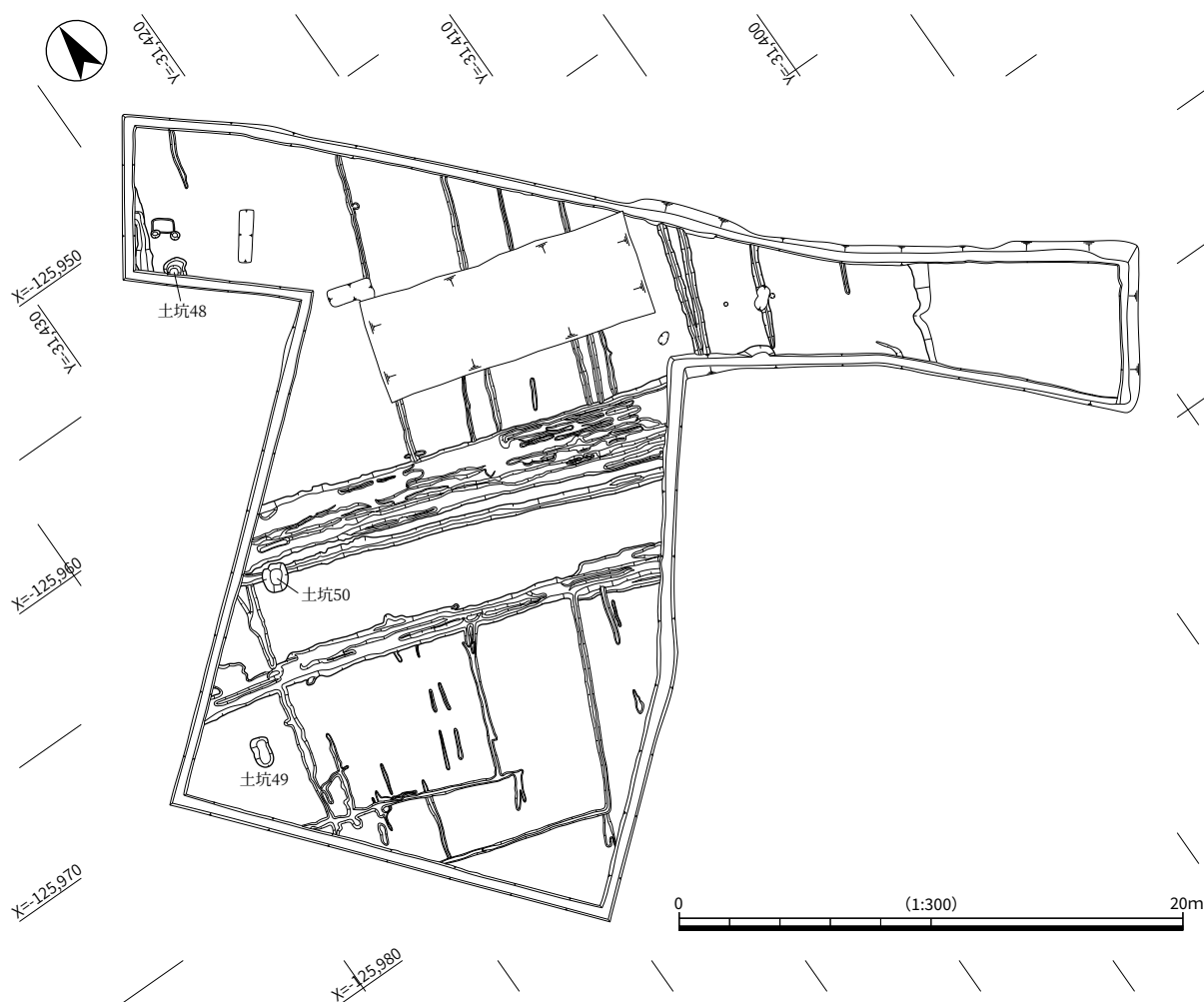


図139 低地域4 全体平面図

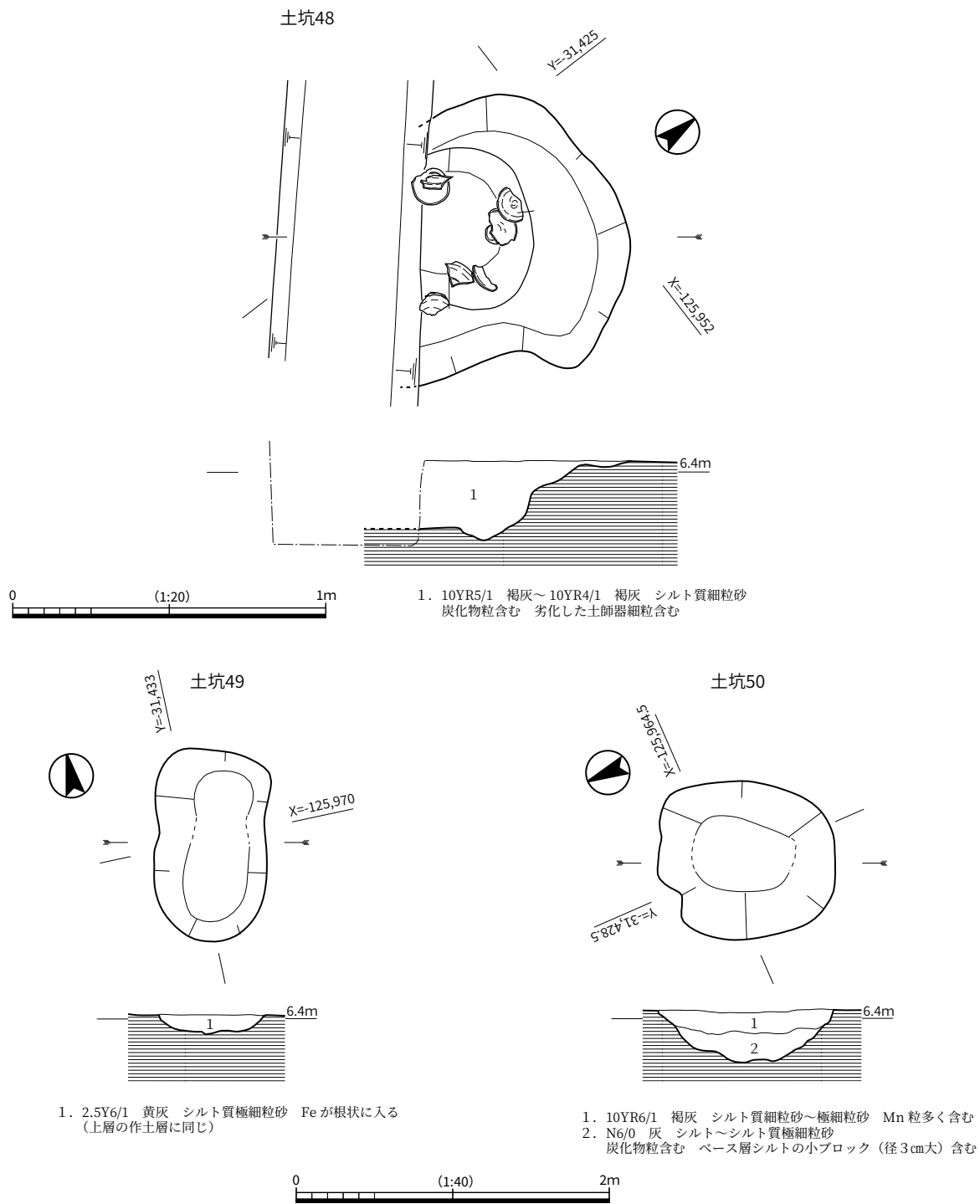


図140 土坑48～50 平・断面図

出土遺物には図141-858に示した瓦器椀の破片のほかに、瓦器細片2点、土師器細片10点ほどがある。858は樟葉型の瓦器椀で半分程度の残存率である。13世紀前葉ころと考えられるが、遺構の時期を明示するかは不明である。土地区画を示す溝を切る位置にあることから、耕地の縁辺に設けられた耕作関連の土坑と考えておきたい。

包含層出土遺物(図141) 低地域3の遺物包含層に相当する第2層からはわずかに古墳時代を含むものの、ほぼ中世以降のものとなる土器片が出土している。土器に図示し得るものはなく、図141-859に鉄器片を示すのみである。859は鉄鎌の可能性のある鉄片で、錆に厚くおおわれている。また、写真

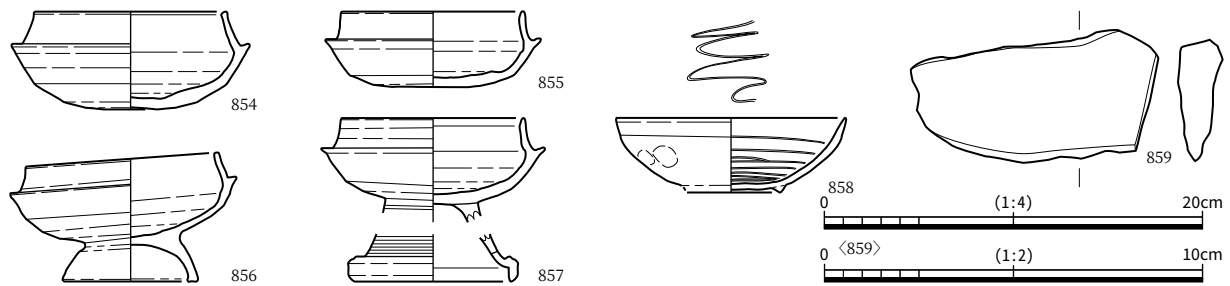


図 141 土坑 48・50 包含層 出土遺物

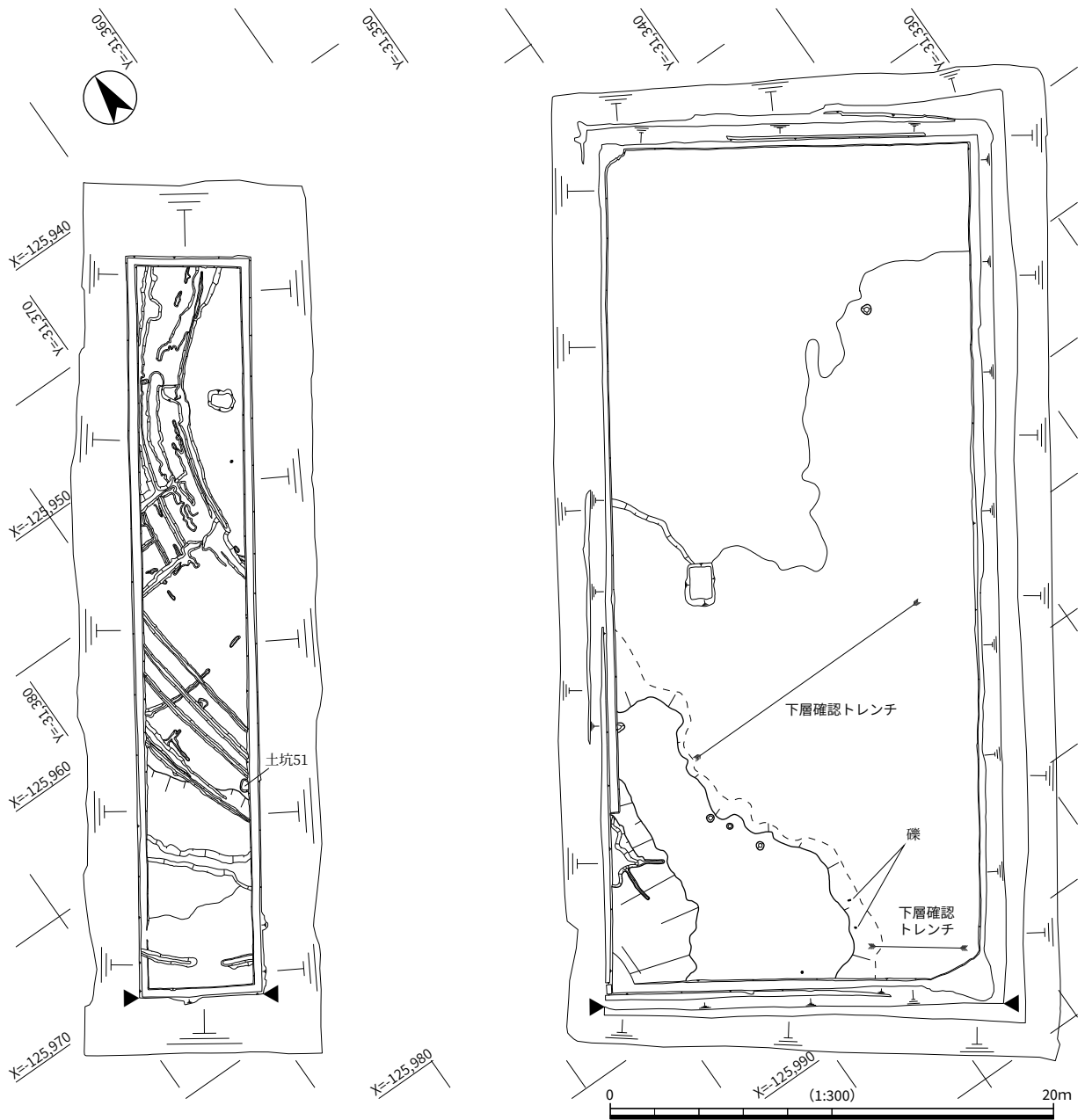
のみの掲載としたものに銭貨「熙寧元寶」(873)、鉄釘(879)がある。図、写真とも掲載するものではないが、下層確認トレンチ掘削中に第3a-2層より出土した遺物として、古式土師器もしくは弥生土器と考えられる土器細片がある。いずれも摩滅が著しい。

小結 低地域4では西端部分で古墳時代、6世紀初頭頃の土坑を検出したほかは、低地域3同様、第2層下面のものというべき耕作関連遺構を検出した。現代の土地区画にまで踏襲される比較的規模の大きい区画溝と、それに連結する耕地を画すると考えられる小溝群で、おおむね12世紀代には耕地化が進んでいたものと考えられ、低地域3の調査成果を補強する。古墳時代の土坑については周囲に同時期の遺構がみられないこともあり、土地利用の実態は不明である。微高地部分でも土器の埋納と考えられる遺構は認められるものの、土地利用の実態は不明である。

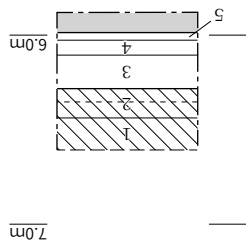
第6項 低地域(5)

概要(図142、図版40・41) 低地域5は事業地東寄りの橋脚ならびに側道・連結路部分の調査区にあたり、西に低地域3が位置する。19-1-1トレンチ、2トレンチ、3トレンチに相当する。今回の調査で最初に着手した1トレンチでは掘削深度が深く、壁面の安全勾配を維持するために調査面積が極めて狭いものとなった。結果的に1トレンチの範囲には安定した基盤層はみられず、第2層下部の堆積層が、基盤層下部の砂礫層と接する関係にあることがあきらかとなった。2トレンチでは南寄りの範囲で基盤層の高まりがあり、標高6.25m~6.0mの範囲を遺構面として記録することとなったが、西側、東側とも基盤層が急激に落ち込むとともに下部の砂礫層が露出し、安定した遺構面は続かないことが確認できた。3トレンチでは先行して調査を行った4トレンチの所見から、基盤層上面を遺構面として追及することはせず、第2層下面の遺構の検出にとどめた。以上のように低地域5の範囲では調査トレンチごとにアプローチを変えて調査を進めることとなり、連続する遺構面の記載については不十分なものとなったことは否めないが、おおむね埋没微地形の様相については把握できた。遺構としては1トレンチにおいて基盤層上面のピット3基、3トレンチにおいて第2層下面の土坑1基を検出したほか、可能性をもつものを合わせて12基を数えた。また調査段階には地形の落ち込みを流路とした部分もあったが、遺構としては扱わない。遺物の出土状況としては、第2層およびその下部の堆積層からは土器片や石器が出土し、一部に集中的な分布をみせるものもあったが、比較的少量の出土にとどまった。

土坑51(図143) 19-1-3トレンチで検出した土坑で、一部を側溝の掘削により失ったが、長さ0.55m、残存幅0.35mの規模をもつ。深さは10cm余りと浅い。ベース層シルトブロックを含む土を埋土としており、掘削後それほどの時間を経ずに埋没したものと考えられる。遺物は出土していないため、時期比定の根拠を欠くが、検出面が第2層下面の性格をもつものであることから、12世紀以降の耕作に関わる土坑と推定しておく。



◎3 トレンチ南壁 (横式図)



◎2 トレンチ南壁

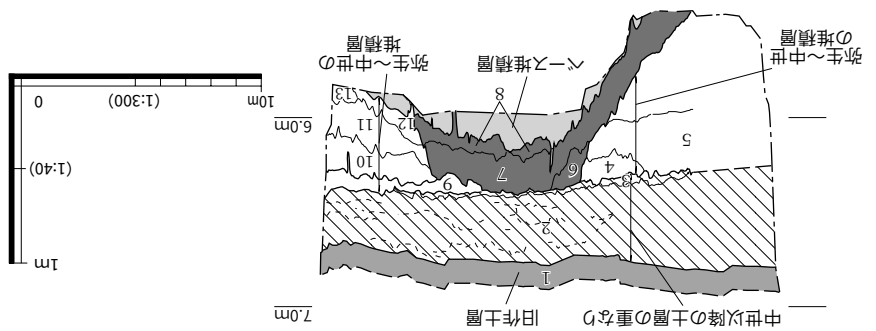


图 142 低地域 5 全体平・断面図

【図 142 土層断面図の注記】

◎2 トレンチ南壁

1. 現代の作土層～盛土層【機械掘削（第1次）対象】 2. 中世以降の作土層の重なり【機械掘削（第2次）対象】 3. 2.5Y6/1 黄灰シルト質中粒砂～細粒砂 マンガン粒多く含む【2の最下層】 4. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質細粒砂 Fe多い Mn少ない 5. 2.5Y6/1 黄灰～2.5Y5/1 黄灰 細粒砂～極細粒砂【第1層：洪水砂】 6. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質細粒砂 粗粒砂多く混じる 4・5と一連【第1層】 7. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細砂 粗粒砂多く混じる ベース層上部の土壌【第1層】 8. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質細粒砂～中粒砂 粗粒砂多く混じる 9. 2.5Y6/1 黄灰 極細粒砂 Mn・Fe顕著 2の最下層 10. 5Y5/1 灰 シルト質細粒砂 粗粒砂多く混じる【土壌】 11. 5Y5/1 灰 シルト 粗粒砂多く混じる【土壌】 12. 5Y5/1 灰 シルト 粗粒砂非常に多く混じる 13. 5Y5/1 灰 シルト質細粒砂 粗粒砂多く混じる【土壌】

◎3 トレンチ南壁（模式図）

1. 5Y7/1 灰白 シルト 極細粒砂多く含む Fe多い【第2層：中世作土】 2. 2.5Y6/1 黄灰 シルト質極細粒砂 Fe多い Mn斑顕著【第2層：中世作土】 3. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細粒砂 Feあり【第1面：3流路埋土】 4. 2.5Y7/1 灰白 シルト 極細粒砂多く混じる 炭化物（植物遺体）ラミナ状に入る【第1面：3流路埋土】 5. 2.5Y7/1 灰白 細～極細粒砂 一部にラミナあり【第1面：3流路埋土】

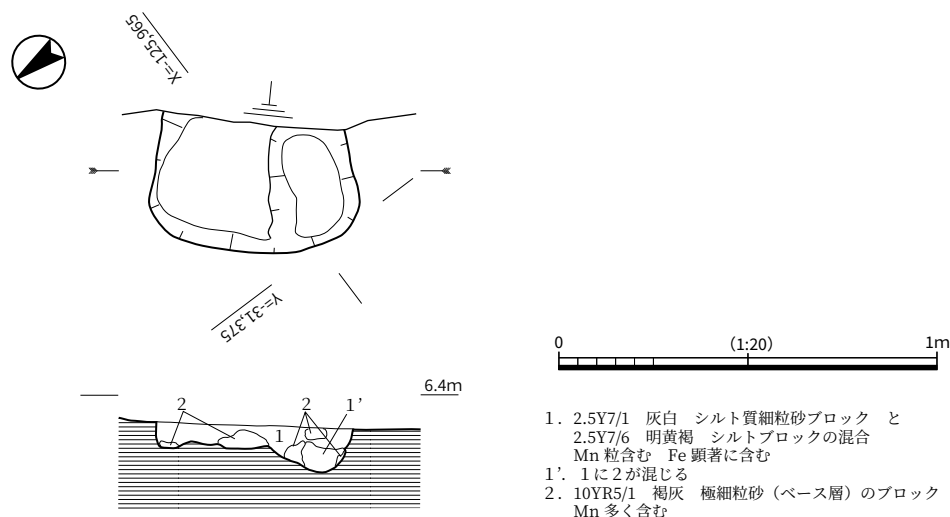


図 143 土坑 51 平・断面図

その他の遺構 1 トレンチの基盤層露出部分では上部の平坦面でピット 3 基を検出した。直径 0.3 m 程度、深さ 15cm～30cm のもので、高まりの縁に沿うように位置していることから、杭などを設置した痕跡かと考える。遺物は出土していない。この基盤層による高まりの東斜面では、意図的に置かれた可能性のある円礫がみられたほか、後述する層出土の石器や弥生土器片が分布しており、遺構と呼べるものではないが、今回の調査では最もさかのぼる時期の土地利用の場として位置づけることができる。高まりの西斜面では小規模な溝が取り付く不整形な土坑状の落ち込みを検出したが、遺構と断定できる状況ではなく、地形の一部の可能性も残る。

3 トレンチでは第 2 層下面においても地形の高低があり、北東部分に高まりがみられた。その周囲を巡るように弧状の小溝群が確認された。低地域 4 における溝 39 以東の面に連続するもので、地形の高低を残しつつ耕地開発がすすめられた 12 世紀段階の状況を示しているものと考えられる。

包含層出土遺物（図 144） 低地域 5 の遺物包含層に相当する第 2 層およびその下部の堆積層からは縄文時代後期から中世にかけての遺物が断片的に出土しており、その一部を図 144 に示した。860～864 はサヌカイト製の剥片ならびに石鏃である。860 は薄い剥片で、基盤層の高まりより北へやや離れた地点から出土した。重量は 7.0 g を測る。861 は凹基無茎式の石鏃で、重量は 0.7 g を測る。860 同様、高ま

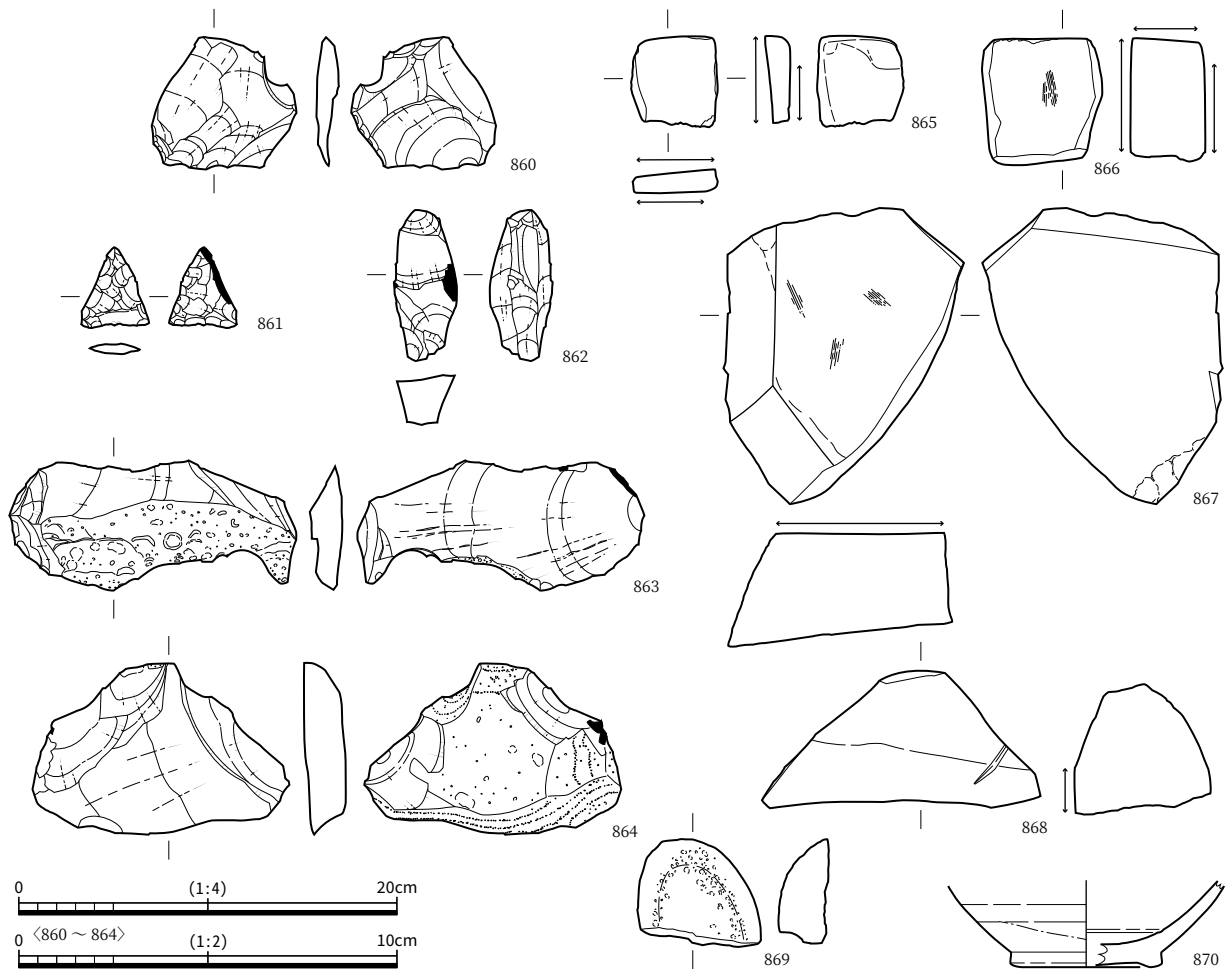


図 144 包含層 出土遺物

りより北へ20m余り離れた地点から出土した。862は縦長の剥片で上下2か所に打点が認められる。重量は8.9gで、基盤層の高まり東斜面の出土である。863はやや大きめの剥片で、原礫面を一部に残す。重量は23.3gで、高まり北斜面付近の出土である。864も大きめの剥片で、全体的に風化が著しい。重量は37.2gで、862同様、高まり東斜面からの出土である。869は高まり北斜面から出土した花崗岩製敲き石と考えられる破片で、残存部分が少なく機能は限定が難しい。高まり東斜面からは写真のみの掲載となる916～920の土器片も出土している。916は宮滝式の粗製深鉢と考えられるもので、縄文時代後期後葉のものか。917～920は弥生土器の甕もしくは壺の体部片と考えられる。865は3トレンチ出土、流紋岩質の砥石片で、両面とも研磨に使用されている。866～868の砥石3点は1トレンチ北西角付近で、中世土器の破片や写真を928に示した結晶片岩などとともにまとまって出土したものである。866は流紋岩質の砥石で、867、868は同一個体の可能性がある大型の砥石であろう。石材は玄武岩か。ともに火を受けた痕跡があり、同時に出土した瓦質土器三足釜などとともに、調査範囲に近接した場所での居住域の存在を示唆する。870は3トレンチ出土の白磁碗底部で、写真のみの掲載とした911・912も同じ3トレンチ出土の白磁碗の細片である。

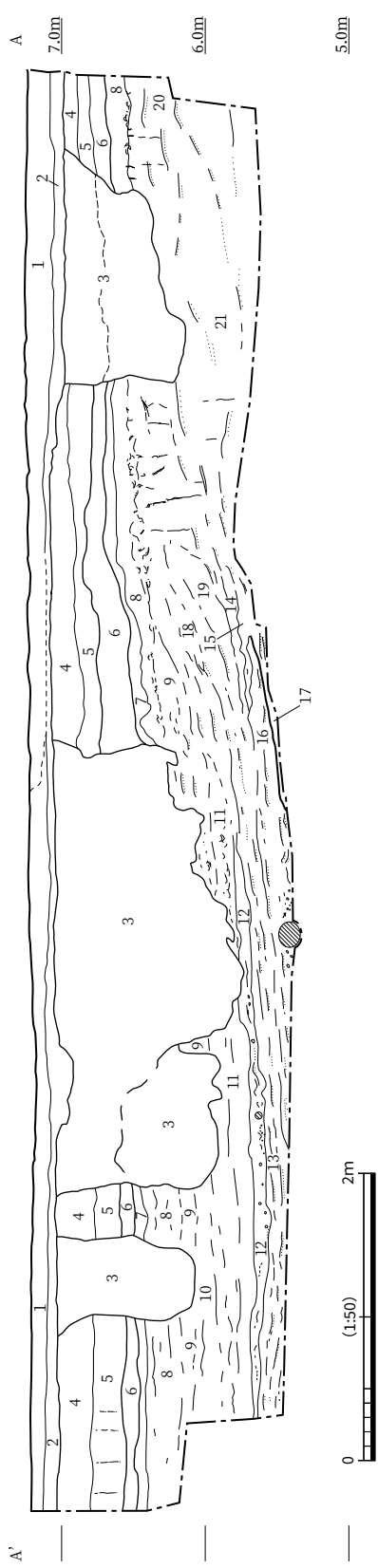
小結 低地域5は今回の調査範囲では内ヶ池に最も近く、地形的にも最も低くなる部分で、土地利用の痕跡も希薄な部分といえる。しかしながら低地の中でもわずかな高まりを利用した水辺の活動痕跡が縄文時代にまでさかのぼることがあきらかとなった。また、中世以降の耕地開発の諸段階を示す状況も得ることができた点は特筆される。

第7項 西低地域

概要 (図145、図版41) 西低地域とした範囲は、微高地の西寄りを占める微高地域1～3のさらに西側にあたる。20-1-1トレンチ、7トレンチが対象となり、微高地域1～3からは阪急京都線、東海道新幹線を挟み、7トレンチまででおおよそ60m離れている。第4章第1節に記載したように、まず調査にあたった1トレンチで現代の作土層直下で厚い砂の堆積が認められ、埋蔵文化財の存在に否定的な状況となったことから、次いで調査にあたった7トレンチにおいても、まずは土層の堆積状況を確認し、遺構・遺物の存在状況が調査対象となるかどうかの確認に調査の主眼を置いた。現代の深い攪乱が多い状況ではあったが、結果的に遺構、遺物ともみられないことから、土層の記録を行い、調査を終了した。

7トレンチでは調査直前まで水田として利用されており、最上層に現代の水田作土がある(図145土層図1・2)。微高地域の第1層に相当する。多くみられた攪乱はいずれもこの層の下面で検出されることから、現代の耕作が行われている期間中に掘削され、その後、再び耕作が行われたことがわかる。現代作土層の直下には灰色のシルト質土壌があり(図145土層図4・5)、微高地域で確認された第2層に相当すると考えられる。この層からは染付陶磁器、須恵器、土師器、瓦質土器、青磁などの細片が10片あまり出土している。中世作土層の下には明黄褐色の極細粒砂～シルト層があり(図145土層図6)、北西から南東方向にやや低く下がる。堆積層と考えるが、土器をわずかに含み、須恵器、土師器の細片が認められた。この層以下は上位にシルト、下位に砂の厚い堆積となり、遺物の出土はみられなかった。層相からみていずれも堆積層と考えられ、一連の堆積物が側方変化を示しているものと考えた。ただし最下位にみられた木片など植物遺体を多く含む細粒砂～極細粒砂層(図145土層図16)が北西方向までは続かず、さらにその下位に続く細粒砂～中粒砂層とは不整合の関係を示す箇所もわずかに認められた。このため、南東寄りの堆積層(図145土層図8～19)と、北西側の堆積層(図145土層図20・21)が一連の堆積層ではない可能性も残された。現在調査が進められている梶原南遺跡21-1調査において、南東寄りの堆積層の延長部分が、遺物を含む流路状の深い落ち込みになる可能性が高まり、さらに北東寄りの堆積層に相当する層の上部に、微高地域で基盤層としたシルト層にあたる土層が遺存している可能性が高まった。これらの状況を加味し、改めて検討すると、8～19が流路内の堆積、20・21が基盤層下部となる可能性がある判断できる。8の下部は北西寄りの部分で下面が大きく乱れ、乾痕も多くみられることから、滞水環境にありながら比較的水深が浅く、植物が繁茂し、地震動の変形を受けやすい環境であったことが想定される。今回の調査では8～19の層からは遺物の出土がないのでこの流路、もしくは流路状の落ち込みの形成時期や埋没時期は明確にはしがたいものの、その上部を覆う6に須恵器片を含み、4・5が中世以降の作土層と考えられることから、中世段階以前には埋没していたものと考えられる。なお、今回の調査では流路、もしくは流路状の落ち込みと基盤層の切り合いを明確にすることはできなかったが、これは流路の下部が埋積する段階で、基盤層側の砂層が流路側に流れ込んだ部分が多く、明瞭な切り合い痕跡を残していなかったことが原因と考えられる。

以上の理解を前提とすると、1トレンチで認められた厚い砂層も基盤層下部の砂礫層の一部になる可能性が高く、現代の作土直下に基盤層の下部が露出していることとなる。この想定に従うと、残存する基盤層上面の高さは7トレンチで標高6.6m付近、1トレンチで標高7.4m付近となり、微高地域西端部と同じか、やや高い関係になる。山側ではさらに高くなることは十分予想され、地形認識としても妥当と考える。地域の名称として「低地」とすることには問題が生じるが、あくまで本報告での暫定的なものとして理解されたい。



- 1. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト質極細粒砂 【現代水田作土】
- 2. 2.5GY5/1 オリーブ灰 シルト質極細粒砂 最下に Fe 沈着
- 3. 【現代水田作土】 ※1、2 = 第1層に相当
- 4. 7.5Y6/1 灰 シルト 中～細粒砂多く混じる 根痕への Fe の降下・沈着著しい Mn 多い【中世以降の作土もしくは堆積層】
- 5. N5/0 灰 シルト 細粒砂多く混じる 根痕への Fe の降下・沈着著しい【中世以降の作土もしくは堆積層】
- ※4、5 = 第2層に相当
- 6. 10YR7/6 明黄褐 極細粒砂～シルト 全体的に帯状に Fe が沈着 根痕への Fe の降下・沈着あり わずかに土器を含む【堆積層】 ※土壌の二次堆積が、堆積層上部の土壌化
- 7. N4/0 灰 シルト 根痕への Fe の降下・沈着著しい【堆積層】
- 8. N5/0 灰 シルト 粒状構造あり【堆積層】
- ※西寄りでは 10YR5/1 褐灰 シルト 根痕への Fe の降下・沈着 下層理面に乱れ(乾痕、地震動による変形)あり【堆積層】
- 9. N4/0 灰 シルト～粘土 ラミナあり 粒状構造あり【堆積層】
- 10. N5/0 灰 粘土 炭化物によるラミナあり【堆積層】

- 11. N3/0 暗灰 粘土 炭化物によるラミナあり【堆積層】
- 12. 7.5YR4/1 褐灰 極細粒砂 板片・植物遺体多く混じる【堆積層】
- 13. 2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト ラミナあり 炭化物によるラミナあり【堆積層】
- 14. 13、15、19 による湿潤 【堆積層】
- 15. 7.5GY7/1 明緑灰 細粒砂 ラミナあり【堆積層】
- 16. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 細～極細粒砂 ラミナあり 木片など 植物遺体多く含む【堆積層】
- 17. 7.5GY7/1 明緑灰 細粒砂 ラミナあり【堆積層】
- 18. 5B6/1 青灰 粘土 ラミナあり 乾痕著しい 粒状構造あり【堆積層】
- 19. 5B5/1 青灰 極細粒砂～シルト ラミナあり 粒状構造あり 炭化物によるラミナあり【堆積層】
- 20. 2.5Y7/4 浅黄 細～中粒砂 ラミナあり ※7～20 は流路を埋積する堆積か
- 21. 5GY8/1 灰白 細～中粒砂 ラミナあり 上層からの根痕への Fe の貫入あり
- ※20～21へは漸的に変化【堆積層もしくは基盤層下部】

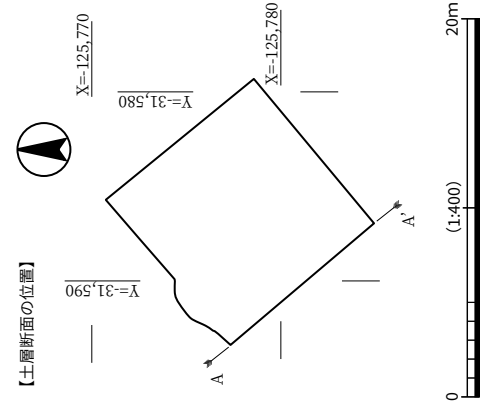


図 145 20-1-7 トレンチ 土層断面図

第5章 総括

前章までに発掘調査における成果を地形区分に準じて、順次報告してきた。本章ではそれらを総括し、今回の梶原南遺跡調査成果のまとめとしたい(図146～149)。

弥生時代から近世にかけての地形環境の変遷 今回の調査地は北西から南東方向へ延びる高速道路建設予定地であり、路線範囲全体を調査するものではないものの、延長距離はおよそ400mにおよび、調査範囲における埋没微地形も多様である。堆積学や土壌学の方法による分析は実施していないため、あくまで調査時における調査担当者の考古学的所見により、現時点での地形環境の変遷を概観する。

調査地周辺は北西に連なる北摂山地と、南東に流走する淀川にはさまれた平野域が最も狭溢となる地点として把握される。大きくは北西に高く、南東に低い地形となるが、さらに細かくみるとその狭い範囲にも淀川の旧分流路の一つである内ヶ池があり、今回の調査対象は北摂山地の裾から内ヶ池間となった。旧石器時代～縄文時代にかけての地形環境については知るところがなかったが、弥生時代以降の地形環境としては、調査地中央やや東寄りを横断する国道171号の西側に、南北方向に軸をもつ微高地の尾根があり、これより北西側には緩やかに傾斜する面、南東側には緩やかながらも崖状の段差を介して低地へとつながることがあきらかとなった。低地域の中でも流路状に落ち込む地形など、やや複雑な様相が認められ、低地を埋める堆積層の最上位にあたる第3a-2層とした土壌層からは、弥生土器ないしは古式土師器と思われる土器の細片が出土している。低地域は水域であった時期もあると考えられるが、古墳時代前期までには埋積が進んだようである。一方、微高地上は弥生時代から13世紀までの遺構が同じ遺構面で検出され、これに伴う土壌層と考えられる第3a層からは弥生時代から中世にかけての遺物が混在する。これらの状況からおおよそ古墳時代までの間、微高地上は長期にわたり安定した地形環境を保ちつつ、低地域の平坦化が進むという過程が復元される。この中世までに形成された地形は、耕地化により平坦化を志向するものの、大きくは変わらないまま、現代にまで続いている。

弥生時代の方形周溝墓群 微高地上に営まれた遺構で最もさかのぼる時期のものは弥生時代中期の方形周溝墓群である。調査範囲の制約から全体を把握できたものはないが、6基の周溝墓が微高地の稜線上に2列に並ぶ様相が復原できる。いずれも周溝の一部を検出したのみであり、封土、あるいはその上部に営まれた可能性の高い埋葬施設は削平を受け失われたものと考えられる。周溝内からの遺物の出土もまれで、方形周溝墓1に置かれた弥生時代中期の広口壺が周溝墓に伴う土器としては唯一のものとなる。梶原南遺跡周辺では上牧遺跡、神内遺跡、梶原西遺跡など、明確な居住域を伴わず方形周溝墓のみが群在する事例が集中しており、広範囲にわたる墓域として認識される。居住域とともに生産域である水田遺構も周辺では未確認であり、地形環境に応じた土地利用の選択として、生産・居住域ではなく、墓域が選択されたものと考えられる。ただし、細片ではあるが石庖丁の破片が1点出土している点は、近接地での生産域の有無を考えるうえで注意される。また、地形的に最も低い位置になる低地域5で石器や土器片が少量とはいえまとまって出土したことは、水辺の土地利用を示すものとして、興味深い。

古墳時代の様相 内ヶ池を挟んで東南に隣接する上牧遺跡では、古墳時代前期には他地域の土器がまとまって出土する大規模な集落が形成され、後期まで継続する。淀川対岸の船橋遺跡でも庄内期～古墳時代前期に集落が営まれるが(井上編2021)、梶原南遺跡では古墳時代前期の土地利用の痕跡は希薄であり、布留式甕が出土した土坑12、土坑31を除くと、遺構はもとより遺物もほとんどみられない。遺構、

遺物が散見されるようになるのは5世紀中葉段階で、微高地域の2箇所TK208型式段階の須恵器坏蓋・坏身の埋置が認められる(土坑9・土器2)。この時期以降、土師器高坏と須恵器坏類の出土がみられるようになるが、遺構としては坏類2点を併置した埋納遺構の可能性が高いもの(土器1)や、須恵器坏、高坏を埋納もしくは投棄した土坑(土坑11・土坑48)などがわずかにみられるほかは、古墳時代のものと断定できる遺構は不明瞭である。ただ、微高地域4、5で確認した掘立柱建物(建物1、建物4・5)が古墳時代のものである可能性はあり、居住域を構成していたことも想定される。しかし出土遺物の中に古墳時代の煮沸具などがほとんどみられず、井戸なども確認できていない点で、集落の縁辺部における小規模かつ短期的な土地利用を想定せざるを得ない。続く飛鳥時代の遺構・遺物もほとんどみられず、梶原寺ないしは梶原瓦窯に関わると推測される瓦片の出土をみるのみである。この点は、上牧遺跡も同様で、飛鳥時代にも活発な活動が認められる船橋遺跡の状況と異なるところである。

奈良時代の集落 奈良時代の遺構は微高地のほぼ全域でみとめられ、微高地域4・5・7・8を中心に、微高地域1・2にもまとまった分布を示す。微高地域4・5・7・8は地形的に最も高い部分にあたり、掘立柱建物、井戸、溝などを検出した。大型の総柱掘立柱建物である建物7は、東西6.8m、南北5.6mの規模で、既往の調査でも類似する建物が調査されている。総柱の構造から倉庫とする見方が一般的かとも思われるが、「溝持ち」の構造などから遺跡を駅家とみたくえて「駅楼」と想定する意見もある(森田2015)。いずれにしても一般集落の建築物とは考え難い。微高地中央では井戸は3基あり、それぞれ構造が異なっている。井戸4は時期的に先行すると考えられ、縦板4枚+横棧2本で構成される井戸枿をもつ。井戸5は建物7の廃絶後に設けられた井戸で、時期的に後出する。縦板を横棧で支える構造の井戸枿をもつが、ほとんどは建築部材の再利用であった。この2基の井戸からは墨書土器や、斎串、横櫛などが出土し、一般的な集落に伴うものよりも、公的な施設にともなう井戸とみる方が適切であろう。また、井戸5に隣接する井戸6は一木割り抜き井戸枿をもち、須恵器壺の埋納がみられた。

井戸は微高地の西寄りでも3基検出されている。井戸1は素掘りで、井戸2は井戸4と同様の構造をもつ。井戸3は井戸枿の一部に楕円形の曲物を用いている。これらの井戸には近接して同時期の食器類を多く含む土坑や溝がみられ、炊事に関する施設の可能性がある一方で、墨書土器や斎串などの出土はみられない。現状では微高地の最高所付近と、西縁辺付近の2か所に奈良時代の遺構の分布域が分かっているが、現時点ではそれぞれ役割を違えた遺構のまとまりと想定する。微高地最高所は公的施設の役割を中心的に担うところであり、井戸にも祭祀の場としての役割も与えられていたと考えられる。一方、西縁辺部では井戸が炊事などの実務的な役割を主にしていたと考えられる。未調査部分の状況により変更も予想されるが、溝に区画され、役割を異にする遺構群の総体として、集落全体が理解できる可能性が高い。なお、時期決定に厳密さを欠くものの、現時点での認識では、微高地域1は奈良時代でも時期的に先行する段階の遺構、遺物が主であり、後出する段階の遺構、遺物はよくわからない。井戸は微高地域2の井戸3が後半段階のものであり、こちらに移動するのかもしれない。同じように微高地域5・7・8でも先行する井戸4もしくは井戸4・6の廃絶後、井戸5が設けられると考えられる。既往の調査においても奈良時代の遺構群が2時期に分けられることが指摘されており、今回の調査成果とも調和的である。ただ、既往の調査では土器編年における平城Ⅰ・Ⅱの段階と、平城宮Ⅲ・Ⅳの段階の2時期が想定されているが、今回の調査では平城Ⅰ・Ⅱに属する遺構・遺物は明確ではなく、平城Ⅲ段階と平城Ⅴ段階に分かれる可能性があり、詳細は検討課題として残る。

奈良時代集落の性格としては、既往の調査では「公的な施設」、具体的には「大原駅」とする、古代

山陽道の駅家の可能性が指摘されているわけであるが(川村・宮崎1997ほか)、今回の調査においても微高地域1出土の帯金具からみて、官人層の存在は推測されるところである。ちなみに文献史料にみられる「大原駅」の設置は、和銅4年(711)となる。

中世の集落と土器の多量投棄 奈良時代の遺構群は奈良時代末頃には廃絶を迎えたようで、平安時代前期～中期の遺構はみられない。次に遺構、遺物が多くみられるのは12世紀～13世紀、平安時代後期から鎌倉時代中期の段階となる。調査範囲全域で遺物の量が最も多く、遺構の多くがこの段階のものであろうと考えられる。しかし井戸や水溜、溝や水路のような遺物の出土状況が明確なもの以外は、帰属時期をあきらかにできない遺構も多く、居住域と考えるものの、とりわけ建物遺構の状況をあきらかにすることは難しい。井戸については微高地域4・5・8、低地域1に5基が分布しており、井戸枠をもつもの3基(井戸9～11)、素掘りと考えられるもの2基(井戸7・8)となる。大型の井戸である井戸9は船材の転用と考えられる井戸枠をもち、井戸10・11は曲物を用いた井戸である。また、類似の役割が想定されるものに、水溜、方形土坑があり、いずれも微高地最高所付近に分布する。これらの分布からは、微高地最高所と東低地域でも微高地に近い部分に居住域の範囲が想定される。礎石を用いた小規模な建物が3棟あり(建物8～10)、溝に区画された複数の居住域が存在した可能性も想定される。

13世紀代には微高地域5の水溜、溝16に多量の土器が投棄され、廃絶する。詳細は第4章第6項に記した通りで、水溜には瓦器椀28個体以上、土師皿大36個体以上、土師皿小90個体以上が、溝16には瓦器椀229個体以上、土師皿大179個体以上、土師皿小888個体以上の土器が投棄された可能性がある。これら小型食器類以外にも数は相対的に少なくなるものの、土師質や瓦質の羽釜や盤、須恵器の甕や捏鉢、石鍋、輸入陶磁器なども含まれており、周辺の中世集落と類似する土器組成を示す。一方で、小型瓦器の輪花椀やコースター形の瓦器小皿といった希少な土器も含まれており、水上交通路や主要流通拠点とのかかわりが強い、と評価されるところである(橋本2018)。淀川対岸の樟葉地域との関係の中で、ある程度潤沢に製品が供給された地域のひとつとみて大過ないであろう。また、破片資料であっても、器壁の状況の良い土器、すなわち未使用の廃棄品が一定数含まれている印象があり、中世土器の流通に関わる地域としての印象を強くする。

中世以降の土地利用と耕地化の諸段階 微高地最高所の東に接する低地域2では、いくつかの土器埋納遺構と考えられる土坑がみられた(土坑38・43)。ひとまず墓の可能性を措き、祭祀的な性格をもつ遺構と考えると、納められた瓦器椀の示す年代、12世紀前半と13世紀前半に、祭祀を伴うような土地利用の画期があった可能性がある。低地域3で検出した水路と溜井(溝39・土坑47)の年代が12世紀前半に遡る可能性が高く、この段階に低地域でも東寄りでは耕地化がすすめられた可能性がある。また、今のところ確認される中世段階の居住域は13世紀前半を中心とするものである、これに先行する際の可能性もある。一方、13世紀中葉には居住域は廃絶し、微高地上を含めた調査範囲全域が耕地となる可能性が高く、後者の土器埋納は全域の耕地化に先立つ祭祀の可能性もある。土坑の性格はあくまで推測であるのでその妥当性の検証は今後にゆだねるとしても、2段階の画期を経て調査地周辺での耕地化と居住域の移動、これに伴う集村化が進んだものと考えられる。こうして出現した景観は、現代にまで引き継がれるものとなったようである。

以上、今回の調査成果について要約し、梶原南遺跡19-1・20-1調査範囲の変遷を軸に、現時点での総括を行った。この成果が地域史の具体相を描くための素材となることを期待し、まとめとしたい。

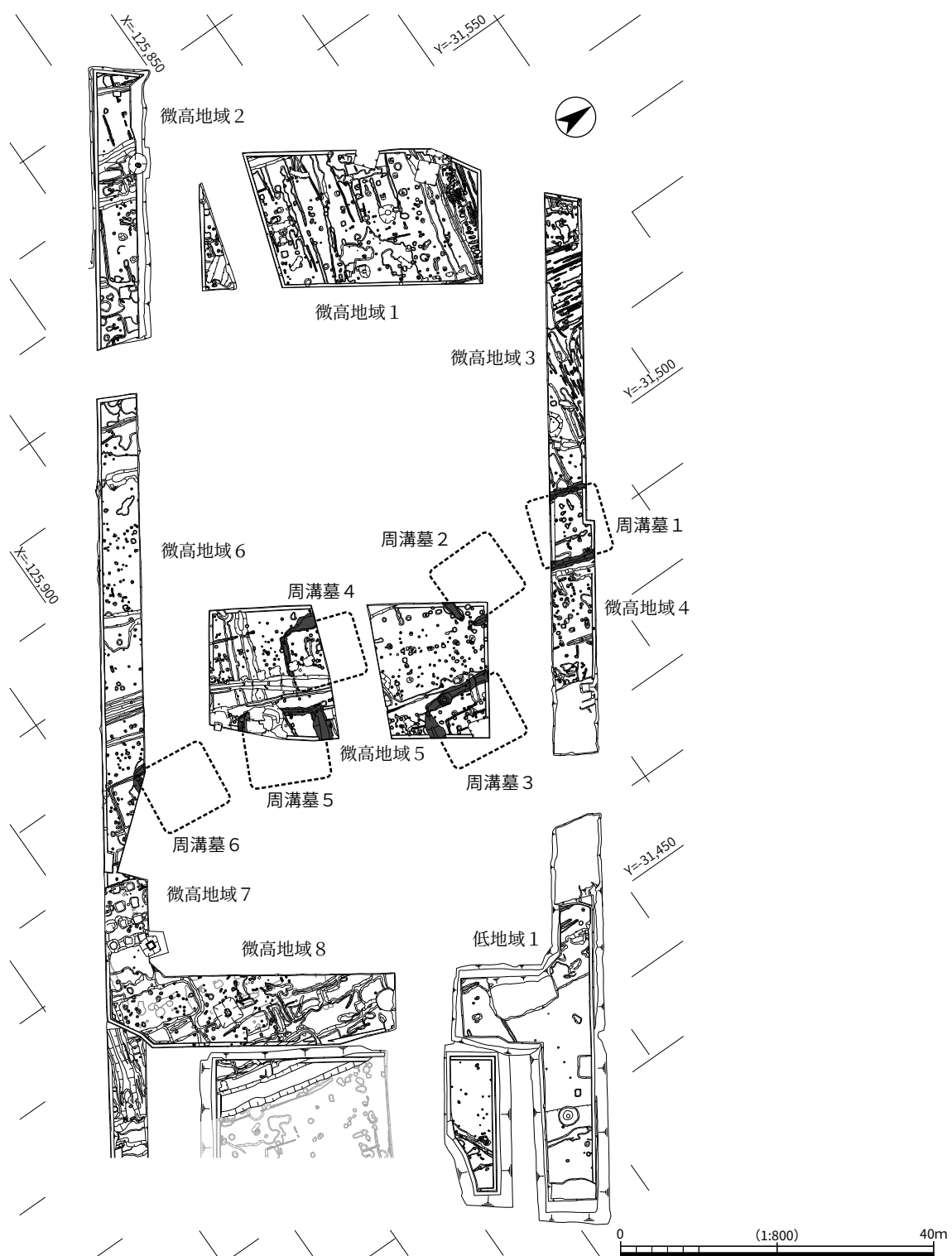


图 146 弥生時代

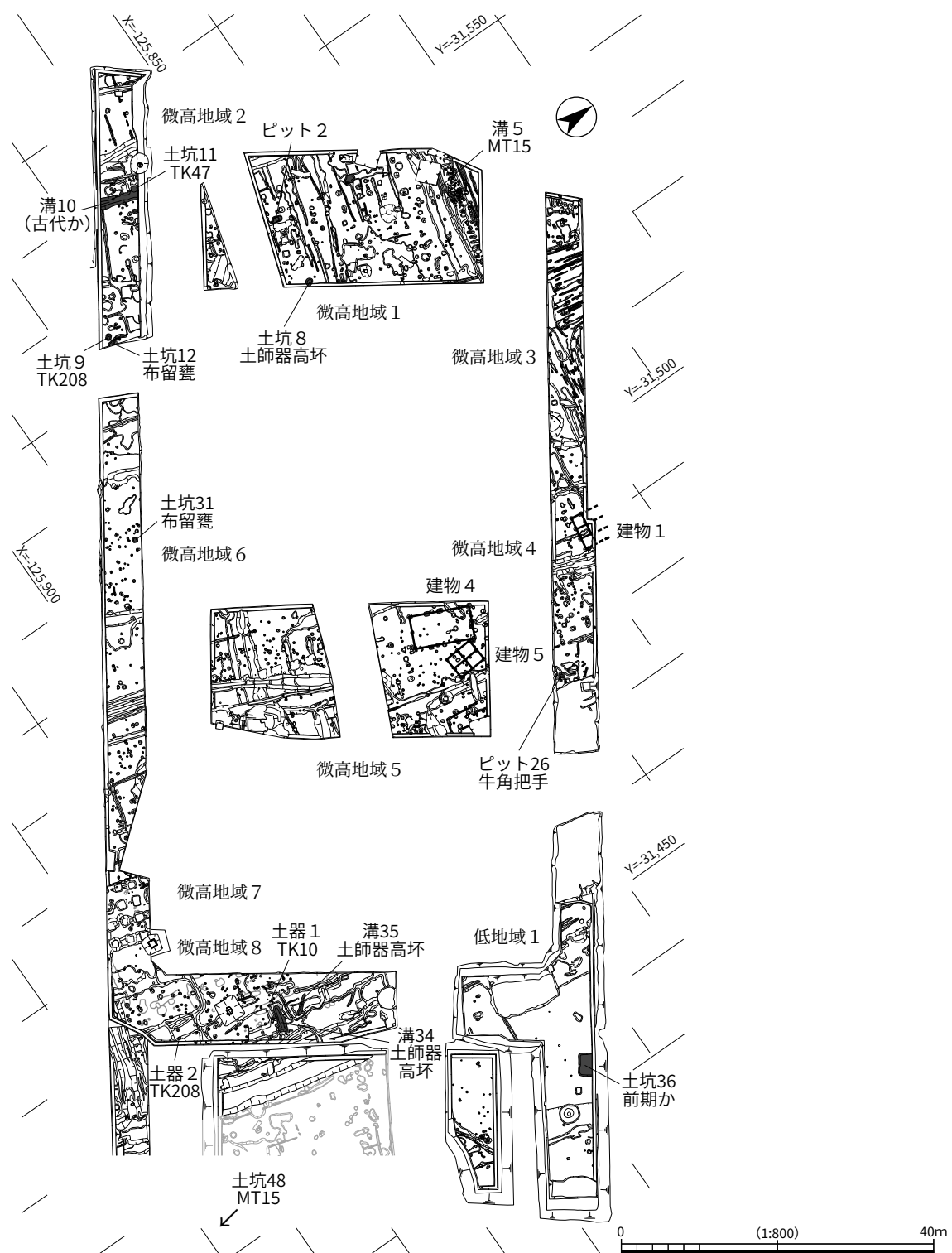


図 147 古墳時代

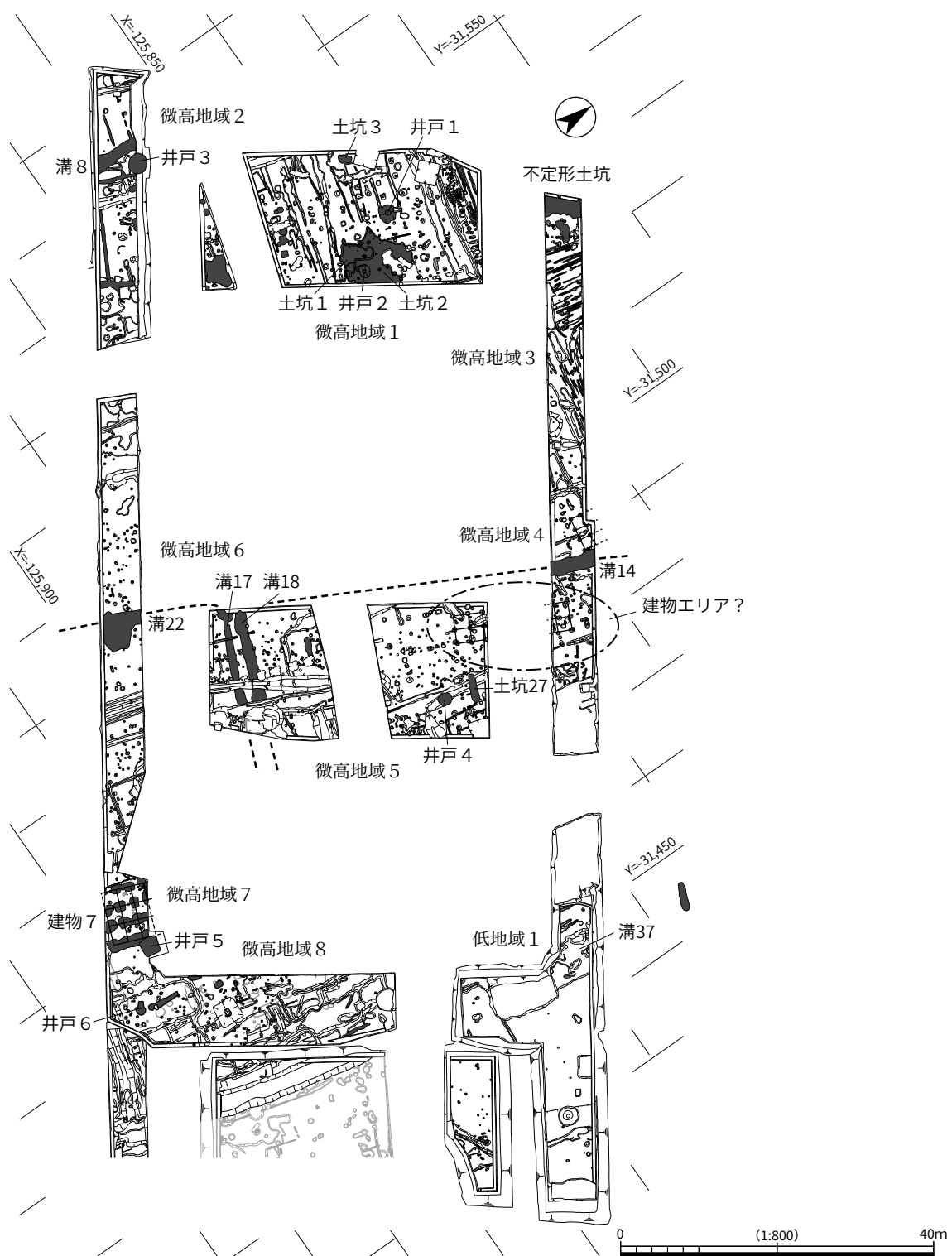


图 148 奈良時代

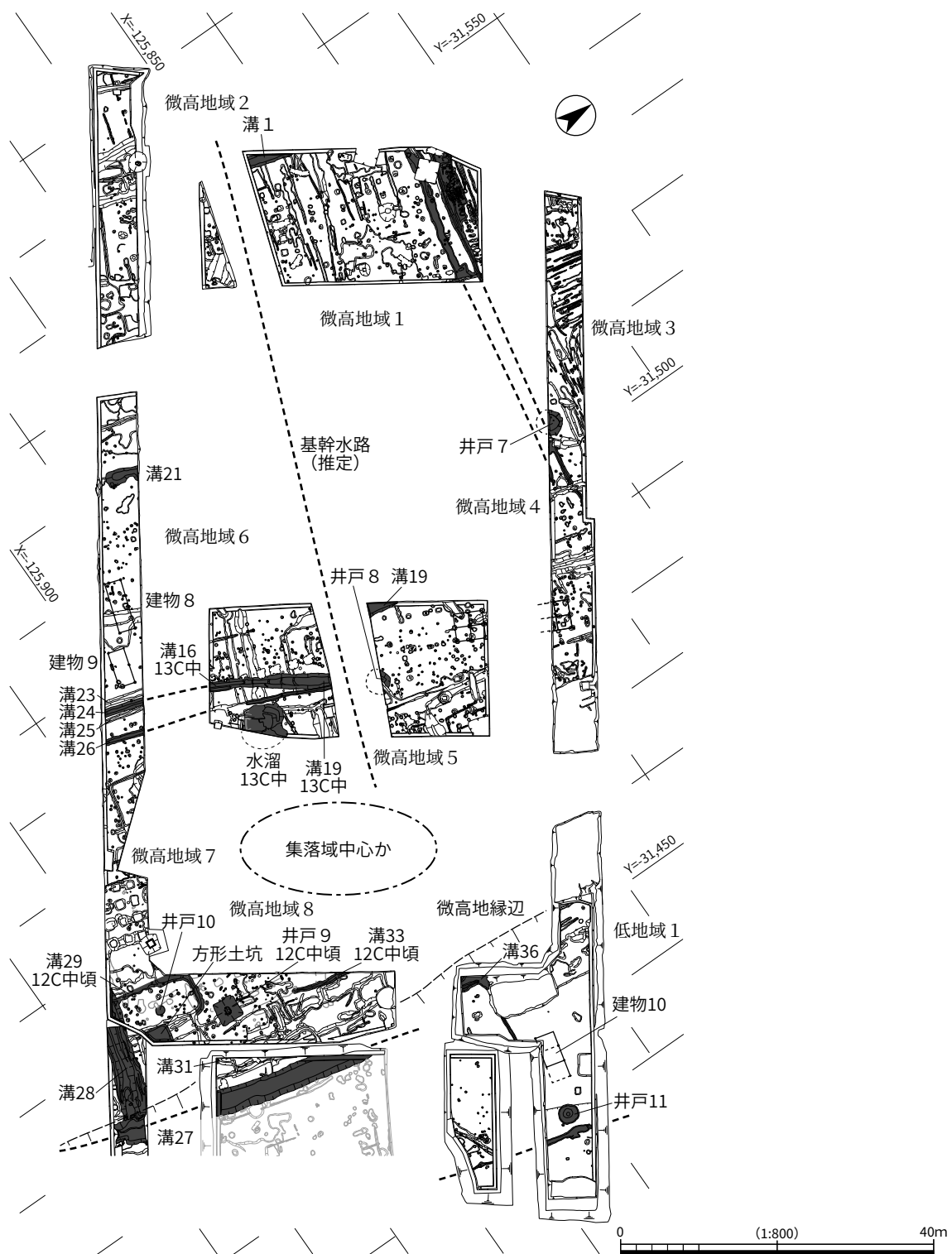


图 149 平安～鎌倉時代

引用・参考文献

- 五十嵐俊雄 2006 『考古資料の岩石学』 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 市本芳三 2006 「摂河泉の平安時代から鎌倉時代の軒瓦の様相」『研究調査報告』第4集 (財)大阪府文化財センター
- 井上智博編 2021 『船橋遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第309集
- 岡島俊也 2013 「(2) 樟葉中之芝遺跡(第64次調査)」『枚方市文化財年報』34(公財)枚方市文化財研究調査会
- 川村雪絵・宮崎康雄 1997 「27. 梶原南遺跡(96-2)の調査」『嶋上遺跡群21』高槻市文化財調査概要XXIII 高槻市教育委員会
- 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』ものが語る歴史8 同成社
- 黒崎 直 1977 「斎申考」『古代研究』第10号 (財)元興寺仏教民俗資料研究所
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 佐藤興治 1975 「VI考察、2遺物、F金属器」『平城宮発掘調査報告VI—平城京左京一条三坊の調査—』奈良国立文化財研究所学報23冊
- 笹栗 拓編 2021 『上牧遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第313集
- 神野 恵 2015 「土器の年代と木簡の年紀」『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』クパプロ
- 鋤柄敏夫 1999 『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社
- 積山 洋 2004 「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学・別冊14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣
- 田中清美 2021 「古墳時代中期の土器研究と暦年代」『中期古墳研究の現状と課題V』中国四国前方後円墳研究会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻尾榮一 2018 『舟船考古学』ニューサイエンス社
- 辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 辻 美紀 2002 「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告IX』(財)大阪市文化財協会
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編II』木耳社
- 永井久美男 2002 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 中野 咲 2010 「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論攷』第33冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 中村太一 2016 「1. 駅家 館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報 3遺跡と技術』吉川弘文館
- 奈良国立文化財研究所編 1985 『木器集成図録—近畿古代篇—』奈良国立文化財研究所史料第27冊
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 橋本久和 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊 高槻市教育委員会
- 橋本久和 1991 「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会
- 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』真陽社
- 橋本久和 1997 「26. 梶原南遺跡(96-1)の調査」『嶋上遺跡群21』高槻市文化財調査概要XXIII 高槻市教育委員会
- 橋本久和 2018 『概論 瓦器椀研究と中世社会』真陽社
- 橋本久和・高橋公一・木曾 広 2002 「神内遺跡の調査」『高槻市文化財年報 平成12年度』高槻市教育委員会
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 松村恵司 2002 「銚帯金具の位階表示機能」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 宮崎康雄 1988 『梶原南遺跡発掘調査報告書』梶原遺跡調査会
- 宮崎康雄 1992 「梶原南遺跡」『高槻市文化財年報 平成2年度』高槻市教育委員会
- 森田克行 2015 「摂津嶋上郡の「郡衙」と河津の「駅」」『律令時代の摂津嶋上郡』(図録)高槻市立今城塚古代歴史館

表

表 1 遺構一覽表

表 2 遺物一覽表

表 3 金属製品一覽表

表1 遺構一覧表

掲載区分	遺構名 (本書掲載)	調査名	トレンチ	遺構名 (調査時)	時期	備考	掲載区分	遺構名 (本書掲載)	調査名	トレンチ	遺構名 (調査時)	時期	備考
微高地1	井戸1	20-1	2	21井戸	奈良		微高地4	建物2-4	19-1	6	32建物-4	中世か	
微高地1	井戸2	20-1	2	23井戸	奈良		微高地4	建物2-5	19-1	6	32建物-5	中世か	
微高地1	土坑1	20-1	2	17落込み	奈良		微高地4	建物2-6	19-1	6	32建物-6	中世か	
微高地1	土坑2	20-1	2	22土坑	奈良		微高地4	土坑23	19-1	6	38土坑	中世	
微高地1	土坑3	20-1	2	24土坑	奈良か		微高地4	土坑24	19-1	6	4土坑	古代か	
微高地1	土坑4	20-1	2	42土坑	奈良か		微高地4	土坑25	19-1	6	8土坑		
微高地1	土坑5	20-1	2	52土坑	古代か		微高地4	土坑26	19-1	6	52土坑		
微高地1	土坑6	20-1	2	40土坑	古代か		微高地4	ピット23	19-1	6	33ピット		
微高地1	土坑7	20-1	2	41土坑	古代か		微高地4	ピット24	19-1	6	35ピット		
微高地1	土坑8	20-1	2	50土坑	古墳か		微高地4	ピット25	19-1	6	34ピット		
微高地1	ピット1	20-1	2	37ピット	古代か		微高地4	ピット26	19-1	6	40ピット	古墳	
微高地1	ピット2	20-1	2	26ピット	古代か		微高地4	方形周溝墓1	19-1	6	6溝	弥生	
微高地1	ピット3	20-1	2	34ピット	古代か		微高地4	方形周溝墓1	19-1	6	7溝	弥生	
微高地1	ピット4	20-1	2	36ピット			微高地4	溝13	19-1	6	5溝	中世か	
微高地1	ピット5	20-1	2	35ピット	古代か		微高地4	溝14	19-1	6	7溝	古代	
微高地1	ピット6	20-1	2	28ピット	古代か		微高地4	溝15	19-1	6	39溝		
微高地1	ピット7	20-1	2	33ピット	古代か		微高地5	井戸4	20-1	3	6井戸	古代	
微高地1	ピット8	20-1	2	30ピット	古代か		微高地5	井戸8	20-1	3	7井戸	中世	
微高地1	ピット9	20-1	2	32ピット	古代か		微高地5	建物3柱穴1	20-1	3	9ピット (建物1)		
微高地1	ピット10	20-1	2	29ピット	古代か		微高地5	建物3-2	20-1	3	10ピット (建物1)		
微高地1	ピット11	20-1	2	31ピット	古代か		微高地5	建物3-3	20-1	3	11ピット (建物1)		
微高地1	ピット12	20-1	2	38ピット			微高地5	建物3-4	20-1	3	12ピット (建物1)		
微高地1	ピット13	20-1	2	39ピット			微高地5	建物3-5	20-1	3	13ピット (建物1)		
微高地1	ピット14	20-1	2	134ピット	古代か		微高地5	建物3-6	20-1	3	14ピット (建物1)		
微高地1	溝1	20-1	2	16溝	奈良か		微高地5	建物3-7	20-1	3	15ピット (建物1)		
微高地1	溝2	20-1	2	18溝	中世か		微高地5	建物3-8	20-1	3	16ピット (建物1)		
微高地1	溝3	20-1	2	19溝	中世か		微高地5	建物3-9	20-1	3	17ピット (建物1)		
微高地1	溝4	20-1	2	54溝	古代か		微高地5	建物4柱穴1	20-1	3	18ピット (建物2)	古墳か	
微高地1	溝5	20-1	2	127溝	古墳		微高地5	建物4-2	20-1	3	19ピット (建物2)	古墳か	
微高地1	溝6	20-1	2	118ピット			微高地5	建物4-3	20-1	3	20ピット (建物2)	古墳か	
微高地1	溝7	20-1	2	98溝	中世か		微高地5	建物4-4	20-1	3	21ピット (建物2)	古墳か	
微高地1	礫群1	20-1	2	20礫群	中世か		微高地5	建物4-5	20-1	3	22ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	井戸3	19-1	8	25井戸	古代		微高地5	建物4-6	20-1	3	23ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	土坑9	19-1	8	28土坑	古墳		微高地5	建物4-7	20-1	3	24ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	土坑10	19-1	8	26土坑	古代か		微高地5	建物4-8	20-1	3	25ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	土坑11	19-1	8	34土坑	古墳		微高地5	建物4-9	20-1	3	26ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	土坑12	19-1	8	23土坑	古墳		微高地5	建物4-10	20-1	3	27ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	ピット15	19-1	8	14土坑	古代か		微高地5	建物4-11	20-1	3	28ピット (建物2)	古墳か	
微高地2	ピット16	19-1	8	32土坑			微高地5	建物5柱穴1	20-1	3	29ピット (建物3)	古墳か	
微高地2	ピット17	19-1	8	16土坑			微高地5	建物5-2	20-1	3	30ピット (建物3)	古墳か	
微高地2	ピット18	19-1	8	33土坑			微高地5	建物5-3	20-1	3	31ピット (建物3)	古墳か	
微高地2	溝8	19-1	8	9溝	古代		微高地5	建物5-4	20-1	3	32ピット (建物3)	古墳か	
微高地2	溝9	19-1	8	10溝	古代		微高地5	建物5-5	20-1	3	33ピット (建物3)	古墳か	
微高地2	溝10	19-1	8	11溝	古墳古代		微高地5	建物5-6	20-1	3	34ピット (建物3)	古墳か	
微高地3	土坑13	19-1	6	9土坑			微高地5	建物5-7	20-1	3	35ピット (建物3)	古墳か	
微高地3	土坑14	19-1	6	10土坑			微高地5	建物5-8	20-1	3	36ピット (建物3)	古墳か	
微高地3	土坑15	19-1	6	11溝	中世か		微高地5	建物5-9	20-1	3	37ピット (建物3)	古墳か	
微高地3	土坑16	19-1	6	12溝	中世か		微高地5	建物6柱穴1	20-1	3	38ピット (建物4)	中世	
微高地3	土坑17	19-1	6	14溝	中世か		微高地5	建物6-2	20-1	3	39ピット (建物4)	中世	
微高地3	土坑18	19-1	6	13土坑	古代か								
微高地3	土坑19	19-1	6	28土坑	古代								
微高地3	土坑20	19-1	6	36土坑	古代か								
微高地3	土坑21	19-1	6	48ピット	飛鳥か								
微高地3	土坑22	19-1	6	41土坑									
微高地3	ピット19	19-1	6	15土坑	古代か								
微高地3	ピット20	19-1	6	30土坑									
微高地3	ピット21	19-1	6	29土坑	古代								
微高地3	ピット22	19-1	6	37土坑									
微高地3	溝11	19-1	6	1溝	中世								
微高地3	溝12	19-1	6	2溝	中世								
微高地4	井戸7	19-1	6	3井戸	中世								
微高地4	建物1柱穴1	19-1	6	31建物-1	古代か								
微高地4	建物1-2	19-1	6	31建物-2	古代か								
微高地4	建物1-3	19-1	6	31建物-3	古代か								
微高地4	建物1-4	19-1	6	31建物-4	古代か								
微高地4	建物1-5	19-1	6	31建物-5	古代か								
微高地4	建物1-6	19-1	6	31建物-6	古代か								
微高地4	建物1-7	19-1	6	31建物-7	古代か								
微高地4	建物2柱穴1	19-1	6	32建物-1	古代か								
微高地4	建物2-2	19-1	6	32建物-2	中世か								
微高地4	建物2-3	19-1	6	32建物-3	中世か								

掲載区分	遺構名 (本書掲載)	調査名	トレンチ	遺構名 (調査時)	時期	備考
微高地5	建物6-3	20-1	3	40ピット (建物4)	中世	
微高地5	建物6-4	20-1	3	41ピット (建物4)	中世	
微高地5	建物6-5	20-1	3	42ピット (建物4)	中世	
微高地5	建物6-6	20-1	3	43ピット (建物4)	中世	
微高地5	建物6-7	20-1	3	46ピット (建物4)	中世	
微高地5	建物6-8	20-1	3	47ピット (建物4)	中世	
微高地5	土坑27	20-1	3	5土坑	古代	
微高地5	土坑28	20-1	3	54落	中世	
微高地5	土坑29	20-1	3	57土坑	中世	
微高地5	土坑30	20-1	3	108土坑		
微高地5	ピット27	20-1	3	44ピット	古墳か	
微高地5	ピット28	20-1	3	45ピット		
微高地5	ピット29	20-1	3	68ピット	中世か	
微高地5	ピット30	20-1	3	59ピット	中世	
微高地5	ピット31	20-1	3	107ピット	中世か	
微高地5	ピット32	20-1	3	116ピット	中世か	
微高地5	ピット33	20-1	3	197ピット	中世か	
微高地5	方形周溝墓2	20-1	3	1溝(方形周溝墓1)	弥生	
微高地5	方形周溝墓2	20-1	3	2溝(方形周溝墓1)	弥生	
微高地5	方形周溝墓3	20-1	3	3溝(方形周溝墓2)	弥生	
微高地5	方形周溝墓4	20-1	3	51溝(方形周溝墓3)	弥生	
微高地5	方形周溝墓5	20-1	3	50溝(方形周溝墓4)	弥生	
微高地5	方形周溝墓5	20-1	3	198溝(方形周溝墓4)	弥生	
微高地5	水溜1	20-1	3	49土坑	中世	
微高地5	溝19	20-1	3	4溝		
微高地5	溝16	20-1	3	48溝	中世	
微高地5	溝17	20-1	3	52溝	古代	
微高地5	溝18	20-1	3	53溝	古代	
微高地5	石材集積1	20-1	3	184石材	中世か	
微高地6	建物8柱穴1	19-1	7	41ピット	中世か	
微高地6	建物8-2	19-1	7	29ピット	中世か	
微高地6	建物9	19-1	7	—	中世か	
微高地6	土坑31	19-1	7	42土坑	古墳	
微高地6	ピット34	19-1	7	25ピット	中世	
微高地6	ピット35	19-1	7	43ピット	古代	
微高地6	溝20	19-1	7	21溝	古代か	
微高地6	溝21	19-1	7	22溝	中世か	
微高地6	溝22	19-1	7	24溝	古代	
微高地6	溝23	19-1	7	34溝	中世	
微高地6	溝24	19-1	7	35溝	中世	
微高地6	溝25	19-1	7	36溝		
微高地6	溝26	19-1	7	37溝		
微高地7	井戸05	19-1	7	10井戸	古代	
微高地7	建物7柱穴14	19-1	7	7ピット (掘立柱建物1-14)	古代	
微高地7	建物7-13	19-1	7	8ピット (掘立柱建物1-13)	古代	
微高地7	建物7-12	19-1	7	9ピット (掘立柱建物1-12)	古代	
微高地7	建物7-11	19-1	7	11ピット (掘立柱建物1-11)	古代	
微高地7	建物7-10	19-1	7	12ピット (掘立柱建物1-10)	古代	
微高地7	建物7-9	19-1	7	13ピット (掘立柱建物1-9)	古代	
微高地7	建物7-8	19-1	7	14ピット (掘立柱建物1-8)	古代	
微高地7	建物7-7	19-1	7	15ピット (掘立柱建物1-7)	古代	
微高地7	建物7-6	19-1	7	16ピット (掘立柱建物1-6)	古代	

掲載区分	遺構名 (本書掲載)	調査名	トレンチ	遺構名 (調査時)	時期	備考
微高地7	建物7-5	19-1	7	17ピット (掘立柱建物1-5)	古代	
微高地7	建物7-4	19-1	7	ピット(掘立柱建物1-4)	古代	
微高地7	建物7-2	19-1	7	18ピット (掘立柱建物1-2)	古代	
微高地7	建物7-1	19-1	7	ピット (掘立柱建物1-1)	古代	
微高地7	建物7-3	19-1	7	53ピット (掘立柱建物1-3)	古代	
微高地7	方形周溝墓6	19-1	7	39溝	弥生か	
微高地8	井戸6	19-1	7	153井戸	古代	
微高地8	井戸9	19-1	7	3井戸	中世	
微高地8	井戸10	19-1	7	152井戸	中世	
微高地8	方形土坑	19-1	7	4土坑	中世	
微高地8	方形土坑	20-1	5	3土坑	中世	
微高地8	土器1	19-1	7	143土器	古墳	
微高地8	土器2	19-1	7	144土器	古墳	
微高地8	土器3	19-1	7	121土器	中世	
微高地8	土坑32	19-1	7	94土坑		
微高地8	土坑33	19-1	7	169土坑		
微高地8	ピット36	19-1	7	173ピット	古代	
微高地8	ピット37	19-1	7	68ピット	中世	
微高地8	ピット38	19-1	7	71ピット	中世	
微高地8	ピット39	19-1	7	89ピット		
微高地8	ピット40	19-1	7	105ピット		
微高地8	溝27	20-1	4	7溝	中世	
微高地8	溝27	20-1	5	2溝	中世	
微高地8	溝28	19-1	7	177溝	中世	
微高地8	溝28	20-1	5	1溝	中世	
微高地8	溝29	19-1	7	5溝	中世	
微高地8	溝29	20-1	5	4溝	中世	
微高地8	溝29	20-1	5	7溝	中世	
微高地8	溝29	19-1	7	20溝		
微高地8	溝30	19-1	7	114溝	弥生古墳	
微高地8	溝31	19-1	7	117溝	中世	
微高地8	溝31	20-1	4	14溝	中世	
微高地8	溝32	19-1	7	118溝	古代か	
微高地8	溝33	19-1	7	55溝	中世	
微高地8	溝34	19-1	7	102溝	中世	
微高地8	溝35	19-1	7	113溝	中世	
微高地8	溝29	19-1	7	6溝	古代中世	
東低地1	井戸11	19-1	5	2井戸	中世	
東低地1	建物10	19-1	5	9建物	中世	
東低地1	土器集中1	19-1	5	第2層土器集中	中世	
東低地1	土坑34	19-1	5	5土坑		
東低地1	土坑35	19-1	5	8土坑	中世	
東低地1	土坑36	19-1	5	10土坑	弥生か	
東低地1	土坑37	20-1	4	3土坑	中世	
東低地1	溝36	19-1	5	3溝	中世	
東低地1	溝37	19-1	5	6溝	古代	
東低地2	土坑38	20-1	4	8土坑	中世	
東低地2	土坑39	20-1	4	9土坑	中世	
東低地2	土坑40	20-1	4	10土坑	中世	
東低地2	土坑41	20-1	4	11土坑	中世	
東低地2	土坑42	20-1	4	12土坑	中世	
東低地2	土坑43	20-1	4	13土坑	中世	
東低地2	土坑44	20-1	4	50土坑	中世	
東低地2	土坑45	20-1	4	59土坑	中世	
東低地2	土坑46	20-1	4	41土坑		
東低地2	溝38	20-1	4	51溝	中世	
東低地2	溝群1	20-1	4	15溝群		
東低地3	土坑47	19-1	4	4土坑	中世	
東低地3	溝39	19-1	4	6溝	中世	
東低地3	溝群2	19-1	4	1溝群	中世	
東低地4	土坑48	20-1	6	10土坑	古墳	
東低地4	土坑49	20-1	6	1土坑	中世	
東低地4	土坑50	20-1	6	5土坑	中世	
東低地5	土坑51	19-1	3	4土坑	中世	

表2 遺物一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
1	10	42	須恵器	坏	古代	(10.9) —	(3.3)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]黄灰2.5Y6/1	20-1-2	78	第1面	井戸1
2	10	42	須恵器	坏	古代	(11.2) —	(1.8)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	78	第1面	井戸1
3	10	42	須恵器	壺	古代	体部最大径(17.2)	(5.7)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	78	第1面	井戸1
4	10	42	土師器	甕	古墳	(12.8) —	(6.0)	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6	20-1-2	78	第1面	井戸1
5	10	42	須恵器	坏蓋	古墳	(12.7) —	(5.2)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	78	第1面	井戸1
6	10	42	須恵器	高坏(脚部)	古墳	(9.8) —	(4.9)	[外]灰白N7/0 [内]灰N6/0	20-1-2	78	第1面	井戸1
7	10	42	土師器	高坏	古墳	(13.8) —	(5.0)	[外]橙5YR6/6 [内]にぶい褐7.5YR7/4	20-1-2	78	第1面	井戸1
8	10	43	土師器	高坏	古墳	12.6 —	(5.3)	[外]橙5YR7/6 [内]にぶい橙5YR6/3	20-1-2	78	第1面	井戸1
9	12	42	須恵器	坏	古代	(15.1) —	(3.1)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]明褐灰7.5YR7/2	20-1-2	80	第1面	井戸2
10	12	42	土師器	皿	古代	(24.6) —	(2.9)	[外]灰黄褐10YR6/2 [内]灰黄褐10YR6/2	20-1-2	202	第1面	井戸2
11	12	42	瓦	平瓦	古代	長(5.7) 幅(7.5)	厚1.7	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-2	80	第1面	井戸2
12	12	42	瓦	平瓦	古代	長(11.7) 幅(14.6)	厚2.8	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-2	80	第1面	井戸2
13	12	96	井戸枠	縦板	古代	長(87.7) 幅42.0	厚2.9	—	20-1-2	237	第1面	井戸2
14	12	96	井戸枠	縦板	古代	長(94.3) 幅37.0	厚2.4	—	20-1-2	239	第1面	井戸2
15	12	96	井戸枠	縦板	古代	長(101.2) 幅37.4	厚3.5	—	20-1-2	238	第1面	井戸2
16	12	96	井戸枠	縦板	古代	長(106.8) 幅40.6	厚3.4	—	20-1-2	240	第1面	井戸2
17	12	95	井戸枠	横棧	古代	長58.6 幅4.0	厚2.2	—	20-1-2	243	第1面	井戸2
18	12	95	井戸枠	横棧	古代	長58.6 幅4.2	厚2.4	—	20-1-2	242	第1面	井戸2
19	12	95	井戸枠	横棧	古代	長58.1 幅4.2	厚2.6	—	20-1-2	241	第1面	井戸2
20	14	42	須恵器	蓋	古代	(15.2) —	(2.7)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	181	第1面	土坑1
21	14	42	須恵器	坏	古代	(15.8) (12.6)	4.0	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y7/1	20-1-2	73	第1面	土坑1
22	14	43	須恵器	坏	古代	(14.8) (8.6)	4.1	[外]青灰5B6/1 [内]青灰5B6/1	20-1-2	181	第1面	土坑1
23	14	43	須恵器	坏	古代	11.6 —	3.3	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	181	第1面	土坑1
24	14	42	須恵器	坏	古代	(12.3) —	(3.2)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	73	第1面	土坑1
25	14	43	須恵器	坏	古代	(10.9) —	(4.1)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-2	184	第1面	土坑2
26	14	43	須恵器	坏	古代	(14.0) (9.5)	(4.3)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	79	第1面	土坑2
27	14	42	須恵器	坏	古代	(15.6) (12.1)	(3.8)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	79	第1面	土坑2
28	14	42	須恵器	坏	古代	(17.5) (11.5)	(4.6)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-2	184	第1面	土坑2
29	14	42	須恵器	坏	古代	(13.4) —	(2.2)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	79	第1面	土坑2
30	14	43	須恵器	壺	古代	11.9 8.3	4.8	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	183	第1面	土坑2
31	14	42	須恵器	壺	古代	(7.6) —	(4.0)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	79	第1面	土坑2
32	14	43	須恵器	鉢(捏鉢)	古代	— 8.1	(7.4)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	79	第1面	土坑2
33	14	43	須恵器	甕	古代	体部最大径(38.2)	(34.7)	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	20-1-2	182	第1面	土坑2
34	14	42	土師器	坏	古代	(17.2) —	(3.9)	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6	20-1-2	184	第1面	土坑2
35	14	42	須恵器	坏	古代	(13.4) —	(3.8)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]灰白10YR8/2	20-1-2	79	第1面	土坑2
36	14	43	土師器	高坏(脚部)	古代	(12.8) —	(4.8)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-2	79	第1面	土坑2
37	14	43	土師器	鍋(片口)	古代	(31.8) —	11.6	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6	20-1-2	79	第1面	土坑2
38	14	42	土師器	鍋	古代	(42.0) —	(6.2)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-2	184	第1面	土坑2
39	15	44	須恵器	坏	古代	(12.8) —	3.5	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	20-1-2	82	第1面	土坑3
40	15	44	須恵器	皿	古代	(14.2) (8.6)	(3.6)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	81	第1面	土坑3
41	15	43	須恵器	坏	古代	(17.0) (11.6)	4.1	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y7/1	20-1-2	82	第1面	土坑3

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
42	15	44	須恵器	蓋	古代	(17.0) —	(3.6)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	81	第1面	土坑3
43	15	44	須恵器	甕	古代	(26.8) —	(5.8)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	82	第1面	土坑3
44	15	44	須恵器	坏蓋	古代	(15.4) —	(3.9)	[外]青灰5B6/1 [内]青灰5B6/1	20-1-2	82	第1面	土坑3
45	15	44	土師器	坏	古代	16.0 9.6	—	[外]明赤褐5YR5/6 [内]明赤褐5YR5/6	20-1-2	81	第1面	土坑3
46	15	43	土師器	鉢 <small>(底部)</small>	古代	— 3.4	(3.6)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-2	82	第1面	土坑3
47	15	44	土師器	甌か	古代	(15.8) —	(5.45)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-2	82	第1面	土坑3
48	15	44	土師器	鍋	古代	(35.2) —	(7.0)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	20-1-2	82	第1面	土坑3
49	15	44	土師器	鍋 <small>(把手)</small>	古代	長(3.2) 幅(5.7)	—	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-2	82	第1面	土坑3
50	15	44	瓦	軒平瓦	古代	長(3.4) 幅(4.0)	厚(1.1)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-2	81	第1面	土坑3
51	19	44	須恵器	坏	古代	(14.0) (9.4)	(4.0)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	108	第1面	溝4
52	19	43	土師器	椀 <small>(皿)</small>	古代	(16.0) —	3.5	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-2	75	第1面	溝3
53	19	44	土師器	甕	古代	(20.8) —	(7.2)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-2	96	第1面	土坑4
54	19	44	瓦	平瓦	古代	長(23.6) 幅(15.2)	厚2.6	[外]褐灰5YR5/1 [内]褐灰5YR5/1	20-1-2	155	第1面	溝7
55	19	45	須恵器	坏身	古墳	(13.2) —	(5.1)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-2	191	第1面	溝5
56	19	45	土師器	高坏 <small>(脚部)</small>	古墳	— (9.0)	(7.2)	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6	20-1-2	104	第1面	土坑8
57	19	44	縄文土器	深鉢	縄文	— —	(2.7)	[外]暗オリーブ褐2.5Y3/3 [内]暗オリーブ褐2.5Y3/3	20-1-2	198	第1面	ピット14
63	22	45	須恵器	蓋	古代	(14.0) —	(1.6)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-2	28	第2層～第3a層	
64	22	45	須恵器	坏	古代	(10.2) (6.4)	(4.1)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	42	第2層～第3a層	
65	22	45	須恵器	坏	古代	(14.0) (10.0)	4.1	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	49	第2層～第3a層	
66	22	45	須恵器	坏	古代	15.6 11.2	4.5	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-2	46	第2層～第3a層	
67	22	45	須恵器	坏	古代	(15.9) (10.2)	4.2	[外]灰白5Y7/1 灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-2	42	第2層～第3a層	
68	22	45	須恵器	坏	古代	(19.2) (14.2)	6.1	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-2	32	第2層	
69	22	45	土師器	坏	古代	(14.0) —	3.3	[外]橙7.5YR7/6 [内]灰白10YR8/2	20-1-2	28	第2層～第3a層	
70	22	45	須恵器	皿	古代	(14.0) —	3.7	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-2	42	第2層～第3a層	
71	22	45	須恵器	椀	古代	(12.9) —	(6.3)	[外]灰N5/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	49	第2層～第3a層	
72	22	45	須恵器	壺	古代	8.9 —	(7.2)	[外]灰白7.5Y7/1 [内]灰白7.5Y7/1	20-1-2	35	第2層	
73	22	45	須恵器	壺	古代	— 6.7	(5.8)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	35	第2層	
74	22	46	須恵器	壺	古代	— 8.2	(4.2)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	42	第2層～第3a層	
75	22	46	須恵器	壺	古代	— 8.4	(8.7)	[外]灰白N8/0 [内]灰N6/0	20-1-2	42	第2層～第3a層	
76	22	45	須恵器	器台か	古代	— —	(9.0)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N6/0	20-1-2	52	第2層～第3a層	
77	22	45	須恵器	壺 <small>(把手)</small>	古代	— 幅(6.6)	高(3.5)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-2	55	第2層～第3a層	
78	22	44	土製品	埴か	古代	長(8.8) 幅(6.7)	厚3.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-2	32	第2層	
79	22	44	石製品	砥石		長(5.2) 幅(7.5)	厚2.7	重120.7g 石材:流紋岩	20-1-2	28	第2層～第3a層	
80	22	44	石製品	砥石		長(7.5) 幅(5.7)	厚2.8	重102.9g 石材:流紋岩	20-1-2	46	第2層～第3a層	
81	22	44	石製品	砥石		長(9.5) 幅(8.0)	厚3.0	重161.0g 石材:頁岩か	20-1-2	34	第1層～第2層	
82	22	44	石製品	砥石		長(6.0) 幅(6.1)	厚(5.3)	重206.1g 石材:安山岩か	20-1-2	42	第2層～第3a層	
83	22	44	石製品	砥石		長(12.0) 幅(10.6)	厚(4.3)	重471.9g 石材:砂岩	20-1-2	42	第2層～第3a層	
84	25	46	須恵器	坏	古代	12.2 8.8	(4.4)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-8	496	第1面	井戸3
85	25	46	須恵器	坏	古代	16.2 (11.5)	(5.5)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-8	496	第1面	井戸3
86	25	46	須恵器	皿	古代	(17.2) (12.6)	3.1	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-8	496	第1面	井戸3
87	25	46	須恵器	鉢	古代	— (12.6)	(10.7)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-8	457	第1面	井戸3
88	25	46	土師器	椀	古代	12.4 —	3.7	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6	19-1-8	496	第1面	井戸3

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
89	25	46	土師器	椀	古代	(15.8) —	(2.8)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-8	457	第1面	井戸3
90	25	46	土師器	甃	古代	—	(5.0)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-8	496	第1面	井戸3
91	25	46	土師器	甃	古代	—	(5.0)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-8	496	第1面	井戸3
92	25	46	瓦	丸瓦	古代	長(13.7) 幅(14.0)	厚2.2	[外]灰7.5Y6/1 [内]灰7.5Y6/1	19-1-8	496	第1面	井戸3
93	25	46	瓦	丸瓦	古代	長(21.0) 幅(13.5)	厚1.8	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-8	496	第1面	井戸3
94	25	46	土師器	甃	古墳	(19.2) —	(2.1)	[外]にぶい褐7.5YR6/3 [内]にぶい褐7.5YR6/3	19-1-8	310	第1面	井戸3
95	26	47	須恵器	环蓋	古墳	13.0 —	3.7	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-8	455	第1面	土坑9
96	26	47	須恵器	有蓋高环蓋	古墳	12.3 —	5.5	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-8	450	第1面	土坑11
97	29	47	土師器	甃	古墳	(16.9) —	(3.7)	[外]橙7.5YR7/6 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-8	308	第1面	土坑12
98	29	46	須恵器	蓋	古代	(22.4) —	(2.1)	[外](釉)灰N6/0(素地)灰白5Y7/1 [内]灰白N7/0	19-1-8	215	第1層~第3a層	
99	29	47	須恵器	高环(脚部)	古墳	(9.1) —	(5.8)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白N8/0	19-1-8	224	第3a層	
100	36	47	土師器	皿	中世	11.1 —	1.9	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-6	109	第1面	溝12
101	36	48	土師器	皿	中世	11.6 —	2.4	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-6	109	第1面	溝12
102	36	47	須恵器	环	古代	(11.0) —	(3.8)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-6	214	第1面	土坑19
103	36	47	土師器	甃	古代	(17.2) —	(8.2)	[外]橙5YR7/6 [内]灰白2.5Y8/2	19-1-6	214	第1面	土坑19
104	36	47	土師器	甃	古代	(21.4) —	(6.5)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-6	214	第1面	土坑19
105	36	47	須恵器	环	古代	(12.0) —	3.3	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	19-1-6	115	第1面	土坑18
106	36	47	須恵器	环もしくは皿	古代	(13.4) —	3.1	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	121	第1面	ピット19
107	36	47	須恵器	蓋	古代	(15.6) —	(1.1)	[外]灰白N7/0 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-6	146	第1面	土坑22
108	36	47	須恵器	环	古代	(12.0) —	(2.5)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	170	第1面	土坑21
109	37	47	須恵器	円面硯	古代	(10.6) —	(1.4)	[外]青灰5PB6/1 [内]青灰5PB6/1	19-1-6	100	第2層	
110	37	47	須恵器	环	古代	(10.3) —	(3.4)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	106	第3a層	
111	37	48	土師器	皿	中世	7.6 —	1.2	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]灰白10YR8/2	19-1-6	104	第3a層	
112	37	47	土師器	椀	古代	(12.2) —	(3.6)	[外]橙7.5YR7/6 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-6	106	第3a層	
113	37	47	石製品	砥石		長(6.9) 幅(4.3)	厚(3.2)	重77.9g 石材:砂岩	19-1-6	102	第2層	
114	37	91	石製品	剥片		長5.0 幅4.5	厚0.8	重10.0g 石材:サヌカイト	19-1-6	106	第3a層	
115	39	48	須恵器	捏鉢	中世	(33.2) —	(3.4)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	176	第1面	井戸7
116	39	48	瓦質土器	羽釜(足)	中世	長(19.4) 幅3.4	厚2.6	[外]黒N2/0 灰白N7/0	19-1-6	176	第1面	井戸7
117	39	48	須恵器	壺	古墳	(16.8) —	(6.6)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	176	第1面	井戸7
118	45	48	土師器	甃	古代	(19.0) —	(5.4)	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6	19-1-6	157	第1面	建物2
119	45	49	土師器	鍋もしくは甃(把手)	古墳か	長4.8 幅4.3	—	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]灰N4/0	19-1-6	184	第1面	ピット26
120	45	48	縄文土器	深鉢	縄文	長(7.5) 幅(9.0)	—	[外]黒7.5Y2/1 [内]灰白10YR8/2	19-1-6	114	第1面	土坑24
121	45	48	土師器	高环(脚部)	古墳	—	(6.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/6 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-6	114	第1面	土坑24
122	45	48	土師器	鍋	古代	(29.0) —	(11.2)	[外]灰白10YR8/2 橙2.5YR7/6 [内]灰白2.5Y8/2	19-1-6	114	第1面	土坑24
123	45	49	須恵器	蓋	古代	14.5 —	2.4	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	126	第1面	溝14
124	45	49	須恵器	环	古代	(13.6) (8.4)	(4.2)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-6	126	第1面	溝14
125	45	49	須恵器	环	古代	(13.4) (7.7)	(4.3)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	126	第1面	溝14
126	45	48	須恵器	横瓶	古代	(9.0) —	(6.1)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	126	第1面	溝14
127	45	48	須恵器	壺	古代	体部最大径(16.8)	(15.4)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	126	第1面	溝14
128	45	48	須恵器	壺	古代	体部最大径(16.5)	(7.9)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	126	第1面	溝14
129	45	49	須恵器	捏鉢	古代	(7.0) —	(3.3)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-6	126	第1面	溝14
130	45	48	須恵器	鉢	古代	(21.2) —	(9.3)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-6	126	第1面	溝14

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
131	45	49	土師器	甃	古代	(25.6) —	(5.0)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-6	126	第1面	溝14
132	45	49	土師器	甃	古代	(24.2) —	(6.5)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-6	126	第1面	溝14
133	45	49	土師器	羽釜	古代	銜端 (26.3)	(4.8)	[外]灰白10YR8/2 [内]にぶい黄褐10YR5/3	19-1-6	126	第1面	溝14
134	45	49	土師器	鍋 (把手)	古代	長(5.0) 幅(7.5)	—	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-6	126	第1面	溝14
135	45	49	土師器	移動式甗	古代	長(10.7) 幅(5.4)	—	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-6	220	第1面	溝14
136	45	48・49	瓦	軒平瓦	古代	長(17.0) 幅(9.6)	厚3.1	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白5Y7/1	19-1-6	126	第1面	溝14
137	45	48	弥生土器	甃 (底部)	弥生	— (5.0)	(1.6)	[外]橙5YR7/6 [内]灰N4/0	19-1-6	113	第1面	方形周溝 墓1
138	45	48	弥生土器	甃 (底部)	弥生	— (4.9)	(1.6)	[外]橙5YR7/6 [内]灰白10YR8/2	19-1-6	113	第1面	方形周溝 墓1
139	45	47	弥生土器	壺	弥生	(21.6) 7.8	(44.7)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-6	223	第1面	方形周溝 墓1
140	46	49	須恵器	捏鉢	中世	— (9.6)	(4.9)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	99	第3a層	
141	46	49	白磁	碗	中世	(16.2) —	(4.2)	[外]灰白7.5Y7/1 [内]灰白7.5Y7/1	19-1-6	97	第3a層	
142	46	49	緑釉陶器	碗	古代	— (8.0)	(2.3)	[外]オリーブ灰10Y4/2 [内]オリーブ灰10Y4/2	19-1-6	96	第3a層	
143	46	49	須恵器	坏蓋	古墳	(13.6) —	4.3	[外]灰N5/0 [内]灰N6/0	19-1-6	141	第3a層	
144	46	49	須恵器	坏身	古墳	(13.8) —	(3.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-6	103	第3a層	
145	46	49	須恵器	有蓋高坏	古墳	(10.5) —	(5.4)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-6	141	第3a層	
146	46	49	弥生土器	甃もしくは (底部)	弥生	— 4.7	(2.7)	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4	19-1-6	96	第3a層	
147	46	49	石製品	投弾もしくは リタッチャー		長5.2 幅3.6	厚2.6	重71.8g 石材:砂岩か	19-1-6	93	第2層	
148	46	49	石製品	砥石		長5.2 幅6.1	厚4.1	重167.6g 石材:チャート	19-1-6	99	第3a層	
149	52	51	須恵器	坏身	古墳	(13.2) —	(4.2)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰N6/0	20-1-3	357	第1面	建物4
150	52	51	須恵器	甃	古墳	— —	(4.4)	[外]灰白N7/0 [内]灰N6/0	20-1-3	357	第1面	建物4
151	52	51	土製品	土錘	中世	長(7.7) 幅(4.6)	—	[外]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-3	376	第1面	建物6
152	54	50	須恵器	坏	古代	13.2 —	3.6	[外]灰白N8/0 灰N5/0 [内]灰白N8/0 灰N5/0	20-1-3	459	第1面	井戸4
153	54	50	須恵器	坏	古代	13.0 —	3.3	[外]灰白N8/0 暗灰N3/0 [内]灰白N8/0 暗灰N3/0	20-1-3	459	第1面	井戸4
154	54	50	須恵器	坏	古代	14.8 —	3.9	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0 灰N5/0	20-1-3	459	第1面	井戸4
155	54	50	須恵器	坏	古代	11.6 7.2	4.3	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-3	459	第1面	井戸4
156	54	51	須恵器	坏	古代	(14.8) (9.6)	4.1	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-3	373	第1面	井戸4
157	54	51	須恵器	坏	古代	(11.6) —	(3.1)	[外]灰白5Y/1 [内]灰白5Y/1	20-1-3	220	第1面	井戸4
158	54	51	須恵器	皿	古代	(18.2) —	(2.5)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	462	第1面	井戸4
159	54	51	須恵器	蓋 (宝珠つまみ)	古代	— —	(2.2)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	462	第1面	井戸4
160	54	51	須恵器	蓋	古代	(16.8) —	(1.5)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	20-1-3	220	第1面	井戸4
161	54	51	須恵器	蓋	古代	(13.2) —	(3.1)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-3	220	第1面	井戸4
162	54	51	須恵器	甃	古代	— —	(5.2)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	463	第1面	井戸4
163	54	51	須恵器	甃	古代	(23.1) —	(5.0)	[外]黄灰2.5Y5/1 [内]灰N5/0	20-1-3	462	第1面	井戸4
164	54	53	須恵器	壺	古代	— 8.6	(11.9)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	461	第1面	井戸4
165	54	50	須恵器	平瓶	古代	(13.4) 14.0	(17.0)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-3	461	第1面	井戸4
166	54	50	土師器	皿	古代	15.0 —	2.9	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	20-1-3	459	第1面	井戸4
167	54	50	土師器	高坏 (脚部)	古代	— —	(7.2)	[外]橙5YR7/8 [内]橙5YR7/8	20-1-3	220	第1面	井戸4
168	54	51	土師器	甃	古代	(14.2) —	(3.9)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	20-1-3	220	第1面	井戸4
169	54	51	土師器	甃	古代	(15.8) —	(6.3)	[外]灰黄褐10YR6/2 [内]灰黄褐10YR6/2	20-1-3	462	第1面	井戸4
170	54	51	土師器	甃	古代	15.5 —	(5.8)	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	462	第1面	井戸4
171	54	51	土師器	甃	古代	— —	(5.9)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]黒褐7.5YR3/1	20-1-3	373	第1面	井戸4
172	54	51	土師器	甃	古代	(16.5) —	(9.0)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	20-1-3	461	第1面	井戸4

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
173	54	51	土師器	甕	古代	(27.1) —	(7.9)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	373	第1面	井戸4
174	55	52	土師器	製塩土器	古代	—	(7.0)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	462	第1面	井戸4
175	55	52	土師器	製塩土器	古代	—	(6.0)	[外]にぶい褐7.5YR6/3 [内]にぶい橙5YR6/4	20-1-3	460	第1面	井戸4
176	55	52	土師器	製塩土器	古代	(11.8) —	8.9	[外]灰白10YR8/1~にぶい橙2.5YR6/4 [内]灰白10YR8/1~にぶい橙2.5YR6/4	20-1-3	462	第1面	井戸4
177	55	52	土師器	製塩土器	古代	(18.0) —	(7.9)	[外]にぶい褐7.5YR6/3 [内]灰黄褐10YR6/2	20-1-3	462	第1面	井戸4
178	55	53	土師器	製塩土器	古代	18.0	(15.0)	[外]褐灰10YR5/1 [内]灰黄褐10YR6/2	20-1-3	462	第1面	井戸4
179	55	96	井戸枠	縦板	古代	長(92.8) 幅36.7	厚3.6	—	20-1-3	464	第1面	井戸4
180	55	96	井戸枠	縦板	古代	長(91.8) 幅32.1	厚3.9	—	20-1-3	467	第1面	井戸4
181	55	96	井戸枠	縦板	古代	長(77.8) 幅37.7	厚4.1	—	20-1-3	465	第1面	井戸4
182	55	96	井戸枠	縦板	古代	長(108.5) 幅47.5	厚3.8	—	20-1-3	466	第1面	井戸4
183	55	96	井戸枠	横棧	古代	長42.0 幅4.8	厚1.8	—	20-1-3	468	第1面	井戸4
184	55	96	井戸枠	横棧	古代	長41.4 幅5.1	厚3.1	—	20-1-3	469	第1面	井戸4
185	56	51	瓦器	椀	中世	(15.2) —	(5.4)	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	217	第1面	井戸8
186	56	51	瓦質土器	羽釜	中世	(14.0) —	(4.0)	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	217	第1面	井戸8
187	56	51	土師器	甕	古代	(18.6) —	(3.7)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	217	第1面	井戸8
188	56	51	土師器	羽釜	中世	(32.8) —	(6.0)	[外]灰黄褐10YR4/2 [内]灰黄褐10YR4/2	20-1-3	217	第1面	井戸8
189	56	51	須恵器	甕 (体部)	中世	長(8.5) 幅(13.5)	厚1.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	217	第1面	井戸8
190	58	54	土師器	皿	中世	7.1 —	1.1	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	249	第1面	水溜1
191	58	54	土師器	皿	中世	7.0 —	1.0	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
192	58	54	土師器	皿	中世	7.5 —	1.1	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
193	58	—	土師器	皿	中世	7.9 —	1.0	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	249	第1面	水溜1
194	58	—	土師器	皿	中世	8.3 —	1.0	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	249	第1面	水溜1
195	58	54	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.2 —	1.3	[外]橙5YR7/6 [内]にぶい橙5YR7/4	20-1-3	269	第1面	水溜1
196	58	—	土師器	皿	中世	8.6 —	1.6	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	249	第1面	水溜1
197	58	54	土師器	皿	中世	8.8 —	1.6	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
198	58	—	土師器	皿	中世	8.7 —	1.6	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
199	58	54	土師器	皿	中世	8.8 —	1.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白2.5YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
200	58	54	土師器	皿	中世	8.4 —	1.1	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	249	第1面	水溜1
201	58	—	土師器	皿	中世	8.6 —	1.2	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR6/3	20-1-3	249	第1面	水溜1
202	58	—	土師器	皿	中世	8.5 —	1.6	[外]灰白10YR8/1 [内]灰白10YR8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
203	58	—	土師器	皿	中世	9.3 —	1.6	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-3	249	第1面	水溜1
204	58	54	土師器	皿	中世	8.4 —	1.7	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
205	58	54	土師器	皿	中世	8.6 —	1.5	[外]橙2.5YR7/6 黒褐10YR3/1 [内]橙2.5YR7/6 黒褐10YR3/1	20-1-3	248	第1面	水溜1
206	58	54	土師器	皿	中世	9.0 —	1.3	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	248	第1面	水溜1
207	58	—	土師器	皿	中世	(8.3) —	(1.4)	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	249	第1面	水溜1
208	58	53	土師器	皿	中世	8.9 —	1.4	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
209	58	55	土師器	皿	中世	7.5 9.0	1.5	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	248	第1面	水溜1
210	58	—	土師器	皿	中世	10.8 —	2.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
211	58	—	土師器	皿	中世	(12.4) —	(1.9)	[外]灰白7.5YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
212	58	55	土師器	皿	中世	12.8 —	2.1	[外]灰白10Y8/1 [内]灰白10Y8/1	20-1-3	248	第1面	水溜1
213	58	—	土師器	皿 (灯明皿)	中世	(12.6) —	2.0	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
214	58	55	土師器	皿	中世	12.5 —	2.4	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	248	第1面	水溜1

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
215	58	55	土師器	皿	中世	13.3 —	2.7	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
216	58	—	土師器	皿	中世	13.9 —	2.6	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	248	第1面	水溜1
217	58	—	土師器	皿 (灯明皿)	中世	13.8 —	2.9	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	269	第1面	水溜1
218	58	—	土師器	皿	中世	12.8 —	2.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
219	58	55	土師器	皿 (灯明皿)	中世	13.9 —	2.8	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
220	58	55	土師器	皿	中世	13.6 —	2.4	[外]灰白10Y8/2 [内]灰白10Y8/2	20-1-3	256	第1面	水溜1
221	58	55	土師器	皿	中世	13.4 —	2.5	[外]灰白7.5Y8/2 [内]灰白7.5Y8/2	20-1-3	248	第1面	水溜1
222	58	55	土師器	皿	中世	14.0 —	2.7	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	248	第1面	水溜1
223	58	55	土師器	皿	中世	13.0 —	2.9	[外]灰白10Y8/2 [内]灰白10Y8/2	20-1-3	248	第1面	水溜1
224	58	55	土師器	皿	中世	12.9 —	2.7	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	248	第1面	水溜1
225	58	55	土師器	皿(灯明 皿か)	中世	13.3 —	2.2	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
226	58	—	土師器	皿	中世	13.0 —	2.8	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	256	第1面	水溜1
227	58	55	土師器	皿	中世	14.1 —	3.3	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/4	20-1-3	248	第1面	水溜1
228	58	55	土師器	椀	中世	14.0 —	3.9	[外]灰白10Y8/2 [内]灰白10Y8/2	20-1-3	249	第1面	水溜1
229	58	55	土師器	台付皿 (高台)	中世	— 6.6	(3.4)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	249	第1面	水溜1
230	58	—	土師器	台付皿 (高台)	中世	— (7.0)	(3.8)	[外]灰白10Y8/2 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	248	第1面	水溜1
231	58	55	土師器	台付皿 (高台)	中世	— 6.8	(4.0)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	249	第1面	水溜1
232	58	55	土師器	台付皿 (高台)	中世	— 7.9	(2.3)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
233	58	56	瓦器	椀	中世	13.1 5.4	4.8	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
234	58	56	瓦器	椀	中世	14.2 5.4	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
235	58	—	瓦器	椀	中世	(13.7) (4.4)	(5.3)	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
236	58	56	瓦器	椀	中世	14.5 4.4	5.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
237	58	56	瓦器	椀	中世	14.6 4.8	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	256	第1面	水溜1
238	58	—	瓦器	椀	中世	(13.6) (4.8)	(4.0)	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
239	58	—	瓦器	椀	中世	13.25 (4.8)	5.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
240	58	—	瓦器	椀	中世	13.8 (5.0)	(4.4)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
241	58	56	瓦器	椀	中世	14.6 5.5	5.0	[外]灰N4/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
242	58	56	瓦器	椀	中世	14.1 5.2	4.8	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
243	58	56	瓦器	椀	中世	13.5~14.5 5.1	4.7	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白N8/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
244	58	—	瓦器	椀	中世	14.3 4.5	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N6/0	20-1-3	269	第1面	水溜1
245	59	53	瓦質土器	羽釜	中世	(12.0) —	(8.7)	[外]黒5Y2/1 [内]暗灰N3/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
246	59	53	瓦質土器	羽釜	中世	(24.7) —	(3.4)	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
247	59	53	瓦質土器	羽釜	中世	(27.9) —	(6.6)	[外]灰N5/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
248	59	53	瓦質土器	鍋	中世	(26.6) —	(8.5)	[外]灰5Y4/1 [内]灰白7.5Y8/1	20-1-3	248	第1面	水溜1
249	59	53	瓦質土器	羽釜	中世	(41.6) —	(4.6)	[外]灰N6/0 [内]灰N5/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
250	59	54	瓦質土器	盤	中世	(50.8) —	(4.0)	[外]黒N1.5/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
251	59	53	須恵器	盤	中世	(42.0) —	(9.2)	[外]灰N4/0 灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
252	59	54	瓦質土器	盤	中世	(46.0) —	(10.3)	[外]灰白10YR7/1 [内]褐灰10YR4/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
253	59	53	須恵器	甗	中世	(29.2) —	(5.6)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
254	59	53	須恵器	甗	中世	(33.4) —	(4.7)	[外]暗灰N3/0 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-3	249	第1面	水溜1
255	59	54	須恵器	甗	中世	(44.4) —	(6.2)	[外]灰N6/0 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
256	59	54	須恵器	甗	中世	(35.0) —	(3.3)	[外]黒2.5Y2/1 [内]赤灰2.5YR5/1	20-1-3	269	第1面	水溜1

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	下:底径					
257	59	54	須恵器	壺	中世	— (3.2)	(1.2)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
258	59	54	須恵器	平瓶か (把手)	中世	幅(4.9)	高(3.4)	[外]灰N6/0 [内]灰N5/0	20-1-3	249	第1面	水溜1
259	59	54	白磁	碗	中世	(10.0) 4.0	3.2	[外](釉)灰白7.5Y8/1(素地)灰黄2.5Y7/2 [内](釉)灰白7.5Y8/1(素地)灰黄2.5Y7/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
260	59	53	白磁	碗	中世	(16.0) —	(5.0)	[外]灰白10Y8/1 [内]灰白10Y8/1	20-1-3	248	第1面	水溜1
261	59	54	青磁	碗	中世	— 5.0	(2.1)	[外]にぶい黄橙10YR6/3 [内]にぶい黄2.5Y6/3	20-1-3	269	第1面	水溜1
262	59	54	青磁	碗	中世	— 6.2	(4.2)	[外](釉)灰オリーブ7.5Y6/2(素地)灰5Y6/1 [内](釉)灰オリーブ7.5Y6/2 (素地)灰白5Y7/1	20-1-3	269	第1面	水溜1
263	59	54	土製品	土錘	中世	長(9.8) 幅(6.2)	厚2.2	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	249	第1面	水溜1
264	60	56	瓦	軒平瓦	中世	長(16.5) 幅(18.9)	厚5.0	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	269	第1面	水溜1
265	60	53	瓦	丸瓦	中世	長(4.8) 幅(7.0)	厚1.4	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	248	第1面	水溜1
266	62	—	土師器	皿	中世	8.4 —	1.1	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	275	第1面	溝16
267	62	57	土師器	皿	中世	8.0 —	1.5	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	275	第1面	溝16
268	62	57	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.3 —	1.5	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	275	第1面	溝16
269	62	—	土師器	皿	中世	8.5 —	1.1	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6	20-1-3	275	第1面	溝16
270	62	—	土師器	皿	中世	8.2 —	1.5	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	275	第1面	溝16
271	62	57	土師器	皿	中世	9.2 —	1.7	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	275	第1面	溝16
272	62	57	土師器	皿	中世	8.8 —	0.9	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	275	第1面	溝16
273	62	57	土師器	皿 (灯明皿)	中世	9.3 —	1.5	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	20-1-3	275	第1面	溝16
274	62	57	土師器	皿(灯明 皿か)	中世	12.7 —	2.2	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	275	第1面	溝16
275	62	57	土師器	皿	中世	12.6 —	2.6	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4	20-1-3	275	第1面	溝16
276	62	57	土師器	皿(灯明 皿か)	中世	13.2 —	2.5	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	275	第1面	溝16
277	62	57	土師器	皿	中世	13.0 —	2.5	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	275	第1面	溝16
278	62	57	土師器	皿(灯明 皿か)	中世	13.3 —	2.3	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	275	第1面	溝16
279	62	57	瓦器	椀	中世	12.1 —	3.9	[外]灰白N8/0 灰N4/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	275	第1面	溝16
280	62	—	瓦器	椀	中世	13.8 5.1	4.8	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	275	第1面	溝16
281	62	57	瓦器	椀	中世	14.0 5.3	4.9	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	275	第1面	溝16
282	62	—	瓦器	椀	中世	13.3 4.9	4.4	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	275	第1面	溝16
283	62	—	瓦器	椀	中世	14.0 4.2	4.9	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	275	第1面	溝16
284	62	57	瓦器	椀	中世	12.0 4.0	4.2	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	275	第1面	溝16
285	62	57	瓦器	椀	中世	13.2 4.0	4.3	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	275	第1面	溝16
286	62	57	瓦器	椀	中世	13.3 4.8	4.3	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	275	第1面	溝16
287	62	57	瓦器	椀	中世	13.6 5.3	4.8	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	275	第1面	溝16
288	62	58	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.3 —	1.4	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
289	62	58	土師器	皿	中世	8.6 —	1.4	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/4	20-1-3	276	第1面	溝16
290	62	—	土師器	皿	中世	8.6 —	1.6	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
291	62	58	土師器	皿	中世	8.4 —	1.4	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	276	第1面	溝16
292	62	—	土師器	皿	中世	8.1 —	1.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
293	62	58	土師器	皿	中世	8.6 —	1.4	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	276	第1面	溝16
294	62	58	土師器	皿	中世	8.0 —	1.5	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	276	第1面	溝16
295	62	58	土師器	皿	中世	9.3 —	1.3	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	276	第1面	溝16
296	62	58	土師器	皿	中世	8.2 —	1.5	[外]灰白7.5YR8/2 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
297	62	—	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.5 —	1.4	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
298	62	—	土師器	皿	中世	8.6 —	1.2	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	276	第1面	溝16

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	下:底径					
299	62	58	土師器	皿(灯明皿か)	中世	8.4	1.1	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
300	62	58	土師器	皿(灯明皿か)	中世	8.9	1.6	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
301	62	58	土師器	皿	中世	9.2	1.3	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
302	62	58	土師器	皿	中世	9.5	1.5	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい黄橙10Y7/3	20-1-3	276	第1面	溝16
303	62	—	土師器	皿	中世	12.8	2.2	[外]橙7.5YR7/6 [内]浅黄橙7.5YR8/6	20-1-3	276	第1面	溝16
304	62	58	土師器	皿	中世	13.1	2.7	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
305	62	58	土師器	皿(灯明皿)	中世	13.6	2.5	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4	20-1-3	276	第1面	溝16
306	62	58	土師器	皿	中世	12.3	2.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
307	62	58	土師器	皿	中世	12.7	2.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
308	62	58	土師器	皿	中世	12.9 9.2	1.9	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3 褐灰10YR5/1	20-1-3	276	第1面	溝16
309	62	65	土師器	脚付皿	中世	—	(3.6)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	276	第1面	溝16
310	62	59	瓦器	椀	中世	13.8 5.5	4.7	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
311	62	59	瓦器	椀	中世	13.9 4.6	4.5	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
312	62	—	瓦器	椀	中世	13.8 4.8	4.7	[外]暗灰N3/0 灰白N8/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	276	第1面	溝16
313	62	59	瓦器	椀	中世	13.7 5.4	4.6	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
314	62	59	瓦器	椀	中世	13.8 4.8	4.1	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	276	第1面	溝16
315	62	59	瓦器	椀	中世	14.4 4.5	4.9	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	276	第1面	溝16
316	62	59	瓦器	椀	中世	13.5 4.8	4.8	[外]灰N5/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
317	62	59	瓦器	椀	中世	12.8 5.8	4.1	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
318	62	59	瓦器	椀	中世	14.5 5.4	4.9	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0 灰白N8/0	20-1-3	276	第1面	溝16
319	62	59	瓦器	椀	中世	13.8 4.2	4.5	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	276	第1面	溝16
320	62	59	瓦器	椀	中世	13.8	4.8	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
321	62	59	瓦器	椀	中世	12.4 4.4	3.9	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
322	63	—	瓦器	椀	中世	12.8 5.8	4.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
323	63	59	瓦器	椀	中世	14.8 5.2	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
324	63	—	瓦器	椀	中世	13.8 5.0	4.7	[外]灰N4/0 灰白N8/0 [内]灰N4/0 灰白N8/0	20-1-3	276	第1面	溝16
325	63	59	瓦器	椀	中世	13.6 4.8	5.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
326	63	59	瓦器	椀	中世	13.1 4.9	4.4	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	276	第1面	溝16
327	63	59	瓦器	椀	中世	13.6 4.6	4.2	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	276	第1面	溝16
328	63	—	瓦器	椀	中世	(14.2) (5.8)	4.9	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
329	63	59	瓦器	椀	中世	14.0 4.9	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	276	第1面	溝16
330	63	60	土師器	皿	中世	8.3	1.4	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	277	第1面	溝16
331	63	60	土師器	皿	中世	8.6	1.2	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	277	第1面	溝16
332	63	60	土師器	皿	中世	8.6	1.2	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	277	第1面	溝16
333	63	—	土師器	皿	中世	8.2	1.4	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	277	第1面	溝16
334	63	60	土師器	皿	中世	8.4	1.1	[外]灰白10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/4 [内]灰白10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/4	20-1-3	277	第1面	溝16
335	63	60	土師器	皿	中世	13.2	3.0	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	277	第1面	溝16
336	63	60	土師器	皿	中世	12.7	2.6	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	277	第1面	溝16
337	63	—	土師器	皿	中世	13.2	2.4	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/4	20-1-3	277	第1面	溝16
338	63	60	土師器	台付皿	中世	10.4 7.4	5.9	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	277	第1面	溝16
339	63	60	瓦器	椀	中世	13.4 5.5	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	277	第1面	溝16
340	63	—	瓦器	椀	中世	12.8 5.0	4.0	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	277	第1面	溝16

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
341	63	60	瓦器	椀	中世	13.0 4.6	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	277	第1面	溝16
342	63	60	瓦器	椀	中世	13.8 5.6	4.8	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	277	第1面	溝16
343	63	60	瓦器	椀	中世	13.3 4.75	4.5	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	277	第1面	溝16
344	63	60	瓦器	椀	中世	13.1 4.7	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	277	第1面	溝16
345	63	60	瓦器	椀	中世	13.2 5.0	4.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	277	第1面	溝16
346	63	60	土師器	皿	中世	8.2 —	1.4	[外]にぶい橙7.5YR7/4 灰白10YR8/2 [内]にぶい橙7.5YR7/4 灰白10YR8/2	20-1-3	278	第1面	溝16
347	63	60	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.5 —	1.2	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	278	第1面	溝16
348	63	60	土師器	皿	中世	8.4 —	1.4	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	278	第1面	溝16
349	63	61	土師器	皿	中世	13.5 —	2.0	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	278	第1面	溝16
350	63	—	土師器	皿	中世	12.4 —	2.5	[外]にぶい黄橙10YR6/3 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	278	第1面	溝16
351	63	61	土師器	皿	中世	12.2 —	2.3	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	278	第1面	溝16
352	63	61	土師器	皿	中世	12.6 —	2.1	[外]灰白10YR8/1 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	278	第1面	溝16
353	63	61	土師器	皿	中世	13.0 —	2.6	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	278	第1面	溝16
354	63	—	土師器	皿	中世	13.5 —	2.2	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	278	第1面	溝16
355	63	—	瓦器	椀	中世	14.1 4.3	4.5	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	20-1-3	278	第1面	溝16
356	63	61	瓦器	椀	中世	14.4 5.3	4.8	[外]灰N4/0 暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	278	第1面	溝16
357	63	61	瓦器	椀	中世	13.6 4.7	4.75	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	278	第1面	溝16
358	63	61	瓦器	椀	中世	13.8 4.4	4.3	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	278	第1面	溝16
359	63	61	瓦器	椀	中世	13.5 5.1	4.6	[外]灰N4/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	278	第1面	溝16
360	63	—	瓦器	椀	中世	(14.3) (5.4)	3.8	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	20-1-3	278	第1面	溝16
361	63	61	瓦器	椀	中世	13.3 4.6	4.7	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	278	第1面	溝16
362	64	61	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.3 —	1.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	279	第1面	溝16
363	64	—	土師器	皿	中世	8.2 —	1.3	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	279	第1面	溝16
364	64	61	土師器	皿	中世	9.7 —	1.4	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	279	第1面	溝16
365	64	61	土師器	皿	中世	12.3 —	2.2	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	279	第1面	溝16
366	64	61	土師器	皿	中世	12.4 —	2.9	[外]灰白10YR7/1 [内]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-3	279	第1面	溝16
367	64	61	瓦器	椀	中世	14.1 4.6	4.1	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	279	第1面	溝16
368	64	61	瓦器	椀	中世	13.6 4.8	4.5	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	279	第1面	溝16
369	64	61	瓦器	椀	中世	13.7 5.0	4.8	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	279	第1面	溝16
370	64	62	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.6 —	1.3	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	281	第1面	溝16
371	64	—	土師器	皿	中世	8.3 —	1.3	[外]浅黄橙10YR8/3 灰白10YR8/2 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	281	第1面	溝16
372	64	62	土師器	皿 (灯明皿)	中世	8.5 —	1.2	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	281	第1面	溝16
373	64	62	土師器	皿	中世	12.6 —	2.3	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	281	第1面	溝16
374	64	62	瓦器	椀	中世	10.6 —	3.5	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-3	281	第1面	溝16
375	64	62	瓦器	椀	中世	14.1 4.4	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	281	第1面	溝16
376	64	62	瓦器	椀	中世	13.6 5.4	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	281	第1面	溝16
377	64	62	瓦器	椀	中世	13.8 4.6	4.6	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	281	第1面	溝16
378	64	—	瓦器	椀	中世	13.8 4.5	5.0	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	281	第1面	溝16
379	64	62	土師器	皿	中世	8.1 —	1.1	[外]淡橙5YR8/4 [内]灰白10YR8/1 淡橙5YR8/4	20-1-3	282	第1面	溝16
380	64	—	土師器	皿	中世	8.3 —	1.5	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	282	第1面	溝16
381	64	62	土師器	皿	中世	8.5 —	1.6	[外]灰白5Y8/2 [内]灰白5Y8/2	20-1-3	282	第1面	溝16
382	64	62	土師器	皿	中世	13.7 —	2.7	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	282	第1面	溝16

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
383	64	62	土師器	皿	中世	12.8 —	2.2	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	282	第1面	溝16
384	64	62	瓦器	椀	中世	13.6 —	4.8	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	282	第1面	溝16
385	64	62	瓦器	椀	中世	12.5 4.7	4.4	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	282	第1面	溝16
386	64	62	瓦器	椀	中世	12.6 4.4	4.2	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	282	第1面	溝16
387	64	63	土師器	皿	中世	12.6 —	2.3	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	283	第1面	溝16
388	64	63	土師器	皿	中世	12.7 —	2.6	[外]灰白10YR8/1 灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	283	第1面	溝16
389	64	63	瓦器	椀	中世	14.0 4.7	4.6	[外]灰N6/0 [内]灰N4/0	20-1-3	283	第1面	溝16
390	64	62	瓦質土器	羽釜	中世	28.8 —	(23.0)	[外]黒N2/0 灰白2.5Y7/1 [内]灰N5/0	20-1-3	280	第1面	溝16
391	65	63	土師器	皿	中世	7.9 —	1.0	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	261	第1面	溝16
392	65	—	土師器	皿	中世	8.1 —	1.3	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2 浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
393	65	63	土師器	皿	中世	8.6 —	1.3	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	261	第1面	溝16
394	65	63	土師器	皿	中世	8.3 —	1.4	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	261	第1面	溝16
395	65	—	土師器	皿	中世	8.0 —	1.5	[外]灰白10YR8/2 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
396	65	63	土師器	皿	中世	8.4 —	1.3	[外]灰白7.5YR8/2 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
397	65	63	土師器	皿	中世	7.9 —	1.5	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	261	第1面	溝16
398	65	63	土師器	皿	中世	8.3 —	1.6	[外]にぶい橙7.5YR7/3 灰黄褐10YR6/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2 にぶい橙5YR7/4	20-1-3	261	第1面	溝16
399	65	63	土師器	皿	中世	8.2 —	1.3	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
400	65	—	土師器	皿	中世	8.0 —	1.5	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	261	第1面	溝16
401	65	63	土師器	皿	中世	8.5 —	1.1	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
402	65	63	土師器 (灯明皿)	皿	中世	8.8 —	1.2	[外]灰白10YR8/1 [内]灰白10YR8/1	20-1-3	247	第1面	溝16
403	65	—	土師器	皿	中世	8.8 —	1.4	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
404	65	63	土師器 (灯明皿)	皿	中世	9.0 —	1.3	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]橙2.5YR7/6	20-1-3	261	第1面	溝16
405	65	63	土師器	皿	中世	8.4 —	1.5	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
406	65	63	土師器	皿	中世	9.0 —	1.5	[外]灰白7.5YR8/2 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
407	65	63	土師器	皿	中世	9.8 —	1.2	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/1	20-1-3	261	第1面	溝16
408	65	63	土師器	皿	中世	7.7 —	1.7	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	261	第1面	溝16
409	65	63	土師器	皿	中世	9.2 —	1.4	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい橙5YR6/4	20-1-3	333	第1面	溝16
410	65	64	土師器	皿	中世	11.3 —	2.2	[外]浅黄橙10YR8/4 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
411	65	64	土師器	皿	中世	12.6 —	2.8	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
412	65	64	土師器 (灯明皿)	皿	中世	12.8 —	2.3	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]淡橙5YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
413	65	64	土師器	皿	中世	12.7 —	2.6	[外]浅黄橙7.5YR8/6 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	261	第1面	溝16
414	65	64	土師器	皿	中世	13.3 —	2.5	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	261	第1面	溝16
415	65	65	土師器	皿	中世	(15.2) —	(1.7)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-3	253	第1面	溝16
416	65	65	土師器	皿	中世	(16.2) —	(2.0)	[外]灰黄褐10YR5/2 [内]灰黄褐10YR6/2	20-1-3	247	第1面	溝16
417	65	65	土師器	脚付皿	中世	— —	3.1	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	255	第1面	溝16
418	65	65	土師器	脚付皿	中世	— —	3.8	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-3	255	第1面	溝16
419	65	65	瓦器	輪花椀	中世	(11.0) —	3.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	232	第1面	溝16
420	65	65	瓦器	輪花椀	中世	(11.8) —	(3.6)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	254	第1面	溝16
421	65	65	瓦器	輪花椀	中世	10.4 —	3.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	246	第1面	溝16
422	65	65	瓦器	輪花椀	中世	(11.1) —	(3.3)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	333	第1面	溝16
423	65	64	瓦器	皿	中世	8.8 —	2.4	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	261	第1面	溝16
424	65	64	瓦器	皿	中世	9.3 —	1.5	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	261	第1面	溝16

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
425	65	65	瓦器	皿	中世	(7.2) —	(0.7)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	254	第1面	溝16
426	65	65	瓦器	椀	中世	(8.8) (4.0)	2.8	[外]灰N4/0 灰白N8/0 [内]灰N4/0 灰白N7/0	20-1-3	254	第1面	溝16
427	65	64	瓦器	椀	中世	10.6 4.3	3.5	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	261	第1面	溝16
428	65	64	瓦器	椀	中世	14.0 5.3	4.4	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-3	261	第1面	溝16
429	65	64	瓦器	椀	中世	13.8 5.1	4.5	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	261	第1面	溝16
430	65	64	瓦器	椀	中世	13.4 5.2	4.6	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	261	第1面	溝16
431	65	64	瓦器	椀	中世	13.8 4.7	4.5	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	261	第1面	溝16
432	65	64	瓦器	椀	中世	13.6 4.6	4.6	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0 灰白N8/0	20-1-3	261	第1面	溝16
433	65	64	瓦器	椀	中世	13.6 5.1	4.7	[外]灰N5/0 灰白N7/0 [内]灰N4/0	20-1-3	261	第1面	溝16
434	65	64	瓦器	椀	中世	13.9 5.0	5.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	261	第1面	溝16
435	65	65	白磁	四耳壺	中世	— 8.7	(9.8)	[外]灰白2.5GY8/1 [内]灰白2.5GY8/1	20-1-3	250	第1面	溝16
436	65	65	陶器	四耳壺	中世	(10.3) —	(5.1)	[外]灰5Y6/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-3	255	第1面	溝16
437	66	56	瓦質土器	鍋	中世	(19.2) —	(6.5)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-3	236	第1面	溝16
438	66	—	瓦質土器	盤	中世	(41.8) —	(9.2)	[外]黒褐2.5Y3/1 [内]黄灰2.5Y4/1	20-1-3	250	第1面	溝16
439	66	—	瓦質土器	鍋	中世	(28.8) —	(6.0)	[外]灰N4/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	250	第1面	溝16
440	66	—	瓦質土器	羽釜	中世	(20.4) —	(9.7)	[外]灰N5/0 [内]灰N4/0	20-1-3	250	第1面	溝16
441	66	—	瓦質土器	羽釜	中世	(23.6) —	(14.7)	[外]灰N4/0 灰N5/0 灰N6/0 暗灰N3/0 [内]灰N6/0	20-1-3	250	第1面	溝16
442	66	—	土師器	羽釜	中世	(30.6) —	10.0	[外]にぶい椀7.5YR7/3 [内]浅黄椀10YR8/3	20-1-3	250	第1面	溝16
443	66	56	瓦質土器	盤 (底部)	中世	長(15.4) 幅(20.2)	厚1.1	[外]黒10YR2/1 [内]灰黄褐10YR5/2	20-1-3	250	第1面	溝16
444	66	56	石製品	石鍋		— 幅(6.0)	高(4.4)	重59.5g 石材:滑石	20-1-3	255	第1面	溝16
445	66	56	石製品	石鍋		— 幅(5.8)	高(6.2)	重81.3g 石材:滑石	20-1-3	236	第1面	溝16
446	66	56	石製品	石鍋		— 幅(9.7)	高(9.5)	重308.9g 石材:滑石	20-1-3	255	第1面	溝16
447	66	56	石製品	石鍋		(18.6) —	(7.5)	重192.4g 石材:滑石	20-1-3	236	第1面	溝16
448	66	56	石製品	石鍋		(20.3) —	(8.6)	重417.7g 石材:滑石	20-1-3	236	第1面	溝16
449	66	56	須恵器	甕	中世	(26.4) —	(3.0)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	20-1-3	255	第1面	溝16
450	66	56	須恵器	甕	中世	(28.0) —	(6.7)	[外]暗灰N3/0 [内]浅黄椀7.5YR8/3 にぶい椀7.5YR6/3	20-1-3	236	第1面	溝16
451	66	56	須恵器	甕	中世	(27.6) —	(6.3)	[外]黒2.5Y2/1 [内]灰褐7.5YR5/2	20-1-3	255	第1面	溝16
452	66	65	須恵器	捏鉢	中世	(33.0) —	(10.0)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-3	236	第1面	溝16
453	66	64	須恵器	捏鉢	中世	29.5 —	10.7	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-3	236	第1面	溝16
454	68	52	土師器	甕	古代	(22.0) —	(9.9)	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	20-1-3	454	第1面	溝18
455	68	52	土師器	鍋 <small>し</small> は <small>は</small> 甕 (把手)	古代	長3.5 幅7.3	—	[外]浅黄椀10YR8/3 [内]浅黄椀10YR8/3	20-1-3	259	第1面	溝17
456	68	52	土師器	鍋 <small>し</small> は <small>は</small> 甕 (把手)	古代	長(2.9) 幅(4.3)	—	[外]灰白10YR8/2	20-1-3	458	第1面	溝17
457	68	52	土師器	鍋 <small>し</small> は <small>は</small> 甕 (把手)	古代	長(3.2) 幅(4.3)	—	[外]浅黄椀10YR8/3	20-1-3	458	第1面	溝17
458	68	52	土師器	鍋 <small>し</small> は <small>は</small> 甕 (把手)	古代	長4.6 幅3.8	—	[外]灰黄2.5Y7/2	20-1-3	458	第1面	溝17
459	68	52	磨製石器	石斧 <small>し</small> は 石杵		長(10.9) 幅6.5	厚(5.3)	重509.2g 石材:砂岩	20-1-3	260	第1面	溝18
460	71	52	須恵器	环	古代	(13.0) —	(3.2)	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白7.5Y8/1	20-1-3	372	第1面	土坑27
461	71	52	土師器	甕	古代	(26.4) —	(11.4)	[外]にぶい黄椀10YR7/3 [内]にぶい椀7.5YR7/4	20-1-3	372	第1面	土坑27
462	71	52	石製品	砥石		長(5.3) 幅2.4	厚2.0	重34.1g 石材:流紋岩	20-1-3	372	第1面	土坑27
463	71	—	土師器	皿	中世	7.9 —	1.4	[外]浅黄椀7.5YR8/4 [内]浅黄椀7.5YR8/4	20-1-3	263	第1面	土坑28
464	71	52	瓦器	皿	中世	(6.4) —	(0.7)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	263	第1面	土坑28
465	71	52	瓦器	輪花椀	中世	(7.4) —	(2.7)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-3	263	第1面	土坑28
466	71	52	須恵器	捏鉢	中世	— 8.8	(3.6)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-3	266	第1面	土坑29

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
467	71	52	土師器	皿	中世	(10.2) —	(2.1)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	20-1-3	268	第1面	ピット30
468	71	52	須恵器	壺	古代	(9.6) —	(1.0)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-3	326	第1面	ピット31
469	71	52	土製品	支脚		長(5.3) 幅(3.4)	厚(2.0)	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR7/3	20-1-3	327	第1面	土坑30
470	71	52	白磁	碗	中世	(15.4) —	(4.1)	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	20-1-3	336	第1面	ピット32
471	71	53	土師器	台付皿 (高台)	中世	— 7.0	(3.7)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	20-1-3	455	第1面	ピット33
473	76	—	縄文土器	深鉢	縄文	長(4.4) 幅(2.9)	—	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]褐灰10YR4/1	20-1-3	216	第1面	方形周溝 墓3
474	76	91	磨製石器	石庖丁	弥生	長(2.8) 幅(4.6)	厚0.4	重6.8g 石材:粘板岩	20-1-3	216	第1面	方形周溝 墓3
475	76	51	弥生土器	壺 (底部)	弥生	— (6.4)	(3.2)	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄褐10YR5/3	20-1-3	257	第1面	方形周溝 墓5
476	76	51	弥生土器	甕	弥生	(21.6) —	(3.2)	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/4	20-1-3	257	第1面	方形周溝 墓5
477	76	51	土師器	高坏	古墳	(15.2) —	(5.0)	[外]橙5Y6/6 [内]橙5Y6/6	20-1-3	257	第1面	方形周溝 墓5
478	77	66	須恵器	蓋	古代	— (9.8)	3.0	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白5Y8/1	20-1-3	226	第3a層	
479	77	53	須恵器	蓋	古代	(15.6) —	(3.3)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-3	214	第3a層	
480	77	66	須恵器	坏	古代	(12.4) —	(3.9)	[外]灰白5Y7/1 黄灰2.5Y6/1 [内]灰白5Y7/1	20-1-3	214	第3a層	
481	77	66	須恵器	坏蓋	古代	(13.4) —	4.0	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-3	228	第3a層	
482	77	66	土師器	坏	古代	(15.1) —	(3.3)	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6	20-1-3	208	第3a層	
483	77	66	土師器	鍋 <small>し(は)</small> 蓋 (把手)	古代	長(4.2) 幅(6.3)	—	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄2.5Y7/3	20-1-3	212	第3a層	
484	77	66	土師器	鍋	古代	胴部最大 径(36.0)	(11.2)	[外]橙5YR7/6 [内]にぶい橙7.5YR7/3	20-1-3	214	第3a層	
485	77	53	土師器	皿	中世	8.4 —	1.3	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-3	228	第3a層	
486	77	66	白磁	四耳壺	中世	胴部最大 径22.2	上(13.1) 下(6.8)	[外]灰白10Y8/1 [内]灰白10Y8/1	20-1-3	223	第2層～第3a層	
487	77	66	石製品	砥石		長(6.3) 幅(5.3)	厚2.7	重94.3g 石材:流紋岩	20-1-3	234	第3a層	
488	77	66	石製品	ヘラ状 石製品		長14.3 幅3.5	1.5	重111.9g 石材:頁岩	20-1-3	224	第2層～第3a層	
489	77	66	弥生土器	壺	弥生	(15.8) —	(4.1)	[外]灰白10Y8/2 [内]灰白10Y8/2	20-1-3	235	第3a層	
490	77	66	弥生土器	壺	弥生	(15.6) —	(8.0)	[外]灰褐7.5YR5/2 [内]にぶい赤褐5YR5/4	20-1-3	235	第3a層	
491	77	66	弥生土器	壺	弥生	(18.3) —	(4.3)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	20-1-3	235	第3a層	
492	77	66	弥生土器	壺 <small>し(は)</small> 蓋 (底部)	弥生	— (6.8)	(6.1)	[外]にぶい褐7.5YR6/3 [内]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-3	235	第3a層	
493	77	—	弥生土器	壺 <small>し(は)</small> 蓋 (底部)	弥生	— (7.0)	(7.0)	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4	20-1-3	235	第3a層	
494	77	—	弥生土器	壺 (底部)	弥生	— (9.2)	(8.2)	[外]橙5YR6/6 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-3	228	第3a層	
495	84	67	須恵器	坏	古代	(13.6) 8.6	4.1	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	269	第1面	溝22
496	84	67	須恵器	坏	古代	(15.6) (10.3)	(6.0)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	269	第1面	溝22
497	84	67	須恵器	鉢	古代	(16.8) —	(11.8)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	269	第1面	溝22
498	84	67	須恵器	坏身	古代	(10.8) —	(5.2)	[外]灰白10YR8/2 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	269	第1面	溝22
499	84	67	土師器	皿	古代	(22.0) —	(3.0)	[外]明赤褐5YR5/6 [内]明赤褐5YR5/6	19-1-7	269	第1面	溝22
500	84	68	土師器	碗	古代	(11.2) —	(2.6)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	441	第1面	ピット34
501	84	67	土師器	皿	中世	8.6 —	1.25	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	267	第1面	溝23
502	84	68	土師器	皿	中世	(13.0) —	(1.8)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	267	第1面	溝23
503	84	67	瓦器	碗	中世	13.9 5.1	5.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	267	第1面	溝23
504	84	68	瓦器	碗	中世	(13.2) 4.7	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	267	第1面	溝23
505	84	68	土師器	皿	中世	(8.2) —	(1.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-7	266	第1面	溝24
506	84	68	土師器	皿	中世	(9.3) —	(1.3)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-7	266	第1面	溝24
507	84	67	瓦器	碗	中世	15.2 5.7	5.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	406	第1面	溝24
508	84	67	土師器	甕	古墳	(18.6) —	(6.2)	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6	19-1-7	344	第1面	土坑31
509	84	68	土師器	甕	古代	(22.5) —	(8.5)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/2	19-1-7	312	第1面	ピット35

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
510	85	68	土師器	皿	中世	(6.6) —	(1.0)	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6	19-1-7	225	第1層～第2層	
511	85	67	土師器	皿	中世	7.8 —	1.7	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-7	237	第2層～第3a層	
512	85	68	土師器	皿	中世	(9.2) —	1.5	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	237	第2層～第3a層	
513	85	68	土師器	皿	中世	(11.8) —	2.2	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	237	第2層～第3a層	
514	85	67	土師器	皿	中世	12.5 —	2.2	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	235	第2層～第3a層	
515	85	67	瓦器	椀	中世	11.5 3.5	3.4	[外]灰N5/0 [内]灰N4/0	19-1-7	237	第2層～第3a層	
516	85	68	瓦器	椀	中世	(12.6) (4.3)	4.3	[外]灰N5/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	237	第2層～第3a層	
517	85	68	瓦器	椀	中世	(13.9) (5.0)	4.5	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	229	第2層～第3a層	
518	85	68	瓦器	椀	中世	(14.8) (4.2)	(5.5)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	232	第2層～第3a層	
519	85	68	須恵器	甕	中世	(21.8) —	(6.5)	[外]灰N5/0 [内]灰N6/0	19-1-7	232	第2層～第3a層	
520	85	68	白磁	皿	中世	— (5.6)	(2.3)	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白7.5Y8/1	19-1-7	237	第2層～第3a層	
521	85	68	石製品	石鍋	中世	幅(6.8) —	高(5.5)	重81.5g 石材:滑石	19-1-7	231	第1層～第2層	
522	85	67	土師器	製塩土器	古墳	3.1 —	(4.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-7	233	第2層～第3a層	
523	85	68	須恵器	坏蓋	古墳	(12.6) —	(4.4)	[外]灰N5/0 [内]灰N4/0	19-1-7	237	第2層～第3a層	
524	85	68	須恵器	坏蓋	古墳	(12.2) —	(4.4)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	237	第2層～第3a層	
525	85	68	須恵器	坏身	古墳	(11.8) —	(4.9)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	237	第2層～第3a層	
526	85	68	石製品	敲石もしくは磨石		長(9.2) 幅5.1	厚3.6	重217.2g 石材:砂岩	19-1-7	235	第2層～第3a層	
527	88	87	木製品	斎串	古代	長18.0 幅2.3	厚0.2	—	19-1-7	543	第1面	井戸5
528	88	87	木製品	斎串	古代	長(16.8) 幅2.0	厚0.1	—	19-1-7	543	第1面	井戸5
529	88	87	木製品	斎串	古代	長(11.6) 幅3.0	厚0.15	—	19-1-7	543	第1面	井戸5
530	88	87	木製品	横櫛	古代	長(1.9) 幅(4.0)	厚0.8	—	19-1-7	543	第1面	井戸5
531	88	69	須恵器	蓋	古代	つまみ (2.7)	(1.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	473	第1面	井戸5
532	88	69	須恵器	坏	古代	15.4 10.8	5.2	[外]灰5Y5/1 [内]灰5Y5/1	19-1-7	574	第1面	井戸5
533	88	69	須恵器	坏	古代	(11.6) —	(3.3)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	541	第1面	井戸5
534	88	69	須恵器	坏	古代	— (8.7)	(1.8)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	507	第1面	井戸5
535	88	69	須恵器	坏	古代	— (9.4)	(2.2)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	507	第1面	井戸5
536	88	69	須恵器	坏	古代	— 12.2	(4.7)	[外]黄灰2.5Y6/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	507	第1面	井戸5
537	88	69	須恵器	甕	古代	(20.2) —	(4.3)	[外]灰N3/0 [内]灰N3/0	19-1-7	541	第1面	井戸5
538	88	69	須恵器	壺	古代	4.1 3.8	10.1	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	536	第1面	井戸5
539	88	69	須恵器	壺	古代	5.8 6.0	15.1	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-7	538	第1面	井戸5
540	88	70	須恵器	壺	古代	— 8.3	(16.1)	[外]黄灰2.5Y6/1 [内]黄灰2.5Y5/1	19-1-7	536	第1面	井戸5
541	88	69	土師器	皿もしくは椀	古代	(14.0) —	(3.0)	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]にぶい橙7.5YR7/3	19-1-7	535	第1面	井戸5
542	89	70	瓦	丸瓦	古代	長(9.7) 幅(10.2)	—	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	473	第1面	井戸5
543	89	70	瓦	丸瓦	古代	長(8.1) 幅(9.5)	厚2.2	[外]灰白N7/0 [内]灰N6/0	19-1-7	473	第1面	井戸5
544	89	70	瓦	平瓦	古代	長(10.2) 幅(11.8)	厚2.1	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-7	507	第1面	井戸5
545	89	70	瓦	平瓦	古代	長(10.8) 幅(9.3)	厚2.3	[外]灰白7.5YR7/1 [内]灰白7.5Y7/1	19-1-7	507	第1面	井戸5
546	89	70	瓦	平瓦	古代	長(5.2) 幅(6.8)	厚1.9	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	507	第1面	井戸5
547	89	70	瓦	平瓦	古代	長(11.5) 幅(7.5)	厚2.3	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-7	539	第1面	井戸5
548	89	70	瓦	平瓦	古代	長(7.4) 幅(6.1)	厚2.1	[外]にぶい赤褐5YR5/3 [内]橙5YR6/6	19-1-7	507	第1面	井戸5
549	89	70	瓦	平瓦	古代	長(12.2) 幅(12.3)	厚2.1	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	19-1-7	507	第1面	井戸5
550	89	70	瓦	平瓦	古代	長(9.7) 幅(10.7)	厚2.2	[外]灰5Y7/1 [内]灰5Y7/1	19-1-7	507	第1面	井戸5
551	89	70	瓦	平瓦	古代	長(6.6) 幅(12.3)	厚2.2	[外]黄灰2.5Y5/1 [内]にぶい褐7.5YR5/3	19-1-7	507	第1面	井戸5

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
552	89	70	瓦	平瓦	古代	長(4.9) 幅(6.2)	厚2.2	[外]黒褐5YR2/1 [内]黒褐5YR2/1	19-1-7	508	第1面	井戸5
553	89	69	石製品	ヘラ状 石製品		長18.0 幅5.8	厚2.5	重267.4g 石材:頁岩	19-1-7	539	第1面	井戸5
554	90	93	井戸枠	縦板	古代	長(177.5) 幅55.0	厚4.2	—	19-1-7	570	第1面	井戸5
555	90	93	井戸枠	縦板	古代	長(178.8) 幅26.9	厚6.5	—	19-1-7	569	第1面	井戸5
556	90	93	井戸枠	縦板	古代	長(184.3) 幅26.7	厚6.7	—	19-1-7	567	第1面	井戸5
557	90	94	井戸枠	縦板	古代	長(171.9) 幅22.4	厚3.8	—	19-1-7	565	第1面	井戸5
558	91	93	井戸枠	縦板	古代	長(198.5) 幅31.0	厚6.2	—	19-1-7	564	第1面	井戸5
559	91	94	井戸枠	縦板	古代	長(177.9) 幅30.6	厚4.1	—	19-1-7	563	第1面	井戸5
560	91	94	井戸枠	縦板	古代	長(174.0) 幅30.1	厚3.9	—	19-1-7	568	第1面	井戸5
561	91	94	井戸枠	縦板	古代	長(173.1) 幅43.0	厚3.5	—	19-1-7	550	第1面	井戸5
562	92	93	井戸枠	縦板	古代	長(191.3) 幅29.3	厚5.1	—	19-1-7	549	第1面	井戸5
563	92	94	井戸枠	縦板	古代	長(167.1) 幅30.7	厚4.2	—	19-1-7	566	第1面	井戸5
564	92	94	井戸枠	縦板	古代	長(167.0) 幅23.4	厚3.2	—	19-1-7	551	第1面	井戸5
565	92	94	井戸枠	縦板	古代	長(181.2) 幅11.9	厚3.5	—	19-1-7	571	第1面	井戸5
566	92	94	井戸枠	隙間材	古代	長(160.0) 幅13.3	厚3.9	—	19-1-7	572	第1面	井戸5
567	93	94	井戸枠	隙間材	古代	長(100.7) 幅13.3	厚1.3	—	19-1-7	554	第1面	井戸5
568	93	94	井戸枠	隙間材	古代	長(97.5) 幅12.4	厚1.5	—	19-1-7	553	第1面	井戸5
569	93	93	井戸枠	横棧	古代	長82.6 幅12.8	厚8.4	—	19-1-7	555	第1面	井戸5
570	93	93	井戸枠	横棧	古代	長82.5 幅13.6	厚7.0	—	19-1-7	556	第1面	井戸5
571	93	93	井戸枠	横棧	古代	長84.0 幅13.6	厚9.0	—	19-1-7	560	第1面	井戸5
572	93	93	井戸枠	横棧	古代	長83.6 幅15.1	厚9.1	—	19-1-7	561	第1面	井戸5
573	93	93	井戸枠	横棧	古代	長(79.2) 幅11.3	厚7.7	—	19-1-7	557	第1面	井戸5
574	93	93	井戸枠	横棧	古代	長(86.9) 幅12.0	厚7.5	—	19-1-7	558	第1面	井戸5
575	93	93	井戸枠	横棧	古代	長86.0 幅14.0	厚10.1	—	19-1-7	559	第1面	井戸5
576	93	93	井戸枠	横棧	古代	長84.1 幅10.4	厚12.5	—	19-1-7	562	第1面	井戸5
577	96	71	須恵器	蓋	古代	(13.0) —	(1.8)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	261	第1面	建物7
578	96	71	須恵器	蓋	古代	(12.8) —	(2.7)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	259	第1面	建物7
579	96	71	須恵器	瓶 (口縁)	古代	(10.4) —	(2.9)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	510	第1面	建物7
580	96	71	須恵器	坏	古代	(12.6) (8.2)	(2.9)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	514	第1面	建物7
581	96	71	須恵器	坏	古代	(12.0) —	(3.7)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	262	第1面	建物7
582	96	71	須恵器	坏	古代	(15.6) —	(3.6)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	327	第1面	建物7
583	96	71	須恵器	坏 (高台)	古代	— (9.4)	(2.2)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	611	第1面	建物7
584	96	71	須恵器	坏 (高台)	古代	— (11.8)	(2.4)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	515	第1面	建物7
585	96	71	須恵器	坏	古代	(14.3) —	(2.5)	[外]灰N6/0 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	259	第1面	建物7
586	96	71	須恵器	壺 (高台)	古代	— (11.0)	(4.3)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	517	第1面	建物7
587	96	71	須恵器	甕	古代	(17.4) —	(4.3)	[外]紫黒5P2/1 [内]紫黒5P2/1	19-1-7	261	第1面	建物7
588	96	71	須恵器	甕	古代	(23.4) —	(4.7)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	261	第1面	建物7
589	96	71	土師器	椀	古代	(8.2) —	(3.1)	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/8	19-1-7	259	第1面	建物7
590	96	71	土師器	甕	古代	(11.4) —	(3.8)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-7	259	第1面	建物7
591	96	71	土師器	甕	古代	(25.6) —	(5.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-7	259	第1面	建物7
592	96	69	土師器	皿	中世	(11.0) —	(2.0)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	262	第1面	建物7
593	96	71	瓦質土器	鍋	中世	(26.0) —	(9.3)	[外]黄灰2.5Y4/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-7	261	第1面	建物7

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	下:底径					
594	96	71	須恵器	捏鉢	中世	(20.5) —	(7.0)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	509	第1面	建物7
595	96	71	須恵器	鉢	中世	(22.4) —	(4.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	261	第1面	建物7
596	96	71	須恵器	捏鉢	中世	(28.7) —	(8.6)	[外]黄灰2.5Y6/1 [内]灰N6/0	19-1-7	261	第1面	建物7
597	96	71	石製品	石鍋	中世	— 幅(8.1)	高(2.4)	重72.4g 石材:滑石	19-1-7	261	第1面	建物7
598	96	71	瓦	丸瓦	古代	長(5.7) 幅(6.8)	厚1.7	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	261	第1面	建物7
599	96	71	瓦	平瓦	古代	長(10.0) 幅(5.8)	厚2.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	261	第1面	建物7
600	96	71	瓦	平瓦	古代	長(8.6) 幅(12.5)	厚1.7	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	260	第1面	建物7
601	96	71	瓦	平瓦	古代	長(15.1) 幅(17.6)	厚2.2	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	261	第1面	建物7
602	96	71	瓦	平瓦	古代	長(12.1) 幅(8.8)	厚2.0	[外]灰N6/0 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	260	第1面	建物7
603	98	69	土師器	皿	古代	(8.5) 3.8	1.6	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-7	239	第2層~第3a層	
604	98	69	土師器	椀	古代	— 7.5	(2.5)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]灰N4/0	19-1-7	238	第2層~第3a層	
605	98	70	弥生土器	甕 <small>（底部）</small>	弥生	— (5.1)	(7.2)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]にぶい黄橙10YR7/4	19-1-7	239	第2層~第3a層	
606	98	91	石製品	剥片		長2.3 幅3.4	厚0.5	重1.7g 石材:サヌカイト	19-1-7	239	第2層~第3a層	
607	101	70	須恵器	壺	古代	9.0 17.3	14.8	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	531	第1面	井戸6
608	101	72	土師器	甕	古代	(14.2) —	(4.1)	[外]にぶい褐7.5YR5/3 [内]にぶい褐7.5YR5/3	19-1-7	532	第1面	井戸6
609	101	72	土師器	甕	古代	(27.6) —	(5.3)	[外]灰褐7.5YR4/2 [内]灰褐7.5YR4/2	19-1-7	532	第1面	井戸6
610	101	72	土師器	鍋 <small>（把手）</small>	古代	長3.4 幅7.5	—	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	530	第1面	井戸6
611	101	95	井戸枠	井筒	古代	長(106.5) 幅73.5	—	—	19-1-7	548	第1面	井戸6
612	103	73	土師器	皿	中世	8.3 —	1.2	[外]灰白2.5Y8/1 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	534	第1面	井戸9
613	103	73	土師器	皿 <small>（灯明皿）</small>	中世	8.8 —	1.3	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]にぶい橙5YR7/4	19-1-7	534	第1面	井戸9
614	103	72	土師器	皿	中世	(9.7) —	(1.0)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	542	第1面	井戸9
615	103	72	土師器	皿	中世	(8.0) —	(1.5)	[外]灰白10YR7/1 [内]灰白10YR7/1	19-1-7	472	第1面	井戸9
616	103	73	土師器	皿	中世	9.5 —	1.7	[外]にぶい橙5YR7/3 [内]にぶい橙5YR7/3	19-1-7	472	第1面	井戸9
617	103	72	土師器	皿	中世	9.0 —	(1.2)	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6	19-1-7	255	第1面	井戸9
618	103	72	土師器	皿	中世	(12.0) —	2.3	[外]黄灰2.5Y7/2 [内]黄灰2.5Y7/2	19-1-7	534	第1面	井戸9
619	103	72	土師器	皿	中世	(12.7) —	2.6	[外]黄灰2.5Y7/2 [内]黄灰2.5Y7/2	19-1-7	534	第1面	井戸9
620	103	72	土師器	台付皿 <small>（高台）</small>	中世	— (6.4)	(3.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-7	472	第1面	井戸9
621	103	73	須恵器	小形环	中世	6.6 3.4	2.8	[外]灰褐7.5YR4/2 [内]灰褐7.5YR4/2	19-1-7	534	第1面	井戸9
622	103	72	瓦器	椀	中世	(15.2) (6.2)	5.1	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-7	472	第1面	井戸9
623	103	73	瓦器	椀	中世	(15.0) 5.3	5.3	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	472	第1面	井戸9
624	103	72	瓦質土器	盤	中世	— (2.9)	(7.9)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]黄灰2.5Y4/1	19-1-7	472	第1面	井戸9
625	103	72	瓦質土器	盤	中世	(45.6) —	(7.9)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	19-1-7	534	第1面	井戸9
626	103	72	瓦質土器	盤	中世	(46.4) —	(4.8)	[外]黄灰2.5Y4/1 [内]黄灰2.5Y4/1	19-1-7	472	第1面	井戸9
627	103	72	須恵器	捏鉢	中世	— (10.8)	(3.2)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
628	103	72	白磁	碗	中世	— (6.4)	(3.2)	[外]灰白5GY8/1 [内]灰白10Y7/1	19-1-7	472	第1面	井戸9
629	103	—	土製品	土錘		長(5.8) 幅(3.1)	—	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	19-1-7	542	第1面	井戸9
630	103	72	土師器	鍋 <small>（把手）</small>	古代	長(4.6) 幅(4.4)	—	[外]にぶい黄橙10YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	255	第1面	井戸9
631	103	72	須恵器	环身	古墳	(14.2) —	(2.9)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
632	103	70	須恵器	高坏 <small>（脚部）</small>	古墳	— (9.1)	(5.2)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-7	255	第1面	井戸9
633	103	73	瓦	軒平瓦	古代	長(10.6) 幅(8.1)	厚3.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
634	103	72	瓦	平瓦	古代	長(13.8) 幅(7.6)	厚1.8	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
635	103	72	瓦	平瓦	古代	長(14.8) 幅(8.0)	厚2.6	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	19-1-7	255	第1面	井戸9

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
636	103	72	瓦	平瓦	古代	長(8.5) 幅(7.7)	厚2.4	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
637	103	72	瓦	平瓦	古代	長(17.5) 幅(8.6)	厚2.5	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	255	第1面	井戸9
638	103	72	瓦	平瓦	古代	長(17.0) 幅(16.0)	厚2.5	[外]褐灰10YR6/1 [内]灰白10YR7/1	19-1-7	472	第1面	井戸9
639	104	95	井戸枠	舟材	中世	長(200.4) 幅94.5	—	—	19-1-7	546	第1面	井戸9
640	104	95	井戸枠	舟材	中世	長(159.8) 幅(94.8)	—	—	19-1-7	545	第1面	井戸9
641	104	96	井戸枠	隙間材	中世	長(178.5) 幅12.9	厚2.5	—	19-1-7	552	第1面	井戸9
642	104	95	井戸枠	押え材	中世	長(94.6) 幅26.3	厚3.3	—	19-1-7	576	第1面	井戸9
643	106	72	土師器	羽釜	中世	(18.7) —	(7.7)	[外]黒褐2.5Y3/1 [内]褐灰10YR4/1	19-1-7	529	第1面	井戸10
644	106	72	土師器	壺か	古墳	頸部内径 10.0	(4.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]灰白10YR8/1	19-1-7	526	第1面	井戸10
645	108	73	土師器	皿	中世	7.3 —	0.8	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]にぶい橙5YR7/4	20-1-5	492	第1面	方形土坑
646	108	73	土師器	皿	中世	7.6 —	1.0	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2	19-1-7	463	第1面	方形土坑
647	108	73	土師器	皿	中世	(7.7) —	(1.1)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-7	257	第1面	方形土坑
648	108	73	土師器	皿	中世	(8.4) —	1.8	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	257	第1面	方形土坑
649	108	73	土師器	皿	中世	9.2 —	1.7	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	257	第1面	方形土坑
650	108	73	土師器	皿	中世	(12.5) —	2.3	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	257	第1面	方形土坑
651	108	73	土師器	皿	中世	12.7 —	2.5	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]にぶい橙5YR7/4	20-1-5	492	第1面	方形土坑
652	108	73	土師器	椀	古代か	(13.9) —	(3.8)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]灰白7.5YR8/2	20-1-5	492	第1面	方形土坑
653	108	73	須恵器	壺	古代	— (4.1)	(2.1)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-7	463	第1面	方形土坑
654	108	73	土師器か	盤	古代か	(56.0) —	(3.8)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	257	第1面	方形土坑
655	108	73	須恵器	甕	古代	19.3 —	(4.7)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	257	第1面	方形土坑
656	108	73	須恵器	坏蓋	古墳	(13.1) —	(4.0)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-5	492	第1面	方形土坑
657	108	73	須恵器	坏身	古墳	(10.3) —	(3.8)	[外]灰N5/0 [内]灰N6/0	19-1-7	257	第1面	方形土坑
658	109	73	土師器	皿	中世	8.7 —	1.5	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-7	330	第1面	溝33
659	109	73	土師器	皿	中世	9.3 —	1.7	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-7	330	第1面	溝33
660	109	74	土師器	皿	中世	8.9 —	1.2	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	330	第1面	溝33
661	109	74	土師器	皿	中世	(18.0) —	(2.1)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	330	第1面	溝33
662	109	74	瓦器	皿	中世	9.3 —	1.8	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
663	109	74	瓦器	皿	中世	9.8 —	2.4	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	331	第1面	溝33
664	109	74	瓦器	椀	中世	13.5 5.1	4.3	[外]灰N5/0 灰白5YR8/2 [内]灰N5/0 灰白5YR8/2	19-1-7	331	第1面	溝33
665	109	74	瓦器	椀	中世	11.9 4.4	3.6	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
666	109	74	瓦器	椀	中世	15.1 5.0	5.7	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
667	109	74	瓦器	椀	中世	(15.8) (5.8)	5.8	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
668	109	74	瓦器	椀	中世	(14.4) (5.0)	5.4	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
669	109	74	瓦器	椀	中世	(14.6) (5.4)	4.8	[外]灰N5/0 [内]灰N4/0	19-1-7	331	第1面	溝33
670	109	74	瓦器	椀	中世	15.4 5.8	5.4	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
671	109	74	瓦器	椀	中世	14.3 5.4	5.2	[外]灰N6/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
672	109	74	瓦器	椀	中世	(14.9) 4.8	(5.4)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
673	109	75	瓦器	椀	中世	(13.8) 5.4	5.75	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
674	109	75	瓦器	椀	中世	14.6 5.7	5.3	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
675	109	75	瓦器	椀	中世	14.2 —	5.3	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	331	第1面	溝33
676	109	75	瓦器	椀	中世	14.7 5.5	5.3	[外]灰白10Y8/1 [内]灰白10Y8/1	19-1-7	331	第1面	溝33
677	109	74	白磁	皿	中世	(9.8) —	(2.5)	[外](釉)灰白5GY8/1(素地)灰白N7/0 [内]灰白5GY8/1	19-1-7	330	第1面	溝33

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	器高					
678	109	74	白磁	水注	中世	— (6.6)	(7.4)	[外]灰白2.5GY8/1 [内]灰白5Y8/1	19-1-7	330	第1面	溝33
680	114	87	漆器	椀	中世	—	(1.3)	—	20-1-5	491	第1面	溝27
681	114	77	土師器	皿	中世	(14.8) —	(2.7)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-4	502	第1面	溝27
682	114	77	瓦器	椀	中世	(11.6) —	(3.9)	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-4	502	第1面	溝27
683	114	77	灰釉陶器	椀	中世	— (7.0)	(2.5)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-4	502	第1面	溝27
684	114	77	白磁	碗	中世	— 5.8	(4.1)	[外]灰白5Y7/1 [内]灰白2.5GY8/1	20-1-4	502	第1面	溝27
685	114	77	石製品	砥石		長(17.3) 幅(15.0)	厚6.0	重1483.7g 石材:凝灰岩か	20-1-5	490	第1面	溝28
686	114	77	石製品	ヘラ状 石製品		長(19.4) 幅6.0	厚2.2	重411.8g 石材:結晶片岩	20-1-5	490	第1面	溝28
687	114	77	土師器	皿	中世	(8.6) —	(1.8)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2	19-1-7	256	第1面	溝29
688	114	77	土師器	皿	中世	(9.2) —	(1.4)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2	19-1-7	258	第1面	溝29
689	114	77	土師器	皿	中世	(13.4) —	(2.7)	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-7	256	第1面	溝29
690	114	77	土師器	皿	中世	(17.3) —	(2.1)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	256	第1面	溝29
691	114	75	瓦器	椀	中世	14.2 5.8	5.1	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-7	464	第1面	溝29
692	114	77	白磁	碗	中世	— 5.7	(2.5)	[外]灰白10Y8/1 [内](釉)明緑灰7.5GYR8/1 (素地)灰白5Y7/2	19-1-7	256	第1面	溝29
693	114	77	白磁	碗	中世	— (6.3)	(1.9)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白5Y8/1	19-1-7	258	第1面	溝29
694	114	77	須恵器	坏身	古墳	(13.4) —	(3.1)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	263	第1面	溝29
695	114	76	須恵器	坏身	古墳	10.5 —	5.0	[外]灰5Y6/1 [内]灰5Y6/1	19-1-7	256	第1面	溝29
696	114	77	須恵器	甕	古墳	(26.1) —	(4.8)	[外]灰N4/0 [内]灰白N7/0	19-1-7	258	第1面	溝29
697	114	77	弥生土器	甕	弥生	(12.5) —	(7.1)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-7	258	第1面	溝29
698	114	91	石製品	剥片		6.5 7.9	1.6	重118.4g 石材:サヌカイト	19-1-7	256	第1面	溝29
699	115	75	土師器	皿	中世	(7.9) —	1.15	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-4	511	第1面	溝31
700	115	75	土師器	皿	中世	(8.9) —	1.1	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-4	511	第1面	溝31
701	115	76	土師器	皿	中世	9.3 —	1.6	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-4	511	第1面	溝31
702	115	76	瓦器	椀	中世	14.8 5.6	5.3	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	20-1-4	511	第1面	溝31
703	115	76	瓦器	椀	中世	14.5 5.4	5.7	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	20-1-4	511	第1面	溝31
704	115	76	土師器	椀	古墳か	(9.4) —	5.0	[外]橙2.5YR6/6 [内]赤橙10R6/6	19-1-7	406	第1面	溝30
705	115	75	土師器	高坏	古墳	(14.2) —	(4.4)	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4	19-1-7	405	第1面	溝35
706	115	76	土師器	高坏 (脚部)	古墳	— 9.0	(7.6)	[外]橙5YR6/6 [内]橙5YR6/6	19-1-7	406	第1面	溝30
707	115	75	弥生土器	壺 (底部)	弥生	— (4.2)	(2.9)	[外]黒7.5YR2/1 [内]黒7.5YR2/1	19-1-7	406	第1面	溝30
708	115	76	弥生土器	鉢 <small>(は)</small> 甕 (底部)	弥生	— (3.4)	(7.5)	[外]橙5YR7/8 [内]明褐灰7.5YR7/2	19-1-7	409	第1面	溝31
709	115	75	土師器	甕	古代か	(18.2) —	(4.3)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	410	第1面	溝32
710	115	75	土師器	皿	中世	(9.2) —	(1.3)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]灰白10YR8/2	19-1-7	359	第1面	ビット37
711	115	75	須恵器	椀	中世	— (4.6)	(2.5)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	19-1-7	487	第1面	ビット36
712	115	—	瓦器	椀	中世	(11.0) —	(4.0)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	362	第1面	ビット38
713	115	76	瓦器	椀	中世	13.0 —	(4.6)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-7	413	第1面	土器3
714	115	75	土師器	高坏	古墳	(12.9) —	(6.0)	[外]橙5YR7/6 [内]浅黄橙10YR8/4	19-1-7	394	第1面	溝34
715	115	75	土師器	高坏	古墳	13.3 —	(7.3)	[外]橙5YR6/8 [内]橙5YR6/6	19-1-7	394	第1面	溝34
716	115	77	須恵器	有蓋高坏 蓋	古墳	12.6 —	5.4	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	466	第1面	土器2
717	115	77	須恵器	坏身	古墳	10.5 —	4.3	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-7	466	第1面	土器2
718	115	76	須恵器	坏身	古墳	10.6 —	4.8	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-7	467	第1面	土器1
719	115	76	土師器	高坏	古墳	(13.3) —	(5.0)	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6	19-1-7	467	第1面	土器1
720	116	78	土師器	皿	中世	7.7 —	1.1	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-7	245	第2層~第3a層	

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)	法量 (cm)	色調	調査名・ トレンチ	登録 番号	遺構面・ 層名	遺構名	
						上:口径 下:底径	器高						
721	116	78	土師器	皿	中世	8.0 —	1.4	[外]浅黄橙10YR8/4 [内]浅黄橙10YR8/4	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4	19-1-7	245	第2層～第3a層	
722	116	78	土師器	皿	中世	8.1 —	1.4	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3		19-1-7	249	第2層～第3a層	
723	116	78	土師器	皿	中世	11.8 —	2.1	[外]にぶい橙7.5YR6/4 [内]にぶい橙7.5YR6/4		19-1-7	250	第2層～第3a層	
724	116	78	土師器	皿	中世	12.3 —	2.1	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4		19-1-7	249	第2層～第3a層	
725	116	78	土師器	皿	中世	11.6 —	2.6	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3		19-1-7	250	第2層～第3a層	
726	116	78	瓦器	皿	中世	(9.1～9.7) —	2.2	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0		19-1-7	254	第2層～第3a層	
727	116	78	瓦器	輪花椀	中世	(11.0) (6.6)	(3.4)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0		19-1-7	234	第1層～第2層	
728	116	78	瓦器	椀	中世	(12.6) (4.4)	4.7	[外]灰N4/0 [内]灰N6/0		19-1-7	245	第2層～第3a層	
729	116	78	瓦器	椀	中世	12.7 4.3	4.5	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0		19-1-7	245	第2層～第3a層	
730	116	79	瓦器	椀	中世	(14.6) 5.2	5.6	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0		19-1-7	253	第2層～第3a層	
731	116	79	瓦質土器	羽釜	中世	(17.2) —	(14.4)	[外]灰N4/0 [内]灰白2.5Y7/1		19-1-7	248	第2層～第3a層	
732	116	79	須恵器	甕	中世	(37.6) —	(7.2)	[外]灰白N7/0 [内]灰白7.5Y7/1		19-1-7	292	第2層～第3a層	
733	116	78	須恵器	甕	中世	(16.3) —	(3.9)	[外]灰N5/0 [内]灰N6/0		19-1-7	243	第2層～第3a層	
734	116	79	石製品	石鍋	中世	— 幅(5.9)	(6.5)	重93.4g 石材:滑石		19-1-7	249	第2層～第3a層	
735	116	78	白磁	四耳壺	中世	(10.8) —	(3.1)	[外]灰白5Y7/2 [内]灰白5Y7/2		19-1-7	244	第2層～第3a層	
736	116	78	白磁	碗	中世	— (7.1)	(3.5)	[外]灰白5Y7/2 灰白2.5Y8/1 [内]灰白5Y7/2		19-1-7	242	第1層～第2層	
737	116	79	白磁	碗	中世	(16.0) —	(4.6)	[外]灰白5Y7/2 [内]灰白5Y7/2		19-1-7	460	第2層～第3a層	
738	116	78	灰釉陶器	皿	中世	(13.0) —	(2.4)	[外](釉)オリープ灰10Y6/2 (素地)灰白2.5Y7/1 [内]灰5Y6/1 明オリープ灰5GY7/1		19-1-7	242	第1層～第2層	
739	116	79	陶器	壺	中世	— (8.4)	(7.0)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y7/1		19-1-7	292	第2層～第3a層	
740	116	78	須恵器	鍋鉢(は 甕 把手)	古代	長(2.4) 幅(3.8)	—	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0		19-1-7	246	第2層～第3a層	
741	116	79	土師器	鍋鉢(は 甕 把手)	古代	長(4.2) 幅(3.9)	—	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4		19-1-7	251	第2層～第3a層	
742	116	79	土師器	鍋鉢(は 甕 把手)	古代	長6.3 幅3.6	—	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3		19-1-7	461	第2層～第3a層	
743	116	79	須恵器	壺	古代	— (4.0)	(2.4)	[外]灰白N7/0 [内]灰N6/0		19-1-7	291	第2層～第3a層	
744	116	77	須恵器	高坏 (脚部)	古墳	— (8.2)	(4.9)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0		19-1-7	227	第1層～第2層	
745	116	79	須恵器	鉢	古代か	(20.7) —	(2.6)	[外]灰5Y6/1 [内]灰白5Y7/1		19-1-7	461	第2層～第3a層	
746	116	79	瓦	軒平瓦	古代	長(6.6) 幅(9.4)	厚3.3	[外]灰N6/0 [内]灰N5/0		19-1-7	292	第2層～第3a層	
747	116	78	須恵器	有蓋高坏 蓋	古墳	(11.4) —	(4.0)	[外]灰7.5Y4/1 灰白2.5Y7/1 [内]灰N6/0		19-1-7	242	第1層～第2層	
748	116	79	須恵器	坏身	古墳	(11.0) —	(4.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N5/0		19-1-7	292	第2層～第3a層	
749	116	78	須恵器	有蓋高坏	古墳	(11.7) —	(4.6)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0		19-1-7	227	第1層～第2層	
750	116	78	土師器	高坏	古墳	(13.6) —	(5.2)	[外]橙5YR7/8 [内]橙5YR7/6		19-1-7	242	第1層～第2層	
751	116	79	土師器	高坏	古墳	13.7 —	(8.4)	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙5YR7/6		19-1-7	292	第2層～第3a層	
752	116	79	土師器	高坏	古墳	— —	(3.8)	[外]浅黄橙7.5YR8/6 [内]浅黄橙7.5YR8/4		19-1-7	459	第2層～第3a層	
753	116	79	土師器	椀	古墳	11.9 —	(5.2)	[外]橙5YR7/8 [内]橙5YR7/8		19-1-7	460	第2層～第3a層	
754	116	78	土製品	土錘		長3.8 幅1.0	—	[外]にぶい赤褐5YR5/4 [内]にぶい赤褐5YR5/4		19-1-7	245	第2層～第3a層	
755	116	78	土製品	土錘		長3.0 幅1.1	—	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2		19-1-7	242	第1層～第2層	
756	116	78	石製品	砥石		長2.9 幅3.4	厚1.4	重16.1g 石材:流紋岩		19-1-7	241	第1層～第2層	
757	120	80	土師器	皿	中世	(7.4) —	(0.95)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2		19-1-5	221	第1面	井戸11
758	120	82	土師器	皿	中世	8.6 —	(1.4)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4		19-1-5	206	第1面	井戸11
759	120	80	土師器	皿	中世	(9.0) —	(1.2)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2		19-1-5	221	第1面	井戸11
760	120	80	瓦器	椀	中世	(13.0) (3.8)	(4.7)	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0		19-1-5	206	第1面	井戸11
761	120	80	瓦質土器	羽釜	中世	(21.2) —	(2.6)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0		19-1-5	221	第1面	井戸11
762	120	80	土師器	羽釜	中世	(27.8) —	(7.3)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2		19-1-5	221	第1面	井戸11

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
763	120	80	土師器	羽釜	中世	(42.4) —	(4.8)	[外]にぶい褐7.5YR5/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-5	206	第1面	井戸11
764	120	80	瓦質土器	羽釜(足)	中世	長(22.3) 幅2.5	厚2.3	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-5	221	第1面	井戸11
765	120	80	瓦質土器	羽釜(足)	中世	長(21.6) 幅2.5	厚2.2	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	19-1-5	206	第1面	井戸11
766	120	80	瓦質土器	盤	中世	(44.4) —	(5.3)	[外]黄灰2.5Y4/1 [内]灰N4/0	19-1-5	206	第1面	井戸11
767	120	80	瓦質土器	盤	中世	(48.6) —	(5.0)	[外]黄灰2.5Y5/1 [内]黄灰2.5Y5/1	19-1-5	221	第1面	井戸11
768	120	80	瓦	平瓦	古代	長(5.4) 幅(10.9)	厚2.7	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	19-1-5	221	第1面	井戸11
769	120	80	木製品	浮子か		長(4.4) 幅(4.0)	厚(2.2)	—	19-1-5	221	第1面	井戸11
770	122	80	土師器	皿	中世	(15.2) —	(3.5)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-5	200	第1面	溝36
771	122	80	瓦器	椀	中世	(13.0) (4.0)	(4.4)	[外]暗灰N3/0 [内]灰N4/0	19-1-5	208	第1面	溝36
772	122	80	瓦器	椀	中世	(13.2) (5.3)	(4.5)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-5	200	第1面	溝36
773	122	80	瓦質土器	羽釜	中世	(21.6) —	26.0	[外]灰N4/0 [内]灰白N7/0	19-1-5	200	第2層～第3a層	溝36
774	122	80	瓦質土器	羽釜	中世	(17.6) —	(21.1)	[外]黒褐2.5Y3/1 [内]黒褐2.5Y3/1	19-1-5	200	第2層～第3a層	溝36
775	122	80	土師器	羽釜	中世	(31.6) —	(21.8)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-5	200	第2層～第3a層	溝36
776	122	80	白磁	碗	中世	(5.6) —	(2.7)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-5	200	第2層～第3a層	溝36
777	124	81	須恵器	鉢	古代	(18.8) —	(2.6)	[外]灰N5/0 [内]灰白N7/0	19-1-5	212	第1面	溝37
778	124	81	須恵器	壺(高台)	古代	— (8.0)	(4.3)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-5	212	第1面	溝37
779	124	82	土師器	高杯(脚部)	古代	—	(10.2)	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	19-1-5	212	第1面	溝37
780	124	81	石製品	ヘラ状石製品		長15.6 幅4.7	厚2.1	重266.2g 石材:頁岩	19-1-5	212	第1面	溝37
781	126	81	土師器	皿	中世	(6.8) —	(1.0)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/2	19-1-5	199	第2層	土器集中1
782	126	81	土師器	皿	中世	(7.5) —	(0.8)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-5	199	第2層	土器集中1
783	126	81	土師器	皿(灯明皿)	中世	(8.0) —	(0.8)	[外]灰白10YR8/1 [内]灰白10YR8/1	19-1-5	199	第2層	土器集中1
784	126	81	土師器	皿	中世	(9.0) —	(1.4)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-5	199	第2層	土器集中1
785	126	81	土師器	皿	中世	(10.0) —	(1.7)	[外]灰白10YR8/1 [内]灰白10YR8/1	19-1-5	199	第2層	土器集中1
786	126	81	土師器	皿	中世	11.3 —	1.9	[外]浅黄橙7.5YR8/4 [内]浅黄橙7.5YR8/4	19-1-5	199	第2層	土器集中1
787	126	81	土師器	皿	中世	11.6 —	2.1	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]にぶい橙7.5YR7/4	19-1-5	199	第2層	土器集中1
788	126	82	瓦器	椀	中世	(10.4) (4.1)	3.0	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-5	199	第2層	土器集中1
789	126	81	瓦器	椀	中世	(12.8) —	(3.6)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-5	199	第2層	土器集中1
790	128	81	土師器	皿	中世	(9.2) —	1.7	[外]にぶい橙5YR7/4 [内]にぶい橙5YR7/4	19-1-5	196	第2層	
791	128	81	瓦器	椀	中世	(11.8) (4.2)	(3.5)	[外]明褐灰5YR7/2 [内]灰白5YR8/2	19-1-5	196	第2層	
792	128	81	灰釉陶器	椀	古代	(10.0) —	(2.2)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	19-1-5	196	第2層	
793	128	81	灰釉陶器	椀	古代	7.0 —	(3.1)	[外]黄灰2.5Y7/0 [内]黄灰2.5Y7/0	19-1-5	203	第2層～第3a層	
794	128	81	須恵器	蓋	古代	(15.4) —	(2.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-5	201	第2層～第3a層	
795	128	81	須恵器	甕	古代	(25.0) —	(10.8)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-5	195	第2層	
796	128	81	土師器	高杯(脚部)	古墳	—	(5.0)	[外]明赤褐5YR5/6 [内]明赤褐5YR5/6	19-1-5	204	第3a層	
797	128	81	弥生土器	壺(体部)	弥生	—	(6.3)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白10YR8/2	19-1-5	201	第2層～第3a層	
798	128	81	弥生土器	甕(底部)	弥生	— (3.5)	(3.5)	[外]にぶい橙7.5YR7/4 [内]黒10YR2/1	19-1-5	217	第3a層	
799	132	82	瓦器	椀	中世	14.2 4.6	4.5	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N3/0	20-1-4	505	第1面	土坑38
800	132	83	瓦器	椀	中世	(15.2) —	(5.3)	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	20-1-4	507	第1面	土坑40
801	132	82	瓦器	椀	中世	14.2 5.8	4.7	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	20-1-4	510	第1面	土坑43
802	132	83	須恵器	捏鉢	中世	(28.3) —	(5.7)	[外]灰N6/0 灰白N7/0 [内]灰N6/0	20-1-4	546	第1面	土坑44
803	132	83	陶器	山茶碗	中世	(7.6) —	(2.6)	[外]灰白N8/0 [内]灰白N8/0	20-1-4	477	第1面	溝38
805	133	82	土師器	皿	中世	8.0 —	0.9	[外]浅黄橙10YR8/3 [内]浅黄橙10YR8/3	20-1-4	499	第2層～第3a層	
806	133	82	土師器	皿(灯明皿)	中世	12.2 —	2.6	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい橙7.5YR7/4	20-1-4	500	第2層～第3a層	

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量	法量	色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
807	133	83	瓦質土器	羽釜	中世	(18.4) —	28.2	[外]黒N2/0 [内]灰白2.5Y7/1	20-1-4	500	第2層～第3a層	
808	133	83	須恵器	坏身	古墳	(13.7) —	(3.5)	[外]灰白N7/0 [内]灰白N7/0	20-1-4	498	第2層～第3a層	
809	133	83	須恵器	甕	中世	(23.2) —	(5.5)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-4	500	第2層～第3a層	
810	133	83	土師器	高坏	古墳	(13.2) —	(4.8)	[外]にぶい橙7.5YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-4	563	第2層～第3a層	
811	133	83	土師器	高坏	古墳	— —	(5.4)	[外]橙7.5YR7/6 [内]橙7.5YR7/6	20-1-4	563	第2層～第3a層	
812	133	83	弥生土器	壺	弥生	(27.6) —	上(4.4) 下(5.6)	[外]にぶい黄橙10YR7/2 [内]にぶい黄橙10YR7/2	20-1-4	500	第2層～第3a層	
813	133	83	弥生土器	甕 (底部)	弥生	— (8.1)	(3.6)	[外]褐灰10YR4/1 [内]灰白2.5Y8/1	20-1-4	500	第2層～第3a層	
814	133	83	弥生土器	小形壺	弥生	— (1.8)	(4.0)	[外]橙7.5YR6/6 [内]浅黄橙7.5YR8/3	20-1-4	500	第2層～第3a層	
815	137	84	瓦器	椀	中世	(14.8) —	(4.1)	[外]灰N4/0 [内]灰N4/0	19-1-4	68	第2層下面	土坑47
816	137	84	土師器	羽釜	中世	(30.2) —	(6.4)	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-4	66	第2層下面	土坑47
817	137	84	土師器	甕	古代	— —	(4.5)	[外]褐7.5YR6/2 [内]褐灰10YR5/1	19-1-4	58	第2層下面	土坑47
818	137	84	土師器	銅製の甕 (把手)	古代	長3.5 幅3.8	—	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-4	68	第2層下面	土坑47
819	137	84	須恵器	壺	古代	(19.2) —	(11.3)	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	19-1-4	66	第2層下面	土坑47
820	137	84	土製品	土錘	中世	長(8.9) 幅(6.3)	—	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	19-1-4	58	第2層下面	土坑47
821	137	84	土師器	皿	中世	(10.0) —	(2.1)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-4	72	第2層下面	溝39
822	137	82	土師器	皿 (灯明皿)	中世	9.0 —	1.4	[外]灰黄2.5Y7/2 [内]灰黄2.5Y7/2	19-1-4	68	第2層下面	溝39
823	137	84	土師器	皿	中世	(7.6) —	(1.5)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-4	68	第2層下面	溝39
824	137	84	土師器	皿	中世	(10.4) —	(1.4)	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-4	72	第2層下面	溝39
825	137	84	土師器	皿	中世	(9.8) —	(2.0)	[外]灰白2.5Y8/2 [内]黄灰2.5Y6/1	19-1-4	72	第2層下面	溝39
826	137	84	土師器	皿	中世	(11.4) —	(1.8)	[外]灰白2.5Y8/2 [内]灰白2.5Y8/2	19-1-4	72	第2層下面	溝39
827	137	84	土師器	皿	中世	(15.0) —	(4.1)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-4	72	第2層下面	溝39
828	137	84	土師器	台付皿 (灯明皿)	中世	9.0 4.2	3.9	[外]浅黄橙7.5YR8/3 [内]浅黄橙7.5YR8/3	19-1-4	69	第2層下面	溝39
829	137	85	土師器	鍋	中世	(27.2) —	(9.0)	[外]黒N2/0 [内]にぶい黄2.5Y6/3	19-1-4	68	第2層下面	溝39
830	137	84	瓦器	椀	中世	(16.0) —	4.3	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	19-1-4	68	第2層下面	溝39
831	137	84	瓦器	椀	中世	— —	(4.9)	[外]黒N2/0 [内]黒N2/0	19-1-4	69	第2層下面	溝39
832	137	84	瓦器	椀	中世	— (7.2)	(5.4)	[外]灰N4/0 [内]灰N5/0	19-1-4	69	第2層下面	溝39
833	137	84	白磁	碗	中世	— —	(3.1)	[釉]灰白7.5Y7/1 [素地]灰白7.5Y7/1	19-1-4	68	第2層下面	溝39
834	137	85	須恵器	捏鉢	中世	(12.0) —	(5.9)	[外]灰白N7/0 [内]灰N6/0	19-1-4	72	第2層下面	溝39
835	137	85	須恵器	甕	中世	— (19.8)	(4.9)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-4	69	第2層下面	溝39
836	137	85	須恵器	甕	古代か	— —	(10.8)	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白2.5Y7/1	19-1-4	68	第2層下面	溝39
837	137	84	土師器	台付皿 (高台)	中世	(8.2) —	(3.8)	[外]灰白10YR8/2 [内]灰白10YR8/2	19-1-4	36	第2層下面	溝群2
838	138	85	瓦器	小壺	中世	(5.6) —	(3.0)	[外]灰N4/0 [内]灰白5Y8/1	19-1-4	57	第2層	
839	138	85	青磁	碗	中世	— (4.5)	(2.0)	[外]灰オリーブ5Y5/2 [内]灰オリーブ5Y5/2	19-1-4	37	第2層	
840	138	85	陶器	皿	中世	(10.6) —	(1.8)	[外]オリーブ灰2.5GY6/1 [内]オリーブ灰2.5GY6/1	19-1-4	41	第2層	
841	138	85	白磁	碗	中世	(15.6) —	(3.7)	[外](釉)灰白2.5GY8/1(素地)灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5GY8/1	19-1-4	34	第2層	
842	138	85	白磁	碗	中世	— (5.7)	(2.8)	[外]灰白5Y8/1 [内]灰白5Y7/1	19-1-4	39	第2層	
843	138	85	白磁	碗	中世	— (6.3)	(3.6)	[外]灰白7.5Y8/1 [内]灰白5Y7/1	19-1-4	39	第2層	
844	138	85	陶器	天目碗	中世	(11.2) —	(3.3)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]褐7.5YR4/3	19-1-4	40	第2層	
845	138	85	土師器	甕	中世	(27.4) —	(6.1)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白2.5Y8/1	19-1-4	35	第2層	
846	138	85	須恵器	坏	古墳	(14.5) (8.6)	(4.4)	[外]灰N6/0 [内]灰白N7/0	19-1-4	31	第2層～第3a層	
847	138	85	須恵器	坏身	古墳	(10.6) —	(3.7)	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	19-1-4	60	第2層	
848	138	85	弥生土器	壺 (底部)	弥生	— 3.3	(1.5)	[外]橙5YR7/6 [内]橙5YR7/6	19-1-4	54	第2層	
849	138	85	土製品	土錘		長(1.7) 幅(1.6)	—	[外]にぶい黄橙10YR7/3 [内]にぶい黄橙10YR7/3	19-1-4	47	第2層	

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径 下:底径	器高					
850	138	85	土製品	土錘		長(2.2) 幅(1.5)	—	[外]灰褐5YR5/2 [内]灰褐5YR5/2	19-1-4	54	第2層	
851	138	85	土製品	土錘		長(3.5) 幅(1.2)	—	[外]にぶい橙5YR6/4 [内]にぶい橙5YR6/4	19-1-4	41	第2層	
852	138	85	土製品	土錘		長(4.1) 幅(1.3)	—	[外]にぶい赤褐5YR5/3 [内]にぶい赤褐5YR5/3	19-1-4	40	第2層	
853	138	85	石製品	砥石		長(10.0) 幅(6.1)	厚(3.2)	重381.3g 石材:砂岩	19-1-4	40	第2層	
854	141	86	須恵器	坏身	古墳	(10.2)	5.1	[外]灰N5/0 [内]灰N5/0	20-1-6	22	第1面	土坑48
855	141	86	須恵器	坏身	古墳	9.6 —	4.0	[外]暗灰N3/0 [内]暗灰N4/0	20-1-6	22	第1面	土坑48
856	141	86	須恵器	有蓋高坏	古墳	10.2 7.0	6.8	[外]灰N6/0 [内]灰N6/0	20-1-6	22	第1面	土坑48
857	141	86	須恵器	有蓋高坏	古墳	9.6 8.2	—	[外]暗青灰5PB4/1 [内]にぶ赤褐2.5YR5/3	20-1-6	22	第1面	土坑48
858	141	84	瓦器	椀	中世	12.2 4.9	3.9	[外]灰N7/0 [内]暗灰N3/0	20-1-6	17	第1面	土坑50
860	144	91	石製品	剥片		長3.5 幅3.7	厚0.6	重7.0g 石材:サヌカイト	19-1-2	21	第1層	
861	144	91	打製石器	石鏃		長2.1 幅1.8	厚0.3	重0.7g 石材:サヌカイト	19-1-2	24	第1層	
862	144	91	石製品	剥片		長4.0 幅1.7	厚1.3	重8.9g 石材:サヌカイト	19-1-2	18	第1層	
863	144	91	石製品	剥片		長3.3 幅7.5	厚0.8	重23.3g 石材:サヌカイト	19-1-2	13	第1層	
864	144	91	石製品	剥片		長4.5 幅6.7	厚1.1	重37.2g 石材:サヌカイト	19-1-2	18	第1層	
865	144	86	石製品	砥石		長(4.6) 幅(4.5)	厚1.3	重42.7g 石材:流紋岩	19-1-3	80	第2層	
866	144	86	石製品	砥石		長(6.7) 幅(6.2)	厚4.0	重257.5g 石材:流紋岩	19-1-2	17	第1層	
867	144	86	石製品	砥石		長15.7 幅12.5	厚5.4	重1660.8g 石材:玄武岩か	19-1-2	17	第1層	
868	144	86	石製品	砥石		長14.7 幅6.8	厚7.2	重595.6g 石材:玄武岩か	19-1-2	17	第1層	
869	144	86	石製品	石斧 <small>（は）</small> 砥石		長(5.4) 幅6.4	厚(2.5)	重96.6g 石材:花崗岩	19-1-2	20	第1層	
870	144	86	白磁	碗	中世	— (6.8)	(4.6)	[外]灰白2.5Y8/1 [内]灰白7.5Y7/1	19-1-3	80	第2層	
900	—	90	陶器	瓶か	中世	—	—	—	19-1-7	259	第1面	建物7
901	—	90	瓦器	皿	中世	—	—	—	20-1-4	555	第1面	土坑45
902	—	90	緑釉陶器	椀	古代	—	—	—	19-1-4	68	第1面	溝39
903	—	90	白磁	瓶か	中世	—	—	—	19-1-4	68	第1面	溝39
904	—	90	青磁	碗	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
905	—	90	陶器	甕	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
906	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
907	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
908	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
909	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	20-1-3	249	第1面	水溜1
910	—	90	青磁	碗	中世	—	—	—	19-1-7	247	第2層～第3a層	
911	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	19-1-3	80	第2層	
912	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	19-1-3	80	第2層	
913	—	90	青磁	碗	中世	—	—	—	19-1-4	38	第2層	
914	—	90	陶器	卸皿	中世	—	—	—	19-1-4	56	第2層	
915	—	90	白磁	碗	中世	—	—	—	19-1-7	243	第2層～第3a層	
916	—	90	縄文土器	深鉢	縄文	—	—	—	19-1-2	14	第1層	
917	—	90	弥生土器	甕 <small>（は）</small> (体部片)	弥生	—	—	—	19-1-2	11	第1層	
918	—	90	弥生土器	甕 <small>（は）</small> (体部片)	弥生	—	—	—	19-1-2	11	第1層	
919	—	90	弥生土器	甕 <small>（は）</small> (体部片)	弥生	—	—	—	19-1-2	15	第1層	
920	—	90	弥生土器	甕 <small>（は）</small> (体部片)	弥生	—	—	—	19-1-2	15	第1層	
921	—	90	土師器	甕	古墳	—	—	—	19-1-7	229	(西半南側溝)	
922	—	90	焼土			—	—	—	20-1-3	372	第1面	土坑27
923	—	90	須恵器	樽形甕	古墳	—	—	—	19-1-7	241	(東側溝)	
924	—	90	韓式系土器	把手	古墳	—	—	—	20-1-4	504	第1面	溝群1
925	—	90	焼土			—	—	—	20-1-3	463	第1面	井戸4
926	—	92	石材			長(24.5) 幅(10.3)	厚(4.6)	重1714.0g 石材:結晶片岩	20-1-3	440	第1面	石材集積1
927	—	92	石材			長(8.3) 幅(5.0)	厚(4.6)	重555.8g 石材:結晶片岩	20-1-3	458	第1面	溝17
928	—	92	石材			長(16.9) 幅(6.7)	厚(3.8)	重540.0g 石材:結晶片岩	19-1-2	17	第1層	
929	—	92	石材			長(8.6) 幅(4.7)	厚(1.6)	重117.1g 石材:結晶片岩	20-1-5	483	第2層～第3層	
930	—	92	動物遺体	馬歯	中世	—	—	—	19-1-4	53	第1面	土坑47

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量(cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	下:底径					
931	—	92	動物遺体	馬歯	中世	—	—	—	19-1-4	72	第1面	溝39
932	—	92	植物遺体	種子	古代	—	—	—	19-1-7	541	第1面	井戸5
933	—	92	植物遺体	種子	古代	—	—	—	19-1-7	533	第1面	井戸6
934	—	86	石製品	砥石		長(9.6) 幅(5.1)	厚(2.2)	重205.9g 石材:玄武岩か	19-1-7	541	第1面	井戸5
935	—	—	石製品	剥片		長(1.5) 幅(1.9)	厚(0.3)	重0.9g 石材:サヌカイト	20-1-3	354	第1面	建物3-9
936	—	—	植物遺体	種子	古代	—	—	—	20-1-3	462	第1面	井戸4
937	—	—	瓦器	輪花椀	中世	—	—	—	20-1-3	232	第1面	溝16
938	—	—	瓦器	輪花椀	中世	—	—	—	20-1-3	254	第1面	溝16
939	—	—	瓦器	台付坏	中世	—	—	—	20-1-3	232	第1面	溝16
940	—	—	瓦器	皿	中世	—	—	—	20-1-4	502	第1面	溝27
941	—	—	白磁	碗					19-1-4	29	機械掘削	
942	—	—	白磁	碗					19-1-4	35	第2層	
943	—	—	白磁	碗2片					19-1-4	47	第2層	
944	—	—	白磁	碗					19-1-4	56	第2層	
945	—	—	白磁	碗					19-1-4	61	第2層	
946	—	—	白磁	碗					19-1-6	85	機械掘削	
947	—	—	青磁	皿、青磁碗、白磁碗					19-1-6	90	第1層~第3a層	
948	—	—	青磁	碗5片					19-1-6	93	第2層	
949	—	—	白磁	碗					19-1-6	94	第2層	
950	—	—	白磁	碗					19-1-6	96	第3a層	
951	—	—	白磁	碗					19-1-6	101	第2層	
952	—	—	白磁	皿					19-1-7	102	第2層	
953	—	—	白磁	碗					19-1-6	108	第1面	溝11
954	—	—	白磁	碗					19-1-5	193	第2層	
955	—	—	青磁	碗					19-1-5	195	第2層	
956	—	—	青磁	碗、灰釉陶器 椀(高台)					19-1-8	215	第1層~第3a層	
957	—	—	青磁	碗、白磁碗					19-1-8	229	第2層~第3a層	
958	—	—	青磁	皿2片、白磁碗4片					19-1-7	240	第1層~第2a層	
959	—	—	白磁	碗5片、灰釉陶器 椀					19-1-7	241	第1層~第2層	
960	—	—	白磁	碗2片					19-1-7	242	第2層~第3a層	
961	—	—	青磁	碗、白磁皿					19-1-7	243	第2層~第3a層	
962	—	—	白磁	碗					19-1-7	245	第2層~第3a層	
963	—	—	白磁	碗2片、灰釉陶器 壺2片					19-1-7	246	第2層~第3a層	
964	—	—	白磁	皿					19-1-7	248	第3a層	
965	—	—	白磁	碗					19-1-7	249	第3a層	
966	—	—	青磁	碗、白磁碗、白磁壺(486と同一か)					19-1-7	250	第3a層	
967	—	—	白磁	水注(678と同一か)					19-1-7	254	第3a層	
968	—	—	白磁	碗2片、白磁皿					19-1-7	255	第1面	井戸9
969	—	—	白磁	碗					19-1-7	256	第1面	溝29
970	—	—	白磁	碗					19-1-7	258	第1面	溝29
971	—	—	白磁	碗					19-1-7	262	第1面	建物7上層
972	—	—	白磁	碗					19-1-7	292	第3a層	
973	—	—	白磁	碗					19-1-7	332	第1層~第3a層	
974	—	—	青磁	碗					19-1-7	348	第1面	57ビット
975	—	—	白磁	碗					19-1-7	368	第1面	76ビット
976	—	—	白磁	碗					19-1-7	387	第1面	95ビット
977	—	—	白磁	碗					19-1-7	409	第1面	溝31
978	—	—	青磁	碗					19-1-7	414	第3a層	
979	—	—	青磁	碗					19-1-7	444	第1面	148ビット
980	—	—	白磁	碗					19-1-7	534	第1面	井戸9
981	—	—	白磁	碗5片、白磁皿					20-1-6	7	第2層	
982	—	—	青磁	碗、青磁皿					20-1-6	8	第2層	
983	—	—	青磁	碗、白磁碗					20-1-6	9	第1層~第3a層	
984	—	—	青磁	碗、白磁皿					20-1-6	10	第2層	
985	—	—	白磁	碗					20-1-6	14	第2層	
986	—	—	青磁	碗					20-1-2	31	第2層	
987	—	—	青磁	皿					20-1-2	32	第2層	
988	—	—	青磁	碗					20-1-2	40	第2層~第3a層	
989	—	—	青磁	碗					20-1-2	44	第2層~第3a層	
990	—	—	青磁	碗					20-1-2	49	第2層~第3a層	
991	—	—	青磁	碗					20-1-2	52	第2層~第3a層	
992	—	—	青磁						20-1-7	53	第2層	
993	—	—	白磁	碗2片					20-1-2	75	第1面	溝3
994	—	—	青磁	碗					20-1-3	203	第2層~第3a層	
995	—	—	白磁	碗					20-1-3	224	第2層~第3a層	
996	—	—	青磁	碗3片、青磁皿2片					20-1-3	236	第1面	溝16
997	—	—	白磁	碗2片					20-1-3	245	第1面精査中	
998	—	—	青磁	碗、白磁碗2片					20-1-3	250	第1面	溝16
999	—	—	白磁	碗、白磁皿、青白磁 合子蓋					20-1-3	255	第1面	溝16
1000	—	—	白磁	碗					20-1-3	263	第1面	土坑28
1001	—	—	白磁	碗					20-1-3	264	第1面	55土坑

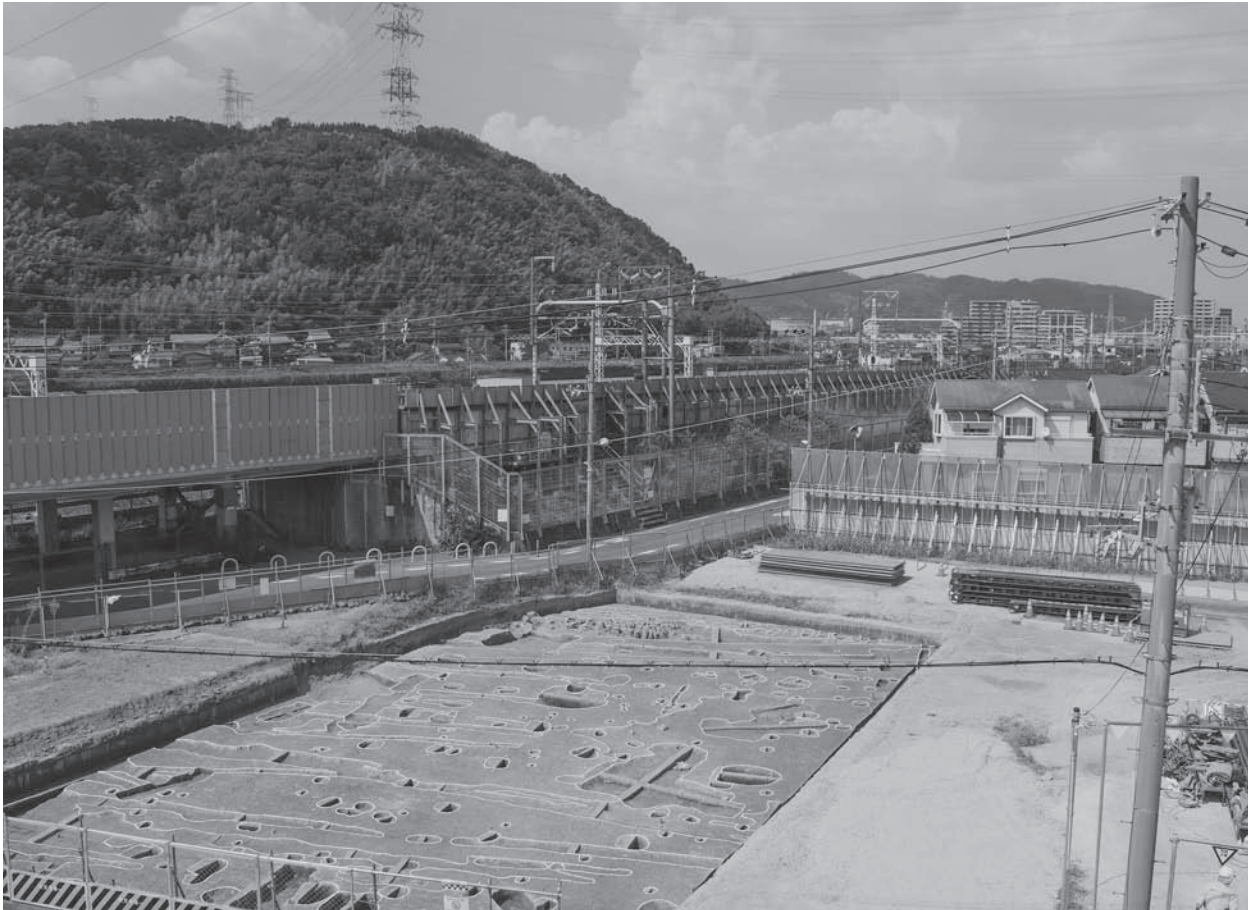
遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 (cm)		色調	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						上:口径	下:底径					
1002	—	—	白磁	碗					20-1-3	275	第1面	溝16
1003	—	—	白磁	碗					20-1-3	297	第1面	79ビット
1004	—	—	青白磁	合子身					20-1-3	388	第1面	136ビット
1005	—	—	青磁	碗					20-1-4	471	第2層～第3a層	
1006	—	—	白磁	皿2片					20-1-4	472	第2層	
1007	—	—	白磁	碗					20-1-4	473	第3a層	
1008	—	—	青磁	碗					20-1-5	482	第1層～第2層	
1009	—	—	白磁	碗2片					20-1-5	483	第2層～第3a層	
1010	—	—	青磁	碗、白磁	碗4片				20-1-5	484	第2層～第3a層	
1011	—	—	白磁	皿					20-1-5	485	第2層～第3a層	
1012	—	—	青磁	碗、白磁	碗、灰釉陶器	椀			20-1-5	488	第2層	
1013	—	—	青磁	碗、白磁	碗4片				20-1-5	490	第1面	溝28
1014	—	—	青磁	碗、白磁	碗2片、白磁	皿			20-1-4	497	第1層～第3a層	
1015	—	—	青磁	碗、白磁	碗				20-1-4	499	第2層～第3a層	
1016	—	—	白磁	碗2片					20-1-4	500	第2層～第3a層	
1017	—	—	白磁	碗2片					20-1-4	502	第1面	溝27
1018	—	—	白磁	碗					20-1-4	504	第1面	溝群1

表3 金属製品一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	器形	時期	法量 ()は残存数値			重量 (g)	調査名・トレンチ	登録番号	遺構面・層名	遺構名
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					
58	19	88	鉄製品	鉄釘		(3.70)	0.85	0.79	6.1	20-1-2	075	第1面	溝3
59	19	88	鉄製品	鉄釘		(4.15)	0.70	0.69	3.9	20-1-2	175	第1面	溝7
60	22	88	青銅製品	鉸具金具	古代	3.33	2.07	0.49	5.0	20-1-2	041	第2層	
61	22	88	鉄製品	鉄鎌		(3.83)	2.33	0.22	4.6	20-1-2	044	第2層～第3a層	
62	22	88	鉄製品	ヤリガンナ		(4.01)	1.28	0.53	5.1	20-1-2	042	第2層～第3a層	
472	71	88	鉄製品	鉄釘		7.08	1.35	0.92	11.5	20-1-3	348	第1面	ビット29
679	109	88	鉄製品	鉄釘	中世	10.97	0.41	0.33	12.1	19-1-7	330	第1面	溝33
804	132	88	鉄製品	鉄鎌		(7.81)	2.43	0.78	31.7	20-1-4	537	第1面	土坑46
859	141	88	鉄製品	鉄鎌		(6.53)	3.02	0.90	39.3	20-1-6	007	第2層	
871	—	88	銅製品	銅銭 「開元通寶」		(2.12)	(2.07)	0.16	1.3	20-1-5	488	第2層	
872	—	88	銅製品	銅銭 「不明」		2.42	(2.40)	0.13	2.3	20-1-2	050	第2層	
873	—	88	銅製品	銅銭 「熙寧元寶」		2.35	2.36	0.09	1.6	20-1-6	003	第2層	
874	—	88	銅製品	銅銭 「紹聖元寶」		2.41	2.41	0.10	2.1	19-1-6	098	第2層	
875	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.14)	1.14	0.56	2.2	19-1-6	101	第2層	
876	—	89	鉄製品	鉄釘		(5.11)	0.99	0.93	12.5	19-1-7	381	第1面	ビット39
877	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.21)	0.76	0.77	4.9	19-1-6	093	第2層	
878	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.16)	0.56	0.50	8.4	19-1-7	386	第1面	土坑32
879	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.94)	0.82	0.70	3.7	20-1-6	008	第2層	
880	—	89	鉄製品	鉄釘		(4.31)	1.04	0.68	6.6	20-1-3	208	第3a層	
881	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.83)	0.58	0.56	6.4	19-1-7	488	第1面	土坑33
882	—	89	鉄製品	鉄釘		(2.52)	0.39	0.38	4.0	19-1-7	397	第1面	ビット40
883	—	89	鉄製品	鉄釘		(6.24)	0.44	0.35	16.3	20-1-3	236	第1面	溝16
884	—	89	鉄製品	鉄釘		(3.37)	0.76	0.43	21.0	20-1-3	250	第1面	溝16
885	—	89	鉄製品	鉄片		(3.49)	(2.85)	0.37	9.6	19-1-6	141	第3a層	
886	—	89	鉄製品	鉄片		(5.76)	(2.96)	0.45	31.7	19-1-7	238	第2層～第3a層	
887	—	89	鉄製品	鉄片		(5.82)	(5.57)	1.09	82.3	20-1-3	233	第3a層	
888	—	89	鉄製品	鉄片		(5.27)	(3.88)	0.67	23.5	19-1-6	109	第1面	溝12
889	—	89	鉄製品	刃先か		(12.12)	3.53	0.40	49.2	20-1-2	027	機械掘削	
890	—	89	鉄製品	鉄片		(11.48)	(5.19)	1.24	436.4	20-1-3	228	第3a層	
891	—	89		滓か		(3.18)	(2.75)	1.10	19.7	19-1-7	265	第1面	溝26
892	—	89		滓		(3.32)	(3.10)	1.34	13.0	19-1-7	263	第1面	溝29
893	—	89		滓		(3.21)	(2.44)	0.88	16.9	20-1-2	153	第1面	溝6
894	—	89		滓		(4.13)	(3.43)	1.56	38.4	20-1-4	502	第1面	溝27
895	—	89		滓		(6.67)	(4.70)	2.21	71.0	20-1-3	259	第1面	溝17
896	—	89		滓		(4.62)	(3.23)	2.31	38.7	20-1-3	249	第1面	水溜1
897	—	89	鉄製品	鉄片		(3.86)	(3.56)	3.02	42.3	19-1-7	254	第2層～第3a層	
898	—	89		滓		(3.61)	(3.59)	2.37	37.2	19-1-7	241	第1層～第2層	
899	—	89		滓		(8.80)	(7.86)	2.93	273.7	19-1-7	232	第2層～第3a層	

写真図版

図版1 調査地の景観

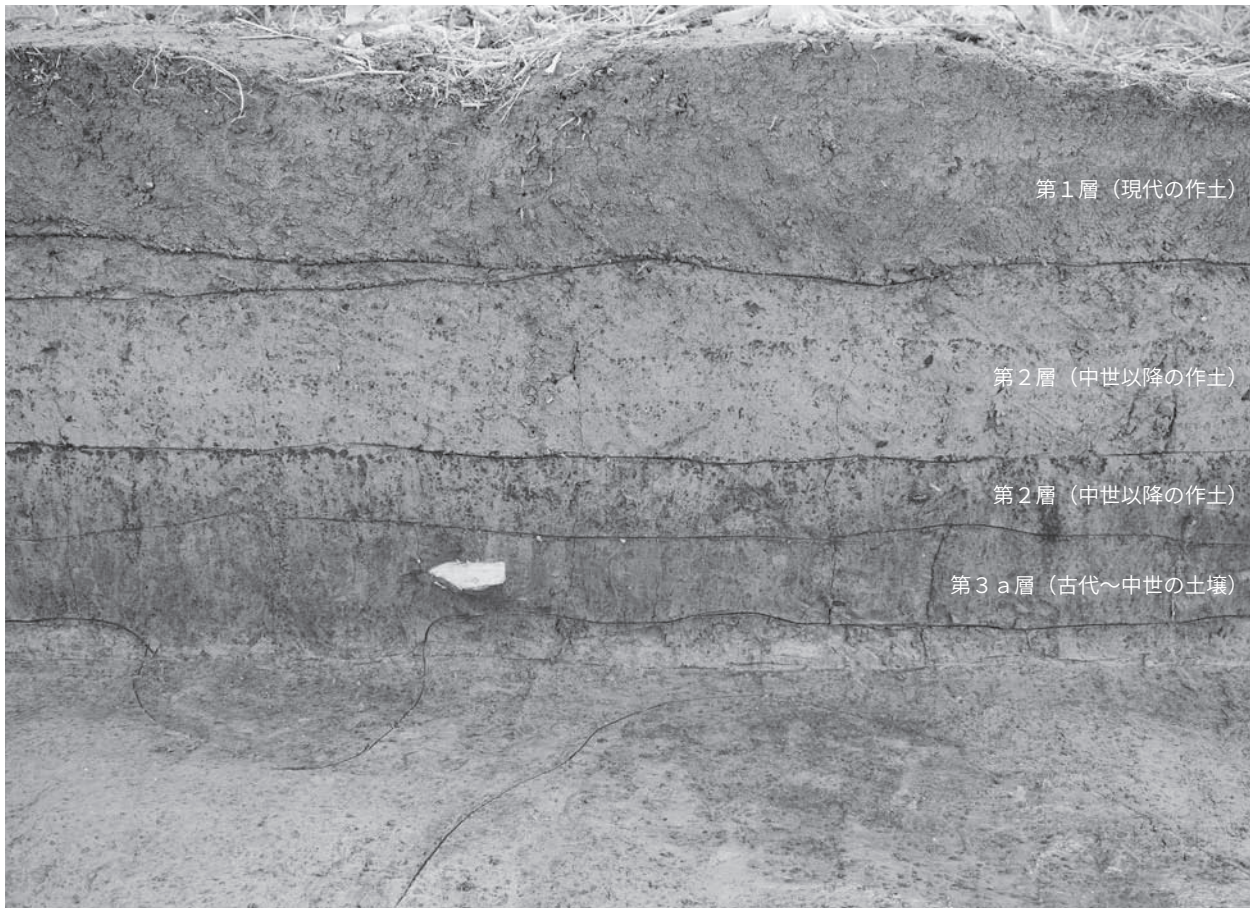


調査地より天王山方向を望む（南から）

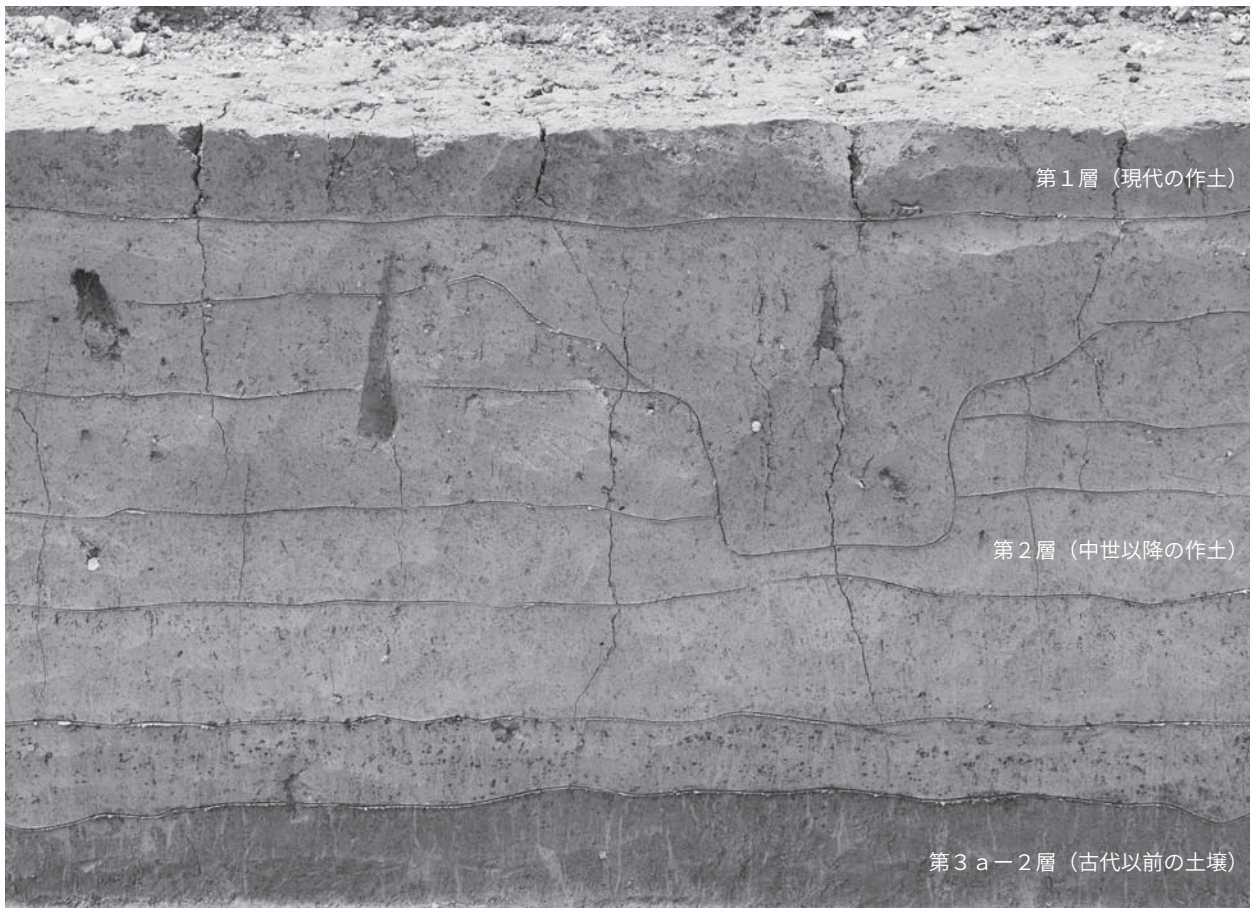


調査地より生駒山地方方向を望む（北西から）

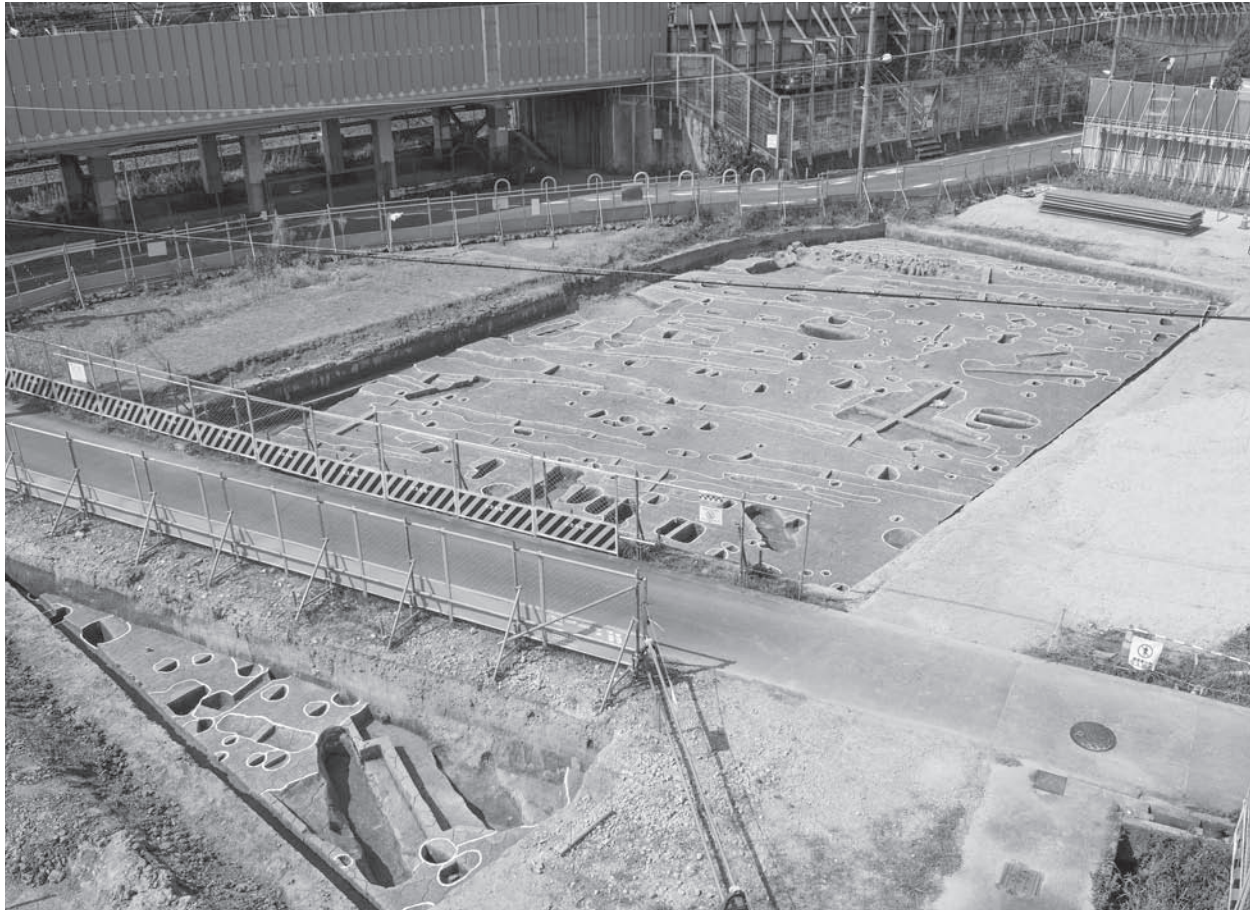
図版2 基本層序



微高地部分の基本層序 (19-1調査 8トレンチ南壁)



低地部分の基本層序 (20-1調査 6トレンチ南壁)



20-1調査 2トレンチ 全景(南から)



20-1調査 2トレンチ 全景(北から)

図版4 微高地域1



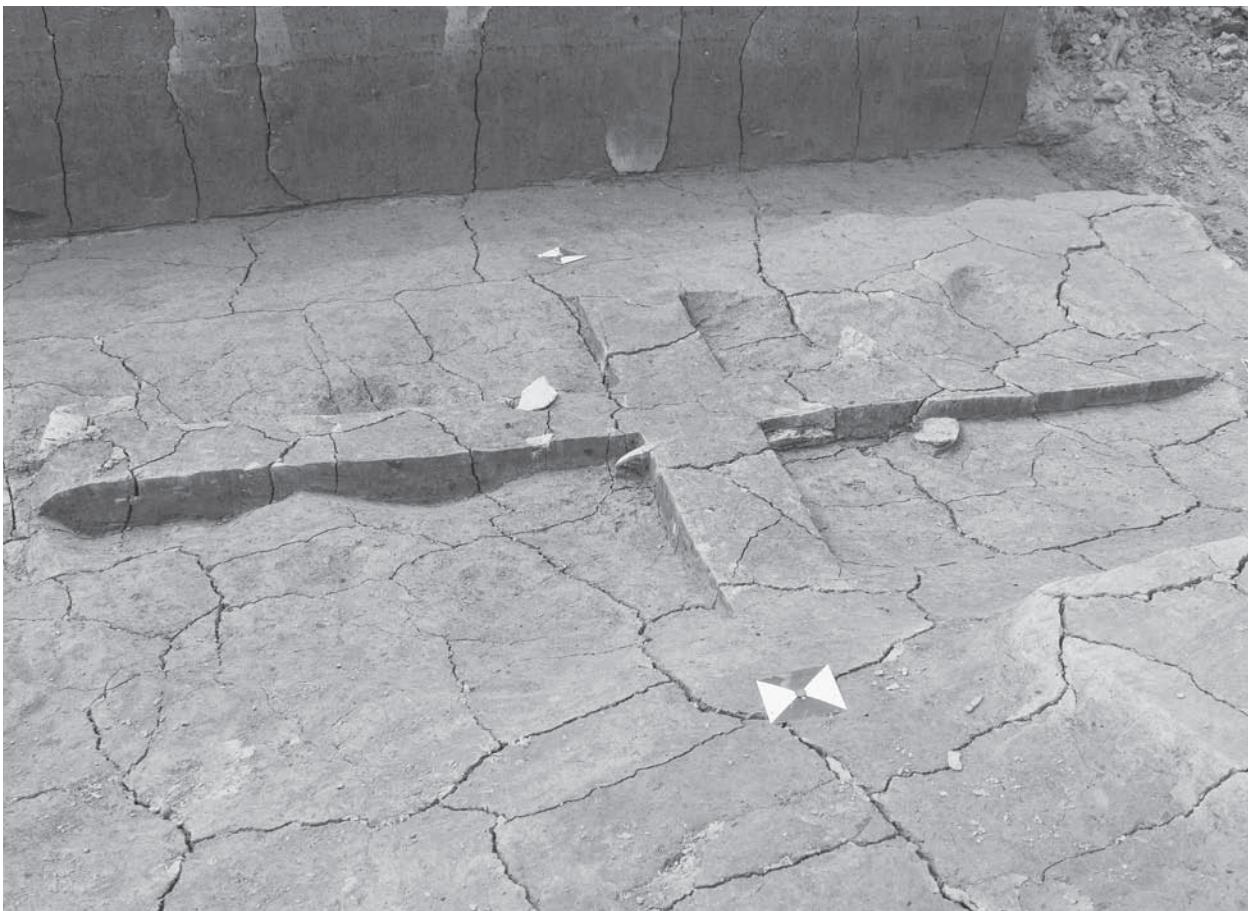
井戸1 (南から)



井戸2 (南から)



土坑2 (南東から)



土坑3 (南東から)

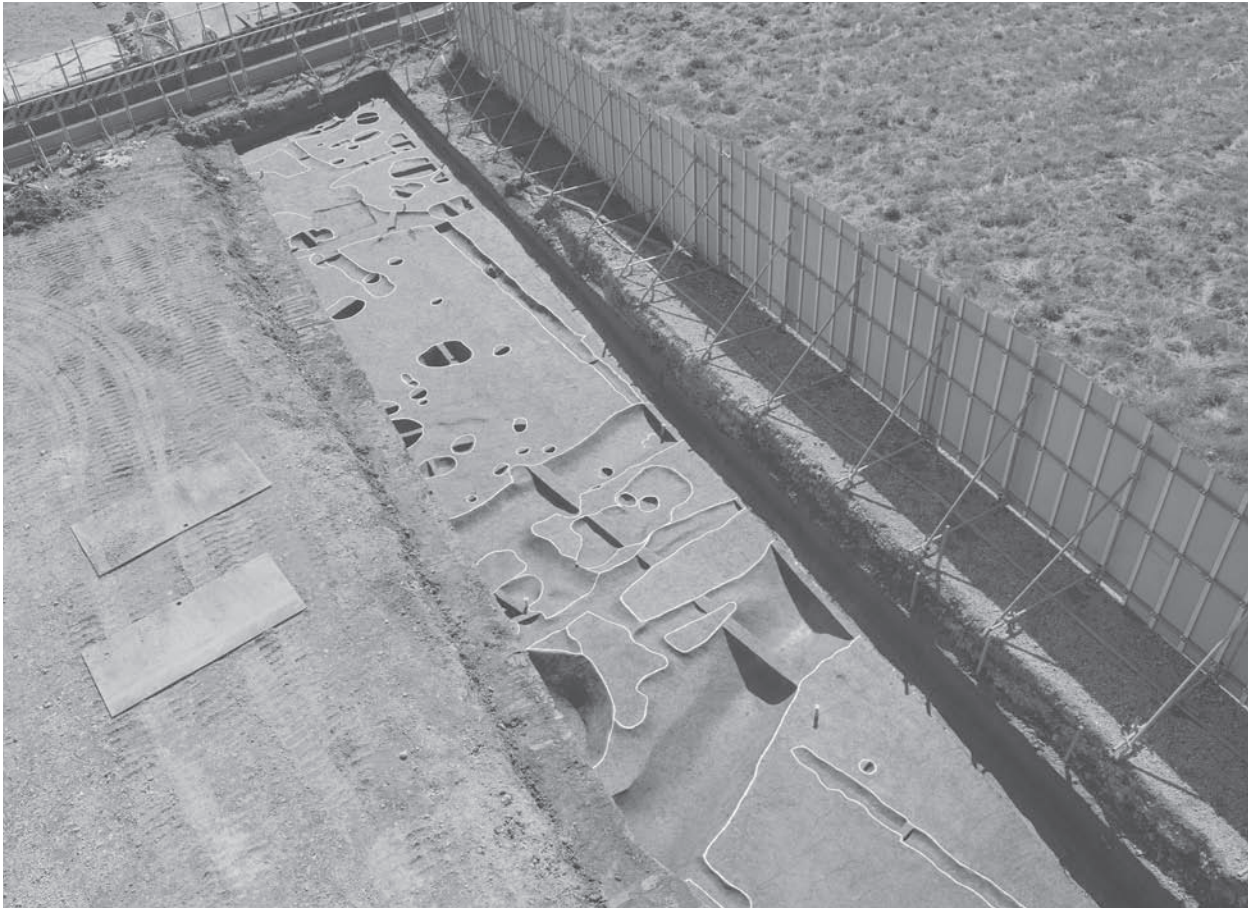
図版6 微高地域1



土坑4 (南西から)



左上:ピット6 (南東から) 左下:ピット4 (南東から) 右上:ピット3 (南東から) 右下:ピット8 (西から)



19-1 調査 8トレンチ 全景 (北西から)

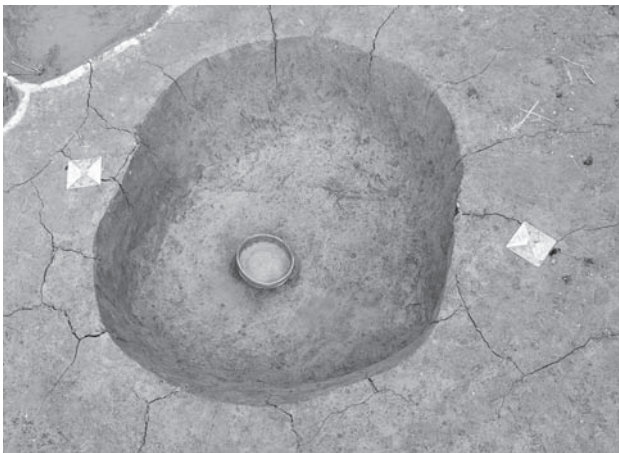
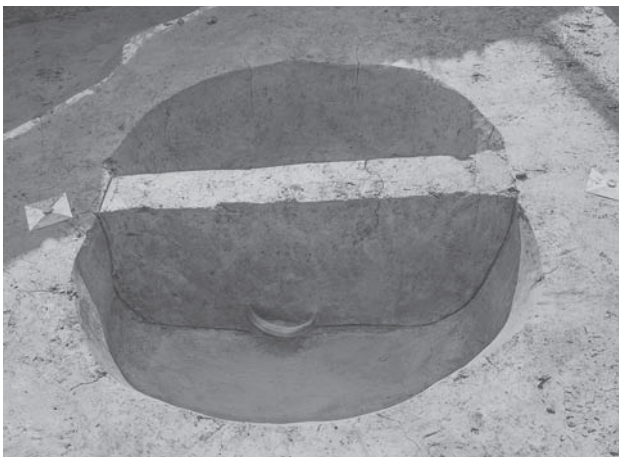


19-1 調査 8トレンチ 全景 (東から)

図版8 微高地域2



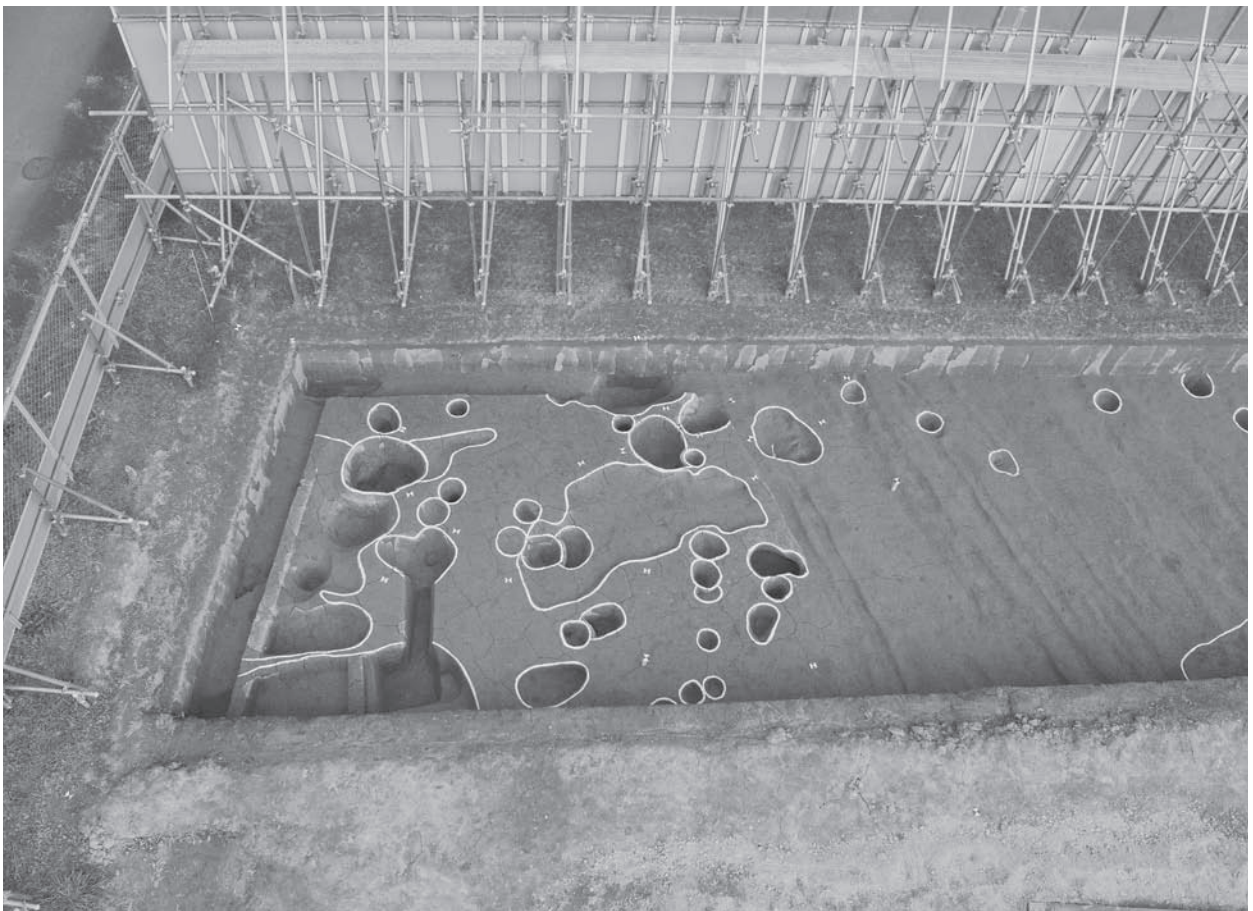
井戸3 (南西から)



左上：土坑9 (北西から) 左下：土坑9 (北西から) 右上：ピット16 (西から) 右下：ピット18 (南西から)



19-1 調査 6トレンチ 全景 (西から)



19-1 調査 6トレンチ 全景 (南西から)

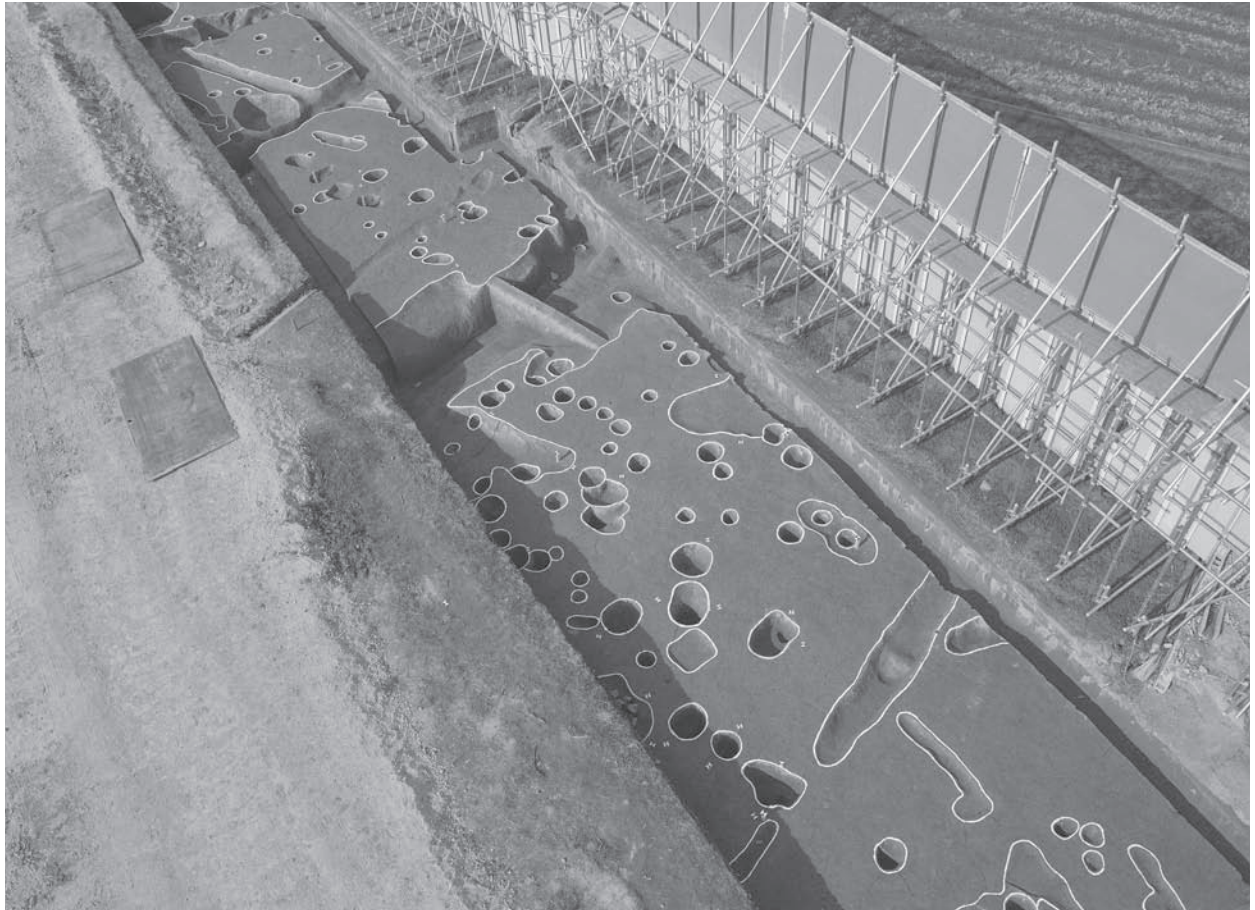
図版 10 微高地域 3



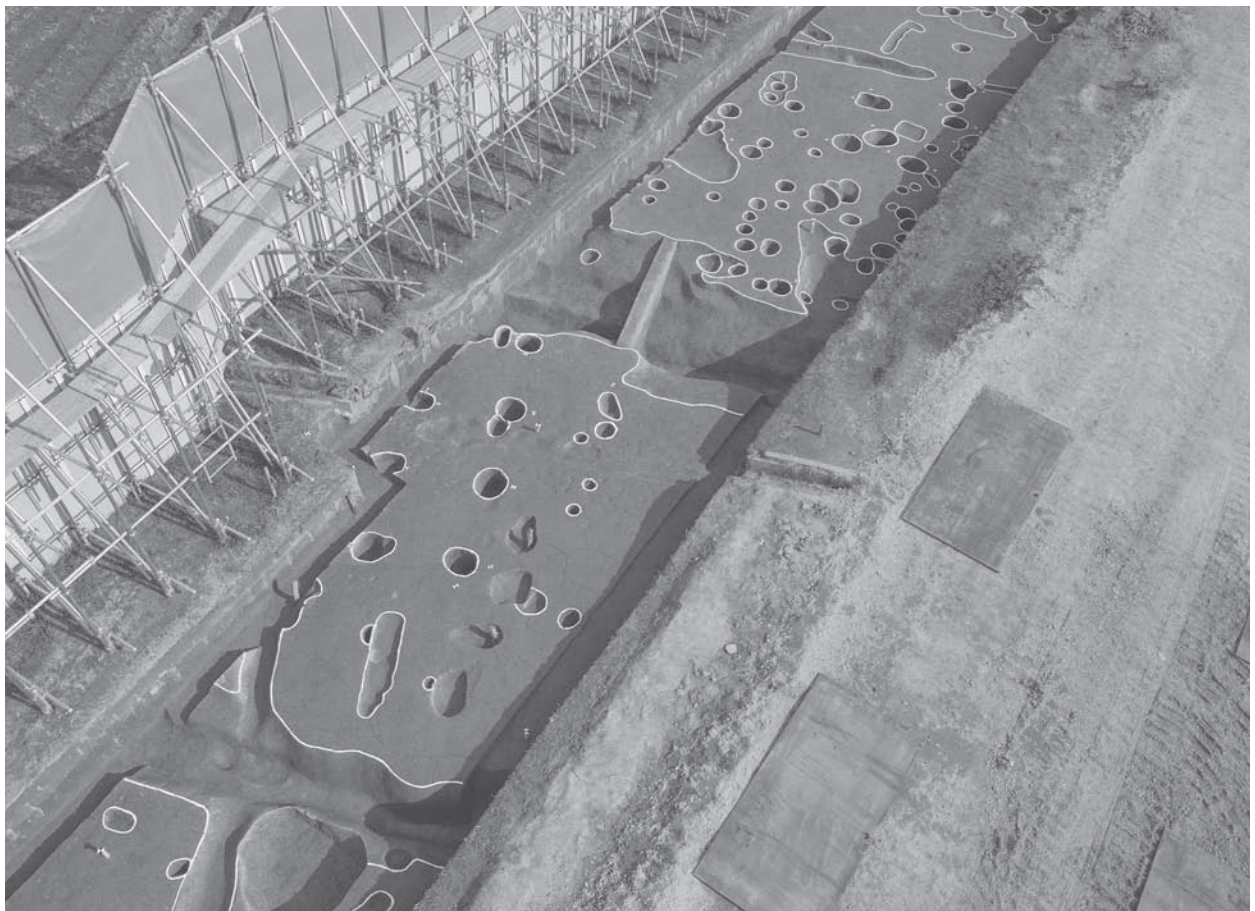
土坑 19 (南西から)



左上：土坑 14 (南から) 左下：土坑 20 (西から) 右上：土坑 15 (南から) 右下：土坑 13 (南東から)



19-1 調査 6トレンチ 全景 (南から)

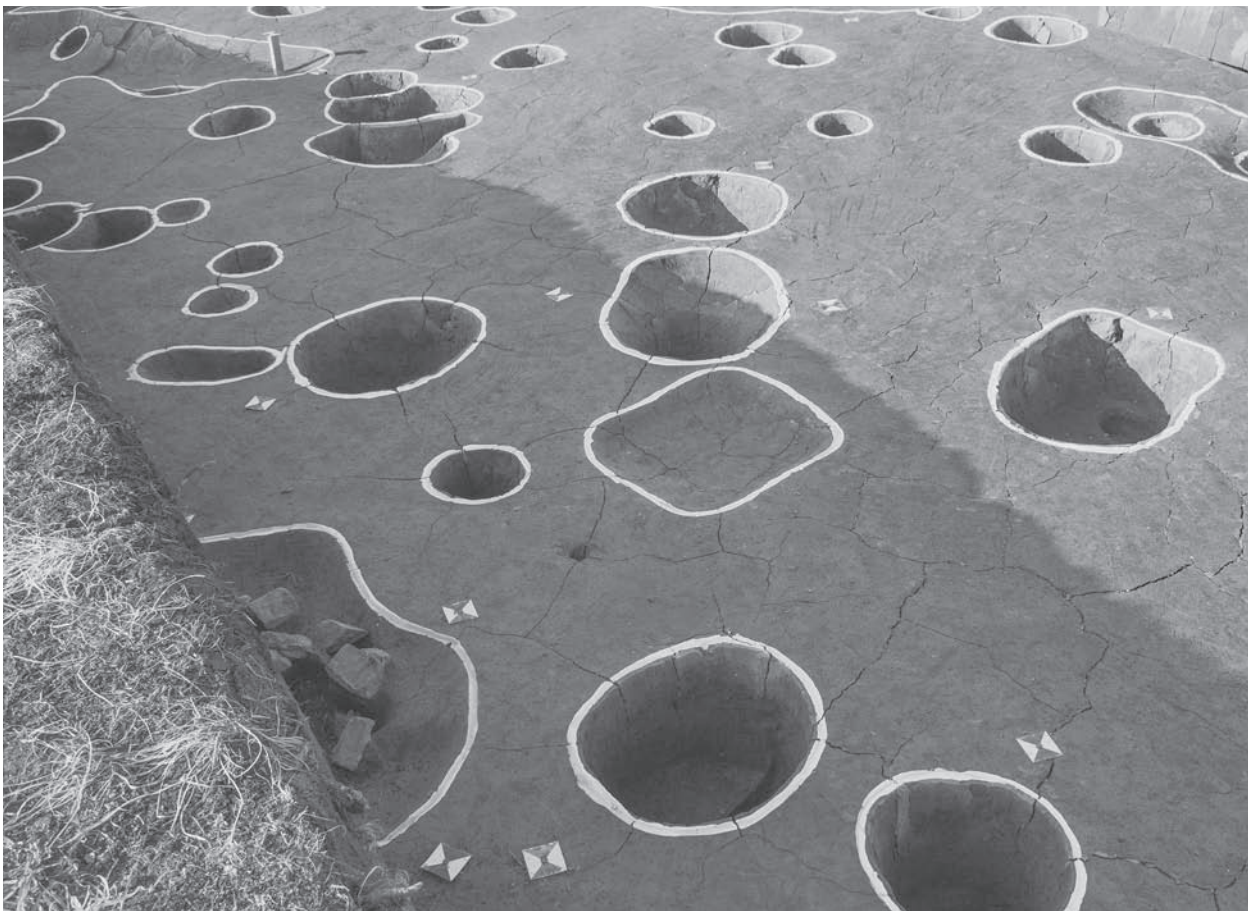


19-1 調査 6トレンチ 全景 (西から)

図版 12 微高地域 4



建物 1 (南西から)



建物 2 (南東から)



井戸 7 (北西から)



方形周溝墓 1 (南西から)

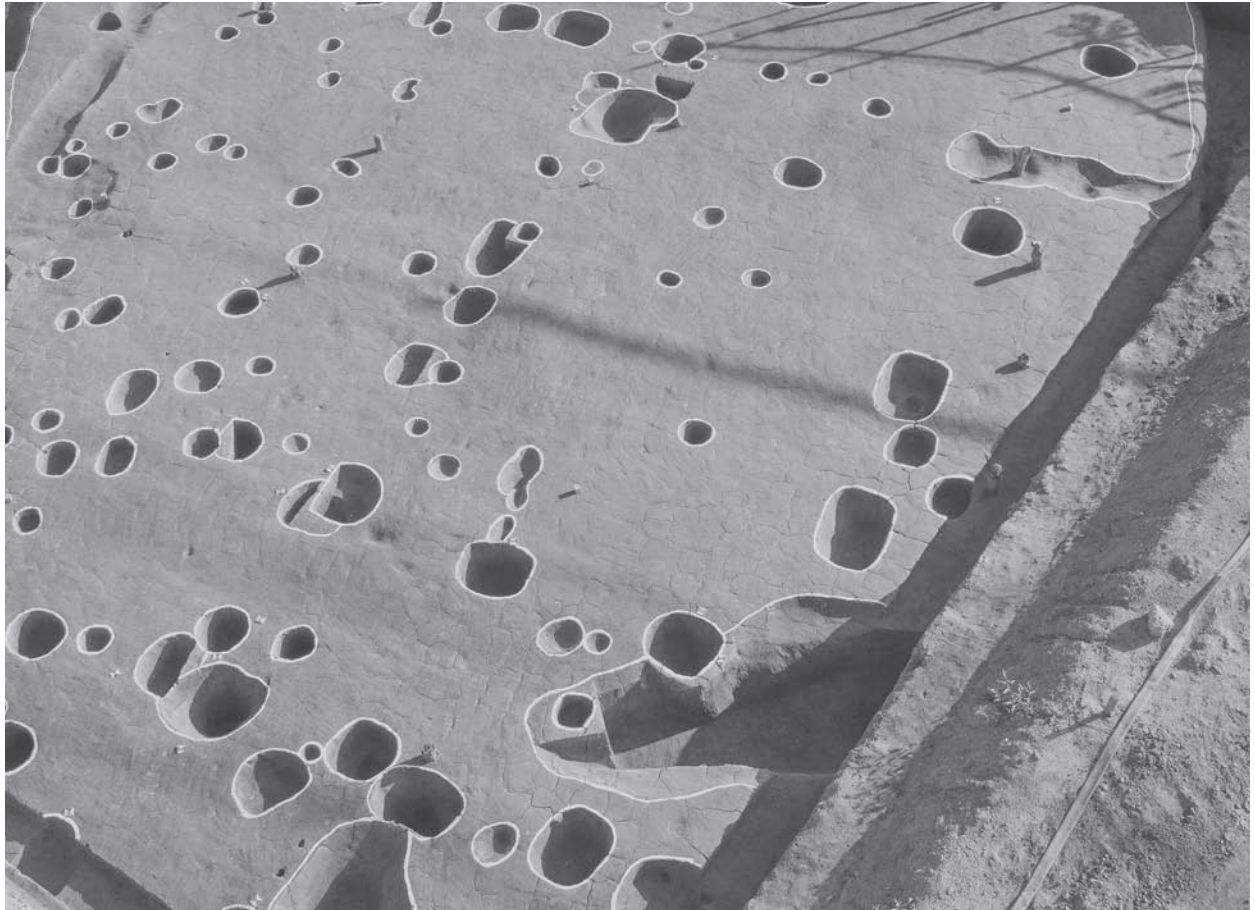
図版 14 微高地域 5



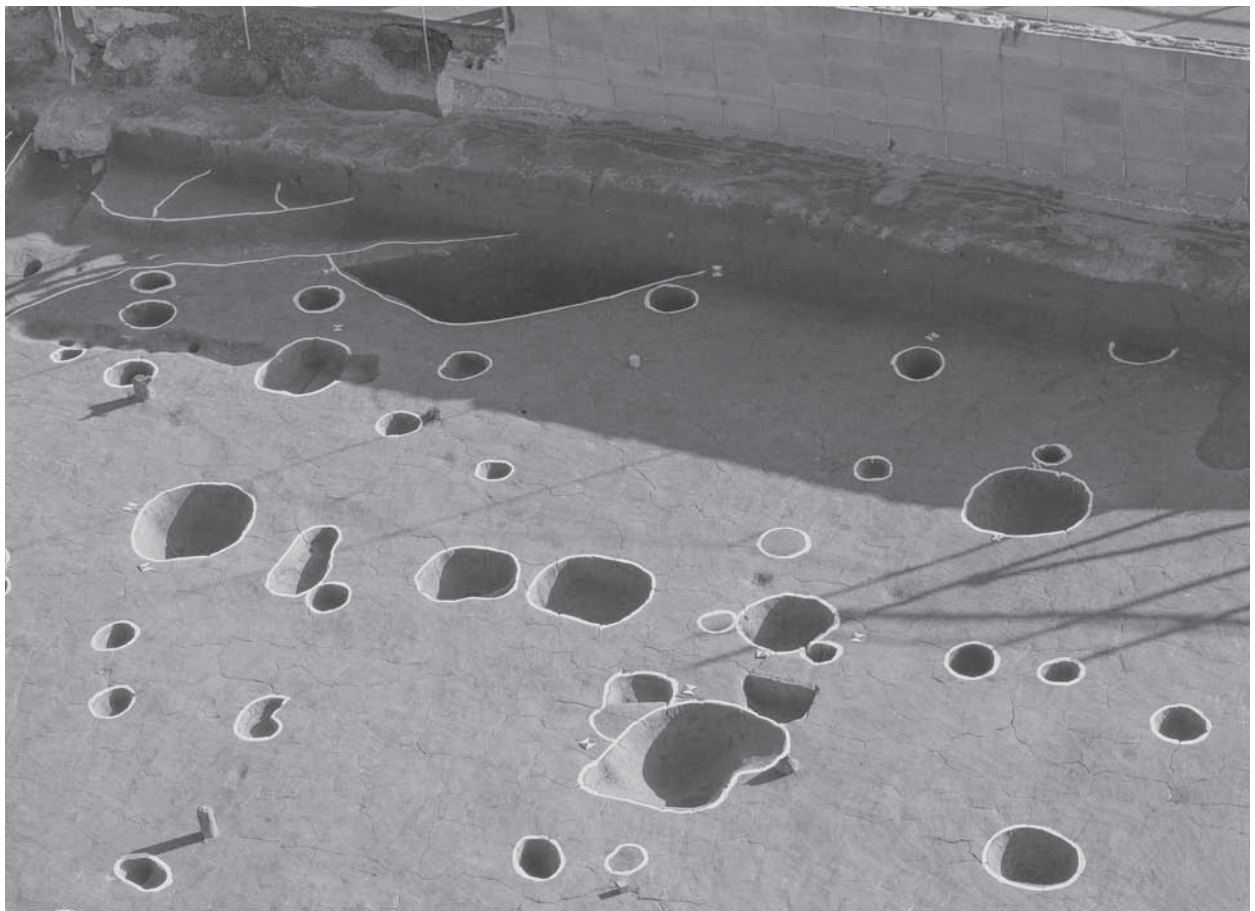
20-1 調査 3トレンチ北半 全景 (東から)



20-1 調査 3トレンチ南半 全景 (南西から)



建物3・建物4（北から）



建物6（北から）

図版 16 微高地域 5



井戸 4 (南から)



井戸 4 (南から)



井戸 4 (南から)



井戸 4 (南から)

図版 18 微高地域 5



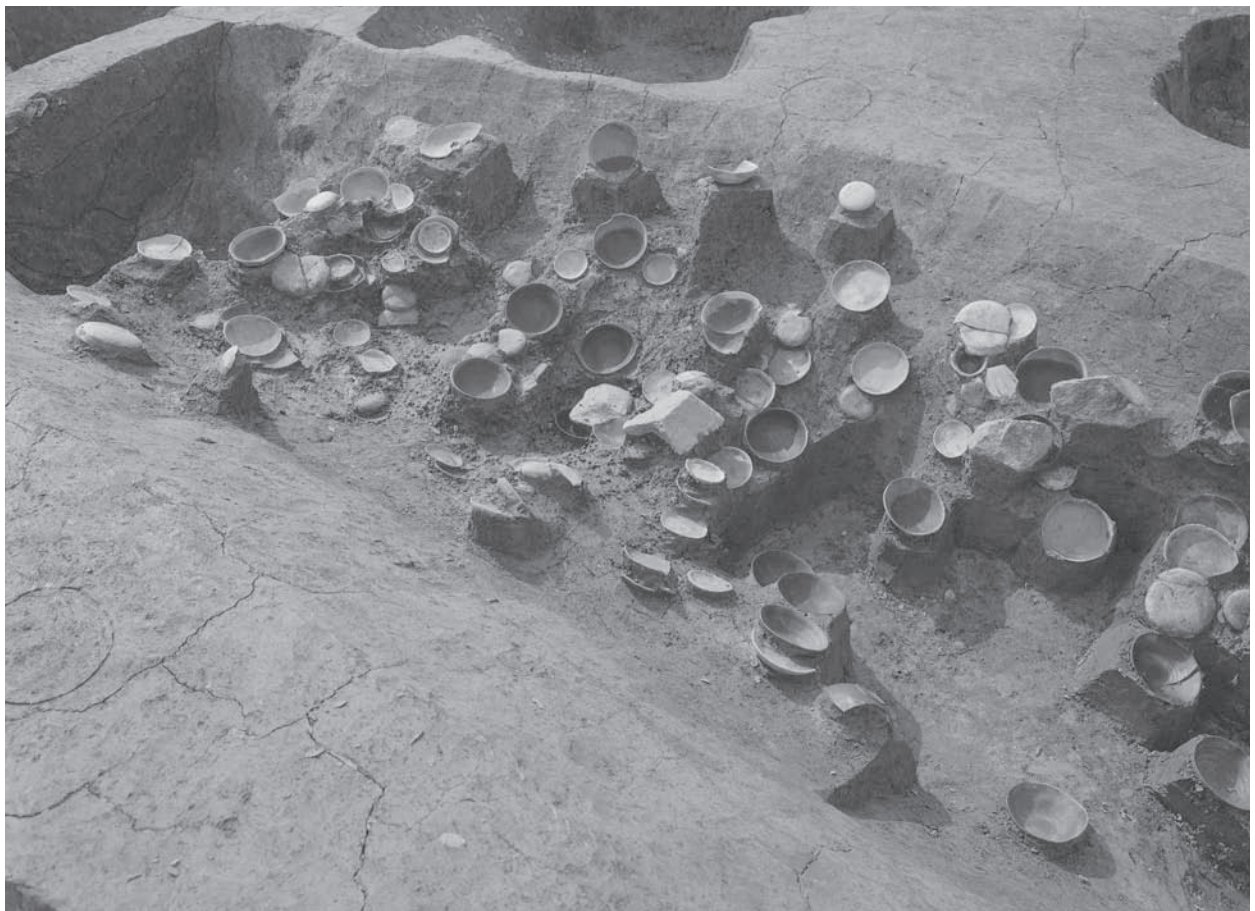
水溜 1 (南から)



水溜 1 (南から)



溝 16 (北東から)



溝 16 (東から)

図版 20 微高地域 5



溝 17・溝 18 (北西から)



方形周溝墓 2 (東から)



方形周溝墓 3 (北西から)

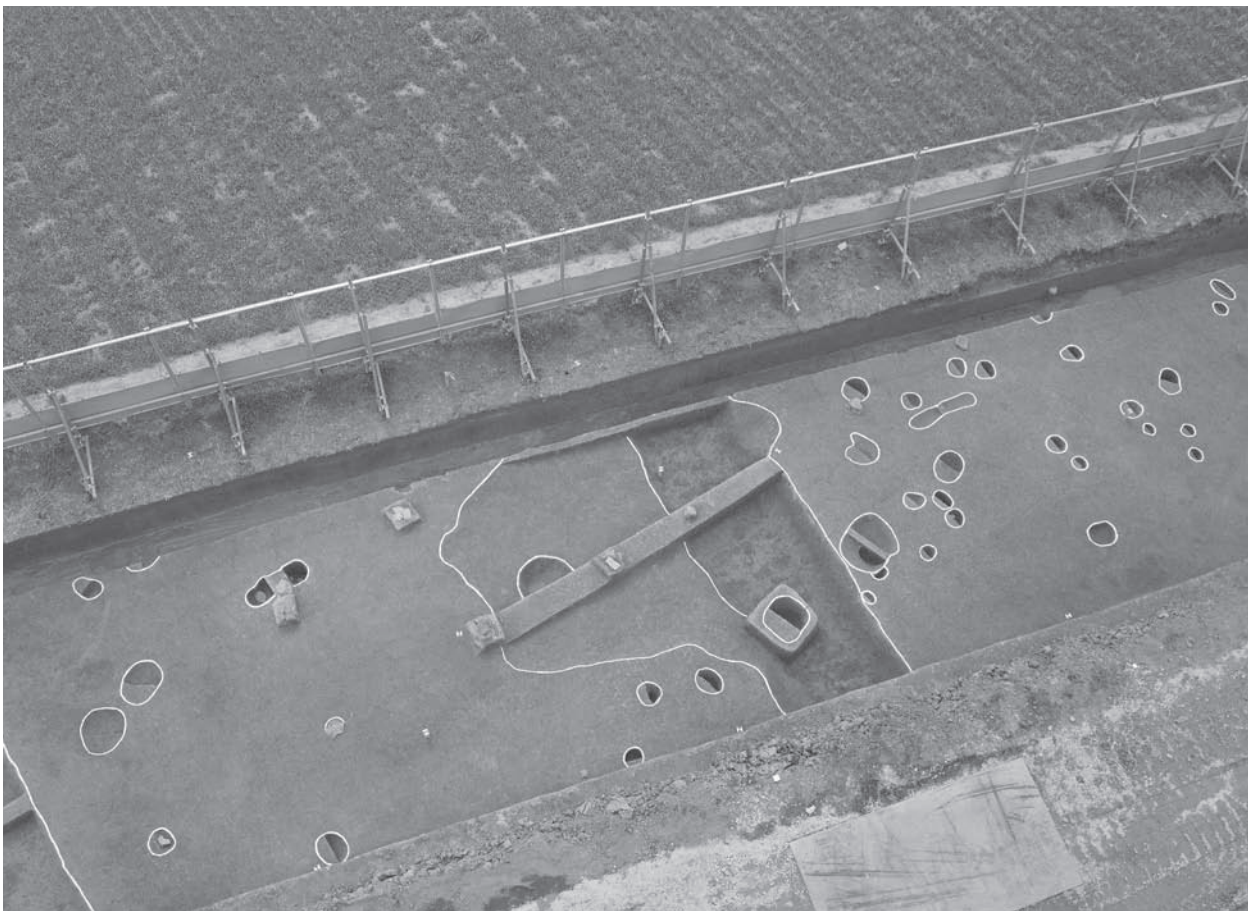


方形周溝墓 5 (北西から)

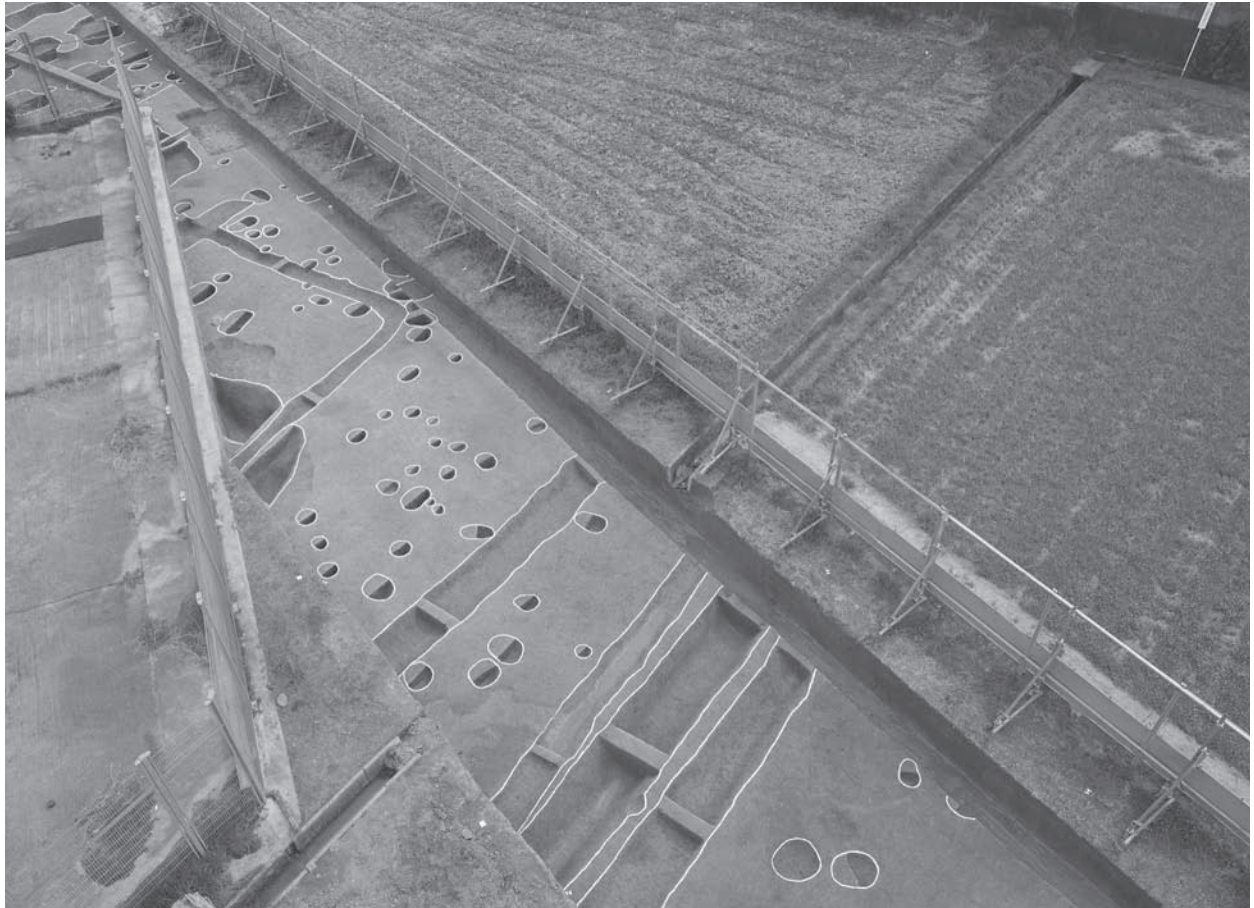
図版 22 微高地域 6



19-1 調査 7トレンチ 全景 (北から)



19-1 調査 7トレンチ 全景 (北東から)



19-1 調査 7トレンチ 全景 (北から)



19-1 調査 7トレンチ 全景 (北東から)

図版 24 微高地域 7



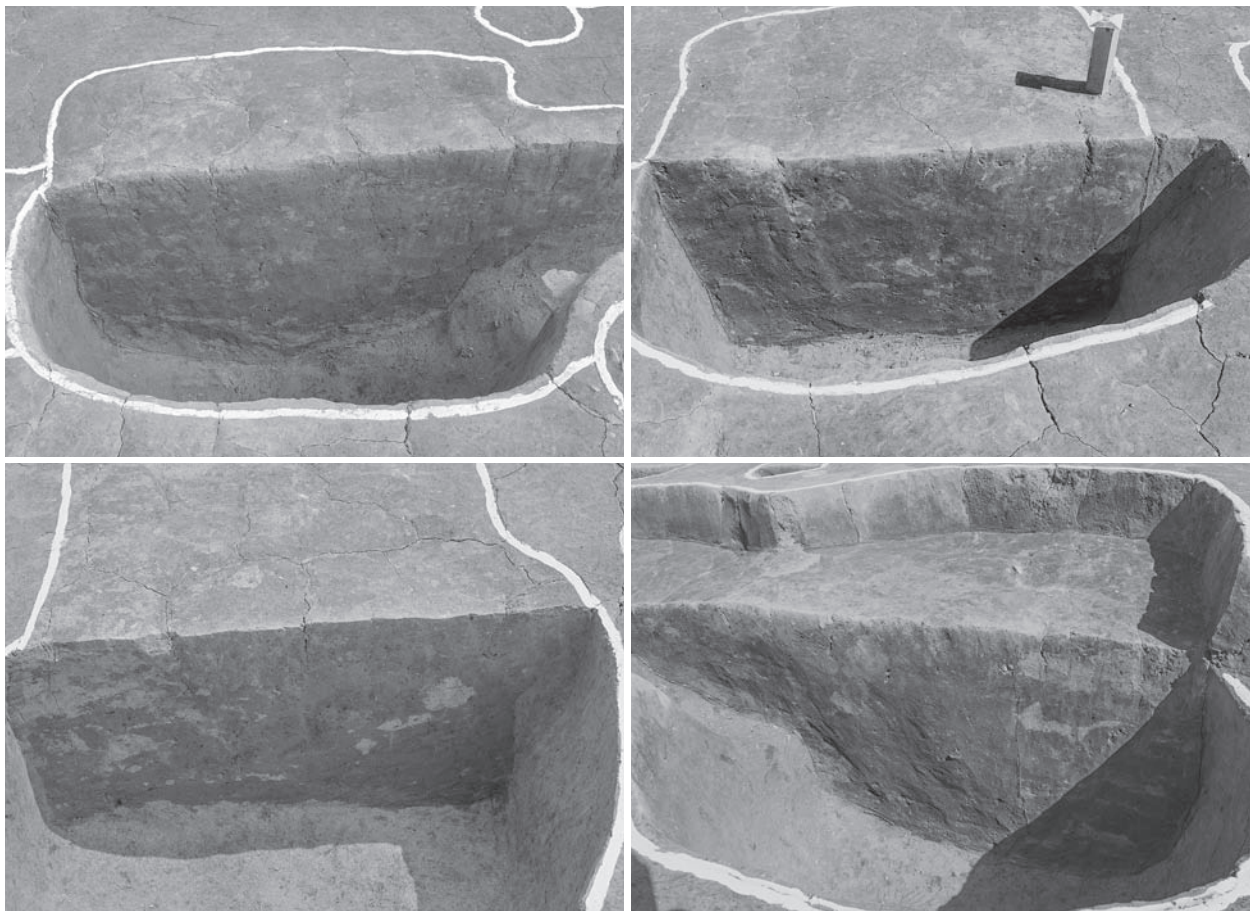
建物 7 (西から)



建物 7 (北東から)



建物 7 柱穴 3 礎板 (北西から)



建物 7 左上：柱穴 2 左下：柱穴 6 右上：柱穴 7 右下：柱穴 10 (いずれも北西から)

図版 26 微高地域 7



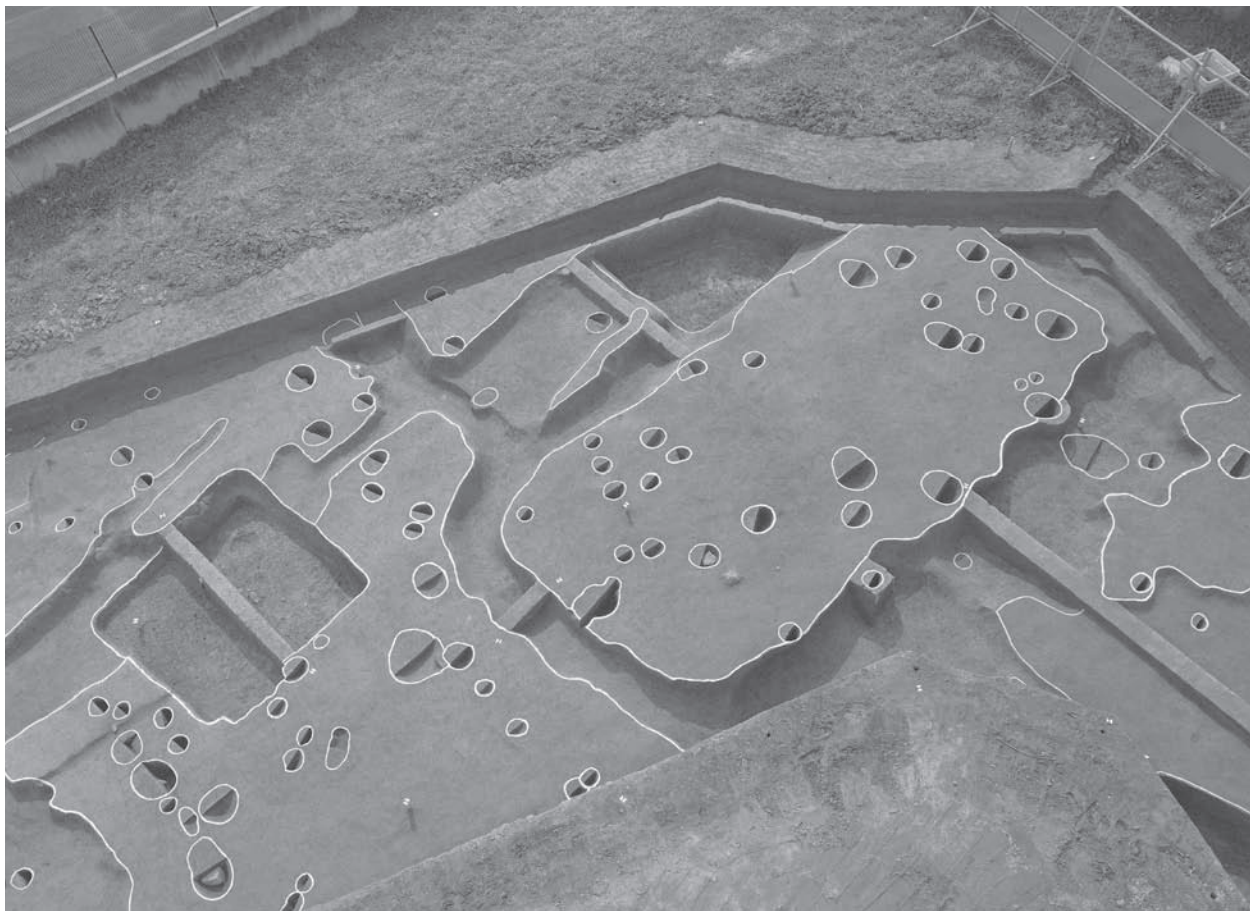
井戸 5 (南から)



井戸 5 (南から)



19-1 調査 7トレンチ 全景 (西から)



19-1 調査 7トレンチ 全景 (北西から)



井戸 6 (南西から)



井戸 6 (西から)



井戸 9 (南から)



井戸 9 (南から)

図版 30 微高地域 8



井戸 10 (東から)



方形土坑 (南から)



20-1調査 5トレンチ 全景(東から)



溝 28 (東から)

図版 32 微高地域 8



溝 27 (北から)



左上：土器 1 (南から) 左下：土器 2 (西から) 右上：溝 31 (北から) 右下：溝 29 (西から)



19-1調査 5トレンチ 全景 (西から)



19-1調査 5トレンチ 全景 (南東から)

図版 34 低地域 1



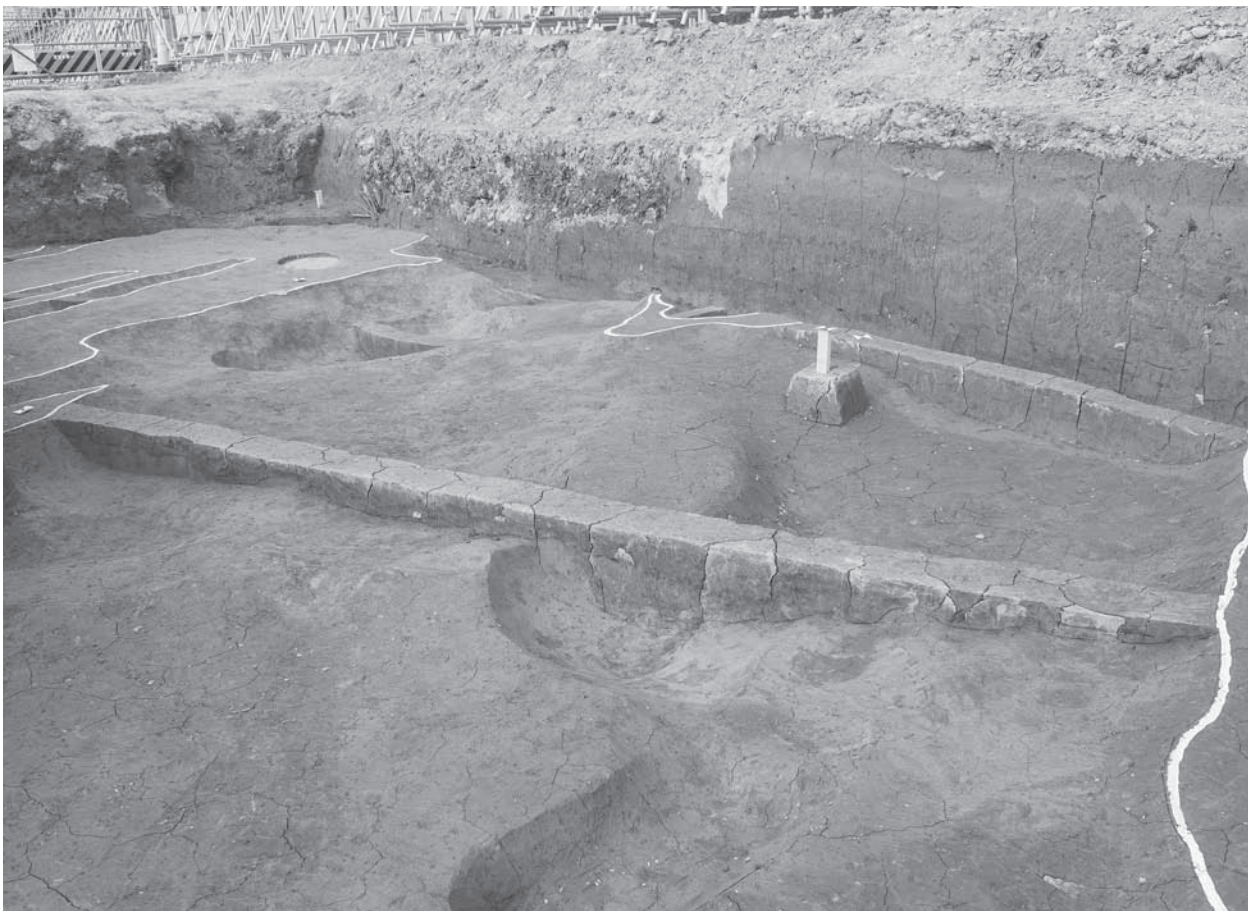
20-1 調査 4トレンチ北半 全景 (東から)



建物 10 (南から)



井戸 11 (北西から)

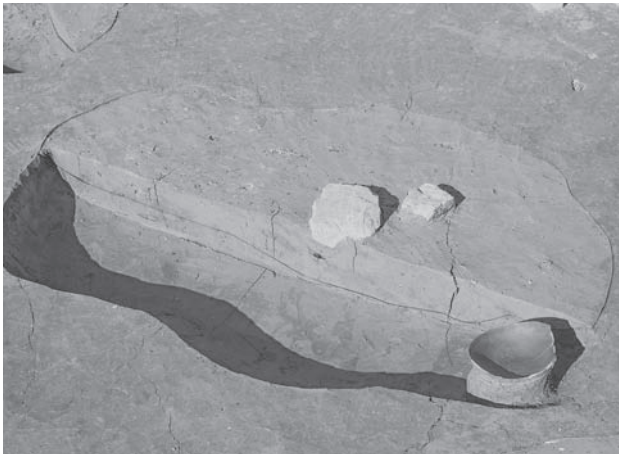


溝 37 (南から)

図版 36 低地域 2



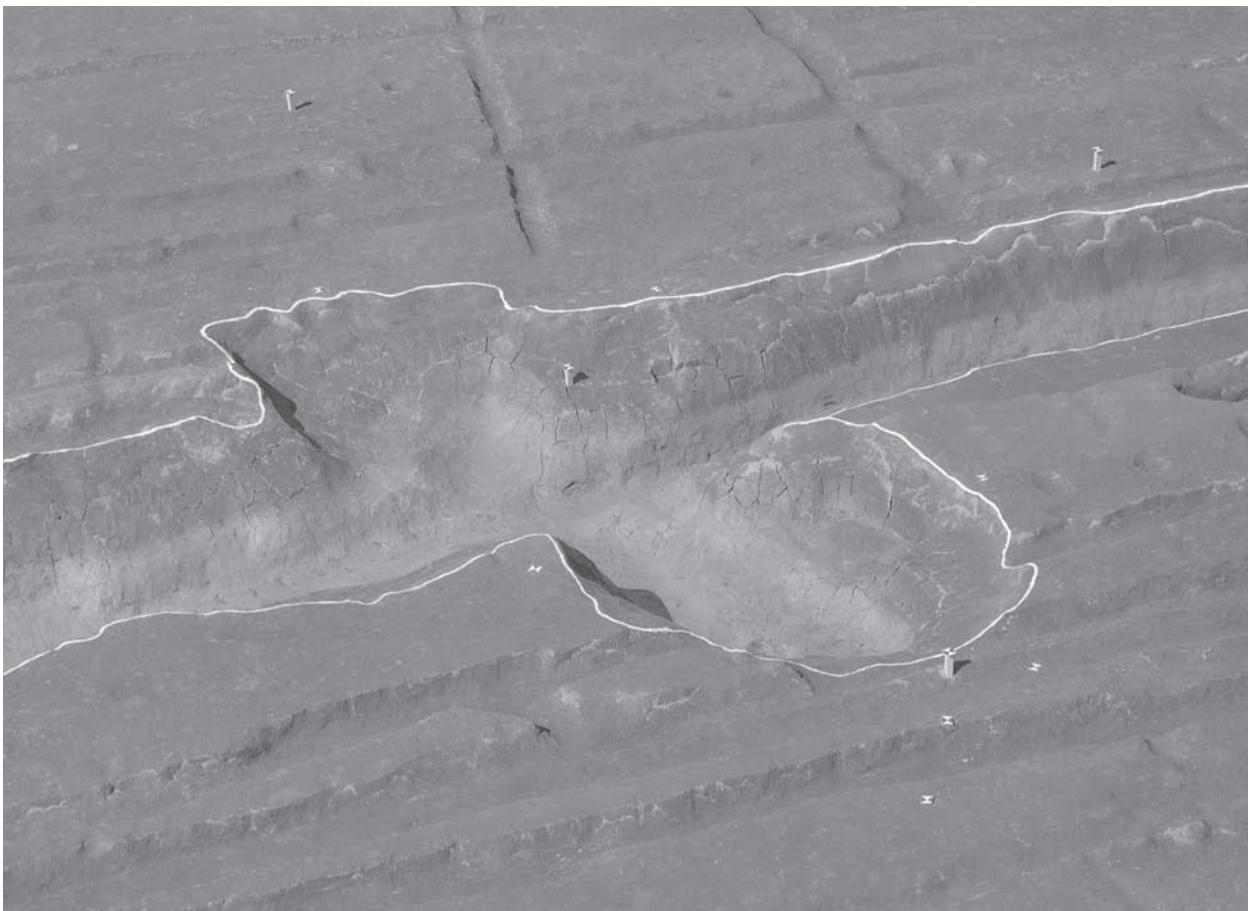
20-1 調査 4トレンチ南半 全景 (北から)



左上：土坑 38 (南から) 左下：土坑 40 (南から) 右上：土坑 41 (南から) 右下：土坑 43 (南から)



19-1 調査 4 トレンチ 全景 (南東から)



溝 39・土坑 47 (東から)

図版 38 低地域 4



20-1 調査 6トレンチ 全景（北東から）



20-1 調査 6トレンチ 全景（北西から）



土坑 48 (東から)



19-1 調査 1 トレンチ 土層断面 (南から)

図版 40 低地域 5



19-1 調査 2トレンチ 全景 (東から)



19-1 調査 2トレンチ 高まり (南から)

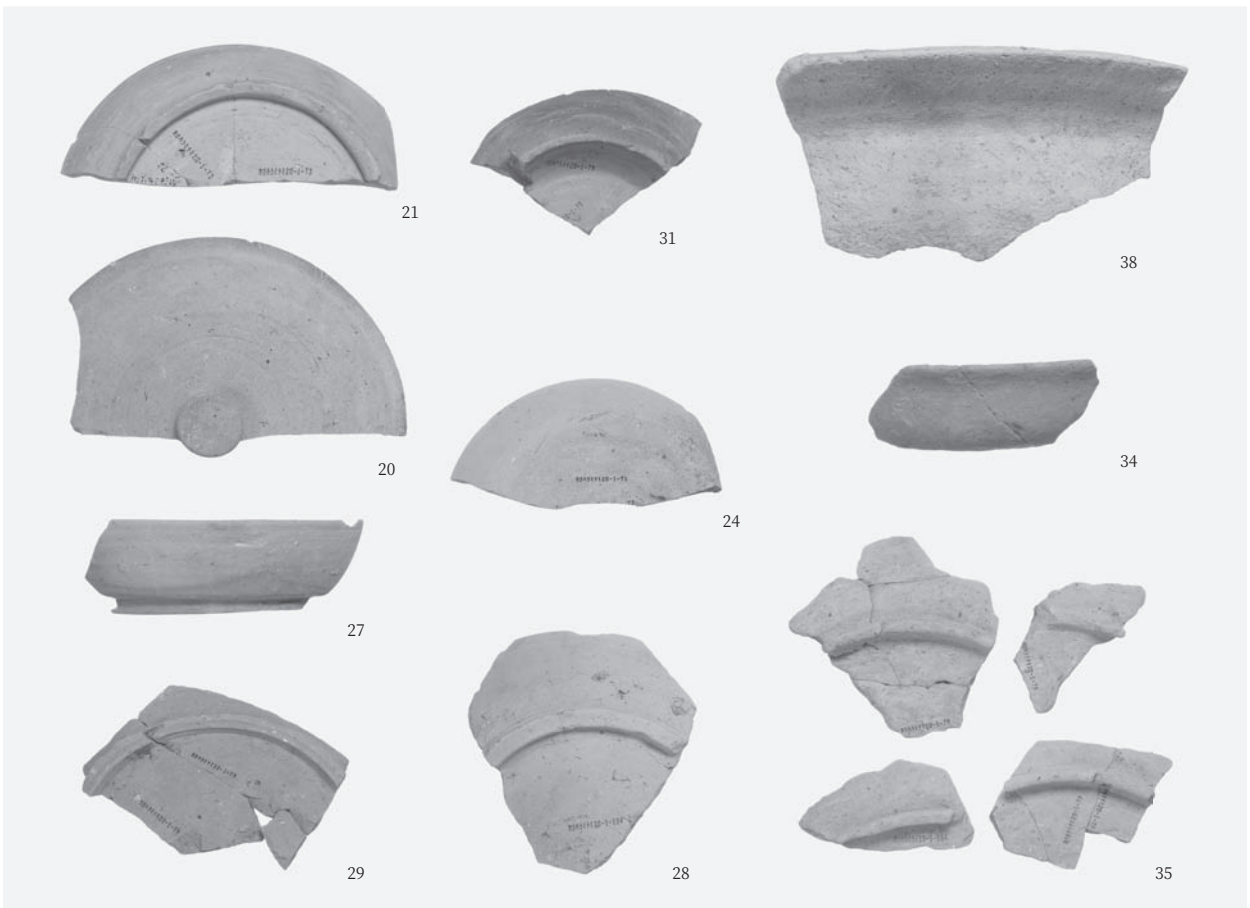
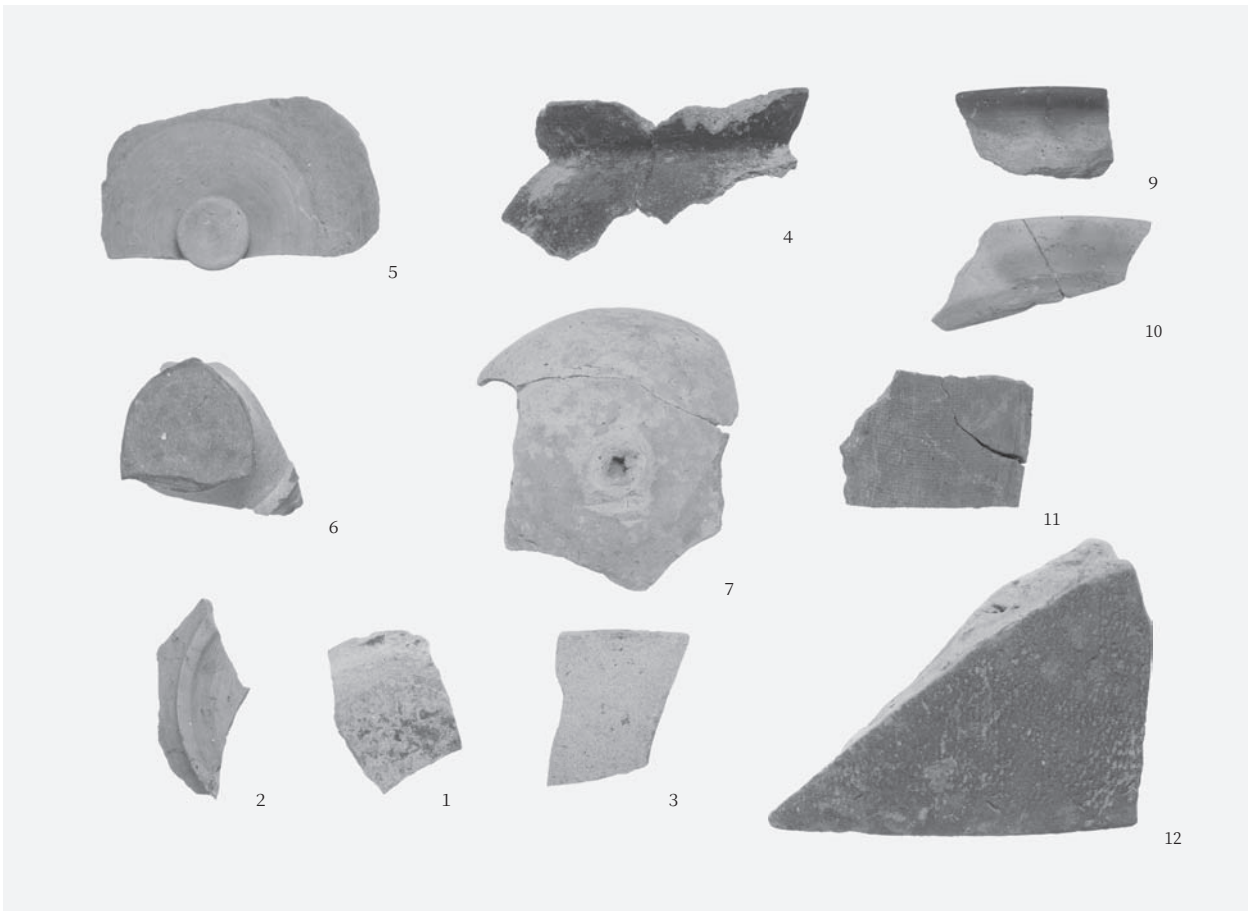


19-1 調査 3 トレンチ 全景 (南から)



20-1 調査 7 トレンチ 土層断面 (北東から)

图版 42 微高地域 1





8



22



23



25



26



30



32



33



36



37



41

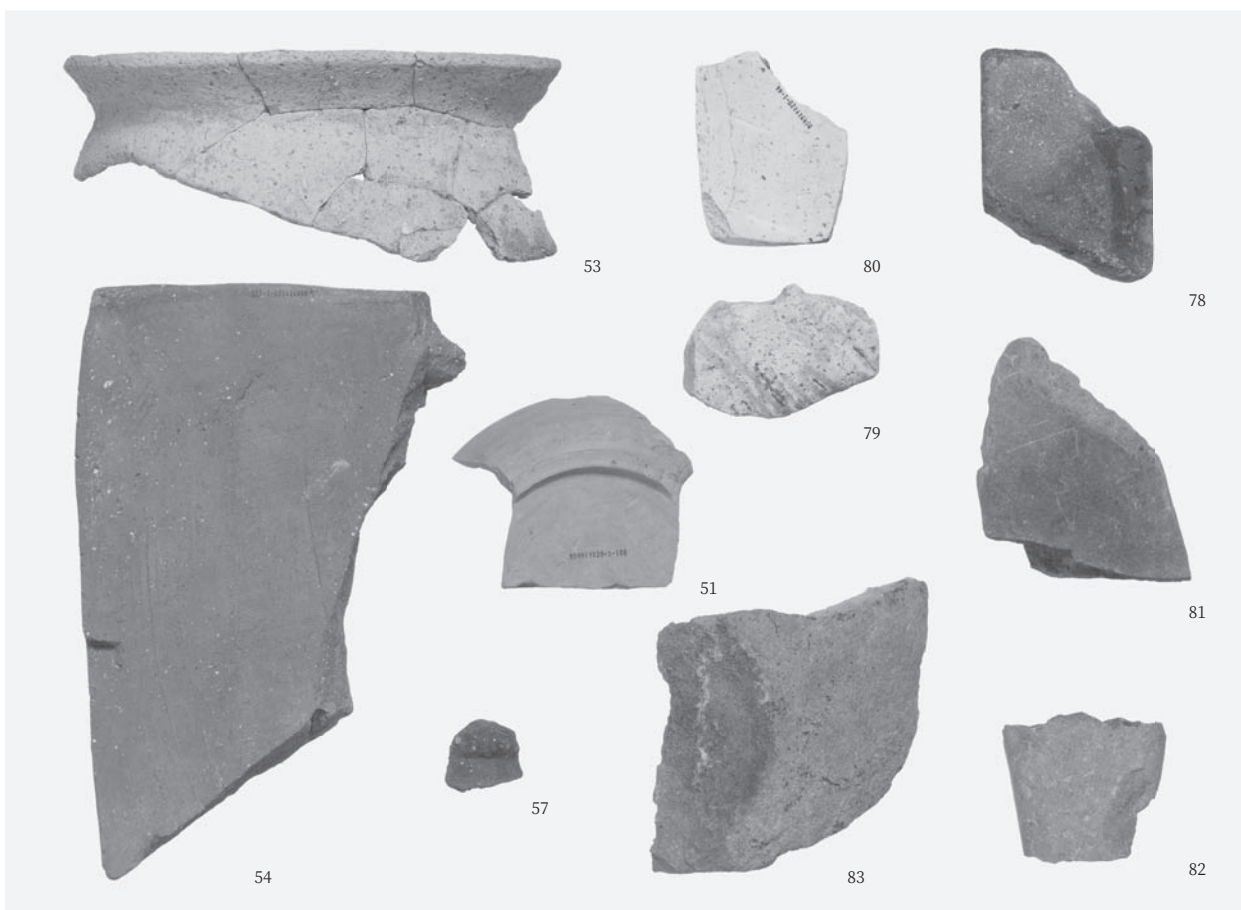
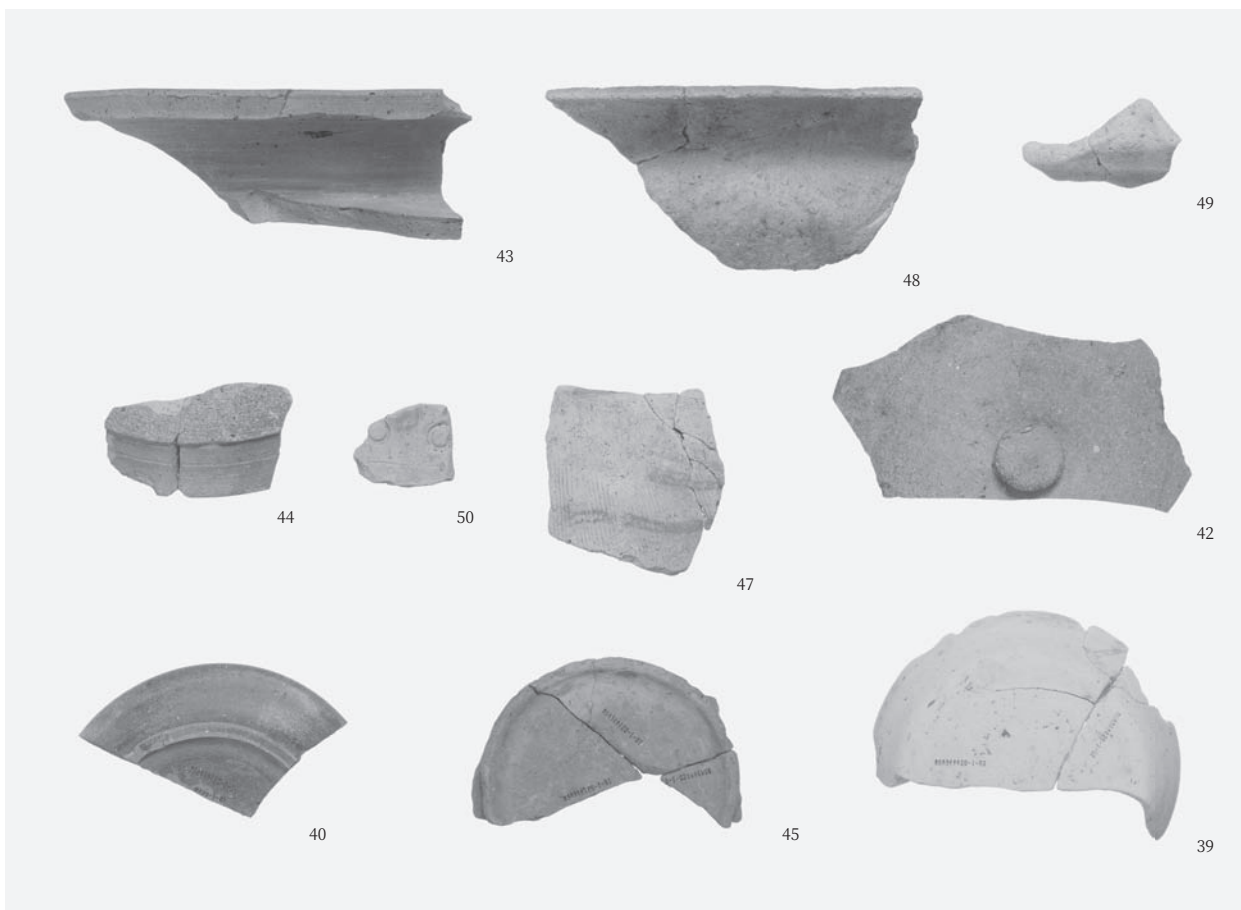


46



52

图版 44 微高地域 1





55



66



56



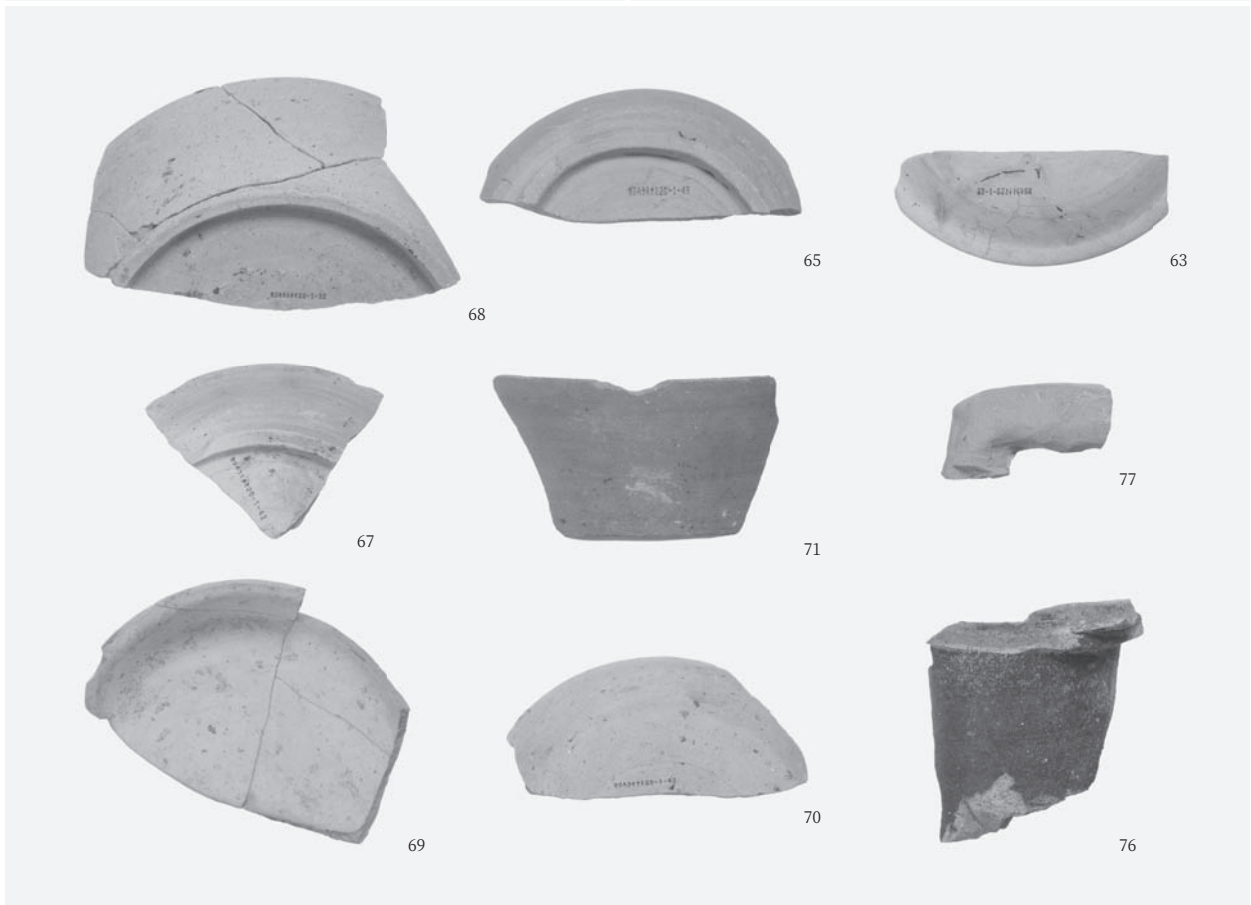
72

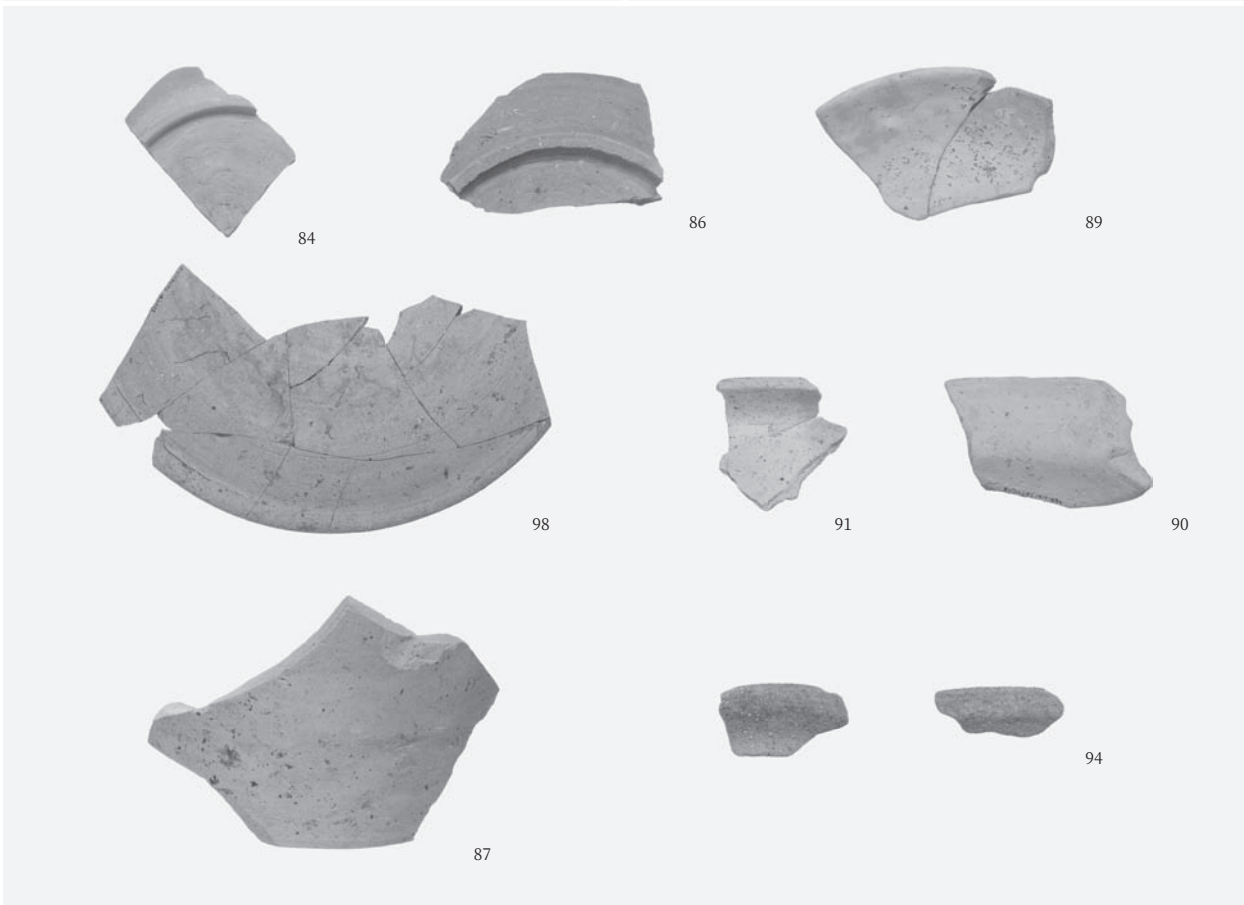


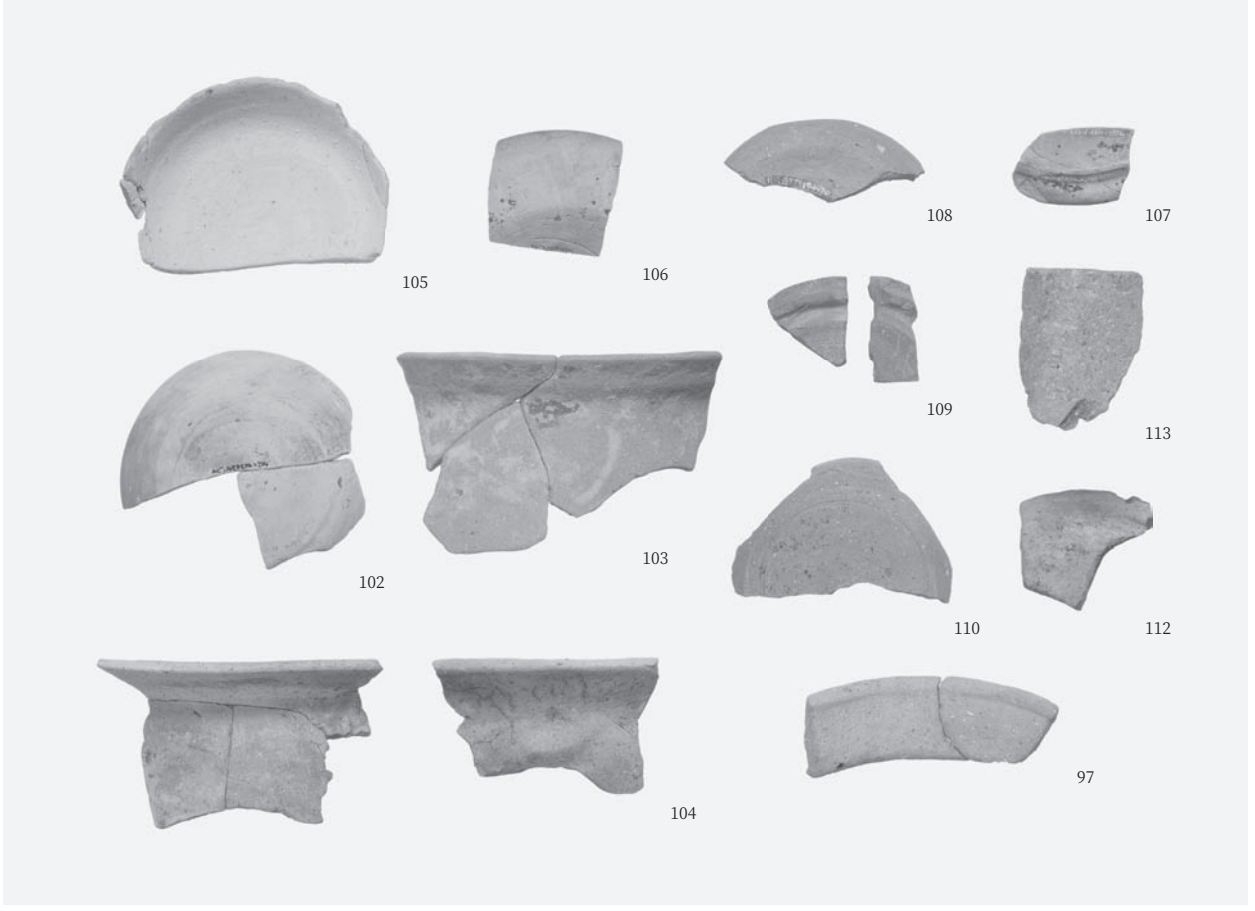
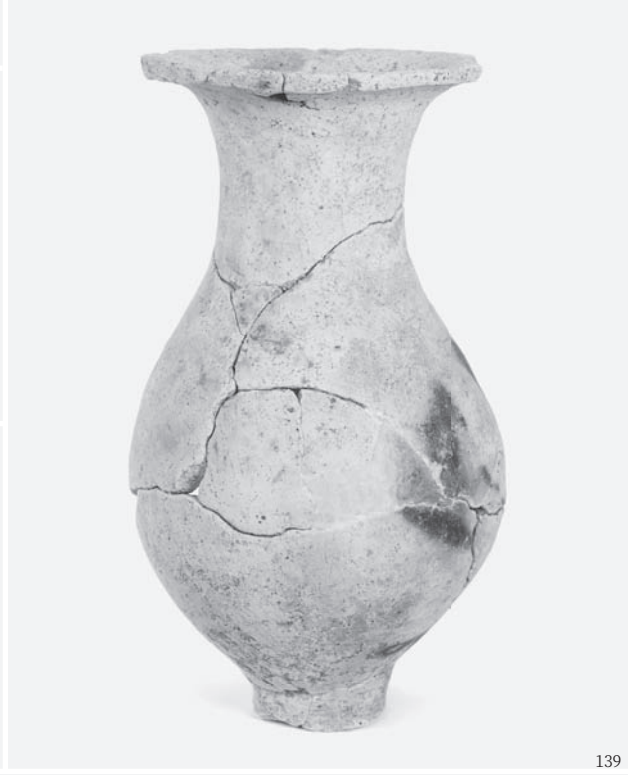
64



73









101



111



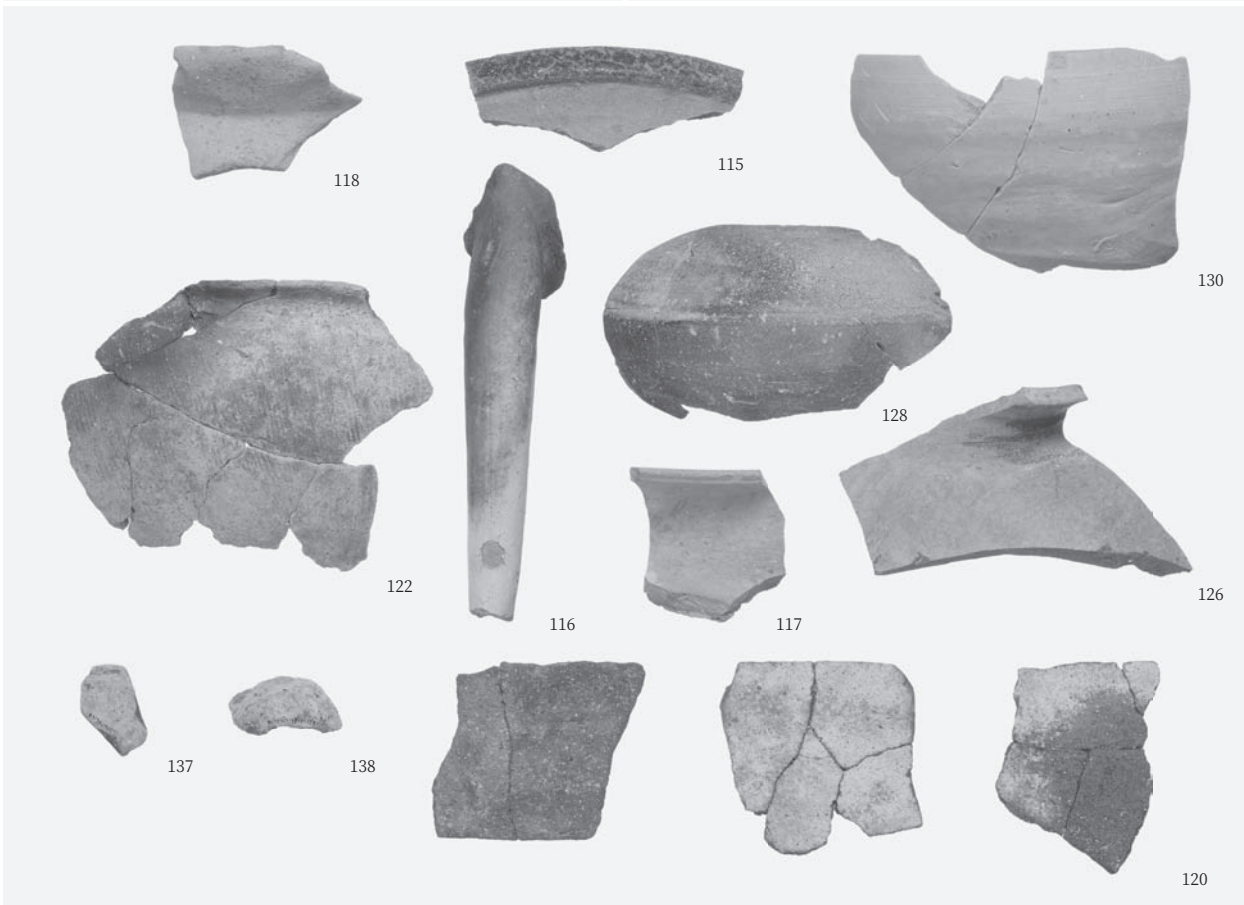
127



121



136



118

115

130

128

122

116

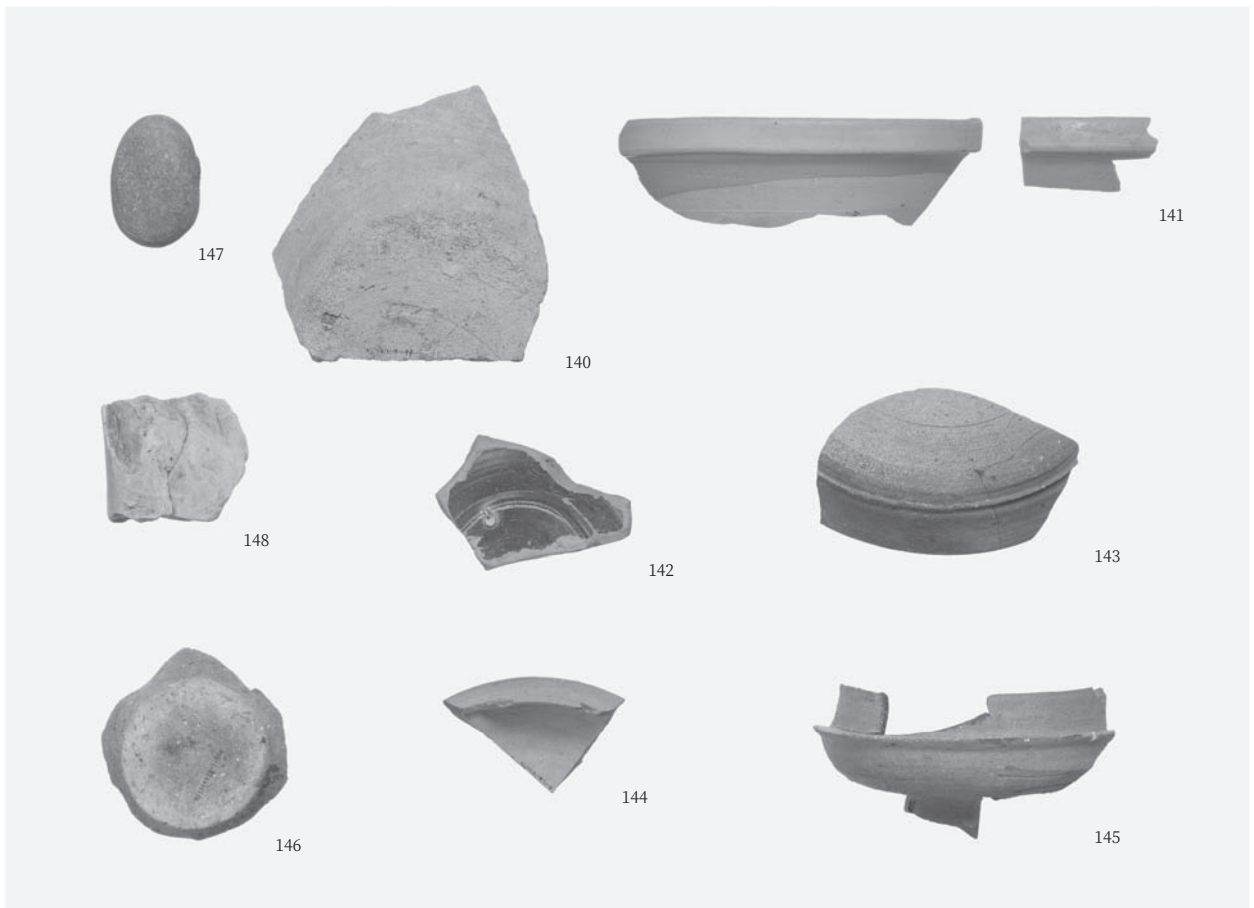
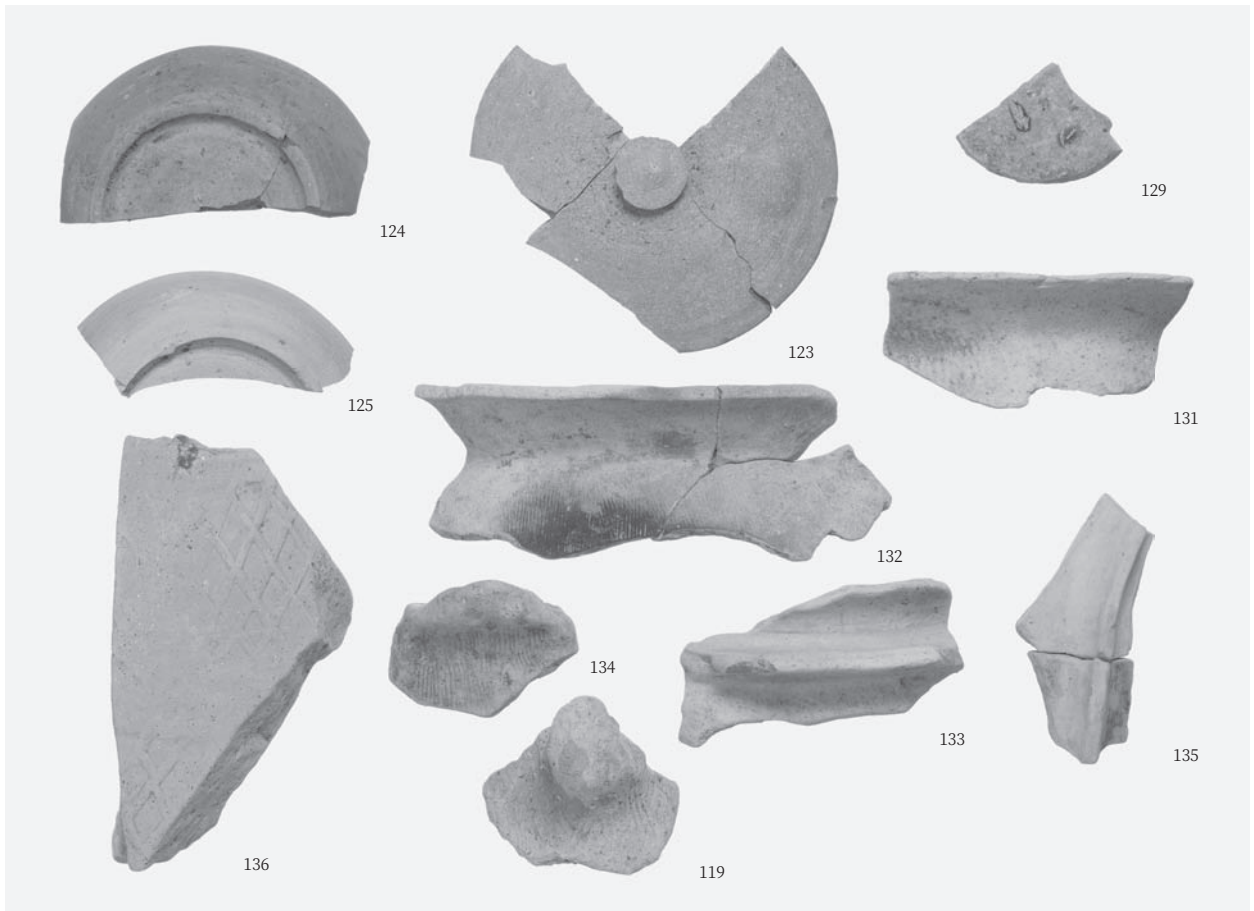
117

126

137

138

120





152



154



153



155



165

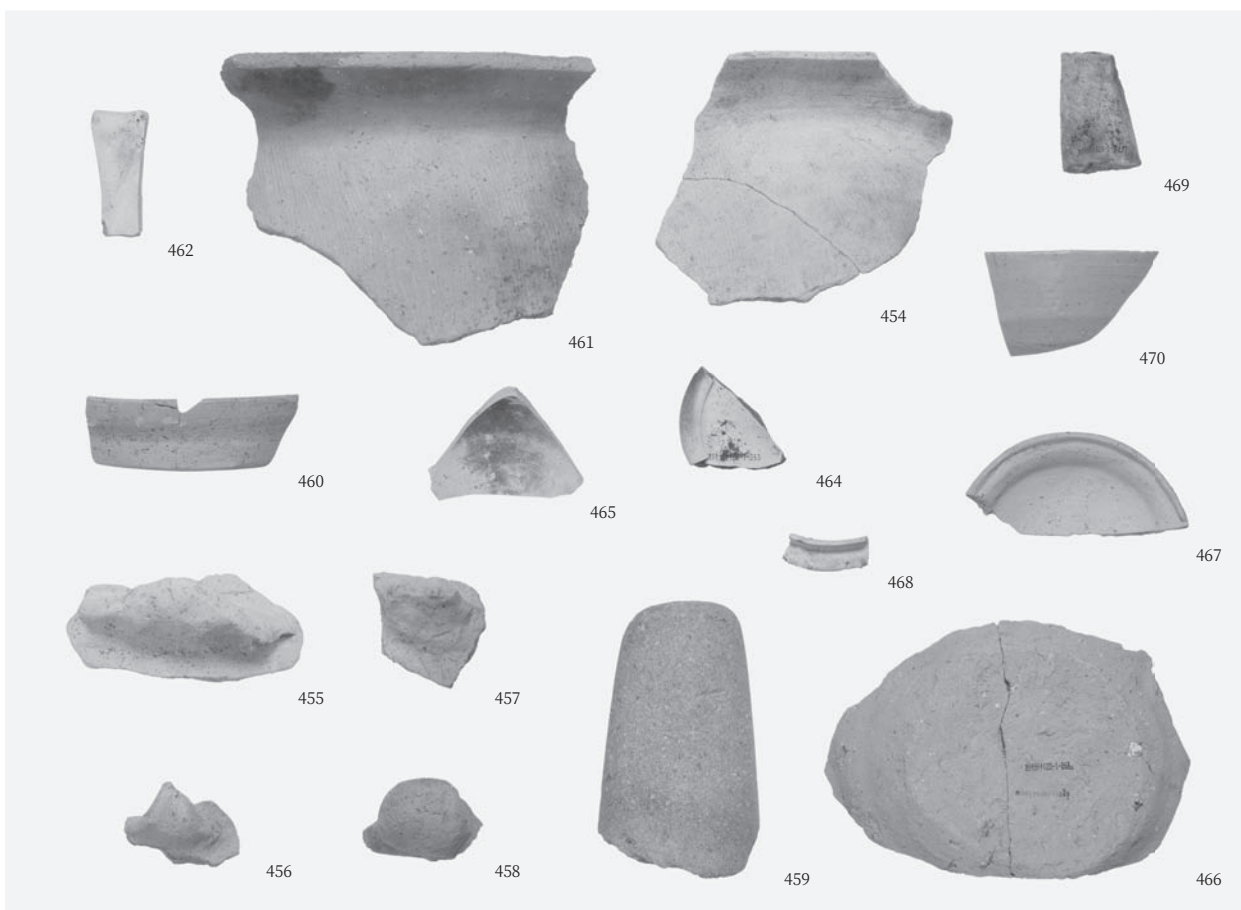


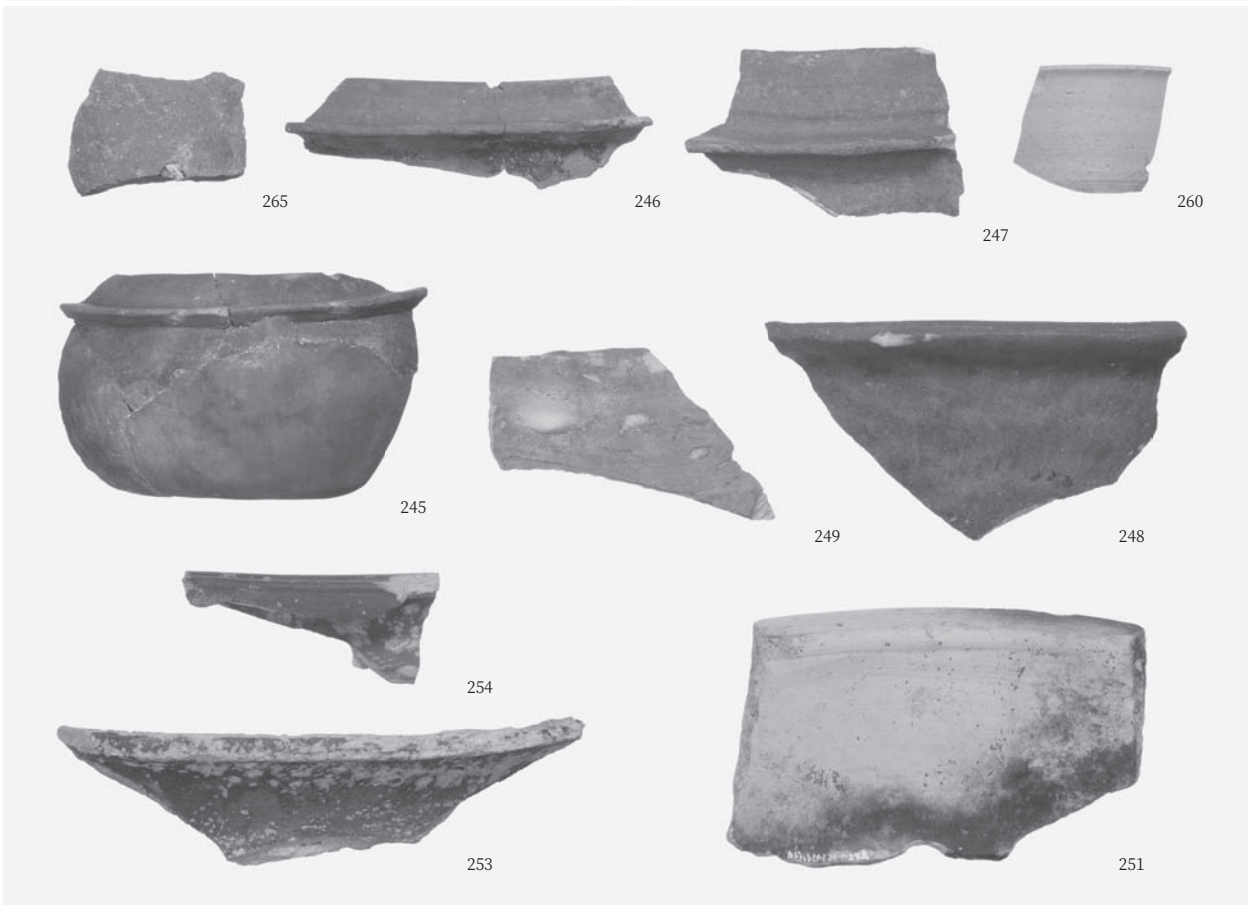
166

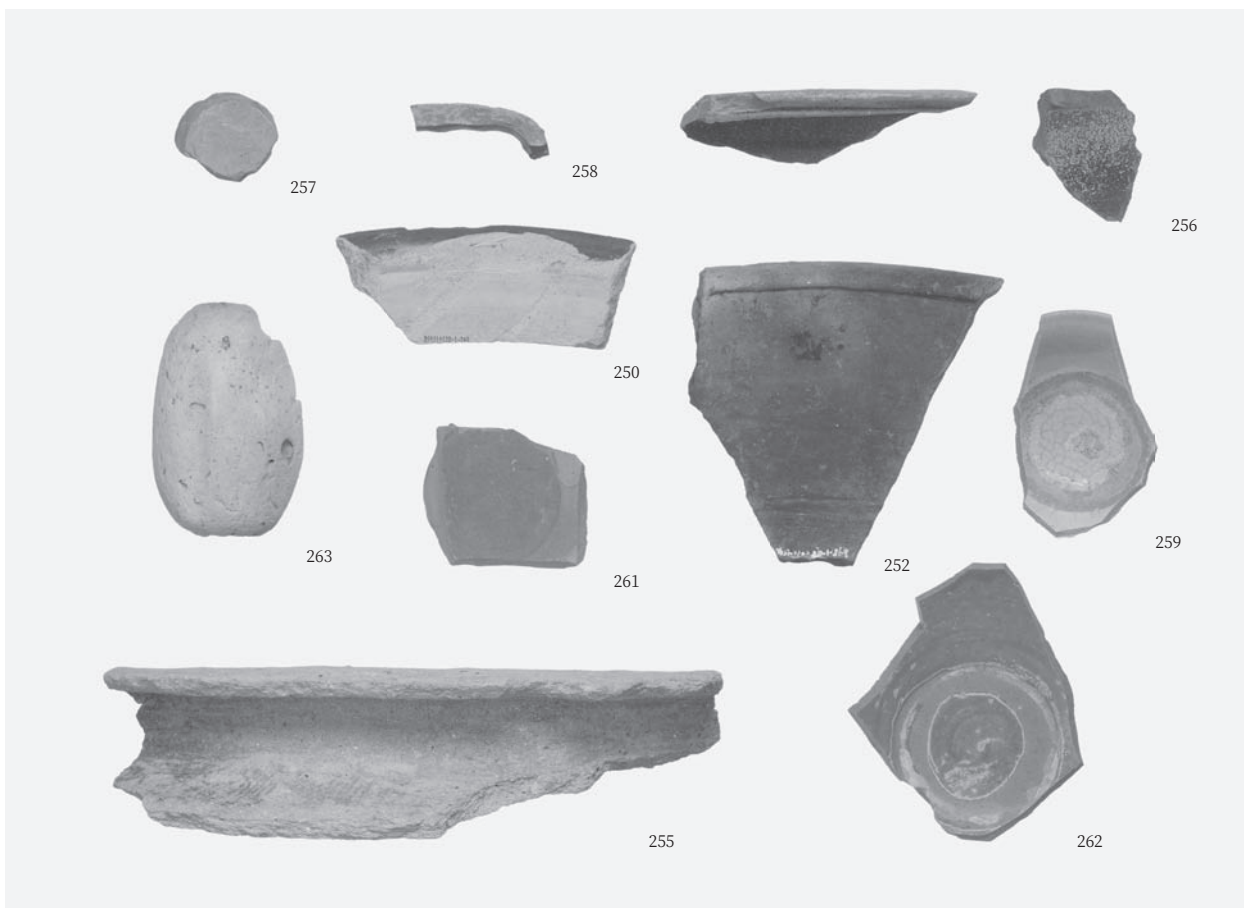


167

图版 52 微高地域 5

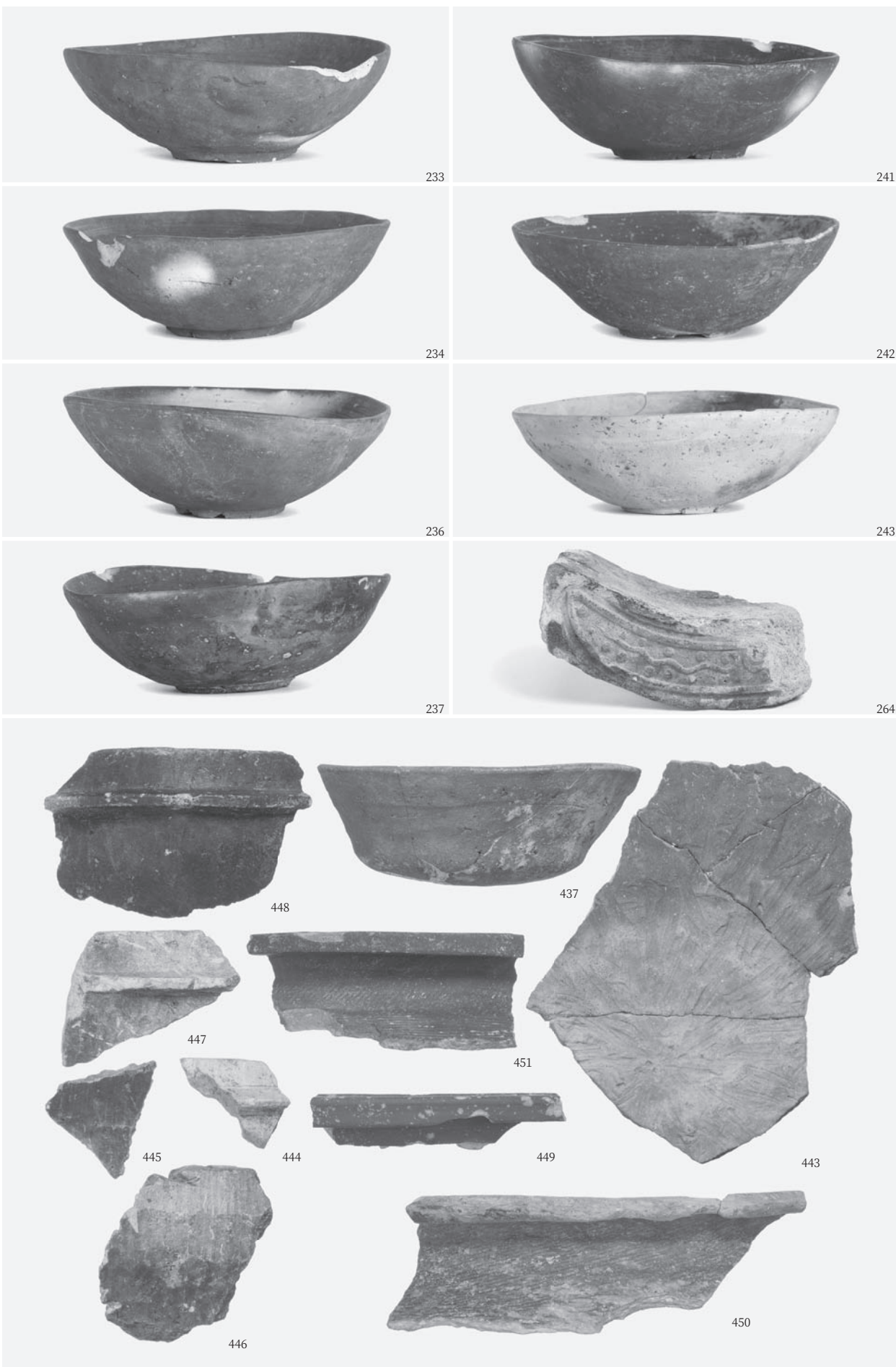








图版 56 微高地域 5





267



274



268



275



271



276



272



277



273



278



279



285



281



286



284



287

图版 58 微高地域 5



288



300



289



301



291



302



293



304



294



305



295



306



296



307

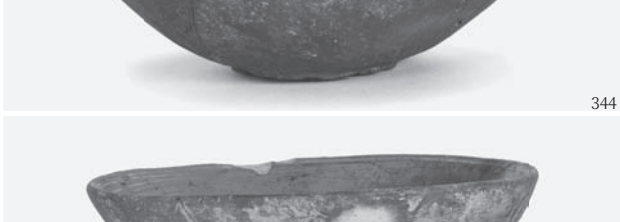


299



308









390



377



379



370



381



372



382



373



383



374



384



375



385



376



386



387



399



388



401



389



402



391



404



393



405



394



406



396



407



397



408



398



409



410



411



412



413



414



423



424



427



428



429



430



431



432



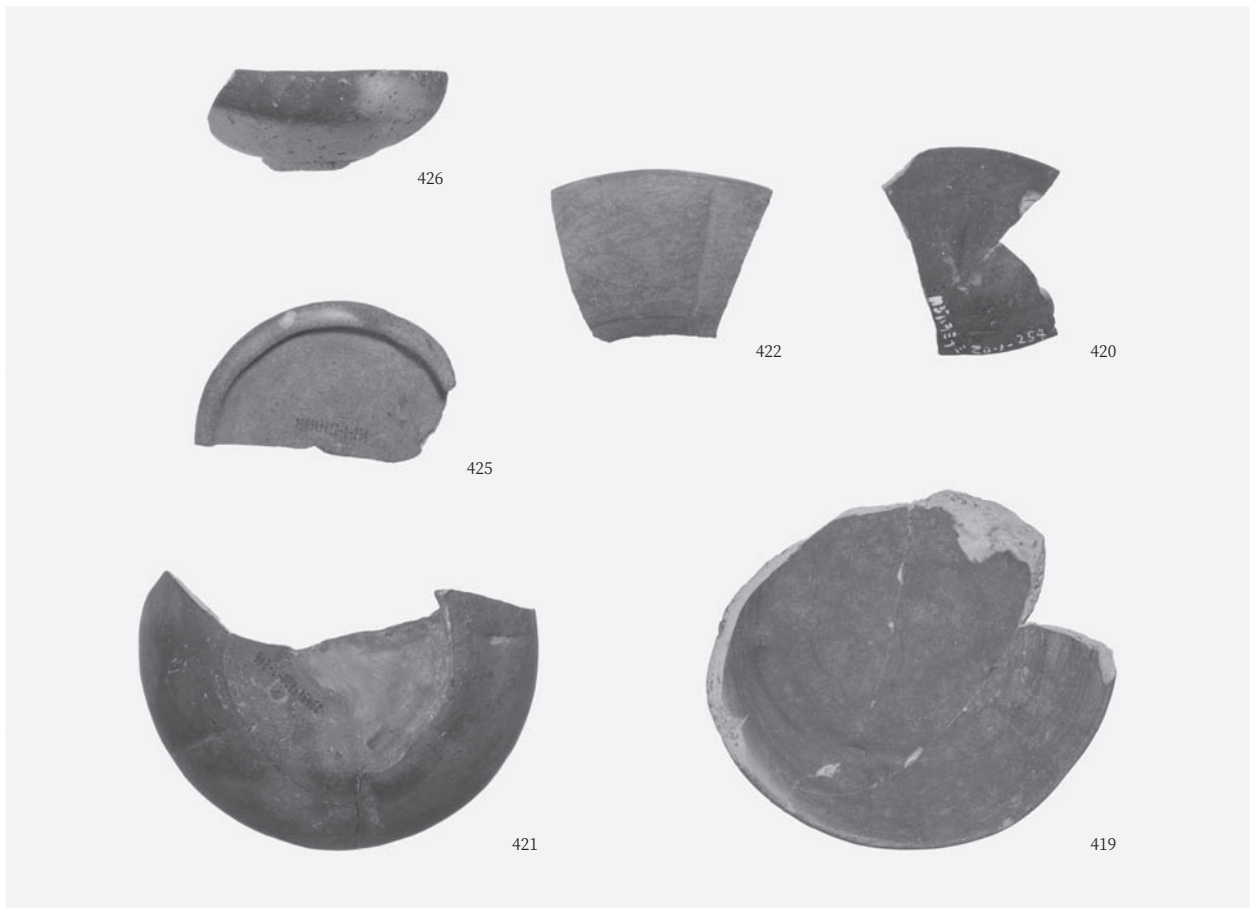
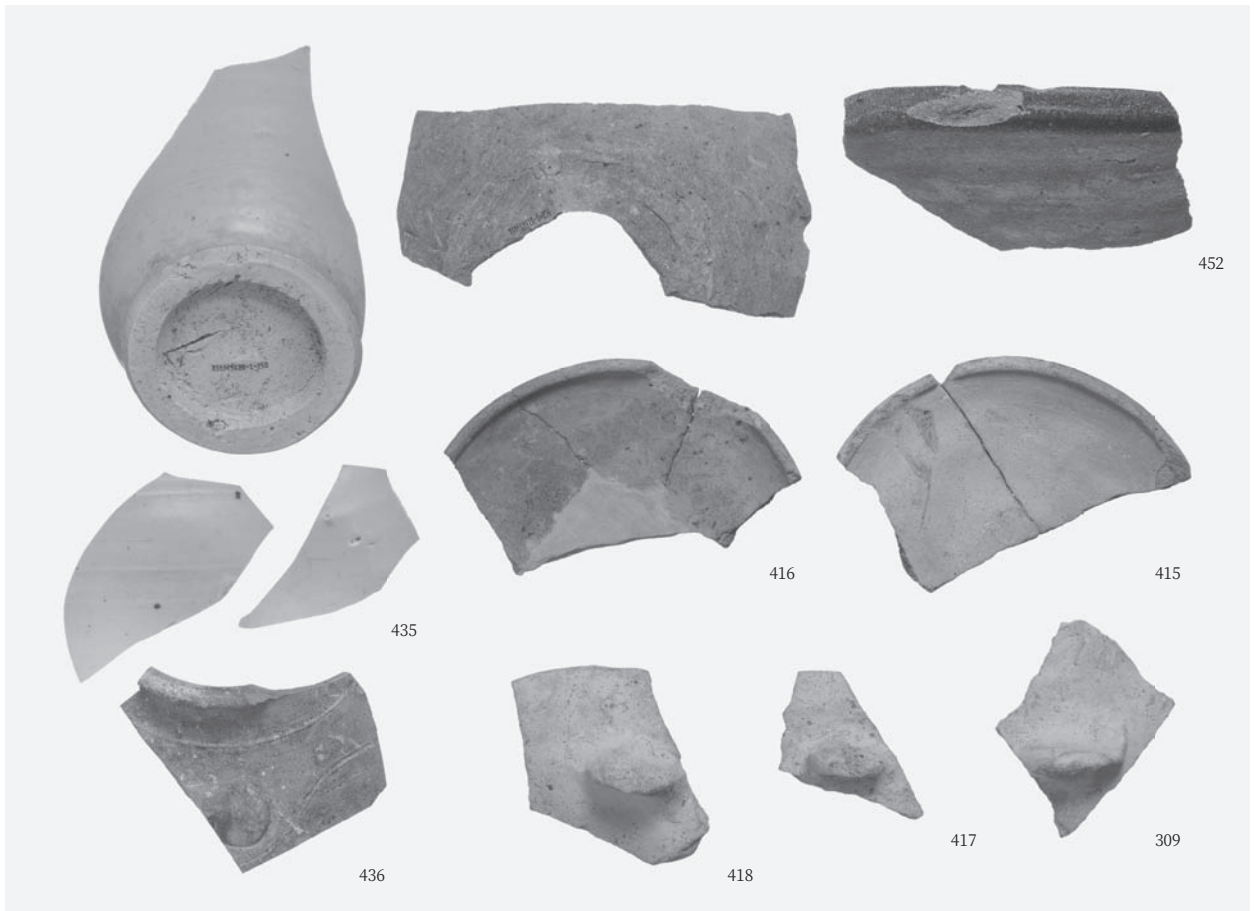
433

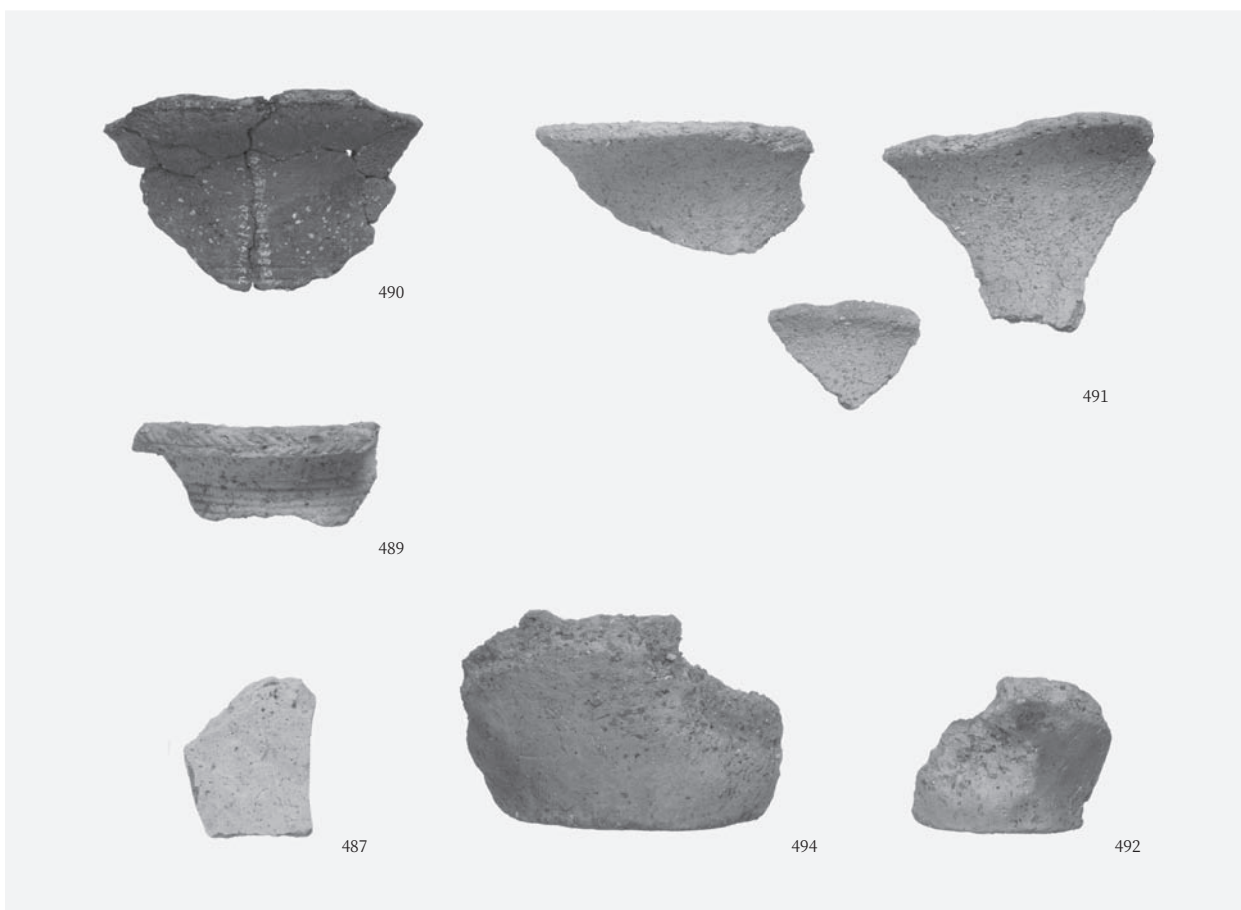
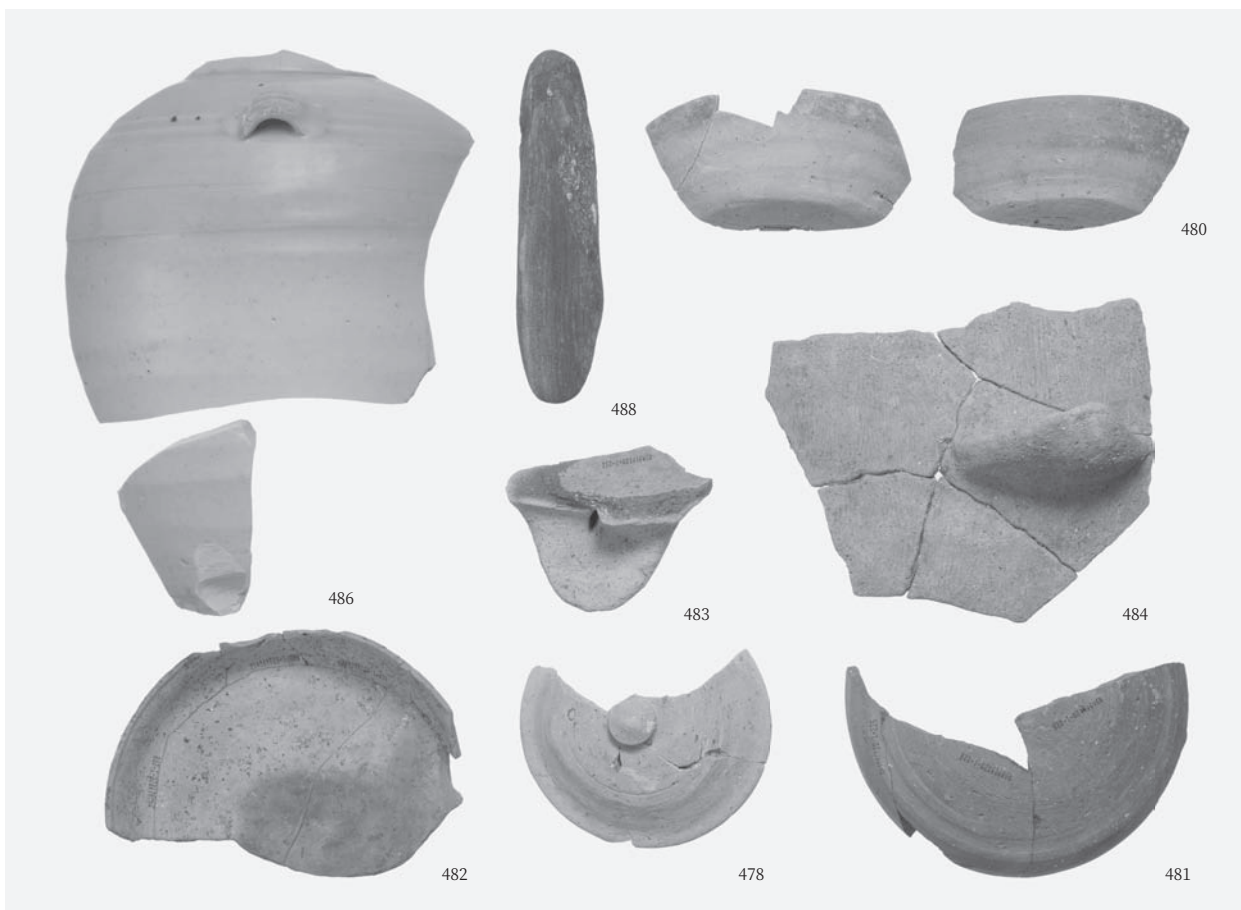


434

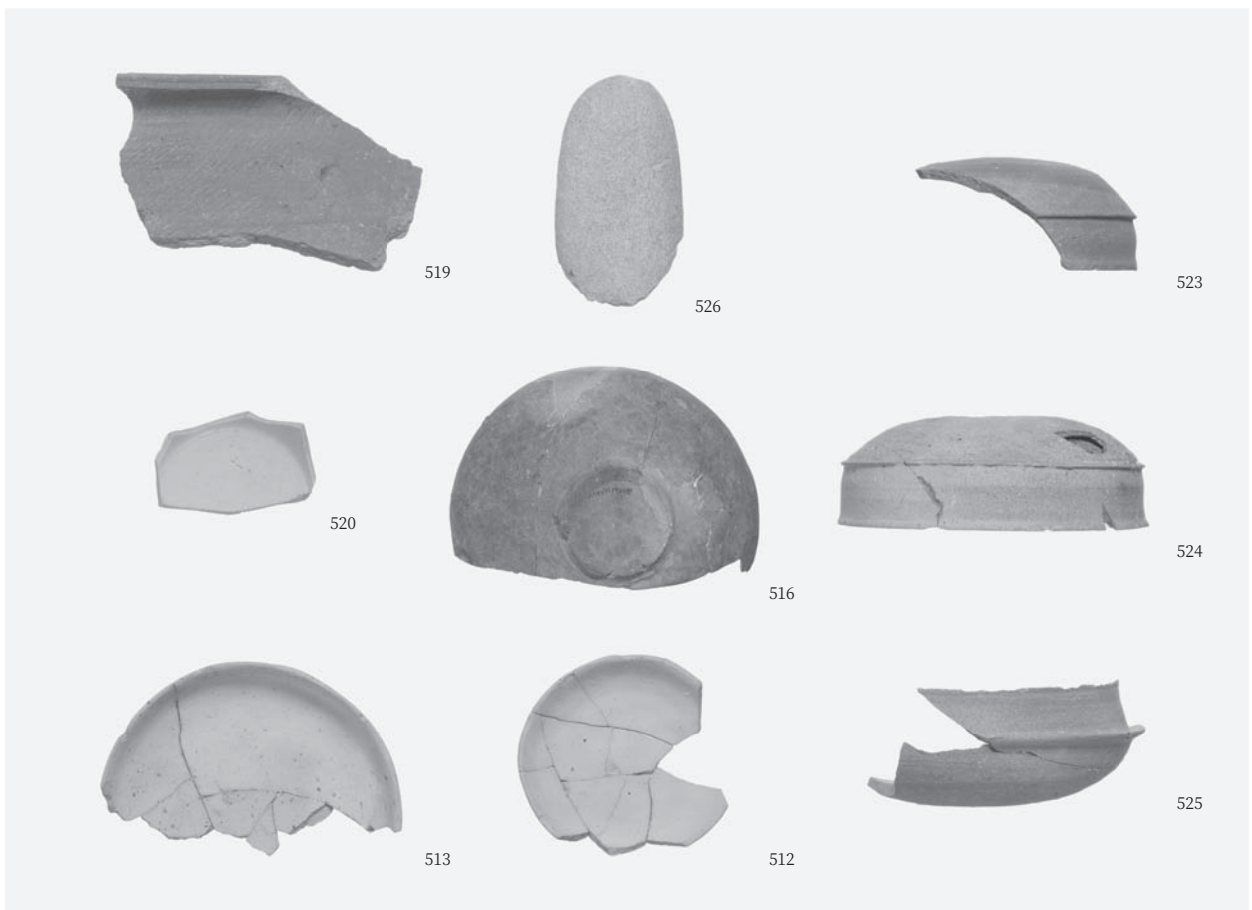
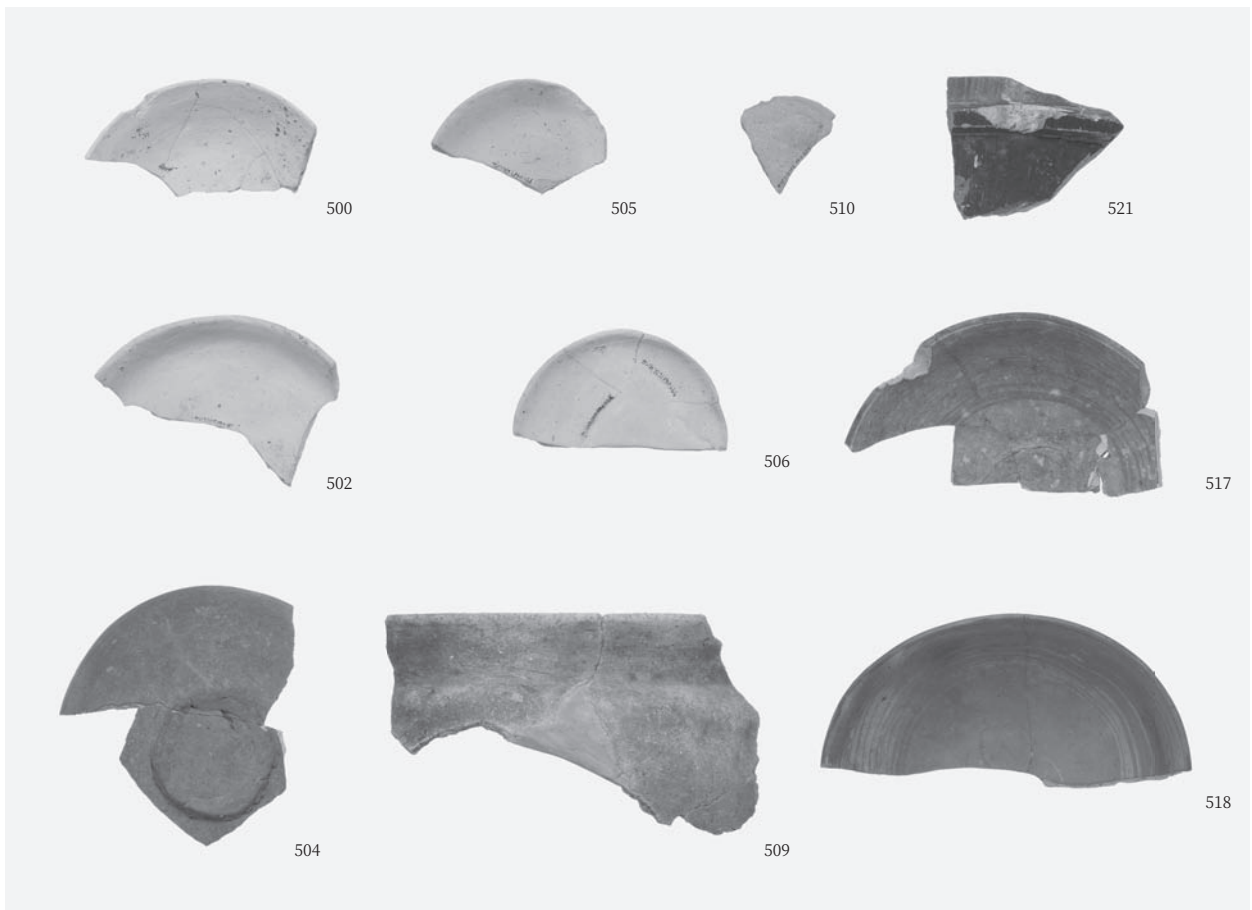


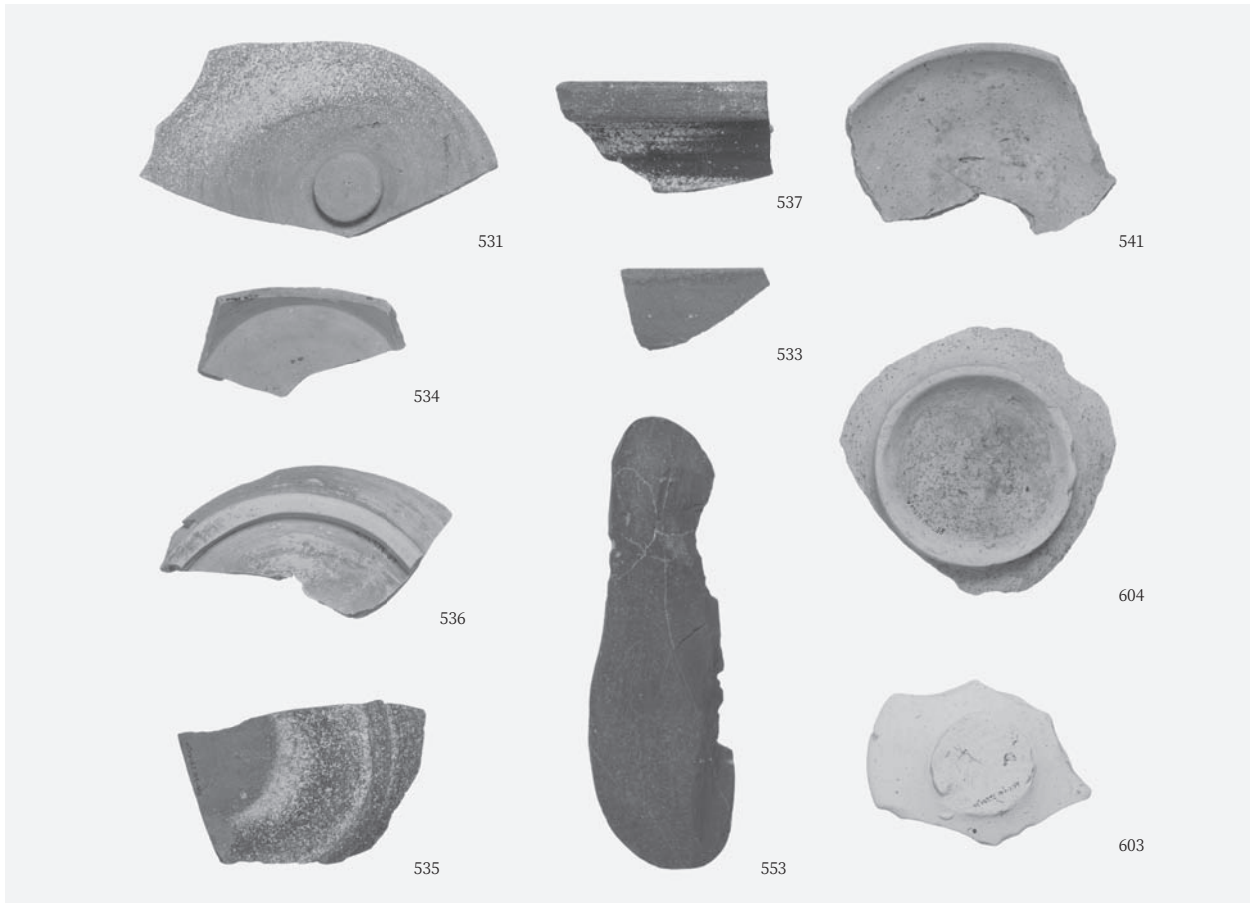
453



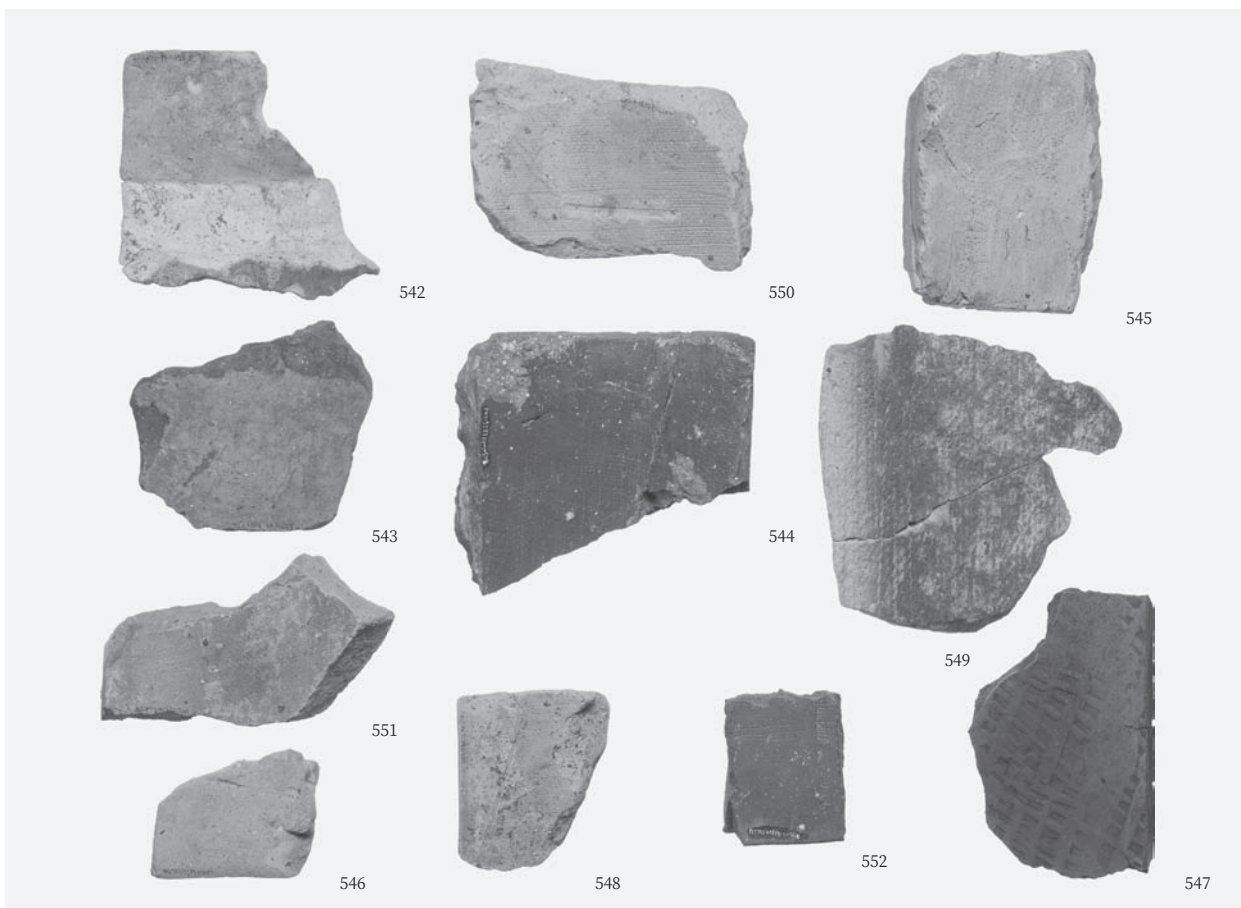


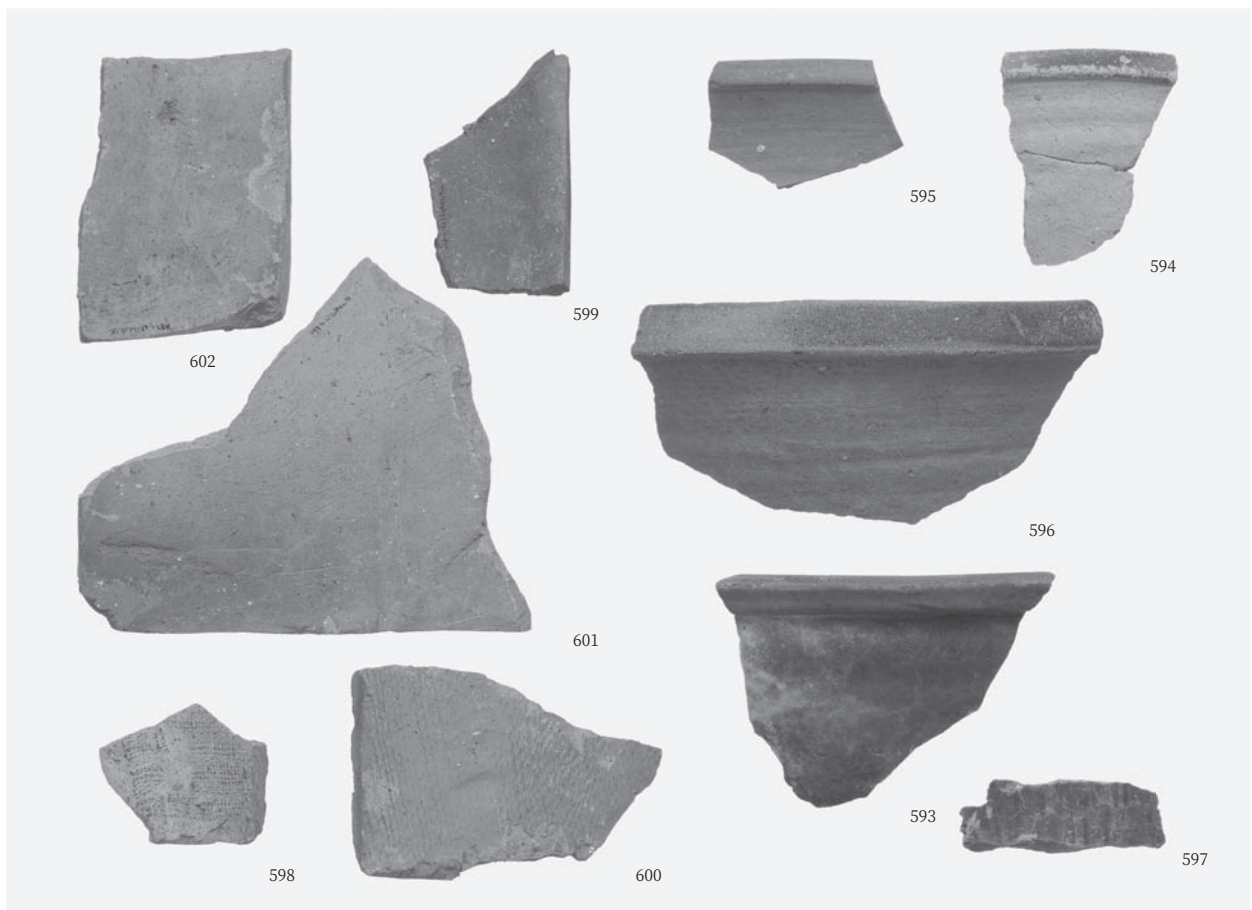
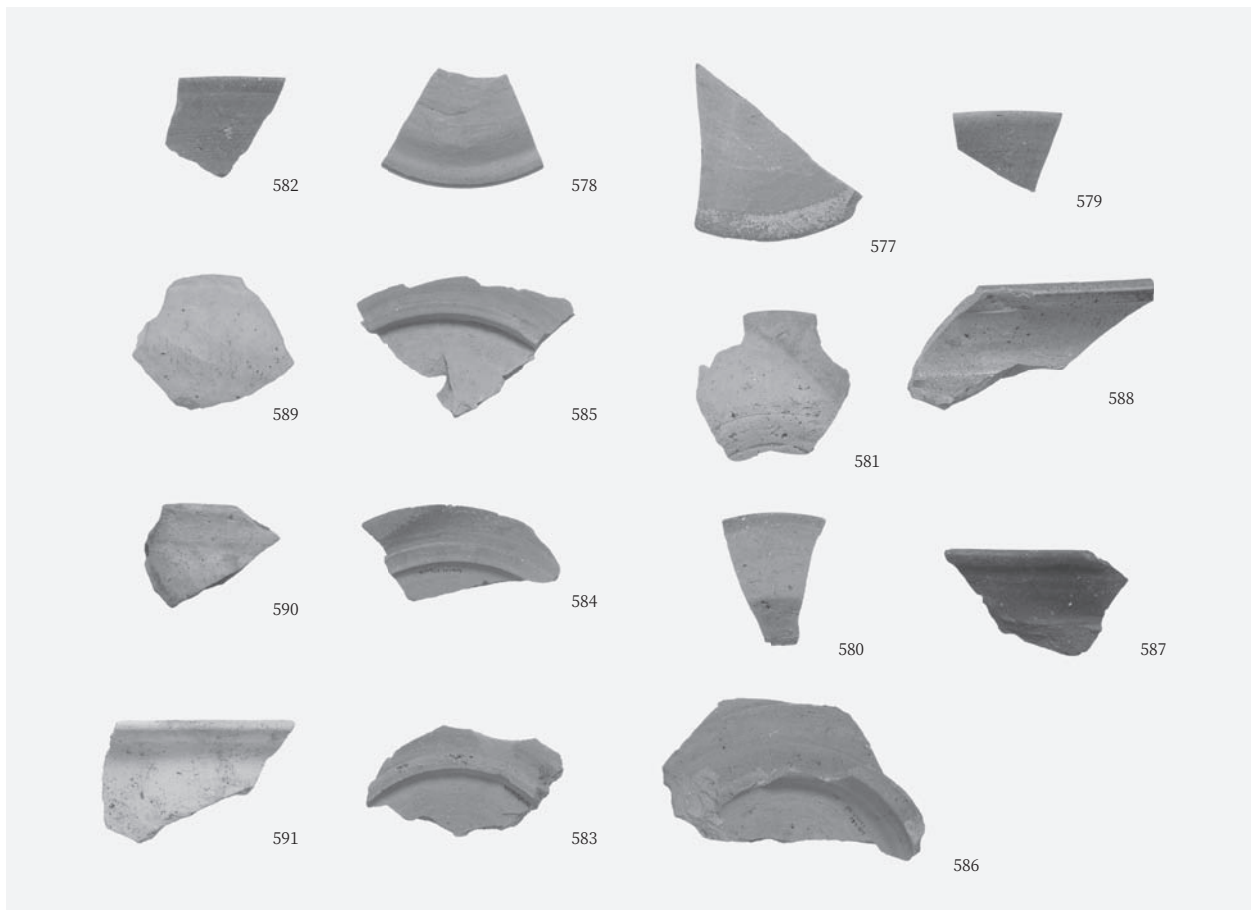




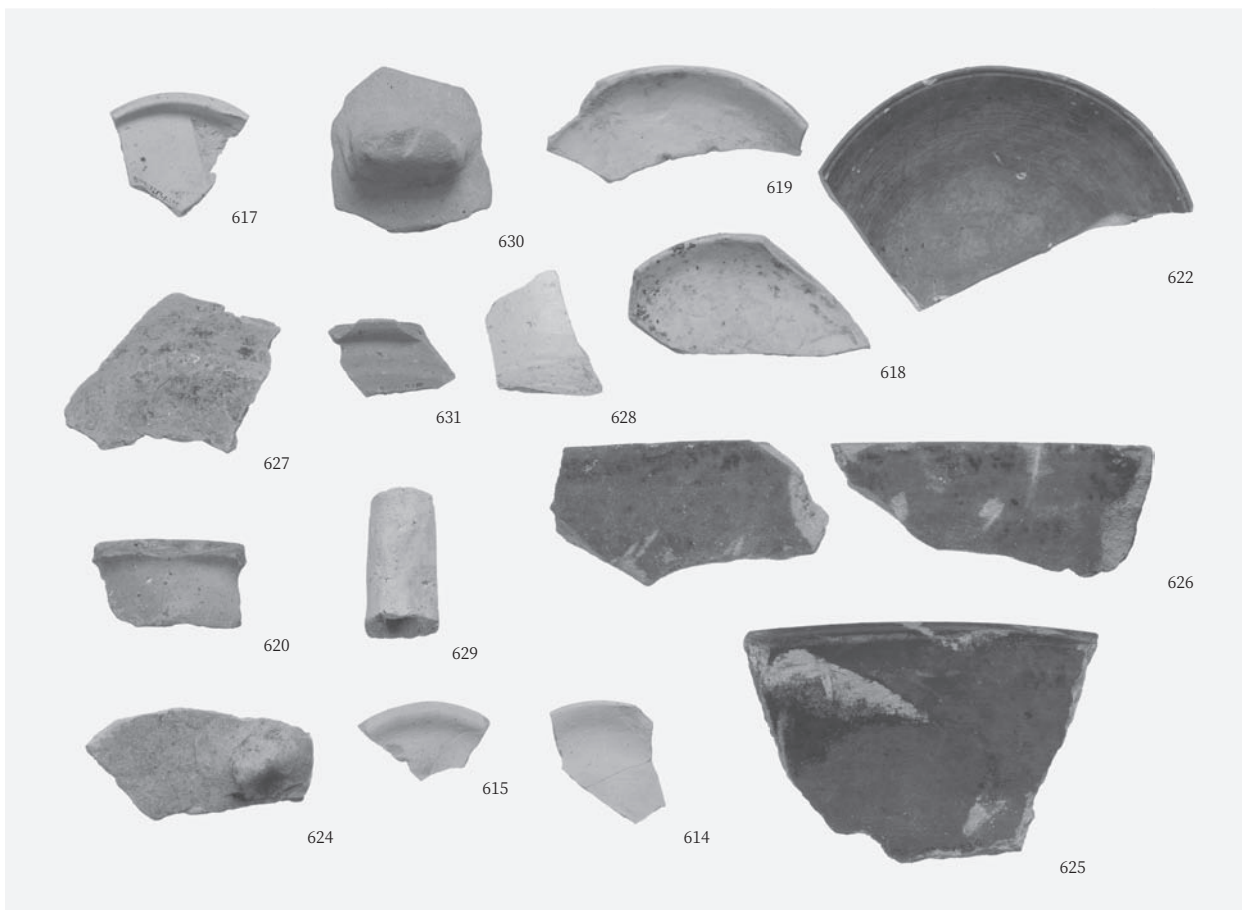
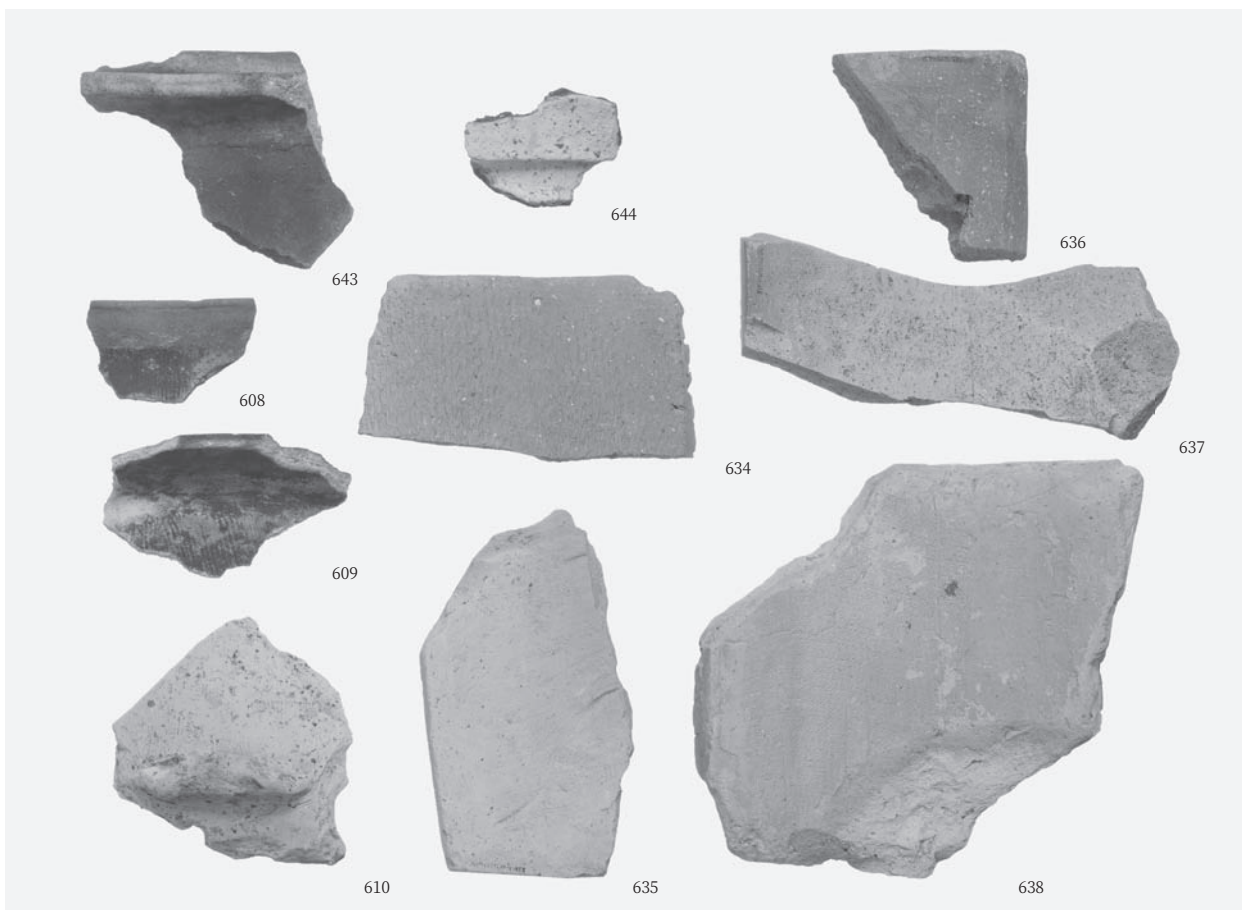


图版 70 微高地域 7





图版 72 微高地域 8





633



621



612



623



613



658



616



659



645



650



648



649



654



651



647



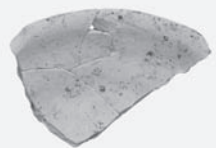
646



653



655



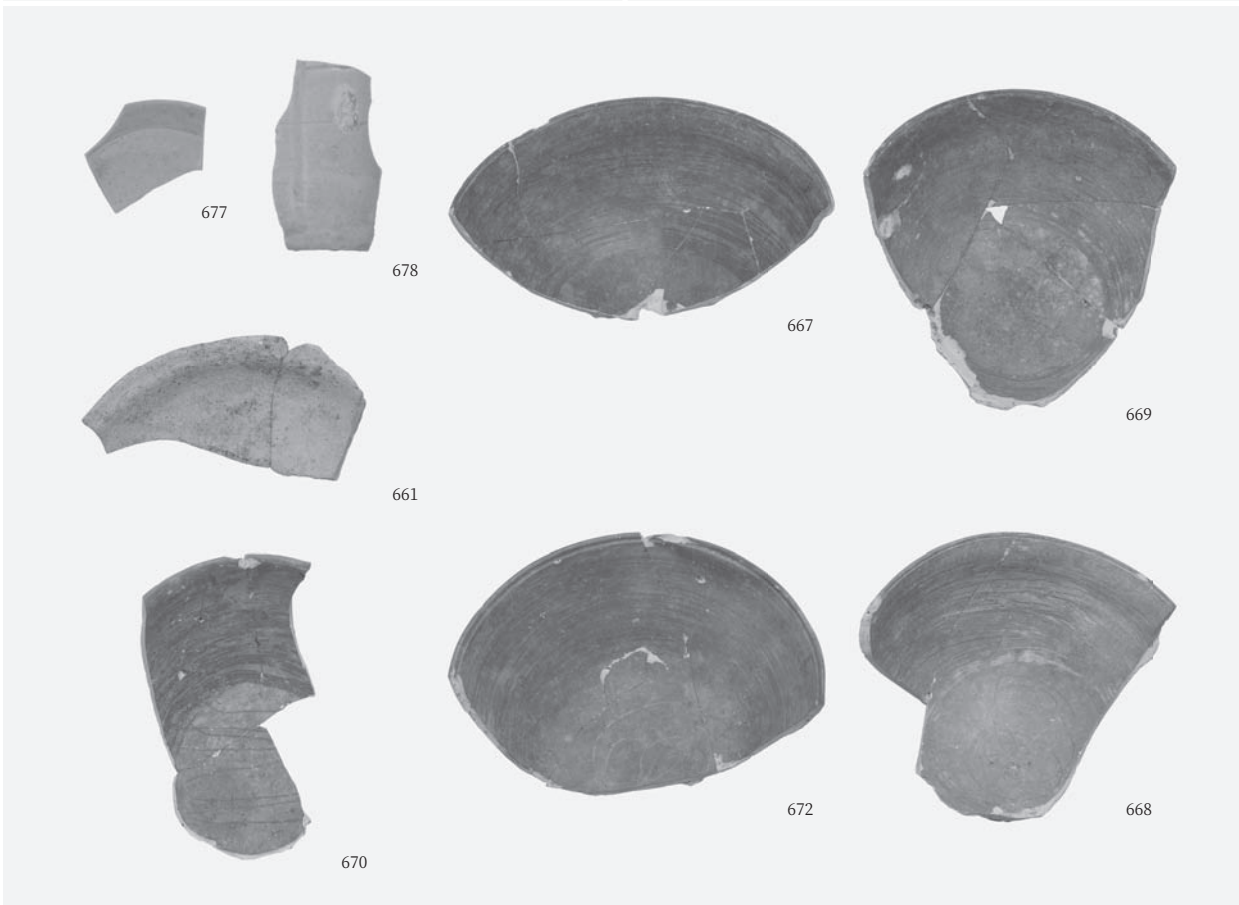
652



656



657





673



676



674



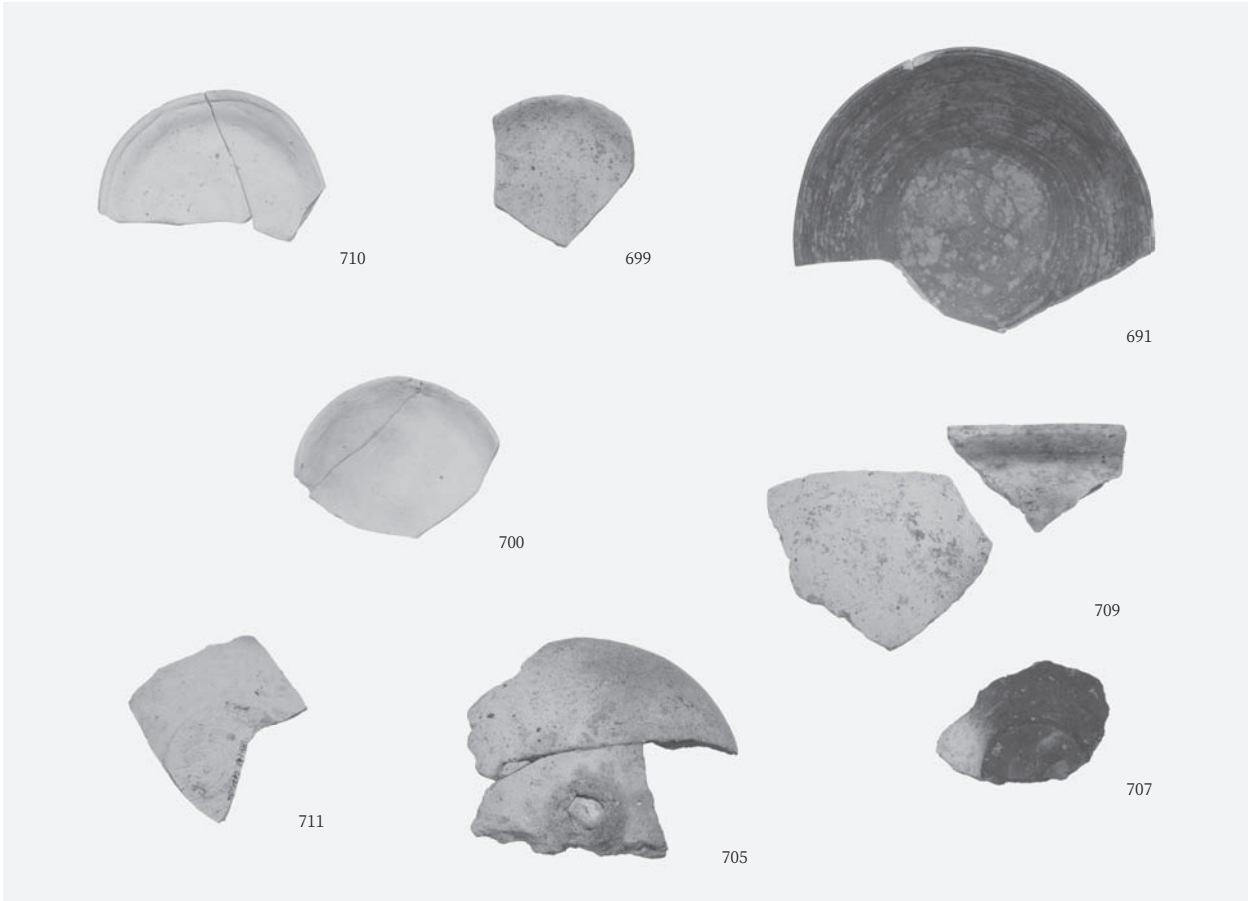
702



675



703



710

699

691

700

709

711

705

707



701



704



706



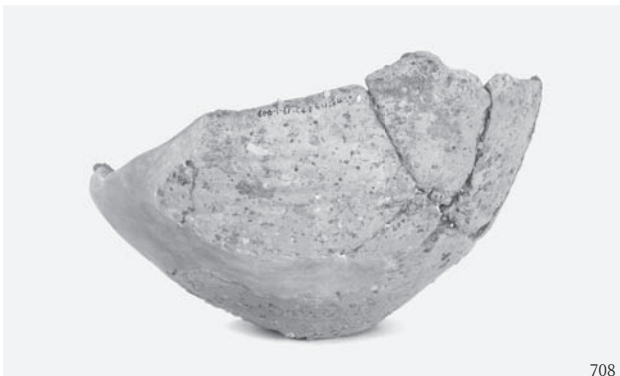
714



715



719



708



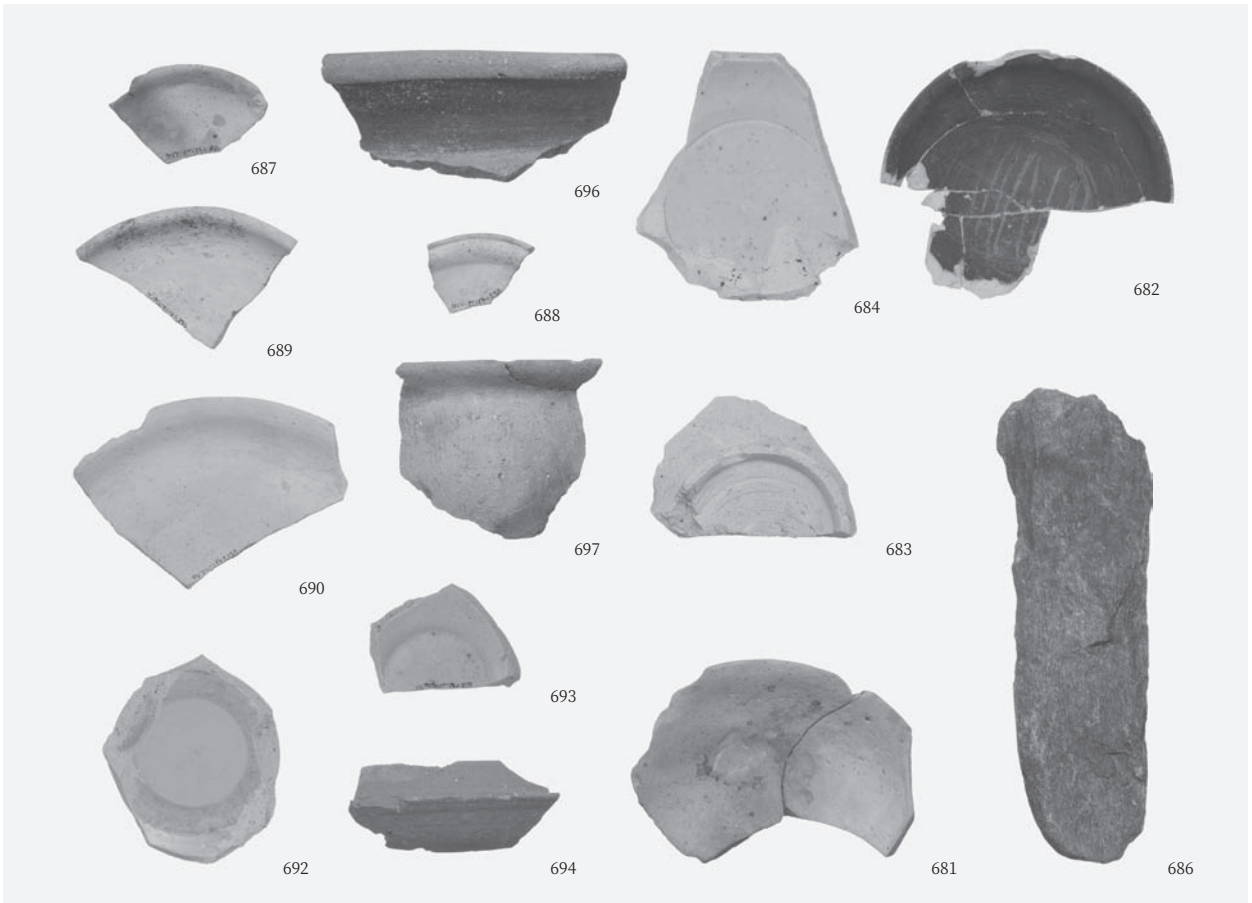
718



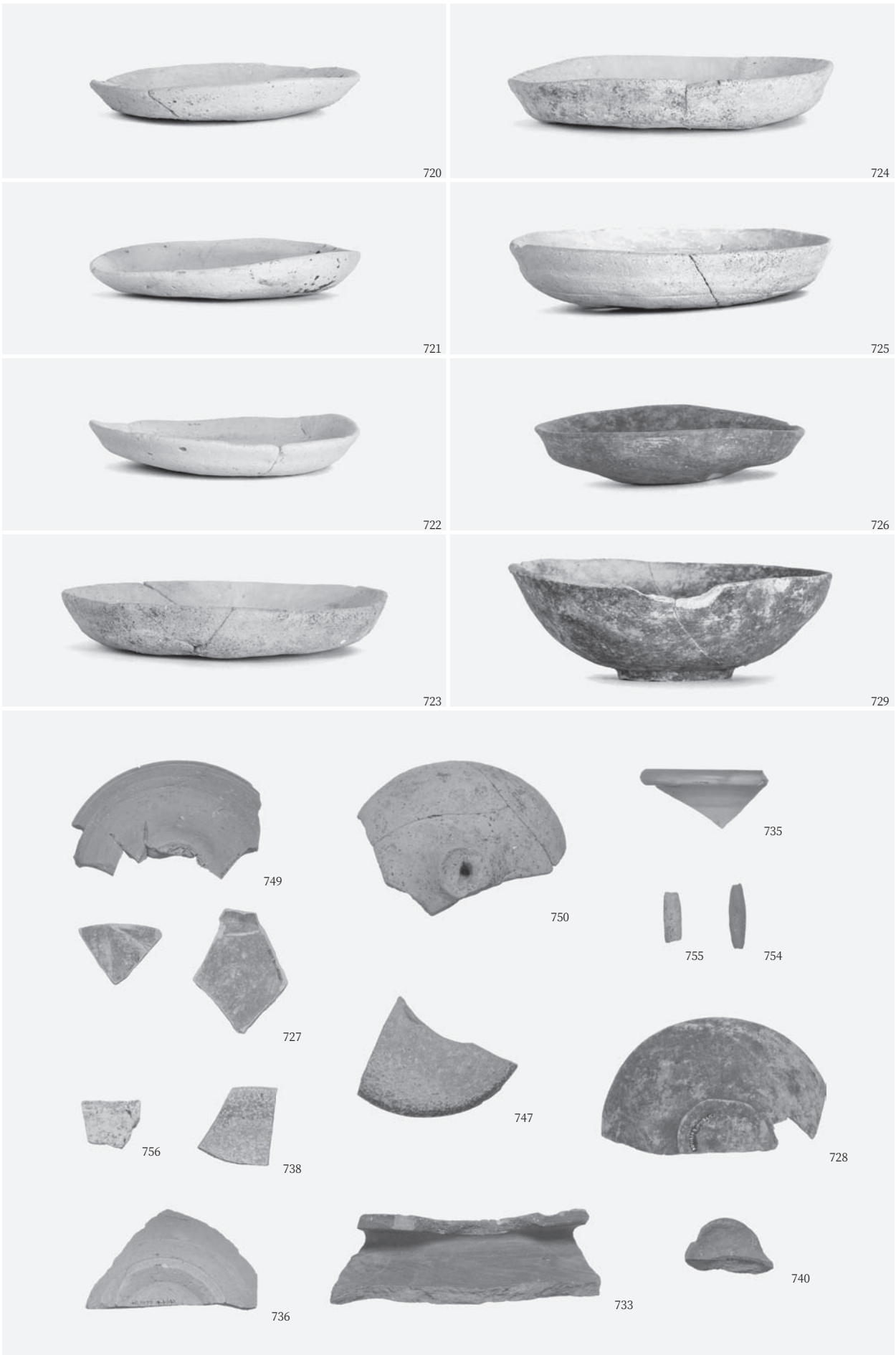
713



695



图版 78 微高地域 8





731



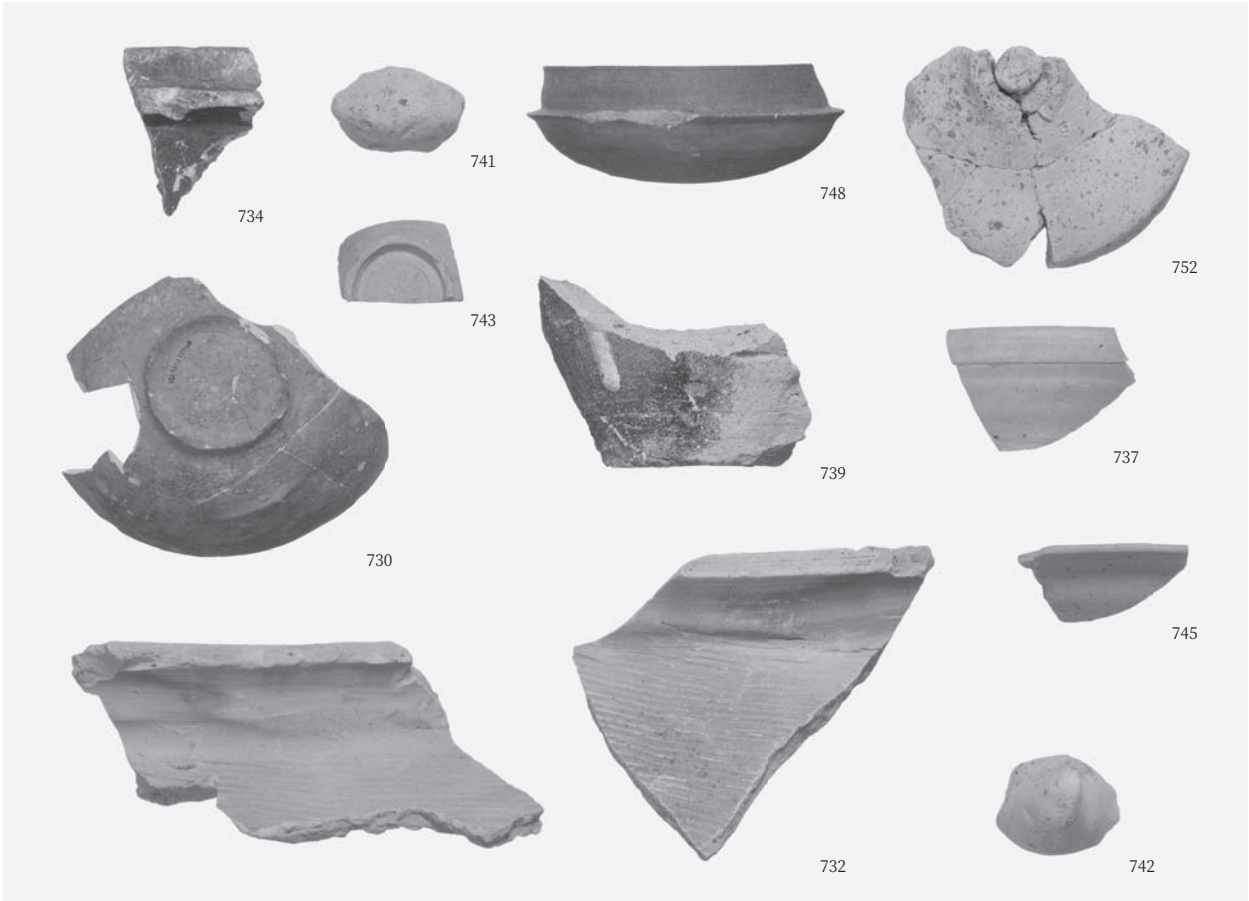
751



746



753



734

741

748

752

743

739

737

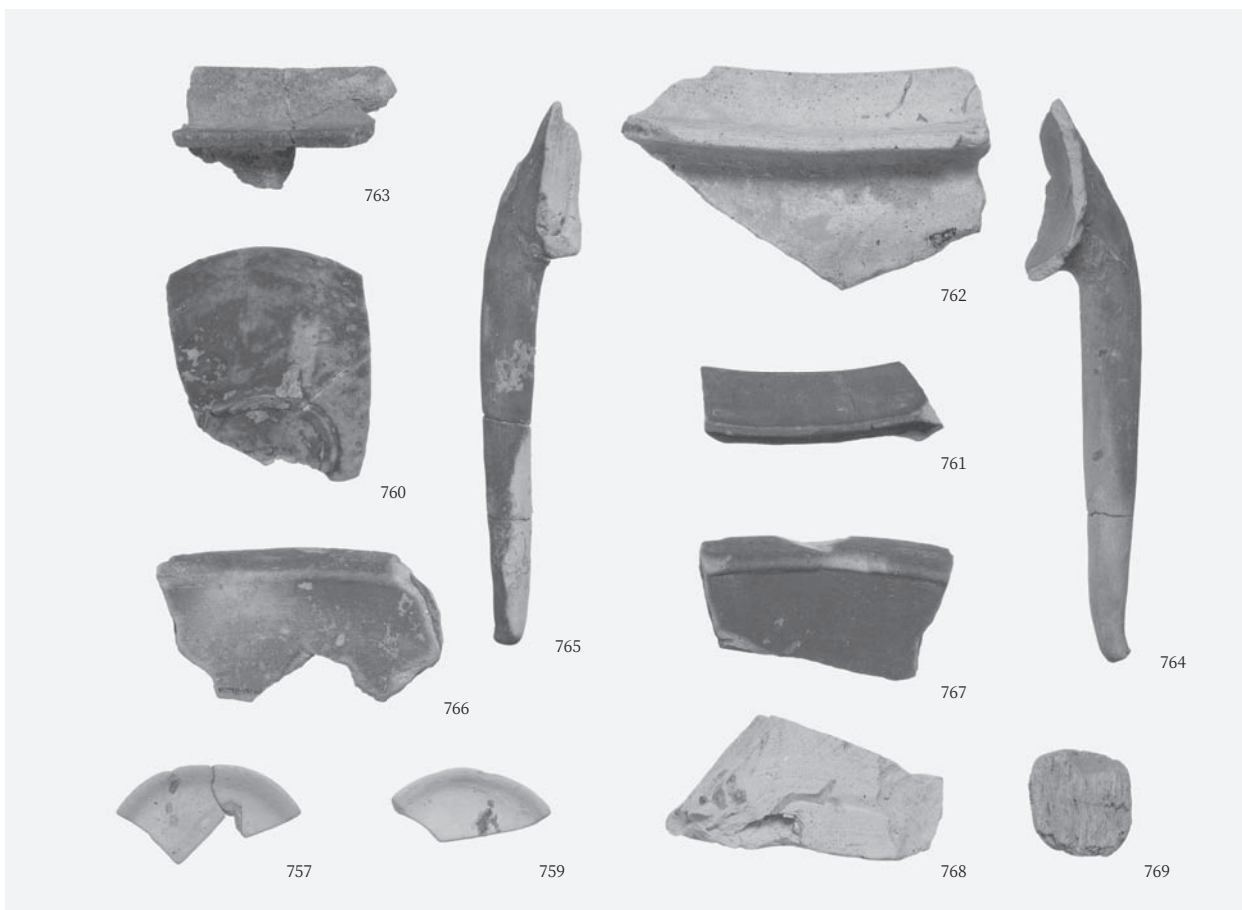
730

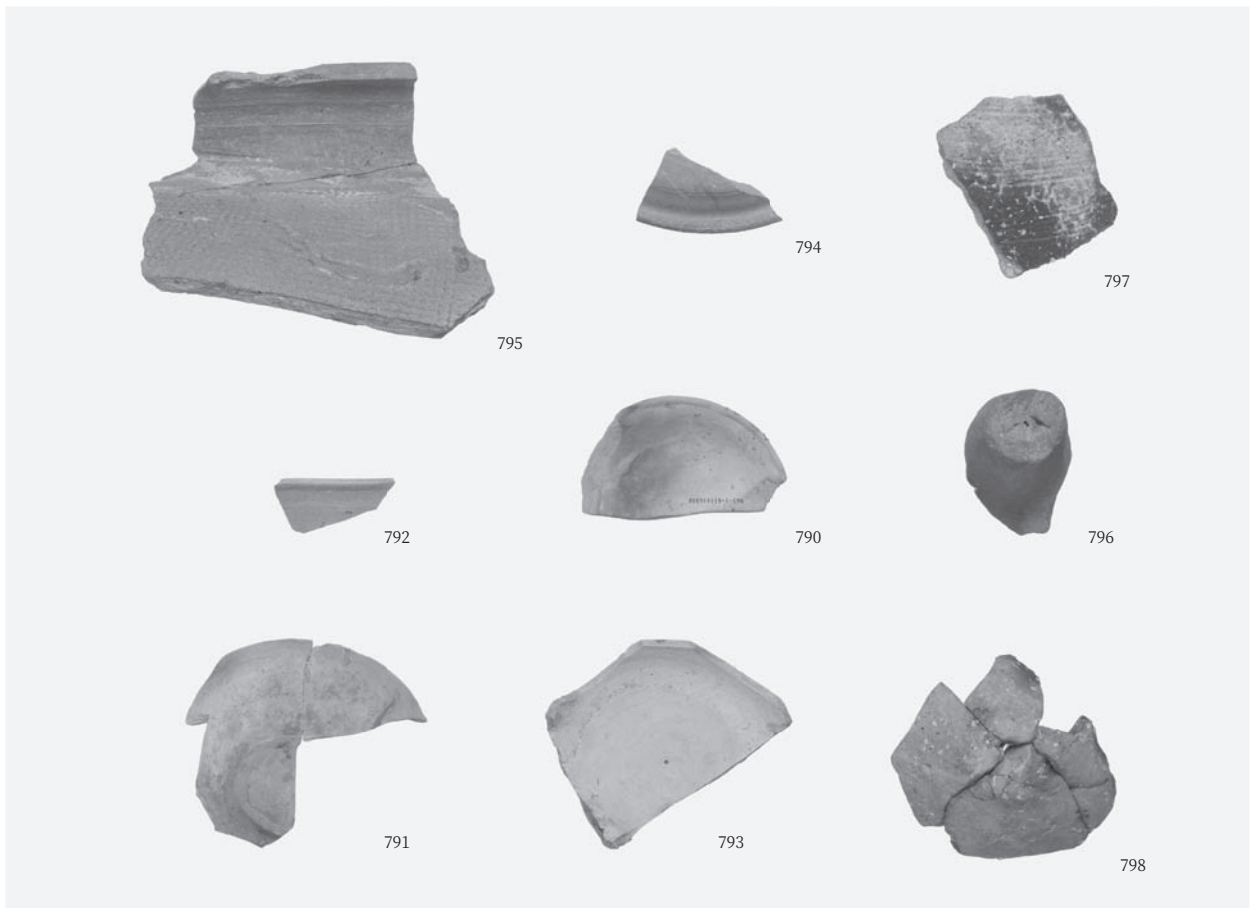
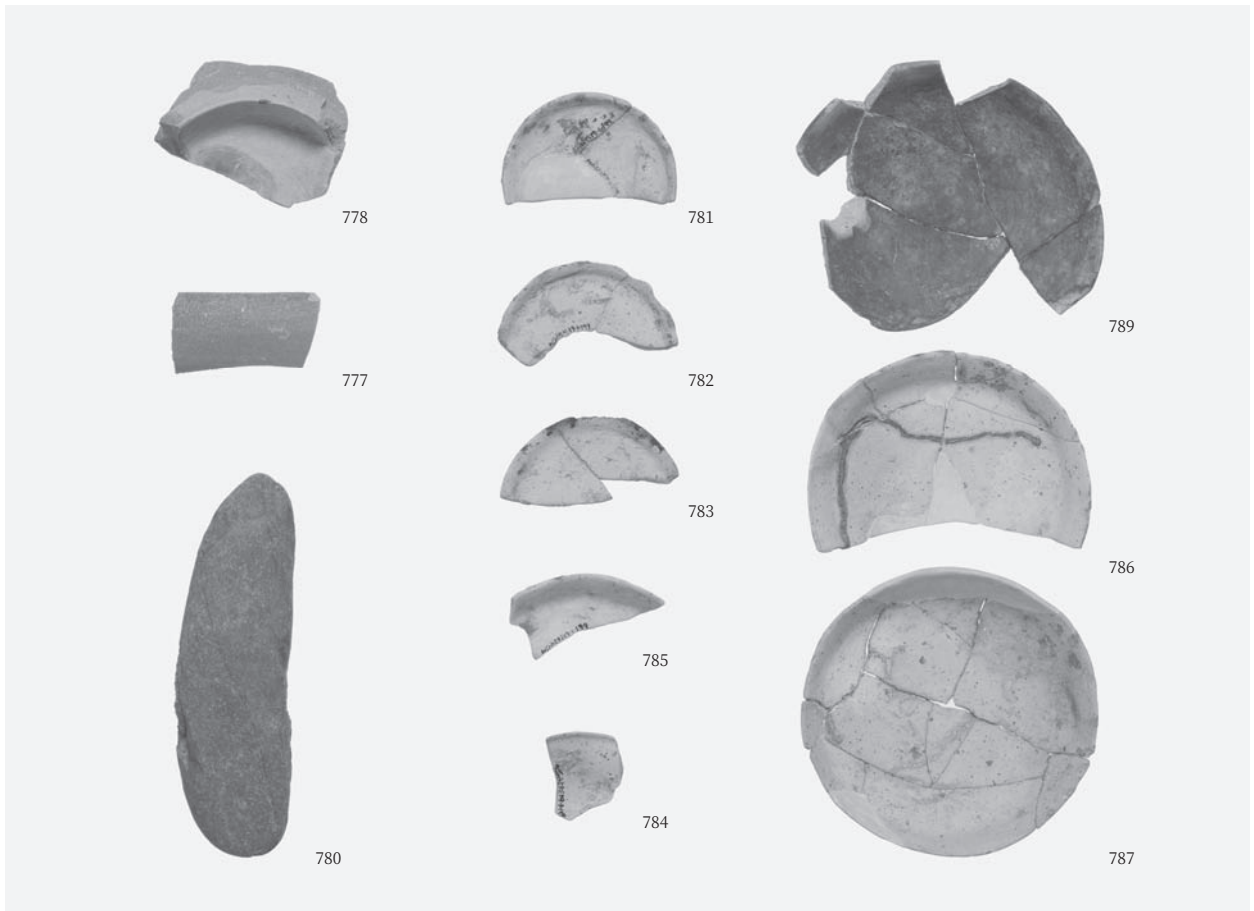
745

732

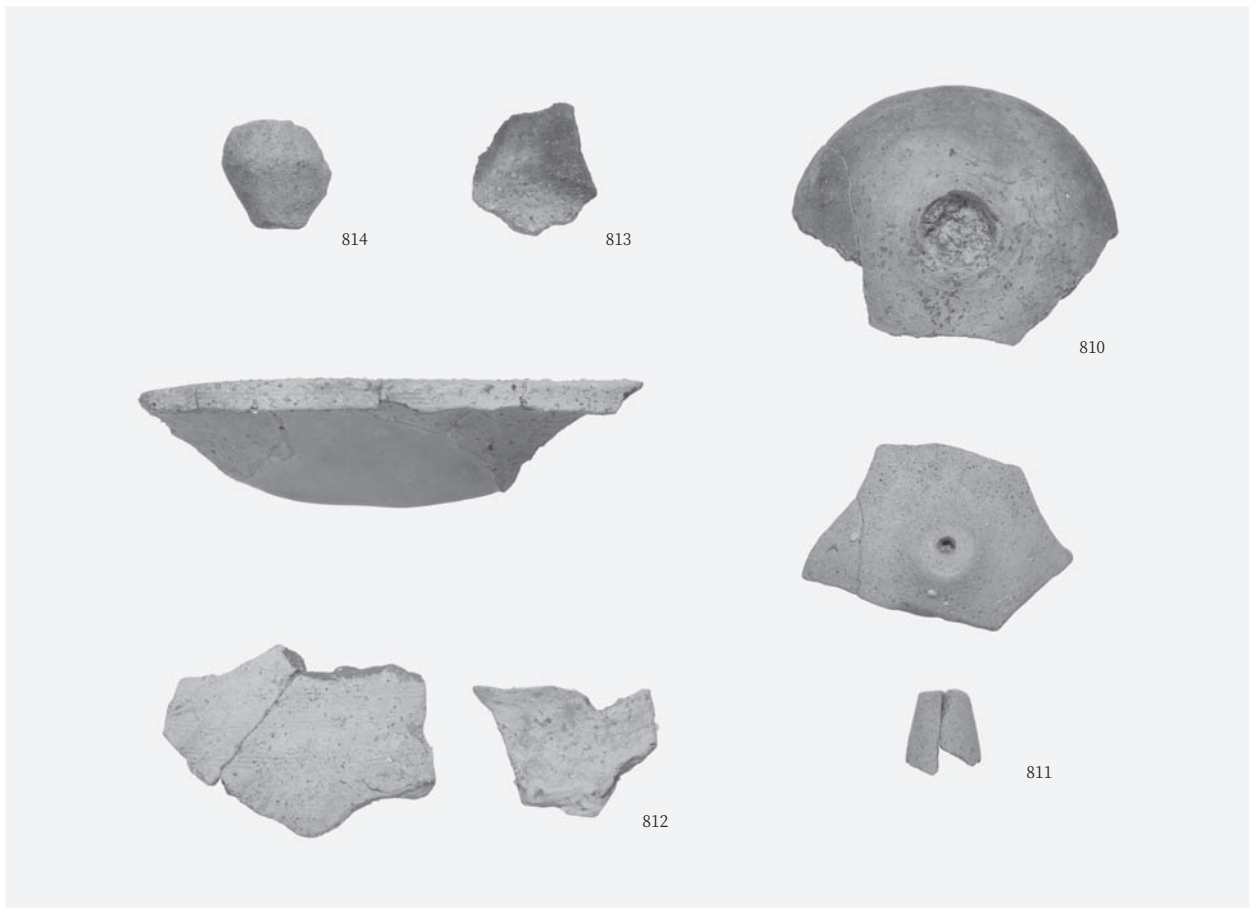
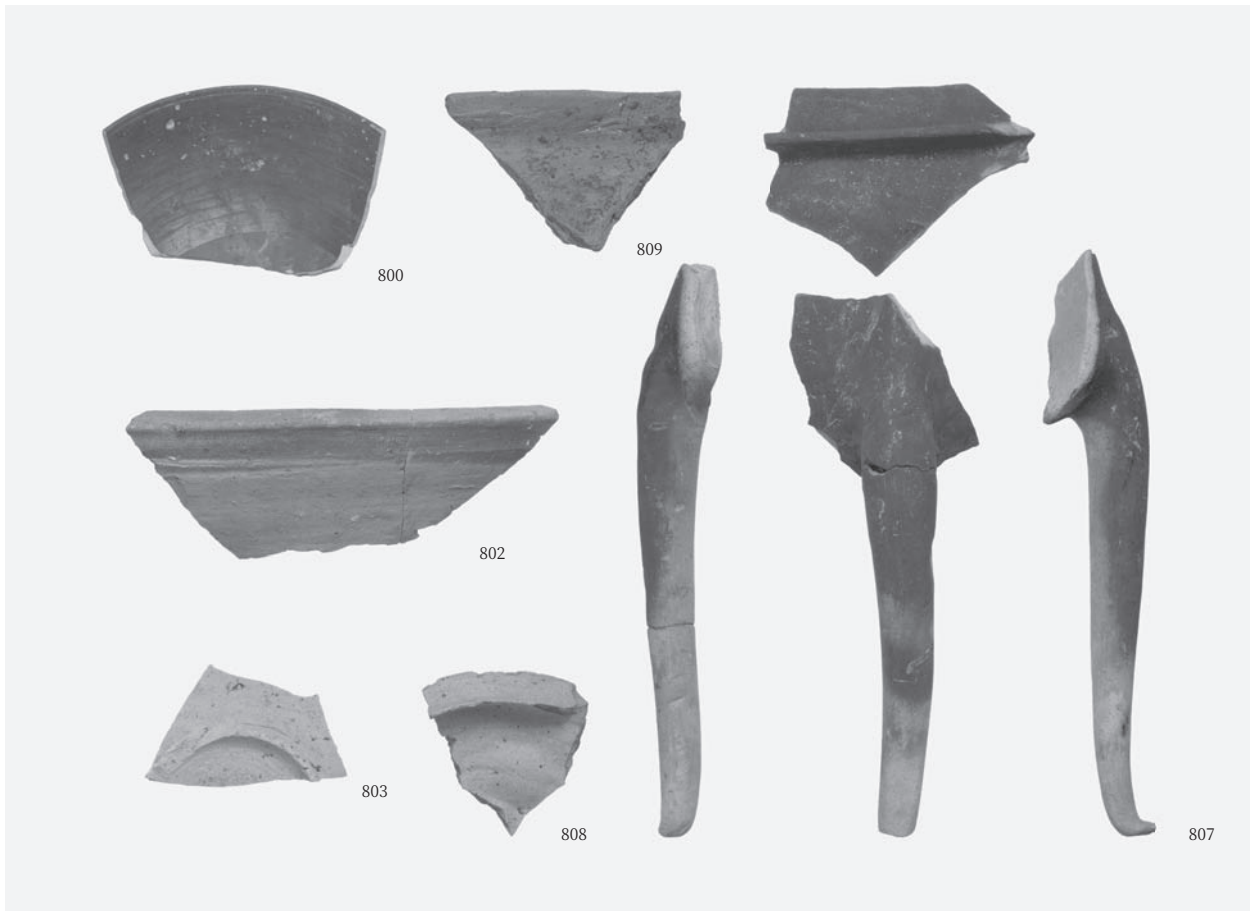
742

图版 80 低地域 1

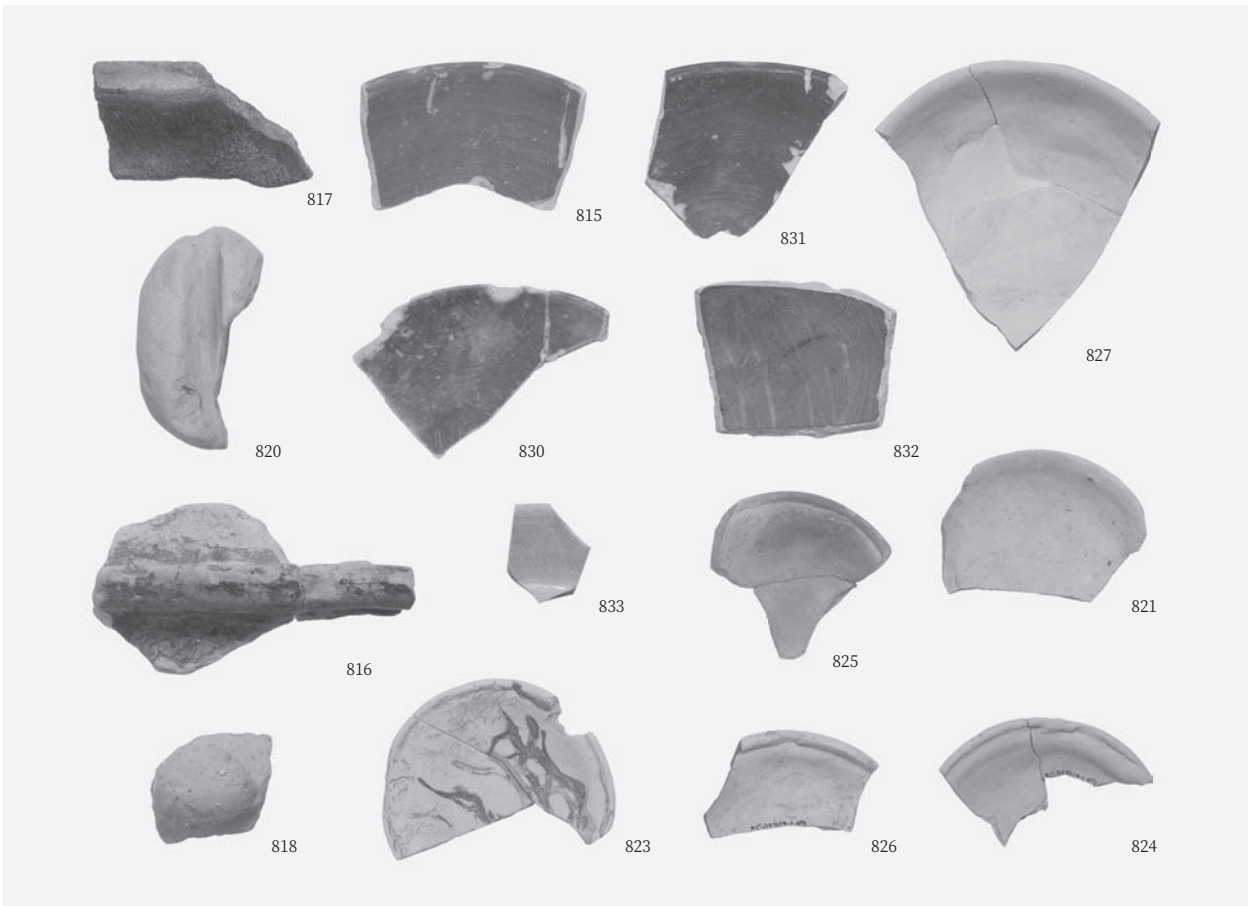


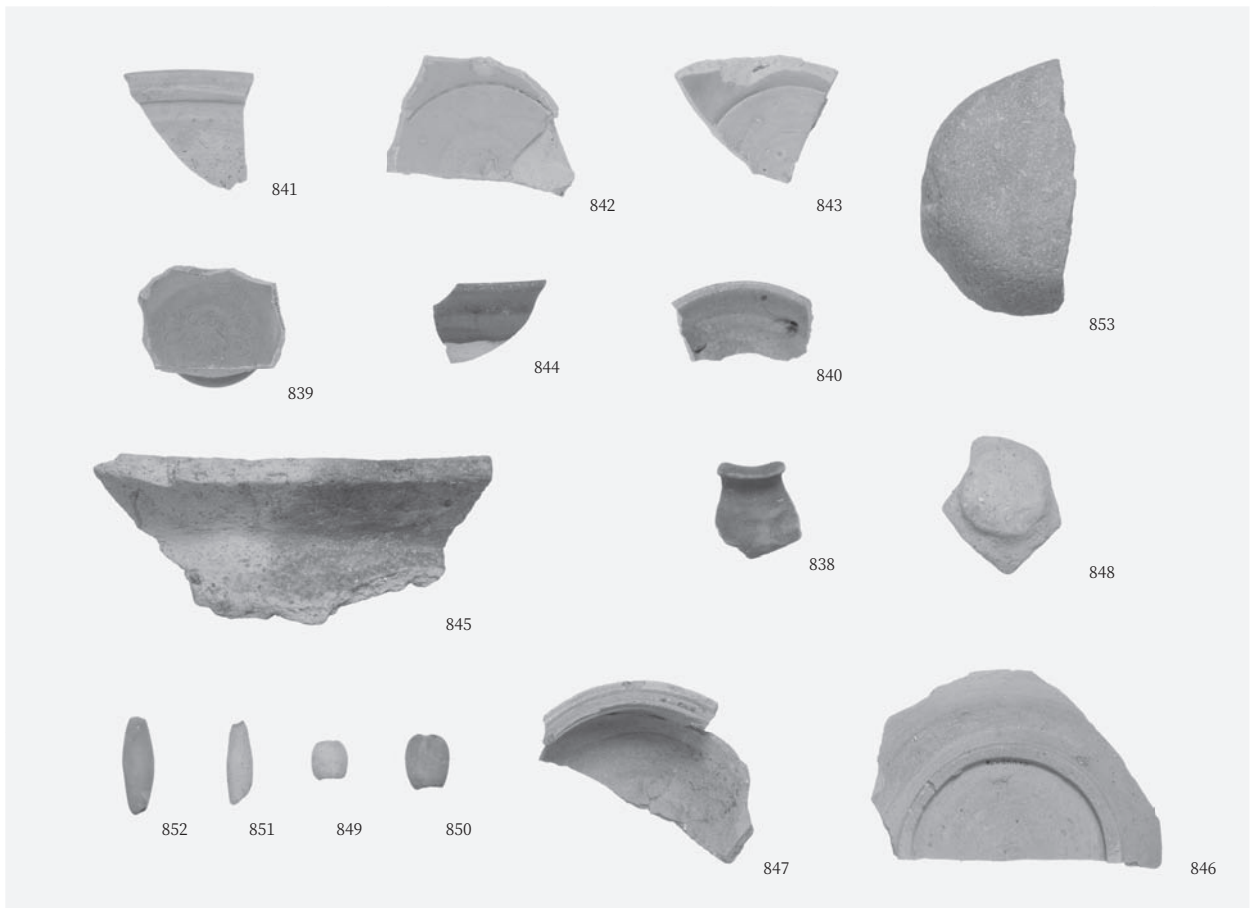
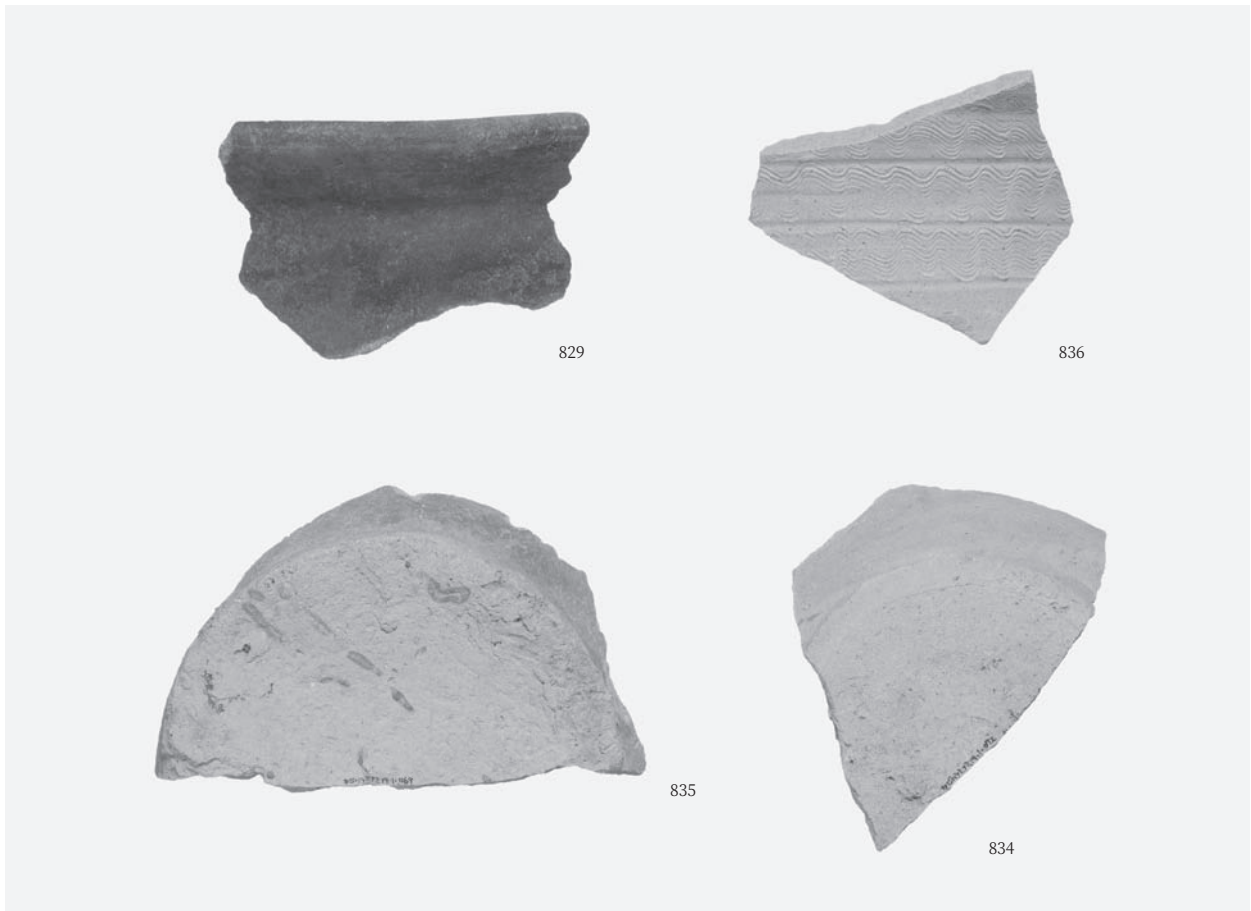






图版 84 低地域 3







854



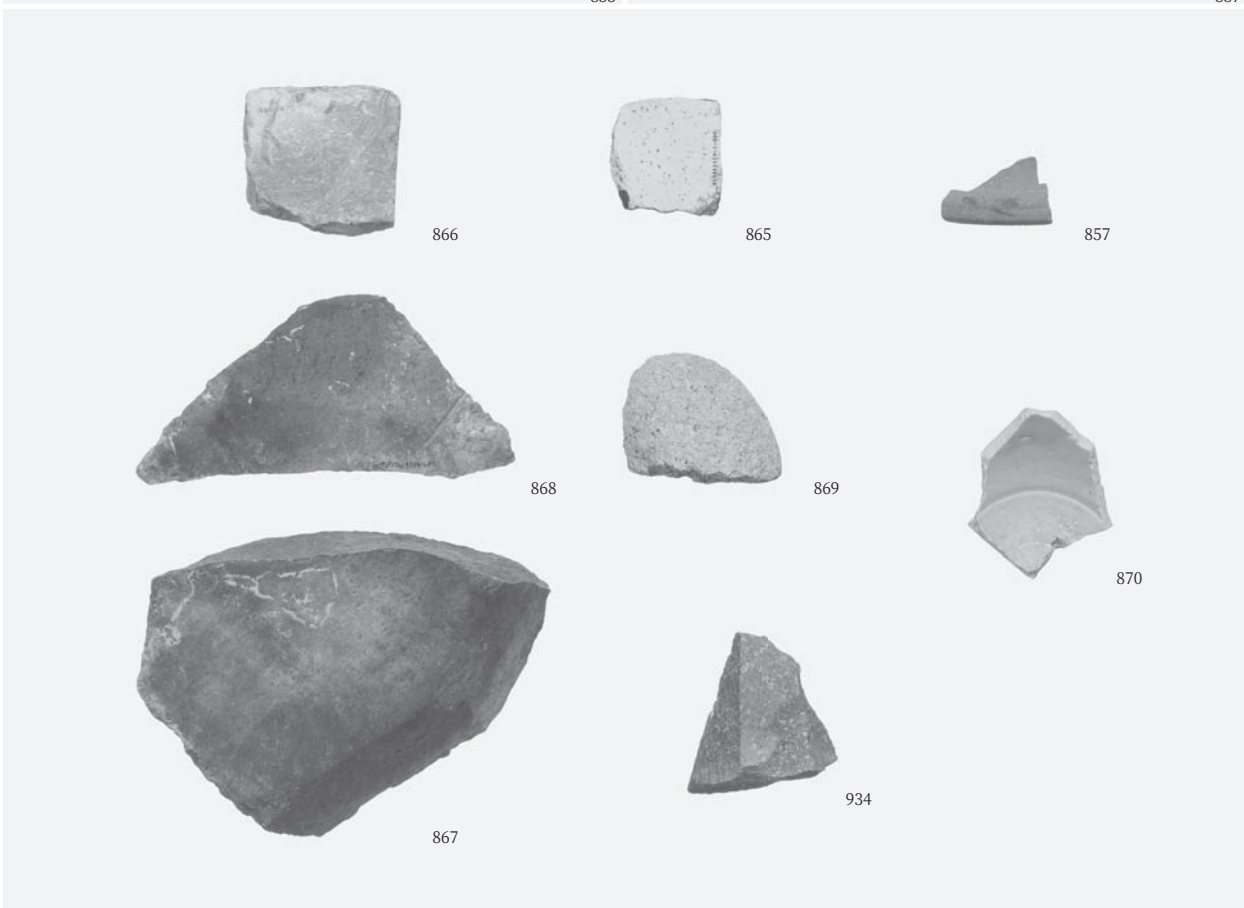
856

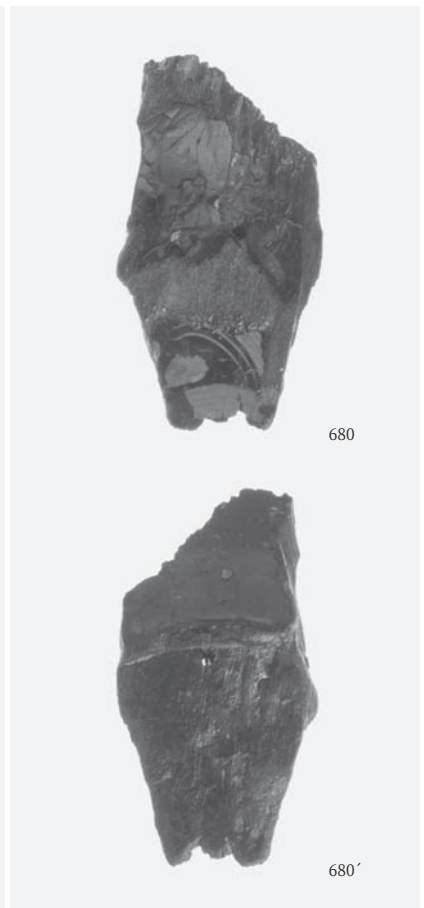
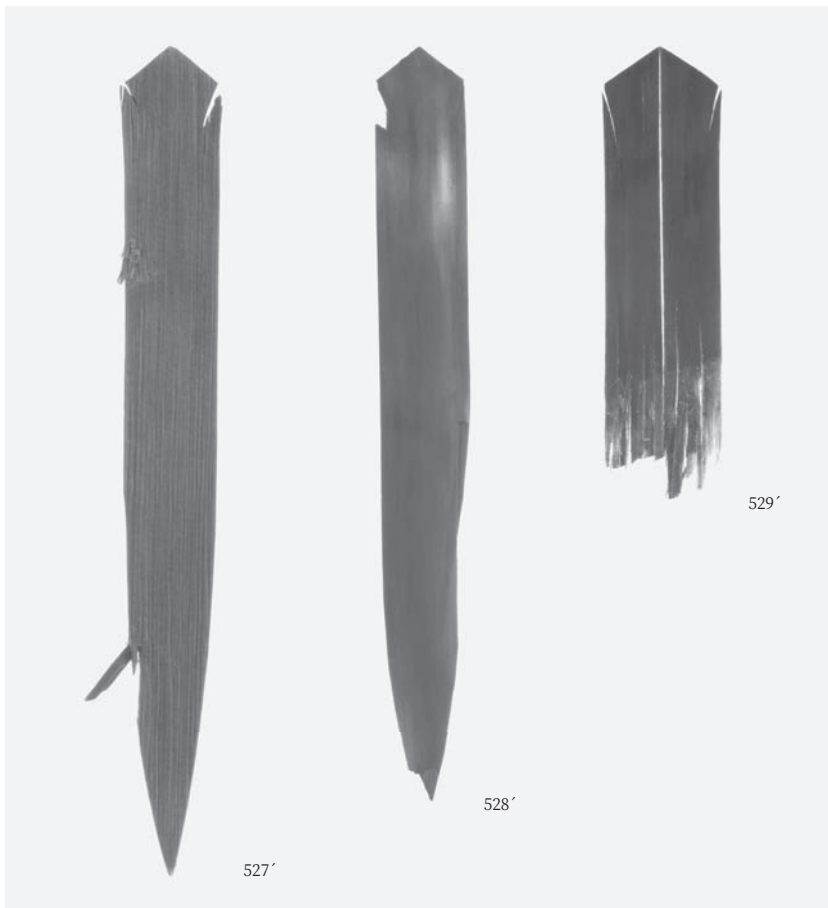
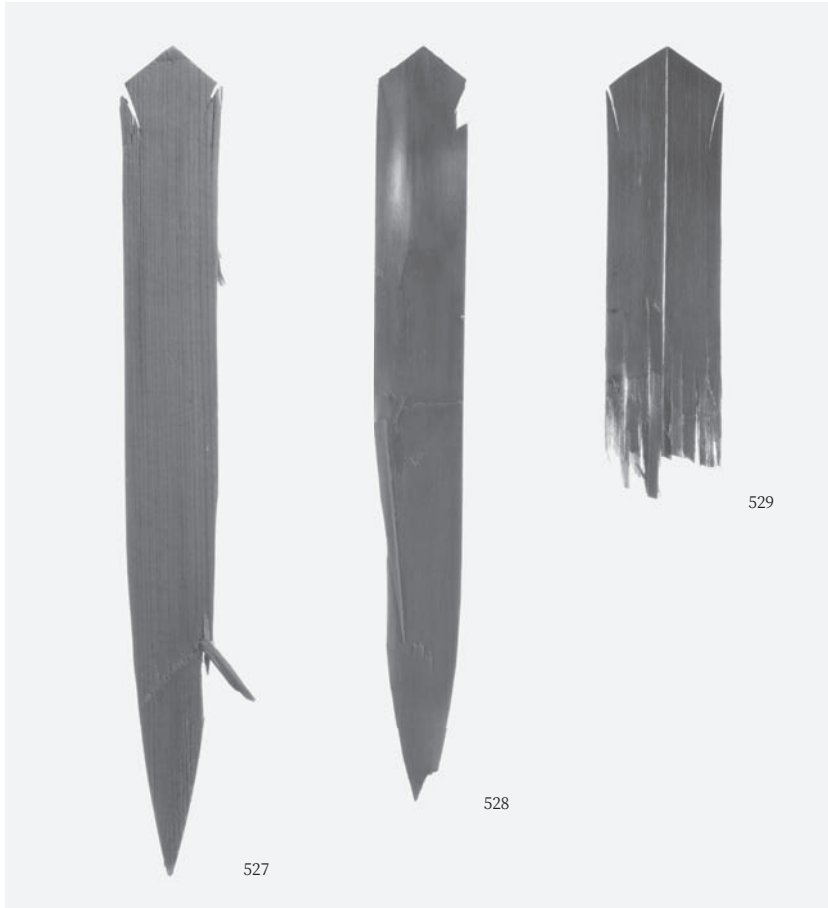


855

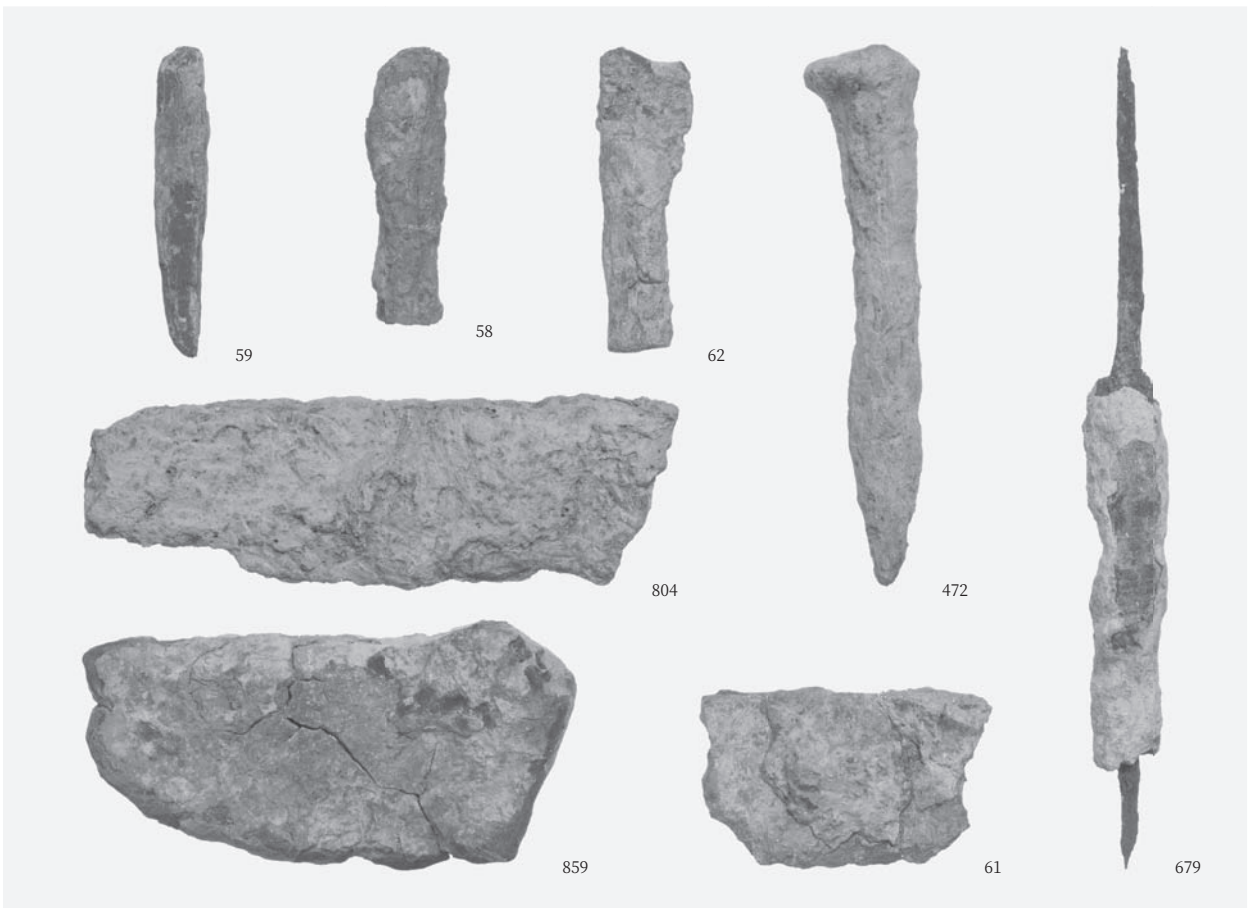
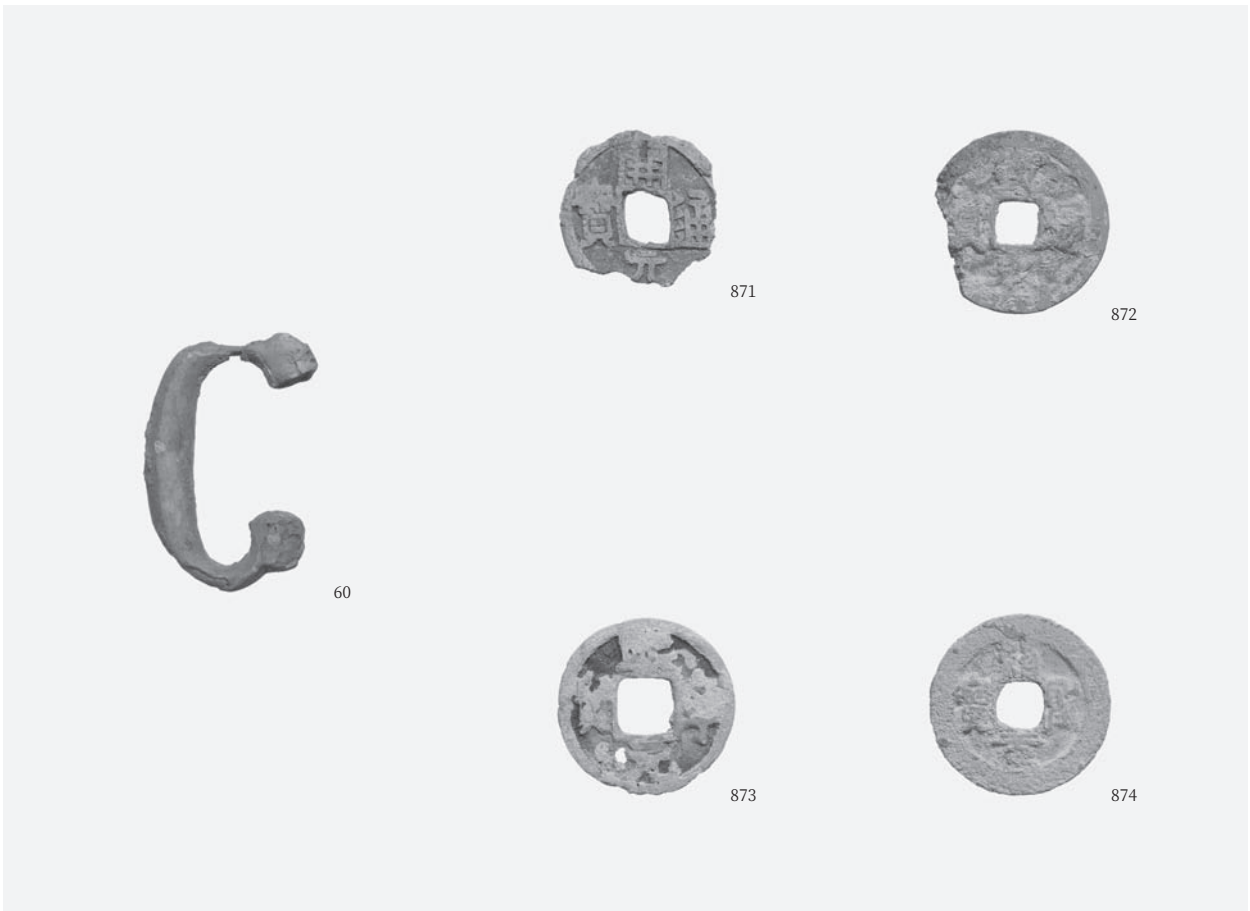


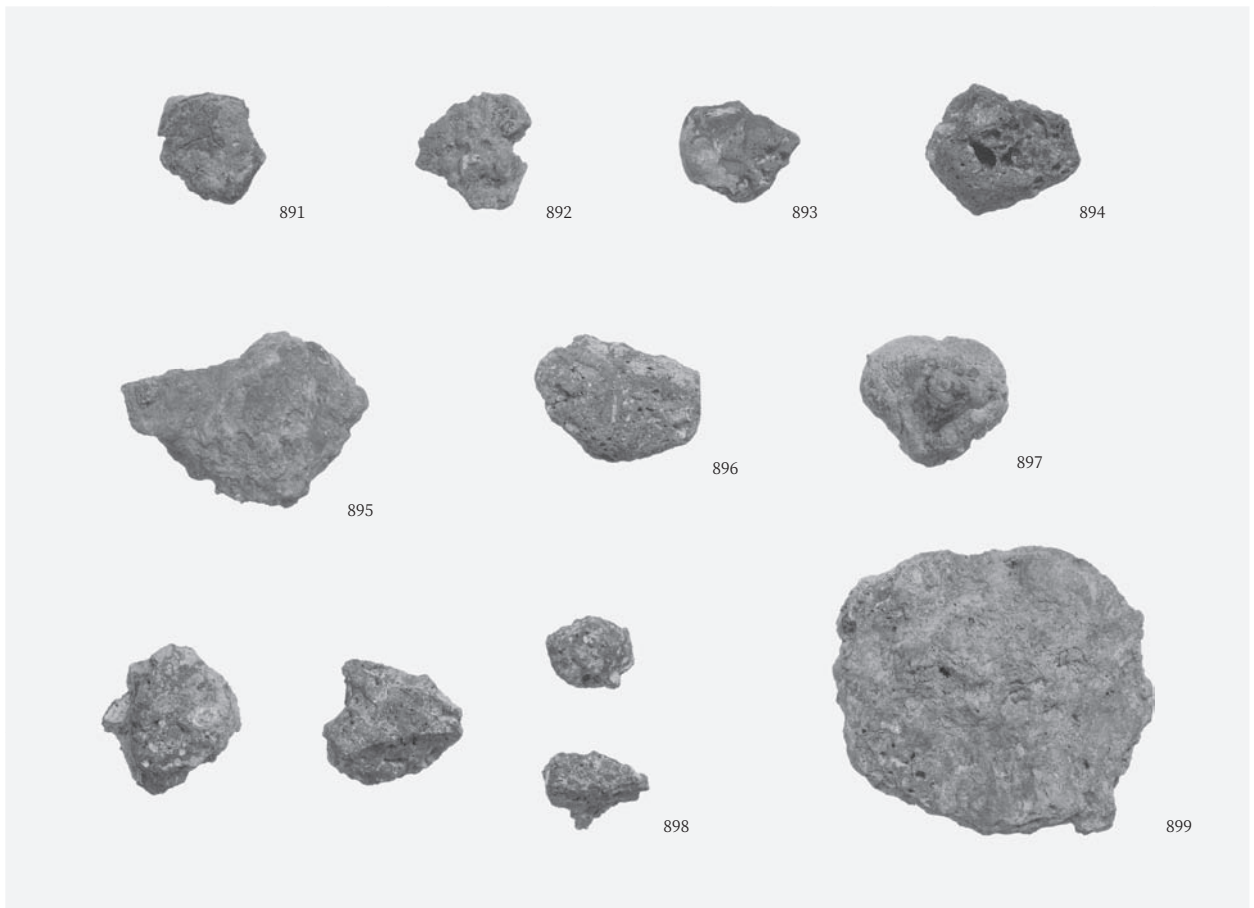
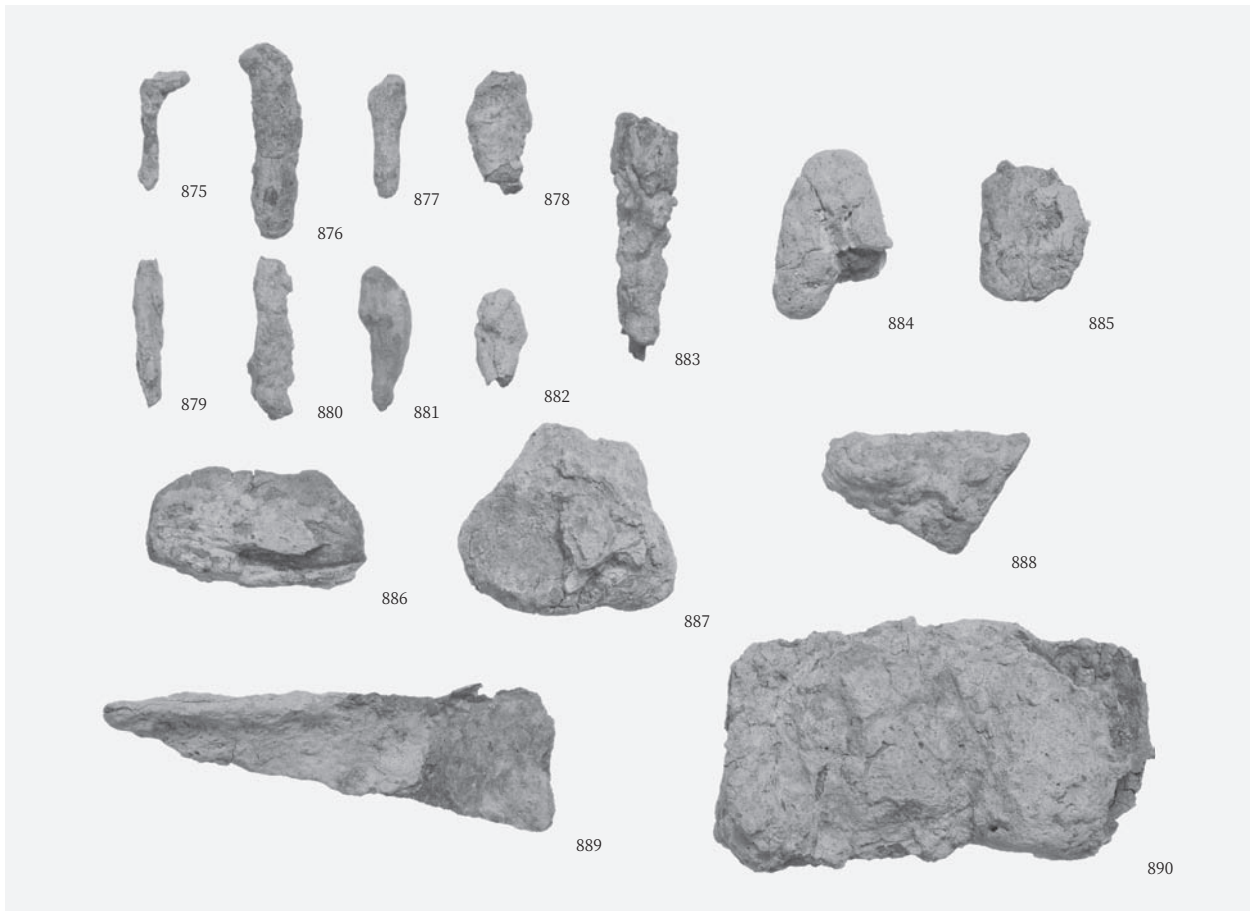
857



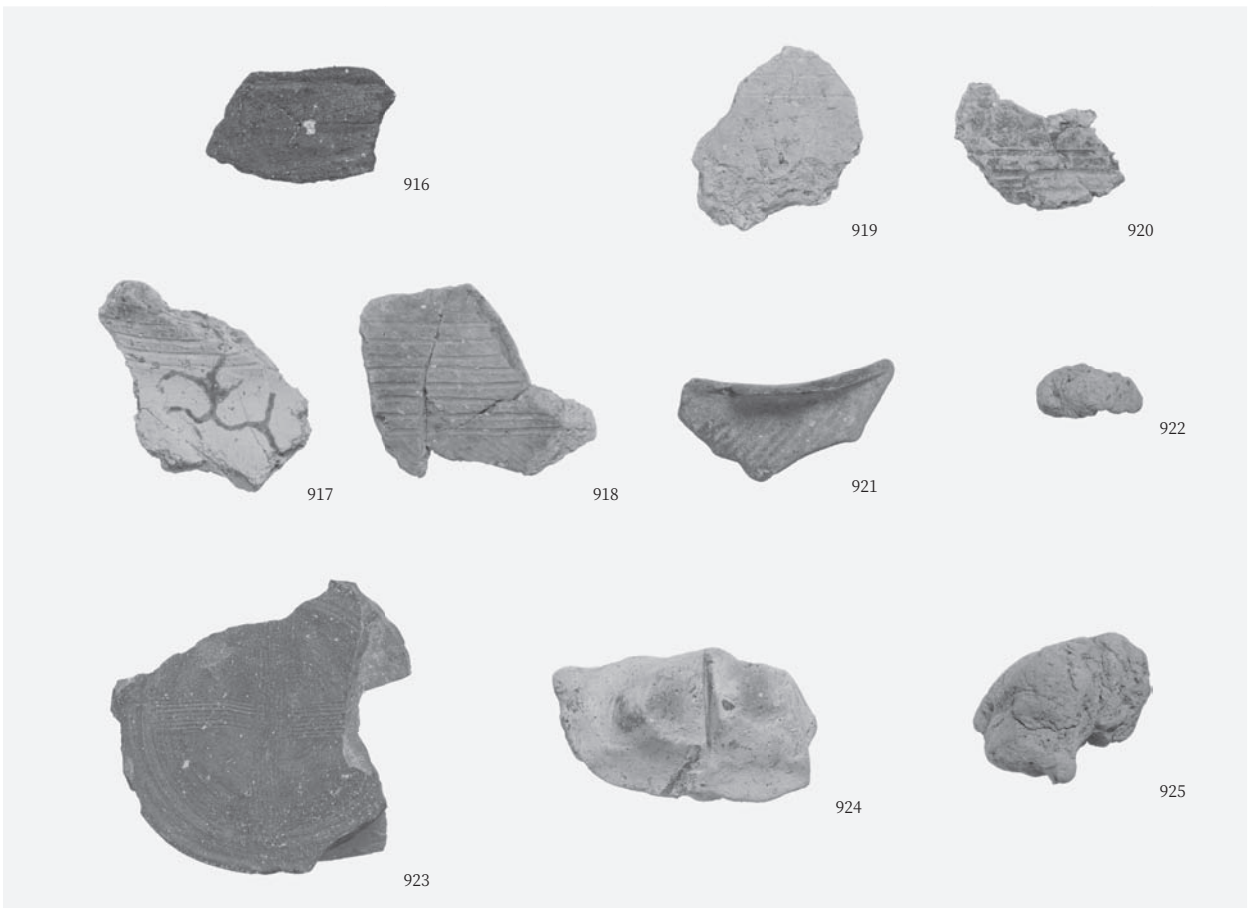
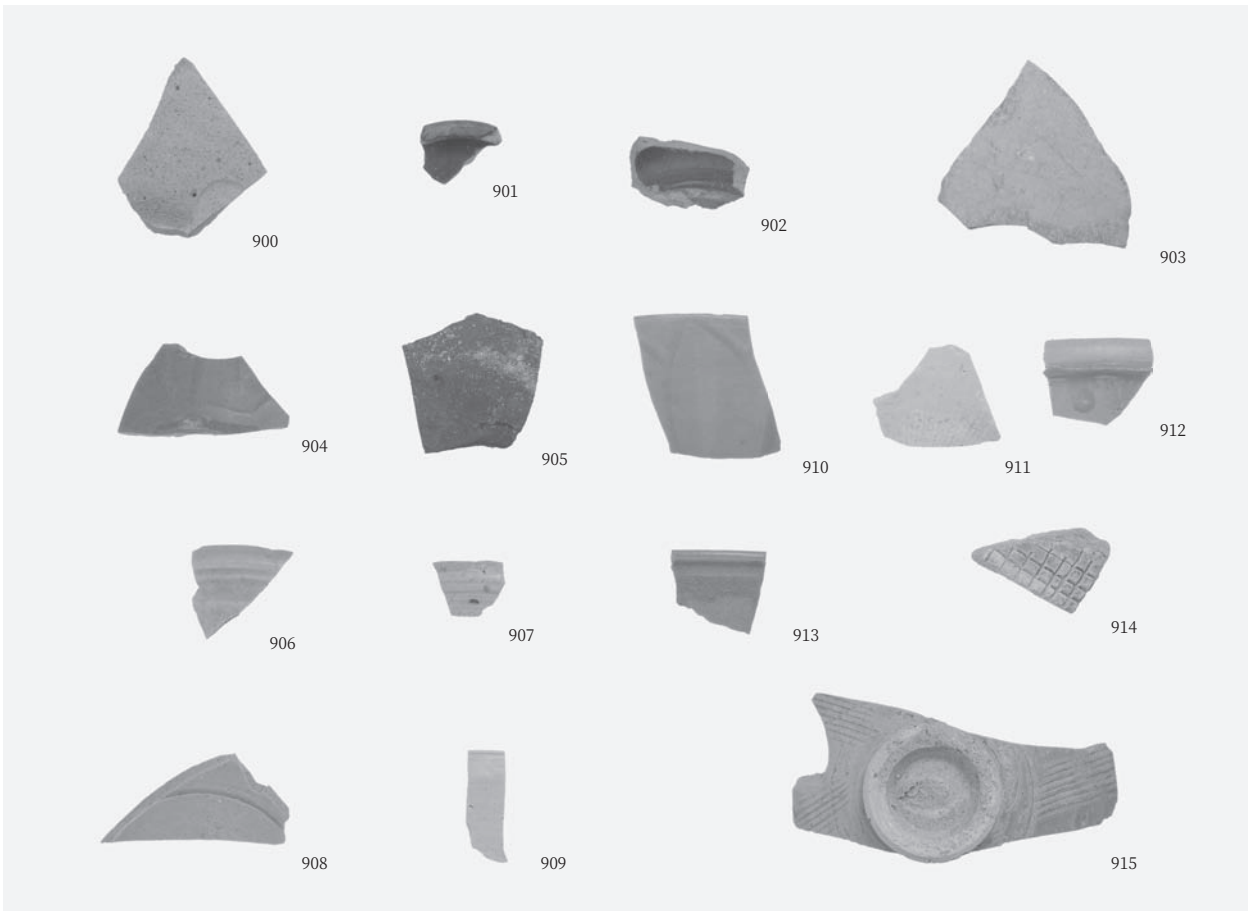


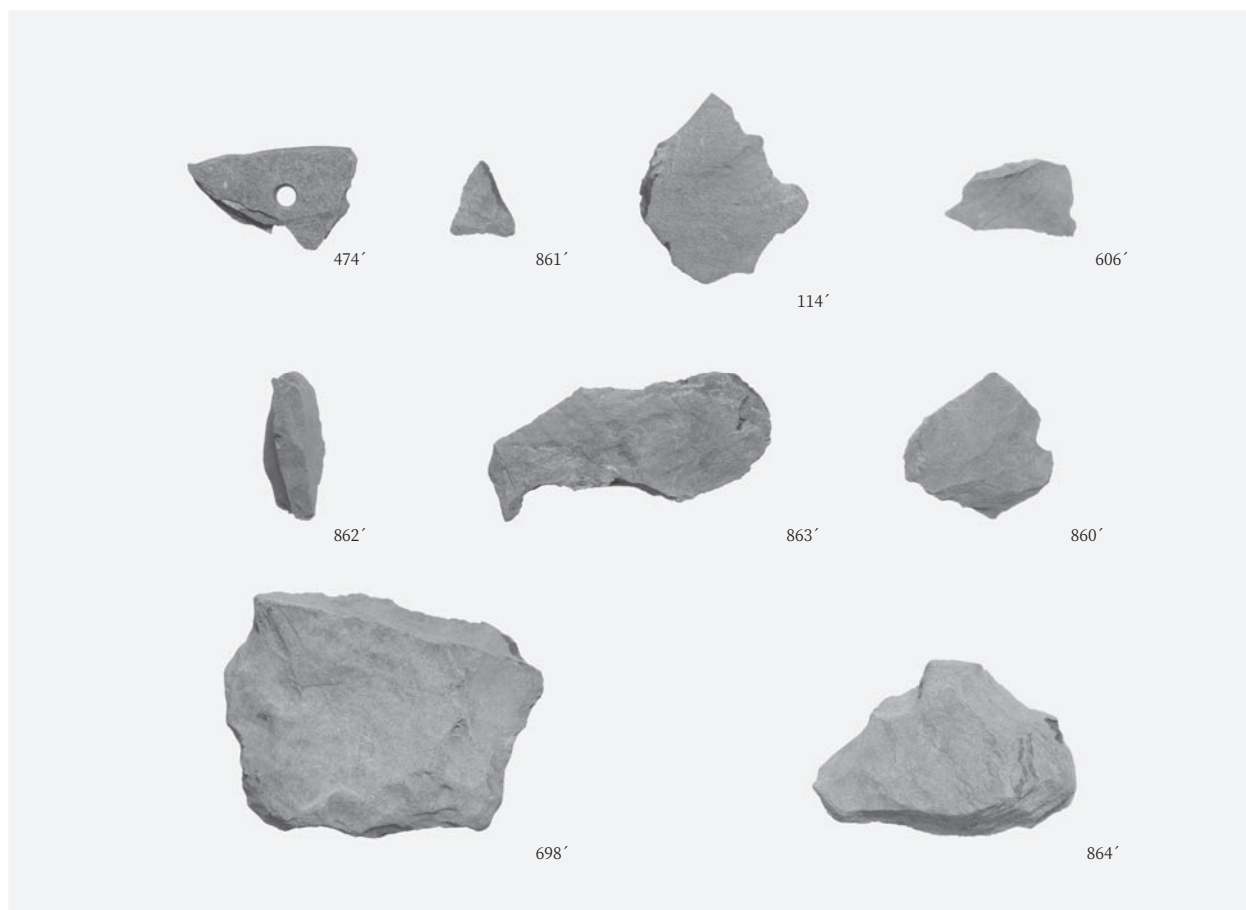
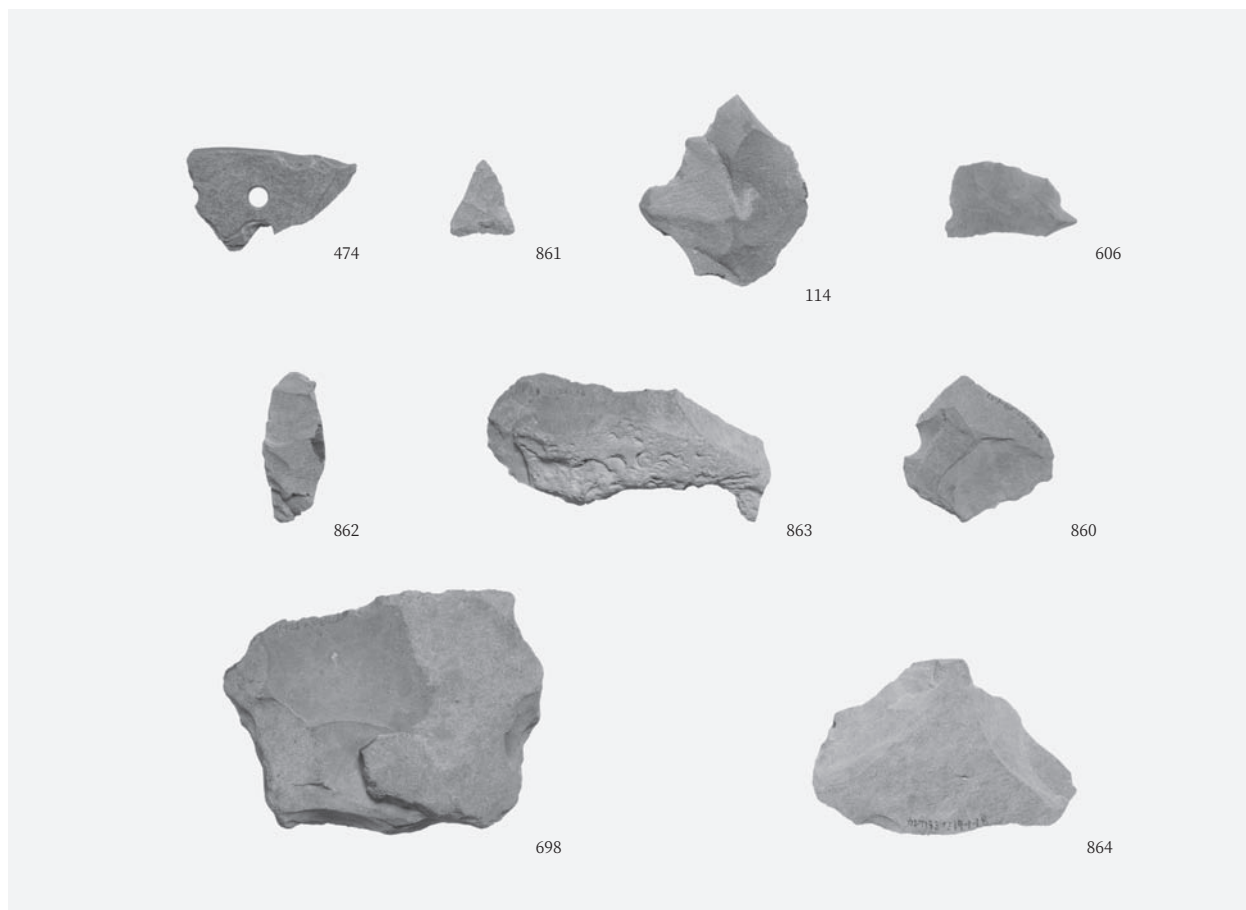
図版 88 金属製品



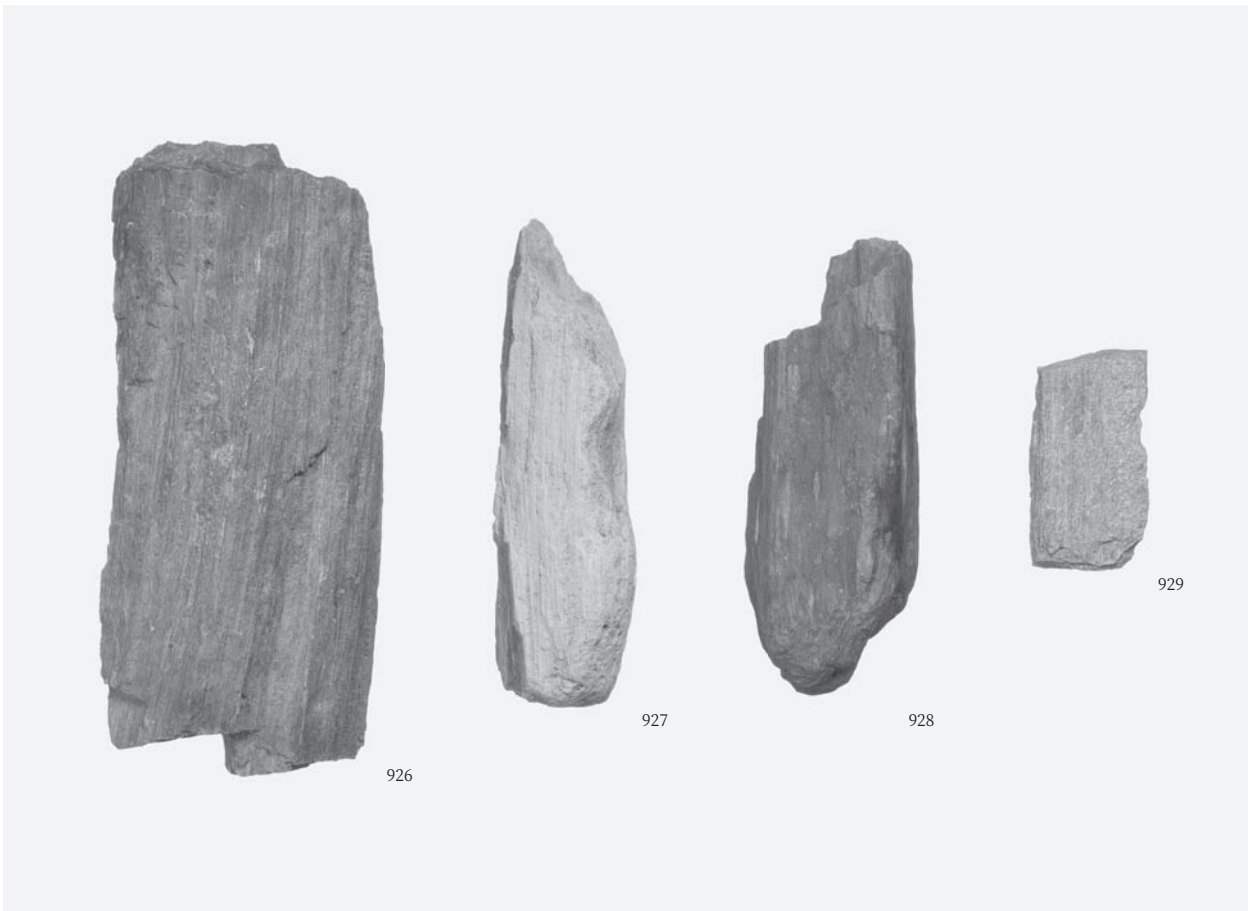


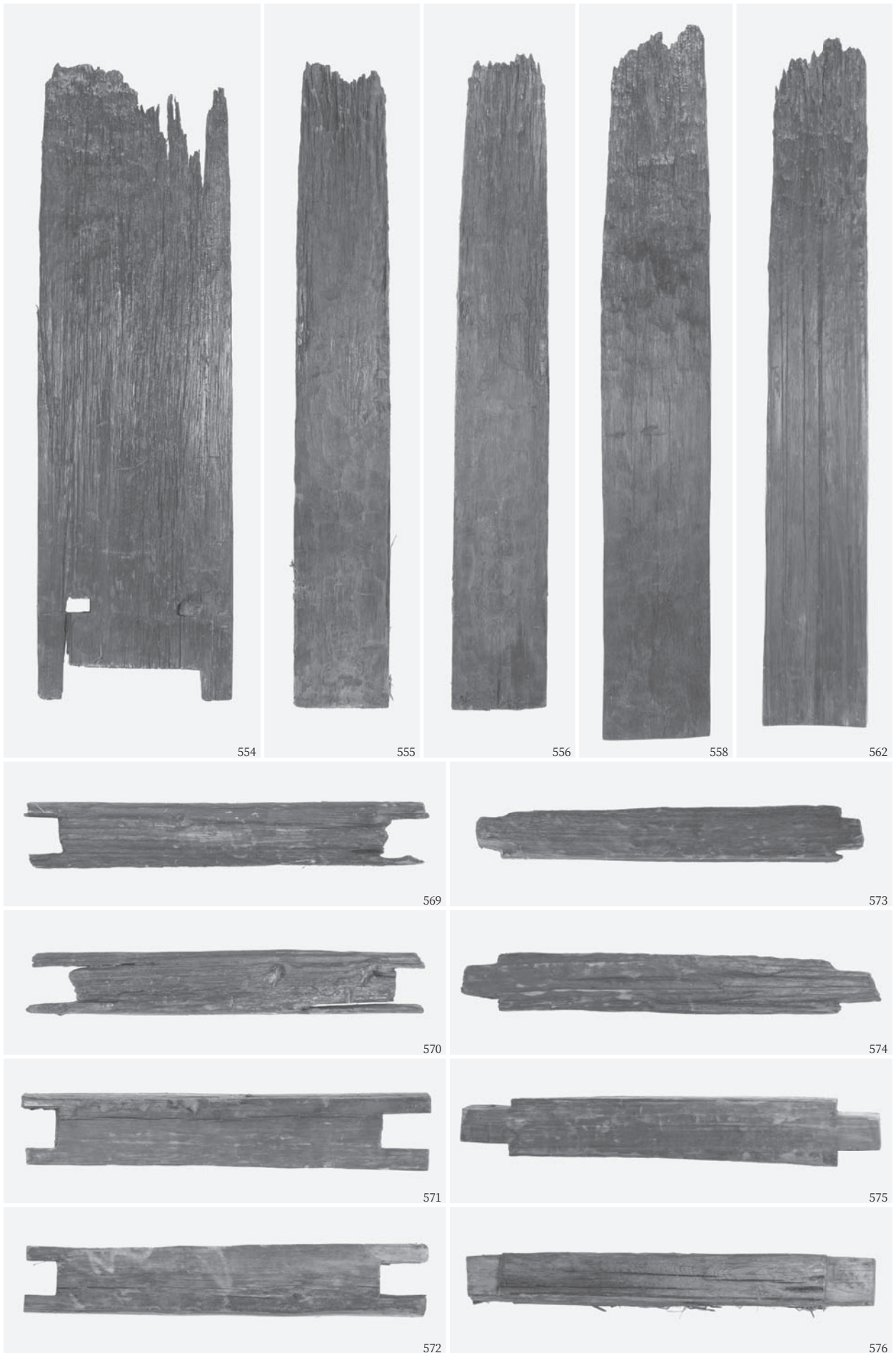
図版 90 写真図版のみ土器





図版 92 石材・動物遺体・植物遺体





図版 94 井戸梓





640



611



639



642



17

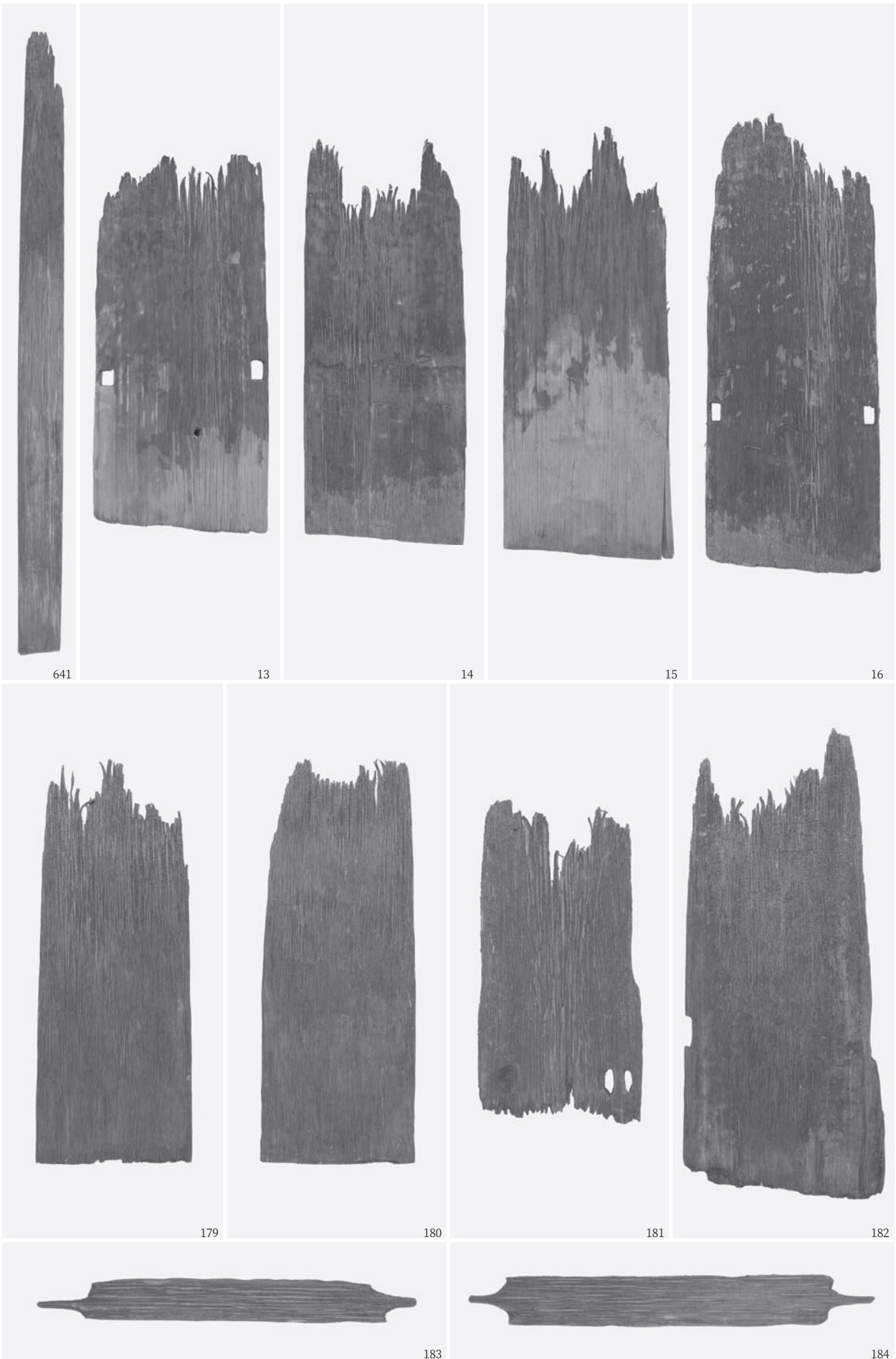


18



19

図版 96 井戸梓



報 告 書 抄 録

ふりがな	かじはらみなみいせき						
書名	梶原南遺跡						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第 315 集						
編著者名	森本 徹						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2022 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
かじはらみなみ 梶原南遺跡	おおさかふ たかつきし 大阪府高槻市 かじはら 梶原 3・4 丁目・ かじはらなかむらちよう 梶原中村町	27207	158	北緯 34° 51' 52" 東経 135° 39' 22"	令和元年 6 月 1 日 ～ 令和 2 年 12 月 18 日	7,349 m ²	新名神高速道 路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
梶原南遺跡	墓	弥生時代	方形周溝墓		弥生土器・石器	列状に並ぶ 6 基の周溝墓	
	集落	古墳時代 飛鳥時代	掘立柱建物・土器埋納遺構		土師器・須恵器・瓦	坏類を埋納する土坑 梶原瓦窯産の瓦	
	集落	奈良時代	掘立柱建物・井戸・土坑		土師器・須恵器・製塩土器・ 帯金具(鉸具金具)・木製 品(齋串・横櫛)	大型掘立柱建物と井戸 墨書土器「中村家」「福」 2 例目の鉸具金具	
	集落	平安～鎌倉 時代	礎石建物・井戸・水溜・土坑・ 溝・井戸		土師器・須恵器・瓦器・ 陶磁器・漆器・鉄製品・ 石製品・土製品・瓦	小規模な礎石建物と井戸 (船材転用含む) 溝への土器類多量投棄 瓦器 輪花椀	
	生産	鎌倉時代 以降	土坑・溝(水路)		土師器・須恵器・瓦器・ 陶磁器	12 紀世と 13 紀世の 2 段階 の耕地化	
要 約	<p>弥生時代では、低地水際での土地利用痕跡と微高地上に列状にならぶ方形周溝墓群を検出した。</p> <p>古墳～飛鳥時代の土地利用の詳細は不明だが、古墳時代の土器埋納遺構や、梶原瓦窯産と考えられる白鳳期の瓦の出土がみられた。</p> <p>奈良時代では、微高地上で広く奈良時代中頃から後半にかけての集落遺構を検出し、大型掘立柱建物や井戸、土坑などが分布する。井戸からは墨書土器や製塩土器、齋串や横櫛が出土するとともに、包含層からは青銅製の帯金具(鉸具金具)が出土し、既往の調査における当集落を公的施設(駅家)にかかわるものとする評価を補強する。</p> <p>平安時代後半から鎌倉時代にかけては集落が営まれ、小規模な建物に井戸をとまなう複数の居住域が展開する。井戸枠には船材を転用したものが含まれる。13 世紀の集落廃絶時には多量の土器類が溝や水溜に投棄され、土師器皿や瓦器椀等がまとまって出土した。</p> <p>集落廃絶後、全域が耕地化されるが、低地域では 12 世紀前半に、微高地上では 13 世紀中葉以降という、2 段階の施工が想定される。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第315集

梶原南遺跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2022年3月31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号